

アドラメレク



霧野あみ

一 序 一

先ず、月が在った。

星の無い空にぼっかりと浮かぶその満月は、曖昧な陰影をたたえ煌々と闇を照らしていた。

次に、雲が流れた。

うっすらとたなびくすじ雲は、月の光を遮ることをしない。気高く光る月を護るように、もしくは支えるように夜空を横切っている。

そして、樹が現れた。

空中から突如として伸びだした枝は、はじめ、夜空を割るひびの様に見えた。しかしそれは次第に大きく育ち、夜空の多くの部分を覆うまでになった。幹を太くし根を生やした。

大樹の傍らに、泉が湧いた。

清らかな水には暗い空と明るい月、薄い雲と枝葉の影が上下を反転して映っている。控えめに輝く静かな波紋によって少し歪んだ逆さまの世界が、風景に神秘性を添えていた。

大樹の根元には、花が咲いた。

力強く伸びた茎の先に、燃えるような紅の花。泉のほとりに咲くその大輪の花は、暗闇に踊る炎を思わせた。

とある夜の、とある場所。

全ては、ここから始まった。

夜桜に見惚れる

「へえ。こんななったんだ・・・」

木暮優馬は仕事の疲れも忘れ、その絵に見入っていた。

街中の一角にある、小さな工房。看板には、『天本 木工房』と書かれている。

その隣、軽トラ一台がギリギリ納まる駐車スペースの奥に隣接された資材置き場のシャッターに、それは描かれていたのだった。

月夜の桜吹雪の絵。

シャッターの右上には人や車が通ると点灯する照明が設置されており、闇の中に絵を照らし出す。照明は上手く隠されてあるため、まるで絵の中の月が風景を照らしているかのような効果をもたらしている。

満月の下側をうっすらと隠す薄雲が良いアクセントになっていた。

左端に描かれた桜の樹は、銀色の月に向かって手を差し伸べるように枝を伸ばしている。枝にはほんのりと薄桃色の桜の花が咲き誇り、強い風にキラキラとした花びらを舞い散らせる。景色を映す湖面には散り落ちた花びらがたゆたっている。

月にかかった雲と桜吹雪が風の動きを上手く表している、と彼は思う。

そして、木陰の草地に咲く紅い花。

風になど負けはしないと背筋を伸ばしているようで、凜とした生命力が感じられる。遠くから見ると、花の紅色が闇にぼうっと浮かぶ炎の様にも見え、ほんの少し恐ろしくも感じる。

桜の樹はおそらく、地面から三分の二程までしか描かれていない。そのため、自分が地面に座って夜桜を見上げている様に感じるのだった。

脚立に登り一心不乱にシャッターを塗りつぶしている青年を見かけたのは、確か二週間程も前だったろうか。

汚れた作業着の袖をまくり、頭にはタオルを巻き、両手に軍手を着け黙々と刷毛をふるっていたその青年は、そのひたむきな眼差しのせいだろうか、二十歳を越えたばかりぐらいに見えた。

珍しく仕事が早く終わり、たまにはゆっくり風呂に浸かろうかなどと考えながら歩いていた時に、チラリと見かけただけの光景だった。

だが、その青年の真剣な眼差しが非常に印象的で、木暮優馬の心の片隅にずっと残っていたのだ。とは言え、今こうしてそのシャッター絵を見るまでは、その光景が心に残っていたことにすら気付かなかったのだが。

青年はその時、平凡な薄灰色のシャッターを真っ黒に塗りつぶしているだけだった。なのに、額の汗を拭う合間にも、ローラーと刷毛を持ち替える瞬間にも、シャッターから片時も視線を外さなかった。射抜くような、強く鋭い視線。

今、完成した絵を眺めて思う。

彼にはあの時既に、完成した絵が見えていたのではないだろうか。真っ黒に塗りつぶされたシャッターの上に、ありありと。

イメージしたものを形にする才能。
それを見事を実現させる情熱。
そして何より、疑いなく真っ直ぐに自分の力を信じる若さを思い、木暮優馬は密かに嘆息した。

その場から動くことが出来ず、馬鹿みたいにうっすらと口を開けたまま、ただただその絵を見上げていた。

そのシャッターの真上、二階の窓の端から、件の青年が自分を見下ろしていることにも気付かずに。

魅入り見入られ

木暮優馬が彼を見つけたのは、偶然だった。

珍しく休みの合った日曜、優馬は恋人の神崎栞と久々のデートを楽しんでいた。
昼食のあと話題の映画を見て、感想など語り合いながら大きな公園を散歩している時だった。

数人の若い女性達が、何やらキャッキヤと騒いでいるのでふとそちらを見やると、そこに彼がいた。

池の側の芝生にレジャーシートを敷き簡素なアウトドア用の折り畳み椅子に座った彼が、絵を描いていたのだ。

今日は頭にタオルこそ巻いていなかったが、後頭部で一つに括ったヘアスタイルは見紛いようもなかった。

彼の正面には、同じく折り畳み椅子に腰掛けた若い女性がふたり。
友人同士だろうか、椅子をぴったりと寄せあって座り、時おりクスクス笑いながら絵のモデルとなっている。

レジャーシートの上には数枚の絵が並べられ、「絵 1点1000円」「似顔絵 1点1500円（2名まで）」との表示がある。

カップルやベビーカーを押した夫婦等が通りすがりにしばし足を止め、それらを眺めていた。

彼は真剣な眼差しでモデル達を見つめ、せっせと筆を動かしている。
が、その表情は、以前見かけた時よりもずっと柔らかなものだった。

「なあ、ちょっと見て行かない？」

「あら、似顔絵屋さん？この公園では初めて見たわ」

ぴょんぴょんと跳ねるような足取りで池の方へ向かう栞の後ろ姿を見て、木暮優馬は頬を緩めた。

看護師という仕事柄か、普段はクールでテキパキとした女性という印象が強い彼女だが、実は好奇心旺盛で、面白そうなものを見つけると、いつもああやってすっ飛んで行ってしまふ女性なのだ。

早くも他の客の背後から背伸びして絵を覗き込んでいる。比較的長身なうえにヒールを履いているので、あの位置からでも見えるらしい。

片足ずつ重心をずらして覗き込む度に、ストレートの黒髪が背中で揺れる。

「優馬！こっちこっち！」

振り返った顔は、お気に入りを見つけた時のいつもの表情だ。嬉し気にパッと輝き、瞳をキラキラさせている。

非常にわかり易い。わかり易すぎて、優馬はいつも吹き出すのを堪えることになる。

「こっちこっち、って……オレが見つけたんですけどお」

弱々しい抗議など一顧だにせずヒラヒラと手招きしていた手が、こちらへ伸びて来た。

応えて右手を差し出すと、葉はその手を掴み引き寄せる。

優馬に見せたいものがある時、葉はいつもこうするのだ。

「ほら、すごく素敵な絵だよ」

「うん。知ってる」

優馬達のその遣り取りに、彼は顔を上げた。

「あ」

「……？」

目が合った際の彼の表情を一瞬不思議に思ったが、葉の声で引き戻された。

「優馬、知ってるの？」

「あー、うん。ねえ君、工場のシャッターに夜桜の絵を描いてた人だよな？」

「あ、はい」

目顔で訊ねる栞に、優馬は例の絵のことを簡潔に話した。

「すごく綺麗な絵でさ、でも綺麗なだけじゃなくて、何ていうか……ちょっと怖いような……凄い絵なんだ。初めて見た時、絵の前から文字通り動けなくなって、しばらく眺めてた」

後半は絵描きの彼に向けた言葉だった。あの時の感動を直接作者に伝えられることが、素直に嬉しかった。

「あの……知ってます」

「へ？」

「……俺、見てました。カーテンに隠れて、倉庫の2階の窓から」

「え……」

優馬は思わず、自由になる左手で額を擦った。

「それは、恥ずかしい……俺、相当アホ面してたよね？」

栞が吹き出した。

両手で口元を覆い、クスクス笑っている。

客の女の子達も、肩を震わせ笑いを堪えている。

笑われて、優馬はさらに赤面した。

「ヤバい。恥ずかし過ぎる。俺は逃げる」

「邪魔してごめんね」

彼と客らにそう言い残すと、優馬は両手で顔を隠しながら足早にその場を離れた。

「ちょっと優馬あ……お嬢さん方も、お邪魔しちゃってごめんなさいね」

優馬は菜の声に立ち止まると、顔を隠したまま半ば振り返り、開いた指の隙間から片目で向こうの様子を窺った。

その様子を見て客の女性達は、声を上げて笑い手を叩いて喜んでいる。こちらへ駆けてくる菜も苦笑気味だ。

辿り着くなり、腕を軽く叩かれた。

「もう。私、絵を買いたかったのに」

「ごめんごめん、動揺しちゃってさ。後でまた行ってみよう。ね？」

頬を膨らませる菜を宥め、池の向こうにあるソフトクリーム屋に注意を向かせる。

「ほら、アイスあるよ。アイス食べようか」

「……すぐそうやって、はぐらかそうとするんだから」

言葉とは裏腹に、菜の歩調が速くなった。

優馬を睨むふりをするが、目尻には笑いが滲んでいるし口元は既にほころんでいる。この作戦は、いつだって成功するのだ。

「早く早く、こっちこっち」

今度は優馬がそう急かし、ふたりはほとんど小走りでソフトクリーム屋を目指した。

彼の名は

彼の元へ戻ったのは、30分程経った頃だろうか。

先ほどの客は既に居らず、彼はひとりで絵を描いていた。

「やあ、先ほどはどうも失礼しました」

優馬の声に、彼は弾かれた様に立ち上がると、ペコリと頭を下げた。

「さっきは済みませんでした。俺、余計なこと言っちゃって」

「いえいえ。こっちこそ変な風に逃げたりして」

男ふたりが謝りあっているのを他所に、葉は絵を見分している。

「あらら。私の欲しかった絵は売れちゃったのね。窓から雨模様を見下ろしてる感じの」

「ああ、はい。今日はわりと売れ行きが良くて。すみません」

優馬が葉の隣にしゃがみ込んだ。

「あー、あの赤い傘の子のやつか。あれ良かったよな」

「そうそう。となりの小さな黄色い傘の子も可愛いの」

葉も膝を抱えてしゃがむ。

ふたりして指を差しながら、あれがいいこれもいい等と言い合っていると、彼が思い切った様に声を上げた。

「あの、もし良かったら、好きなのひとつずつ差し上げます。持ってって下さい」

「え」

「それは駄目よ」

「いえ、あの……俺、嬉しかったんです。シャッターの絵をずっと見ててくれたのも、今日声を掛けてくれたのも。だから、お礼というか、さっきのお詫びというか……」

言い終えると、彼は両手を後ろに回し腰の辺りをゴシゴシと擦りながら照れた様に目を逸らした。

3名の話し合いの結果、2点の絵を1000円&缶ビール1本で買うことに落ち着いた。

「なんか、逆にすみません。気を遣わせちゃって」

「ううん。とんでもない。元々買うつもりだったんだもの。得しちゃった。ね？」

同意を求める栞に、優馬は笑顔で頷く。

「だな。あのさ、俺達これからメシの予約入れちゃってるんだ。だから今度、改めて似顔絵を頼みに来るよ。いつもここに居るの？」

話によると、公園の使用許可はひと月毎に申請しなければならず、来月以降のことは未定なのだそう。なので、許可が下りなかった場合は、別の場所で描くことになるらしい。

あ、と言って彼は荷物を探り、「これ、良かったら」と小さな白いカードを取り出しふたりに手渡した。

右上と左下の隅に、4分の1の太陽と三日月の手書きイラストがあしらわれており、中央には名前が書いてある。

「俺、大月 陽って言います」

大月陽くん、おおつきよう と読みます。

俳優の大泉洋さんとは全くの無関係です。大泉さん、好きですが。

「もうじき、あのシャッターの衣替えなんですよ」

翌々週、4月最後の日曜。

優馬はまた、あの公園に居た。今日は葉と休みが合わず、ひとりきりだ。

生憎いまにも降り出しそうな曇天で、ゴールデンウィーク中にも関わらず、大月陽の似顔絵屋は暇らしかった。

優馬は公園の風景を描く陽の隣に座り、甘い缶コーヒーをチビチビ舐めながら徐々に完成に近づく絵を眺めている。

ぽつぽつと無駄話をしながらも、陽の手は止まることは無かった。

「シャッターの衣替え？」

「そう。来月からは、桜じゃなくて新緑になります」

「季節毎に描き直すの？」

「いえ……」

大月陽が種明かしをしてくれた。

あの桜の花は、実は白と銀色の特殊な塗料で描いたもので、照明の色を変えることによって、桜になったり、新緑の葉、紅葉や雪景色にもなるのだと。

「何それ！ 凄いじゃん！ 自分で考えたの？」

目を見開いて驚く優馬に、陽は短く笑った。

「いや、そんな大したことじゃないんです。色つきのセロハンを被せてるだけなんで。桜はピンク色と薄桃色。新緑は緑と黄緑。紅葉は赤と黄色。適当に斑状に貼り合わせたのを照明に被せるだけ」

曖昧な笑顔で肩をすくめる。

「やってることは、高校の文化祭レベルです」

「いやいやいや、凄いよ。十分凄いて。謙遜は美德だけどさ、日本人の悪いところでもあるよ？ 第一、あれを口開けて何分も眺めてた俺の立場はどうなる」

陽がフッと吹き出し、照れ隠しのように鼻の下を擦った。

「見に行く！ 俺、来月になったら絶対見に行くよ。あー、でも……あそこ通る度にほとんどクルマ停まってて、よく見えないんだよなあ」

「まあ、元々工房の駐車スペースですし」

優馬は缶コーヒーを飲み干し、空き缶を足元に置いた。

「あら。えらいクールね。オオツキ君」

「いや、別にクールとかじゃ……」

「えー、じゃあ今から飲みに行く？」

大月 陽は戸惑った様子で一瞬言葉を詰まらせた。

「……ちょっと、文脈が辿れないんですが」

「いいじゃん、細かい事は。もうすぐ雨降りそうだし、客もいないし？ ちょっと付き合っよ。オッサン暇なのよ」

十 十 十

大月陽はどことなくくすぐったい、クスクスとこみ上げる笑いを堪える様な感覚で、夜道をひとり歩いていた。

ひと雨通り過ぎたこともあり、少し熱くなった頬に夜風が気持ちよい。

なんというか、謎の勢いに押されて飲みにつき合ってしまった。

出逢って間もない人間と意気投合して飲みに行くなんて、初めての経験だった。

高校を出て今の職場に就職し、オヤジさん達に飲み連れて行ってもらうことは何度かあった。だが、自分ひとりの、職場とは関係のない人付き合いというのは久しぶりだ。

少しだけ。ほんの少しだけ、自分の世界が広がった気がして、ワクワクする。陽は胸いっぱい夜空を吸い込んだ。

元々物づくりが好きだし、木工の仕事はとても楽しかった。職場の先輩達も優しくて良い人ばかりで、恵まれた環境だと思っている。

仕事と絵描きづくりの毎日に、充分満足していた。

(でも、たまにはこういうのも悪くないな.....)

陽はうっすらと微笑みながら、水彩絵の具やクレパスの入った道具入れを持ち替え、ポケットから財布を取り出した。道端の自販機でスポーツドリンクを買い、ガードレールに腰掛けて一気に半分程を飲み干す。

「うめー.....」

口元を袖でぐいと拭う。

あまり酒に強くないことは自覚していたのでセーブしながら飲んでた筈なのだが、やはり少し飲み過ぎたかもしれない。

楽しい酒の席だった。

あの木暮優馬という男は、なんだか不思議な男だ。

するりと懐に潜り込んできて、こちらに警戒感を抱かせないところがある。

軽薄、とまではいかないが、若干お調子者っぽいように思う。だが、何故か嫌悪感はなく、話す程にずっと前からの知り合いだった様な親しみを覚えるのだ。

元来人付き合いがあまり得意ではない陽だったが、優馬とはほとんど緊張せずに話せた。

むしろ、おそらく5～6つは年上であろう優馬に対し、言葉遣いが気安くなり過ぎない様にと気を遣った程だった。

陽は立ち上がり、またブラブラと歩き出す。

夜桜のシャッターの写メを撮るのを忘れない様にしなければ。

「待ち受けにするから送ってくれ」と、優馬から指令を受けているのだ。

有無を言わさぬ勢いでアドレス交換させられたが、まあ、不満は無かった。ちゃっかり奢ってもらったわけだし。

それに何より、自分の絵をそこまで気に入ってくれているというのが嬉しかった。

鼻唄混じりで家の前に差しかかると、外に出ていたオヤジさんに声を掛けられた。

「おう、陽。こんな時間に珍しいな」

「ええ、ちょっと飲んで来ました」

へへ、と笑う陽に、良治は強面の顔をほころばせた。

天本 木工房の社長、天本良治。陽の仕事の師匠でもあり、今は親代わりの様な存在でもある。

「楽しい酒だったみたいだな。彼女かい？」

「違いますよ、残念ながら。あの、このシャッターの絵を気に入ってくれた人で。なんか、奢ってもらっちゃった」

「おう！ そうか！ そりゃ良かったなあ。良かったなあ」

良治は、まるで自分が褒められたかの様に顔を輝かせている。

いや、自分の渾身の仕事を絶賛されても、おそらくこんな嬉しそうな顔はしないだろう。

「その人に、写メ送ってくれて頼まれたんですけど、車動かしていいですか？」

ポケットを探り鍵を出そうとすると、良治は「おう、呑んだ後だろ。待ってる待ってる！」といそいそと車に乗り込み、車を移動してくれた。

陽が写メを撮ろうとすると、「待て、待て」と外水道にかけてあったホースを取り出す。

「さっきの雨で汚れたからな」

真面目な顔でそう言うと、シャッターを水洗いし始めた。

「いや、そこまで……そんな汚れてなかったし」

「駄目だ駄目だ。せっかく気に入ってくれたんだろ？ それにな、こうするとキラキラしてカッコ良くなるんだよ」

強めの水流でしばらく洗い流すと、良治は得意気に「な？」と陽を見返してきた。確かに、濡れたシャッターは瑞々しく光をはね返し、夜桜を鮮やかに浮き出させている。

酒の酔いも手伝ってか、良治の心遣いに陽は少し目を潤ませた。

良治と陽は、様々にアングルを調整しながら何枚も写メを撮った。

この絵は、陽が初めて依頼を受けて描いた作品だった。

「資材倉庫のシャッターがつまんないから、なんか描いてよ」

「ゲイジユツなんてわかんないからさ、任せるわ」

デザインを含めた木工の仕事をしているくせに、社長はわざとそんな言い方をして、全て自由に描かせてくれたのだ。

仕事が終わってからの数時間と、休みの日を丸々使い、陽は1週間かけて一生懸命描き上げた。

ギャラは、材料費と現金5万円。

それと、オヤジさん手作りのイーゼルだった。絵を置く『受け』の部分に、陽の名前が美しく彫られていた。

絵が完成し、ギャラとプレゼントを受け取ったその日。嬉しくて嬉しくて、陽はイーゼルの抱いて眠ったものだ。

「おう！ じゃ、早く寝ろよ。明日も早いからな」

自分の方がはしゃぎながら写真を撮っていたくせに、急に社長の顔に戻って手を振る良治に、陽はいつもより大きな声で応えた。

「はい！おやすみなさい！オヤジさん」

陽「優馬さん、ビールは飲むくせにコーヒーは甘口なんですね」

優馬「ブラックコーヒーとか、苦くて無理！ビール最高 (^ ^)」

「清水さん、久しぶりだね。元気だった？」

大月くんの声を聞くまで、心臓がはち切れそうだった。

うん。今もまだ、心臓が口から飛び出しそう。私のこと、憶えててくれたんだ。

「うん。元気元気。今、少し電話大丈夫かな？」

「昼休みだし、大丈夫だよ。今、どこから？」

少しハスキーな、空気を含んだみたいに柔らかで優しい声に、誠実そうな落ち着いた口調。変わってない。

この感じだと、少なくとも迷惑がられてはいないみたい。たぶん。

「実家だよ。今年からね、こっちに戻って来たの。で、今週末、ホームセンのみんながお帰り会を開いてくれるって言うから、大月君もどうかなって……」

電話を切った後、私は膝から崩れ落ちる様にベッドにもたれかかった。スマホを握ったまま、枕に顔を埋める。

まだ手が震えている。アヤさんに報告メールをしなきゃいけないけど、落ち着くまでもう少し待たなきゃ、メールを打てそうも無い。

無理もない。かれこれ4年越しの片思いだ。

高校2年の春、美術の授業中に絵を描く大月陽の横顔にノックアウトされ、

彼の纏う、ミステリアスでストイックな雰囲気呑まれてろくに話し掛けることも出来ずに夏を迎え、

高校の近くのホームセンというふざけた店名のホームセンターでアルバイトをしていると聞くやす

ぐに自分も潜り込み、

バイトの面接で手芸への付け焼き刃の情熱を熱く語り、彼の担当している画材売り場近くの手芸コーナーにまんまと配属してもらい……

夏休みが終わる頃、ようやく少しだけ、話せるようになった。

と思ったら、夏休み明けには彼が同じクラスの子と付き合いはじめたことが判明し、私は絶望のどん底に突き落とされた。

その『彼女』というのは、恵流が陽に一目惚れした授業で彼のモデルになった子だった。席順でペアが決められ、お互いを描き合うという授業だったのだ。

彼女の方からの猛烈なアタックで、付き合いことになったのだという。

そりゃ、あんな真剣な眼差しで正面から見つめられ続けたら、惚れるのも無理は無いと思う。

私なんて、横顔だけで惚れたのだ。

あげく、美術部の彼が描き上げた作品は素晴らしく美しかった。元々わりと可愛らしい顔立ちの子だったけど、（これは癖みかもしれないが）3割増しくらい良く描かれていた。

まあ、浮かれてぼーっとなるのも致し方ない。

致し方ないとは思いつつも、すぐに諦められる筈も無く。引き絞られる様な胸の痛みを隠しつつ、バイト先で少し話せる時間だけを楽しみにしていた。

年が明け、「なんかよくわかんないけど、振られた」と彼から聞いた時には、心の中で快哉を叫び花火を打ち上げたものだったが、その頃には妙に仲良くなっており、告白出来る雰囲気ではなかった。

いや、自分にその勇気が無かったのだ。

「彼女に振られ傷心の彼を慰めつつ、自己アピールを」などと姑息なことを考えもしたが、実行には移せなかった。

肝心の彼が、さほど傷ついている様には見えなかったからだ。

「女の人の頭の中は、わからん」

彼は眉を寄せてそう呟くと、苦笑いした。

その困った様な苦笑に、再度ノックアウトされたことは言うまでもない。

3年に進級するとクラスが別れてしまったこともあり、バイト先では少し話せていたものの、少し距離が開いてしまった。

受験を控えていたし、何より、彼は家で何かあったらしく、担任と連日遅くまで話をしたり、バイト先でも少し沈んで見えたりして、気軽に声をかけづらい状況が続いていたのだ。

秋には、彼が就職コースを選んだことを知った。

私はその頃には、単に大月陽に近づく為の手段でしかなかった筈の手工芸にすっかり嵌まってしまい、家政科のある大学を目指していた。

思えば、彼に恋をしたことで、進路まで、いや、その後の人生設計まで決まったのだ。

今年から、大学へは実家から通うことが出来る。幸い、彼の勤務先とは数駅しか離れていない。また、彼に近づけるだろうか。また、仲良く話せるだろうか。

ホームセンのバイトの上司であるアヤさんには、高校時代から相談に乗ってもらっていた。というか、色々バレていて、勝手に世話を焼いてくれるのだ。

「あんたは行動力はあるくせに、度胸が無い」だの、「手先は器用なくせに、性格は不器用」だのと散々な言われ様だったが、いつも親切にしてくれる。

今回の飲み会も、私のバイト復職記念として、アヤさんが主催してくれるのだ。

全く、アヤさんには頭が上がらない。

散々思いを巡らしたおかげか、恵流はようやく少し落ち着きを取り戻した。

ひとつ大きく深呼吸し、メールを打ち始める。

とはいえ、心臓はまだバクバクしているし、まだ少し手が震えている……

恋する乙女、めぐるちゃん登場です。
本日は3話更新いたします。

いざ、再会

待ちに待った週末。5月初旬の爽やかな陽気の中を、恵流は足早に目的地へ向かっていた。

朝から何度も着替え、色素の薄い肩までの髪を巻いては伸ばしまた巻いては伸ばし、手が震えてネイルに失敗し……そんなわけで、家を出るのが予定より遅れてしまったのだ。

会場は駅近くのチェーン店の居酒屋。

ビルの前まで来たが、一旦引き返し、隣のコンビニへ入った。ミントタブレットを物色するふりをしながら鏡を覗いて髪を直し、早歩きで弾んだ息を整える。

待ち合わせ時間まで、あと5分。

恵流はレジへ向かい清算を済ませ、店を出た。

最後に化粧品コーナーでもう一度鏡を覗き、グロスの具合をチェックするのを忘れなかった。

居酒屋の店員に案内され、店の奥にある予約のブースへ向かう。

衝立で緩やかに仕切られた予約席は、一般客の席ほど騒がしくはなさそうだった。座敷ではなくテーブル席を予約したアヤを、恵流は心の中で誉め称えた。

(流石アヤさん、わかってるわあ)

オフホワイトのシフォンブラウスと、パステルイエローのカーディガン。水色に小さなドット柄のフレアショートパンツ。お気に入りの、ウェッジソールのパンプス。

足元まで含めてのトータルコーディネートなのだ。靴を脱ぐ座敷席では、せっかくのバランスが崩れてしまう。

案内してくれた店員に礼を言い、恵流は入り口の前で足を止めた。

店員が戻っていくのを確認すると、静かに深呼吸を一つ。

・・・よし、オッケー。

「おー、来た来た！」

気合いとは裏腹におそろおそろ顔をのぞかせた恵流を、見知ったいくつかの笑顔が出迎えた。

が、恵流の視界には、たったひとりの笑顔しか映っていなかった。
大月陽の姿だけが、光り輝いて視界に飛び込んでくる。

(ちょっと————！！ なんなの超絶カッコ良くなってるんですけど————！！)

「遅くなっちゃってゴメン」

「いや、まだ時間前だよー」「まだ来てないのもいるからさ」

表面上はありきたりな会話を交わしつつ、恵流の全神経は大月陽に集中していた。
徐々に会うメンバーに挨拶などしていると、長いテーブルの中央からアヤがヒラヒラと手を振った。

「恵流、ここ、ここ。座って」

(と、ととととなり————？！)

アヤは今まで自分が座っていた席を指差しながらひとつ先の席に移動し、陽の隣の席を空けた。

「今日の主役席。ワタクシが温めておきましたので」
ニヤリと笑って得意気に恵流に目配せしてくる。

「あ、うん。ありがと」

恵流がぎこちない動作で座るや否や、アヤは「そろそろ料理出してもらってくるねー」と恵流を残し出て行ってしまった。

(どどどどうしょーーーー！)

恵流が固まっていると、幹事役のアヤの背中を見送っていた陽がいきなり振り向いて微笑んだ。

「久しぶりだね。元気？」

「う、うん。大月くんも元気そうだね？」

「おかげさまで。なんか清水さん、すごい大人っぽくなったね」

(キャーーーーー！！！！ やめて！いきなりその笑顔は反則よおお！！！！ 眩し過ぎて、正視出来ない！！！)

心の叫びを押し隠し、恵流もなんとか笑顔を返した。

「久しぶりにみんなに会うから、頑張っておめかししてきました」

「そっか。俺は今でも頻繁にホームセン通ってみんなと顔合わせてるから、特におめかしはして来ませんでした」

スンマセン、と陽は軽く頭を下げて見せる。

あはは、と恵流が笑ったのをきっかけに、他のメンバーも会話に加わった。

それぞれの近況や懐かしい話などで盛り上がりながらも、恵流はチラチラと陽の観察に余念がなかった。

昔はナチュラルなショートヘアだったのが、現在は伸ばした髪を後ろでひとつに結んでいる。そのせいで、昔よりシャープになった輪郭が際立ち、キリリとした直線的な眉と涼しげながらも力強い目元がより強調されている。

すっきりと鼻筋の通った横顔は相変わらず美しく、クールで知的な印象の薄く膨らんだ唇は笑うと大きく横に開き、その印象をガラリと変える。

首から肩、大きく腕まくりした濃紺の襟無しシャツから伸びる日焼けした前腕は、見違える程遅くなっている。

うっかりしているとポーッと見惚れてしまいそうになるので、恵流はいつも以上に周りの話に集中して耳を傾け、笑うべきところではより楽し気に笑った。

おかげで飲み会が終わる頃にはすっかり疲れてしまったが、気分は高揚していた。

今日は、今まで知らなかったたくさんの事を知る事が出来た。

大月陽は、お酒にはあまり強くない事。

ビール2杯とウーロンハイ1杯で、顔色は変わらないが耳が真っ赤になる。

目が少しトロンとして、眠た気になる。

現在、勤務先の隣に建つ資材倉庫の2階にある部屋に住んでいること。

勤務先はオーダー家具などを主に作る木工の工房で、職場の人達はみないい人であること。仕事をとても楽しんでいること。

髪を伸ばして縛っているのは、単に床屋に行くのが面倒という理由であること。

(美容院、ではなく、ほんとうに「床屋」と言っていた)

今も変わらずに絵を描くのが大好きで、週末には公園などで似顔絵屋をやっていること。絵の具代ぐらいいは稼げるよ、と笑っていた。

連れ立って帰っていた子と別れてひとりになると、恵流は陽の笑顔を思い出し、バッグで顔を隠した。盛大にニヤついてしまって、どうにも怪しかったからだ。

近所の人に「清水さんちの恵流ちゃん、夜遅くにニヤニヤしながら歩いてたわよ」なんて噂されてしまったのは大事だ。お母さんに怒られちゃう。

あ、そうだ。アヤさんに電話しよう。今日のお礼を言わなきゃ……

恵流ちゃん、観察し過ぎい！不審者一步手前です。

アヤ

「アンタ、わかりやす過ぎ。最初に部屋に入ってきた時、大月くんしか目に入ってなかったでしょ」

「わー、ごめんなさい。バレてたかぁ」

「バレッバレですよ」

恵流からの電話を受けた時、アヤは既に帰宅していた。

話しながら冷蔵庫を覗き、缶ビールを取り出してプシュッと栓を開ける。

「あれ。アヤさん、まだ飲むの？」

答えず、アヤは3分の一程を一息に飲み干した。

「プハー……。そりゃ飲みますよ。さっきあんまり飲めなかったからね」

缶ビールを持った手で器用にナッツの小袋を摘むと、リビングへ移動する。

ビールとナッツをローテーブルに置き、クッションを引き寄せて座った。

「そっか。幹事大変だったよね。ほんとにありがとう。すごく楽しかった」

アヤは思わず吹き出してしまう。この子、相変わらずの天然っぷりだわ。

「幹事なんて楽勝よ。大変だったのは、アンタのお守りの方だから」

「おもっ……お守りって。せめて、アシストとかさぁ……」

「なーにがアシストよ。大月くん情報を聞き出したの、ほとんど私だからね。アンタはうっとりキラキラ見蕩れてただけ～」

電話の向こうで恵流が「うっ……」と言葉に詰まった。

からかうのはこの辺にしておいてやるか。

「んで？見に行くの？ 似顔絵屋さん」

「いっ、行きたいと、思ってるんだけど……どうしよう」

「どうしようって、何よ」

アヤはナッツの小袋を歯で噛み千切って開けた。カシューナッツを選んで、口に放り込む。

「やっぱり、迷惑じゃないかなあ」

不安げな恵流の声を聞きながら、噛み砕いたナッツの欠片をビールで流し込む。

「大丈夫じゃない？ あの子、社交辞令とか言わないタイプだし。見に行きたいって言った時、わりと嬉しそうじゃなかった？」

「やっぱり？ やっぱり、アヤさんもそう思った？ ちょっとびっくりして、そのあと嬉しそうに笑ったよね！」

（いや、そこまで仔細には観察してませんけども）

急に明るくなった声に内心突っ込みつつも、恵流のこういうところを微笑ましく思ってしまう。

「じゃあさ、何かの用事のついでに顔出した～、とか言っときゃいいんじゃないの？ で、あんまり長居しなきゃ迷惑でもないでしょう？」

「ついで！ ついでかあ！ その手があった！！」

……ふふ。この子、小細工とか駆け引きとか、全く頭に無いんだろうなあ。

「あ、お土産……じゃなくて、差し入れ？ そうなの、持って行った方がいいかな。逆に負担になるかな」

「さあね。少しは自分で考えなさい。そういうの悩むのが、恋愛の醍醐味でしょ？」

「そんなあ、アヤさあん……」

「そんな声出しても駄目です……まあ、ジュースとかならいいんじゃないの？」

「そっか。ジュースか。なるほど」

.....どうしても甘やかしてしまう。

「何にせよ、考えるのは明日にしたら？ アンタまだ酔っぱらってるでしょう」

「.....うん、そうみたい。なんかね、足元がフワフワして、胸の中がブワ~って膨らんで、そのまま空に飛んでいきそうな感じ」

.....それ多分、アルコールのせいじゃありませんから。

笑いを堪えつつ、アヤは年長者らしく恵流を諫めた。

「いいから、早く家に帰りなさい。で、とっとと寝なさい」

「はあい。もうすぐ着くよ」

「よろしい。ではワタクシ、晩酌に戻らせていただきます。おやすみ」

「おやすみなさい。楽しい晩酌を」

アヤさん、面倒見の良い姐さんです。ちょっと口は悪いですがけども。

さっきから、不審な動きをしている女の子がいる。

どうやら、池の側のブナの大木の陰に隠れて何かを見張っているみたいだ。

かと思えば、池の向こう側へと足早に歩いて行って、しばらく進むとハタと止まり、また樹の陰へ戻ってくる。

しばらく観察していると、彼女が何を見張っているのかわかってきた。

おそらく、池の向こう側の似顔絵屋だ。

似顔絵屋は数ヶ月前から、土日になると現れる様になった。確か、俺がこのソフトクリーム屋に配属されてひと月も経っていなかった頃だと思う。

最初の時、彼は遠目に見ているだけでも、明らかにソワソワと落ち着きが無かった。

だが、思いのほかすぐに人気が出たようで、今では似顔絵を描く客が数組、並べてある絵を買っていく客もチラホラ居た。

最近はずっかり寛いだ様子で営業しているみたいだし、中々に繁盛している様子だ。

彼女が何度目かに樹の陰へと戻ってきた時、俺は思い切って声を掛けてみた。

「アイス、いかがっすかー」

.....ヘタレだ。

本当は、「君、何してるの?」と言おうとしたのだ。もしくはそれに類する事を。だが口をついて出たのは、いつも言い慣れている呼び込みだった。

あからさまにビクッとして振り向いた彼女は、これまたわかりやすく動揺している。あまりの動揺ぶりに、逆にこちらが落ち着いたぐらいだ。

「あ、あの、下さい。アイス、買います。すみません。お店の前ウロウロして、邪魔ですよ。すみません」

「いや、それは別にいいんですけど……疲れるんじゃないの？ 似顔絵屋さんに行きたいんでしょ？」

えっ……と目を丸くし、彼女は一步後ずさった。

「わかります……か」

「うん。タイミング計ってるよね？」

彼女はふいにがっくりと肩を落とし、情けない声を出した。

「彼、知り合いなんですけど、お仕事の邪魔しちゃうそうでなかなか声をかけられなくて……」

その様子だけで、理解出来た。彼女は彼に片思いをしているのだ。

こんな可愛い子にこんな真似させるなんて、一体相手はどんなヤツなんだろう。イケメンか。イケメンなのか。

ヤツはほとんどいつもこちらに背を向けているし、どのみちこの場所からでは遠過ぎて、顔までは見えないのだ。

他人の恋愛事情になど興味は無いが、目の前の小動物みたいな女の子を見捨てられる俺ではない。

「じゃあ、アイス買ってくれるんだったら、いいこと教えてあげます」

† † †

彼女は今、4つ向こうのベンチに座っている。池の周りに等間隔に点在するベンチの中で、似顔絵屋に一番近いベンチだ。

俺の授けた作戦に従い、当店自慢の抹茶とバニラのミックスソフトクリームを食べながらそのタイミングを待っている。

作戦は、単純なものだ。

俺の観察によれば、似顔絵作製には大体いつも15分～20分程を要する。

よってしばらくはここで休み鋭気を養い、頃合いを見てゆっくりと移動開始。近くのベンチに陣取り、客が帰るのを待つ。

その間は己の気配を消し、次の似顔絵客の気配は無いか、絵を買ったそうな客が近くに居ないか、観察する。

状況が良さそうならば、すかさずGO！だ。

名付けて「サバンナの掟大作戦」。

獲物を狩る肉食獣のように、じっと待ち、その時が来たらすかさず飛びかかるべし！！

わざわざ名付ける程の作戦ではなかったが、彼女の緊張を解くには効果があった様だ。

買ったソフトクリームを握り締め、気合いと期待の漲る顔で「行ってきます！」と言っていたから。

俺は池の反対側から、状況を見守っている。

よし、そろそろだ。彼らは今、描き上げた絵の出来映えを確かめている。客は喜んでいる様子だ。

ターゲットは団扇で扇いで絵を乾かすと透明なビニールの封筒に絵を入れ、それを紙袋へ入れた。客は立ち上がり、服を整えたり鞆を探ったりしている。

彼女のベンチからターゲットまで、おそらく徒歩で十数秒。彼女は半ば腰を浮かせている。

(今だ！行け！！！)

心の中で号令をかけたが、彼女は動かない。

中途半端な姿勢のまま、こちらを振り返る。

俺は大きく手を振り、指を差して合図した。早く行け！

彼女は弾かれた様に立ち上がると、俺に向かって頷き、ギクシャクとした足取りで歩き始めた。

妙にハラハラしながら彼女の行動を見守る俺だったが、ふと我に返って苦笑してしまった。
本当は他人の恋愛の行方を気にしてる場合じゃないんだがな。

まあ、売上に貢献してくれるから良しとするか。

アイスクリームって、たまに無性に食べたくなります……
このアイス屋さん、前に優馬と栞が行ってたお店です。

仔リス系女子

「アイス屋さん、こんにちは」

出た。先週の小動物系女子だ。

揺れるブナの枝先についたフワフワした花を避けながら、小走りにやって来る。

俺は密かに、この子を「仔リス子」と命名していた。

「先週は無事にお話出来たみたいだね」

「はい！おかげさまで、作戦成功です」

あまりに嬉しそうなので、ちょっとイラッとした。シングルの僻だ。

「だいぶ挙動不審だったけどね」

「え、うそ……」

俺はニヤリとしそうなのを堪え、いかにも司令官然として言った。

「次からは、もっと自然にね。ちなみに今日、彼は11時から出店してる」

「え、見張ってて下さったんですか？」

……驚いた表情も可愛い。くそう。

「いや、他に見るものも無いし、なんとなく眺めてただけ」

「……もしかして、お仕事暇なんですか？」

心配そうな顔をするんじゃない。繁忙期はまだ先なの！

「私、アイス買います！……そのかわり、情報を」

俺はとうとう吹き出した。俺は情報屋か。

彼女は笑いを堪え、声を潜めてシリアスな取引の雰囲気を出そうとしているが、見事に失敗して

いる。

仕方が無いので、付き合っただも低く抑えた声を出す。

「そうだな。今日は午後から雨の予報だ。おそらく昼過ぎには客足は遠のくだろう。チャンスだ」

「なるほど」

「先週のように、数分だけの立ち話で終わらずに済むといいな」

「.....やっぱりそこまで見てましたか」

彼女は急にがっくりと項垂れ、情報屋ごっこは唐突に終わった。

「見てたも何も、俺は思わず舌打ちしたよ。1時間も店の前ウロウロしておいて、やっと声かけたと思ったらすぐに帰っちゃうんだもん。彼、椅子勧めてくれてたじゃん」

「だって.....ずっと喋ってたら、お客さんが来づらくなると思って」

「まあ、そうかもしれないけど。あと、帰り際に俺に手を振ってくれたけど、そういうのいいから」

.....本当は嬉しかったんだけどね。

「あんなに背伸びする勢いで手を振られても困るし.....彼も彼で、なんか会釈してくるし」

.....まあ、似顔絵屋はわりといいヤツそうなのはわかったけど。

「す、すみません。師匠.....」

.....情報屋の次は師匠かよ。

「まあいいけどさ。で、お客さん。アイスはどれにしますか？」

アイス屋さん、何者?!

次のお話は、恵流ちゃん視点です。

お客さんが目の前の椅子に座ると、彼は世間話などしながら、おもむろにパレットに水彩絵の具を絞り出す。

いくつか色を作ると、当たりも下書きも無しに、いきなり描き始める。

淡い色で顔の輪郭を描き、素早い筆運びで髪をざっと塗る。

お客さんとの会話は続いている。

バランスを見ながら上半身の輪郭をざっくりと描く。

まず、先に髪を描きあげる。

毛の流れや光沢など、いくつもの色を重ねて表現していく。

全く迷うことなく、彼は驚異的なスピードで色を選び、筆を運ぶ。

笑顔で和やかな会話を続けてはいるが、彼の目の奥は真剣だ。

髪やなんかを描いている間に、客の表情を観察していることを、私は知っている。

会話は、客をリラックスさせ自然な表情にするための手段なのだ。

時たま客を笑わせたりしながら、相手の最も魅力的な表情を見つけるのだ。

だから、彼の描く似顔絵はとても素敵だ。

大抵は幸せそうに微笑んでいたりと、楽し気に大笑いしてたり。

でも、描かれるのはいつも笑顔とは限らない。

ツンと気取った表情だったり、ちょっと斜に構えた表情だったり、気合いの入った表情だったりというのもある。

その時その時の客の気分を読み取り、絵の具に乗せて表してゆく。

だから、リピーターも少なくないという。

大きな転機後に再び絵を頼みにきたという客もいたし、辛かった時期に幸せそうに笑っている絵を描いてもらったのが励みになったと言って何度も通っている客も居るそうだ。

彼の描く似顔絵は、姿形を描くだけじゃなく、客の心やその背景にまで思いを馳せながら描かれているのだと思う。

彼の真剣な、そして優しい眼差しをよく知っているから、私にはわかるんだ。

のっぺらぼうだった顔に瑞々しい表情が描き出され、細かい陰影や背景などが加えられる。

絵の中の人物は、描いている最中の会話に出て来た物を持っていたりする。

たとえば、好きな動物だとか、鞆についている小さなぬいぐるみだとか、誕生日プレゼントでもらった花だとか。

今座っている小さな女の子は、ついさっき割れてしまったという赤い風船を書き加えてもらい、とても喜んで目を輝かせている。

そういうちょっとした工夫が、その絵をより特別な一枚にしてくれるのだ。

描き上げた絵を団扇で扇いで乾かすと、ビニールの封筒に入れ、さらに薄い紙袋に入れて手渡す。

彼は、「ありがとうね。また来てね」と笑顔で女の子の頭を撫でる。

女の子の母親が礼を言い、ふたりは嬉しそうに手を繋ぎ立ち去っていった。途中で何度も振り返り、大きく手を振りながら。

彼もその度に、手を振り返している。

そんな姿を眺めているだけで、私はこんなに幸せな気持ちになる。

「こんにちは」

お客様の姿が見えなくなったのを見計らい、声をかけた。

「おお、清水さん。いらっしゃい」

「賑わってますか？」

彼はハハハ、と笑った。

笑うと急に目尻が下がって笑い皺が出来、優しい顔になる。

「おかげさまで。いつも差し入れありがとうございます」

「やだ。たかだかジュース一本とかだよ」

「たかだか、じゃないよ。嬉しいし、美味しかったし」

絵筆を丹念に洗いながら、彼は椅子を勧めてくれた。周りを見回し、客の居ない事を確認して座らせてもらう。

「今日も買い出し？」

「うん。そんなとこ」

ここに寄る口実に、近くにある大型手芸店に買い出しに来ていると言っているのだ。

「今ね、和裁の課題で……」

「わさい？」

大月くんは筆に残った水を拭き取る手を止めた。

「あ、うん。洋裁、和裁の和裁。浴衣を縫ってるの」

「浴衣かあ、いいねえ。ね、なんか『洋裁和裁』ってかけ声みたいじゃない？ヨウッサーイ！ワッサーイ！って」

「ああ……ヤーレンソーランみたいな？」

「あはは！ そうそう！」

筆を振り回しながら、楽しそうに声を上げて笑う。

なんて無邪気な笑顔なんだろう。

普段あまり笑わない人だけど、笑う時には本当に楽しそうに笑うので、こちらもつられてしまう。

「やあ、なんかいいな。この感じ。ホームセンのバイトの時もさ、こういう下らない会話でよく笑ってたよね」

あああ、どうしよう。大月くんが、何年も前の私との会話を憶えててくれてる。しかも「いい」って言ってくれてる……

それだけで幸せ過ぎて、頭のとっぺんが痺れてきた。

「なんつーか、打てば響く感じ？俺、清水さんの言葉のセンス、なんか好きだわ」

私は鼻血を噴きそうになった。

＋ ＋ ＋

ああ、頭がふわふわする。

なんてこと。なんてこと。

ワタクシは今日……なんと、大月くんと、お食事をしてしまいました。

しかも、ふたりで！！ ふたりっきりで！！

……だめだ。誰かに話さないと、このまま部屋の窓から飛び降りて100キロぐらい走っちゃいそう。アヤさん、時間あるかな……

＋ ＋ ＋

「しかも、奢ってもらっちゃったの！私も半分出すって言ったんだけどね、『一応社会人ですから』だって」

「あー……」

「でね、『逆にファミレスなんかでごめんね。俺、シャレた店とか知らなくて』って。ねえ、謝る必要無くない？それに、お洒落な店を知らないって、遊び人ぽくなくて逆に素敵だよね！」

「んー……」

「でね、昔話したこととか、結構憶えててくれてね、でねでね、ワッサーイとか」

「あー……ちょっと待て。一回落ち着きなさい。アンタ声でかいから。声が割れて耳が痛いし。深呼吸して……そうそう。興奮してるのだけは電話越しでもよくわかったけど、何言ってるかわかんないから。大体ワッサーイって何よ」

「だからね」

「最初から、落ち着いて、順番に」

「……はい」

私は精一杯心を落ち着けて、今日起きた事を話した。

いつもの様に似顔絵屋さんで少し話して、時間があるかって聞かれて、夕方待ち合わせして食事に行って……

「ふんふん……で、彼は何を食べたの？」

「え？えーっと……ハンバーグの何か。そうだ、ハンバーグとミックスフライセットだ」

「なるほど。じゃあ、洋食系もイケルわけね」

「……うん？」

「鈍いわね、まったく。リサーチよ、リサーチ。一緒に食事なんて、リサーチの大チャンスでしょ？……この間の飲み会では確か、唐揚げとピザとししゃもをモリモリ食べてたのは憶えてる。アンタは？」

「私は、えっと……緊張してあんまり食べられなかったから」

「あんたが食べた物じゃなくて、大月くん！！憶えてない？」

「うう……憶えてないです……」

「でしょうね！！」

だってえ……そんな余裕無かったんだもん。そこまで冷静に観察出来たら、こんなに苦労してないよ……

自分の不甲斐なさに若干気落ちした私に、アヤさんは衝撃的な提案、いや、指令を下した。

「よし、お弁当作れ。そろそろいいでしょ」

十 十 十

高い。いきなりお弁当とか、ハードルが高すぎる。
私はそう言って尻込みしたけど、アヤさんに怒られてしまった。

「いつまで片思い続けるの？また目の前でかっ攫われてもいいの？」

ちょっと話し掛けづらい雰囲気はあるものの、ただでさえ男前。副業とは言え客商売をやって、昔よりは人当たりも良くなってる。

性格も……まあ、ちょっとアレだけでも、悪くない。

リピート客の中に、彼に好意を持ってる女性が居ないと言い切れる？

すごいアグレッシブにアタックされたら、受け入れないと言い切れる？

畳み掛ける様なアヤさんの言葉に、私は打ちのめされた。そう言われると、言葉もない。

確かに彼には、高校のときに猛アタックしてきた女子に押されて付き合ったという前科(?)があるのだ。

性格云々について抗議しようかとも思ったけれど（アレってどういう意味よ）、それはとりあえず置いておいて。

私は、決意した。やる。やります。お弁当、作ります。

「よろしい。もう少し暑くなってきたら、お弁当作戦は危ないからね。食中毒的な意味で。あんた料理は上手いんだから、今のうちにさっさと胃袋掴んじゃいなさい」

アヤ「で？ ワッサーイって、結局何なの？」

恵流「あ、あのね！ ヨウッサーイ！ ワッサーイ！ ってね.....ぷっ！ うぷぷぷあははは！」

アヤ「なんかもういいわ」

「ああ、来た来た。今週はもう来ないのかと思ったよ」

大月くんは片付けの手を止めて、笑顔を見せた。
今日は、夕方近くになってから公園に顔を出したのだ。

大月くん、もしかして、もしかして、待っててくれたのかな……いや、まさかね。

「あの、ね。先週ご馳走してもらったお礼にね、お弁当作ってきたの。よかったら、一緒に食べない？」

断られたら、と思うと怖かった。が、彼の反応には正直驚かされた。
「お弁当?!」と予想外に喰い付いてきたのだ。文字通り。

おずおずと包みを差し出すのを、身を乗り出して覗き込んでくる。なんならちょっとソワソワしている。

お弁当を広げてみせると、「すげえ！本物のお弁当だ!!」と目を輝かせる謎の反応。

「いいの？ほんとに？」

「あ、俺、お茶買ってくる」

「え？おおお！麦茶！麦茶だ！だよね、お弁当には水筒の麦茶だよね！」

なんだかやたらと舞い上がっているみたい。嬉しいんだけど、ちょっと戸惑ってしまう。
戸惑いながらも私は近くのベンチへ行き、お弁当を広げ、水筒から麦茶を汲んだ。大月くんは大急ぎで絵の道具を片付け、小走りでやって来た。
お弁当を挟んで、ひとつのベンチに座る。ウェットティッシュで手を拭くのもそこそこに、「いただきます！」と、おにぎりにかぶりつく。

「うんまああい！」

ニコニコしながら口一杯に頬張っている。子供みたいだ。

おかずの詰まったタッパーを差し出すと、彼はピックをに刺さった鶏の唐揚げをつまみあげ、口に放り込む。

「うんまあああい！」

足をばたつかせながらなおも頬張り、満面の笑みで私に向けて親指を立ててきた。

アヤさん、私もう、やばいです。嬉しすぎて、涙が出そう。

卵焼きに手を伸ばしかけたところで麦茶のコップを差し出すと、彼はコップを受け取り、横目で私を窺いながら急いでお茶を飲んだ。

飲み終えたカップを私に返すと、すぐさま卵焼きをつまんで口に入れる。

彼は頬張ったまま、とっても幸せそうに、「んふふー」と笑った。

.....アヤさん、胃袋を掴むどころか、こっちが心臓掴まれちゃいました。

ワタクシ現在、彼の頭をワシャワシャと撫で練りまわしてやりたい衝動と闘っております。

時おり心の中で、アヤに報告をしていないと平静が保てそうにない。

泣きそうなほどに幸せな気持ちが膨らんで弾けそうだった.....が、彼の一言で、それはペシャツと縮んだ。

「俺、人が作ってくれた弁当食べるの、中一以来だ」

「え.....そうなんだ」

「うん。母親居ないし、オヤジは料理下手だし、中学からは自分で作ったから。って言っても、ほとんど買った惣菜とか、冷凍食品とか詰めてただけだけど」

何よ。早く言ってよ。お弁当くらい、いつだって、いくらだって作ったのに.....

「すごい美味しい。何食っても美味しい。いつも買う弁当屋よりずっと美味しい！あ、俺、下手したら全部食べちゃうよ。清水さんも、ほら」

さっきとは少し意味合いの違う涙を堪えて笑顔を作ると、おにぎりを取ってひとくち齧る。

私達は目を見合わせて、また笑った。

「遠足みたいで楽しい、ね」

十 十 十

なんだか切ない気持ちを抱えて帰宅した恵流は、自室に戻るとため息をついた。

椅子を引き腰掛けると、空になった弁当の包みを取り出し机の上に置く。

気付くと、包みの結び目を弄りながら放心していた。

(大月くん、苦勞してきたんだなあ……)

自分の作った弁当を嬉しそうに頬張りながら、まるで昨日の献立の話でもするような調子で言った一言。

中学では給食があったそうだし、高校では学食に通っていたのは実際に知っていた。

でも、遠足や課外活動の時に、自分で作った弁当を食べるというのは、一体どんな気持ちなんだろう。

高校時代、恵流は毎日母親が作った弁当を持って行った。

遠足など特別な日の弁当は、わざわざ早起きして、いつもよりちょっと豪華なものを作ってくれていた。周りの友人達もほぼ同様だった。

そんな中、お弁当を開く時のちょっとワクワクした気持ちを味わう事もなく、買った惣菜ばかりの弁当を食べる……

彼はもしかしたら、さして気にしていなかったのかもしれない。

気にしていても、同情されたくないかもしれない。でも……

恵流は思わず、空の弁当箱を抱きしめた。

大月くんは遠慮してたけど、来週もお弁当作っていこう。
胃袋を掴むとか、もう関係ない。喜んでくれるなら、何度だって.....

恵流ちゃん、健気ないい子です.....

『お弁当作戦、とりあえず成功です。すごく喜んでくれました』

たったこれだけの短いメールを、アヤに送った。

彼の家庭の事情のことは話す気になれず、また話すべきではないような気がして、詳しく書けなかったのだ。

と言っても、そもそもそれ以上突っ込んで聞くことも出来なかったのだが。

家庭環境について詮索するのは不躰な気がしたし、何よりせっかく嬉しそうに食べているのを邪魔したくなかった。

アヤから光の速さで電話がかかってきた時には、恵流は彼の家庭の事には触れずに報告をしようと決めていた。

「……前にアヤさんが言ってたとおり、以前にも、お客さんからお弁当やお菓子を差し入れされたことはあったんだって」

「ふうん。やっぱりね……」

「アヤさん、すごい読みだよ。でもね、『アレルギー持ちなんで』って断ってたって」

「あはは。それは酷い」

電話の向こうで、恵流もつられて笑っている。

「私も笑っちゃったけど、実際にアレルギー持ってる人に悪いよね。でも、『知らない人が作った物なんて、何が入ってるかわかんないし』って。言われてみれば、確かにそうだよなって思う」

「ちょっと待って。大月くんはそれ言いながら、恵流のお弁当はバクバク食べてたのよね？」

「うん？ ほとんど大月くんが平らげてたよ。おにぎり4つも」

「それはいいのよ。あのさ、それって、恵流はある程度信用されてるってことよね？ 少なくとも、なんの疑いもなくアンタのお弁当を食べる程度には」

数秒の沈黙の後、恵流が呟いた。

「……あ。確かに」

「……………アンタほんとに、鈍いわね」

アヤは呆れて、ローテーブルに肘をついた。なんだかちょっと脱力してしまう。

「一歩前進、出来たかのなあ……」

恵流に聞こえない様に受話器を少し離し、アヤはため息をついた。

この子の自己評価の低さは何なんだろう。もう少し自信を持って良さそうなもんだけど。相手の事を好きすぎると、そうなっちゃうものなのかな。片思い期間が長いわけだし……

「何歩前進だか知らないけど、とにかくガンガン行きなさい。鈍いモン同士お似合いではあるけど、グズグズしてたら何も始まらないわよ」

「……うん。わたし頑張る！ 暑くなるまでに、お弁当いっぱい作る！！」

アヤは思わず天井を仰ぎ、目を瞑った。

気合い漲る答えだが、ちょっとズレているような……

アヤ「手作り弁当なんて、旧い手だけどね。結局、効くのよ。こういうのが」

恵流「すごい、アヤさん。電話越しにドヤ顔が見えるようだよ！ で、アヤさんはそういう相手、いるの？」

アヤ「……聞かないで」

木暮優馬の息抜き

「よう！久しぶり～」

「.....先週も会ったじゃないすか」

「えへ。また来ちゃった☆」

木暮優馬は断りもせず、客用の椅子を勝手に移動し、大月陽の隣に座った。

「えへ、じゃないですよ。毎週来てるし。仕事、いいんですか？」

「いいのいいの。ちょっと息抜きしなきゃ、死んじゃう」

そう言いながら、陽の描いている絵を覗き込む。

「何これ。どっちが上？」

あちこち首を傾けながら絵を眺める優馬に、陽は絵筆の尻で少し離れた場所に倒れて落ちている、溶けかけたソフトクリームをを指し示す。

「描いてるのは、あれ。向きはこのまんまで。後で蟻を描き足します」

「ああ、あれはショックだね。ソフトクリーム落とした時の絶望感ったら、もう.....ところで、さ」

優馬は椅子に座ったまま、上半身だけ陽ににじり寄った。

「こないだのコ、誰よ。彼女？」

ヒュ～、などと言いながら肘でツンツンと肩を突つく。

いきなり話題が変わる話し方にも、もう慣れた。いやむしろ、優馬にとってこっちが本題なのだろう。そんな印象だ。

突ついてくる肘を、陽は左腕でやんわりと払った。

「こないだって、いつのことですか」

「なんだよ、とぼけんなよ。先週の日曜日、イチャつきながら一緒に弁当食ってたじゃん」

まさか、見られていたとは思わなかった。

陽は言葉に詰まり、乱暴に絵筆を洗った。敷いているビニールシートに少し水が飛び散った。

「別にイチャついてないし。ただの、高校の時の同級生だから」

「ふうん。た・だ・の・同級生、ねえ」

声だけでニヤニヤしているのがわかったので、陽は優馬から顔を背けるように体を捻ると、バッグからペットボトルを取り出し、ひとくち水を飲む。

「俺の事より、そっちは大丈夫なんですか？ 栞さん、あれっきり見ないけど」

「んー。週末はね、なかなか休みが合わないんだよ。向こうは土日はほとんど夜勤だし、俺もまだ仕事あるし。平日は会ってるよ。たまにだけど」

「看護師さんはともかく、出版社も忙しいんですね。しょっちゅうぶらついてるから、暇なのかと思った」

「しっ、失礼な。お前が淋しいだろうと思って、わざわざ来てやってんのに。先週だって晩飯誘いにきたのにさ、お前らなんか楽しそうにイチャついてるからさ、俺はひとり淋しく帰ったんだから」

優馬はオーバーに下唇を突き出し、人差し指で膝に「の」の字を書いていじけたふりをする。

「あーハイハイ、すんませんでしたね」

陽は棒読みでそう流して、ペットボトルのキャップを固く締めた。

話を逸らそうとして栞とのことを訊ねたのだが、カウンターを喰らってしまった。だが、先週の件についてそれ以上聞くのは思い留まってくれたらしい。とりあえず。

優馬はおもむろに胸ポケットからチューインガムを取り出し、「ん」と陽に勧めた。陽が受け取ると、自分も一枚取り出し口に放り込む。

「禁煙、続いでるんだ」

「まあね。うちの看護師様がうるさいから」

ふたりはしばらく無言でガムを噛んでいた。爽快なミントの刺激が舌に刺さる。

優馬は身体の向きを少し変え足を投げ出して、池に泳ぐ鴨たちをぼんやりと眺めている。その隣で、陽は再び静かに筆を走らせる。

新緑の枝が燦々と降りそそぐ太陽光を遮り、時おりさらさらと音をたてる。遠くから子供のはしゃぐ声が聞こえる。ふたりの前を、たくさんのカップルや家族連れが通り過ぎていく。

心地よい沈黙とともに、時間が流れた。

ふと思いついた様に、優馬がポツリと口を開く。

「なあ、この鳥に餌やってもいいのかな？」

陽はそれについて知らなかったので、「さあ」としか答えようがなかったのだが、答える前に優馬が声を上げた。

「あっ、アイスほぼ溶けちゃってんじゃん」

「ですね」

「描けるの？」

「憶えてるから大丈夫」

ふうん、と感心した様に唸ると、再び絵を覗き込む。

「おお。結構進んだな」

「うん。まあ」

「で、なんで溶けかけのソフトクリームなの？ なんか、こう諸行無常的なメッセージとか？ 食物連鎖的な教訓なんかが含まれてたりするの？」

陽は思わず吹き出した。噛んでいたガムが飛び出すところだった。

「いや、単に目の前にあったから……強いて言うなら、季節感？ ほら、ここんところ暖かくなっ

てきたし。メッセージとか教訓なんて、考えた事も無かった」

「へえ……そういうもんなんだ」

「うん。他の人は知らないけど、俺の場合はそうですね。わりと、目の前にあるものとか、頭の中に浮かんだ風景とかを描くことがほとんど」

なるほどねえ、と呟きながら、優馬は腕時計を見遣った。

「やべ。ぼーっとしてたら20分も経ってた。仕事戻るわ。あ、今日メシ行こうぜ」

「んー、割り勘なら」

「お前ね、つまらん気を遣うなよ。黙って奢られとけ。どうせいつもの定食屋だ」

慌ただしく、しかしちゃんと夕飯の約束をとりつけて帰る優馬の後ろ姿を見送ると、陽は立ち上がり、落ちているソフトクリームのコーンを拾い上げた。

ソフトクリームはすっかり溶けてしまい、甘い香りのする液体になってしまっている。

コーンにくっついていた蟻をそっと指先に乗せ、仲間のところへ返してやる。

陽は池の淵まで行くと、コーンを小さく千切り取って投げた。大きな鯉や鴨たちが寄ってきて、それを啄んだ。

優馬さん、ニヤニヤです。

帰社した優馬は、何事も無かったかの様に装いつつ席に着いた。

少し長めに休憩をとってしまったため内心焦っていたのだが、幸いそれを指摘されることは無かった。

まあ、5分や10分長く離席したところで、それほど業務に支障は無いのだが。

眠っていたパソコンを起動し、電話をかけるべき者のリストを表示する。

これはパス、次もパス、これも……パス。

土曜の午後3時すぎ。

若者は家に居ない確率が高いだろう。主婦層はこの時間帯なら掴まるだろうか。もう少し遅くなると、夕飯の支度や何かで電話どころではなくなる筈だ。

だが、彼女たちは金にシビアだ。営業をかけるのは難しい。

やはり、引退した社長の回顧録や、金持ちの道楽で自己啓発めいた文章を書いているものもいい。そういうのは、こちらが気が楽だ。

木暮優馬が勤めているのは、小さな出版社だった。

以前には、発行部数はそれほど多くないもののマニアックで面白い雑誌をいくつか出している、コアなファンの多い会社だった。

だが、長く続く出版業界の不況、それに伴うトップの入れ替わりで、完全に営業方針が変わってしまった。

ある程度の固定ファンがついている雑誌を除き、雑誌部門は大幅に縮小された。

代わりに力を入れているのが、「素人の自費出版」部門だ。

「〇〇社大賞」と出版社の名を冠した賞を設け、素人から原稿を募集する。

応募された作品の中からいくつかが選出され、いくばくかの賞金が出る。さらに、大賞の作品は書籍化され、全国の書店で販売される。

その際の本の営業や宣伝も全て出版社で行います、という触れ込みだ。

優馬の仕事は、この「大賞」から漏れた作品の中から、ある程度の文章力のある作品を選び出し、その作者に「自費出版」の営業をかけることだ。

優馬がこの仕事を毛嫌いしているのは、この営業が詐欺に近い様なやり口で行われるからだった。

「本物の編集者がしっかりサポート、一丸となって作品を作り上げましょう」「出版した書籍は、弊社の誇る営業力で全国の書店に並びます」等と耳障りの良い文句で客を釣っておいて、かなり高額な費用を負担させるのだ。

夢を持って、勉強や仕事の合間を縫い一生懸命書き上げた作品を送ってきた者に、優馬はそんな仕打ちなどしたくなかった。

まんまと口車に乗せられ、期待と緊張で震える唇を噛み締めながら応接室に通される若者を目にする度、胸が潰れる思いだった。騙されるな、迂闊に判を押すんじゃないぞ、といくら念じてみても無駄なのだ。

作家になるという夢が叶うかも、という期待に目を眩まされ、編集者のあの手この手の口車に乗せられて契約を結び、高額な出版費用を工面するため借金までして、本を書き上げる。本が売れば、借金も返せる。そう期待しているのだろうが、そう上手くはいかない。確かに書店に本は並ぶが、売れなければ金は入らない。売れなかった本は、本人に返品されるだけなのだ。

数百万もの借金と返品された本に埋もれ、狭く薄暗い部屋で茫然と佇む。

そんな光景を、優馬は思わず想像してしまう。

最悪なのは、確実に、そういう境遇に陥っている「作家志望」の人間が少なからず居るということだ。

だから優馬は、前にあげた様な層を狙って営業をかける。

はじめに出版にかかる費用を説明し、それでも良いと納得する者とだけ話を進める。

数は少ないが、とにかく「本を出版する」ことに拘る人や、趣味道楽、自己満足のために出版し周囲に無料で配る、等という人々も存在するのだ。

おかげで営業成績はあまり上がらないが、詐欺師になるよりずっとましだ。
上司からの嫌味なんて気にしなきゃいい。

優馬はとあるタイトルに目を留めた。

『私が月収800万稼いだ方法』

こういう自慢話のような本は、話が簡単だ。

要は小金持ちの道楽。本を出して売れりゃそれはそれでラッキー、売れなくても「本を出版している」という事実で箔がつく、みたいな感覚の者が多い。

興味も尊敬の念も無い相手を「〇〇先生」と呼び、自分では絶対に買って読まないであろう作品を共に書物というカタチにするのは苦痛ではあるが、これも仕事だ。仕方ない。

優馬はうんざりした気持ちで溜め息をつき、その作品のファイルを開いた。

本作品はフィクションであり、登場する人物・団体は実在のものではありません。
また、特定の企業や会社などをモデルにしたわけでは、ましてや中傷しているわけでもありません。本当です。本当ですってば。

「お疲れ」

「お疲れっす」

公園近くの馴染みの定食屋。陽と優馬は小さなグラスで乾杯した。

「今日はどうだった？」

「ん～、まあまあかな。あの後、似顔絵1点と絵が3点」

おしぼりで手や顔を拭いている優馬に、陽が冷たく言い放つ。

「あ、それやりだしたらオッサン」

「うるせえ。いいんだよ、オッサンなんだから」

「そういえば優馬さんって、年いくつなんですか？」

「31」

「え」

「……なんだよ」

優馬は顔を拭いたおしぼりを軽く畳み、テーブルに置いた。

「もっと若いと思ってました。27ぐらいかな？ って」

「まあね。よく言われる」

「……童顔」

「若々しいと言え」

ぷぷ、と顔を背けて笑いを堪える真似をした陽に、優馬はおしぼりを丸めて投げつけるふりをする。

気持ちが若いのだろうか。陽は優馬と過ごすうえで年齢差を気にしたことはあまり無かった。まさか、10近くも離れているとは。

親戚の縁が薄いのでよくわからないが、年の近い叔父とか従兄弟のお兄さんとかというのはこういう感じなんじゃないかと、漠然と思う。

だが、何故優馬が自分とこうも仲良くしてくれるのか。それが不思議だった。

「ね、なんでメシに俺誘うんですか？ 会社の人誘えばいいのに」

「やだね。俺みたいに嫌々仕事してる奴と一緒にだと気が滅入るし、喜んで仕事してる奴とだと飯が不味くなる」

.....そういうものなのか。

陽は自分の職場の環境に満足していたが、改めて自分は恵まれているのだと思い知った。オヤジさんも奥さんも良い人だし、先輩達も仕事には厳しいが、みな親切だ。

「お前はさ、自分のやりたいことを自力でやって、自分の力だけで進もうとしてるだろ。そういうの見てるのは、面白い」

「いや、自力だけじゃないっす。周りの人に随分助けてもらってるし。工房のオヤジさん達にも、優馬さんにだって」

「あと、弁当の差し入れの娘とか？」

言葉に詰まった陽は、軽く咳払いして、ほんの少しビールを飲んだ。

そんな陽の反応を見て、優馬は満足げにニヤリと笑う。

「明日も来るんだろ？」

陽は意味も無くおしぼりを手に取り、手の平をごしごし擦った。付いてもいない絵の具を拭い取ろうとする様に。

彼女は単に、良い友人だ。それなのに、わざわざ聞かれるとなんだか妙に照れくさく感じてしまう。

彼女は高校の同級生で、バイト先が同じだったこと。

大学に通うため実家を離れていたが、地元に戻ってきて久しぶりに再会したこと。

手工芸の材料の買い出しのついでに、似顔絵屋に顔を出してくれるようになったこと。

その際飲み物の差し入れなどをくれるので、お礼に夕飯を奢ったらそのお返しに弁当を作ってきてくれたこと……

かいつまんで説明しながら、なんでこんなことをわざわざ話しているのだろうかという疑問に思う。

まあ、どっちみち優馬が聞き出してくるのだろうかけれども。

「で、また弁当作るって言うから、悪いからって断ったんだけど」

「ほうほう」

「今度は俺が奢るからって」

「ふんふん」

「そしたらなんか、お昼は弁当食べて、夜は俺の奢りって流れに……」

「……ラブラブですな」

「そういうんじゃ……でも、いいんですかね。バイトしてるとはいえ、彼女まだ学生だし。材料費とか金かかるのに、弁当とか負担になるんじゃないかな」

「知るか。勝手にやってろ」

ちょうど注文した品が運ばれてきた。優馬の生姜焼き定食と、陽の焼肉定食。

「いただきます」

優馬は手を合わせると勝手に食べ始めた。

自分から水を向けたものの、彼らの青春丸出しな甘酸っぱい遣り取りが眩し過ぎて、これ以上話を聞いていられない。自分の10年前を思い出してしまい、懐かしいやら恥ずかしいやらで身悶えしたくなってしまうのだ。

突然話が打ち切られ、陽は一瞬呆気にとられていたが、同じく手を合わせ食べ始めた。

十 十 十

ビールをもう1本頼みたかったが、我慢した。まだ仕事が残っている。

優馬は、陽の小気味良いくらいの食べっぷりを眺めながら、残り少なくなった自分の皿を突つく。

まったく、よく食うなあ。おかわり大盛りって。

そう思ったところで、自分も22ぐらいの時はそうだったのを思い出した。
あの頃は、大盛りの丼メシをバカバカ平らげていたのだ。

「優馬さん、そえちょっと食べたい」

陽が生姜焼きを指差すので、優馬は箸を握ったままの手で皿を少し押し出し、顎先で促した。

「あいがと」

優馬の時間を気にしているのか、ご飯を頬張ったまま喋るので、声がかくぐもっておかしなことになっている。

陽は豚の生姜焼きを一切れつまんだ。

「いいから、ゆっくり食え。ちゃんと噛んで」

言ってみて気付いたが、これはいつも自分が葉に言われる台詞だった。

食事に夢中になると、ついつい口一杯に頬張ってしまう。その都度葉は「まったく、もう」と苦笑しながらティッシュを手渡し言うのだ。

『いいから、ゆっくり食べなさい。ちゃんと噛んで』

立場が変わると言うことも変わるのだろう。

自分がこのセリフを言う立場になって、栞が今までどんな気持ちでいたのかが少しわかった気がする。

わんぱくなガキンちょをあやすような、そんな気分だ。少しくすぐったい。

問題は、栞が俺より2つ年下だということだ。

優馬さんと陽くん、9歳差なのに仲良しです。

「ぼく、名前はなんていうの？」

「しゅんくん」

「しゅんくんか。カッコイイ帽子かぶってんな。サメかな？」

「そうだよ。すいぞっかん行ったの。しゅんくん、サメ好きなの。おっきくて、シューって」

「そうか。サメかっこいいよな。シューって泳ぐもんな」

陽が似顔絵を描いている間、優馬はモデルの話し相手になってくれる。

職業柄か、それとも単に人柄なのか、優馬は話し上手で聞き上手だ。子供の扱いも上手い。相手の好むものや、自然な表情を上手く引き出してくれるので、陽は観察に集中することが出来る。今回は、絵の中にサメを登場させることにしよう。

陽の描く似顔絵は、デフォルメの要素の少ない、いわば簡潔な肖像画という感じのものだ。色紙に、透明感のある淡い色彩を用い軽いタッチで描かれる。

いつもの様に20分ほどで描き終わると、優馬に頭を撫でられご満悦の男児は両親の手を何度も振りほどき、「絵のお兄ちゃん、サメのお兄ちゃん、バイバイ」とこちらに手を振りながら帰って行った。

サメのお兄ちゃんこと優馬は、すっかり懐かれた様だ。男児が手を振る度、律儀に手を振り返している。

彼らの姿が見えなくなるまで見送ると、陽は軽く頭を下げた。

「いつも助かります」

「どういたしまして。ってというか、俺が勝手に出しゃばってるだけだし」

そう言いつつ、優馬はキョロキョロと辺りを見回している。

やがて、「あ！」と立ち上がると、いきなり駆け出した。

優馬の突然の行動に驚いた陽は声を掛ける間もなく、首を巡らせて優馬の駆けてゆく先を見遣る。

そこには、自分に向かってダッシュしてくる見ず知らずの男に驚き、怯えて固まっている清水恵流が居た。

「ちょ、ちょっと」

陽は慌てて立ち上がり後を追おうとしたが、筆洗いに躓きそうになる。

なんとか体勢を立て直し後を追ったが、優馬は既に「おーい、めぐるちゃん」と手を振りながら彼女のすぐ側まで迫っていた。

彼女は男性が自分の名を知っていたことで、とりあえず逃げずに留まることにした様子だ。陽と優馬を交互に見ながら、目顔で訊ねてくる。

「清水恵流ちゃんだよね。俺は陽の友人で、木暮優馬って言います。よろしくね」

「え、あ、はい。清水恵流と申します。よろしくお願……」

「よろしくなくていいから！」

やっと追いついた陽は、息を弾ませながら優馬の肩を拳で殴った。もちろん軽く、だが。

「なんだよ、いいじゃん別に」

「良くない。清水さん、驚かせてごめん。この人、ちょっと変人なんだ」

「ひでえ。いきなり変人呼ばわりか。さっきまで『助かりますうん』とか言ってたくせに」

「そんな喋り方してないから！」

「この子、ちょっと暴力的なところあるけど、悪い子じゃないんですよ。本当は、挨拶もちゃんと出来る優しい子で……」

左肩を擦りつつ涙を拭う真似をする優馬の首に、陽は無言で腕を回し、絞め技を掛ける。

優馬は一瞬「ぐえ！」と唸ったが、するりと抜け出すと素早く陽の背後に周り、両手首を捉まえた。

「いやあ、いつも話は聞いてるんですよ。うちの陽がお世話になってるみたいで」

「だれが『うちの陽』だ。手を、は・な・せ！」

陽も背の低い方ではなかったが、さらに10センチ近く上背のある優馬は強敵だった。もがいて

はみるものの、なかなか振り切れない。

「昨日もね、弁当がどうだとか……」

「黙れ、童顔オヤジ。ハゲろ。みるみるうちにハゲ散らかせ」

「ひ、酷い……人が気にしてることを。恵流ちゃん、聞いた？ ねえ、今の聞いた？」

優馬は手を離すと、胸の前で腕を交差し胸を押さえた。悲し気な表情で恵流に訴えかける。

「大丈夫だよ？ オッサン、まだ禿げてないよね？」

「だ、大丈夫です……フサフサです」

恵流は震える声でそう答えた。拳で口元を隠しているが、必死で笑いを堪えているのがわかる。

「俺、猫っ毛だし、父方の爺さんが薄いんだよ。だから気にしてるのに……お前ね、男同士でハゲ呼ばわりは反則だからな」

優馬はくるりと振り向きざま、陽の鼻先に人差し指を突きつける。

陽は突きつけられた人差し指を捉まえようとしたが、サッと手を引っ込めて逃げられてしまった。

「反則とか知らないし。うちの親父はフツサフサだったから、俺はハゲとか関係ないもん」
そう言う陽の鼻先に、今度は逆の手で指が突き出された。陽はまた、それを捉まえ損ねる。

「ほれほれ。捉まえてごらんさーい、だ。恵流ちゃん、こんなドンクサイ子だけど、これからも仲良くしてあげて下さいねー」

「なんでだよ。言っとくけど、あんたより清水さんの方が断然付き合い長いからな。あと、鈍臭くないし」

陽はやっと、優馬の人差し指を掴んだ。

「やった」

得意気な表情の陽に、優馬はヒョイと片方のまゆ毛をあげ、視線を促す。

「いやお前、アレ、いいのか？」

捉まえた指が指した先には、陽が放り出してきた荷物があった。

子供が絵筆に触ろうとして、親に窘められている。

「あっ」

「やっぱドンクサイわー」

慌てて駆け出す陽の背中に、優馬が声を掛ける。

「俺、そろそろ仕事戻るわー」

うん、と振り向いて手を振ろうとした陽は、踵を返して駆け戻った。

「触んなジジイ」

『じゃあ、恵流ちゃん、またね』と言いながら恵流の頭を撫でようとした優馬の手首を掴み、捻り上げる。

「痛い、痛いって！ すみません、もうしません。放して！ これ、曲がっちゃいけない角度だから」

なんとか逃れようとへっぴり腰になりながら、優馬は情けない声を出す。

「清水さん、ごめんね。今度この変態に触られそうになったら、殴っていいから」

「え、うん……あの、私は別に……」

オロオロしている恵流を横目に、ようやく解放された優馬が手首を擦りながら口を尖らす。

「なんだよ、陽のケチ。おまけにジジイだの変態だのってさ」

「ケチとか関係ないから。自業自得です」

優馬に向かって何度も指を振り立てながら、陽は荷物を片付けに戻る。

「清水さん、行こう。オッサンはとっとと会社に戻れ」

「あいあい、わかりましたよーだ。スーパーイケメンビジネスマンは仕事に戻ります。恵流ちゃん、今度皆でご飯行こうね」

優馬は鷹揚に片手を上げると、反対方向へブラブラと歩き出した。

その背中を眺めながら、陽が呆れた様に呟く。

「自分でイケメンとか言うかね。全く」

ついに、恵流が隣で吹き出した。

「面白い人だね、木暮さん」

「面白いっていうか、何ていうか.....変な人？」

「うふふ。賑やかで、私は楽しかったよ」

「賑やか、かぁ。清水さん、相当優しいね.....」

やれやれ、とでも言いた気な陽の口調が可笑しくて、恵流はクスクス笑った。

陽「優馬さんて、ちょっとチャライ？」

優馬「社交的と言ってくれ」

大月くんが、私を護ってくれた。

触るな、って言うてくれた。

きっと特別な意味なんて無いんだろうけど、それでも、ものすごく嬉しい。心臓がキューンってなっちゃう。

私の目は今、ハートマークになっているだろう。

バレない様に、なんとか話を続けなくちゃ。

恵流はさり気ない風を装って陽の隣を歩く。

「ふたり、すごく仲良しなのね。兄弟みたい」

そうかな、と照れた様に笑う陽が、恵流にはとても新鮮に映る。

高校の頃は、陽はなんとなく話し掛け難い雰囲気纏っていた。

短い休み時間には大抵、図書館で借りてきた写真集を模写していたし、昼休みなどにはほぼ毎日、美術室で絵を描いていた。

もちろん話し掛けられれば会話もするし、時たま誘われて簡単なゲームなどに参加していたこともあった。所謂、仲間はずれみたいなことでは無かった。

でも、クラスメイト達も遠慮しているというか、彼が絵のコンクールで何度も入賞していることもあり、陽が絵を描くのを尊重しているというか。とにかく彼の邪魔をしないというのが暗黙の了解だった様に思う。

陽があんな風に、誰かとじゃれ合う姿を見るのは初めてだった。

結構乱暴な言葉を使うのも、初めて聞いた。普段は割りと綺麗な言葉遣いをしているのは、一応自分に気を遣ってくれているのだろうか。

「なんか、ちょっと意外な感じがした。何のお友達なの？」

「この公園で会ったんだ。栞さんっていう彼女さんと一緒だった。でもね、本当は……」

陽はシャッター絵のことを話して聞かせた。

「へえ、なんだか不思議なご縁。じゃああの人、大月くんの絵のファンなんだね」

恵流の言葉に、陽は足を止めた。

「ファン？」

「……でしょ？」

いやいやいや……そう否定しながら、急に早足で歩き出す。

「違うし。そういうの、恥ずかしいから。なんていうか、妙に懐かれてると思うけど」

「あ、照れてる」

「……照れてません」

そう言い置くと、陽は小走りで行ってしまった。

恵流はクスクス笑いながら、ゆっくり歩いてついて行く。

いつも陽にドキドキさせられっぱなしだから、ちょっとだけ反撃出来た気がして、楽しかった。

すっかり日が長くなっていたが、夕暮れの気配が近づいている。あと数分で空はオレンジ色に染まり始めるだろう。

恵流は手を伸ばし、片付けを始めた陽の背中を指差してクルクルと指を回した。少し長くなった自分の影が同じポーズで陽を指差しているのを眺め、「うふふ」と笑った。

† † †

「おお、おかえり」

「ただいま。何か手伝いましょうか？」

天本良治は陽の姿を認めると、手を止めて額の汗を拭った。

最近の陽は、週末に遅くまで出掛けていることが増えた。

以前は仕事と絵にしか関心が無い様子で、いい若者がこんなことで良いのかと、内心心配していたのだ。

「いいんだ。もうすぐ終わる」

手を振って、陽の申し出を断る。

実際、ほとんどの荷物は詰み終えていた。

「最近、なんだか楽しそうだな」

「うん、まあ」

えへへ、と笑う陽の頭を大きな手でポンポンと叩く。

「いいこった。絵もいいけど、若者はいっぱい遊んで色々体験しなきゃな」

このぐらいの年の男なら、子供扱いを嫌って手を払い除けそうなものだが、陽は大人しく為されるがままで、少し照れくさそうにニコニコしている。

素直と言うのか、穏やかで、自分の考えが無いわけではないのだろうが、ほとんど自己主張しない性格なのだ。

教えられたことを素直に受け入れるし、そのおかげで仕事の覚えも早い。

真面目だがどこか不思議な雰囲気を持っていて、先輩達からも可愛がられている。この工房を家族だとすれば、陽は天本一家の末っ子といった印象だ。

「来週は竹内が休みだから、頼むぞ」

「あ、そうか。海外旅行、サイパンでしたっけ。いいなあ」

「うんと儲かったら、どっか連れてってやるから」

「まじすか。やった」

陽は小さなガッツポーズをとった。

「つっても研修旅行な。海外武者修行ってやつだ」

「あー……そっちか」

あはは、と呑気に笑う。

「でも、それも面白そう」

「ま、うんと儲かったらな。今日のところは早く寝ろ」

良治は、荷台に手早くカバーをかけた。

ところどころ、細いロープを通して荷台に括りつけて行く。陽は反対側に周り、当然といった様子でそれを手伝った。

「あした朝イチで納品だからな。運転頼むわ」

「了解っす」

全てのロープを結び終わると、陽は「おやすみなさい」と小さく一礼して部屋への階段を上って行った。

良治はその背中を頼もしく見送る。

良い青年だ。

真面目で働き者で、優しく礼儀正しい。

良い従業員達に恵まれて、この工房も安泰というものだ。

ただ一つ、陽の欠点をあげるならば。

休憩時間中、気がつくとき絵を描いていることぐらいか。

資料の片隅に落書きされていた時は、きつく叱ったものだ。

完全に無意識のうちに描いていたと知り、皆で呆れたものだった。あの時は、陽も自分で随分驚いていたが。

しばらくは「陽に鉛筆を持たせるな。余白があればどこにでも絵を描く」とネタにされていたっけ。

あれから、もう4年か。

最初の頃は筋肉痛でへばっていたが、随分と遅しくなったもんだ。

良治は、今は緑色のライトで照らされているシャッターを見上げた。

当時のことを思い出してニヤニヤしながら、良治はポケットを探り車のキーを握った。

優馬「俺が陽のファン？ そうだよ」

陽「え……」

優馬「なんで絶句してんだよ」

「先週のあれ、ワザとだろ」

「んー？何があ？」

土曜の昼下がり、優馬はまたあの公園に来ていた。

もちろん、陽の似顔絵屋だ。いつもの様に、断りも無く勝手に椅子を持ち出して腰掛ける。

このひと月ほど、土曜は優馬と、日曜は恵流と夕食をとるのがお決まりになっている。

「とぼけんな。清水さんにチョッカイ出すために来ただろ」

陽は座ったまま、優馬の脛を蹴る真似をした。

「さあね〜」

優馬は鼻唄混じりではぐらかす。

「明日は来んなよ」

「お、やっぱ明日も会うんだ。どうしよっかなー」

「どうしよっかじゃないから」

陽の拳を躲した優馬は、あからさまにニヤついている。

「だって、恵流ちゃん可愛いんだもん」

「……栞さんに言いつけるからな」

「え」

優馬はいきなり狼狽し始めた。

「違う、違うって。そういう意味じゃなくてね？ なんつーかその、小動物的な？ 森の妖精みたいな？ そういう可愛さがあるじゃん？ ちっちゃくてさ」

「何が森の妖精だ。頭ん中ファンタジーか、オッサン」

「お前ね、オッサンオッサンで……恵流ちゃんが絡むとクチが悪くなるねえ」

からかうような優馬の口調に、陽は大仰にため息をついた。

「セクハラで訴えられても知らないからな。客の3歳児の頭撫でるのはワケが違うでしょ」

「あー……そうかあ。でも俺、またやっちゃうかも」

陽に睨まれたが、優馬はまだニヤニヤしている。

「だって、お前の反応がすごい面白いから」

優馬は、肩にヘビーなパンチを喰らった。

† † †

「今日は、スペシャルメニュー。オムライス弁当です」

普段、工房の賄いは和食が多いと聞いていたので、恵流は努めてボリュームたっぷりの洋食メニューを作ることにしていた。

今日のメニューは、オムライスに海老フライ、ミニハンバーグ、タコさんウインナー、温野菜のサラダ、ケチャップ味のスパゲティ。

別の容器に、うさぎさんのリンゴと、くし形のオレンジ、輪切りのキウイ。

しかも、ちょっとしたサプライズを用意している。

おおお、と歓声を上げた陽を手で制し、恵流が小さなタッパーを開けた。

「今から最後の仕上げをします」

小さなチューブの蓋を取ると、オムライスの上にケチャップで文字を書く。

『 Y・O 』

「ハイ、『陽・大月』のイニシャルだよ。もしくは『陽』ね」

文字の周囲に三日月と星を描き足すと、恵流はタッパーの中から、小さな旗を取り出してオムライスの真ん中に立てた。

「あ、俺のネームカード」

うふふ、と恵流が嬉しそうに笑った。

絵を買った客に付けるネームカードを模して、旗を作ったのだ。

小さな白い紙の、右上に4分の1の太陽。左下に三日月。

「すっげー！お子様ランチみたいだ！すごい嬉しい！ありがとう！」

食べるのが勿体ない、旗を抜くのが惜しいなどと騒ぎながらも、ふたりは弁当を食べ終えた。陽は最後まで旗を抜かず、まるで砂崩し遊びのように周りから食べていき、終いには抜いた旗を持って帰ると宣言した。

「そんなに喜んでくれると思わなかった。良かったあ」

「イヤ、旗の立ったオムライスは、永遠の憧れですから」

真面目くさって断言するので、恵流は笑ってしまう。

「では、お子様ランチでもう一つ、大切なアイテムを」

バッグからガチャポンのカプセルを取り出し、既にワクワク顔の陽に手渡した。

「何コレ」

「お子様ランチといえば、食後のおまけでしょ？」

「わあ！」と子供のように喜んだものの、カプセルがなかなか開かず、陽は苦戦している。

「で、あのね。私、しばらく来られないと思う」

「え？」

ポン、とカプセルの蓋が開いた。

「あ、開いた。いや、じゃなくて。来られないって、なんで？」

「大学の友達と、夏のハンクラフェスに出展出来ることになったの。今まで作り溜めてた分じゃ足りなくなりそうだから、頑張らなきゃいけないって」

ハンクラフェス、というのは「ハンドクラフトフェスティバル」のことだ。年一回、大きな会場に様々なハンドクラフトのブースが出展し、展示即売が行われる。

その行事に応募しているという話を、以前恵流から聞いていた。

「凄いじゃん！審査、通ったんだね！倍率高かったんだよね？」

ハンドクラフト界において国内最大であるこのフェスに出展すること。恵流達がそれを目標にしてたのは知っていた。

陽は、思わず「おめでとう！」と恵流の頭をワシャワシャ撫でてしまい、慌てて手を引っ込める。これでは優馬のことを怒れない。

「うん。とりあえず、第一目標クリアです」

前髪を直しながら、恵流は上気した頬を隠す様にペコリと頭を下げる。

短い沈黙に気づき、恵流は顔を上げた。目が合うと、陽はサッと目を逸らした。

「あのさ……」

言葉を探す様に、視線を彷徨わせる。

「それ、ここじゃ駄目？」

「？」

手の中の小さなビニール袋を弄びながら、陽が口籠る。恵流と目を合わせない様に、視線を自分

の膝のあたりに漂わせている。

「だからあの……ここじゃ、出来ないかなって。ほら、材料の買い出しもあるわけだし」

陽は俯いたまま、今度は耳たぶを引っ張り始めた。耳の淵がみるみる赤くなる。

「お弁当は要らないからさ、いやあの、作るの大変だと思うから。なんなら俺、材料の買い出し付き合うし……だから、毎週来てよ」

「あ、じゃあ、来れたら……」

……何か今、大変なことを言われた気がする。私の勘違いだろうか。

恵流は自分が聞いたことが信じられなかった。

「うん、うん。来れたらでいいからさ……」

目の前の陽は、なんだかモジモジしている。これって、この流れって、まさか……

「あっ、あの、それ開けてみて」

頭の処理能力が状況に追いつけなくなり、恵流はとりあえず話を逸らせた。若干声がうわずってしまっている。

「あ、うん」

今まで手の中で弄んでいたものに初めて気付いたみたいに、陽は改めてそれを見つめた。

小さなビニール袋をそっと開く。

中から出て来たのは、手彫りのスタンプだった。

「これって……」

「うん。旗のやつ」

陽は口を薄く開けたまま、スタンプと旗を何度も見比べている。

「あの、絵の隅っこにね、押したらいいかと思って。よくあるじゃない？」
予想外の反応に不安になり、恵流は急いで言葉を継いだ。

「……落款？」

「らっかん？ って言うの？ ……ごめん。名前知らなかった」

突然立ち上がった陽に、恵流は驚いて身をすくめた。

「いいよ！ これ！ すごくいい！ 押す！ 俺、押すよ！」
すぐさま大きなキャンバスバッグに手を伸ばし、10枚程の絵の束を掴み出す。

「あ、インクが無い。ちょっとインク買ってくる。待ってて」

右手にスタンプ、左手に絵の束を持ったまま駆け出そうとした陽の上着の裾を、恵流はかろうじて捉まえた。

「あります。スタンプ台と朱肉、用意してますから」
陽の突然の興奮ぶりに驚き、何故か敬語になってしまう。のみならず、言わずもがなのことまで口走る。

「100均の安物で悪いけど、ありますから」

陽は急いで座り直すと、そそくさと絵を入れているビニールの封を剥がし始めた。耳の淵は赤くなっただまだ。

恵流は自分のバッグから、朱肉と赤黒2色のスタンプ台を取り出しベンチに並べた。

数秒の逡巡ののち、陽は朱肉を選んだ。

厳かな様子で色をつけると、絵の右隅に、神妙な面持ちで判を押す。

「出来た」

判を押した絵を掲げ、陽は恵流に微笑みかけた。

「最高」

破顔一笑、とも言える眩しすぎる笑顔に、恵流はぼうっと見蕩れてしまう。
頭の処理能力は、まだ回復していないみたいだ。

絵を傍らに置くと、陽は突然恵流の右手を掴み、その甲に判を押した。
満足げに微笑むと、恵流の手の甲に息を吹きかけて乾かし始める。

陽の突飛な行動に、恵流は固まったまま身じろぎひとつ出来なかった。

「……そんなことしたら、まるで私が大月くんのものみたいだよ」

やっとの思いでそう言ったものの、声が少し震えてしまう。

ちょっと驚いた表情の後、陽はいたずらを思いついた様にニッと笑うと、今度は恵流の左手を掴んだ。

「え」

反射的に左手を引っ込めようとしたが、強く掴まれて動けない。

「嫌なの？」

陽はほんの僅か、首を傾げ訊ねてくる。

僅かにいたずらっぽい光を滲ませ覗き込むその瞳に吸込まれてしまいそうになり、恵流は軽い目眩を覚えた。

「嫌とかじゃ、ないけど……」

満足げに微笑んだ陽は、悠々とした所作で判を朱肉につけ直し、恵流の手の甲にしっかりと判を押した。

「良かった」

手を離し、花が開く様な満面の笑みを見せた陽に、恵流は鼻血を噴いて倒れそうになるのを堪えながら心の中で呟いた。

そういうのって、ずるいと思う.....

オムライス分けこして食べてる時点でラブラブじゃないですかー やだー もうやだー マジでやだー
書いてる方の身にもなって欲しいの。手汗が.....

2組の恋人たち

「お、なに？ キミたち。やっとかっ付いたね？」

恵流の手を引いて待ち合わせのバーに現れた陽に、店の奥から優馬が声をかけた。

「うん、まあ、そういうことになりました」

簡潔に言うと、恵流を先に座らせ、陽もその隣に座る。

「.....わたし別に、何も言われてないし、何も答えてないもん」

せめてもの抵抗を示した恵流に、陽は黙ってポケットから落款印を取り出した。

手を伸ばすと恵流の前髪をあげて額を露にし、そこに判を押そうとする。

「ちょ、何？ やーめーてーよー！ わかった、わかったから」

攻防の末折れた恵流に、陽は「よろしい」と満足げに言うと、落款印をポケットにしまった。

恵流は小さく「もう.....」と呟き、ほんのり染まった頬を膨らませる。

「なんだお前ら。そういうのは家でやれ」

苦笑する優馬の背後から、葉が現れた。

「こんばんは。なんだか楽しそうね」

ストレートの黒髪が、襟ぐりの広く開いた白いカットソーの上で揺れている。

ロイヤルブルーのシックなフレアスカートに幅広のベルト、黒のパンプス。綺麗な白い薬指にはダイヤが、すらりと長い首には繊細な作りのパールが光る。

今日の葉からは、普段より少し改まった印象を受けた。

「あ、お久しぶりです、葉さん。あの、こっち、清水恵流さんです」

「初めまして。清水恵流と申します。今日は突然お邪魔してしまって、すみません」

「いえいえ、大月くんの彼女さんなら大歓迎よ。初めまして、神崎葉です」

にっこり笑って隣に座った栞に、優馬が口を尖らせた。

「違います。コグレシオリですう」

「ふふ。まだだもん」

「え、じゃあ」

「うん。今日やっと、会場押さえたんだ。明日、入籍してくる。」

互いを祝福する声が飛び交う中、シャンパンとグラスが運ばれてきた。

「店からのサービスです。ふたりとも、ご結婚おめでとう。長かったね」

痩せた白髪混じりの男が、微笑んでグラスを配る。

白いシャツ、黒いパンツに黒いベスト。深緑色のカフェエプロン。

「ありがとう、マスター。閉店前にいい報告が出来て良かった」

「この店が無くなっちゃうのは残念だわ。素敵だし、私達の思い出の店なのに」

各々がシャンパンの注がれたグラスを受け取り、目の前に掲げる。

「ふたりの結婚に」

「新しいカップルに」

「マスターの新たな旅立ちに」

『乾杯』

† † †

「ね、栞さん。思い出の店って、どんなですか？」

恵流はもうすっかり、打ち解けている。

陽よりも断然酒に強いので、酒の力を借りてというわけではなさそうだ。

「んー。今日ここで待ち合わせたのにも関係あるんだけどね。プロポーズの話」
ふふっ、と笑う栞に、優馬が情けない声を上げる。

「その話？ もういいよ～。勘弁して」

「それは是非聞きたい」

陽は優馬に意地悪な笑みを向けると、身を乗り出して栞に話を促した。

マジで。家でやれ。

まあ、家でやったとしても書くのは一緒か.....

次回は優馬さん栞さんの回想です。

回想

葉が優馬と出逢ったのは24、優馬が26の歳だった。今から5年ほど前のことだ。

学生時代バドミントンの選手で、大学を卒業して実業団でプレイしていた葉は、膝を痛めてしまい引退を余儀なくされた。会社を離れ、看護師の資格を取るために看護学校へ入学して、しばらく経った頃だった。

ある日、看護師見習いということで、とあるアマチュアスポーツ大会の看護アシスタントとして友人を通して応援を頼まれたことがあった。

その時に、バスケットボール選手として出場していた優馬に出逢ったのだ。足首を傷めたチームメイトの付き添いをしていたのが、優馬だった。

「この人、いつもの調子でヘラヘラしてるのに、何故か私にだけは、ぶっきらぼうというか、つっけんどんで」

「だって緊張しちゃったんだよ。テキパキしてて、凜としてカッコ良くて、ドストライクでさ。んで、上手く喋れなかつただけ」

「へーえ」

「ニヤニヤすんな」

優馬は向かいに座る陽の足を、テーブルの下で蹴った。恵流はクスクス笑っている。

「その後もね、チームメイトのお見舞いと称してはしょっちゅう病院に来て。その方が退院して通院治療になってからも、病院まで送って来たとか言って、何度も……」

「だって、嘘じゃないし。ほんとに頼まれたの！」

優馬の抗議を無視し身を乗り出して聞いているふたりに、葉は少し声をひそめて話し始めた。ふたりはさらに身を乗り出す。

「でね……」

† † †

その日、優馬は正式に交際を申し込もうと決意していた。
葉の勤務が終わる時間を聞き出し、屋上に呼び出していたのだ。

極度に緊張しながら屋上のドアを開け、ベンチに向かって歩きながら、無意識に煙草をくわえて火をつけた。

大きく一息吸って、吐き出す。

と、側に若い男性が立っているのに気付いた。

「こんにちは」

ソワソワしていたので、何の気無しに声をかけた。会話でもしていれば気が紛れるかと思ったのだ。

振り向いた男性は、ギョツとして手すりにつかまった。

優馬が違和感に気付く。

ガチガチに緊張していたので目に入らなかったのだが、男性は手すりの向こう側に立っていたのだ。

「え、あの……危ないですよ」

後になってみれば、なんとも間が抜けていると思う。

男性は、か細い声で答えた。

「……死のうと思って」

「……はあ」

またも間抜けな受け答えをしてしまう。突然のことで、思考停止してしまったみたいに、頭がぼんやりしていた。現実味が感じられない。

「また、なんでここで」

「……死んでも、すぐに見つけてもらえると。医者なら死体とか見慣れてるだろうし」

優馬はふらりと男に近づき、真下を見下ろした。なるほど、下は職員用の駐車場だ。

男は優馬を見つめたまま、身体を固くした。

生白く妙にぶよぶよとした、生氣のない顔がこわばっている。

「あの、非常に申し上げ難いんですが、出来れば、別の場所で……せめて、日時をずらしてもらえませんかねえ」

途方にくれた様な優馬の口調は、男には意外だった様だ。当然、止められると思っていたのだろう。

「俺、これから告白するんですよ。一世一代の。彼女、ここで研修中のナースなんでね、今飛び降りられたら残業確定なわけ。こっちもさ、何日も前から時間調整して、やっと今日半休取れたの。思いっきり気合い入れて来たのに、延期なんてさ。酷くない？」

後半を畳み掛ける様な口調で訴えかけ、優馬は右手を広げ男の方へかざした。

「これ見てよ、震えてんの。いい歳して、情けないことに」

確かに、人差し指と中指に煙草を挟んだ優馬の手は、細かく震えている。

「……はあ」

戸惑った様子の男に、優馬は音を立てて手を合わせた。

「だから、お願い！ 今日のところは止めて！ 頼む、このとおり」

押し倒す勢いで手を合わせていると、カツカツとヒールの音が響いた。

「なにやってるの！」

足音高くやって来たのは、もちろん葉だった。

が、その表情は今まで見たことも無いほど怒りに燃えていた。

葉は数歩離れたところで立ち止まり、仁王立ちで男を睨むと強い口調で詰問する。

「あなた、臓器提供の意思表示カードは？ 持ってるの？」

「え……いえ」

弱々しく答える男は、まさに蛇に睨まれたカエルの様にすくみ上がっている。

「ここは病院よ。みんな必死に生きようとしてるの。ここで命を粗末にするなら、せめて使えるモノは残して行きなさい。臓器移植が必要な人はたくさんいるの。あ、眼球もね。だから、何ひとつ無駄にしない様に、脳みそだけ潰して綺麗に死になさい」

恐ろしく冷たい怒りのオーラに圧倒され、優馬は声も出せない。

ただ、美人が本気で怒るとこんなにも美しいのかと、妙な方向に茫然としていた。

無意識のうちに、ポケットから携帯灰皿を取り出し、指に挟んでいた煙草を捨てていた。怒られそうに怖かったのかもしれない。

「でも……俺、役立たずで……生きててもしょうがないし……」

「あなたの事情なんて聞いてない。馬鹿？ 馬鹿なの？ 役立たずならせめて、死ぬ時ぐらい人の役に立ったらどうなのか、って言ってるの。わかる？」

隣に立ち尽くす男を、優馬は横目で窺った。

涙目で唇を噛みしめ震えている男が気の毒に思えてくる。

「いやあの、神崎さん……それはちょっと言い過ぎなんじゃ……」

「黙ってて」

睨みつけられ、優馬は即座に「はい」と姿勢を正す。

「とにかく、飛び降りには却下します。別の方法を考えて、やり直し」

仁王立ちのまま、栞は人差し指をクイと曲げこちらへ来る様に示した。

男が動かないので、横目で優馬を見遣り目線だけで命令する。

優馬は弾かれた様に振り返ると、フェンスの下部に足を掛け、男の両腕をそっと掴んで引っ張り上げた。

意外にも、男は抵抗すること無く自らフェンスを乗り越えた。

膝から崩れ落ちそうな風情の男をベンチまで支え、なんとか座らせる。男は泣くでもなく、紙の様に真っ白な顔で茫然と俯いていた。

なんともいえず張りつめた空気の中、カツ、と栞のヒールの音が異様に大きく響いた。

その瞬間、優馬は我知らず叫んでいた。

「神崎栞さん、俺と結婚して下さい！」

十 十 十

「ええええ?!」

「なんでそのタイミングで?!」

優馬は両手で顔を覆った。

「俺だってわかんないよ……」

葉がおかしそうに笑って、シャンパンを飲んだ。

「緊張の中、突然の非常事態でちょっとネジが飛んじゃったんじゃない？」

「ほんとはさ、『付き合ってください』の筈だったんだよ。でもなんか、あの時の葉がツボに嵌まっちゃってさ……『この人しかいない』って思っちゃったんだよ」

両手で顔をゴシゴシ擦りながら、優馬が呟く。

「だからって、なあ……」「ねえ」

陽と恵流は顔を見合わせ、吹き出した。

「飛び降りようとした男の子も、なんだかキョトンとしてたわ。気が抜けたみたいに『どうぞお幸せに』とか呟いて、頭下げて帰って行ったもの」

ひとしきり笑うと、恵流が先を促した。

優馬はあらぬ方向を不自然に眺めながら、しきりに親指で額を搔いている。

「その後は、ちょっと落ち着いて下さいって感じで。優馬は妙に興奮状態だし。私だって、そりゃ面喰らうじゃない？ で、とりあえずお茶でもってことで、この店に移動して」

「そう。この店、昼間は喫茶店なんだけど、当時から俺の行きつけなんだ」

「いきなり結婚は無理だから、結婚を前提としたお付き合いを……ってことに」

「なかば強引に持って行った」

葉の話に合いの手を入れる様に言葉を継ぐと、優馬は観念した様子で背もたれに寄りかかり苦笑して見せた。が、その笑顔はどこことなく得意気にも見えた。

「でも、その男の人は？ どうなったんだろ。無事だといいいけど」

「半年後ぐらいに、病院宛に手紙が来たわ。就職して、なんとかやっていますって」

「そっかあ。良かった。優馬さんのプロポーズのおかげで、少なくとも3人の人が幸せになったんですね」

「あ。そういわれれば、そうね」

「ほんとだ」

何故か、優馬が栞に向かって手を挙げた。栞も当然の様にハイタッチを交わす。陽や恵流にも手を差し出してくるので、4人でハイタッチをしあうことになった。

恵流はキャッキヤと喜び、陽も「意味わかんない」と笑いながら応じた。

陽「なんでハイタッチ？」

優馬「団体競技経験者のサガだ」

栞「ほぼ条件反射なのよね……」

「で？ そっちはどうなのよ」

優馬が乾きかけのオードブルを摘みながら、つま先で陽を蹴飛ばす。

「蹴んな。こっちのことはいいんだよ」

陽がテーブルの下で蹴り返す。

テーブルの下で子供じみた戦いを繰り広げる男共を横目で見遣り、栞と恵流は呆れ顔で笑った。ふと気付いた様に、栞が恵流の手の甲を指差し、意味あり気な笑顔で眉を上げてみせる。

恵流は急に赤くなって俯き、小さく頷いた。

「お、女子チームがなんかアイコンタクトをしている」

「ん？」

「イヤ待て、陽。女同士のアイコンタクトほど危険なものはないんだ。首を突っ込むな」

「危険なんだ。わかった。知らないフリする」

急に声をひそめた優馬に乗っかって、陽も声を落とす。

栞が声をあげて笑った。

「あなたたち、本当、あっという間に仲良くなったわね」

恵流も頷いて賛同する。

「ね。兄弟みたい」

「えー、そうかあ？」と言いつつ、優馬はまんざらでも無さそうだ。

「陽、オニイサマと呼んでもいいんだよ？」

「やだ」

即答かよ、と笑う優馬に、栞が肘で合図した。

「ね、あれ、頼まなきゃ」

「あ。そうだった」

優馬と栞は椅子の上で姿勢を正し、座り直した。

「えー、おふたりに折り入ってお願いがありまして」

栞が神妙な顔で頷く。

「再来月の結婚パーティーにご出席いただきたく、また、陽にはさ……ウエルカムボードを描いて欲しいんだよね」

後半からいきなり砕けた口調になったが、陽は全く気にしていないらしい。

「ウエルカムボード？ 何それ」

どうやら初耳らしい陽に、栞が説明する。

「会場の受け付けの横に飾って、招待客をお迎えするものなの。絵だったり、フラワーアレンジメントだったり、オブジェだったり、色々あるんだけど。要は、『いらっしゃいませ』っていう看板ね」

「それでさ、俺らふたりの絵を描いて欲しいんだ。ギャラは、”君らふたりを会費・祝儀ナシで招待”ってことで、どうかな？ 所謂レストランウエディングってやつでさ、料理が美味しい店なんだ」

あっさりと、陽は頷いた。

「うん、いいよ。描く」

隣から、恵流がおずおずと口を挟む。

「あの……私も？ いいんですか？」

栞がにっこり微笑み、大きく頷いた。

「もちろん。今日、恵流ちゃんも来るって聞いた時、きっとカップル成立したんだな〜って思ったの。だから、その時点で招待しようって決めてたのよ。もちろん、ご迷惑でなければってことだけど」

「迷惑だなんて、そんな！ すごく嬉しいです」

慌てて首を振った恵流に、栞は「良かった」と微笑んだ。

「で、どんな風に描けばいいの？ リクエストとか、ありますか？」

「リクエスト……考えてなかったわ。なにか、ある？」

「俺も、そこまでは。栞を綺麗に描いてくれたらそれでいいや」

「やだ、何よ……」

栞は妙に照れだし、僅かに残ったシャンパンを飲み干した。

恵流がそっと、残り僅かのシャンパンを注ぎ足す。

「栞さんは普通に描いても綺麗だから、大丈夫。優馬さんは……髪の毛を多めに描いてあげます」

「お前ね、まだ言うかコノヤロウ」

楽しそうに笑いながら、栞は優馬の頭を撫でて慰めた。

「禿げても嫌いになったりしないから、大丈夫よ」

「あの、禿げる前提で話すの、やめて下さい……」

泣き真似をする優馬が笑いを誘う。

「服装は？ やっぱドレスがいいのかな。写真とかあれば……」

「あ、ドレスはまだ決めてないのよ」

そっか……と、陽は少し考える様子を見せた。

「じゃ、今日の服装で描きます。今日の栞さん、すごく幸せそうだし」

葉の動きが、ピタッと止まった。

「……大月くんって、たまにそういうグツとくること言うよね」

そう！ とばかりに、恵流は下唇を噛みしめながら何度も激しく頷き、賛同の意を示した。

「お前、ヤな奴だな！」

キョトンとしている陽に、優馬は苦笑いしながら陽に指を突きつける。

「オニイサマは怒った。罰として、飲み物オーダーして来い」

「……なんでだよ……」

困惑しながらも、陽は渋々立ち上がりカウンターへ向かう。店内はいつのまにか、ほぼ満席になっていた。

「適当でいいから、ツマミもなー」

「うーい」

罰ってなんのだよ……とブツブツ呟く陽をの背中を見送りながら、葉が感心したような声で囁く。

「あれって、素で言ってるから凄いよね。恵流ちゃん、彼、昔からそう？」

「うん……そういうとこ、あったと思います。何かを誉めることに、照れとか躊躇が無いみたい。良いと思ったら、素直に口に出しちゃうみたいで。もともと皆で騒ぐとか少なくて、クラスの子達からも寡黙な人だと思われてたんだけど、少ない言葉で……こう、本質的なところにズバッと切り込んでくるというか」

「陽の高校時代か……そーいや、聞いたこと無かったなあ。どんなだった？」

うーん……恵流は少し考え込んだが、話し始める。

「高校の頃は、なんか別次元の人って感じでしたね。だから、優馬さんとじゃれ合ってるの見た時、意外でした」

「まあ、この人の場合、少し特殊だから」

「学生時代は、社交性の鬼と呼ばれてました」

優馬は気取って、前髪を横に流す仕草をする。

「あはは。でも大月くん、女子からは結構人気ありましたよ。でもみんな、憧れて遠巻きに眺めてる感じ。男子からも、一目置かれつつちょっと距離がある感じかな。えーと、孤立ってわけじゃなく、つかず離れず、みたいな」

「ふうん。まあ彼、美形だしね。同世代の子が近寄り難いのもわかるわ」

「そうなんです。話してみれば気さくだし、とても親切なんだけど。休み時間とか、ほぼ絵を描いてたから、しかもすごく真剣な様子だったから、邪魔しちゃ悪いよね？ ってみんな遠慮する感じで」

「ほんと絵が好きなんだな」

「夢の中でも絵を描いてるって言ってました」

うふふ、と何故か恵流は嬉しそうに笑う。

「その頃から彼が好きだったのね」

栞の言葉に、恵流は心底驚き目を見開く。

「なんで……え、わかります？」

恵流の驚きように、逆に栞も驚いている。

「なんでって、わかるわよ。口ぶりとか見てれば……ねえ？」

「あ……ごめん、俺、全然わかんなかった。イヤ、今はわかるけどさ、高校時代からとかは」

呑気にチーズを齧っている優馬に、栞が大きなため息をついた。

「そうだった……この人も、恋愛関係は大概鈍いんだったわ」

大体あなたはねえ……葉の矛先が優馬に向きかけたところで、陽が戻って来た。
優馬は少しホッとした表情を見せた。

「おう、お帰り。遅かったな……って、自分で持って来たのか」

陽は片手にワインのボトル、片手に料理の皿を持っていた。

「うん。マスターさん、忙しそうだったから。葉さん達の好きなもの、見繕ってもらった。グラスはこれ使っちゃっていいよね？」

「おう、構わん」

手早く片付けられたテーブルにワインと皿を置くと、優馬がボトルを取った。
空になった陽のシャンパングラスに、白ワインが注がれる。

「飲め、女の敵。いや、男の敵でもあるか。じゃ、人類の敵だな」

「何だよ、それ」

さっきから意味わかんね……と呟きながら、困惑した表情で椅子に座る。

「天然だわ……」

「そうなんです……」

女達はゆるゆると首を振りながら、深いため息をついた。

「鈍感と天然か。お互い苦労するわね」

葉がグラスを差し出すと、恵流もそれに倣う。

チン、と心地よい音が響き、ふたりはワインをひとくち飲んだ。

その光景を、優馬と陽はどうにも腑に落ちないといった表情で眺めていた。

優馬「俺、鈍感じゃないし」

陽「俺、天然じゃないし」

ㄣ(´Д`)ㄣヤレㄣ(´Д`)ㄣ

恵流のスマホでウエルカムボードの見本を見せてもらいながら、陽は恵流を家まで送って行った。

ハンドクラフトの得意な恵流の頭には、既にいくつものアイデアがわき上がっているらしい。陽の描いた絵に、様々な装飾を施すつもりの様だ。

「絵は後々まで飾れる様に、額やイーゼルに装飾するのがいいと思うの。もちろん、簡単に外せる様にして」

「じゃあ、イーゼルは俺が作るよ。木工は本職だし」

「あ！ それ、すごくいい！ 喜んでくれそう」

楽しそうに、少しはしゃいで手を叩く恵流は、とても可愛らしかった。

その後も、画材をどうするか、サイズは何号か等話し合いながら歩く。恵流の家はもうすぐそこだ。

「9月.....何日だっけ？」

「21日」

「あと3ヶ月弱か。早くイメージ固めなきゃな。あ、清水さん、忙しいんだっけ」

恵流は慌てて首を振る。

「ううん、大丈夫。額の装飾だけなら、デザインさえ決まればそんなに時間かからないはず」

「そっか。じゃあ、来週作戦会議やろう。それまでに、各自アイデアを固めておくということで」

「了解です」

恵流の家の前に着くと、陽は携帯を開いて時間を見た。11時30分。

「門限12時だったよね。余裕でセーフ」

「うん。わざわざ送ってくれて、ありがとうね」

恵流は門扉に手をかけた。

「あの、さ」

振り向くと、陽が手持ち無沙汰に耳たぶを引っ張っている。言い出し難いことを言う時、陽はいつも耳たぶを引っ張りながら目を逸らす。

「あの、これから、恵流って呼びたいんだけど、いいかな」

優馬達の結婚の話題で浮き立っていた胸が、いきなりギュッと痛くなった。息が上手く出来ない。

「えっと、嫌なら、恵流ちゃんとかでも……」

「いえ！」

恵流は締め付けられた胸になんとか酸素を送り込む。

「いいと、思います。恵流で、お願いします」

また敬語になってしまう。

陽は照れた様に笑い、「じゃあ俺は、陽で、お願いします」と恵流に口調を合わせた。

「じゃ、また来週ね。おやすみ」

「うん。おやすみなさい」

軽く手を振った陽は、もと来た道に戻って行った。

恵流はギュッと縮んだままの心臓に手を当てて門柱に寄りかかり、月明かりと街灯に照らされたその後ろ姿を見送る。

と、数メートルほど行ったところで、陽が足を止めた。

急にこちらを振り返り、恵流の姿を認めると足早に戻って来る。

「忘れ物？」

「うん、まあ」

陽が手を伸ばし、恵流の前髪を掻き上げた。

視界がふっと暗くなったと思うと、恵流の額に暖かく柔らかなものが触れ、離れた。香水だろうか、爽やかな香りが鼻先に残る。

「落款の代わり。さっき押せなかったから」

目を丸くしてピクリとも動けずにいる恵流に、陽は「じゃあ、おやすみ」と笑顔で手を振り、また帰って行った。

心臓が、止まった……息が、出来ない……

硬直したまま見送っていると、曲がり角のところで陽はもう一度振り向き、大きく手を振って消えた。

恵流はそのまましばらく固まっていたが、やがて夢遊病者の様に玄関への短い階段を上り始めた。

玄関の扉を開け、上がり框に座り込む。無意識のうちに手を上げ、そろそろと額に触れていた。ようやく打ち始めた鼓動が、今度は繰り返し拳で殴られているみたいな衝撃を胸部に与え続けている。

恵流は半ば朦朧とした意識の中で思った。

あの人、やっぱりズルいと思う……

陽くん、奥手なのか手が早いのか.....

刹那のサイクリング

「お迎えに上がりました」

自転車に跨ったまま手を差し伸べてくる陽に、恵流は戸惑って首を傾げた。

「荷物」

「あ、ありがと」

荷物を手渡すと、陽は自転車の前カゴにそれを入れた。

「よし、乗って」

サドルの後ろをポンポンと叩いて促す。

「重かったらごめんね」

恵流がおそろおそろ荷台に座ると、陽は腕を伸ばして恵流の手首を掴み、自分の腹の前で組み合わせさせる。

「全然重くないよ。しっかり掴まってね」

自転車がゆっくりと走り出し、恵流は組み合わせた手に少し力を込めた。固く引き締まった腹筋と、陽の体温が感じられる。

駅前のロータリーを抜け、車の少ない道を選んで進む。短い遊歩道を通り、住宅街に入っていく。

初夏の空は青く澄み切り、樹々の濃い緑が眩しいほどだったが、恵流には周囲の様子を見渡す余裕など無かった。

さっき、陽の顔を直視することが出来なかった。

どうしても先週の別れ際のことを思い出されてしまう。

今こうして、陽にしがみつきたいに二人乗りしている私の顔は、真っ赤になっているに違いない。

恵流は恥ずかしくて、陽の背中に額を押し当てた。誰にも顔を見られない様に。

陽の温かな手が、組み合わせた恵流の手の甲をぽんぽんと優しく叩いた。

その手はすぐにハンドルへ戻ったが、その一瞬だけで、恵流は泣きそうなくらい幸せな気持ちになった。

10分ほどのサイクリングが終わり、自転車が止まる。

そこは、準工業地域と呼ばれる、住宅や小さな町工場、事務所や倉庫等が入り混じって建ち並ぶ区域だった。

平日は機械の音等が煩いのだが、今日は日曜とあって周囲は静かで、時おりどこかから子供達の騒ぐ声が聞こえるくらいだ。

工房のトラックの横に自転車を止めると、陽は周囲を見回している恵流に声を掛ける。

「しみ……じゃなくて、めぐる？」

言い間違えて、名前を呼び直した陽は、照れ笑いしながら人差し指で首の後ろを掻いた。

「まだ慣れないね」

「……うん」

「夕べ練習したんだけどな、おかしいな」

「練習、したんだ」

「へへ。でもやっぱり、本人を目の前にするとね」

「……そうだね」

こちらも照れてもじもじしている恵流に、陽は誤摩化す様に大きく腕を振った。

「これ。前に優馬さんが言ったシャッター絵」

「あ……これ、スゴい」

恵流は小走りでトラックの脇をすり抜け、シャッターの正面に移動した。大樹を見上げる様な構図の絵を、さらに見上げる。

しばらく眺めてからその場にしゃがみ込み、もっと低い目線から身上げてみる。

「あ、その姿勢、正解」

陽は恵流に駆け寄り、同様にしゃがみ込んだ。

「こうして、見上げてるみたいに描きたかったんだ」

「うん。わかるよ。この絵見ると、そうしたくなるもん」

恵流はまだ絵を見上げていたが、隣で陽が嬉しそうに笑ったのが、気配でわかった。

「夜になると、今白っぽくキラキラして光の粒みたいに見えるところがね、ライトの緑色に照らされるんだ。もっと良くなるよ」

そう言うと、陽は勢いよく立ち上がった。

「だからそれまで、作戦会議」

差し伸べられた両手に恵流が掴まると、グイと引っ張り上げる。

身体が浮き上がるほどの勢いで、恵流は小さくジャンプする格好で着地した。

足早に自転車へ向かい、カゴから恵流の荷物を取り出すと、陽は鉄の階段を上り始めた。恵流も恐る恐る手すりを握りしめ、陽の後について急な階段を上る。

恵流「陽、腹筋すごい固いね。木で出来てるみたい！」

陽「え？ああ、一応木工屋だからね。木製のコルセットだよ」

恵流「何それ！すごい！かっこいいね！」

陽「……冗談だよ」

恵流「……………」

陽「なんかごめん。まさか信じるとは思わなくて」

恵流「もおお～っ！！o(*>д<)o”)))」

「散らかってるけど、どうぞ」

おじゃまします……と小さな声で囁いて、恵流は陽が支えてくれているドアをくぐった。

「わあ、広い……アトリエ？ って感じだね。ちょっと美術室みたいな匂いがして、懐かしい」
「そうかな。慣れちゃってわかんないけど」

半畳ほどの玄関口、正面奥には一口のコンロと小さなシンクの簡易キッチン。

右手には、カーテンのかかった出窓。以前、シャッター絵を眺めている優馬を、陽がこっそり見下ろしていた場所だ。

窓の下には小さなダイニングテーブルと、2脚のスツールが設置されている。

玄関の左手には薄暗い廊下が伸びていて、その奥は暗くて見えない。

壁際の高い位置に横長の窓がいくつか並び、その下は全面作り付け棚になっているが、納められた荷物は少なく、スカスカな印象だ。

一歩入ると、広いひと続きの部屋が見渡せる。

簡易キッチンの隣には、木製の食器棚。食器棚の下半分に、小さな冷蔵庫が嵌め込まれている。本来はこの食器棚辺りで上吊り式の引き戸で仕切られる仕組みだが、扉は全て開け放たれていた。

「棚だらけでしょ。前にここに住んでた先輩達が、練習も兼ねてあちこちに棚ばかり作ったんだよ」

入り口付近で立ち止まったままの恵流の後ろをすり抜けた陽は、ボヤいている風に見えて、その声には笑いを含んでいた。陽が職場の先輩達を慕っているのがよくわかる。

「大月く……よ、陽は、何を作ったの？」

恵流の呼び間違えには触れず、陽はほぼ部屋の中央の壁際にある、大きな作業机を指差した。たくさんの絵の具や絵筆、パレット、謎の液体瓶などが並んでいる。

「あれ。って言っても、ホームセンで買ったのを組み立てただけけど」

あはは、と笑う恵流に、思い出した様に付け加えた。

「あ、これもだ。この、丸椅子」

「作ったの？」

「いや、ホームセンで買った椅子に丸板くっつけて、座面が回転する様に改造した。高さが少し足りなかったし、絵を描くのに便利なんだ」

へえ……と感心する恵流を他所に、陽はいつの間にか冷蔵庫の前にしゃがんでいた。

「何か飲む？ ……っても、水と緑茶とビールぐらいしか無いけど」

「あ……緑茶を、いただきます。ありがと」

作業台と丸椅子の側には空のイーゼルが立ててあり、その向こうに部屋を半ば仕切る様に置かれた棚には（また棚！）、書き終えた絵がいくつも立てかけてある。

棚の端からベッドが見えて、恵流は慌てて目を逸らした。プライベートな部分をじろじろ見るのは失礼だろう。

小さなダイニングテーブルに、お茶のペットボトルとグラスを並べ終えた陽は、今度は部屋の窓を開け始めた。

「この部屋、陽当たりと風通しは抜群なんだ」

キッチン横の出窓と、作業台の上、そしてベッドの上の腰高窓を開け放つと、部屋全体に風が通った。

窓と反対の廊下側の壁にも、高い位置に通気口のように木製の格子が嵌め込まれている。通気口の下には、そう、もちろん、作り付けの棚。

「冬はちょっと寒いけどね。厚着すれば問題ないし」

部屋を縦断してテーブルに戻った陽は、グラスにお茶を注ぐ。

「で、いいアイデアは出ましたか？」

恵流の提示して来たイメージは、明確だった。

額の周囲をレースをあしらったチュールで覆い、花嫁のベールの様な効果を出す。
所々を白い花やアイビー、リボンで飾り、フェイクパールのビーズチェーンをチュールに絡め、
全体的に大人っぽい印象に。

一番上に、WELCOMEのメッセージ。

ふたりの顔の間に、カラフルな造花をまとめて飾り、ふたりでひとつのブーケを持っている様に見せる。

一番下に、ふたりの名前を。

説明しながら恵流はメモ帳を取り出し、簡単なデザイン画を描いて見せた。

「いいじゃん。この装飾だと、バストアップだから服装はほとんど見えなくなるね」

「そう。そう思って、デザインしたの」

ウエルカムボードの制作に当たって色々調べたところ、ボードに描かれるのは、ほとんどの場合、ウエディングドレス姿か、白無垢や打掛の姿だった。

葉は普段の服で良いと言ってくれていたが、少々悩むところではあったのだ。

「真ん中のブーケを挟む様に、それぞれの名前を入れるの。で、ウエルカムのメッセージと名前は、サテン地で中に綿を詰めて立体的に作ろうと思うの」

「うわ……すごくいいけど、大変そう。大丈夫？」

少し考えた後、陽は眉を寄せた。恵流自身、自分の出展を控えているので、心配だったのだ。

「大丈夫。実際取りかかるのは、ハンクラフェスの後になると思うし、2～3日もあれば余裕で出来るよ」

頼もしいな、と微笑む陽に、今度は恵流が訊ねる。

「絵の方は？」

「うん。せっかくだから、油絵にしようと思う。時間的にも、ギリ行けそう」

テーブルに置いていたクロッキー帳を開くと、既に下絵が出来ていた。

荒い線だが、描かれたふたりの表情は良くわかった。

「これに、こう………いう、感じ？」

先ほどの恵流のデザイン画を見ながら、下絵にざっと装飾を書き込んでゆく。全体的なバランスを見るためだ。

「うん、いいね。背景は？」

「あの二人自体は、青とか緑系あたりが主体のイメージなんだけどさ。結婚式だし、ピンクとかオレンジとかの暖色系でぼかして塗るのがいいと思う。どうだろ」

「賛成」

「あ、リボンとかは？何色？」

「絵に合わせるよ」

よし……と呟くと、陽は作業台近くの棚に駆け寄り、36色入りの色鉛筆のセットを取り出した。蓋を開くと、3分の2から半分ほどの長さにまで使い込んだ色鉛筆がずらりと並んでいる。

「ざっと塗ってみよう」

人物とその背景を大まかに塗ると恵流と交代し、装飾部分の彩色を任せる。

細部は描かずに色合いや大体の雰囲気を描き入れると、それをテーブルに立てかけ、少し離れたところから眺める。

いくつかの修正を施したものの、作戦会議はあっという間に終了した。

「いやー、さすがは恵流。仕事が早い」

「いえいえ、陽だって。まさか下絵まで済ませてるとは」

再び並んで立ち、デザイン画を満足げに眺めながら、ふたりは健闘をたたえ合った。

「よし。じゃあ、昼飯がてら、ホームセン行こう」

「……え、一緒に？」

「ん？だって、材料買うし。キャンバスも選ばなきゃ」

私達のこと、ホームセンの皆に知られちゃいそうだけど、いいのかな……

恵流は一瞬そう思ったが、それを口にしたら、陽はきっと、また言うだろう。

『嫌なの？』

あの、悪魔的なまでに、美しい瞳で。

そして私は、あの瞳に逆らうことが出来ないのだ。

なんだかすごく恥ずかしい。でもすごく嬉しくて、ニヤニヤしてしまいそう。

恵流は少し目を逸らして下唇を噛み平静を装うと、頷いた。

「そうだね。一緒に行こ」

趣味の合う人と一緒に物作り、楽しいですね。

ホームセンの駐輪場に自転車を止めると、陽は恵流の手をがっしり掴んだ。
陽の背中に隠れる様にして歩く恵流を、有無を言わずぐいぐい引っ張って歩く。

「ちょっと、陽。みんな見てて、恥ずかしいよ」
恵流が小声で訴えるが、一向にお構いなしだ。

「いいのいいの。こういうのはさ、変に内緒にしてると言うタイミングを失うからさ。最初にガツンと発表しちゃった方が、後が楽なんだって。たぶん」

「たぶん、って……陽はいいかもしれないけど、私は現役でバイト中なんだから」

陽はいきなり立ち止まると、俯いている恵流の顔を覗き込んだ。

「だからだよ？」

……その、笑顔の意味がわからないんですけど。

言い募る気も失せて、恵流は再び引っ張られるままにいくつもの売り場を通り過ぎる。
さっきの言葉をどう捉えればいいのか考えるものの、頭の中がフワフワしているし顔は熱いし背中に変な汗をかくしで、一向に考えが纏まらない。

売り場のあちこちから、顔見知りの店員達の挨拶の声がかかる度、陽はわざと繋いでいる方の手を振って挨拶を返して回る。

だからその度に、恵流も腕をブラブラ振り回される。これじゃ、捕獲されてるみたいだ。

意外なことに、伏し目がちにチラリと観察した限りでは、皆、ふたりが堂々と手を繋いで歩いていることにさほど驚いていない様子だった。

お、という顔をしてニヤリと笑ったり、親指を立てたり。そんな程度だ。

エスカレーターの近くまで来ると、持ち場に戻る途中のアヤと遭遇した。
もちろん、アヤには経緯を報告済みだ。

「あら。お手繋いで練り歩いちゃって、凱旋パレード？」

からかう様なアヤの声に、恵流は顔を上げられず、もによもによと何事かを呟いた。

「ま、そんなところです」

陽は恵流の手を握ったまま、フルフルと手を振る。

「あー、ハイハイ。大月くん、ご機嫌ですわね。良かったこと」

アヤが恵流の肩に、ぽんと手を置いた。

「これでやっと、みんな落ち着くわよ。いつになったらくっ付くのかって、あんた達には相当ヤキモキさせられてたんだから」

「「え……」」

ふたりの声が揃った。

「あの、私、アヤさんにしか言ってないよ？」

「だーかーらぁ……ま、いいわ。とりあえず、おめでと」

あ、お客さん来たから、後でね……と手を振り、アヤは行ってしまった。

ふたりはしばらくその背中を見送っていたが、先に我に帰ったのは陽だった。

「ま、いっか。行こう」

1階をほぼ一周し、エレベーターで2階へ。

インテリアや日用品等のコーナーを抜け、文具やクラフト素材、画材のコーナーへと進む。

画材コーナーへ近づくにつれ、陽はほとんど小走りになった。

「いやー、何度来てもワクワクするねえ」

子供の様に目をキラキラさせて、恵流に同意を求める。

まあ、その気持ちは充分わかる。

ようやく恵流の手を離し、無地のキャンバスを引っ張り出し始めた陽を眺めながら、恵流は「そ

うだね」と微笑んだ。

「やっぱ、ある程度大きいのが良いよね。少なくとも、8.....から、いっそ15ぐらいとか」
「うーん.....額も要るし、後々飾ることを考えたら15号は大きいかも」

結局10号サイズのキャンバスを選び、張りをしっかりチェックした上でカートに入れる。他にも下地剤やら筆洗い用の油などを買い込む。

「.....よし。こんなもんかな。あとは家にある分で足りる」

陽は鼻歌でも飛び出しそうなほど上機嫌だ。大きいサイズの油絵を描くのは久し振りだと言っていたから、よほど楽しみなのだろう。

次は、普段恵流が担当しているクラフトコーナーだ。

勢い良くカートを押して足早に歩き始めた陽を、恵流は苦笑いで「お客さん、走らないで下さい」と引き止めた。

クラフトコーナーは広大だったが、恵流はその売り場を熟知していた。

迷い無くクラフト素材の棚に到着すると、手際よく商品を選び始める。時おりキャンバスに素材を置いてサイズ感を確かめつつ、造花やリボンをカートに放り込んで行く。

「布関係は、公園の傍の手芸店の方が品揃えが良いから、そっちで買うとして.....」と、最後にパールビーズを一袋手に取り、買い物を終了した。

「よし。じゃ、会計.....」

「待って、陽。額、買ってない」

「あっ」

慌てて画材コーナーへ戻り、額を選ぶ。陽は大分浮き足立っているらしい。

シンプルなパールホワイトの額を選び、今度こそレジへ並ぶ。

「恵流……俺、まだ忘れてたものあったわ」

「え、何？ 私、急いで行ってこようか？」

いや……と、陽は鼻の下を擦った。

「買い物の前に、昼飯食おうと思ってたんだっ」

「あ……ほんとだ。私も忘れてた」

並んでいる他の客の邪魔にならない様、声を潜める。

「なんか興奮して、忘れちゃってた。こういう時って、腹減らないよね」

「わかる！ 瞬きとか、息するのも忘れるときあるよね」

あるある、と、ふたりはクスクス笑った。

† † †

持ちやすい様に梱包された荷物を抱え、ふたりはホームセンを後にした。今度は恵流も顔を上げ、職場仲間達に手を振ることが出来た。

「ふう。明日の勤務から、色々聞かれちゃうかな」

「かもね。ま、話したきゃ話せば良いし、嫌なら黙っとけばいいし」

もう。人の気も知らないで、呑気なんだから……

自転車を押す陽と並んで歩きながら、恵流はほんの少し、腹立たしく思う。

皆に報告(?) 出来たことは、確かに嬉しい。でも、こちらにだって心の準備ってものがあるのだ。

「早く宣言しとかなないと、他の人に取られちゃったら大変だし」

あなたが、言いますか。それを……

高校の時の絶望感を思い出しながら、恵流は内心ため息をついた。まあ、当時の恵流の気持ちを知らなかった陽にとっては、理不尽な話だったが。

「あ、ここでいいんじゃない？ 恵流さん、昼飯、ハンバーガーはどうでしょう」

突然立ち止まったのは、大手ハンバーガーチェーン店の前だ。
同意した恵流に、陽はポケットから取り出した財布を手渡した。

「悪い。荷物デカイから、俺ここで待ってる。買って来てくれる？」

恵流は慌てて財布を返そうとする。

「いいよ、私がお金を持って来るから。何なら、あとでまとめて清算すれば……」

「いや、面倒だからさ。俺、チーズバーガー2個とポテトのLね。飲み物はコーラをお願いします」

ハンバーガーショップのレジに並びながら、恵流は口の中でブツブツ呟いていた。

陽の発言にちょっと頭にきたところで、すぐこれですよ。

何の躊躇もなくお財布丸々預けちゃうとか、どういうことよ。私、信頼され過ぎでしょ。こんなことされたら、怒ってたのなんてどっか行っちゃうじゃないですか。

……もしかしてあの人、わざとやってない？ ほんとに天然なの？

複雑な想いで紙袋を下げて店を出ると、陽が通りの向こうで大きく手を振った。

恵流は道路を渡り、財布を陽に返す。

陽は中身を確認もせずに財布をポケットにしまって、無邪気に笑った。

「ありがと。いい匂いだ。早く帰って、食べよ」

こんな顔をされると、さっき疑ったことが申し訳なくなってしまう。

.....やっぱりこの人、なんかズルいと思う。

食事、瞬き、息継ぎ。何かに夢中になるとよく忘れちゃいますね。
電車内で読書に夢中になり、乗り越しちゃうことも。

長い一日

小さなダイニングテーブルを借りて、恵流は革ひもを編み込んでいる。
ところどころに石のビーズをくぐらせながら編んでいるのは、ブレスレットだ。

窓からの風が心地よい。

「終わったー」

陽の声に、恵流は顔を上げる。

「え、もう？」

「うん。今日は下地塗りしか出来ないから。このまま乾かして、夜になったらもう一度塗るんだ。
描き始めるのは、明日か明後日だね」

使い終わった道具を片付ける間でさえ、陽はとても楽しそうだ。
クシャクシャの紙で刷毛に残る液体を拭き取りながら、様々な角度から下地の具合をチェックしている。

「ほんとはもっと時間かけた方が良いんだけど、期限がね」

「油絵って、時間かかるんだね」

「うん。いちいち乾かしながら描いてくから。書き終わってからも、2ヶ月は乾かさなきゃいけないし」

「わ、じゃあホントにギリギリだ」

うん、と陽は片付けの手を止め、ニヤッと笑った。

「そういうギリギリ感とかも含めて、すっげえ楽しい」

ちょっと刷毛洗ってくるね、と言い終えて、陽は弾む足取りで部屋の奥のドアへ消えた。
しばらくカタカタガサガサと物音がしていたが、やがて水音が聞こえてきた。

手を拭いたタオルを首にかけながら、陽が戻って来た。

「そっちは、どう？」

ダイニングテーブルの向こう側に腰掛ける。

「うん。順調」

「これ、見ていい？」

編み上がったブレスレットの一つを手に取り、矯めつ眇めつ眺めている。

「結構複雑なんだ。どうなってんの？これ」

恵流は少し身を乗り出し、テーブルの中央でゆっくりと細い革紐を編み、石のビーズを通し、また編んで見せる。

陽はその様子を、眉をしかめながら真剣に見つめている。

「んー、さっぱりわかんない。構造がわかれば、見なくてもある程度想像で描けるんだけどな」

「ふふ。慣れれば簡単なんだけどね」

ひょいひょいと容易気に紐を編み続け、最後に紐の端に石のビーズを留める。

「こうやって、サイズ調整出来るんだよ」

恵流は自分の手首にブレスレットを嵌めてみせた。

両端から長く伸びた数本の革紐が、編み終わりの結び目から垂れ下がっている。紐の先には色とりどりのビーズが留められており、ゆらゆらと揺れて可愛らしい。

結び目をスライドさせると、垂れ下がった紐が引っ込み、その分ブレスレットの径は二周りほども大きくなった。

「へえ、よく出来てる」

感心した様に眩き、陽は別のブレスレットを手に取った。

「あれ。こっちと少し違う」

「うん。ひとつずつ編み方変えたりしてるの。革アクセ以外のものも、いっぱい作るんだよ」

ガラスビーズやワイヤー、革小物、布小物等、友人2人と得意分野で担当を分けているのだという。

ちなみに私は布と紐担当、と恵流は笑った。

「いつか3人で、ショップを構えるのが夢なの」

「そっか。じゃあ俺は、その隣にギャラリーでも開こうかな」

「.....じゃあ私は、その隣にお弁当屋さんを」

「じゃあ俺は、そのまた隣に画材屋さんを.....って、ヤバい。このまま行くと俺達で街を牛耳っちゃうよ」

「野望は果てしないね」

くだらない会話を交わしながらも、恵流はせっせと紐を編み、陽は仕上がったブレスレットをデッサンし始める。

「もう、こんな時間」

辺りが薄暗くなって来たのに気付いた恵流が、腕時計を見た。ふたりとも、黙々とそれぞれの作業に没頭し時間を忘れていたのだ。

テーブルの上には、出来上がったブレスレットやストラップが並べられている。

「お、ほんとだ。晩飯行こうか」

言われて気付いた陽は、壁の時計を見上げる。7時を少し過ぎていた。

クロッキー帳を手早く片付けると、テーブルに戻り、恵流の後片付けを手伝う。

「結構たくさん出来たね」

「うん。おかげさまで、捗りました」

「こんなちっちゃい手で.....頑張りましたねえ」

陽は恵流の手を取り、自分の手と合わせた。陽の指は、第二関節の中程から飛び出している。

「どうせちっちゃいですよーだ。いつも手袋の指先が余っちゃうんだから」

「冬になったら、赤ちゃん用の手袋を買ってあげましょう」

「そこまでちっちゃくないもん！」

恵流がぷうっと頬を膨らませてみせると、陽は両手で挟む様に、恵流の頬を押し潰した。ぎゅっとすぼめた唇から、プーッと音を立てて空気が漏れる。
弾ける様に、恵流は笑った。

「ね、もっかいやって？」

「顔も小ちゃいから、片手でも出来る」

再び頬を膨らますと、陽は片手で恵流のほっぺたを潰した。
恵流はきゃあきゃあ言って笑った。笑い過ぎて、目尻に涙を滲ませている。

「陽もやって？」

今度は陽が思い切り頬を膨らます。
最初は片手で試みたものの潰すことが出来ず、恵流は両手で陽の頬を潰した。
同様に、プーッと空気が漏れて、恵流はまた大笑いしている。

「何この遊び」

「陽が始めたんでしょ。ああ、おかしい」

手の甲で涙を拭いながらまだ笑っている恵流を眺めながら、陽は「何がそんなに面白いんだか」と呆れた様に笑った。
しかし恵流があまりに楽しそうなので、終いにはつられて自分も楽しくなってしまう。

ふたりは、息が出来なくなるまで笑い転げていた。

十 十 十

夕食を終えて部屋に戻る頃には、外はすっかり暗くなっていた。
食後の気怠さを感じながら、ふたりは手を繋ぎ、ゆるゆると歩いている。

「そういえばさ、優馬さん達、来週引っ越しだって。昨日聞いた」

「ああ、マンション買ったって話だったよね。素敵」

「交際期間が5年もあったから、必死で頭金溜めたってさ」

「うふふ。いきなり結婚前提だもんね。プロポーズの話、思い出しちゃった」

普段の優馬からは想像もつかないけれど、何というか、不格好で朴訥とした、でもなんとも心温まるプロポーズ。

「でも、なんで5年もかかったんだろう」

「タイミングが合わなかったんだって。優馬さんの仕事の異動とか、栞さんが資格取ったりだとかで」

「色々あったんだねえ……」

恵流が感慨深気に呟いた。

つい、自分の5年間を思い起してしまう。5年前には、陽とこうして手を繋いで歩くことなど、想像もしていなかったのだ。

恵流は思わず、繋いだ手にぎゅっと力を込めた。

陽は黙って、強く握り返してくれた。

夏の始まりを感じさせる夜の風の中、ふたりはしばらくの間、無言で歩き続けた。

ふたりが工房に近づくと、倉庫のシャッターの上のライトが自動で点灯した。

神々しい月と、瑞々しい緑の樹が浮かび上がる。

「ほんとだ。夜になると、随分雰囲気が変わるんだね」

恵流はまた、シャッターの前にしゃがみ込み絵を見上げた。並んで陽も腰掛ける。

「秋になったら紅葉、冬には雪景色。春には桜吹雪になるんだよ」

「楽しみ」

季節がいくつ変わっても、こうしてふたり並んでこの絵を眺めていただけるだろうか。出来ればずっと、この先何年も、こうしてられるといいな……

絵を見上げながら、恵流はしんみりとそう考えていた。

「恵流？」

「うん？」

名前を呼ばれ隣に座る陽を振り向くと、悪戯っぽい表情で陽が聞き返してくる。

「ん？」

「え、何？」

陽から呼びかけてきたのに、わけがわからない。恵流は少し混乱して、僅かに身を引いた。

「んんー？」

陽は身を乗り出し顔を近づけてくるので、恵流はアタフタしてしまう。

「んんんー？」

……ようやくわかった。この顔。陽は私のことをからかって、楽しんでる。

「もう、何よお」

少し腹が立って、陽の肩を押し返すふりをすると、陽は突然、恵流の頭を両手でがっしと掴んだ。

「う————」

恵流の頭を引き寄せ、額と額をグリグリと擦り付けた。

「きゃああ！ちよっとお、痛いよお」

本当はそんなに痛くなかったが、わざと大げさにジタバタすると、陽はようやく手を離して笑った。

「はあ、面白かった。恵流は表情がくるくる変わるから、見てて飽きない」

.....何よ、その言い草。

朝から陽に翻弄されっぱなしで、さすがに恵流もカチンと来てしまう。

「もう、怒った。私、帰る」

「.....怒ったの？」

拗ねてそっぽを向いた恵流を覗き込む様にして、陽はほとんど挑発的とも言える眼差しで微笑みかけた。恵流は内心、歯ぎしりをしたい思いだった。

何でこの人、こんなに意地悪で.....こんなに、美しいのだろう。

陽の真っ黒な瞳は緑色に着色された光を反射して神秘的に煌めき、唇には自信に満ちた微笑みが浮かんでいる。

ああ、もう！ほんとに、頭に来る。

「.....怒った」

泣きたいような気分になって、恵流は低い声で答えた。

「ほんとに？」

「ほんとに！」

両腕で膝を抱え、陽から目を逸らして腕の上に顎を乗せる。あの目を見ちゃ、いけない。

「.....本気で？」

ついさっきまで至極ご機嫌だった、陽の声の様子が変わった。その声色は心許な気で、不安を帯びていた。

思わず視線を戻してしまうと、捨てられた仔犬みたいな表情の陽と目が合った。

「.....それほどって、わけじゃ、無いけど」

再び目を逸らし腕の中に鼻を埋めると、恵流は自分のつま先を見つめた。

.....負けた。完敗だ。

陽の大きな手が、恵流の頭を優しく撫でる。

「荷物持ってくるから、ここで待ってて」

目だけ横を向いて表情を窺うと、陽は零れる様に笑ってみせた。

人のことを楽しそうにからかうくせに、ちょっと怒ってみせたらあんな仔犬みたいな顔するなんて。あげく、何も無かったみたいに笑うんだ。

階段を駆け上がって行く足音を聞きながら、恵流は完全に腕の中に顔を埋め、呟いた。

.....やっぱりあの人、絶対に、ズルいと思う。

恵流ちゃんの、長い一日でした。

「ねえ、アヤさあん……なんか私、振り回されてばかりな気がするんだ」

「ほー」

翌日、恵流は例の如く、バイトの休み時間を利用してアヤに相談を持ちかけていた。

従業員用の駐輪場。彼女達はいつも、同僚の行き交う事務所となりの休憩室より、駐輪場脇の自販機の横にあるベンチで一服するのが好んだ。

「私ばかり翻弄されてるっていうか……」

「へー」

「手の上で転がされてるっていうか……」

さほど興味無さげに聞き流していたアヤだったが、不意に吹き出した。顎に垂れたカフェオレの雫を拭き取りながら、軽く去なす。

「何言ってるのよ。転がされてるとか、無い無い。あの子、そこまで考えてないって」

「えー、そうかなあ」

恵流は少し口を尖らせ、不服げな様子だ。

「あんな絵画バカ、そんなに頭回らないわよ」

「絵画バカあ?! ちょっとお、そんな言い方……」

アヤは片手を挙げ、恵流を遮った。

「ごめんどめんど。今のは言い過ぎた。でもさ、ショップで取り寄せたワシミミズクと、何分も睨み合ってる様な奴よ?」

何それ、と怪訝な顔をする恵流に、アヤは笑いを堪えながら先日あったことを説明した。

* * *

不審な客が居るとの通報あり、とアヤのインカムに連絡が入ったのは、数日前の夜。あと30分ちょっとで閉店という頃だった。

アヤの担当しているペットショップコーナーに、険しい顔のまま数分間も微動だにせず立ち尽くす男が居る、と。

バックヤードでの品出しを中断し急いで駆けつけてみれば、そこに居たのは大月陽だった。安心感から若干脱力しながら、背後から仕事モードの声を掛ける。

「お客様、申し訳ございませんが、こちらは特別にお取り寄せした商品でして、売約済みで……」

陽は無反応でワシミミズクを睨みつけている。

「あの、お客様？」

……どうやら、全く聞こえていないらしい。

「ちょっと、大月くん」

背中を強めに叩くと、陽は「うおっ」と声を上げ首をすくめ、腰を抜かす勢いで驚いた様子を見せた。

「あああ、アヤさん。びっくりしたあ。脅かさないで下さいよ」

「それはコッチのセリフだから。不審な男が居るって、お客さんから通報されてたのよ？」

少しの間キョトンとしていたが、陽は驚いて目を見開いた。

「不審な男って、もしかして、俺？」

「他に誰が居るのよ……特別仕入れの子の前に陣取って何分間も睨み合いしてたら、そりゃ、不審がられるわよ」

「何分も？ そんなに経ってたか……いや、あの、珍しくて見蕩れちゃって。スンマセンでした」

呆れ顔のアヤに向かい、陽は素直に頭を下げた。

* * *

「あれ、絶対頭の中で絵を描いてたわ。右手の指がモゾモゾ動いてたのを、私は見逃さなかった」

若干得意気な表情で、アヤは断言した。

「しかも、肝心の買い物忘れてて、その後上までダッシュよ。勢い余ってサンダル片方脱げてたし。シンデレラかつーの」

「し……シンデレラ」

笑っては陽に悪いと思っているのだろうか、俯いて肩を震わせている恵流に、アヤは力強く太鼓判を押した。

「私が断言する。絵のことになると何もかも全部すっ飛ばしちゃう様なあの男に、意図して人をどうこうする才覚など、無い」

「そう……か。言われてみれば、そうかも」

「そう。ヤツは、本能のままに動いているだけだと思う。いわゆる天然さん」

ま、それが一番手強いんだけどね……口には出さず、アヤは心の中で呟いた。

「まあまあ、天然同士、お似合いじゃないですか」

「アヤさん？ ……私は、天然じゃないよ？」

いかにも心外と言わんばかりの恵流に、アヤは思わず口籠った。

「あー……えっとお」

恵流はムキになって言い募る。

「だって私、しっかりしてる、って、よく言われるもん」

「誰によ」

「.....あの、うちのおばあちゃんとか.....」

堪えきれず、アヤは大きく吹き出した。

「お、おばあ.....ちゃ.....身内.....ちょう身内.....世界で一番甘いもの、それは祖父母から孫への評価.....」

笑い過ぎて咽せながら、アヤは自分の膝をバンバン叩いている。

「そんなに笑わなくても。あ、あと、店長にも言われたよ！ 見かけよりしっかりしてるって」

アヤはハァハァと大きく息をつき、涙を拭った。片手で腹を擦っている。

「あー、お腹痛い。そうね。"見かけよりは"ね。でもね、残念ながら、仕事出来るイコール天然じゃない、ってことでは無いからね」

「そうかなあ？」

「大月くんは絵の才能があるけど、ド天然。でしょ？」

「うん.....」

あ、と閃いた様に恵流は膝を打った。

「陽は、天然じゃなくて、天才なんじゃないかな！」

大発見をしたかの様な興奮した面持ちで、恵流は身を乗り出した。

「よく言うじゃない？ 天才とバカは紙一重、って」

「目えキラキラさせてひとり盛り上がってる所悪いけど、あんたサラッと失礼なこと.....しかも微妙に間違ってる」

「あ、メール。陽からだ！」

聞いてないし.....アヤは思わずため息をついた。やれやれ。

「どうしたんだろ。メール嫌いなのに、珍しい」

スマホを握りしめて目顔で訊ねる恵流に、アヤはどうぞどうぞと仕草で返し、少し温くなったカフェオレを飲んだ。唇がまだ少し、笑いの名残でヒクヒクしている。

「もしもし、陽？ メール見たよ……うん。裏の駐車場。うん、わかった」

通話を終えた恵流は、またスマホを両手で掴んでいる。

「アヤさん……陽、ホームセンに来てるって。今からこっち来るって。どうしよ、なんか怖い」

「怖いって、何で」

「だって、休憩時間狙ってわざわざ来るなんて、初めてだし」

「あのさあ」

アヤは立ち上がると、ベンチに座る恵流の前に回り込み、しゃがんだ。

「さっきの話から察するに、あの後何かあったんでしょ？」

「う……あったというか、私の気のせいだったかも」

「気のせいだか取り越し苦労だか知らないけど。大月くん、恵流の様子見に来たんじゃないの？ ほら、昨日の『凱旋パレード』の件もあったし」

「え……」

アヤは立ち上がると、うんしょ、と腰を伸ばした。

「あんたは片思い期間が長かったから、ごちゃごちゃ考えちゃうのは仕方ないかもしれないけど。もし、不安に思うことがあるなら、ちゃんと本人に話しなさい。ね？」

「……うん」

自信なさげに呟いた恵流だったが、小さく頷くと、ちゃんとアヤの目を見上げた。

「わかった。アヤさん、いつもありがと」

「いいから。あんた達のゴチャゴチャなんて、おままごとみたいなもんだし」

「あー、出た。大人発言」

唇を尖らせた恵流に、アヤはニーツと歯を見せて笑った。

「バツイチ女の経験値、舐めんな」

「あれ？アヤさんは？」

走って来たのか、若干息が上がっている。

「ん、先に戻った」

「なんだ。アヤさんの分も買って来たのに」

陽は恵流の隣にドサッと腰掛け、額に光る汗を腕で拭った。

「表で屋台出てたから。ハイこれ」

「.....ありがと。いただきます」

白い紙袋の中から取り出された、小さな包み。

まだほんのりと温かいワッフルからは、はちみつの香りがする。

「あのさ、みんなに何か言われた？その.....からかわれたりとか」

明後日の方を向きながら陽がそう聞いたのは、恵流がワッフルを半分ほど食べ終えた時だった。

やっぱり.....アヤさんの言った通り、心配して来てくれたのかな.....

「ううん。からかわれたりは、無かった。良かったねって言ってくれた子は居たけど」

「そっか」

陽は安心した様に、残ったひとかけらを口に放り込むと、紙袋から残ったワッフルを取り出し2つに割った。

「はい、半分こ」

にっこり笑って、恵流に大きい方を差し出した。

陽くん、酷い言われ様。

そしてアヤさん、バツイチでした。

陽と優馬のお買い物

「よーう！ ひっさしぶりい」

優馬の声とともに、いきなり後ろからスパーンと頭を叩かれた。

「いって。何で叩くんだよ」

「いやー、珍しくお前の方からお誘いがかかったからさ」

「答えになってないし」

「いいから、行こうぜ。ここ暑いわ」

ふたりは連れ立って駅の構内へ入った。冷房が効いているわけではないが、8月頭の強い陽射しが遮られているだけで、少しは涼しく感じられる。

「恵流ちゃん、元気？」

「うん。今はハンクラフェスの準備で忙しそうだけどね」

「今月末だっけ？ あと1ヶ月無いじゃん。手伝わなくていいのか？」

「そう言ったんだけどさ。いずれは3人で店を出すから、って。自分らだけでやってみるって」

へーえ、しっかりしてんだな.....優馬は感心した様に呟いた。

ふたりはぶらぶらと歩きながら改札へ向かう。

「で、どこ行くん？ 買い物って何？」

「決めてない。結婚式で着る服買いたいんだけど、店とか知らなくて。優馬さんに教えてもらおうと思ってさ」

「何だよ」

優馬が足を止めた。

「俺らの結婚式の？」

「そう。二十歳の時に買ったスーツ、サイズ合わなくなってた。靴も」

ああ.....と、優馬は額に手を当てた。

「そういえばお前、いつもだらけた服着てるけど、スーツとか持ってないの？」

「襟とかベルトとかが苦手なんだよ。窮屈で」

その言葉の通り、着古したボルドー色の半袖ヘンリーネックシャツで、首元のボタンを2つ開けている。下は淡いカーキのハーフパンツ、足元は素足に革のサンダルといった出で立ちだ。

「ベルトも嫌いとか。野生児か」

「ベルトもゴムも嫌い。紐で縛るヤツしか買わない」

「.....もういい。お前は裸で歩け」

「捕まらないならそうしてる」

はあ.....とため息をつき、優馬は改札に背を向けた。

「買い物は後。俺のスーツ貸してやるわ。ちょっと丈詰めればイケんだろ」

「え、マジで？ いいんすか」

ふたりは駅を出て、強い陽射しの中を優馬の新居へと歩き出した。

十 十 十

「これか、これあたりどうよ？」

「んー.....なんか、魚みたい」

クーラーの気持ちよい冷気の中、優馬が掲げているのは、光沢のあるシルバークレーのスーツだ

。

もう一方の手には、青味がかかった黒のフォーマルスーツを持っている。

「礼服なんてのは、大体こういうもんなんだよ.....ん、お前はやっぱこっちだわ」

淡い緑色のソファに座っている陽に、シルバークレーのスーツを押し付ける。

「サイズ見るから着てみろ」

「あい」

ゴソゴソと着替え始めた陽を他所に、優馬は寝室へ戻りクローゼットを開けた。寝室の隅にはまだ荷解きを終わっていない段ボールが3つほど重ねられているが、優馬の衣類は全てクローゼットに納まっていた。栞が最優先で片付けてくれたのだ。

いくつかのネクタイとポケットチーフを選び出す。
タイピンとカフスは、なるべくシンプルなデザインの物にした。

リビングへ戻ると、陽は既に着替えを終わっていた。何やら窮屈そうに腕を回したり、Tシャツの上に羽織った上着の裾を引っ張ったりしている。

「優馬さん、なんかごめん。サイズぴったりみたい」

「……お前、ヤな奴だな」

陽は片方だけ口角を上げ、ニヤリとしてみせた。

「俺の方が10センチ近く低いのに、丈詰めの必要無くて、なんかごめん」

「わざわざ言い直さなくていいんだよ！……お前、マジでヤな奴な」

大げさに眉をしかめてみせながら、優馬は手にしていたネクタイをソファの背に並べた。

「どれがいい？」

「白じゃなくていいの？」

「ああ。結婚式っても、来るのは友人とか仕事仲間とかだし、知り合いのレストラン借り切ったのパーティーだからさ。『軽装でお越してください』ってやつだよ。昼間だし、こんぐらい遊んでてもいいだろ」

陽が選んだのは、青みの強い紫色の地に淡いグレーの細かい千鳥格子柄のネクタイだ。優馬は淡いグレーのポケットチーフをさっと畳み、ジャケットの胸ポケットに差し入れた。

「よし、オッケ。脱げ。……っと、それだけサイズ合ってれば、シャツもいけるよな」

選ばれなかったネクタイやスーツを掴むと、優馬はまた寝室へ戻った。数分後、再びリビングへやって来た時には、袋に入ったままの白いドレスシャツを手にしていた。ハンガーにかかったスーツをジッパーつきのカバーに手早く仕舞い、大きな紙袋に入れる。シャツや小物類も一緒に入れると、陽に手渡した。

「あのさ、シャツ、べつに新品じゃなくても」

「いいんだよ。出来るビジネスマンは、新品のシャツの4～5枚は常備しているのです……あとは、靴か」

優馬はテーブルの上のスマホを取ると、何やら操作し始めた。

「ちょっと知り合いの靴屋に電話するわ。あ、何か飲むか？」

陽の返事を待たず、優馬はキッチンへ向かった。

ピカピカのキッチンカウンターを回って冷蔵庫へ辿り着く。

通話しながら冷蔵庫を開けると、バドワイザーの缶を取りカウンター越しに陽に放り投げる。もう一本を自分用に取り出し、器用に片手で栓を開けた。

† † †

「何から何まで、すみません。ありがとうございました」

「お、何よ。殊勝じゃん」

「まあ、ここまでしてもらおうと流石にね。カッコイイ靴も安くしてもらえたし」

ふたりは優馬の行きつけのラーメン屋のカウンターに並んで座っていた。

陽がビールの大瓶を持って優馬にすすめると、「おう」とコップを差し出す。

ビールが注がれると、今度は優馬が瓶を手にし、陽にすすめる。

「あ、俺ちょっとでいい。昼間飲んだから」

「飲んだっつっても、バドじゃん」

「ビールより、チャーハン追加したい。腹減った」

カウンターの向こうの店主に追加注文すると、「はいよー」と威勢の良い声が帰ってきた。

やがてふたりの前にラーメンとギョウザが運ばれた。

「それにしても、この暑いのにラーメンとか」

「ばーかお前ね、それが良いんだろうが。暑い中、汗だくで食うのが醍醐味なんだよ」

勢い良く箸を割り、「いっただっきまーす」と手を合わせる優馬だったが、陽にはわかっていた。

「色々世話になったお礼に、今日の夕飯は自分が払う」と強引に言い張ったので、優馬はリーズナブルなこの店を選んだのだろうと思う。

「あ、美味しい」

「だろ？ ギョウザも美味いんだよ、ここ」

優馬は焼きたてのギョウザをひとつ口に放り込むと、案の定、舌を焼いた。涙目でホフホフ言っている。

「落ち着いて」

陽は口元をヒクヒクさせて笑いを堪えながら、優馬のコップにビールを注いだ。

優馬さん、着道楽です。

花火大会

昼のうちから、時おりポンポンと花火の音が鳴り響いていた。今夜開催される大きな花火大会の合図の空砲だ。

8月最後の日曜、恵流が出展しているハンクラフェスの最終日。最終日は午後5時半に終わるということで、花火大会の始まる7時には間に合うだろうという話だった。

陽はといえば、ホームセンの催し物「夏休みの宿題を終わらせよう」のお絵描き指導に駆り出され、臨時バイトを終えて戻って来たところだ。

夕方の蝉の声の中、駅から少し離れたところにある自転車置き場に自転車を止め、陽はぶらぶらと改札口へ向かっている。

毎年恒例の花火大会なので、これからの時間帯は街に人が溢れかえるのを知っていたため、だいぶ早めに出て来たのだ。ここへ来る道すがら、駅前の大通りでは早くも渋滞が始まっていた。

既に大勢の見物客が大会会場の河川敷へと向かって歩いている。流れに逆らい人混みを縫って改札まで辿り着くと、陽はその向かいのガードレールに腰を降ろした。携帯を取り出して時間を見ると、16時50分。

ちょうどその時、恵流から電話がかかってきた。もしかしたら少し遅れるかも、と言うので、実際に花火が上がり始めるのは17時15分ぐらいからであることを伝える。開会宣言やら市長の挨拶やらで、結局毎年そのくらいの時間になるのだ。

「まだ時間あるから、ゆっくりおいで。焦って転ぶなよ」

電話を切ってポケットにしまうと、陽は空を見上げた。真夏の空は、昼間の抜けるような青から、ピンクとオレンジのグラデーションを描いている。もう少し経てば、オレンジから赤へと変わり、さらには暗い青色に染まって行くだろう。斑模様の小さな白い月が銀色の光を帯び始めている。

陽は、数メートル横の街路樹の側へと移動した。先ほどと同じくガードレールに腰掛けると、時おり吹く涼しい夕暮れの風の中、木の葉越しに刻

々と色を変える夕空を楽しんだ。

「陽！」

無心で夕空を眺めていた陽は、恵流の声に我に返った。
改札を抜け小走りでやって来る恵流に、目を見開く。

「お待たせ。特急に乗れたから、なんとか遅れずに済んだよ」

陽は腰掛けていたガードレールからゆらりと立ち上がり、薄く口を開いたまま言葉も無く恵流を見つめた。

「あの、これ、変じゃないかな。せっかく花火大会だからね、途中で着替えて来たの」
恵流は浴衣の袖口をヒラヒラさせてみせる。

紫や藍色、瑠璃色、藤色など青系の桔梗の花が折り重なる様に散りばめられた、涼しげな浴衣。
所々に白や淡い桃色の桔梗も混じり、アクセントになっていた。

帯は赤みの強い紫色、もしくは青みの強い紅色だろうか。黄緑色やピンク、パールのビーズで出来たアクセサリーが留められ、可愛らしく揺れている。
足元は濃茶色の木目が見える下駄に帯と同色の鼻緒。つま先には控えめなペディキュア。

「……陽？ えっと、やっぱりどっかおかしいかな。急いで着替えたから」
「いや……」

陽はハッとした様に顔を上げ、どこか放心した様子で首を振った。

「すごい。すごい可愛い。滅茶苦茶綺麗。ちょう似合ってる」
「良かったあ。ありがと」

恵流は安心した様に笑い、くるりと回ってみせた。

「頑張って縫った甲斐がありました」
「あ、あの時のか。ワッサーイのやつ」

「うふふ。そうそう。ついでに、巾着と帯飾りも作っちゃった」

陽は恵流の周りをウロウロしながら真剣な眼差しで眺めまわしている。

「俺、花火大会とかどっちでも良くなっちゃったんだけど……」

クロッキー帳持ってくれば良かったな……コンビニ……などと呟きながら、陽は少し離れた場所から眺めようと、するどい視線を恵流から外さぬまま後ずさりしていく。

「陽。わたし、花火大会、すごく、楽しみにしてたの」

ひとつずつ区切って強調するような恵流の口調に陽はハタと立ち止まり、慌てて戻って来た。

「ごめん。そうだね。そうだよ。うん、行こう」

「その前に、これ、コインロッカーに預けたいんだけど」

恵流は手に持っていた大きな紙袋を見せた。洋服や鞆が入っている。

「俺、行ってくる。ここで待ってて」

そう言い置くと、陽は恵流の手から紙袋をもぎ取り、一目散に駅構内に駆けて行った。

恵流は呆気にとられて見送っていたが、やがて忍び笑いを漏らした。私が機嫌を損ねたとでも思ったのだろうか。

そして、前にアヤが言った「絵画バカ」という言葉を思い出し、笑いを噛み殺した。

走って戻って来た陽は、コインロッカーの鍵をチャラチャラと鳴らすと、膝丈のカーゴパンツのポケットにしまった。

「お待たせ。行こっか」

恵流は陽の差し伸べた手を取り、ふたりは歩き出した。辺りはうっすらと暗くなり始めていた。

「それにしても女の子って、何でもこうも雰囲気変わるんだろうね」

手を繋いで歩きながら、陽はまだ感心した面持ちで恵流を眺めている。

「そう言われても……髪型のせいもあるかな？ 普段あんまりアップにしないし」

「そっか。そういえば初めて見たかも」

陽は歩きながら、恵流の髪型をしげしげと観察した。

「なんか、複雑なことになってる」

普段は肩につくかつかないかのショートボブを編み込んでまとめ、左耳の下には大ぶりの白い花飾りを着けてある。

「もう、ちゃんと前見て歩いて下さい」

「恵流が見てたらいいよ。俺は恵流を見てるから」

恵流の頬がカアッと熱くなった。

赤くなってるかな。暗くて見えなきゃいいけど……

「そんなにジロジロ見られたら、恥ずかしいの！」

小さな声でそう言ってそっぽを向く恵流を、陽はわざと覗き込む。

「見られるのが嫌なら、そんな格好しないで下さい」

「じゃあ、もう着ない。浴衣なんて二度と着ない」

「それは困る」

「知らないもん」

恵流はツンと顎を上げた。

「わかった。じゃあ、恵流の言うとおりに、もう見ないし誉めない。二度と」

「……それは駄目」

肩をコツンとぶつけて来た恵流に、陽はわざと困った顔をしてみせる。

「難しいな」

角を曲がると、土手が見えて来た。その土手を越えれば、会場の河川敷だ。屋台がたくさん並び、辺りには美味しそうな香りが漂っている。

「あのさ、チラ見ならいい？」

どうしても見たらしい陽に、恵流は吹き出してしまう。

「……いいよ」

「やった」

陽は小さくガッツポーズをした。

「ひいては恵流さん。折り入って、お願いがあるのですが」

「……なんか、わかった気がする」

「えー、お察しのとおり、デッサンを……」

「やっぱり」

「花火大会終わってからでいいから」

「当然です……ギャラ、高いからね？」

「う……いかほどでしょう」

んー……と唸りながら、恵流は辺りを見回した。

「あれ。あんず飴」

フッ……と吹き出しつつ、陽はなんとか真面目な声を出した。

「了解しました。10個買います」

「1個でいいです」

「じゃあ、他のもの。焼き鳥もフランクフルトもおつけしますので……」

「それ、陽が食べたいやつでしょ」

「あ、バレた」

「私はたこ焼きがいいです」

「了解。契約完了、というわけで……………」

恵流を見下ろし、陽は片方の眉を上げニカッと笑って宣言した。

「デッサンのときは、思いっきりガン見します」

花火大会が始まる前の、ざわざわした高揚感が好きです。

あと、男性の浴衣姿も好きです。みんなもっと着ればいいのに。

花火の後

「よし、そろそろ帰ろう」

え、と恵流は声を上げた。

「もう終わりなの？ みんなまだ見てるよ？」

陽は立ち上がり、恵流の両手を引っ張り上げた。

「たぶん次で最後だから、見ながら帰ろ。終わってから帰ると、道がかなり混むから危ないんだ」

屋台で買った食べ物の残骸を手早くまとめビニール袋に入れる。恵流は扇子を広げ、細々と立ち働く陽を扇いであげている。

陽はレジャーシートを畳むと、カーゴパンツのポケットにしまった。

「そのパンツ、何でも入ってるね。魔法みたい」

「人の服を四次元ポケットみたいに。でも、ほんとにそうならいいんだけどな」

「絵の道具入れるんでしょ？」

「当然。あ、恵流の手芸道具も入れてあげるよ」

「わーい、ありがと」

花火の煙、屋台から漂う香ばしい香り、そして河川敷の瑞々しい草の薫り。夏の夜の匂いだ。夜空を見上げている観客達の中を、手を繋いでゆっくり歩きながら、ふたりは次の花火が上がるのを待っている。

「1時間なんて、あっという間だったね」

「12,000発だっけ。久々に来たけど、いいね。来年もまた来よう」

「うん」

「恵流は浴衣着用ね」

恵流が手にしていた扇子で陽を叩く真似をした時、ボンッと音がした。

「お、フィナーレ始まった」

超特大の花火が、花開いた。

続けざまに何発もの花火が打ち上げられ、全身に響く轟音と共に眩いほどの光の粒が空を覆う。観客達は今日一番の歓声を上げた。

ちょうど河川敷から道路に出たところで、ふたりは立ち止まり空を見上げている。

「すごい……」

空一杯に咲いた花火はキラキラと尾を引いて消えて行く。かと思うとそのそばから、これでもかという程に次々と打ち上がる。

風のない空に真っ白な煙を漂わせながら、視界を覆い尽くす程の光の花々が咲き乱れる。その迫力は凄まじいとさえ言えるものだった。

数分間に渡る打ち上げの後、パチパチと音を立てながら最後の光が消えると、どこからともなく拍手がわき起こった。

もちろん、ふたりも例外ではなく、笑い合いながら心からの拍手を送る。

「なんか、凄過ぎて笑える」

「うん。ちょっと怖いぐらいだったね」

帰り支度を始める観客を残し、ふたりは一足早く帰路に着く。

「恵流、足痛くない？」

「うん、今のところ大丈夫。だいぶ慣らしてから履いてきたから」

遠くで鳴っている大会終了の空砲を背中で聞きながら、ふたりは駅へ向かった。

† † †

「ちょっと蒸すな。昼間、ずっと閉め切ってたから……」

部屋に入ると、陽はすぐさまクーラーを点け扇風機を回した。

「陽？ あのね、下駄で草むら歩いたから、少し足が汚れたかもしれないんだけど……」

恵流が玄関先でもじもじしている。

「ああ、別にかまわないけど。気になるなら、シャワー室使って」

椅子を出しイーゼルをセットしながら、陽は部屋の突き当たりのドアを指し示した。

「電気はドアの横。入ってすぐに洗面台、突き当たりがシャワー室。右のドアがトイレね」

「……お邪魔します」

恵流は下駄を脱ぎ、つま先立ちで部屋に入った。鼻緒で擦れたせい、左足の親指の付け根だけ、少し痛む。

陽がクロッキー帳とスケッチブックを引っ張りだしている棚に、描きかけの油絵が立てかけてあった。

「あ、すごい。もう出来てる」

「んー？ ああ、これね」

陽は、寄り添って立つ優馬と栞を描いた絵を見遣った。

彼らは共に微笑みを浮かべ、互いに相手の方へ首を少し傾けている様子が仲睦まじく感じられる。

「すごーい。綺麗だし、ふたりとも最高に幸せそう」

恵流は絵の側まで来て屈むと、作業台の下に置いてある造花の入った袋に手を伸ばした。実際に絵にあてがって、バランスを見てみたくなったのだ。

「恵流、それは後で」

「あ、そっか」

促されて立ち上がり、再び足早に突き当たりのドアへ向かう。

「あとは乾燥させて、ニス掛けしたら終わり。その後は恵流の出番だから。あ、タオルは洗濯機の横のラックにあるやつ使って」

「うん。わかった」

ドアを開け電気を点けると、正面に細い姿見がかかっており、恵流は突然映し出された自分の姿

に少し驚いた。

姿見の右にはシンプルな洗面台。その奥には古びた二層式の洗濯機。移動式のワイヤーラックの上段には畳んで積まれたタオルが、その下には洗濯洗剤やシャンプーの類いが並んでいる。

洗面台の鏡を見ながら少し髪を直し、化粧崩れをチェックすると、シャワー室のドアを開けた。

† † †

「シャワーとタオル、お借りしました。ありがとう」

「どういたしまして。恵流、ここ」

作業台の上に積まれた雑多な道具が一方に寄せられ、半分近く空いた空いたスペースには、氷の浮かんだ麦茶のグラス。

作業台の傍らには、いつも陽が絵を描く時に使う丸椅子が置かれている。

部屋の反対の壁近くにダイニングセットが移動されており、クロッキー帳とスケッチブック、水彩絵の具が準備されていた。

軽く足をすすいで来た恵流に、陽は早速立ち位置を示した。

恵流は作業台の斜め手前、窓の正面に位置する場所に立った。

「最初は立ってて。疲れたら言ってね」

「えっと……どうしてたらないの？」

そうだな……と呟きながら、陽は恵流の右手を取り作業台の淵へ指先を置き、左の手は自然に身体の脇へ垂らすポーズをとらせた。身体の向きは正面より若干右へ傾ける。

「よし、そのまま」

少し離れて置かれたスツールの上のクロッキー帳を取り浅く腰掛けると、陽は描き始めた。

サッ、サッ……と、柔らかい鉛筆が紙の上を走る音が聞こえる。

大きく手を動かし、手首のスナップを使って大まかなシルエットを描いているのがわかった。

「……シャワー室って、ほんとにシャワーだけなんだね」

慣れないモデル業が照れくさくて、恵流は何か話さずに居られない。

「ん？ ああ、うん……前に住んでた先輩達は、近所の銭湯に行ったりしてたみたい。俺はシャワーだけで充分だけど」

「ふうん……」

陽が真剣に描いているので、あまり話し掛けては悪いかな、とは思う。

が、やはり沈黙に耐えられず、恵流は次の話題を探す。

「あ、テレビ無いんだね。この前来た時には気付かなかったけど」

「……ああ、どうせ見ないし。だいぶ前に捨てた」

鉛筆を握った手に器用に握り込んだ消しゴムを使い、陽はデッサンに修正を加えている。

「ゲーム機もパソコンも無いんだ。本とかは……あ。あれ、画集かな？」

恵流は少し首を伸ばし、棚に並んだ本を覗いた。

「うん。辞書と図鑑と画集、あと写真集とか資料集ぐらいかな。恵流、動かないで。あと、ちょっと静かに」

「う……ごめん」

部屋の中には再び、サッ、サッという鉛筆の音だけとなった。蝉ももう鳴いていない。

程なくして、陽が立ち上がった。

「恵流、今度は後ろ向き。さっきと同じポーズね」

つつかかと歩み寄りながらクロッキー帳を脇に挟み、手早くポーズをとらせ向きを調節する。

「大丈夫？ 疲れてない？ 麦茶飲む？」

「.....疲れてはいないけど、ちょっと飲みたい」

手を伸ばしかけた恵流を制し、陽は鉛筆を耳に挟むと空いた右手でグラスを掴んだ。

「はい、飲んで」

有無を言わさぬ口調で恵流の口元にグラスを運び、少しずつ飲ませる。

「.....飲んだ？ もういいの？」

恵流が瞬きでなんとか合図すると、陽はグラスを置いた。

「よし、じゃあ続き.....って、これ、どうなってんだ？」

陽は結んだ帯に顔を近づけ、眉根を寄せて観察し始めた。

「えっと、これは『蝶結び』っていう基本的な結び方で.....」

「恵流、ごめん。やっぱここ座って」

丸椅子を恵流の後ろへ置いて座らせると、陽は耳に挟んだ鉛筆を取ってまた描き始める。恵流の説明は耳に入っていないらしかった。

結構難しいな.....と呟きながら、陽は足を大きく広げ腰を落とした姿勢で一心不乱に帯をデッサンしている。

その音を背中で聞きながら、恵流はようやく思い至った。

(どうせ椅子に座ることになるなら、さっき、自分で麦茶飲んで良かったんじゃない.....?)

.....まあ、別にいいけど.....

恵流はそろーっと手を伸ばし、もうひとくち、麦茶を飲んだ。

そういえば、このへん書いてたのがちょうど花火大会の頃だったなあ。去年の。

鉛筆が紙の上を滑る音が続く。

陽は帯の形を描き続けているが、背を向けているせいで陽の視線を感じなくて済む分、恵流は先ほどよりリラックスしていた。

今までは気付かなかったが、エアコンの微かな稼働音や冷蔵庫の唸る音が時おり聞こえる。

暇なので、恵流は作業台の上の絵の具や絵筆類を眺めていた。

「んー……オッケ。もっかい立って」

小さく唸り、陽は恵流を再び立たせ先ほどと同じポーズを取らせた。

部屋を横切ってスツールへ戻り、手早く後ろ姿全体を描き始める。

ザッと数分でデッサンを終えた陽が事も無げに言い放った言葉に、恵流は驚いて振り向いた。

「よし。恵流、帯取って」

「……え？」

「自分で着付けしたって言ってたよね？ ちょっと、構造を見たいんだけど」

(いやいやいやあのでも……！！)

恵流は一瞬言葉を失った。

「いやあの、だって……今、描いたよね？」

「構造がわからないと、見たままにしか描けない。構造がわかれば、想像して他の角度からも描ける」

「……それ、前にも言ってたけど……」

「そ。大友先生から何度も言われた」

大友先生、というのは、陽の所属していた高校の美術部顧問の教師だ。

恵流は陽がその教師をととても慕っていたことを知っていた。

「でも、あの……」

「ゆっくりね。過程がわかるように」

陽はスツールを恵流の側へ移動させながら、容赦無く言いつける。

諦めた様に、恵流は帯飾りを外して作業台の隅に置いた。

「まず、結び目を前に持って来ます」

「うん」

恵流は帯を掴んでぐるりと半回転させると、半分の幅に折って挟み込んだ帯の端を引っ張り出し、挟んであったハンカチを取り出した。

「え、何それ。どっから出て来た」

「これは滑り止め代わり。帯の間に挟んであったの」

恵流はハンカチを作業台に置くと、蝶結びの中央の一巻きを緩めた。

「これ外すと、分解しちゃうんだけど……」

「続けて」

巻いてあった分を肩に掛け、蝶結びの羽根の部分を手で慣らして見せる。

「あ、これ折ってあるだけなんだ」

「そう。折って、こうしてひだを取って、これで巻くの。で、形を整える」

「ちょっと待った」

帯の巻きだたみとひだの取り方を、手早くスケッチする。

「……わかった。で？」

で？ ……じゃないよ。もう……

「帯はこれで終わり。この、ぎゅって結んであるとこ解いたら、落ちちゃう」

陽は黙ったまま恵流に向かって鉛筆を振り、次の工程に移るよう指示した。

「帯外すと、けっこうカッコ悪いんだけど……」

「……構造がわからないとおー」

ため息をつき、恵流はしぶしぶ結び目を解く。帯がパラリと緩み、バサッと音を立てて床に落ちた。

「あ、またなんか出て来た」

陽はスツールを降りると、落ちた帯の隙間から転がり出たものを拾う。

「それは帯板。帯の正面のお腹のところが綺麗に平らになる様に、挟むの」

「なるほど……で、それは？」

「これは、伊達締め。浴衣の仮留めかな」

「へえ、それは後ろ前にしないんだ」

陽は再び座り直し、またも鉛筆を振るだけの動作で恵流を促した。

恵流は伊達締めの紐を外す。

「待った。今のそれ、どうやって結んでた？」

外した紐を再びからげ、紐の端を内側へたくしこむ。

「おっけ、憶えた。次」

「……あの、陽？ ちょっとくらい手伝ってくれても……」

中には浴衣用のキャミワンピースを着ているものの、徐々に無防備な姿になっていくのが恥ずかしくて、その必要も無いのに弱々しい抗議を試みる。

「無理。両手塞がってるから」

陽は座ったまま、クロッキー帳と鉛筆を持った両手を上げた。

目元にはあのからかうような光が浮かび、殊更につこり笑ってみせる。

(出た.....大月陽、悪魔バージョンの降臨だ.....)

恵流はノロノロと、再び伊達締めの紐を外した。

お絵かきモードになった陽くん、誰にも止められません。

「……で、裾の位置を決めたら、この腰紐で縛って固定して、こうして……おはしよりを整えるの」

「それが、最後の部品？」

部品って……内心、クスッと笑いながらも恵流は頷いた。

「うん……あ、中のキャミの下に、タオル巻いてるけど。ウエストがブカブカだとカッコ悪いから、補正のためにね」

タオル？ と不思議そうに首を傾げていた陽は、納得顔で頷く。

「じゃあ、それも取って」

陽は鉛筆の尻で指し示した。

「腰紐？ でも、もう浴衣の構造はわかったでしょ？」

「いいから」

鉛筆の先でトントンとスケッチブックを叩き、恵流を急かす。

紐の端を探るふりをしながら、恵流は俯いてこっそり嘆息した。

(かなり恥ずかしいんですけど……)

シュル、と紐を解くと、おはしよりでたくし上げていた裾が落ちて床に広がった。

前の合わせがはだけない様、恵流は両手で襟元を押さえる。

「よし、思った通り」

陽はスツールから飛び降りると、恵流の横をすり抜けて窓へ向かい大きく開け放つと、身を乗り出した。

「完璧」

嬉しそうに急ぎ足で戻ると、リモコンを手に取りエアコンを切る。そして、部屋の電気を消した。

恵流は身動きもできず、目で陽の動きを追うだけだ。

陽は床に胡座をかいて座り、窓から見える月の位置を確認した。

かと思うと、飛び跳ねる様に立ち上がって大きな歩幅で部屋を横切り、作業台を動かし始めた。

こういう時の陽は、身体の中から湧き上がる力に突き動かされているかの様な躍動感に満ちている。目には見えないものの、すぐ側に寄れば触れる事が出来そうな程の何かを発するのだ。

「ちょっと待ってて」

戸惑いの表情を浮かべ陽の作業を見守っている恵流にそう言いおいて部屋を出ると、すぐに小さな格子棚と薄いクッションを持って戻って来た。

窓の側に棚を配置し、側にクッションを置く。

「ここに座って、月を眺めてて。そう、いいね。そんな感じ」

恵流は初め、クッションの上に正座した。が、すぐに思い直して足を崩し、横座りに座り直した。

陽は恵流の浴衣の裾を、波立たせる様に効果的に広げた。十二単を着て座っている姿に似せたものだ。

「少し時間かかるから、楽な姿勢にして。その棚に寄りかかってていいから」

陽は作業台の上のグラスを恵流の前に置くと、スツールに戻る。

スケッチブックを取り上げ、再び床に胡座をかいて座った。

「この棚も、先輩が作ったの？」

「んー、多分。そんなのが物置にいくつもあるから、どれがどれやら」

最も楽そうな姿勢を探し当てるのに、少し時間がかかる。

恵流は、陽が作った裾の波を壊さぬよう気をつけながら、少しだけ身体の向きを調整した。

「なんで棚ばかりあるの？」

「……色々作っただけ、気に入ったものは引っ越し先に持って行ったり人にあげたりするんだよ。だから、基礎練習で作った棚ばかりが残る」

陽は早くも、大まかな配置を描き入れている。窓枠と棚、そして恵流のシルエット。

「……こんな感じで、良いでしょうか」

ようやく姿勢が定まったらしい。棚に右肘を預け、膝に置いた左腕と背中が見える角度で斜めに座り、恵流は首を巡らせて訊ねる。

「左手の指先だけ、棚にかけられる？その方が袖が綺麗に出る」

「……こう？」

「そうそう。疲れないかな」

「大丈夫だと思う」

少し動くだけで、月明かりが作る影の形が変わる。

恵流は改めて、月の光がこんなにも明るい事に気付かされた。

「よし、じゃあ描き始めるよ。月を見てて。疲れたら言ってね」

「はい」

ザッ、ザッ……と、鉛筆が走り始める。

クロッキー帳とは違い、スケッチブックに描く時は鉛筆の音が少し荒くなるのを、恵流は知っていた。

他の人もそうなのか、それとも陽だけの癖なのか、それはわからない。単に紙質の違いのせいなのかかもしれない。

開けた窓から、生ぬるい風が入ってくる。

エアコンを切っているが、帯を解いたからか、それほど暑くは感じない。むしろ、それまで冷えきっていた部屋に入ってきたぬるい風は、心地良いぐらいだった。

裾に隠れたつま先が暖まってきたのを感じ、恵流は初めてつま先が冷たくなっていた事に気付いた。

ザザッ、ザザッ……鉛筆の音が、心地よく耳に響く。

月明かりを浴びながら、身体がじわじわと暖まってくるのを感じる。

先ほど食事を済ませたばかりだし、ビールも少し飲んだ。帯を解いて血行が良くなったせいもあるのかもしれない。

頭がぼうっとして、ほんの一瞬、意識が遠のく。

ここ数日、ハンクラフェスの準備に追われて寝不足が続いていたのだ。

眠っちゃいけない、でも……

ザザッ、ザザッ……

迷いの無いリズムカルな鉛筆の音は、まるで催眠の導入のような効果を恵流にもたらしつつあった。

背中に感じる陽の視線が、鉛筆の音と共に身体に刻み込まれる。

そしてその度に、少しずつ少しずつ、恵流はうっとりとした眠りの淵に近づいて行く。いや、陽の視線で縛られた身体に、眠りのほうがじわじわと近づいてくるのだ。

月の明かりが少しずつ、その角度を変えて行く様に。ゆっくり、ゆっくりと。

手を繋いだ花火大会からの帰り道、高い空に見えた銀色の月は、今やうんと手を伸ばせば届きそうな程に近づいて、金色の光を煌々と放っていた。

十 十 十

「……恵流、恵流？」

呼ばれて、恵流はハッと身を起した。素早く周りを見回すと、跪いて微笑んでいる陽と目が合う

。

「ごめん。私、寝ちゃった」

頬の下に敷いていた右手が、少し痺れている。ごわごわと痺れた指で、恵流は瞼を擦った。

「大丈夫。おかげで、2ポーズ頂きました」

陽はピースサインを作り、ニッと笑った。

「ハンクラで忙しかったんだよな。無理させちゃって、ごめん」

心配するように覗き込むと、恵流の頭をそっと撫でる。

「疲れたね。ご苦労様でした」

陽の瞳に、低く輝く月が映り込み、キラキラと光をたたえている。

.....これは、どこかで見た事がある。どこだろう.....

恵流は、未だぼうっとしている頭で記憶を探る。

「.....みずうみ。夜の、湖」

思い出した瞬間、言葉が零れ出した。口がまわらず、子供の様な口調になっている。

「うん？寝ぼけてる？」

.....違うの.....

恵流はとろんとした目のまま、ゆるゆると頭を振った。

月の光をたたえた陽の瞳。そして、すっきりと伸びた長い睫毛が作る影。

それは、あのシャッターの絵を思い出させた。

月の光を受け、キラキラと輝く花びらを浮かべる湖。大きな樹の枝と雲の影。
昏く深い湖の底から音も無く湧き出す水は、どこまでも清らかでひんやりと冷たいだろう。

その湖の淵に座り水底を覗き込む自分の姿が思い浮かんだ。
水底からこちらを見つめ返すのは……

その顔を見る前に、瞼が下がってしまう。また、意識が遠のく。

ふと、背中が熱くなった。

落款どころじゃない。これは、焼き印だ。背中に焼き印を押された……ふわふわとした意識の中、あまりの熱さに、恵流はそう思った。

「恵流は色が白いから、月の光がよく似合うね。月の妖精みたいだ」

陽の声が、ふんわりと温かな息とともに耳から潜り込み、身体中に染み渡る。
その時やっと、焼き印は背中に廻された陽の両手である事に気付いた。

背中 of 熱さと首筋に触れるほの温かさ、そして脳裏に浮かぶ水の冷たさ。

それぞれの感触とイメージに、僅かに残っている意識がばらばらに引き込まれてゆく。
恵流は力尽きた様に、陽の肩に額を預けた。
先ほど思い浮かんだ自分の姿が再び浮かび、その背中にトンボの様な薄い羽根が生えた。

「月の、妖精……」

無意識の内に陽の言葉をぼんやりと繰り返しながら、恵流は最後に思った。

背中に焼き付くこの掌の熱さを、私は一生、忘れないだろう.....

これはまた、齒の浮くようなセリフを.....陽のくせに。

既に、上着は預けてしまっていた。

シャツの袖を肘までまくり上げ、首のボタンは2つ開けてある。

前評判に違わぬ素晴らしい料理と酒に満足した招待客達が興味深げに覗き込む中、パーティー会場であるレストランの中庭の片隅にイーゼルを立て、陽は黙々と絵を描いていた。

覗き込む客に話し掛けられても、視線は優馬と葉から外さない。

パーティーは、室内での式や和やかな余興やコース料理等を終え、設えられた大きなテーブルに手で摘んで食べられる小さなデザートや飲み物が並べられた、美しい中庭へと移っていた。

名残惜しむかの様なじんわりとした夏の暑さが残る空の下、招待客達は思い思いに庭を散策し、優馬達や他の客との会話を楽しみ、食べ物や飲み物を口に運んで寛いでいる。

9月も終わりとあって、夏の名残の中にもときおり秋を感じさせるそよ風が心地よい。

ポツポツと設置されている、パラソル付きのガーデンチェアに座っている者は少なかった。

白いタキシード姿の優馬とウエディングドレス姿の葉は腕を組み、招待客達に笑顔で挨拶をして回っている。

会話の間にはほぼ全てのグループからカメラを向けられ、写真撮影に応じているため、全員の間を回るのには時間がかかりそうだ。

光沢のある純白のドレスは、葉のイメージにぴったりだった。

ゴテゴテとした装飾の無いシンプルなデザインは、長身でスレンダーな葉の魅力を引き立たせている。上品にまとめられた髪には小さなティアラが輝き、エレガントな印象だ。

何より、幸せを振り撒いている様な笑顔こそが、彼女をいっそう魅力的にしていた。

優馬はスマートに彼女をエスコートしつつ、時おりこれ以上は無いというほどの優しい目で葉を見つめている。

「優馬さん、さっきからずっと顔が蕩けてる」

戻ってきた恵流が、クスクス笑いながらオレンジジュースのグラスを差し出した。

「だね」

恵流からグラスを受け取った陽は、ニヤリと笑った。

「思いっきりデレデレ顔に描いてやる」

「ふふ」

「でも……」 恵流が感嘆のため息を漏らした。

「デレデレになっちゃうのもわかるよ。栞さん、すごく綺麗だもん。ふたりとも背が高いしスタイル良いし、美男美女だし、絵になるカップルだよねぇ」

「んー……なんか、プレッシャーが……」

「あ、ごめん」

筆の汚れを丁寧に布で拭き取って、紙コップの水で洗う。

キャンバスには、濃い緑の樹々を背景に、大まかに塗り分けられたふたりの姿があった。簡単な下描きの上におおよその色や陰影を付けだけなので、全体的にまだぼんやりとしている。

「よし。下塗り終わり。恵流、あんまり近づくと絵の具飛ぶかも」

「わ、大変。じゃあ私、少しお庭を見てこようかな」

「その前に……」 陽は足元のバッグを探って、紙コップをふたつ取り出した。

「ごめん。これに水もらってきてくれる？」

「……そこの、噴水のお水じゃ、駄目？」

紙コップを受け取りながら、恵流は庭の中央にある可愛らしい石組みの噴水に目を向けた。

「いや、マズいだろ」

「ですよーねー」

陽が吹き出したのに気を良くしたのか、恵流はクスクス笑いながら弾む様な足取りで水を汲みに館内へと消えて行った。

後ろ姿を見送りながら絵の具のチューブに手を伸ばした時、背後から声を掛けられた。

「あの、すみません。大月さん？ お写真、よろしいでしょうか」

振り向くとそこには、ごついレンズの一眼レフを示している大男が立っていた。

「木暮くんの同僚の、菅沼と申します。あ、どうぞそのままです」
立ち上がろうとする陽を制し、カメラを構える。

「あの、まだ途中ですけど」

椅子をずらして絵の前を開けようとする、菅沼と名乗る男はファインダーを覗いたまま手を振った。

「いえ、描いてるところをね、撮らせていただきたいんです」
そう言いながらも、早くもパシャパシャと撮り始めている。

「はあ……構いませんけど」

陽は椅子を元に戻し、再びチューブを手を取った。
紙パレットにほんの少しずつ絵の具を出し、色を作ってゆく。

「いやあ、拝見しましたよ。あの、ウエルカムボードってやつ。木暮くんが挨拶のとき言ってたでしょう。さっき受け付けまで戻って、改めて見てきたんですよ。素晴らしかったなあ」

なおもシャッターを切りながら、菅沼は早口で話した。

「あ、ありがとうございます」

軽く目礼すると、けたたましいほどに連写された。
陽は呆気にとられて一瞬固まったが、気を取り直して作業に戻ることにした。

「額の装飾をしたっていうのは、アレですか？さっきの可愛いお嬢さん、彼女さんかな？」

「ええ、そうです」

「やあ、そうですかそうですか。芸術家カップルってわけですね。それは素晴らしい」

「はあ……どうも」

「彼女さんも是非、撮らせていただきたいなあ。ほら、あのウエルカムボードと一緒に」

「それはちょっと……め、彼女に聞いてみないと」

「もちろん、もちろんです。それにしてもねえ、素敵なカップルですよねえ。木暮くん達に負けてない」

菅沼はかなり饒舌な男のようだ。陽が答え終わるか終わらないかのうちに、どんどん話し掛けてくる。

絵の方に集中しているため、受け答えも多少ぞんざいだったが、全く意に介していない様だった。

「木暮くんとは、異動する前の部署で一緒でした。まあ彼は編集、私は撮影担当ですがね。休みの日には、一緒にバスケなんかやってたんですよ。社会人リーグっていうのがありましてね、けっこう本格的な感じの」

「ああ、バスケ」

「そうそう。私みたいな熊男とは違って、彼はほら、よく見ると男前でしょう。君とはまた違ったタイプの。で、えらく人気がありましてねえ。異動になって休みが合わなくなってからは、チームを脱退しちゃって。みんな残念がってましたよ。主に女性陣ですけどね」

「はあ……」

「女子マネージャーなんかふたり辞めましたからね。あんたらなんか、元々お呼びじゃないっつーの。当時から栞ちゃんにべた惚れで、栞ちゃん一筋だったんだから」

「……」

「全く、身の程知らずにも程があるって」

「ちょ、マヌガッさん。なに絡んでるんですか」

助かった……陽は胸を撫で下ろす思いだった。

菅沼の向こうに、苦笑いの優馬と栞が立っている。

「ちょっと、絡んでるとか、人聞きの悪い。ねえ、栞ちゃん？」

栞は、うふふ……と笑って受け流した。

「菅沼さん、たくさん写真撮ってくれて嬉しいんだけど、お料理ちゃんと食べられました？良かったら何か少し、持ってきてみましょうか？ ここのデザートは優馬のイチオシで、すごく美味しいから」

「ううん、いいのいいの。最近ちょっと太っちゃって……あ、デザートの写真撮らなきゃ」

菅沼は菜と連れ立ってテーブルの方へ向かった。

身長こそ菜とそう変わらなかったが、自分で熊男と言うだけあって、菅沼の背中はゆうに菜の倍はありそうだ。

途中で菜が振り向き、「任せて」と言う様にこちらに手を振った。

新キャラ登場。スガヌマ → マヌガス → マヌガッさんです。

宴の終わり

「全く、相変わらず喧しい。写真の腕はいいんだけどな」

「ふふ。ちょっとビックリしたけど、優馬さんのモテエピソード聞けたよ」

「ああ……」優馬は苦笑いしながら首を振った。

「あれ、盛ってるから。いつも話があげさなんだよ」

「優馬さん」

ピョコン、という感じで、恵流が戻ってきた。

「遅くなりました。なんか、すごい写真撮ってたから、待ってたの」

水の入った紙コップを陽に手渡すと、恵流は優馬に向き直り深々と頭を下げた。

「本日は、おめでとうございます」

「あ、これはご丁寧に。ありがとうございます」

優馬もかしこまって礼を返す。

「葉さん、とっても素敵ですね。あ、もちろん優馬さんも」

「あはは、ありがとう。次は、恵流ちゃんの番かな？」

「えっ……」恵流は絶句して、みるみる赤くなった。

「いえ、あの……私は、私なんて、まだまだ……」

あたふたしながら2歩3歩と後ずさりして行く。

「そうだ。私あの、お庭！お庭を見てきます」

足早に歩み去る背中に、優馬が声を掛ける。

「恵流ちゃん、最後にブーケトスやるらしいから、参加してね」

恵流は歩きながら振り向いて躓きかけ、小刻みに頷いてから庭の奥へと足早に歩いて行った。

「恵流ちゃん、ああしてると、ほんとに森の妖精みたいだな」

「ああ、確かに」

モスグリーンのシフォンのワンピースの裾がふんわりと可憐に揺れているが、同色の光沢あるロールカラーが少し大人っぽい印象を加えている。ゆるく纏ったシャンパンゴールドのストールが、より一層妖精っぽさを増していた。

足元には、華やかな渋いゴールドのパンプス。

小さなアメジストのイヤリングが揺れる耳の辺りでふわふわとカールさせた髪に、コスモスとクレマチスをイメージして作ったという髪飾りをあしらっている。

「秋の花に、初秋の色遣いなんだって」

「へえ……なんかスゴい。女の方は、大変だな」

「しかも髪飾りに使った花の、花言葉まで網羅してる」

「何それ」

「確か……美しい心、純潔……みたいな。聞いたけどあんま覚えてない」

「そんなの気にするやつ、いるか？」

「新郎新婦に万が一にも失礼の無いように、だってさ。まあ、見てる方はすごく勉強になるけどね。配色とかも」

「……なるほど」

話しながら、陽は淡々とキャンバスに色を乗せていく。少しずつ色を混ぜながら、肌の色を表現しているところだ。

「配色だけじゃなくて、素材も色んなの使いまくるから……俺なら気が狂う」

「たぶん、俺もだ。マジ、男で良かったわ」

優馬は陽の背後に回り、着々と完成に近づく絵を眺めた。

「恵流ちゃんはともかく、こっちもすごいもんだな。いつもの似顔絵とは、描き方が違うじゃん」

「そう。いつものは水彩。今回はアクリルだから、ちょっと画風変えてみた。ちなみに、ウエルカムボードは油彩ね」

事も無げに言って、陽はまた筆の汚れをぬぐった。

「そういえば、ウエルカムボード。すげえ評判よかったよ。自分の時もお願いしたいって言う人も居た」

「マジすか」

「もしかしたら、正式に依頼があるかもな。そしたら連絡先教えていい？」

「もちろん……あ、電話はパス。メールだけなら」

先ほど恵流から受け取った紙コップで、念入りに筆を濯ぐ。

「オッケ。お前さ、あのネームカードあるだろ。似顔絵に付けるやつ。あれにアドレス付けろよ」

「ああ……要るかな？」

「要るだろ。ってか、売り込みとか考えてないの？ 今日感じだと、けっこう需要ありそうだけど」

「売り込み？ ………なんか、メンドクサそう」

どうでも良さげな陽の答えに、優馬は思わず笑ってしまう。

「お前ね、欲が無さすぎ。あのな……あっ！」

突然優馬が大きな声を上げた。

「何？ どうした」

「恵流ちゃんがナンパされてる」

「え」

見ると、しゃがんで花の写真を撮って居たであろう恵流の側に、幾人かの男性がしゃがみ込み、盛んに話し掛けている。

「あのアホども……ちょっと行ってくるわ」

「おう。頼んだ」

「コラコラ、そこ——」

叫びながら走って行った優馬が恵流を救出したのをを見届けると、陽は髪に光を描き込む作業に移った。

十 十 十

優馬と栞の絵は、大好評だった。

一時間少して絵を描き上げると、その発表はパーティー後半の山場となった。

木漏れ日を浴びたふたりの輪郭は、キラキラと輝いて描かれた。

優馬は慈しむ様な微笑みを浮かべて栞を見つめ、栞は幸せに照り輝く笑顔を優馬に向け、ふたり寄り添い歩いている。緩やかに広がったドレスの裾から小さく覗く、踏み出した栞のつま先と、そよ風をはらんだベールが今にもふわりと翻りそうだ。

背景の樹々は絵の淵を敢えてぼかして余白を残してあり、それがなんとも言えない軽やかな空気感と空間の広がりを醸し出している。

額に入れる前にと、菅沼が立て続けにシャッターを切った。

それに続く様に、我も我もと参加者達が写メを撮りまくる一幕ののち、皆の拍手のなか絵を受け取った栞は、感激に目を潤ませていた。

「素敵なウエルカムボードに、こんな綺麗な絵まで……」

「いや、やっぱさ、せっかくの結婚式だし、ウエディングドレス描きたいじゃん？ そんな機会って、あんまり無いし」

照れ隠しのように袖を捲り直している陽に、優馬が混ぜっ返す。

「こいつは、一秒でも早く上着を脱ぎたかったんだと、俺は見ている。絵を描くのはその口実だな」

「あ、バレてた」

「お庭に出た途端に、上着脱いだもんね」

「しいーっ！」

陽は肩をそびやかすと、恵流に向かい口の前で人差し指を立てた。

「……野生児と森の妖精か。いいコンビだ」

談笑する彼らを、少し離れた場所から菅沼が抜かりなくカメラに納めまくった。

優馬さん、栞さん。ご結婚おめでとうございます.....

最初の依頼は、意外な事に、絵ではなかった。

「取材い?!」

結婚式の次の月曜。昼休みに優馬からの電話を受けた陽は、耳を疑った。

「そう。つっても、たかだかタウン誌のミニコーナーだけだな」

聞けば、無料配布されている求人誌の見開きページ。毎週、地域の色々な仕事をひとつずつ紹介するコーナーであるという。

「我が街の、新進気鋭のアーティスト! みたいな話で進んでるらしい」

「新進気鋭って.....俺、特に目立つ活躍とかしてないし。取材とか言われても、話すことなんか無いよ?」

「んー.....じゃあ、『街の芸術家』的な感じでいいんじゃないかね? とにかく、マヌガッさんが猛プッシュしてるらしくて」

思わず、陽は空いた片手で頭を抱え地べたにしゃがみ込んだ。

「あの人が.....」

「取材するにしても、再来週以降だ。俺も同席するから心配すんな。あ、あと、ギャラも出るから.....まあ、寸志みたいなもんだけどな」

「いや、ギャラ云々とかどっちでもいいんだけど.....あ、待って。社長に聞いてみなきゃ、わかんないよ」

断る口実を見つけた、と思った。

が、その淡い期待は、優馬の一言で一蹴された。

「その件で、今からそちらに伺いたいのですが。天本社長にお取り次ぎ願えますか？」

馬鹿丁寧ながらも自信満々のその口調に、陽は覚悟を決めざるを得なかった。
優馬の事だ。絶対に、社長から了解を得るだろう。絶対に。

十 十 十

怒涛の2週間だった。

優馬からの電話を受けたオヤジさんは二つ返事で仕事場の撮影を了承し、その日から工房内の大掃除を始めた。

陽の工作中的の姿を数カット撮るかもしれないと言われただけなのに、工房の中を隅々まで磨き立てなければ気が済まなかったらしい。

仕事場どころか資材倉庫の中まで整頓し尽くし、準備万端で当日の朝を迎えていた。

もちろん陽の部屋も、オヤジさんの指揮のもとピカピカに掃除させられていた。

「竹内さん、なにも散髪までしてこなくても……」

「いや、偶々だよ、偶々。伸びてたからさあ」

「何が偶々だって？ 朝から鏡ばかり見てるくせに」

そう冷やかすオヤジさんも、今日はいつもの作業着の下に、ピッチリアイロンのかかったワイシャツを着てネクタイまで締めている。

「まあまあ。例え端っこにチラッと写るだけでもね、ちゃんとしてないと。陽ちゃんに恥かかせちゃうし」

普段はお昼から夕方までしか工房にいない静江奥さんも、今日は朝から出勤し、いつもより濃いめに口紅をひいている。

静江の言葉を聞いて、いつもは寡黙な村松まで作業着についた小さな染みを擦り始めた。

「あの、皆さん。ほんとに気にしないで下さい。仕事の邪魔にならない様に、なるべく手早く済ませてもらうんで」

「イヤ、それは駄目だ。あんなに良くしてくれる木暮さんに、申し訳が立たん。せっかくうちの陽を雑誌で紹介してくれるって言うのに」

「そうだぞ、陽。あの男は、いい人間だ。間違い無い」

オヤジさんの説教に、すかさず竹内も便乗する。隣で村松も頷いている。
工房にたった数回挨拶に寄っただけで、優馬は皆の心をガッチリ掴んでしまったらしい。

「そうよ。新婚旅行のお土産まで貰っちゃったし。あの、ライチのワイン？ 美味しかったわねえ」
静江さんがうっとり目を閉じれば、村松さんも「紹興酒も旨かった」と低く呟く。

一週間のシンガポールへの新婚旅行から帰るとすぐに、優馬は土産を持って工房を訪れていた。
「社交性の鬼」の異名は伊達じゃない、と陽は舌を巻いたものだった。
竹内へは酒の他に、6歳になる息子にと機内でもらったという小さな飛行機のプラモデルをあげて喜ばれ、それどころか、今度飲みに行く約束までしているというから驚きだ。

(優馬さん、どこまで根回ししてるんだよ……)

取材を受ける本人より盛り上がってしまっている彼らを他所に、陽はこっそりため息をついた。

取材は午後からの予定だったが、どうやら今日は仕事にならなそうだ……

陽「優馬さん、コミュカどうなってんの……」

優馬「リミッター壊れてんだ♪」

初耳なんですけど

テーブルの向かいには、ショートヘアの女性が座っている。

短い丈のベージュのパンツスーツにこげ茶のポンプス。小ぶりの金色のピアスが時折り耳元で小さく光る。

「それでは早速、お話を伺っていきます」

「はい。よろしくお願ひします」

優馬と菅沼、そして芹沢と名乗るライターは、13時過ぎにやって来た。

挨拶を済ませるとすぐに、仕事風景や工房の前での集合写真を数枚撮り、撮影でご機嫌になった工房の皆に普段の陽について少し質問をしたりした後、2階にある会議室兼休憩室として使っている小部屋に通された。

隣の食堂から、お茶を淹れている物音が微かに聞こえる。

「まず、ざっと経歴を伺えますか」

「経歴って言っても、特に……普通に高校卒業して、ここに就職して。平日の早朝と夜、週末には絵を描いたりしてます」

「では、創作活動に関してですが。コンテスト等にご応募なさったりは？」

「学生の頃は、部活動の一環として応募して、何度か受賞してます。社会人になってからは、応募してません」

「美大とか、美術家の学校に進まれる事は考えなかった？」

「はあ……絵はあくまでも趣味なんで。本当は、美術系じゃない大学に進学して、普通に就職するつもりでした。でも、高3で父が蒸発しちゃったんで」

「おい、ちょっと待て」

それまで少し離れたところに黙って座っていた優馬が、突然立ち上がって止めに入った。

「蒸発って、何だよ」

「え、言葉通り。ある日バイトから帰ったら、もう居なかった」

「何だよそれ。聞いてないぞ」

「うん。言ってない」

「おま……何でそんな大変な事を黙ってんだよ」

「だって、聞かれてないし」

「聞かれなくたって言うもんだろ！ そういうことは！！」

「……そうなの？」

優馬は呆然とした様子で額を擦りながら席に戻った。

「ちょっと、すみません……」 芹沢に断りを入れ、陽の側に椅子を引き寄せる。

「お前な……」

優馬は眉根を寄せて身を乗り出し何か言おうとした様だったが、突然身を起すと片手で髪をくしゃくしゃと掻きむしった。

「あー……まあ、いいや。で、これ、記事にしていいのか？」

「うん。別に構わないけど」

「木暮くん」 ライターの芹沢が割って入る。

「一旦お話を聞いた上で、記事にするか切るか、決めましょう。とりあえず、全体の流れを聞きたいわ。あと、髪ボサボサ」

優馬は黙って頷くと、また少し距離を取って座り直し髪を整えた。

「お父様が出て行かれたのは、どういった状況で？」

「えっと……いつも通りバイトから帰ったら、既に居なくて。居間の机の上に銀行の通帳2冊と印鑑が置いてあって。親父の荷物が消えてて」

芹沢がうんうんと頷く。

「あ、荷物って言っても元々ものを持たない人だったんで、衣類が少しと、趣味だったカメラが無くなってたぐらいで。今までにも、週末とかたまにフラッと居なくなったりしてたんで、またそういう感じなのかと思ってたんだけど……」

「いつも、何も言わずに？」

「いえ。いつもは前日ぐらいには聞いてたし、たまにメモ程度の書き置きがあったり。でも、その時は一切聞いてなかったんで、ちょっと変だなと」

淡々と話す様子は、この件について様々な人に何度も説明を求められたのだろうと思われた。

「で、通帳をよく見たら1年分ちょっとの家賃とか、俺名義の通帳には、しばらく暮らして行けるくらいの金額がまとめて入金されてて。これは、本格的に出て行ったんだなって」

「芹沢さん、今のところカットをお願いします」

優馬が遮った。

「陽、懐事情なんかは人前であんまり喋るもんじゃない。誰の前でもだ」

陽は素直にコクンと頷くと、また話し始めた。

「で、一応2、3日は待ってみて、やっぱり帰ってこなかったんで、担任に相談して……なんやかんやお世話になって、美術部の顧問経由でここも紹介してもらって、今に至ります」

「お父様、カメラが趣味だったんですね。フラッと居なくなるっていうのは、撮影旅行かなにかかしら？」

「いえ。写真撮ってたのは、俺が子供の頃まででした。母親が出て行ってからは、ほとんど撮ってなかったと思います」

「おい待て。またなんか出て来たぞ」

優馬が声を上げる。

「ああ、そっか……えっと、母親は俺が4歳ぐらいの時、出て行ったそうです。理由は聞いてません。っていうか、何度も父に聞いたんですが、答えてくれなかった」

「理由を知りたいとは、思わなかった？」

「そりゃ知りたかったですけど……子供ながらに、親父は言いたくないんだろうなと思って。まあ、理由を知ったところで母親が帰ってくるわけでもないだろうし。そのうち教えてくれるかなとか、少しは思ってたんですけどね。駄目でしたね」

そう……芹沢が頷いた時、応接室のドアがロックされた。
優馬が素早く立ち上がり、ドアを開ける。

「失礼しまーす。シャッターの絵、撮り終わりましたあ」

カメラを提げた菅沼と、その後にお茶を乗せた盆を持った天本静江が入ってきた。

「あ、すみません」

立ち上がって盆を受け取った陽に、静江は胸の辺りで小さく手を振り、声に出さず口の動きだけで「頑張っ」と囁くと、何故か足音を忍ばせて出て行った。

自分より余程気合い漲る静江の表情に、陽が思わず口元を緩ませた瞬間、フラッシュとともに立て続けにシャッター音が響いた。

驚いて見遣ると、また菅沼が連写する。

湯呑みを配る姿勢のまま、陽はこわばった表情のまま固まってしまった。

「やあ、失礼失礼。インタビュー風景撮らせてもらいますけど、普通にしていって下さいね。リラックス」

「はあ……すみません。ちょっとビックリしちゃって」

芹沢が右手に持ったペンを立て、皆の注意を引いた。

「じゃあ、仕切り直して。さっき子供の頃の話が出ましたけど、その頃には絵を描き始めてたのかしら？」

「ええ、たぶん。よく、広告とかカレンダーの裏に描いてました。喋り始める前からクレヨン握ってたって、よくオヤ……父に言われてました」

「主に、どんなものを？」

「どんなものって、うーん……目の前にあるものを、手当たり次第に？」

少し眉根を寄せ考え込む様な表情をみせた陽に、また連写のフラッシュが浴びせられる。
一瞬、陽は身を竦ませたが、フッと息を吐き出して苦笑いした。

「すみません。なんだかこういうの、慣れなくて」

「皆さん、初めはそうおっしゃいますよ。すぐに慣れますから。あ、お茶いただきますね」

芹沢につられる形で、陽もお茶をひとくち啜った。

静かに湯のみを置くと、首や肩を回して筋肉の緊張を軽くほぐす。

その様子をまた菅沼が連射する。が、今度はフラッシュは焚かれなかった。

階下から、聞き慣れた作業音が微かに聞こえてきた。

木材を切る甲高い電ノコの音。グラインダーの研磨音。工具のぶつかる、ゴリゴリと重たい金属音。

どうやら漸く、仕事を再開したらしい。

陽にとっては心地よい騒音だ。肩の力が抜け、少し寛いだ気分になれた。

優馬「衝撃の事実だ……」

芹沢「なかなか波乱万丈ね……」

菅沼「大月くんカッコイイ〜♡」ハッパハッパ

取材後、車内にて

カチ、カチとウインカーが音を刻む帰りの車内、菅沼はご機嫌な様子で写真をチェックしていた。

「えらくたくさん撮ったわね。公私混同も甚だしいわよ、まったく……」
ハンドルを握り信号待ちをしている芹沢は、助手席の菅沼を横目でジロリと見遣る。

「失礼な。良い被写体があれば、写したくなるのが写真家の本能ってもんで」
「なーにが写真家の本能よ。あんたのお気に入りフォルダが増えただけでしょ」
「まあ、それは否定しない。おまけに、大月くんと優馬とのツーショットもこっそり撮れたし。ラッキー」

「……変態が」

鼻で嗤って言い捨てた芹沢の言葉も、菅沼はどこ吹く風といった風情だ。

「俺は美しいものが好きだけ。男女問わず」
「嘘だ。彼、結局最後まで撮影に慣れなかったじゃない。あれ、あんたの邪な視線を察知して警戒してたのよ、きっと」
「ヨコシマまで言うか。お前だって人の事言えないだろ。『子供の頃から好きでした』って言われて、ポーッとしてたくせに」
「ポーッとなんかしてないわよ！……ちょっと、一瞬ドキッとただけ！」

信号が青に変わり、車はゆっくりと滑り出し左折した。横断歩道を渡る歩行者の群れが通り過ぎるのを待つ。

すっかり暗くなった通りには、帰宅を急ぐ人々や繁華街へ繰り出そうとする若者達が溢れている。

「私に言ったんじゃない事は解ってても、正面からあの目ヂカラで言われたら、ちょっとは動揺するじゃない？ほんのちょっとだけど、さ」

「ハイハイ、わかったわかった。あー……でも、その表情撮りたかったなあ。正面からカメラ目線、撮らしてくんねえかなー」

「それは、望み薄ね……ねえ、真面目な話、彼が撮影苦手なのって、彼の父親の事と関係あると思う？」

芹沢はハンドルを握った人差し指を伸ばし、ハンドルの裏側を軽く引っ掻いた。
停車中に考えにふける時の、芹沢の癖だった。

「何、珍しいな。取材内容について俺に質問なんて」

「質問ってほどじゃないけど。写真家としては、どう分析するのかなって」

「分析、ねえ……」

菅沼はがっしりとした顎を撫でた。朝に剃った髭が伸びて、ジャリジャリする。

「母親が出て行ってから写真を止めた父親。それを見て育った息子は撮影嫌いに……って？ 穿ち過ぎな上に浅くねえか？」

んん……と、芹沢はハンドルを指でコツコツと叩いた。

「やっぱ、そうか。そうよね。波瀾万丈な半生だから、つい……」

「俺の美しい写真の横に、お涙頂戴みたいなやっつすい文章付けんなよ？ しっかりしろ、文筆業」

「煩いな。わかってるわよ、撮影業」

最後の歩行者をやり過ぎすと、車はゆっくりと走り出した。

「まあでも、ちょっとわかるけどな。あの子、そう思わせるところがある。しっかりしてるけど、どっか脆いっていうか。微妙にアンバランスに見えるんだよ」

「あんたも、そう思った？ 若いからとかイケメンだからとか、そういう単純な事じゃなくて……なんか、引っかかるというか、妙に気にかかるのよ」

「んー……それがひとつの魅力でもあるよな。カリスマ性、ってヤツ？」

「カリスマ性、か……」

前を走っていた大型トラックが車線変更し、道が開けた。二人を乗せた車は加速した。

菅沼「眼福眼福♡」ホホク

芹沢（……まあ、確かに）

菅沼「……ふう～ん♪ 写真、あげようか？」ニヤニヤ

芹沢「（イラッ）……………お願いします」

「で？ あなたはそれの何が不満なわけ？」

傷ひとつ無いダイニングテーブルの上には、葉の手料理の数々が並んでいる。
優馬は鶏と大根の煮物を摘むと、口の中へ放り込んだ。

「だってさ。母親家出で父親蒸発だぜ？ 言うだろ、普通」

「そうねえ……」

葉は箸を置き、ビールを一口飲むと、視線を上方に据え少し首を傾げて思案する様子を見せた。

「自分からは、あんまり言いたくない事だったんじゃないの？ 心配とか同情されるのが嫌、とか」

「そうかもしれないけどさあ」

唇を尖らせ不満そうな優馬の表情に、葉は思わず含み笑いを漏らしたが、優馬は気付いていない。

「じゃあ、もし大月くんが事前に言ってくれてたら、優馬は何かした？」

程良く味の染み込んだ鶏肉を噛み砕いていた優馬は、動きを止めた。

「……うーん……特に何もしない、かなあ。でもさ、知ってるのと知らないのじゃ、何ていうか、心持ちが違うじゃん？」

「そうかもしれないけど、大月くんには必要無かったんじゃないの？ その、優馬の心持ちっていの」

「ん……まあ、確かに、俺の都合だけさあ」

口の中に残っていた鶏肉の残骸を飲み下し、ビールをグラス半分程あける。

「確かに突然出て行くとか、ろくでもない父親かもしれないけど。絵を描くことの楽しさを教えてくれて、応援してくれて。画材や資料なんかも惜しみなく買ってくれた。『世の中には美しいもの、素晴らしい風景がたくさんある』って繰り返し教えてくれた。それでもう、充分だと思っ

てる」

取材中、陽は淡々とそう話してたけど、そんなわけないじゃんか。高校在学中に突然ほっぴり出されて、それですんなり納得できるわけないじゃん。

怒りや悲しみ、不安。様々な感情を乗り越えるためにそう割り切るしかなかったであろう、陽の気持ちを思うと……

でも。

それを乗り越えて立派に頑張っている今、過去を蒸し返してあれこれ言うのも如何なものか。そう、葉の言う通り、要らない「心持ち」なのかもしれない。

「おにいちゃんとしては、『辛い事があるなら早く言えよ』って感じ？」

労わるような柔らかい声に気付いてチラリと表情を盗み見ると、微笑んで見つめる葉と目が合った。優馬は急いで視線を逸らし、置きかけたビールに再び口を付ける。

時々、葉はこういう目をする。今にも手を伸ばしてこちらの頭を撫でてきそうな、優しい目だ。その度に優馬は、照れくさくもあり、また「年下のくせに」という反発もちょっぴり混じった気持ちになって、胸の真ん中辺りがキュウツと絞られるのだ。

おまけに、嬉しい気持ちが大幅に勝ってしまうので始末が悪い。

グラスの淵を啜えたまま、「そういうんでもないけどさ……」と呟き、残り少ないビールに息を吹き込んでブクブクと泡立てる。

視線を上げると、頬を膨らませ睨む真似をしている葉がグラス越しに見えた。今にも「食べ物で遊ばない」と怒られそうなので、優馬は急いでビールを飲み干した。

「おかわり、要りますか？」

「うん」

葉は席を立ち、カウンターを廻って冷蔵庫へ向かった。

葉が何か話している。冷蔵庫を開け、缶ビールを取り出す微かな音が聞こえた。

優馬は、それをぼうっと聞いていた。

葉の話し声とたてる物音が入り混じり、まるで、ひとつの音楽の様だった。

ビールひとつ取り出すだけののに、どうしてこんなに発する音が違うんだろう？

葉の声質のせいだろうか。普通の会話や些細な動作なのに、特別なものに感じる時があるんだよなあ……

しみじみと、幸せだと感じた。

こんな幸せを噛みしめる瞬間が、陽にも来るだろうか。来て欲しい。いや、来なきゃいけない。

「優馬？聞ってる？」

ふいに近くで声が聞こえ、優馬はハッとした。

「大丈夫？眠くなっちゃった？」

少し心配そうに、葉がこちらを覗き込んでいた。

「いや、大丈夫。なんか、落ち着くなーって思って。ちょっとボーッとしてた。で、なんだっけ？」

葉は席に戻り、優馬のグラスにビールを注いだ。

「優馬は、おうちのこととか、大月くんと話してるのかって聞いたの」

「ああ、そういや……話してないな」

余ったビールを自分のグラスに注ぎ足し、葉はグラスを上げた。優馬もグラスを持ち、軽く触れ合わせる。カツ、と固い音がした。

「じゃあ、お互い様じゃない。なんか男の人同士って、実家や親の事とかあまり話さないイメージがあるな」

「ああ、そうかもなあ。その辺、女同士はどうよ？」

インゲンの胡麻和えを口に運ぶ途中だった葉は、箸を小鉢に戻した。

「そうねえ……結構話すかな。恵流ちゃんのお母さんが看護師だって聞いたわ。私と同業だから話してくれたのかもしれないけど。で、お父さんは確か、外資系部品メーカーのマネージャーだとか」

「マジか。いつの間に……」

ふふ、と栞は小さく笑った。

「結婚式の時とかね。あと、ちょくちょくメールしてるし」

優馬は首を振り振り、ため息をついた。

「やっぱ、女子チーム侮れないわ」

優馬「なんか、俺に出来ることあると思う？」

栞「さあ。ただ、そばにいてあげたらいいんじゃない？お友達だかお兄様だかとして」

優馬「……栞！！うっつ、なんというイケメン発言（；__；）」

栞「なにも泣かなくても」

大月 陽（おおつき よう） 22歳。

父ひとり子ひとりという環境で育ち、幼少の頃から絵の才能を発揮する。学生時代の絵画コンクールなどで度々入賞するも、「絵は趣味に留める」と美術系ではない大学への進学を選択。

が、高校3年の春、父親の突然の蒸発で進学を断念。現在も勤める木工房に就職。仕事に興味ややりがいを見い出しつつ、終業後には家で絵を描き、週末には公園等で似顔絵描きをしている。

―― それでは、早速お話を伺っていきます。

「はい。よろしくお願いします」

―― 幼少の頃から絵を描くのが好きという事ですが、何を切っ掛けに？」

「切っ掛けと言えるかどうかはわかりませんが、元々色に対する興味が強かったらしくて、親が試しにクレヨンを与えたら、それ以降ずっと……喋り始める前から絵を描いてたと、よく言われました」

―― 小さい頃は、主にどんなものを描いてたんでしょうか？

「母親が居なくて、家にひとりで居る時間が多かったので、主に家の中の物ですね。絵本の挿絵や図鑑を真似て描いたり、あと、父親が趣味で撮った写真を模写したり。小学校ぐらいからは、家にある立体の物を、片っ端から描いてました」

―― ランドセルとか？

「そうですね(笑)でも、最初はもっと単純な、みかんとか、鉛筆とか？ あと、カナブンとか」

―― カナブンですか(笑)

「ええ、カナブン(笑)時々玄関先に止まってたんですけど、あのメタリックな色が不思議で。どうやって表現しようかと苦心した記憶があります」

―― その研鑽の結果、小・中・高と絵画コンクールでの数々の受賞に繋がるわけですね。

「いえ、たまたまです。それは、たぶん」

―― 受賞作品を幾つか見せていただきましたが、中学校までは写実的な絵が多く、高校からは色んなジャンルを描かれてますね。

「ええ。中学までは、学校の行事で描いた絵が勝手に出品されてたんで。写生大会とか、夏休みの宿題とか。『出品したから』って言われて、ああそうなんだ、と」

―― 高校からは、自分の意思で？

「そうですね。美術部だったので、流れで何となく」

―― 流れでというのは？

「ええと、絵のテーマは自由だったんで、気に入ったのが描けて、何かのコンクールの日程に合えば出品、って感じです。そういう情報は常に教えられてましたし、実績を作ると部費が増えるんで、なるべく出品しろと言われて(笑)」

―― なるほど。では、だいぶ貢献されましたね。現在は、出品はされないんですか？

「そうですね。今はただ、描きたいものを好きな様に描いてるだけなんで。あと、あの……コンクールの日程とか、調べるのが面倒で」

―― あはは。部活では教えてもらえたけど。

「そうなんです(笑) 賞とかそういうのにあんまり興味が無くて、わざわざ調べてまでは……って感じです」

―― でも、週末にしていらっしゃる似顔絵屋さんでは、絵も売っているんですよね？ 賞とか獲ってたら、箔がつくと言うか、宣伝になるんじゃないですか？

「いや、もし獲ってても言わないし(笑) なんか、恥ずかしい」

―― 何故、似顔絵を？

「お客さんに喜んでもらえるのが嬉しいっていうのと、何より、表情を描く勉強になります。ついでに、絵の具代も稼げるし」

―― なるほど。画材ってお金かかりそうですね。

「そうなんです。今、倉庫の2階の社宅みたいな感じの部屋に住んでいて、家賃が格安で助かってるんですけど、工房に新入りが入って来たらそこを出なきゃいけない。だから、貯金しなきゃいけないんです」

―― でも、お金がかかっても絵は描くのは止めない、と。

「止めません。っていうか、止められない」

―― 何故、そんなに？

「面白いから。だって、真っ白なキャンバスの上に、みるみる世界が出来上がっていくんですよ。自分の右腕一本で。目の前の光景とか、頭の中の風景とか、自由自在なんです。わくわくしますよ。楽しくて仕方ない」

―― なるほど。

「高校で美術部に入るまでは、目の前のものを上手く描くことに夢中だったんです。どれだけ写實的に描けるか。でも、美術部の顧問の先生に『絵なんて好きな様に描けばいいんだ』って言われて。目から鱗が吹っ飛んだというか.....」

―― 吹っ飛びましたか。

「はい。美術館なんかで絵を見ていて、結構宗教画とか多いですよ？それって、実際に目で見たものではありませんのに、何故かそこに気付いてなかったんです。ほんと、自分でも意味わかんないんですけど、天使やら悪魔やら不思議生物やらが描かれてる絵でも、『なるほど。上手いなあ、凄いなあ』ぐらいに思っていて。そういうもの、として見ていたっていうか。ああ、なんか上手く言えないな」

―― ええと、出来上がった作品を見ることと、それを描いた人やその過程を思うことが結びついてなかったってことでしょうか。

「そう、そう。そんな感じです。『あ、そういえばあれらの絵だって、人の頭の中の事じゃん!』って漸く結びついたと言うか。あれです。ヘレンケラーのウォーター!みたいな」

―― WATERという言葉と水の意味が繋がったという、気づきの瞬間の有名なエピソードですね。

「そうです。たぶん、そういった絵の完成度や世界感が素晴らし過ぎて、自分の意識を描く側に置いた事がなかったんですね。でもそれに気付いた時、もの凄い衝撃でした。俺も自由に描いていいんだ! って。こう、奮い立つと言うか.....って、改めて話すと、俺、かなり馬鹿ですね。なんでそれまで気付かなかったんだろ(笑)」

―― それだけ写実に没頭してらしたということでは?

「あ、優しい。ありがとうございます(笑)で、それからもう、拍車がかかったみたいになって、描くことにのめり込んでます。楽しくて仕方ない。あ、また言っちゃった(笑)とにかく、顧問の先生には感謝してもしきれません。就職についても、元々、ものづくりとか職人系の仕事に就きたいって思っていて、相談したらこの工房を世話して貰えたし」

―― 恩師、ですね。足を向けて寝られませんね。

「ほんと、その通りです」

―― では、これからのことをお聞きします。その情熱の元に、描いてみたい絵や、目標なんかはありますか?

「描いてみたい絵.....は、今のところ特に無いですね。あ、いつか大きいサイズの絵を描きたいかな。今、デカイキャンバス置く場所が無いんで」

―― 絵のテーマやモチーフじゃなくて、サイズですか(笑)

「駄目ですか(笑) ええと、具体的に何っていうのは無いんですけど.....見た人の心にずっと焼き付くような、魂を揺さぶるような、身体的に影響が出ちゃうような。いつか、そんな絵を描きたい

ですね。月並みですけど」

―― 身体的に、影響？

「ええ。鳥肌とか、目眩、息切れ、動悸、発汗とか。体温の上昇または下降みたいな？あと、夢にみたりとか」

―― ああ、なるほど。あんまり月並みじゃないかもしれません(笑)

「そうですか？説明が下手だったかも。言葉にするのって難しいな。絵を描く方が楽ですね」

―― では、これからの目標は？

「目標.....あんまり考えた事無かったな。ええと、仕事を頑張って社長に恩返しします。すごく良くしてもらってるんで。あと、いつか個展とかやりたいかな。今思いついたんですけどね(笑)」

自分のことを喋るのが苦手と仰っていた大月さんでしたが、絵の事になると瞳が輝いて途端に饒舌になるのが印象的でした。

絵を描くのが本当に楽しそうで、思わず私も筆を取ってみたいくなりました。

大月さん曰く、「絵は描き方も見方も自由」だそうです。

芸術の秋。もっと気軽に、描いたり鑑賞したりしてみたいかがでしょうか。

ちなみに。

自画像は描かないのかと伺ったところ、「昔課題で描きましたが、鏡を見ながら描くうちにどうしても睨みつけるような表情になってしまうので、それ以来描いてません。人相悪いんで」とのことでした。残念。

芹沢「ああああ、もっと書きたかった！大月くんの半生を、根掘り葉掘り洗いざらい

微に入り際を穿ち、この手で！」

菅沼「ああああ、もっと撮りたかった！密着取材と称して四六時中付け回して、何なら連写で！いやむしろ動画で！」

優馬「ふたりとも、心の声漏れてますよ……」

「すげえ。あのグダグダな雑談が、ちゃんとした記事になってる」

「まあな。言ってもプロだからさ」

記事の内容をプリントアウトしたものをめくりながら、陽は感心したように読み進めている。

「……けっこう順番入れ替えたり、削ったりしてるんだね。恵流の事とかも話したのに」

「ああ……まあ、なんだ。紙面の都合ってやつだな」

優馬は嘘をついた。いや、完全に嘘と言うわけではないが、実際のところは読者の喰い付きを考えてのことだった。

取材対象者の男女を問わず、恋人の存在が明かされると、多くの場合喰い付きが悪くなるものなのだ。

「んで、こっちが写真」

優馬がもう一冊のクリアファイルを陽に手渡す。

パラパラとめくって見ると、プリントアウトされた数枚の写真には、それぞれキャプションが付けられていた。

「写真、こんなに載せるんだ……なんか恥ずかしいな」

「それがな……もっと増えるかしらん。なんと現在、2週ぶち抜き企画に変更するように申請中だ」

「何それ」

驚いて写真から顔を上げた陽に、優馬は何故か得意気に説明する。

「異例中の異例……ってというか、初の試みだな。芹沢さんとマヌガッさんがノリノリでさ。上に猛プッシュしてる。文章量はほぼこのままだけど、写真増やしたいって」

「ああ、なんかいっぱい撮ってたもんね。絵の写真とか」

鼻息荒く駆け回る芹沢と菅沼の様子を思い出し、優馬は頬が緩むのをなんとか堪えた。

このコンビは腕はいいが口が悪いと評判で、よく言えば掛け合い漫才、悪く言えば罵り合っただけりいる。そんな二人が、今回ばかりは手を取り合はんばかりの協力体制で事を進めようと動いているのだ。

もちろん優馬も他部署ながら、力の限り協力するつもりだった。

「似顔絵やってるときの写真も欲しいって言ってたから、そのうち話が行くかも。いいよな？」

えええ……と、陽は天を仰ぐ。

「俺、写真苦手……って、来るのはあの、菅沼さん？」

「もちろん」

優馬が重々しく頷く。

うう……今度は、会議室の机に突っ伏した。

「あの、なんか怖い……あ、そうだ。優馬さんも一緒に来てくれるならいいよ」

「甘えてんじゃねえ」

優馬は笑って、陽の手からファイルを取り上げた。

「ま、元々行くつもりだったけどな。じゃ、追加撮影はどっかの土曜日ってことで」

陽はいかにも渋々といった感じの低い声で答えた。

「……はい」

階下からは、騒がしい声が聞こえる。

原稿と掲載写真は社外秘ということですからすぐに取り上げられてしまったが、優馬はそれとは別に、B

4サイズ程の集合写真や、社員を個別に撮った写真等を皆に渡していた。
おそらく皆で、その写真を回し見ているのだろう。

それらの写真は、菅沼からのサービスであるという話だった。
工房の皆がとても喜んでいるので、陽としては追加撮影を断りづらい。

もちろん、そうなることを見越してのサービスだと思われた。

(でも、まあ.....)

机に突っ伏したまま、陽は少しくすぐったい気持ちで階下の賑わいに耳を澄ませた。

(みんな喜んでるし。少し、ほんの少しだけど、恩返しになったかな.....)

陽「なんかさあ、本人差し置いてみんなノリノリで、蚊帳の外感がハンパないんだ
けど」

優馬「お前もノリノリになれば問題なし」

陽「う.....い、イエ〜イ! うん、やっぱ無理 (_ _。)」

優馬「お前にしてはよくやった」

懐かしい名前から、学校に封書が届いた。

大月 陽。

4年前に卒業した生徒だ。

地元の情報誌に記事が載ったからと、大友宛にわざわざ1部送ってきたのだ。

大友は封を開け、雑誌の表紙をめくった。

1ページ目から、大友の記憶よりだいぶ遅くなった大月陽の写真が載っている。

顔つきからあどけなさは薄れたが、澄んだ瞳と真っ直ぐな視線は相変わらずだ。

その右手には絵筆が握られ、背後にはたくさんの絵が立てかけてあるのを見て、大友は思わず頬を弛めた。

(よしよし。ちゃんと続けてるな)

実は、記事の内容は既に読んでいた。

雑誌が発行される前日に、陽の勤め先の社長であり大友の恩人でもある天本良治から、コピーがFAXされて来たのだ。

天本はパソコンに疎く、スキャナで取り込んでデータを送信、といった簡単な作業も、未だ苦手らしい。パソコンでの作業は、ほとんど妻の静江がやっていると聞いている。

大友は美術準備室の窓辺に歩み寄り、午後の自然光の下で写真を見直した。

うん。なかなか良い絵じゃないか。

大友はいつもの様に、窓の外に目を向けた。窓の側の大きな銀杏の樹が、黄葉し始めている。

大月 陽が初めて油絵を描いたのは、確か今頃の季節だったはずだ。

大友の方針として、部員達には入部してから半年間ほどみっちりデッサンをやらせることにしている。

ひとつの物を、様々な角度から。

光りの当たり具合、反射の仕方、影の出来方を観察させ、紙に写し取る。

様々なモチーフを変えながらそれを何度も繰り返すうちに、生徒の描き癖がわかってくるのだ。

その上で、矯正すべきところは矯正し、個性として伸ばすところは伸ばす。

半年間という時間は、生徒のデッサン力を培うと共に、生徒の個性を見極めるという点で、大友にとっても必要な時間なのだ。

もちろん、個人によってその期間は多少変わってくるのだが。

大月陽については、入部当初から確かに絵が上手かったが、それまでは全くの自己流で描いていたため、大友は少し指導をした。

例えば、鉛筆の握り方や肘の角度。そして何より、描く時の姿勢。

背筋を伸ばし、首を真っ直ぐに立てる。

描き疲れて背中を丸めてしまうと、視点が微妙に変わってしまう。構図にほんの僅かなずれが生じる。

特に油絵等の長期間に渡って描くものにとっては、そのほんの僅かのずれが、構図の微妙な歪みや心地の悪さをもたらすことになる。

だからまず、長時間描き続けても疲れない姿勢を、身体に叩き込む。

描き方のテクニック等は、追々学んでいけば良いのだ。

半年ののち、大友は1年の部員達に静物画を描かせた。

与えたモチーフは、背もたれのある木製の椅子と、座面に掛けた布、その上にはいくつかの果物と貝がら。

放課後の数時間を使いひと月程描き続けた頃、ある日彼は突如筆を止め、途方に暮れたような顔

で自分の描いた絵を見つめていた。

不自然に長くそうしているので、大友は彼に声を掛けた。

「あの、もう少し太く描くべきなのはわかるんですけど……なんか、これ以上描きたくないんです」

思い思いに描いている生徒達の間を縫って回り込み、彼の背後から絵を覗き込む。

彼の言葉通り、確かにモチーフの椅子は実物より若干華奢に描かれていた。

下描きの時点では実物にかなり近いバランスだったから、色を載せていくうちにそうなったのだろう。

「あと、この辺も……もう塗りたくない。なんか気持ち悪いです」

キャンバスの淵に添って、ぐるりと指でなぞる。

暗めの色でぼかして描いた背景は、淵の近くで徐々に薄れ、擦れて色褪せたような風合いになっていた。

「気持ち悪い？」

「はい……塗ろうとすると、ムズムズする。椅子のところも、描き加えようとすると手が固まる。どうしたらいいか、わからないんです」

絵は、仕上げに入る直前の段階だった。

仕上げに入ってからでは、描き直すのは難しくなる。

直せないわけではないのだが、そのテクニックを教えるのはまだ早いと思われた。

描き足すとしたら、今だった。だが、大友はそうさせなかった。

今の、この絵の完成形を、見てみたかったのだ。

薄暗い背景に浮かび上がる様に描かれた、繊細な物たち。

柔らかな光りを纏い内省的な濃い影を落とすそれらの物たちは、ひっそりと不思議な存在感を発している。誰にも気付かれぬ様に密かに呼吸を続け、期待を押し止めながら、来るべき瞬間を待っている。

浮き立ちそうなエネルギーを内に封じ込めた静物と、外に向かって拡散希釈されて行くような背景。

その存在感の密度の違いのせい、その絵は無限の収縮と拡張を繰り返している様な錯覚を起こさせた。

「好きな様に描けばいい。実物そっくりの画なんて、写真に任せときゃいいんだ」

その言葉に、彼は少し驚いた様に振り向いた。

今までのデッサンでは、実物に忠実に描くことが重要だっただけに、今回もそのための具体的なアドバイスを貰えるものと思っていたのだろう。

「それ以上描きたくないなら、そこで止めれば良い。絵を描く上で一番難しいのは、筆を止めるタイミングなんだ。手が動かなくなるのは、きっとそれが君の中でのベストなバランスだからだ。背景だってそのままでもいい。それ以上塗りたくないなら、その淵のかさついた感じが、現時点での君の画風なんだろう」

大月 陽は、目を見開き口元を弛緩させて呆然とこちらを見つめ返すばかりだ。

「いいかい、実物と違ってたって構わないんだ。キャンバスの中は、君の世界なんだから。絵なんて、君の自由に、好きに描いたら良いんだ」

あの時の、彼の表情の変化を、俺は一生忘れないだろう。

大友は何度もそう思い返したものだ。

生徒に道を示した時、新たな扉を開いたときの彼らの反応というのは、教える立場にとって最大の喜びでもある。

中でも、大月 陽の場合はそれが顕著だった。

手が止まってしまう、と困惑していた表情。

大友の言葉に、意外そうに見開いた目には徐々にキラキラとした光が瞬き、まるで朝日に照らされたように顔がパァーッと明るくなっていった。

実際にそんなことは起こり得ないのだが、その時大友は、人の顔面が光を放つのを見た気がした。

大月 陽の静かな興奮が、いつの間にか部室中に伝播していた。

部員達が集中して、自分に注目しているのがわかった。大友の指導を長く受けており、お馴染みの演説を何度も聞いているはずの上級の生徒達でさえ、自分達のモチーフそっちのけで耳をそばだてている。

大友は、この教室の静かな興奮の中心点である大月 陽の真っ直ぐな視線を受け取り、そこへ逆流させる様に言葉を注ぎ込んだ。いいか、絶対に忘れるな。

「ただ、構造を無視しちゃいけない。何かを描く時、構造を立体的に意識するんだ。目に見えてる部分以外の所。物の裏側。その、向こう側の空間。

構造が崩れていれば、絵も崩れる。世界は成り立たない。そうだろ？

敢えてわざと崩すという場合もあるが、それだって、しっかりとした構造を思い描けてこそその話だ」

大友は顔を上げ、そこに居る部員達全員に向け、お決まりの台詞を言い放った。

「構造を把握し、しっかりとイメージする。そして、自由に描く。キャンバスの中に、世界を創る。よし、続きを描け！」

雑誌にあった、陽くんが覚醒した瞬間のお話でした。

恩師の思い

「恩師……ねえ」

昨日読んだ記事の内容を再び読み返し、大友は唇に少し歪んだ笑みを浮かべた。

あの演説以来、大月 陽はすっかり自分に懐いてしまった。

あまりにも純粹に、熱心に吸収しようとするので、大友は自分の画風や癖を押し付けぬ様、嚴重に注意しなければならなかった。彼を自分のコピー版にさせたくなかったからだ。

だがその一方で、大友の持つシニカルな視点を植え付けてしまっていた。記事の中にある、絵画コンクールへの無関心さに、それが顕われている。

大友は、いわゆる美術界の因縁ともいうべきものを嫌っていた。

美術に限らないのかもしれないが、あの界限では、師弟関係というものが非常に重視される。

どこそこの美大を出て、だれその師について、ナントカの賞を獲る。

コンクールの賞一つとってみても、派閥だの流派だの系譜だの、受賞が左右される。派閥争いどころか、潰し合いなんてものまで、ちゃんとある。

大きな展覧会であれば、それはもう壮絶だ。

審査員を務める大先生への付け届け、貢ぎ物、袖の下は当たり前。

大先生とやらの家族親戚にまでゴマを擦り、媚び諂い、歡心を得なければ、受賞など滅多に出来ない仕組みなのだ。

今まで、それで潰れてきた画家の卵がどれほど居たことか。

だから大友は、自分の生徒達にいつも言ってきた。

コンクールの結果なんて信じるな。

受賞を目指して絵を描くな。

民間の企業が主催する絵画コンクールなどに出品する際には、こういった傾向の作品が選ばれるのかを分析してみせ、生徒の作品の中からそれに該当しそうな物を出品した。

主催者の求めているテーマや、過去の受賞作の傾向、審査員の顔ぶれを見れば、大方の予想はついた。ちゃんとコツがあるのだ。

審査員が何人居ようが、結局は最古参のベテランの意見が通ることになっている。そのベテランの好みに合わせた作品と、もし、出品者の中にその企業の関係者や大手取引先関係者などが居れば、（よほど下手くそでない限り）その関係者の作品が受賞することになる。

そういった説明を生徒たちにしたうえで応募し、それなりに結果を残してきた。おかげで、我が校の美術部は優秀とされている。

絵の評価なんて、所詮そんなものなのだ。もしかしたらそうでない所もあるかもしれないが、少なくとも自分が目にして来た世界は、反吐が出そうなほど醜かった。

だからこそ、生徒達にはいつも、好きに描けと言う。評価や受賞に拘り過ぎて、絵を描く楽しさを忘れてしまって欲しくないからだ。キャンバスに最初に色を載せるときの、あの緊張を孕んだ高揚感を、失って欲しくないからだ。楽しく描いて、たまたまそれが評価されたなら喜ばば良い。それだけの話じゃないか。

自分の考えは少し偏っているかもしれない、とも思う。だが、大きく間違っていないと自負している。

そういう世界であると知った上で、業界の権威を目指すのか、そういった枠組みから外れて自由に描くのか。どちらを選ぶのかは人それぞれだ。

大月 陽は、確実に後者だ。

面倒なしがらみや、窮屈でギスギスした人間関係などは、彼の最も苦手とする処だった。

画壇という、怨念や執着、時には陰謀が渦巻く世界。

彼のように純粋な人間がそこに飛び込めば、その世界の醜さに魂は穢れ、精神は擦り切れ、絵への情熱や喜びは消え去ってしまうかもしれない。

一匹狼とまでは言わないが、極度にマイペース。揺るぎない自分の世界と、凄まじいまでの集中力。

そういったところが、彼にどこことなく超然とした雰囲気纏わせている。

彼には、孤高の画家というイメージがよく似合う。

人間関係での瑣事に汲々とする大月陽の姿など、大友は見たくなかった。

いつまでも、いつまでも。

あの真っ直ぐな瞳で、混じりけの無い情熱で、手で触れられそうなほどの集中力で、眩しいほどの喜びを以て、絵を描き続けて欲しい。

大友は薄い冊子の表紙を閉じると、それを封筒に戻した。

封筒の差出人の署名、そしてその隣に押してある三日月と太陽の意匠のスタンプをそっと指でなぞり、封筒を引き出しに仕舞った。

もうすぐ授業の時間だ。そろそろ生徒達がやって来るだろう。

授業が終われば、今度は美術部の部員達が集まってくる。文化祭に向けて、発表する絵を真剣に描いている生徒達だ。

今日もまた、同じお題目を唱える事になるだろうか。

お得意の、「構造・自由・創造」だ。

大友はフッと短く微笑んだ。

描く喜びを失ってしまった代わりに、教える喜びを得た自分。

何年もの間、同じ台詞に声を張り上げ、似たような生徒達の間をうろうろと歩き回る毎日。

そんな自分に、生徒達は描くことの喜びを返してくれる。

時々こうして思わぬ贈り物をくれる者がいる。

「恩師」などと呼んでくれる者がいる。

その中でもとび抜けた才能を持つであろう大月陽に、天本さんの工房を紹介した時、大友は心の底で自覚していた。

手放したくなかったのだ。目の届く範囲に置いておきたかったのだ。その姿を、画家としての成長を、彼の描いた絵を、見続けていたかった。

自分が失ったものを、きっと彼が体現してくれる。

彼は自分の夢であり、憧れなのだ。

美大時代に世話になった天本さんになら、信頼して託すことができる。

彼を壊すこと無く、見守り育ててくれる。

あの繊細な感性を支え、無意識の渴望に応え、注意深く鍛えてくれる。

そして何より、大月陽とのうっすらとした繋がりを保つ事が出来る。

今夜は久し振りに、天本さんに誘われている。大月陽の近況を、我が子の自慢でもする様に話してくれるに違いない。それを肴に、さぞかし美味しい酒が飲める事だろう。

1杯目のオーダーは、もう決まっている。華やかな香りと爽やかな甘味にほろ苦さが混じるお気に入りのカクテル、アドニスだ。

「アドニス」はドライシェリーとベルモットで作るカクテルです。ネーミングがそこはかとなく、意味深。

担任教師を伴った面談で初めて工房を訪れた時、大月陽はなんというか、張りつめていた。

ピンと背を伸ばし前を見据えているが、少しでも突ついたらあっという間にポロポロと崩れ落ちそうな、そんな風情だったように思う。彼の境遇を考えれば、無理もない話だ。

市内の高校の美術教師である大友から、事前に陽の家庭環境は聞いていた。また就職するにあたり、陽本人とも様々な話をした。

その際、陽は自分の置かれた状況を落ち着いて受け止めている様に見えた。

天本は、そこに少し違和感を覚えたのだ。

しっかりしているとはいえ、相手はまだ高校生だ。

たった1人の肉親に去られ、普通なら平静で居られるはずが無いのだ。

怒ったり悲しんだり恨んだり。そういった感情を完全に押さえる事など出来ないだろう。

なのにこの少年は、妙に淡々としている。

達観していると言うのか、悟っているというのか……いや、諦めているのだろうか。だからといって、投げ遣りだったり荒んでいたりする様子は無い。

反対に、学生らしい素直さの向こうに、時々老成した雰囲気すら垣間見える。

就職の面接だというのに、緊張すらしていないようだった。

そうでありながら、神経が張りつめている様に見える。

将来への不安や未知の環境への警戒心だろうとも思ったが、何かが違う気がする。

この子は危うい、と天本は思った。

自分の身に起きた事を、何もかも受け入れ過ぎている。

凛々しい真っ直ぐな眉と澄んだ瞳はひどく純粋で、無防備な程に見える。

道を誤れば、その純粋さ故にどこまでも堕ちて行きかねない。そんな不安を覚えた。どんな不幸でさえ、抵抗すらせずに受け入れてしまいそうに思えたのだ。

ピンと背筋を伸ばし、真っ直ぐに前を見据え、張りつめた表情のまま。

大友がこの生徒を自分に託してきた理由が、わかったような気がした。

十 十 十

元々将来は職人系の仕事に就きたかったのだと、陽は面談の中で語った。

スーツにネクタイを締めてのオフィスワークや営業といった仕事には全く興味がないし、自分にそういった適性があるとも思えない。自分の手で物を作り上げていく仕事がしたい。ただ、具体的に何を創りたいのかが、まだわからない。

そのために大学で色々学ぼうと思った矢先に、父親が失踪した。アルバイトをしながらであれば生活費と学費をまかなえるぐらいの預金はあるが、先々を思えば不安もある。なので、高校を卒業してそのまま就職したい。

話を受け、天本は仕事の概要をざっと説明しながら陽を工房に案内した。少し軋む入り口の引き戸を開け、天本に続いて工房に足を踏み入れた陽の様子を見た瞬間、先ほど感じたものの正体がわかった。

集中力だ。凄まじいほどの、集中力。

全方位に向けて張り巡らされていたアンテナが、目の前の作業風景にギュッと凝縮されたのだ。天本は口を噤んで陽の傍らに立ち、その様子を見守った。右半身に、陽の発するヒリヒリするようなエネルギーを感じ、内心驚いていた。

この青年は、集中力のコントロールを学ばなければいけない。集中と弛緩。緊張と緩和。上手い力の抜き方を覚えなければ、自らの精神力で焼き切れてしまいそうだった。

むせ返るような木の芳香。

耳障りで金属的な機械音。

無駄を削ぎ落とした動作で正確に作業する職人達。
そして、目の前でみるみる姿を変え形を成していく木材。
職人達は自分の作業に集中し、こちらに目を向けもしない。

陽はその作業の邪魔になるのを恐れるかの様に息を潜め、入り口に立ち尽くしたまま、工房のあちこちを注意深く見回している。

作りかけの家具、壁際に設置されたいくつもの機械、様々な工具等、初めて見る物にいたく興味を引かれている様子だった。

10分近くもそうしていただけるか。

「大月くん」

陽は弾かれた様に振り向いた。

観察に集中するあまり、どうやら天本の存在を忘れていたらしい。

「どうかね。うちの仕事には興味あるかい？」

近所の木工房の前を通るたびに香る木の匂い、大好きです。

陽くん、お仕事です

土曜の朝イチ、陽の携帯電話がなった。優馬からだ。

「大月くん、またまたお仕事の依頼です」

「え……まさか」

「取材です」

陽は少しの間口を噤んだ。嫌な予感がする。

「こないだの雑誌が出た時さ……恵流が街中走り回って大騒ぎだったんだよね」

10月の終わり、例の無料求人雑誌が2週に渡って発行され、街の至る所に設置された。恵流は文字通り街中をかけずり回り、ここの本屋から一冊、向こうのコンビニから一冊、あっちのスーパーから一冊と、その小冊子を集められるだけ集めたのだった。

「一箇所からたくさん取っちゃうと、他の人に渡らないから。集めた分は知り合いに配って廻った」らしい。

その気持ちは嬉しかったのだが、陽にしてみれば気恥ずかしさが先にたち、大汗をかいたばかりだった。

しかも恵流は、扎扎实り自分用に各3冊ずつ確保していた。保存用・観賞用・持ち歩き用だと言って。

それだけでなく、鞆の中から分厚い封筒を取り出し得意気に言ったものだ。

「陽の分もあるんだよ？」

「……また、雑誌ですか」

「そう。聞いて驚け……なんと、まさかのファッション誌だ」

思考が停止した。呼吸すら止まった。

「所謂、ストリートスナップってやつ？」

「お断りします」

即座にきっぱりと言い切った。

が、優馬は諦めずに食い下がって来る。

「まあまあまあ、そう言わず」

「やあああだあああああよおおおお！！優馬さん、俺が服とかキライなの知ってんだろ！」

「とりあえず、聞いただけ聞けって」

「写真も苦手だって言ったじゃんかあああ」

空いた片手で額を掴み、陽はドスドス足を踏み鳴らしながらその場でグルグルと回った。

「発狂すんな。落ち着け」

笑いを堪えている様な優馬の声に、陽は少しイラついて語気を強めた。

「発狂してねーし！」

「なら、一旦座れ。断っても良いから、一度だけ話聞いてくれない？」

陽はしぶしぶ木の床に腰を降ろし、胡座をかく。

「……座った」

「よし。まず、さっきはファッション誌と言ったが、正しくはファッションサイトだ。ウェブ上の雑誌だな。で、撮影の条件として、写真の中にお前の絵を必ず入れ込む事になってる」

「絵を入れる？」

「そう。背景としてか、小道具としてかはわからんけど、とりあえずそういう約束にしてある。絵の宣伝になるだろ？」

陽は知らず知らずのうちに、長袖のTシャツの裾を引っ張って弄んでいる。

「……宣伝とか、別にいいんだけど」

「良くない」

遮る様に、優馬が言葉を挟む。

「お前は、欲が無さ過ぎる。せっかく描いた自分の絵を、もっとたくさんの人に見て欲しいと思わないのか？ 何のために描いてる？ ただの自己満足か？」

「……そりゃ、見て欲しいとは思うけど」

「どうやって」

口籠る陽に、優馬は言葉を被せた。

「……描き溜めてって、いつか個展でも開けたらな、とは思ってる」

「そうか。で、誰が観に来る？ 友達か？ 工房の人達か？」

黙り込んでしまった陽に、優馬は説き伏せるかの様にゆっくりと、話し始めた。

「いいか、陽。いくら優れた物を作っても、誰も観ないんじゃあ、無いのと一緒にだ。本も絵も同じなんだよ。あちこちでアピールして、作品を知ってもらわなきゃいけない。作品に興味を持ってもらったら、顔と名前を覚えてもらわなきゃ、次に繋がらない。わかるだろ？」

「……うん。それは、まあ」

「描き溜めたら、なんて言ってる場合か？ 今あるチャンスを逃したら、次のチャンスなんて来るかわかんないんだぞ？」

「うん……」

「せっかくのチャンスなんだ。乗っかってみる。で、同時進行でたくさん描け」

畳み掛ける優馬に気圧され、陽は俯いた。Tシャツの裾は振じれて酷い事になっているが、さらに引っ張って振り回した。

「でも、写真苦手だし……」

「またそれかよ」

優馬が電話の向こうで大仰なため息をついた。

「いいか、撮影なんてそのうち慣れる。渡された服着て突っ立ってりゃいいんだよ。お前はプロじゃないんだから」

「……そう簡単に言うけどさ。大体、なんでそんなに薦めるんだよ。また菅沼さんの猛プッシュ？」

一瞬、間が空いた。凶星だったらしい。

「ま、そうなんだけどな。でも、それだけじゃない。話を聞いて、俺も一緒になって推したんだ」

「だからなんで」

「お前の絵が、好きだからだよ」

優馬の強い口調に、そしてその言葉に、陽は驚いて口を噤んだ。

「俺は、お前の絵が好きだから、皆に見て欲しい。『こんなすげえ絵を描くヤツがいるんだぜ！』って、言いふらしたい。で、お前の絵を見てすげえって言ってる奴らに、『コイツはこれからもっと凄い絵を描くんだぜ！お前ら見てろよ！！』って、世界中に大声で言って廻るんだよ」

優馬は一旦言葉を切り、少し声のトーンを落とした。

「なあ、陽。俺が何故、編集の仕事してると思う？俺は、そういうのが好きなんだよ。性分なんだ。俺自身には特別な才能は無いからさ。そのかわり、知られていない才能を引っ張り上げて、広めて、それが世に認められるのを見たいんだ。だって、せっかくの才能がもったいないじゃんか。

いいか、お前には才能がある。俺が言うんだから間違い無い」

「……」

耳を澄ませたが、電話の向こうからは何も聞こえない。息遣いさえも。

「陽、聞ってるか？」

「……うん」

か細い声がようやく返ってきた。

「なんだよ。情けねえ声出してんじゃねえ。お前、前に言ったよな？ 見た人の心にずっと焼き付くような、魂を揺さぶるような、身体的に影響が出ちゃうような絵を描きたいんだろ？ 描くん
だろ？」

なら、やれよ、陽。どんな手使ったっていいんだ。『天才画家 大月 陽、ここにあり！』って、
バシーーーーッとさ。面白いじゃん？」

沈黙の後、フフッ……と小さく笑った声が聞こえた。

「わかった、やるよ」

優馬は思わず、腰の辺りでガッツポーズを作った。

「よし。じゃあ、今日の夜 早速打ち合わせな。いつもの公園にいるか？」

話の展開が早すぎると苦笑いする陽を宥めすかし、優馬は夕食の約束を取り付けた。こういうことは、早い方がいいのだ。時間をおいて、気が変わってしまう前に。

「……あのさあ、優馬さん。さっき、『自分は才能無い』って言ってたけど」

「おう？」

「あると思うよ。人を口車に乗せる才能」

「お前ね。人を詐欺師みたく言うな」

陽は笑って電話を切った。

携帯を床に放り出すと、ヨレヨレになったTシャツの裾を引っ張り上げ、顔をゴシゴシ擦った。

十 十 十

優馬は気付いていた。

陽は、自分の環境が大きく変わるかもしれないという予感、もしくはその可能性に怯えている。よくあることだ。

自分の才能に自信があっても、いや、あるからこそ、もし失敗したら、誰にも顧みられなかったら……と尻込みしてしまう。

怖じ気づき、結局何も挑戦せずに諦め終わってしまう小さな才能も、たくさん見て来た。

そんなことには、絶対にさせない。

陽ならイケる。

電話を終えた優馬はスマホをポケットに戻すと、目を閉じて工房のシャッター絵を思い浮かべた。

最初に見た時は神秘的な夜桜の風景だったが、今の季節、シャッター絵は色鮮やかな紅葉の景色になっている筈だ。

今回、視点が陽、優馬、陽、優馬と切り替わっています。読みづらかったらごめんなさい。

それにしても優馬さん、アツいです。

「なんか、思ったのと違うんだけど……」

「奇遇だな。俺もだ」

早朝、車で連れて来られたのは、閑静な住宅街の一角にある瀟洒な建物の前だった。狭い道路に面した洒落た作りの鉄製門扉が半分開かれ、玄関までの短い小道が続く。開け放たれた玄関扉の奥から、幾人もの動き回る気配が窺える。

「ストリートスナップって、その辺の道っ端で撮るヤツじゃないの？」

「だよな」

「そこのふたり！ 突っ立ってないで、運ぶの手伝って」

運転席から降りて来た芹沢が、ふたりに声を掛けた。素早く車の後部へ回り、トランクを開ける。

優馬は戸惑いながらも歩み寄り、陽の絵を受け取った。

「あの、芹沢さん？ 撮影って、ここで？」

「あー……うん」

「ここって所謂、ハウススタジオってやつですよ？」

肩から下げたカメラと機材をゆさゆさと揺らしながら、菅沼が車から降りて来る。

「あれだよ。ストリートで撮った素人の中から選ばれた数人が、特別にスタジオで撮影～っていう体でさ。でも実は、最初からモデルは決まってるってね。よくある話だ」

未だ門扉の前につくねんと立ち尽くしている陽の肩を、大きな手でポンと叩いた。

「先にスタジオ、後で路上で撮るから。よろしくね」

そう言いおいて、門扉の隙間から身体を滑り込ませると小道の奥へと消えて行った。

「陽、行くぞ」

両手に陽の絵を掲げた優馬に肘で突つかれ、陽は怪訝な顔で振り向いた。

「.....優馬さん、まさか、俺を売った？」

「馬鹿か、人間きの悪い。俺だって今知った。こんな大袈裟なことになってるとはな。大人って、やり口が汚いよなあ」

汚い、とか言っている割に、随分と呑気な口調だ。

「ま、しょうがないじゃん？ 腹括れ」

十 十 十

「ううううう.....首が痒い手首が痒い頭が臭い」

撮影の合間の休憩中ずっと、部屋の片隅で、陽は優馬に向かって呟いていた。髪を切られ何着も服を着替えさせられ、かなり不機嫌になっている。

「まあまあ、もうちょっとだから。ほら、今だけでも上着脱げば」

撮影スタッフが忙しく動き回る中、陽は上着を脱いで優馬に手渡した。襟元から人差し指を差し入れて首の周りを搔いていたかと思えば、ウェーブをつけられた毛先を引っ張り、匂いを嗅いで鼻に皺を寄せている。

「大月さん、あんまり髪いじらないで下さい」

若い女性スタッフに叱られる。先ほど陽の髪を切った女性だ。

部屋に入るなり鏡の前に座らされ、後ろで括っていた髪をほどかれた。手櫛で髪を梳きながら無表情で「これ、自分で切ってます？」と聞かれ、認めると「ちょっと整えますねー」と、問答無用で髪を切られたのだ。と言っても、毛先を整えた程度だったが。

陽はただ、されるがままに呆然と座っているしかなかった。

いきなり髪を切られた事と、その間の無表情が尾を引いているのか、この女性に少し苦手意識を持っている様子だ。

叱られた陽は、「はい……」と呟いて手を引っ込めた。

陽は項垂れたまま優馬に忍び寄ると、優馬の脛を狙って蹴る真似をした。

「おい、八つ当たりすんな」

優馬は笑いながら陽の攻撃を避ける。

「整髪料が臭い。顔が痒い」

ブツブツと呪いの様に呟きながらなおも優馬を蹴る振りを続けていると、カメラを掲げた菅沼が近寄って来た。

「相変わらず仲良しだねえ」

ニコニコしながらシャッターを切ったが、ふと、ファインダーから目線を外す。

「あれ、なんかご機嫌斜め？」

陽はいつの間にか優馬の背後に回り込み、壁に額を付けてじっと立っている。

優馬は苦笑いで壁に貼り付いている陽を指差した。

「こいつの奇行は気にしないで下さい。野生児なんで、首や手首を締め付ける服が苦手なんですよ。高校の制服も、第2ボタンまで開けて袖のボタンも留めないで着てたって」

「ああ、そうなんだ。まあ、そういうことならみんな脱いでもらっても構わないんだけどね。むしろ大歓迎だよ」

笑いながら言うので冗談だとはわかったが、陽は一瞬ギクリと固まった。

すぐさま振り向いて優馬の腕から上着をもぎ取ると、そそくさと上着を着直した壁に貼り付く。

菅沼と優馬が談笑しているのを無視して、陽は冷たい壁に額を押し当て続けた。

陽「.....」

優馬「お、どうした？急に熱心に観察して」

陽「変な服だけど、一応構造を見ておかなきゃと思って。でもこれ、本当に売り物？」

優馬「しっ！声が大きい (^_^;)」

室内での撮影をなんとか終え、陽は別室で用意された服に着替えていた。

先ほどまでの、不自然なまでに凝ったデザインのジャケットや誰が買うのかと首を傾げる様なシャツとは違い、陽の好みに合ったシンプルな服だ。だが、革のチョーカーを着けるのに苦心している。

見かねて優馬が着けてやる。

「大体、あんなカッコで絵描く分けねえじゃん。汚れるし、動きづらいしさ」

どうやら、イーゼルに立てかけた絵の前で、絵筆とパレットを持たされたのが余程気に入らなかつたらしい。

ブツブツ言いながら髪ウェーブを手櫛で強引に伸ばすと、元通りひとつに括った。

髪を梳いた手を鼻先に近づけ、クンクンと匂いを嗅ぐ。

「くっせ」

テーブルに置かれていたチョコレートや焼き菓子を暢気に啄んでいた優馬が、鏡の前に置いてあったウェットティッシュのケースを取りに行き、「ほい」と投げて寄越した。

「別にそこにリアリティーは要らなかったんじゃない？ ファッション誌だし」

「そうかもしれないけどさ。なんか馬鹿みたいじゃん」

ウェットティッシュで手の平をゴシゴシ擦りながら、陽は何度も匂いを確認した。

部屋の向こうからは、別のモデル達が撮影している物音が聞こえている。

優馬は部屋を横切ると、ドアを開けて撮影の様子を窺った。

「なあ、ちょっと様子見に行かね？」

「え？ いいよ、俺。なんかアイツらヤな感じだし」

撮影を終えた陽と入れ替わる形で別のモデル達が入ってきた時、値踏みするような視線で眺めまわされ、おまけに会釈を無視されたのだ。

「ああ、あれね。新入りがロクに挨拶もしないと思って、向こうもムカついたんかもな。ほら、

お前一番最初だったじゃん？ 下っ端は早朝から撮るらしいから」

「あ、そうなんだ。じゃ、俺がマズかったのか……ま、いっか。もう会う事もないし」
クシャクシャに丸めたウェットティッシュをゴミ箱に放り投げ、陽は肩をすくめた。

「だからさ、行こうぜ。絵の素材としてさ、見といて損は無いじゃん」

陽はピタリと動きを止めた後、優馬を振り返った。
急に瞳が輝きを帯び、興味を示したのがわかる。

「素材か。それもそうだね……よし、行く」

ふたりは何故か忍び足で腰を屈め、壁伝いに廊下を進んだ。
廊下にはふかふかのカーペットが敷き詰めてあったので、足音を立てる心配は要らなかったの
だが。いや、それ以前に、見つかったって別に構わないのだ。

先に入り口に辿り着いた優馬が、そろりと首を伸ばし部屋を覗き込む。
振り返ると、声に出さずに「オッケー」と囁き、ぐるぐると腕を回して陽を手招きした。こうい
う時の優馬はやたらと楽しそうで、陽も釣られて楽しくなってしまう。子供の頃によくやった、
探検ごっこを思い出す。

優馬は一步下がると、今まで自分が立っていた位置に陽を立たせた。

「見えるか？」

優馬の囁きに、陽は無言で頷いた。優馬が殊更に声を潜めるので、なんだか見つかってはいけな
い気がして、陽は少し膝を曲げ体勢を低くする。
そんな陽に背後から覆い被さる様に立ち、優馬は陽の頭の上から覗き込む。
正面から見ると、まるで不格好なトーテムポールだ。

部屋の中では、ひとりのモデルがカメラの前に立ち、慣れた様子でポーズを取っている。
音楽に合わせて様々にポーズや表情を変え、その度にけたたましくフラッシュが焚かれた。

「やっぱプロは違うな」

「悪かったな。ってか、俺ん時音楽なんて鳴ってたっけ？」

「鳴ってただろ。聞こえてなかったのか」

「うん。全然気付かなかった」

「ははは。バーカ」

「うるせ」

陽が急に立ち上がったので、優馬は顎を強かに打った。

「うぐっ」

声にならない声を上げてしまい、気付いた数人がこちらに視線を向けた。

ふたりは素早く首を引っ込め壁に貼り付いて身を隠したが、菅沼に見つかった様だ。

「ああ、大月くん。着替え終わったんだね。じゃ、外行こう」

「マヌガッさん、こっちの撮影はいいんですか？」

優馬が顎を擦りながら訊ねる。

「いいのいいの。俺は大月くん専属カメラマンだから♪」

弾む様なその声に、部屋の隅で待機していたモデル達の何人かが振り向いた。

「ハイこれ。お疲れ～」

陽は菅沼に手渡された小さなお菓子を受け取り、ペコリと頭を下げモソモソと礼を言ったが、そうする間にもモデル達の視線が突き刺さり、小走りで廊下を駆け戻った。

十 十 十

数メートル前をぶらぶらと歩く菅沼に聞こえない様、またもやふたりは声を潜めていた。

「あのさ、優馬さん。菅沼さんって、もしかして、何ていうか、その……」

「あ？ ああ……まあ、急に襲われたりとかしないから、気にすんな。公私混同はしない人だから

。多分」

「多分って……」

12月の初めとしては暖かい日だ。もうじき昼近いので、陽当たりの良い場所では上着が要らないくらいだ。

住宅街を抜け、少し広い通りに出る。

「じゃあ、そこに座ってくれる？ そう、角んところ」

菅沼が指した、膝ぐらいの高さの街路花壇に腰掛ける。ツツジの植えられた花壇の向こうは、どこかの企業の石塀だ。

「もうちょいリラックスしろよ。お前は武士か」

膝の上に手を置き顔を強張らせて背筋を伸ばす陽を見て、優馬がヤジを飛ばす。

「うんと前屈みに。そう、膝に肘を乗っけて。前で軽く手を組んで」

まだ鯪張っている陽に、菅沼が細かく注文を付ける。

優馬が菅沼の背後へ回り込み、フラッシュの上から変顔をして見せた。目を眇めて鼻に皺を寄せ、歯をむき出しにしている。

笑え、という意味だろうか。

陽の「何その顔」とでも言いたげな怪訝な表情を見て諦めた優馬は、路線を変更した。

「このでくの坊と違って、やっぱプロのモデルってすごいですね」

挑発的に眉を寄せ睨みつけてくる陽に向かって、からかう様に下唇を突き出す。

「んー？ ああ、プロっても、彼らはまだ卵だよ。モデルの卵とか、タレント志望のレッスン生とか」

「あ、そうなんだ」

「で、『路上でスカウトされましたー』ってことにして売り出すんだ。ま、ホントにスカウトされてる人も中には居るけど」

そう話している間にも、フラッシュが何度も焚かれる。

「厳しい世界だからねー、けっこうキラキラギスギスしてるもんだよ。彼らも本気だし」

「そう。さっき、すげえ怖かった。菅沼さんが『専属』とか言うから……視線が痛かったです」

「あはは、ごめんごめん。彼らには後で説明しとくから。よし、じゃあ次は立ってみて」

陽が初めてまともに話し掛けたせいか、菅沼は嬉しそうだ。シャッターを切る回数が増す。

「あ、そうだ」

優馬がコートの中ポケットから折り畳まれた紙片を取り出し、菅沼の頭の上でヒラヒラと振った

。

「陽、終わったら、これやる。頼まれてたヤツ」

「あ、マジで？ ありがと！ すげえソッコー」

「まあな。任しとけて言ったろ？」

陽の表情がパッと明るくなったのを見て、菅沼はチャンスとばかりに立て続けにシャッターを切った。

陽「菅沼さんって、やっぱソッチの……いやうん、別にいいんですけど」

菅沼「耽美主義と言ってくれ」

1 2 月半ばを過ぎ寒い時期だというのに、陽の似顔絵屋は大盛況だ。

もちろん、例の取材の効果も大きかった。

あの撮影の後2週間足らずで、路上で撮った陽の写真がサイトに掲載されたのだ。

客の大半は、求人誌やウェブサイトを見てやって来たらしい。中には、求人誌のインタビュー記事にサインをせがむ客もいた。

そんな時陽は、4分の1の太陽と三日月のマークに自分の名を書き添えた。

恵流はいつもの様に自分の手作業をしながら、少し離れた場所にあるテーブルから、時々陽の仕事ぶりを幸せそうに眺めている。

「隣に座ってやればいいのに」と陽から再三言われているのだが、客が来づらくなるのではないかと、頑なに断って距離を取っているのだ。

指編みで花のモチーフを編み上げると、恵流は大きくひとつ息を吐いて首を回した。今日1日で、結構な数のモチーフが編み上がった。これらは、友人達と協力して、帽子や髪飾り、様々な小物等に取り付けられる予定だ。

日が傾きかけている。おそらく、今の客を描き終えれば今日は店仕舞いだらう。陽が仕上げの作業に入っているのを確認し、恵流はテーブルの上の色とりどりの毛糸や道具類を片付け始めた。

そういえば、湖の向こうのアイスクリーム屋のお兄さんはどうしているだろう。今の時期でも店は営業しているのだろうか。

思えば、気恥ずかしかったこともあり、一度だけ交際を報告したきり顔を見せていなかった。私達の事なんてもう忘れてるかもしれないけど、久々にちょっと挨拶に寄ってみようかな……

恵流は背伸びして湖の向こうを覗き見たが、大きな樹に遮られ店内の様子を見る事は出来なかった。

「なあアンタ、〇〇ってサイトに載ってただろ」

陽が絵の道具を片付けていると、数人のグループの一人に声を掛けられた。
顔を上げると、男3人女2人が遠巻きにこちらを見ていた。

「ああ、はい」

グループのうち、一人の男が近づいて来た。学生だろうか。ひよろりとして尖った顔立ちの、神経質そうな男だ。

陽の絵を見下ろすと、馬鹿にした様にフンと鼻で嗤った。

「モデルとか調子乗ってチャラついてるから、こんなチマチマした絵しか描けないんじゃない？」

おい、やめろよ……仲間が声を掛けるが、男は意に介さない。

陽は座ったまま、口角だけで微笑んで男を見上げた。

「大きい絵も描いてるんだけどね。持ち運びや管理が大変だから、外では売らないことにしてるんだ」

こんな風に言いがかりをつけられることは、今までにも何度かあった。不愉快だし面倒ではあるが、いちいち本気で腹を立てたりしない。

だが、その落ち着き払った態度が、男の気に障ったらしい。瞳にヒステリックな光を帯びた。

「たかが似顔絵屋が、いっばしのアーティスト気取りかよ。中途半端なことしやがって」

視界の隅で、恵流が立ち上がったのがわかった。

陽はちらりと視線を送り、身体の陰で手を振って「来るな」と合図する。

「ただの、趣味の延長だよ。君に迷惑かけてないと思うけど？」

男の鼻息が荒くなり、顔は青ざめ、目つきがさらに険しくなった。

「雑誌やらネットでちょっとぐらいチヤホヤされたからって、調子乗んなよ。ド素人のくせに」

「ああ、雑誌も見てくれたんだ。ありがとう。別に調子に乗ってるわけじゃないけど……」
ド素人とまで言われて、さすがにカチンときたのだろうか。相手の目を見据え、陽は挑発的に微笑んでみせる。

「年始の特集でまたあのサイトに写真出るらしいから、良かったらそっちも見てみてね」

男は血走った目で一步踏み出すと、いきなり殴りかかってきた。湿った嫌な音と共に、左頬に痛みが走る。

仲間の女の子が小さく悲鳴を上げ、暴行を止めようと別の男が駆け寄ってくる。

「俺は、お前みたいなヤツが、一番嫌いなんだっ」

男は鼻息荒く陽の胸ぐらを掴み、うわずった声で叫びながらがむしゃらに揺さぶってくる。

陽は面倒くさそうに立ち上がると、相手の右手首を掴み、振り上げた。

男は顔を歪めくぐもった声を上げ、堪らずに腰を屈める。

「すみません。あの、あの、こいつも絵やってるんですけど、締め切り近いのに課題が上手くいかなくて追い詰められてるんです。ごめんなさい」

仲間の青年が、及び腰ながらもとりなして来る。

中性的ともいえる程優し気な顔立ちのその青年は、ほとんど泣きそうだ。あまりの怯えっぷりが馬鹿馬鹿しくて、陽はうんざりした表情で「ああ、そういうこと」と呟き、その男に軽く頷いた。

。

惠流「このベンチからだ、アイス屋さん見えないなあ………挨拶に行ったらまた『そういうのいいから』って言われちゃうかも………っていうか、アイス屋さんって冬でもやってるのかな？」

アイス屋「肉まん、いかがっすかー」

「あのさあ」

陽は目の前で苦悶の表情でもがいている男に視線を戻した。睨むでも無く蔑むでも無く、心底面倒くさそうに顔をしかめている。

「あんたも絵描いてんだろ？ 絵筆握る手で人殴るって、どうよ。怪我でもしたら困るだろうが」
そう言いながら、手首を握る手に更に力を加える。

「う、うるさい！ うるさいうるさい！！ お前なんかに、何がわかるっ」

男は顔を紅潮させ、陽の腕から逃れようと不格好にもがいた。頬にかかる前髪が乱れ、男の目元を覆い隠す。

力で敵わないと見るや、男は唸り声をあげ、シートに並べられた陽の絵を狂った様に踏みつけた。携帯用の筆洗いバケツが蹴られ、汚れた水がぶちまけられた。

その瞬間、男が吹っ飛んだ。陽が突き飛ばしたのだ。

そして大股でつかつかと歩み寄ると、今度は男の胸ぐらを掴み持ち上げた。

「おい」

掴み上げられた男は声も出せずに口をパクパクさせる。ハッハッ、と浅く息を吐くばかりで、足が震え、自力で立つことも出来ない。

「お前、踏んだな……今、わざと、踏んだよな」

「だったら何だよ。あんな落書き、どうってこと」

ワナワナと震えながら、男はどうにか細い声を上げた。が、それは途中で遮られた。

「仮にも絵を描く人間が、他人が描いた作品を、踏みつけるって、どういうことだ？ ああ？ 落書きだろうがなんだろうが、ひとの、作品に、泥を、付けるってのが、どういう、ことか、わかってんのか」

一言一言区切りながら、胸ぐらを掴んだまま男を揺さぶり、ぶんぶん振り回す。

声を荒げもせずほとんど無表情のまま怒っている陽が余程恐ろしいのか、男は完全に戦意喪失していた。

陽は男を再び持ち上げると、額がくつつく程に顔を近づけた。

「あんた、さっき俺のことチャラついてるとか言ってたけどさあ」

冷たい目で男を睨み降ろしながら、低く押し殺した声で、唸る様に呟く。

「こっちは、あんたらが親の金で大学通って楽しくお絵描きしてる間、一日中角材ぶん回してんだよ。あんた、喧嘩慣れしてなさそうだけどさあ、八つ当たりするなら、相手選べ。な？」

陽は再び真っ白な顔色になったその男を、まるで荷物を放る様に放り投げた。

取りなしに来た優男は、もんどりうって転がり込んで来た男を受け止めきれず、一緒に倒れ込む。

「それ、持って帰ってよ」

離れたところで固まって竦んでいる仲間に向かい顎をしゃくって示すと、彼らは弾かれた様にコクコクと頷き、倒れている二人に慌てて駆け寄った。

なんとか二人を助け起すと、グイグイと引っ張って逃げて行く。

途中でひとりの女の子が立ち止まり振り返ると、「ごめんなさい！ほんとに、すみませんでした」と頭を下げた。

陽はあやふやに手を振り、女の子が仲間の元へ駆け戻ったのを確認すると、恵流の居るテーブルを躊躇いがちにそろそろと見遣った。

恵流はそこに居なかった。荷物も無い。

慌てて見回すと、いつの間にか恵流は散らばった陽の絵をかき集め、泣きそうな顔で絵を見つめ立ち尽くしていた。

陽はゆっくりと近づき、小さな声で「恵流、ごめん。怖かったよな」と謝った。

それには応えず、恵流は唇を震わせながら絵を確かめている。

「これ……靴の跡……濡れちゃってるけど、いくつかは大丈夫みたい」

陽は恵流の手からそっと絵を抜き取った。

一点ずつビニールに入っているが、ほとんどの絵に隙間から汚れた水が入ってしまっている。

「ありがと。でもこれ、全部捨てたいんだ。なんか、ケチがついたみたいでさ」

「あ……うん、そっか。そうだね」

恵流は鳩尾の辺りで両手の指を組み合わせ、そわそわと怯えた様子で落ち着き無く視線を彷徨わせている。

「……ごめんな。せっかく恵流が作ってくれた落款も押しであるのに」

「ううん。そんなのは、いいの。私のことは気にしないで」

束ねた絵を折りたたみ椅子に放り投げると、陽はそっと恵流の両手を包み込んだ。いつもは温かな指先が、冷えきっている。

「ごめんな。怖がらせちゃったな。もう大丈夫だから。もう二度と、恵流の前であんなことしないから。ごめんな」

恵流は顔を伏せ、そのまま陽の胸に額を押し当てた。

「私は大丈夫。怖くないけど、すごく悔しかった。陽の絵を、あんな風に……怒って当然だよ」

パタパタと微かな物音が聞こえて視線を落とすと、地面に小さく丸い水の跡がついていた。

「あいつ、今度またあんなこと言ってきたら、私が目打ちで刺してやるんだから。で、裁ちバサミで丸坊主にして、それから、二度と馬鹿なこと言えない様に、口をワイヤーで縫い合わせて、それで、それで……」

そう言っている最中にも、小さな丸い水玉模様が増えていく。

陽は両手を離すと、恵流の頭を抱きしめて小さく笑った。恵流が陽の上着の裾をギュッと掴む。

「恵流を怒らせたなら、怖いな。でも、恵流はそんなこと言わなくていいから、ね」

まるで子守唄でも歌っているみたいに、ゆっくりと、陽は恵流の頭を撫で続けた。

恵流ちゃん、可愛い顔してけっこう猟奇的ですね.....

陽の着信音。心配でずっと待っていた恵流は、1コール鳴り終わらぬうちに電話を取った。

「陽？随分遅かったんだね」

「ごめん。もしかして、心配してた？」

「うん、ちょっとはね……」

† † †

あの後、恵流が大分落ち着いたのを見て取ると、陽は彼女をベンチに連れて行き座らせた。昼間、恵流が座っていたところだ。

近くの自動販売機へ走り、温かい飲み物を買ってきて恵流に手渡す。

「片付けて来るから、これ飲んで待ってて」

駆け戻り急いで後片付けを始めた陽を、恵流はぼんやりと眺めていた。

束ねた絵を取り上げた陽は、一瞬絵を捻り潰すような動作をしかけたが、思い直して再び絵をまとめると、バッグに仕舞った。

きっと、私に見えないところで処分するつもりなんだ。

陽は、そういう人だ。そういう、心の優しい人だ。

落款のことを気にしてくれたのを思い出し、胸の中がじんわりと熱くなる。

(私、この人、ほんとに好きだ。大好きだ………)

本当はさっき、すごく怖かった。

暴力を間近で見るのは初めてだったし、何より陽が怒ったのを見るのも初めてだった。

でも、陽の怒りが、恵流にはよくわかった。

自分が力を注いだ作品にあんな事をされたら、怒らない方がおかしいのだ。

(私が男だったら、絶対2、3発殴ってる。いや、男じゃなくても殴ってやれば良かった)

出来もしないことをあれこれ想像しながら、恵流は温かな紅茶の缶を握りしめ、陽の背中を見守っていた。

「恵流、ごめん。ちょっと今日は、メシ行けない。楽しく過ごせそうに無いや」

片付けを終えた陽が済まなそうに申し入れてきた時、恵流はすぐにそれを受け入れた。自分もそう思っていたからだ。

きっと私は、また興奮するか怒るか怯えるかして、陽に気を遣わせてしまう。

それに陽だって、ひとりになりたいだろう。

「俺、もうちょっと頭冷やさなきゃ。ほんと、ごめんな。必ず埋め合わせするから」

恵流は笑って、陽に紅茶の缶を差し出した。

「埋め合わせなんて、いいよ。私もそう思ってたの。今日は、これ飲んで解散しよ」

十 十 十

もうすぐ日付が変わろうとしている。

・・・私を家まで送り届けた後、陽はこんな時間まで何をしていたんだろう。

「陽、もしかして、ちょっと酔っぱらってる？」

「……うん。やっぱ、わかる？」

電話の向こうからでも、少し舌がもつれているのが聞き取れた。

「なんか、気持ちが鎮まらなくてさ。そこらじゅうぐるぐる歩き回りながら、コンビニ見つける度に酒買って飲みました。ごめんなさい」

咎めるつもりなんて、恵流にはさらさら無かった。

「大丈夫？ あの人達に、また会ったりしなかった？」

「あはは。大丈夫、大丈夫。あいつら探しまわって歩いてたわけじゃないから」

「うん、それはわかってるけど……」

「ただ、一回転んじやった」

恵流が声を上げる前に、陽が慌てて言い募った。

「でも大丈夫。ゴミ置き場のところに突っ込んだだけで、怪我はしてないから」

「ゴミ置き場に突っ込むって……結構派手に転んだんじゃ……」

「うん、杖ついた変なおじいさんとちょっとぶつかっちゃって。よくわかんないんだけど、ふわって飛ばされたみたいだね、ゴミの山に背中から落ちたんだ。でも、全然痛くなかった。だから、心配要らないから」

要らないと言われても、心配するなと言う方が無理だろう。

「……わかった。そのおじいさんは？ 怪我しなかった？」

「うん。転んだのは俺だけ。そのおじいさんに助け起してもらったぐらいだし」

「殴られたところは？ 痛くない？」

「ああ、あれは大丈夫。全然効いてない」

例の騒ぎのことや、予定を潰してしまったことについて何度も謝る陽を遮り、恵流は気になっていたことを聞いてみる。

「あの人、逆恨みで仕返しとかしてこないかな。お友達の前でコテンパンだったし。工房の場所とか、調べたらすぐわかっちゃいそう……」

陽は電話の向こうで、呑気にあはたと笑った。

「平気平気。うちの工房の先輩達、俺以外はみんな強いから。柔道やら空手やらで凄かったらしい。乗り込んで来たとしても、回れ右で帰るだろ」

「えと……訴えたりとか、してこないよね？」

「んー、大丈夫じゃない？先に殴ったのは向こうだし。俺、殴ってないもん。振り回して投げたけど、怪我はしてないだろ。っていうか、そんなに心配しなくても大丈夫だって」

(陽の方こそ、なんでそんなに楽観的なのだよ……)

恵流は小さなため息をついたが、本人がそう言っている以上、それで納得するしか無いだろう。

「あのね、陽。今だから言うけどね……」

腰掛けていたベッドから降り、クッションを引き寄せて床に座る。ベッドの側面にもたれかかると、ベッドが少し軋んだ音を立てた。

「ほんとはちょっと怖かったの。喧嘩なんて初めて見たし、それに陽があんなこと言うなんて、思ってもみなかったし……」

恵流は少し不安気に、スマホを両手でしっかりと持ち直した。

「あんなこと？」

「あの、角材がどうとかって……」

『うっ、あああああああああ！！あれ！違うから！！』

心細そうな恵流の小さな声をかき消す様に、電話の向こうで取り乱した叫び声が上がった。驚いて、恵流はほんの一瞬、電話を耳から遠ざけた。

「あれはね、工房の竹内さんって人の受け売り。ずっと前、忘年会かなんかの帰りに、酔っばらった大学生に絡まれたことがあったんだ。その時にさ……」

「あ、そうなんだ」

「そう。竹内さんなんて、もっと怖かったよ。俺なんかよりムッキムキだし背も高いし、ただでさえ顔も怖いしさ。相手にちょっと同情したぐらい」

「あはは」

陽は何故か妙に饒舌だ。いつもより早口だし、声も僅かだが高くなっている。

「でさ、相手が逃げて行った後、シレッと行ってんの。『角材ぶん回すって、嘘は言ってないからな。相手がどう受け取るかは、向こうさん次第だ』ってさ」

「えっと、怖い集団の人と勘違いさせたってこと？」

「そういうこと。相手はうちが木工房だなんて知らなかったからね」

「すごい。頭いいかも」

「いかつい見た目の割にね。でも、その竹内さんに言わせると、ずっと年上の村松さんの方がよっぽど強いらしいんだ。寡黙ですごく優しい人なんだけどね」

「へえ……」

「だから、逆恨み襲撃については安心して。……と、言うわけで。例のやつは忘れて下さい。恥ずかしいから」

恵流は精一杯の低音を作って言った。

「……こっちは、一日中角材ぶん回してなんちゃらかんちゃら」

『うわあああああああああやめてええええええ！』

電話の向こうで、陽が悶絶しているのがわかる。

「マジで、自分があの台詞憶えてるなんて、あの時まで自分でも思わなかったんだよ？ ましてや自分が使うなんて、思ってもみなかったの！ でも、自然に出ちゃってたんだよお……ごめんなさい。お願い。何でもしますから、もう言わないで。勘弁して下さい。忘れて下さい。恥ずかしいです」

あまりの狼狽ぶりがおかしくて、恵流は声を上げて笑った。
腹筋が痙攣し、目尻から涙が流れる。そうするうちに、妙な緊張感や不安感は薄れていった。

「ひでえ……恵流、笑い過ぎ」
そう言う陽の声も、笑いを含んでいる。

「だって……」
笑い過ぎて咽せながら、恵流は涙を拭った。

「はあ、お腹痛い。でも、いっぱい笑ったらなんか気持ちが落ち着いたみたい」
「俺も。平常心復活したっぽい」
「じゃあ、今日のことで謝るのは、もう無しね。あと、あの人の入った事、気にしちゃダメだよ。陽がカッコ良くて才能あるから、嫉妬してるだけなんだから。絶対、そうなんだから」

「わかった……恵流、ありがと。おやすみ」

陽くん、これは恥ずかしい……

でも、恵流ちゃんからの褒め言葉をサラリと受け入れてるあたり、ナカナカです。

初めてのクリスマス

ノックの音の後、すぐに鍵が開いた。

「……ただいま？」

「おかえりなさい！早かったんだね」

狭い玄関口で靴を脱ぐ。片隅には、小さなショートブーツが揃えて置いてあった。

「せっかくのイブだからって、早めに上げてくれたんだ。なんか、すごくいい匂いする」
照れくさそうに鼻を擦りながら、陽は嬉しそうに笑った。

仕事終わりに自転車を飛ばして受け取りに行ったケーキを、恵流に手渡す。

「ふふふ。張り切って作ったもん。いつでも食べられるよ」

授業を終えた恵流は真っ直ぐ家に帰ると、準備してあったクリスマス料理を仕上げ、ここへ運び入れた。

少し前に貰った合鍵を初めて使って部屋に入り、料理の盛りつけや部屋の飾り付けを済ませていたのだ。

部屋に上がった陽は、ぐるりと部屋を見渡した。

色とりどりの紙鎖やキラキラ光るモールが壁に取り付けられ、棚の上には小さなクリスマスツリーが置いてある。

「うわあ、すげえ」

顔を輝かせて部屋中を眺めまわす陽に、恵流が声を掛けた。

「陽、お仕事終わったらすぐシャワーでしょ？お部屋見るのは後にしたら？」

「あ、そうだった。急いで済ますから」

羽織っていたフード付きのブルゾンを脱ぎながら、部屋の奥へ向かう。

「急がなくていいから。風邪ひいちゃうよ」

「うん。あ、リースだ」

クローゼットの取っ手に掛けられたクリスマスリースに気付いたらしい。ブルゾンをクローゼットに仕舞い着替えを取り出すと、洗面所へ向かう。洗面所のドアが閉まり、また声が聞こえた。

「あ、雪だるま」

姿見に貼り付けた、ジェルシールだ。恵流が耳を澄ましていると、シャワー室のドアが開いた音が聞こえた。

「あ、サンタだ！」

シャワー室のタオル掛けに取り付けたサンタクロースの人形だ。

トイレのペーパーホルダーの上に置いたトナカイにいつ気付くだろうかと楽しみにしながら、恵流はお気に入りの店で買ってきたバゲットを切り分けた。

† † †

「すごい！ピッタリ！！」

革の手袋を嵌めた両手を何度もひっくり返し、目を丸くして仔細に眺めている。

フルオーダーのその手袋は、指先がいつも余ってしまうとボヤいていた恵流の両手に完全にフィットしていた。

「良かった。写真撮られまくって店情報ゲットした甲斐がありました」

† † †

ファッションサイトの撮影に協力するかわりに、という訳ではないが、陽は優馬にある依頼をしていた。

手袋をオーダー出来る店をいくつか調べてもらう、というものだ。

もちろん自身でも調べてはみたのだが、いまいちピンと来る店が無かった。それで、ファッション関係者が揃う現場になら良い情報があるかもしれないからと、優馬に口利きしてもらったのだ。

撮影を終えた陽は、その足で店へ向かい、すぐにオーダーを済ませた。

恵流の手のサイズや写真などは持っていなかったが、陽は店員の目の前でサラサラと数枚の絵を描いてみせた。

両手の表裏、斜め横からのアングル。普段よくしている指輪まで描き添えた。

「サイズはこのくらいです」

呆気にとられる店員を他所に、今度は机の上のメジャーを勝手に取り上げ、丸めて各指の太さや掌の厚みを示す。

付き添ってきた優馬に心配そうな目配せをしてきた店員に、優馬は自信たっぷりの笑顔を返した。

「大丈夫です」

サイズ表に全ての数値を書き込み終わると、陽は素材やデザインをテキパキと選んだ。出来上がりに明確なイメージがあるらしく、ほとんど迷いが無かった。

外側がアイボリーのスエード、掌側は同色のラム革。履き口は毛足の短いファーでぐるりと囲まれている。

内張りには、暖かく肌触りの良いシルキーベルベットという素材を選んだ。

手首のところには、温かみのある水色と少し青みがかかったピンク色、2色のレザーを合わせて細いベルトを配してもらった。両方とも恵流の好きな色だ。

「デザインも、すごく可愛い！！このベルトも！」

恵流はなおも拳を握ったり開いたり、指を複雑に動かしたりして感触を確かめている。

「恵流のことだから、自分好みにカスタマイズするだろうと思って、シンプルなデザインにしたんだ。そのベルトは、チャームとか通せる様になって思ってた」

少しそわそわと心配そうに覗き込んでいる陽に、恵流は弾けるような満面の笑顔を向けた。

「完璧！！素晴らしいよ！すごく嬉しい！」

「気に入ってくれたなら、良かった」

陽はほっとした表情を浮かべ、肩をすぼめて笑った。

「気に入ったところじゃないよ！こんなに嬉しいプレゼントは、生まれて初めて。あのね、もちろん手袋自体もそうなんだけど、陽が憶えててくれたことが、わたし、一番嬉しいの」

『冬になったら、赤ちゃん用の手袋を買ってあげましょう』

陽がおどけた口調でそう言ったのは、確か初夏の頃だった。

あの時は冗談だとばかり思っていたから、本当にプレゼントしてくれるなんて思っていなかったのだ。

恵流は飛び上がる様に立ち上がると、低いテーブルを回り込み、胡座をかいている陽の膝の中に座った。陽に背中を預けて座る、恵流のお気に入りの体勢だ。

腕を伸ばして両手を広げ、かざして見せる。

「どう？似合う？」

「うん。よく似合ってる」

恵流の頭の上に顎を乗せ、陽は前屈みになってテーブルの向こうへ手を伸ばした。

ウエ、苦しい……と呻く恵流に構わず、空の小さな紙袋を引き寄せる。

「恵流、まだあるから。ハイこれ」

手袋の店の紙袋の中から、小さな革袋を取り出した。

恵流の開いた両手の上で逆さまに開くと、丸い、水色と白のマーブル模様の石がついたネックレスがこぼれ落ちる。

「これ……ラリマー?!」

「ああ、多分そう。そんな感じだった。良かった、実は名前忘れてたんだ」

余程驚いたらしく、恵流は目を丸くして石を見つめている。

「すごい……どうして、私の欲しいものがわかったの？」

「えっと、まあ、偶然？手袋の店のレジのところにあってさ。なんか、地球みたいだなって思ってた」

恵流は手袋をしたままの指先で器用にフックを外し、ネックレスを首にかけた。

「大月 陽が『太陽と月』で、私が地球。だね」

恵流が首を捻って見上げると、陽は耳の淵を赤くしてそっぽを向いた。

「うん。まあ、そういうこと……かもね」

「あ、そうだ。ケーキ食おう。ケーキ」と呟きながらそそくさと席を立つ陽に断わり、恵流は足早に鏡を見に向かった。

洗面室のドアを開け放したまま、少し大きな声で話し掛ける。

「ラリマーってね、たぶん最強の石なの。少なくとも、私にとってはね。『愛と平和』『喜び』、それから『創造性』をもたらすって言われてるんだ」

「へえ、そうなんだ。なら、既に充分じゃん。恵流には必要無さそうだけど？」

パタパタと足音が聞こえたかと思うと、キッチンに立つ陽の背中に温かな重みがぶつかった。恵流が飛びついてきたのだ。

「必要あるもん。お守りにするの」

「わかった。わかったから暴れんな。俺いま包丁持ってるから、危ないからね」

「はあい」

背中に取り憑いたまま小さくジャンプを繰り返していた恵流は、大人しく離れた。後ろ向きに後ずさり、その場で回転してみせる。

「どう？ 似合う？」

「似合う似合う」

「ずっと欲しかったけど、高くて躊躇してたの。いつか買おうって思ってた」

恵流はまだくるくると回転している。

「それは良かった。ほら、ケーキ分けたよ。回ってないで座って下さい」

回転を止めた恵流は素早く席に戻り、手袋を外した。

「でも、随分お金かかったんじゃない？ なんか、申し訳ない気がしちゃう」

手袋を箱に仕舞い、さらに紙袋へ戻しながら、恵流は心配そうに少し声を落とした。そんな恵流に、陽は笑ってフォークを手渡す。

「恵流だって、俺がリクエストした落款のケース、カッコいいの作ってくれたじゃん。あと、道具入れのすげえ良いバッグまで。あんなの、外で買ったらいくらするか……っつーか、恵流の手作りって時点で、プライスレスですから」

首から提げた小さな革のケースを手に取りフルフルと降ってみせ、陽はくしゃっと笑った。その笑顔に、恵流の心臓が胸の中でピョコンと飛び上がる。

恵流は黙って立ち上がると、再びテーブルを回り込み陽の背後に置いてあったバッグを取り上げた。

可動式の仕切りと防水裏地がついたキャンバス地のトートバッグを逆さにすると、いきなり陽の頭にすっぽり被せた。

「そんな嬉しいこと言う人には、こうです」

言い捨てて、また自分の席に戻る。ドキッとさせられた仕返しだ。

「えー……？」

バッグの中から陽の困惑の呻きが聞こえたが、恵流はそれをサクッと無視した。

「ケーキ、美味しそう。いただきます」

優馬「お前、自分の服装には無頓着なくせに、恵流ちゃんのは迷いなく選ぶのな」

陽「まあ、恵流の基本的な好みはわかってるから」

.....陽くん、把握し過ぎい！

『HEAVY DOOR』

重厚なレリーフを施された、その名の通り重く分厚い鋼鉄製の一枚扉を体重をかけ肩で押し開けた途端、思わず耳を塞ぐ程の重低音に包まれた。

首を竦め耳を塞いだまま棒立ちになっている陽の脇をすり抜け、慣れた様子で優馬が奥へ歩を進める。

「T a k さん、どーも～」

入り口右手に設えられた広いバーカウンターの奥から、背の高い痩せぎすの長髪男が現れた。

「おお 優馬、来たか。悪いね、この年の瀬に急な話で」

「いえいえ、こちらこそ。声かけていただいて」

優馬は入り口を振り返った。

陽は未だ耳を塞いだまま、薄く口を開いて開店前の店内を見回している。

内側にクッションを貼られた黒く重たい扉、真紅の壁、白黒の市松模様の床。高い天井にはむき出しのパイプが這っている。

入り口正面には小さなステージがあり、両脇には大きなスピーカーやアンプが積まれ、いくつかのステージ用の照明等が設置されていた。

左側の壁には壁から突き出すような格好のカウンターと高いスツールが設けられ、フロアにはいくつかの丸テーブルと、逆さに伏せた椅子が並んでいる。

「陽！おーい、陽！」

優馬の手招きに気付き、陽が足早にやって来た。

「T a k さん、大月 陽です。陽、こちらはここのオーナーのT a k さん」

「初めまして。大月です」

T a kと呼ばれた男は、大きな手を差し出した。

陽は軽く会釈をしながら、肉厚の手を握る。その手は温かく、指先の皮膚は硬化していた。

「急な話なのに、ありがとう。大月くん、何か飲む？ 優馬はビールでいいよな」

「はい。えーと、クアーズ2つお願いします」

男はスタッズにまみれたブーツのヒールを鳴らしながら奥へ引っ込むと、ビールの缶を持って戻ってきた。

椅子を降ろしてあるテーブルへふたりを促すと、自分もそこへ腰掛けた。

ふたりが着席する前に、男は自分のビールの蓋を開ける。

「若きアーティストに」

高く掲げられたビールの缶に、ふたりも急いで座って缶を合わせた。

なんというか、このT a kという男は、かなりマイペースでユニークな人物に見えた。

色の抜けた長髪は豊かに膨らませてあり、細い顔の半分程を隠している。細身のストレッチパンツにシャツ、布地と同色で刺繍の入った派手なジャケットという出で立ちは黒づくめで、胸元にはジャラジャラとネックレスがぶら下がり、指にはいくつもゴツゴツした指輪が嵌まっている。まるで80年代のロック誌から飛び出してきた様な風体だ。

胸ポケットから煙草を取り出して加えたT a k氏は、煙草を口の端にぶら下げたまま、思い出した様に訊ねた。

「あ、煙草、いい？」

街中に居たら誰もが振り返りそうなその風体とは裏腹に、そういったマナーは持ち合わせているらしい。

陽が軽く会釈すると、男はふたりに煙草を勧めた。優馬は一本取って啜え、陽は首を振って断った。男は顔をしかめて煙草に火をつけると、ライターを優馬に放って寄越す。

優馬が煙草に火をつけている間に、男はいきなり切り出した。

「で、早速なんだけどさ」

一息大きく吸って、顔を背けて煙を吐き出す。

「年明けから2週間で、出来そう？ あっちの壁なんだけど」

優馬から大体の話は聞いていた。

店内の改装にあたり、店の壁一面に絵を描いて欲しいというのだ。

「あのカウンターは引っこ抜いて埋めるからさ。酔っぱらった阿呆共があれに座るから、アタマ来んだよ。邪魔なもん無くなるから、好きなように描いてよ」

「好きなようにって言われても……」

カウンターとスツールを退けたら、あとは真紅のただっ広い壁面だ。

要望が漠然とし過ぎていて、イメージが湧いてこない。

「君の絵は、優馬に見せてもらった。気に入ったよ。カッコ良けりゃ、何でもいいから。任せるわ」

「なんか、コンセプトとか無いんですか？ じゃなきゃ、好きなものとか？」

優馬が助け舟を出してくれる。

「コンセプト、ねえ……そりゃ、音楽だろ。そもそも、そういう店だし。あと、酒か」
男はそう言って、缶ビールの半分程を一気に飲んだ。

「あの……」

陽が遠慮がちに口を挟んだ。

「入り口のドア、あれ、カッコいいですね。特注ですか？」

男は一瞬動きを止めたが、すぐに嬉しそうに顔をほころばせた。

「お、わかる？ 特注じゃないけど、ちょっと改造してもらったんだ。イタリアから取り寄せたんだよ。外側はヨーロッパとかの教会のブロンズ扉みたいだろ？ 一目惚れしちゃってさあ」

空いた左手がテーブルの上の架空の鍵盤を叩き、右手では灰皿にタバコの灰を器用に落とした。

「防音の面でも具合が良くってね。気に入ってるんだ」

煙草をうんと大きく吸込むと、男は灰皿の上で煙草を揉み消した。

スツールから降りると陽の肩をバンバン叩いて、「いやー、さすが、芸術家は目の付け所が違うねえ」と笑い、煙を盛大に吐き出す。

ステージへ向かうと30センチほどの高さのステージへひょいと飛び乗り、その奥へと姿を消した。

陽はおもむろにバッグからスケッチブックと鉛筆を取り出し、壁と同じ縮尺の枠を描き始める。男がエレキギターを片手に戻ってきた時には、左面を奥に配した店内の構図が大まかに描かれていた。

「お、もう始まってんの？」

スツールを少しずらして陽の近くに座り直した男は、スケッチブックを覗き込む。

「表からみたドアの柄を、この辺りに描こうと思います。あとは、いろいろな物をコラージュ風に描いたら面白いんじゃないかと。で、この床の、市松模様をどっかに取り入れると、全体のバランスが良いと思うんです」

「ほー、なるほど……わからん」

男はギターをつま弾きながら、音を微妙に調節している。

「Takさん、相変わらずストラトっすか」

「おう、まあな。家に置き過ぎてかみさんに怒られたんで、ちょっとこっちに移動させた」

陽はスケッチブックに床の市松模様を描き込み始めた。全体のバランスを見やすくするためだ。完全に目検討で、フリーハンドでザクザクと描き進む。

「ギター、いま何本あるんですか？」

「んー……3、40本？ もっとかな？ わからん。数えとらん」

「そりゃ怒られるわ」

ハハハ、と笑うふたりを他所に、陽は壁の中央に小さく扉の絵を描き入れる。先ほど一瞬見ただけなので、大まかなメモ程度の描写だ。

その扉に向かって、奥へ行くにつれ細くなった道が、まっすぐに繋がっている。遠近法の効果で、扉がうんと遠くにある様に見せている。

「やっぱナマ音、デカイっすね」

「おう。ええギターじゃけ。いい感じに木が乾いてきちよる」

「ベースは？ 無いんすか」

「奥に1本ある。お前、まだ弾いとるんか」

「いや、弾いてないけど、T a kさん見てたら久々に弾きたくなって」

「ほうか」と呟くと、男は優馬を誘いステージの奥へ消えた。

ギター所持数30本を超えると、ギター倉庫に住んでいる気分が味わえるらしいです。

大音量でかかっていた音楽は消え、今では優馬のベースとTakのギターの音だけが店内に響いている。

テーブルの上にはビールの缶が何本も転がり、灰皿は山盛りになっていた。

陽はふたりに完全に背を向け、左手の壁に相對していた。

スツールに逆向きに腰掛け、低い背もたれにスケッチブックを立てかける格好だ。左腿には色鉛筆のセットが蓋を開いて載せられている。

そんな陽の背中を、ふたりは横目で眺めながら弦を弾く。

「器用な格好で描いとるのお」

「ですねえ」

ジャカジャカベケベケと弦の音が響く中、陽は黙々と描き続け、ようやく手を止めた。色鉛筆を戻すと、紙の上をゴシゴシと指で擦る。

擦ったところの筆跡がぼやけ、いくつかの色が混ざって滑らかになった。絵の中の壁面部分が、均一に塗られた実際の壁面の質感に近づいた。

「まだまだこれからだけど、こんな感じでどうですか？」

スケッチブックの中の壁面には、中央のドアの両脇に翻って歪んだチェッカーフラッグの様な模様が大きく描かれていた。

青く塗られた空の右上には雲が描かれ、その上で3人のギリシャ神が音楽を奏で、酒を飲んでいる。雲の隙間から地上にいく筋もの光が差している。

「これは誰ね？」

「音楽の神、アポロンとオルフェウス。こっちは酒の神でディオニユス、別名バッカスです」

おおお、と低い歓声があがる。

「音楽と酒の神、いいじゃん！」

「音楽の神っつーたら、イングウェイ忘れたらいけん。リッチーもじゃ」

「いや、生きてるし。ご存命の人は色々とマズいでしょ。っていうか、他にも神様いるでしょ。えーと、弁才天とか？」

「死んどったらええんか」

「いや、そう言っちゃ身も蓋も……」

「んじゃ、ジミヘン。ロニー。コーギー・パウエル」

「偏ってます、T a kさん。ジャンルがすごく偏ってます」

「ボブ・マーリー。ボブ・ディラン。フレディ。ジョン・レノン」

「あー……バッハ。ベートーベン。モーツァルト。ハイドン」

「ちょ、優馬さんまで参加しないで」

「マーク・ボラン！ランディ・ローズ！」

「キヨシロー！……えーと、耳無し芳一！！！」

「……」

短い沈黙の後、ため息混じりに陽が呟いた。

「……優馬さん、耳無し芳一は、さすがに」

「だよな」

「ですよ。ジャンルの偏りを無くそうと、つい……」

陽は、スケッチブックを優馬にぐいと突きつけた。

「今出て来た名前、メモって下さい。画像探して描きます」

「まじか」

「うん。なんとか、やってみます。なんか面白そう」

「芳一もか」

「それは……追々考えます」

T a kが吠える様な大声で笑いだした。

「わっはっはっは！ いやー、楽しみじゃのお。神々しい店になるわ。繁盛間違いなし！」

開店までの2時間ほどを、Takお手製のスパイシーな焼き飯を食べながら話し合った結果、世界の有名建造物の中に紛れ込む形で、音楽の神々があちこちに顔を覗かせるという描き方に決まった。

客にとっては、宝探しの様な楽しみが得られるだろう。

「なんなら他の壁もみんな塗っちゃってええけえ」

「2週間じゃ間に合いません」

どうやらTakに気に入られた陽は、すっかりリラックスした様子で笑っている。優馬も楽しそうにそれを眺めつつ、再びベースを抱えて弄んでいる。

「Takさん、正月から2週間、アメリカでしたっけ」

「おう。西の方な。旅行ついでに、日本未発売のエフェクター見ようかと思うちよる」

「奥さん、怒りませんか？」

「いや、試してみて良かったら、たくさん買うてきて日本で売れち言いよる」

「遅しいな」

「おう。下手したら俺より酒飲みよるしな。豪傑じゃ。あはは」

Takは啜え煙草のまま3人分の皿を取り上げると、バーカウンターの奥へ向かった。が、途中で振り返ると、口の端に煙草をぶら下げたままモゴモゴと言った。

「そうだ。鍵預けとくけえ。年明けたら、好きな時に来たらええ。キャビネの酒は好きに飲みなさい」

「あざーっす！」

「お前も飲むんかい。わしゃ、陽に言ったんじゃ」

「……あ、あざっす」

陽が照れ笑いしながらヒョイと頭を下げる。

いつの間にか、「大月くん」から「陽」に呼び方が変わっていた。

「完成したら、いや、年内でも、いつでも来んさい。タダで飲ましちやる」

「あざーっす！」

「お前はいつでもタダ飲みだろうが」

Takが優馬を蹴る振りをして笑う。

「あー、すみません。有り難いんですけど、俺、喧しいとこ苦手なんです」

優馬が吹き出し、T a kは「おお？」と声を上げた。

皿をカウンターに置き、クシャクシャに丸めた煙草の空き箱を取り上げて陽に投げつける真似をすると、弾ける様な大声で笑う。

「こん、正直もんが！」

優馬「そういやT a kさん、アンプの写真も山ほどアップしてますよね。奥さん怒らないんですか？」

陽（あ、なんか分かりやすくキョドリはじめた……）

優馬（やっぱ怒られてるんだな……）

結局営業時間ギリギリまで雑談し、陽と優馬は店を後にした。

陽はほとんど酒を飲まなかったが、優馬は軽く酔っぼらっているのか、頬が上気している。

「いやぁ、楽しかった。俺、開店前にあの店に入ったのは初めてだったんだよね。いつもたくさん客が居るからさ、あんまり長くは話せなくて」

「あの焼き飯、昔も良く喰わせてもらったんだよな。タコライスならぬ、T a k ライスとか言ってさ。懐かしかったよ」

「ギターもベースもなぁ、いい音だったよな。あの人、演奏もそうだけど、楽器選ぶのとかメンテとかもすげえ上手いんだ」

頭の中は絵のアイデアでいっぱいな陽の適当な相づちにも関わらず、優馬は上機嫌で話し続けている。

「なんか、昔と全然変わってないし。普段は標準語なのに、地元の知り合いと話してると方言出ちゃうのも、そのまんま」

ニコニコしている優馬に、陽が訊ねた。

「地元って、どこの人なんですか？」

「ああ、九州ほぼ全域と広島、山口なんかを転々としてたらしい。だからいろんな地方の方言がごちゃ混ぜになってるんだ。俺が会った時は山口に住んでたな」

「優馬さんって、山口出身？」

「いや、俺は岡山に住んでた。あれ、言わなかったっけ？」

「聞いてない。こっちの人だと思ってた」

「そうだったか」優馬は後頭部をポリポリと搔いて、白い息を吐いた。

「俺、もともとこっちなんだけど、小児ぜんそく持ちでさ。小学校から高校卒業まで、俺だけ岡山のじいちゃんのところで育ったのよ。で、中学からベース始めて、高校の時にライブでT a kさんと知り合って。可愛がってもらった」

「ベースやってたのも、今日初めて知ったし」

「まあ、だいぶ前に止めてたからな。プロ目指してたとかじゃないし。Takさんのバンドは当時既にデビューしてたけどな。んで、大学で上京してからはずっと会ってなくてさ、Takさんは何年か海外で仕事してたらしくて。最近になって、Facebookで連絡取れたんだよ」

「そうなんだ」

「当時さ、一回りも年が離れてるんだけど、Takさんも小児ぜんそくだったって話で盛り上がって、なんか仲良くなってさ。酔っぱらった勢いで、一緒に『ブルードラゴン』ってユニットやろうぜとか言って。あ、『小青竜湯』って小児ぜんそくのにつがい薬の名前に因んだんだけどな」

「ブルードラゴン……なんか、微妙」

「そうそう。ダッセーの。うっかり実現してたら確実に黒歴史だよな、つつってまた大笑いして」

「……青い龍、描こっかな」

陽がニヤリと笑いながら呟くと、優馬は盛大に吹き出した。

「ヤバい、鼻水でたわ。描け、描け。面白い」

帰りの道中、優馬はしばらくの間「青い龍にはジャコ・パストリアスを跨がらせろ」だの、「コーギーはサーブ9000に乗せろ」だのと訳のわからないことを次々に捲し立てていたが、別れる段になってふと思い出した様に声を上げた。

「忘れてた。お前に渡す物があるんだわ」

言いながらバッグの中をゴソゴソと探り、目的の物を見つけた。

「これ、恵流ちゃんに。遅くなったけど、クリスマスプレゼント」

「恵流に？ 何？」

親指ほどのサイズの、小さな箱を陽の手に握らせる。

「内緒。恵流ちゃんに聞けよ」

怪訝な顔の陽に、優馬はニヤッと笑いかけると、「じゃな」と立ち去った。

雑踏の中、後ろ姿でさえ鼻歌交じりなのがわかりそうな優馬の背中が、駅への階段へと吸い込まれて行った。

（優馬さん、あれは絶対に何か企んでる顔だな……）

陽は眉根を寄せ、怪訝な表情のまま手の中の小さな箱を見つめた。

「ねえ、陽。そのアザ、大きくなってない？大丈夫なの？」

恵流は眉をひそめ、陽の胸に残る赤い痣を見つめている。

なんとなくそのアザを擦りながら、陽は鳩尾の辺りに浮かぶ痣を見下ろした。

「杖のお爺さんとぶつかった時って言ってたよね？ やっぱり怪我したんじゃ」

「いや、ほんとにその時かはわかんないんだ。吹っ飛ばされた時に、ちょっと熱く感じたっただけでさ。でも、痛みも無いし、心配無いって」

毛布にくるまったまま身を起こし、恵流は心配そうにアザを凝視した。

「でも、心臓に近い位置みたいだし、なんかおかしいよ。不吉な感じがする」

陽は起き上がって手を伸ばしシャツを取ると、そそくさとそれを被った。

「大丈夫だって。不吉どころか、最近すげえ調子いいんだ。描いてると、なんかすごいエネルギー湧いてくる感じ。やる気出るっていうか。それに壁絵の仕事も入ったし、運が向いてきてる気がするぐらいだよ」

「でも……」

なおも心配そうな顔をする恵流の頭にポンと手を置き、陽はくしゃくしゃと髪をかき乱した。色素の薄い柔らかな髪が、恵流の心配顔を隠す。

「春に健康診断があるから、そんなまでに治らなかったら医者に聞いてみるよ。もし少しでも具合悪くなったら、すぐに病院行くし」

「うん……ねえ、そのお爺さんてどんな人だったの？」

髪を直している恵流を置いて、陽は薄手のニットパーカーを羽織り冷蔵庫へ向かう。

「うーん……あの時は酔っぱらってたし、よく憶えてないんだけど……」

冷蔵庫の前にしゃがみ、シュウエップスのトニックウォーターと、恵流の好きな缶入りのカクテル飲料を取り出した。

「黒いステッキをつけて、黒っぽい眼帯をしていたのは憶えてる。あと、黒いコート着てたかな。膝丈ぐらいの」

「黒づくめ？」

「道が暗かったから、そう見えただけかも。あ、あと帽子も被ってたような……」

ベッドへ戻って来ると、栓を開けてやり、恵流に飲み物を手渡した。

自分のトニックウォーターのキャップも開け、小さく乾杯する。何か飲む度に乾杯するのは、既にふたりの習慣になっていた。

「それよりさ、こないだ優馬さんから預かった物があるんだ。遅いクリスマスプレゼントだって」

陽は、ベッドのヘッドボードの上に置いてあった小箱を恵流に手渡した。

「私に？ なんだろ……あれ、USB？」

† † †

恵流を送った陽がちょうど部屋へ戻った頃、当の恵流から『深夜に叫びました』というタイトルのメールが届いた。急いでメールを開く。

そこに映し出されていたのは、恵流の部屋のパソコン画面のスクリーンショットだった。スクロールしてみると、よりはっきりと写った画像がさらに添付してある。よくよく見れば、菅沼が撮影した陽の写真の数々だ。

メール画面の一番下に、恵流からのメッセージが書き込まれていた。

「陽の写真がたくさん！ほんの少ししか写真持ってなかったから、すごく嬉しい！優馬さんにお礼を伝えて下さい。おやすみなさい」

陽は一瞬頭を抱え小さく呻いたが、項垂れたまま苦笑いした。

すぐにメールを返す。

「了解、伝えます。おやすみなさい・・・優馬さん、どうりでニヤニヤしてると思った。あの野郎！」

恵流「陽の.....陽の写真が、いっばああああああい!!!o(*>▽<)y☆ プリントアウトしてお部屋中に貼ろうっと!あ、確か写真からポスターを作れるサイトがあったはず.....」

陽「恥ずかしいですやめてください(/ω\)」

来訪者

陽に来客があったのは、12月28日、仕事納めの日だった。
工房の大掃除もほぼ終わり、各々最後の後片付けをしている最中のことだ。

「俺に来客？ 誰だろ」

「知らん。宮内って言ってたけど。ひよろっとした若いあんちゃんだ。ここは俺がやっつくから、行って来い」

すんません、と軽く頭を下げ、軍手を外しながら外へ出てみると、緊張の面持ちで立っていたのは、陽が公園で投げ飛ばした例の男だった。

「あの……先日は、どうも。宮内って言います」

陽の足元辺りに視線を漂わせながら、男がひょいと頭を下げた。

「ああ、この間の……何か？」

少し踏み出すと、宮内は素早く後ずさりした。

陽が足を止め「何もしない」と言う様に両手を開くと、男はおずおずと進み出た。

「今、時間大丈夫ですか」

「ああ。もうじき終業だし、少しなら構わないけど」

宮内は、今度は深く頭を下げた。

「あの、謝りに来ました。俺、酷いことした。すみませんでした」

一瞬面喰らったが、すぐに気を取り直し、陽は短く笑ってみせた。

「いいよ。もう、気にしてないから」

「でも、殴っちゃったし……」

「いって。俺も煽るようなこと言ったし」

「でも……あの、絵を汚しちゃって……」

宮内は一応頭を上げたが、顔は俯いたままだった。身体の脇で両手の拳を固く握り、落ち着いたかな

気に交互に片足に体重を移している。

陽は工房の壁に背中を預け、もたれかかった。ザラザラとした外壁の感触と冷たさが、つなぎの作業着越しにも伝わってくる。

一度ぐるりと首を回すと、ポケットに手を入れ身体のを抜いた。

「殴られた分はおあいこだろ。絵のことも、もういいから。また描けばいいんだからさ」

「でも。あの時君が言った通り、俺は許されないことをしたと思ってる。後悔してる。だから」

一瞬言い淀んだが、すぐに言葉を継いだ。

「あの……あの絵、良かったら買い取らせてもらえないかな？」

「だから、いいって」

「でも、それじゃ俺の気が済まない」

「捨てたんだ。全部」

宮内は身体をこわばらせたが、唾を飲み込むと、静かに震える息を吐いた。その様子から、陽の答えを予想していたのが見て取れた。

「……………じゃあせめて、弁償させてもらえないかな」

「弁償？」

陽は「んん……」と唸りながら耳たぶを引っ張っていたが、やがて気怠げに壁から身を起すと、

「じゃあ、こっち」と手招きで促した。

硬い表情の男を従えて数メートル歩き、自動販売機を指し示す。

「これ。俺、ウーロン茶がいい」

「え……」

宮内は戸惑った表情を見せる。

「あ、あったかいやつね」

急かす様にそう言うと、宮内は急いで財布を取り出し温かいウーロン茶を2本購入した。

不器用に釣り銭を取っている男に構わず、陽は勝手に男の手から一本頂戴した。

「サンキュ。俺、甘い飲み物苦手なんだよね」

そう言いおくと、「あったけー」などと呟きながら、勝手にぶらぶらと工房の方へ戻り始める。

宮内が自販機の前でつくねんと立ち尽くし見送っているのに気づいた陽は、振り返って顎を振ってみせた。

弾かれた様に足早に戻って来る男を待たずに工房の前へ戻った陽は、缶の蓋を開け、歩道との境にある低いブロック塀に腰掛ける。

陽に追いついた宮内に、自分の隣に座るよう目線で促したが、男は首を振って断り立ち続けた。

「あのさ。あん時は、そりゃ頭にきたけどさ、今となっては良かったと思ってるんだ。いや、良くはないんだけど……」

熱い缶を手の中で転がしながら、陽は言葉を探した。

「なんていうか、踏ん切りがつかないって言うのかな。君が言ったみたいに、チマチマした小銭稼ぎの絵は止めようって」

「……いや、あれはただ、ケチつけたかっただけなんだ。みっともない八つ当たりだった」
宮内は、消え入りそうな、くぐもった声で言った。

「だとしてもさ、凶星だったよ。自分で『絵の具代稼ぎ』なんて言ってたんだから。でもこれからは、ほんとに描きたいものだけを描きたい様に描いてやるって、あの時思ったんだ。だからさ」

陽は男を見上げ、ウーロン茶の缶を目の前に掲げた。

「これで、チャラってことで。いいよね？」

宮内は心許なさげに頷き、手の中のウーロン茶の蓋を開けた。

「君が、それでいいって言うなら……」

陽に倣って缶を掲げ、熱い茶に口をつける。

「あの……飲まないの？」

陽は片方の眉をしかめ、飲み口にふうっと息を吹いた。

「猫舌なんだよ」

宮内は、やっと緊張が解けたみたいに、少し笑った。

陽くん、甘い飲み物苦手なのに、恵流ちゃんがくれた差し入れのジュースはちゃんと飲んでました。

宣戦布告

雪の降る湖を、月が照らしていた。

見る角度を変える度、雪はキラキラと光る。

「すげえ……」

宮内は資材置き場のシャッターの前にしゃがみ込み、呆然と絵を見上げていた。

その隣に立ち、陽は片手をポケットから出してシャッターの右上、庇になっている辺りを指差す。

「あそこに照明を隠してあるんだ」

季節毎に照明の色が変わる仕組みを説明すると、宮内は唇を噛み締めながら頷いた。だが、視線は一瞬たりとも絵から外さない。瞬きするのも忘れ、見入っている。

先に忘年会に繰り出した工房の面々は、おそらくいつもの居酒屋に到着した頃だろう。既に乾杯が始まっているかもしれない。

陽は少し遅れる旨、皆に断ってあった。

「……なんか、見てるだけで寒くなってくる気がする」

「いや、実際寒いし」

宮内は立ち上がると、何度か膝を屈伸させた。

「そうじゃなくてさ。雪の日の寒さって、なんか特別じゃん？そういうのが伝わってくる」

「まじで？」陽は鼻の下を擦った。

「ヤバい、最高の褒め言葉かも」
肩をすくめておどけてみせるが、口元が嬉しそうに綻んでいる。

「お世辞じゃないよね？」
照れ隠しなのか、陽はさらにふざけてみせた。

宮内は真面目な顔で陽を見据えた。

「俺、人の絵にお世辞なんか言わないよ。この絵も、さっき部屋で見せてもらった絵も、正直言
って見なきゃよかったと思ってる」

再び、シャッターに視線を戻す。宮内は眉を寄せ、険しい目つきで絵を睨んでいた。

「なんでだよ。どうしたら、あんな風に……」

宮内は俯き、ぎゅっと目を瞑った。小さく震える薄い唇をひき結び、乱暴に頭を振る。
大きく息をつくと、宮内は陽を見据えた。瞳が一瞬キラリと光った。

「なあ、どうやったら描ける？何をどうしたら……」

「どうしたらって……俺はただ、頭の中にあるものを描いてるだけだし」

戸惑い気味に答えた陽の声からは、先ほどまでのふざけた様子が消えていた。

「大体は頭の中に絵が出来上がってるんだ。たまに、描いてるうちに少し変わっていくことはあ
るけど……えーと、ウロ覚えの夢の内容を思い出そうとしてる時みたいな？」

ハッ、と、宮内は息を吐いた。俯いてイライラと視線を彷徨わせる。

「……描いてるうちに、何を描きたかったのか、どう描くべきなのか、わからなくなるんだ」

かさついた唇を、強く噛み締める。再び口を開くと、その唇からは血の気が失せていた。

「これじゃない、これじゃないって思いながら、それでも描かなきゃいけないんだ。だって、正解がわからないんだから。何度描き直しても、描き進むほど、どんどん見失ってく。それでもとりあえず、目の前のものを完成させなきゃって」

宮内は食いしばった歯の隙間から大きく息を吸い、一気に吐き出した。

「気が狂いそうになるよ。失敗することがわかって描いてるんだから。いっそ、本当に狂った方が楽なのかもな」

口の端を僅かに歪めたのは、嗤っているつもりなのかもしれない。

その表情を、ほんの一瞬、興味深気に見つめ、陽は手にしたウーロン茶を啜った。

「よくわかんないけど。俺の恩師はよく言ってたよ。『好きに描け。目の前のキャンバスに、自分の世界を創れ』って」

「……言うのは簡単なんだよ。言うのは……」

「そんなに辛いなら、やめりゃいいじゃん？」

全く不可解だ、とでも言いたげな表情の陽と目が合うと、宮内はおもむろに立ち上がり首を振って言った。

「それが出来たら苦労しない。ことは単純じゃないんだ」

ぬるくなったウーロン茶を一気に飲み干すと、宮内は袖口で乱暴に口を拭った。

「なあ、謝りに来といて悪いけど、やっぱ俺、あんたが嫌いだ。……言っとくけど、俺にだって才能が無いわけじゃないからな。覚えとけよ、大月陽」

挑む様にそう言うと、宮内は無理矢理笑ってみせた。

陽は一瞬戸惑った様に顎を引いたが、すぐに肩の力を抜いて苦笑した。

「全く、急に何なんだよ。意味わかんね……まあ、覚えとくよ。宮内くん」

屈折の宮内。

凡人に天才が理解出来ないように、天才肌の人には凡人の気持ちはわからないのですね。

開いたままの『HEAVY DOOR』の扉。

その陰から恵流が顔を覗かせたのは、1日の昼過ぎのことだった。

「陽、進んでる？」

陽は壁から目を離すと、恵流を見て微笑んだ。

「順調。っても、まだ下描き段階だけだね」

陽がこんなに嬉しそうなのは、きっと、昨夜一緒に初詣に行って深夜までふたりで過ごせたからじゃない。単に、大きな絵を描くことが嬉しいだけなのだと、恵流にはわかっていた。それでも、喜びに輝いている陽を見ていられるのは、自分にとっても幸せなことに思えた。

「あの後少しは眠ったの？」

持ってきた手作り弁当の包みをカウンターに置き、傍にあったスツールに腰掛けた。

換気のために扉を開け放してあるので、店内と言えども外気温とほぼ変わらない。コートと手袋は身につけたままだった。

「うん。10時集合だったから、割りと余裕あった。4時間ちょっと寝たかな」

「そっか」

陽はまた壁に貼り付いて、絵の下描きを施している。

壁に大きな額を描き、その中のスペースをキャンバスに見立てて絵を描くのだ。

本当ならキャンバス部分を白く下塗りした方が良いのだろうが、ペンキ代が嵩むのと時間がかかるので、その作業は割愛してあった。

「もうちょっと待ってて。ここだけ描いちゃったら、休憩にする」

「はあい」

恵流はなるべく物音をたてないように、包みの中身を並べ始めた。
絵に集中している間の陽が騒音を嫌うのを、恵流は知っていた。作業の妨げになりたくなかった。

2段のお重に、保温ジャー。おしぼりと、水筒。

全て並べて大きなバッグを畳み終えた頃、陽も刷毛の後始末を終えた。
青い養生シートの上には、いくつものペンキ缶が並ぶ。ドアを開けているとはいえ、室内にはペンキの匂いが漂っている。

「臭い、大丈夫？具合悪くならないかな」

軍手を外しながら、恵流の隣へスツールを運び腰掛ける。

「今のところ、大丈夫みたい。それより陽、寒くない？」

「いや、むしろちょっと暑いくらい」

頭に巻いていたタオルを外し、汗ばんだ額を拭う。ほつれ落ちた前髪を掻き上げ撫で付けると、陽はタオルを首に巻いた。

「で、恵流さん。本日のメニューは」

うふふ、と悪戯っぽく笑った恵流は、お重の蓋を外してみせた。

「じゃーん！おせちです。お母さんと一緒に作ったの」

「おおお、すげえ！！」

「お正月ですから。あと、こっちは……じゃじゃーん！お雑煮で一す！」

「まーじーで一！！」

「ふふ。だって、お正月ですから」

保温ポットの蓋を開けると、湯気が立ちのぼった。
ペンキの匂いの中に、美味しそうな出汁の香りが混じり合った。

奇妙な状況の中でお正月料理を腹に収めると、陽は少しだけ、店の酒をグラスに注いだ。

「恵流、ウイスキー飲めたっけ？」

「うん。少しなら」

琥珀色の液体の入ったショットグラスを手渡す。

「お屠蘇がわり？」

「あはは、そうじゃないけど。寒いからさ」

小さく乾杯して、ちびちびと舐める様に口をつける。

甘く芳しい刺激が喉を焼き、腹の中をカッと温めてくれる。

「ごめんな。せっかくの休みなのに、仕事で」

「ううん。楽しいよ。私、こういう店に来るの、初めてなの」

「なんか普段は、酔っぱらい達が床を転げまわったりしてるらしいよ」

「わあ……ディープな世界なんだね……こわーい」

恵流はウイスキーを舐めながら、店内を物珍し気に見渡している。

酔っぱらいどもが市松模様の床に転がっているところを想像しているのだろう。

年越しパーティーと称して明け方まで営業していた店が、次に開くのは15日。

一見時間がある様だが、陽には工房の仕事もある。だから、工房の正月休みの4日までに、なるべく作業を進めておきたかった。

「ねえ、せっかくだから、ちょっと見学してもいいかな」

「ああ。楽器と機材に気をつけてね」

グラスを片手に、ステージに登った恵流の背中に、陽が声をかけた。

「あのさ、この仕事のギャラが入ったら、どっか旅行でも行かない？」

恵流は首がもげそうな勢いで振り向くと、目をキラキラさせて頷いた。

「うん！行く！どこに行く？」

「お望みのままに。どこへでも」

陽の言葉に、恵流はグラスに残るウイスキーを一気に飲み干すと、とびきりの笑顔を見せた。

恵流ちゃん、嬉しいのはわかるけど、一気飲みはいけません。

リニューアルオープン

リニューアルオープンした『HEAVY DOOR』は、なかなかの好評を博した。

真紅の壁に描かれた自由の女神、凱旋門やエッフェル塔、コロッセオにピサの斜塔、ピラミッドやスフィンクス、パルテノン神殿、涅槃像、大仏、金閣寺……

それら世界の建造物のそこそこに、様々なジャンルの幾人もの”音楽の神”が見え隠れしている。空には大きな雲が浮かび、月桂冠を被ったアポロンと豎琴を抱えたオルフェウス、盃を掲げたデュオニソスが歌い踊る。もう一方の小さな雲の上では、弁材天が微笑んでいる。

その他にも、建物の陰から覗いている巨大なネコ、細く曲がりくねった道を走る古い型の車、マンホールから顔を出すピエロ、針の無い懐中時計……また、様々なモチーフを写したスナップ写真があちこちに描き込まれていたり、精巧で緻密な画風ながらも、何でもありのポップな世界感を展開している。

大きく歪んだ形の白黒の市松模様が、ごちゃごちゃした壁一杯のコラージュのアクセントになると共に床との調和をもたらしているのだが、同時に、一瞬視界が揺らぐような効果も与えていた。

絵の中央にまっすぐに伸びる道の突き当たりには、美しいレリーフをあしらった重厚な壁が僅かに開き、光が漏れている。

見る者によっては悪趣味とも取られかねない絵だったが、奇妙に目を惹かれるその世界は客には好評だった。

当初の目論みどおり、自分のお気に入りのミュージシャンを見つけるのに躍起になって何度も店に通う者、またよくよく観察しなければ見つからないような、小さなネタやモチーフを発見しては喜ぶ者も多かった。

壁絵と同様に好評だったのが、トイレの前の壁に描かれた絵だ。

店の奥にある狭い入り口を入ると、数々のポスターがいくつかのダウンライトに照らされた短い廊下があり、すぐ右手が厨房への入り口。少し進んで突き当たり左側の入り口がトイレになっている。

この廊下の突き当たりの絵は、思ったよりだいぶ早く仕事が済んでしまったため、陽がサービスで描いたものだ。

壁の右手には無機質なビル群。

最も手前のビルの入り口付近に、スキニージーンズに海老茶色のブーツを履いた女性の下半身のみが立っており、胴体の切断面からはおがくずが零れ出している。

その女性の後方には、グレーのスーツの男性が途方にくれたような、また絶望しているような表情で立ち尽くしているが、その両腕と上半身は胸の辺りまでズボンの中にめり込んで埋まっていた。足元にはやはりおがくずが零れている。

ビル群の隣には半円形の狭い草地があり、その上空に、まるで時空の裂け目の様に、白黒の歪んだ渦巻きが浮かんでいる。

その左手には鬱蒼と茂った木立が広がる。原っぱと木立の境目に、娼婦のような赤いミニドレスにピンヒールという格好をした金髪の女性が立っているが、よく見るとそれは女性の姿を模した立て看板だ。

木立の奥の枝には、腕時計を啜えたワシミミズクが止まり、鋭い眼光でこちらを睨んでいる。

右手のビル群の空は明るく晴れ渡っているが、左手の木立上空に近づくにつれ、どんよりと不吉な雲が垂れ込めていた。

この絵は、陽がある日にみた夢をそのまま描いたものだった。

優馬に連絡を取ってもらい旅行中のTakに話してみたところ、二つ返事で了承してくれたのだ。

結果、店で暴れる客が減ったらしい。

飲むよりも壁絵に気をとられるものが多いことに加え、トイレ前の絵で妙に不安な気持ちになって、若干酔いが冷める、との評判だった。

客が客を呼び喚が広まると、従来のライブ打ち上げやバンド関係者以外の客層も来店し始めた。再オープン後数ヶ月で、店は様々なタウン誌や旅行ガイドに大きく紹介されるまでになっていた。

電話口で懐かしい名前を耳にしたのは、そんな春先のことだった。

どうぞ、持てる想像力をフル稼働して店内の様子を思い浮かべてみていただければと思います。

なかなか毒々しいお店ですが、癖になりそうです。

「秀人から、貴方のことを聞きましたね」

十 十 十

恵流からの強い勧めで陽が自身のブログを起ち上げてから、およそ2ヶ月が経っていた。

そこには、工房のシャッター絵や、優馬と栞に贈った絵、『HEAVY DOOR』の壁絵、その他依頼されて描いた数点の肖像画、また、描き溜めている絵の数点が紹介されており、陽自身の簡単なプロフィールと連絡先が記載されている。

その連絡先にメールを寄越したのが、藤枝と名乗る男だった。

「秀人から、貴方のことを聞きましたね」

「……ヒデヒト？」

心当たりの無い名前に戸惑っていると、男は声を上げて笑った。

笑い声に若干空々しい響きを感じ、陽は首の後ろを咄嗟に擦った。

「ああ、これは失礼しました。私は宮内秀人の叔父で、画商を営んでおります、藤枝と申します。甥は美大の春休みを待たず、海外へ遊学……いや、いわゆる放浪の旅というのでしょうか。ほとんど誰にも言わず、家を飛び出したらしいのです」

話を聞き、やっと思い出した。

あの、宮内くんだ。公園で陽に絡んで投げ飛ばされ、後日工房までわざわざ謝りに来たのに憎まれ口を叩いて帰って行った、線の細い、神経質そうな、あの宮内くん。

「すみません。彼の苗字しか知らなかったのです。こちらこそ失礼しました」

「いえいえ、とんでもない。で、その秀人なんですけど……」

十 十 十

「ふうん。日本画家の大家を父に持つ、コンプレックス肥大の若手画家ねえ……」

優馬は興味深気に呟き、顎を撫でた。

「いや、コンプレックス云々とか言ってないけど」

「で、その叔父が”専属契約”を持ちかけてきたと」

「うん……」

表情を曇らせている陽の向かいで、優馬はダイニングテーブルに肘をつき、冷えたビールをグラスに注いだ。

さきほど陽が担いで持ってきた24本入りの缶ビールのケースのうち数本は、既に冷蔵庫に仕舞われ、自分達の出番を待っている。

「で、お前はどうしたいわけ？」

「うん……悪い話じゃないとは思うんだけど、なんとなくさ……」

飲むでも無くテーブルの上のグラスを弄びながら、陽は言葉を濁した。

優馬はフツ、と短く笑い、人差し指でコツコツとテーブルを叩く。

「お前、あれだろ。”専属契約”ってのが引っかかっているんだろ」

驚いて顔を上げた陽の鼻先に、したり顔で人差し指を突きつける。

「凶星だな。んで、ヒデヒトって子が家出したのも自分のせいかも、とか思っていないか？」

「人を指差すな」

優馬の指を払い除けた手で、陽は耳たぶを引っ張った。僅かに眉を寄せ、言葉を探しながら、テーブルで水滴を浮かべるビールグラスに視線を落とす。

「なんかさあ……家出だか放浪だか知らないけど、ほんとはさ、そんなの自分で選んだことじゃん？ オレ関係ないじゃん、って思ってるんだ。でも、電話でさ……『親にたてつくような子じ

「やなかったのに』とか言われると、やっぱりちょっと気になっちゃって」

「まあ、わかるけどな」

優馬は小気味の良い音をたててピスタチオの殻を割り、美しい緑色が滲むナッツを口に放り込む。

「そいつさ、その画商の叔父さんって人にだけ、『負けたくないヤツが居る』って俺の名前とブログのこと言っただけ、居なくなったんだって。で、向こうの家の父親が、息子が家出したってことで結構怒ってるらしい。それで俺にこっそり探り入れてきたんだってさ」

ピスタチオを噛み砕きながら聞いていた優馬だったが、陽が話し終わると軽くため息をついた。

「あのさ、陽。よく考えてみる？ そいつの家出の経緯と、“専属契約”の間に、なんの関係がある？」

「え？」

「お前が内心思ってる通り、彼の家出云々は彼のものであって、お前には関係ないことだ。お前が責任を感じる必要は無し。宮内ってジジイは、それを故意に、お前に罪悪感を抱かせるような言い方をしてる。お前の話を聞いて、俺はそう思った」

「わざと、ってこと？ なんで？」

「お前ね、お人好しか」

優馬は呆れた様に呟くと、諦めた様子で額を擦った。

「……ああ、そうだな。そういえば、妙なところで間抜けなんだった。いいか、陽。その画商は、お前に罪悪感を植え付けることで、“専属契約”とやらに有利に仕向けてるんだよ」

間抜け呼ばわりに不満顔の陽に構わず、優馬は話を進める。

「そんな初歩的な交渉テクは置いといて。で、なんで“専属”が嫌なのか……縛り付けられるみたいで、なんとなく気持ち悪い、とか……そんなところだろ？」

「そう！ それだ！」

今度は陽が、優馬に人差し指を突きつけた。

「あの人の話聞いてて、なーんかヤダな、ムズムズするな、って思ってたら、それだわ。言われてみて初めて気付いた」

優馬は苦笑しながら、陽の指をチョキで挟みテーブルの上へ戻した。

「だからお前は間抜けだって言うんだよ、全く」

「優馬さん、すげえ。何でわかったの？」

尊敬の眼差し、とは、こういうのを言うのだろうか。

感動も露に目を見開き真っ直ぐに見つめてくる視線を、若干くすぐったく思いながら、優馬は眉を上げ片方の口角だけでニヤリとしてみせる。

「すげえだろ。俺は何でもお見通し……って、違うよ。バカ。お前は自分でもわかってたから、ムズムズしてたんだろ。それと、元々窮屈なのが嫌いな上に、姑息な駆け引きをしてくる様な人間も苦手だろ？」

「ああ、うん。うん。そう。確かに」

陽は何度も頷いて、同意を示している。

「頭では理由が理解ってなくても、本能でちゃんとわかってるんだよな。だから気が進まない」

「本能ねえ。そうか。どうりで……って、それって俺、まるっきり馬鹿みたいじゃね？」

「だから何度もそう言ってんだろうが」

陽は不満げに口を曲げ、殊更に顔をしかめてみせる。

「ちょっとさあ……さっきから、間抜けだの馬鹿だのって、散々なんすけど。俺、まだ22歳なんすけど」

「年齢に甘えるんじゃねえ……と言いたいところだが、ま、しょうがないやな。経験値稼ぐのはこれからだ」

眉根に皺を寄せ、わざとらしく怖い顔を作って陽を睨みながら、優馬はピスタチオを噛み砕き、残ったビールでそれを飲み干した。

「しかも、お前だからな。今回の専属契約の件はさ、俺が上手く断ってやるよ」

「え、いいよ、自分で」

「やめとけ。画商なんて、百戦錬磨の海千山千だ。お前じゃ、なんだかんだ丸め込まれて骨までしゃぶられかねん。危なっかしくて、見てる方がヒヤヒヤする。そういうのは俺に任しとけて」

「でも……」

優馬は陽の前に散らばっているピスタチオを指差した。

「豆の殻割るのも横着するヤツにい、交渉事なんて無理ですからあ〜」

節をつけて歌う様に言いながら、閉じたまま転がっているいくつかのピスタチオに、優馬は手を伸ばした。

「だってこれ、固かったんだもん」

「『だもん』じゃねえ。開けづらいやつだけこっそり戻しやがって。とにかく、契約やなんかの交渉ごとは、先ず天本さんとか俺に相談しろよ。カモられたくなきゃな」

殻の小さな裂け目に爪を抉じ入れると、パキッと音をたてて殻が割れた。

そうして全ての殻を割ると、優馬は中のナッツをまとめて口へ放り込んだ。

「これ喰ったら却って腹減った。ちょっと早いけど、なんか作るか」

陽「ピスタチオ旨いね」

優馬「だから固いやつ戻すなって言ってるんだろ」

陽「エへ☆」

優馬「エへ☆じゃねえ。肩竦めても可愛くねえから(´∩`#」

15分後、大きな皿に山盛りにされた焼うどんが湯気を立てていた。
匂いにつられてキッチンまで入ってきた陽が、優馬の背後から覗き込む。

「すげえいい匂い。美味そう」

「だろ。優馬さん特製、漢の焼うどんです。よし、運べ」

「ラジャ」

豚肉や野菜たっぷりの焼うどんの大皿を両手に掲げ持ち、陽は対面式のカウンターを回り込んでダイニングテーブルへ向かう。

優馬は鼻唄混じりで冷蔵庫から新たなビールを2本、青のりとマヨネーズをカウンターに直に並べた。箸を2膳握ってテーブルに辿り着くと、それぞれの皿に箸を添え、自分の席に着いた。葉ならば、全てまとめてトレイで運び、箸は箸置きに置くところだ。

「青のりとマヨネーズはお好みで」

言いながら、優馬はジッパー付きの袋から直に青のりを振りかけると、陽に手渡した。陽も優馬に倣い、青のりを振りかける。湯気の中でウネウネと踊っている鰹節の上に、濃い緑色が広がる。

「ん」

優馬が手を出すので、陽は青のりの袋を返した。

「あい」

ジッパーの淵を何度か慎重に爪で弾き、きっちりと袋の口を閉じる。

「綺麗にしとかないと、葉に怒られるんだ。『だから瓶に移してから使えと言うのに』って」

「あはは。見たい。優馬さんが怒られるとこ、見たい」

優馬はマヨネーズのチューブを取ると、パチンと蓋を開けた。

「こえーぞ。怒鳴ったりとかしないし、口調は穏やかなんだけどな。なんであんなに怖いんかな

。お前だったら泣くね。泣いちゃうね」

「泣かねーし。ってか栞さん、そんなに怖いの？」

「まあな。怖いっつーか、逆らったらヤバいって感じを出してくるんだよ。まあ、一度本気で怒ったところ見てるから、どんだけ怖いか知ってるしな」

おそらく、プロポーズの際の病院屋上でのことを言っているのだろう。

優馬は細い口金から自分の皿にグルグルとマヨネーズを絞り出し、また陽に手渡した。

「うげえ。優馬さん、マヨラーってやつ？」

「いや、そうじゃないけど。これには、マヨが合うんだよ。騙されたと思ってやってみ？」

陽はいぶかし気な顔で逡巡していたが、皿の隅に少しだけマヨネーズを絞り出した。

「あ、お前！俺を信じてないね？貸せ、みみっちい野郎だ」

「なんだよ、止めろよ！お好みで、って言ったじゃん。いいから！俺はこれぐらいで」

マヨネーズの奪い合いに辛くも勝利した陽は、優馬の手の届かない場所にチューブを隔離した。

「全く、いつまで遊んでんだよ。料理が冷めるだろうが」

「誰のせいだよ」

悪態をつきながらも、揃って手を合わせる。

「いただきまーす」

大きく一口頬張った瞬間、くぐもった声で陽が叫んだ。

「何これ、美味あい！」

「口に物を入れたまま喋るんじゃないですか」

そう言う優馬も、めいっぱい頬張って口をモゴモゴさせている。

飲み下しながらビールを開けると、一気に煽った。

「っかー！やっぱ美味いわ。俺天才だわ」

「マジで美味しい」

陽は最初の一口をあっという間に飲み込むと、続けざまにまたかき込む。
その食べっぷりに優馬は満足気に微笑み、得意気に言った。

「お好み焼きのソースをベースに、焼肉のタレ甘口が隠し味です」

「いや、隠れてないけど」

「焼肉のタレは万能なり」

「わかる。焼肉のタレとめんつゆがあればなんとかなるよね」

「おお、同志よ。お前、わかってんじゃない」

「親父が居たときは、俺が料理担当だったし。ってか、家事全般担当だね」

喋りながらも、陽の皿からは早くも3分の1ほどが消えていた。

陽にしては珍しく、ビールを一気に流し込む。

「意外だな。お前も料理とかするんだ」

「うん、簡単なものだけ。でも今は、賄いがあるからやってないけどね」

陽は口の端に付いたソースを舌先で舐め取りながら、隔離していたマヨネーズに手を伸ばした。

「やっぱこれ、マヨネーズ合うね」

「だろ？」

「ドヤ顔やめていただけますか」

「やめない。俺の正当な権利だ」

優馬は陽の手から素早くチューブを奪うと、「うわあ、やめろおおお」という悲鳴を他所に、陽の皿の上にたっぴりとマヨネーズを絞り出した。

お前ら仲良しか。

……って、今更ですね。今日はもう1話アップします。長いです。

負われる理由

「これ、まだ新しいみただけど、ほんとにいいの？ 菜さんは、何て？」

少し早い夕食を終えたふたりは、ノートPCの画面を覗き込んでいる。

キッチンのシンクの水切りカゴには、既に洗った食器とフライパンが立てかけられていた。

「いや、菜から言い出したんだよ。どうせ処分するにも費用がかかるんだから、使う人がいればあげちゃえば？ って」

「そっか」

「こっちはビールひとケース貰ったうえに、処分費用が浮く。お前はPCが手に入る。万々歳だ」

「ありがたーい」

「まだ綺麗ではあるけど、型落ちだしスペック高くないけどな。ブログやるぐらいなら、これで充分だろ」

シンプルなデザインのトップページ。

『大月 陽のブログ』という直球過ぎるブログタイトルの下にあるメッセージボードには、挨拶文と簡単なプロフィール紹介。

その下には各カテゴリーごとの記事やメールフォームに飛べるアイコンが設置されており、その下に最新記事が表示される様になっている。極めてシンプルな構成だ。

優馬は「ギャラリー」と書かれているボタンをクリックした。

スクロールしていくと、簡潔な紹介文と共に陽の絵が次々に表示される。

最新の作品は、「HEAVY DOOR」の壁絵2点だ。

もちろん優馬と菜の結婚式の絵も、両者の了承の元に掲載されており、そこにはシンプルに「結婚式・油絵10号」とだけ記されている。

「それにしても、恵流ちゃん凄いよな。学生のうちからウェブショップとか」

「うん。なんか、そういうサイトがあるんだって。無料でショップ登録出来て、売上げたら手数料払うんだ」

「なるほどねえ。店の名前は？」

「MWM。メンバー3人の頭文字だっけさ」

「どれ、検索してみよ。エム・ダブリュ・エムね……」

カタカタと入力すると、すぐにショップのトップページが表示された。

「ほうほう……ほえー……凄いな。ちゃんとしてるわ」

「だよな。少しだけど、もう売上もあるらしいよ」

「おお、これなんか菜が好きそう。教えてやろ」

革雑貨、ガラス製品、布小物のページと、優馬は次々に開いていく。

「アパレル系の雑貨屋に就職したんだけどさ、現場でデザインとか流通とか勉強しながら、ゆくゆくは実際のショップを持ちたいんだって」

「まじか。将来設計しっかりしてんな」

「うん。ちょっとビビった。すげえ！って」

「で、その流れでお前もブログか」

絵画専用のネット通販サイトではなく、個人ブログにしたのも、恵流の提案だった。

陽の場合、サイトに登録するには作品数がまだ少ないし、何より自分のブログの方が、作画の過程を載せたり仕事の受注も出来たりと、自由度が高い。

『陽には、制約とか決まり事が少なく、シンプルなやり方が合ってると思う。めんどくさがりだし』

恵流に言われたことを話すと、優馬は吹き出した。

「流石恵流ちゃん、しっかり把握してるわ」

「うん。俺もう、全く頭上がんない。恵流んちのパソコンでブログまで立ち上げてもらってるし、なんかランキングの参加とか？全部チャカチャカってやってくれたし」

「おんぶに抱っこか」優馬は笑って、目の前のノートパソコンを指差した。

「でもこれで、更新は自分で出来る様になったじゃん」

「そのパソコンも、優馬さんに譲ってもらったわけですが。なんか俺さあ、あちこちでおんぶされてばっかな気がする。ちょっと情けないよね」

一瞬混ぜっ返そうとした優馬だったが、思い直してPCを閉じ、力なく笑う陽に向き直った。

「お前ね、そんな顔すんなよ」

「ちょっと前までのお前ならさ、『めんどくさい』とか言って、ブログなんてやらなかったろ？
絵だけ描けりゃいいって、宣伝とか自己プロデュースとか億劫がってさ。それが最近、やっと積極的になってきたから、周りも手伝おうって気になるんだろ？」

「そうなの？」

「そうだよ。だから今のところは、ありがたくおぶさっとけ」

わかった、と素直に頷くと、陽は深く頭を下げた。

「色々ありがと。お世話になります」

「お？ ……おう」

虚をつかれ一瞬口籠った優馬は、PCの電源を切ると乱暴に陽に突き出した。

「ほい。接続とか使い方とかわかんなかったら電話しろ」

「うん」

ソファの横に置いたバッグにPCをいそいそと仕舞っている陽を横目に、ぼそっと呟く。

「こういうとこなんだよなあ……」

陽がくるりと振り向いた。

「ん？ いま何か言った？」

「何でもねえよ、ば——か」

いきなりバカ呼ばわりされた陽は訳が分からず、怪訝そうに眉を顰めた。が、しらんぷりしてビールを飲んでる優馬を見て追求を諦め、バッグの中身を慎重に調整する作業に戻った。

グラスの中の氷が、カラン、と音をたてる。

優馬はグラスに浮かぶレモンを指先で摘み、ウイスキーに果汁を絞り入れると、その残骸をま再びグラスに突っ込んだ。

隣でソファの背もたれに埋まっている陽は、ウイスキーをトニックウォーターで割った物をチビチビと飲んでいる。

「お前、ウイスキー飲む様になったんだ。つか、それ結構美味そう」

「Takさんとの描いてる間、ちょっと飲んだ。ドア開けっ放しで寒かったからさ。トニックウォーターは前から好きで、普段から酒無しで飲んでる。味が好きなんだ」

背もたれに埋まったまま、陽はグラスを差し出した。

「はい。ひとくち飲んでみる？」

優馬はそれを受け取り、泡の立つ淡い色の液体を飲んだ。

「うん、悪くない」

グラスを陽に返す。

「それでバッグからトニックウォーターが出て来たのか。やたら用意がいいと思って驚いたわ」
「シュウェップスのトニックウォーター最強。恵流も嵌まって、最近うちにジンやらウオッカやらが増えた。俺、あんま飲まないのに」

グラスの縁を啜えたまま、陽がクスクス笑う。多少酔っているのか、目尻がほんのり赤くなっている。

「恵流、めっちゃ酒強いし。あれ？ってか、俺が弱いのか」

優馬はグラスを手に肘掛けにもたれ、左ひざに乗せた右の足首を意味も無くぐるぐる回しながら、音量を落としたテレビをぼんやりと眺めている。

「恵流ちゃんって、わりと意外性あるよな。あんなちっちゃくてフワフワした見た目なのに、しっかりしてるし。おまけに酒強いとか」

「うん。それになんか結構アクティブだし。こないだ遊びに行った時なんか、花火持って走り回るし、アスレチック見つけて大喜びでやってたし、見よう見まねでテニスやったり。しかも上手いし」

「なんだ、テニスなら俺が教えてあげられたのに」

「え、優馬さん、テニスも出来んの？」

「おう。バイトでインストラクターやってた」

「ベースにバスケにテニスって。どんだけ多趣味だよ」

「しかも、モテそうなのばっかな」

陽は手の甲で目を擦りながら笑った。

「ほんとだ。滲み出る必死感」

「偶然です！」

「と言い張る……」

「本当です。テニスはスポーツクラブの受け付けやってたら誘われて、なんとなく流れで教える側に……ま、モテたのは事実だけど」

「……」

「おい、シカトすんな」

「……眠い」

「自由か。お前は自由か」

優馬は時計を確認しつつ、眠た気に目をゴシゴシ擦る陽を気遣う。

「泊まってくか？」

「ん……いや、帰る。葉さん、そろそろ帰って来るんだよね」

「あと1時間くらいだな」

「じゃあ、お礼言っというて下さい」

「おう」

陽はグラスの酒を飲み干すと、眠気を払う様に弾みを付けてソファから立ち上がり、ペコリと頭を下げた。

「ごちそうさまでした」

「おぶさっとけ……あれ？おぶられとけ？おぶされ……？やばい、訳わかんなくなってきたw飲み過ぎか」

「おぶされ、おぶら……ほんとだ、こんがらがった。わかんないwww おぶ、おぶおぶおぶおぶ……ばははははは！！！」

「ちょ、おま……阿呆w」

「やばい、腹痛い！こんなくだらないのに、なんで面白いんだろ？おぶおぶおぶ…
…www」

「そりゃ、酒飲みの深夜のテンション、つつってな」

「プククク……深夜のテンション、ヤバいねwww ハア、面白かった。おぶおぶ」

「おぶおぶ言うな。つーかヤバい、遅れてキタwwwww」

「もう眠いから帰るねー」

「おい待てw 置いてけぼりやめてwww あの野郎、マジで帰りやがった。くそう……おぶおぶおぶ……プッ！ププププ！」

初めて会った藤枝という男は、トカゲに似ていた。

顎が極端に細く頬がこけた顔。鋭い刃物で切れ目を入れただけみたいな薄い唇の隙間から、二股に別れた細い舌がちょろりと覗いても違和感が無さそうだ。

色素の薄い、細かく波打った髪は、後ろへ向かって撫で付け固められており、それがさらに爬虫類を思わせる。

薄い身体を包み込む仕立ての良いスーツは少し緑色がかったグレーで、陽は思わず心の中で勘弁してくれ、と呟いた。

なんでその色を選ぶ？ これじゃまるで、トカゲのコスプレじゃないか。自らトカゲに寄せていったくないか？ 今この人が、壁に貼り付いてこちらを振り向いたら……笑いを堪える自信が無い……

…

壁にへばりついて音も無く壁を登り、こちらを見下ろしてくる藤枝を想像してしまい、陽は描きかけで並べてある絵を順番に眺めて回っている男から目を逸らした。

顔がにやけるのを止めようと、咳払いなどしてみたが効果はなかった。仕方ないので、先ほどから口の中で舌先を噛み、なんとか堪えている。

さっきから微かな表情で黙り込み、今は一心不乱に絵筆をくるくると弄んでいる陽を横目で気にしつつ、優馬は片目では藤枝の様子を窺っていた。

「ふうん……」

すべての絵を見終わり、藤枝が感心した様に溜息を漏らした。

「面白い。面白いですねえ。やはりパソコン画面で見ると断然良い。秀人の言っていたとおりだ」

絵の並べられた作り付けの棚から離れ、少し距離を取って再び全ての絵を見比べる。

「作品ごとに、画風が見事に違う。非常に独創的で、自由……」

柔らかな動作で腕を開き、絵を指し示す。

「繊細で儂気であり……一方こちらは力強く、ある意味暴力的とすら言える……かと思えばこちらでは、温かく包み込むような、同時に溢れ出るような優しさの中に、悲しい程の狂気の欠片が潜んでいる……」

藤枝は、熱に浮かされた様にひとり呟いている。瞳はぬらりと光り、白い顔は最初に顔を合わせた時より更に血の気を失っていた。

宮内といいこの男といい、興奮すると青ざめるのは血筋なのかもしれない。

「技術的にはまだ未熟な部分もあるが、それを凌駕する才能を感じますね。独特の空気感。絵が呼吸をしている。周囲の空間ごと、キャンバスに閉じ込めている様だ……いや、閉じ込めているんじゃない。そうじゃない……」

藤枝は言葉を探す様に目を閉じ、妙につるりとした額に手をかざした。自分の言葉に陶醉し、やたらと芝居がかって見える。

陽は上目遣いで優馬を見遣り、「どうすんの？ これ」とばかりに僅かに肩をすくめた。優馬は視線だけで「黙ってる」と伝えてくる。

「閉じ込めつつ広がっていく……爆発と収縮を無限に繰り返し……そう、宇宙的な広がり絶え間なく続く反転……」

眉間に深く皺を刻み、藤枝は両手の指先で額に触れたまま動かなくなった。いや、よく見ると、右手の先だけがゆるやかに動いている。まるで、神託を待っている神官だ。実際、上手い表現が降りてくるのを待っているのかもしれない。

「えっと……あの、ありがとうございます」

異様な空気に耐えきれず、陽がボソリと言った声に反応し、藤枝はくるりと振り向いた。夢から醒めたかの如く我に返り、ぎこちない笑顔を浮かべる。

「あの騒がしい店。名前はなんでしたっけ……ああ、そう。そうでした。HEAVY DOOR。あの絵も面白かったですねえ。ところどころにベタ塗りのイラスト風な絵が紛れて遠近感を惑わせていたり、スナップの絵の隣に本物のポラロイド写真が貼られていたりと……」

「写真？」

オープンから程なくして、来店記念にとせがむ客に応えた形で、あの壁絵には本物のポラロイド写真が貼られる様になっていた。

なるべく絵を隠さないようにと、主にチェッカーフラッグの部分に貼付けられた写真は着々と増殖を続け、日に日にカオスの度合いを増しているのだ。

不思議そうに見上げてくる陽と、まだ少し陶然としている藤枝のふたりに向け、優馬はそう説明した。

「ほう、そうでしたか。でも、そういうアレンジをも許してしまえるだけの包容力のある絵ですよ。あれは。奇妙な魅力がある」

藤枝ははたと動きを止めた。

「奇妙な魅力……そう。あなたの絵には共通して、言うに言われぬ、奇妙な魅力、引力がある……ずっと見ていたい。もっと別の絵も見てみたい。そう思わせる。否応無く惹き付けられる……魔力。うむ。むしろ魔力と言ってもいいかもしれない」

自分の言葉にようやく納得したらしく虚ろな目でしきりに頷いている藤枝に気圧され、陽は「はあ……どうも」と間抜けに呟くことしか出来なかった。

† † †

優馬はまだニヤニヤしている。時折、思い出した様に「ブッフ」と吹き出し、その度に陽がサラ

サラと描いたイラストを眺めては、またひっくり返してテーブルの向こうへ押しやるというのを繰り返していた。

「いつまで笑ってんだよ」

さすがに呆れて、陽はそのイラストを手に取り、改めて見直した。

「絵が完成したらご連絡下さい」と再三言い置き、ひんやりと冷たい手で陽の両手を握りせっかちに握手をして帰って行った藤枝を見送った後、即座にクロッキー帳に手を伸ばし描き上げたものだ。

壁に斜めに貼り付いた格好の藤枝が首だけこちらへ振り返り、口からくるりと伸びた二股の舌先には「どうも、藤枝です」と書き込まれた吹き出しが浮かんでいる。

ギョロリとした爬虫類のような目の横には小さな星がキラリと光り、小づくりな鼻はうんとデフォルメされ、ただの点でしかない。

撫で付けた髪のテカテカした艶が、より爬虫類っぽさを際立て、極めつけはジャケットの裾から伸びた細長い尻尾だった。

思わず「フッ」と息が漏れ、口の端が持ち上がった。

「お前だって、自分で描いて笑ってんじゃないか……そっくりだよな、それ」

「うん。我ながらそう思う」

「そーいう、イラストもみたいなの描けんのな」

「ああ、あれだけ特徴のある人だとさ、イラスト向きなんだよね。そう描かずにはいられないっというか……正直、我慢するのキツかった」

およそ4頭身ほどにデフォルメされた藤枝の絵を、陽は写メに納めた。後で恵流に送ってやる為だ。

写真の写り具合を確認すると、陽は携帯を充電器に繋いだ。長く使っているので、すぐに充電が切れてしまう。

「あの藤枝って人、ちょっと変わってるけどさ、悪い人じゃ無さそうだったね」

「ああ、まあな。最初にギャラリーで話してた時は、やっぱインチキくせえと思ったんだけどさ……Takさんとこの絵を見に行った途端、目の色が変わったんだよな。本気になったっつか……やっぱ最初はカモろうとしてたんだろうな」

「へえ、そうなんだ」

「さっきさ、放浪中のナントカくんの話、一切出なかったろ？」

「宮内くん？」

「そうそう、宮内くん。ほんとに心配してて、お前に原因があると思ってんなら、話が出るだろ？それが出なかったんだから、お前は気にしなくていいんだ」

「……だよな」

「そもそも、成人した男がちょろっと旅に出たぐらいで、ぎゃあぎゃあ騒ぐ程の事じゃない。俺だって大学ん時はしょっちゅう旅してた」

「そうなんだ」

「おう。バックパックひとつで世界中あちこち廻ってさ」

「それ言ったら、うちの親父なんて4年も放浪中」

優馬は一瞬ぎくりと動きを止めたが、すぐに声を立てて笑い出した。

「負けたわ」

「でしょ？」

陽も、さも可笑しそうに笑った。

この後、藤枝さんがらみで色々と展開していきます……

舞踏家との出会い

恵流が陽から誘いを受けたのは、学友との卒業旅行から帰ってきて間もなくのことだった。

共同でネットショップをやっている友人2人との旅行は新たな発見や驚きに満ち、とても刺激的で満足出来るものだった。

そんな、興奮と未来への希望で溢れ出さんばかりの状態で聞いたその報せに、恵流は天にも舞い昇る気持ちになったものだ。

「ある舞踏家の肖像画を依頼されたんだ。100号の大作だよ」

おそらく高額になるであろう絵を描くにあたり、モデル本人と直接面談したうえで、どのような絵にするか決めたい、という話だった。

「そういうわけで、今度その人の練習風景を見に来いって誘われたんだけど、一緒に行かない？」

思わず「行く！」と即答した恵流だったが、関係ない自分も同行してもいいのだろうかと不安になる。

「大丈夫。優馬さんと菜さんも一緒だし、そんなに大所帯でなければいいってさ。俺もその人とは初対面だから、人数が多い方が気が楽なんだ」

確かに、人見知りとまでは言わないが、陽は初対面の人間といきなり親しく話し込めるタイプではない。優馬の場合は、まあ、特例だったのだ。

そういうことなら、と、恵流は二つ返事で参加を表明した。プロの舞踏家に会えるなんて、しかも、練習風景を見学出来るチャンスなんて滅多に無いだろう。

なんでもゴールデンウィークに公演を控えているとの事で、その練習を見に行くのは3月最後の週、陽が仕事を終えてから赴く事に決まった。

十 十 十

葉は早々に気付いていた。

優馬や陽は、恵流の「ネットショップの仕事と、会社の研修を兼ねたアルバイトで連日忙しい」という理由を鵜呑みにしていた。

だが、煌月カレンの舞台稽古を観て、だんだんと恵流の顔色が冴えなくなっていたのには、別の理由がありそうだった。

「卒業旅行から帰って以来、かなり忙しそうだったものね。無理もないわよ」
葉がそうフォローすると、恵流が感謝するような眼差しをチラリと向けてきたので、確信した。

「そっか。誘っちゃって悪かったかな。疲れてるのにごめんな」

陽が済まなそうにそう言うと、恵流は慌てて両手を振って遮った。

「ううん、そんな。私も楽しみにしてたし、見に来られて良かった！練習とはいえ、すごく素敵だったし。感動したよ！」

恵流の言葉に、嘘は無いだろう。

だが、煌月カレンの存在が恵流の精神力を相当削り取ったであろうことが、葉にはよくわかった。

初対面での挨拶の時から、彼女は圧倒的だった。

襟ぐりの広い、足首までの黒のレオタードに、細かい襷の入った膝丈の真っ赤なラップスカート。緩いウエーブのある艶やかな黒髪は後ろで一つにまとめてある。

メイクの必要も無さそうな派手な顔立ちは、秀でた額に太く真っ直ぐな眉と強い輝きを放つ瞳、美しい鼻梁にふっくらとした赤い唇。日本人離れして長い手足。充分に人目を惹く容貌だ。

自分の才能、美貌、信念に対する揺るぎない自信。
努力で勝ち獲った実力と実績への信頼。
そして、何かを達成しようとする強靱な意志。

そういった様々なものが、全身から強く放射されていた。
仕事柄たくさんの人間を見てきた栞でさえ、一瞬目眩を覚えた程だった。

(もし、オーラとかいうものが目に見えたとしたら……目が眩んで直視出来なかったかもしれない……)

見学を終えて感じている若干の気怠さは、真夏の灼熱の太陽に長時間晒された後の脱力感に似ていた。

さっきから「いやー、凄かった。凄かった」と連呼している優馬でさえも、どこか呆然としたような、妙にそわそわと浮き足立った表情をしている。

ただ、陽だけが、終始カレンの発するオーラに負けること無く対峙していた。
どんな絵にするか、という案を楽し気に話し合っているふたりの、互いが互いのオーラを引き出し呷り合っているかの如く膨張していく様は、傍から見ていて気が遠くなりそうだった。

栞は思わず、「仕事のお話の邪魔になるから」と恵流を連れて一時退避した程だ。

恵流はあの時、完全に萎縮していた。
圧倒的な存在感に押しつぶされ、消し飛ばされそうな恵流を見ていられなかった。

しばらく優馬と3人で劇場の中を見て廻った後、陽との話し合いを終えたカレンのステージ上での練習を見学している間も、畏れに近い表情を浮かべながら恵流は彼女から目を離せずにいた。
そんな恵流の背中を、撫でてやりたかった。ステージと恵流の間に立ちはだかって、ほんの数秒でも視界を覆い隠してあげたかった。

怖い、と思った。

きっとこの感覚は、説明しても優馬にはわからないだろう。

そもそも言葉にするのは難しい。どれだけ言葉を並べても、上手く伝えられる気がしない。確かに彼女はずば抜けて美しい。だが、容姿の美しさだけの話ではない。

きっと、女性同士だから、わかるのだ。本能的に感じる脅威があるのだ。

逃げなければ。

私は、あの放射に耐えられそうにない。長く傍に居れば、きっとじわじわと焼き尽くされてしまうだろう。

でも、恵流ちゃんは。上手く逃げられるだろうか……

プロのダンサーって、後ろ姿だけでわかりますね。

街中で見かけると一目瞭然です。あまりにも際立っていて、びっくりしました。

今日もあの青年が来ている。

藤枝画廊からの紹介された画家、大月陽。

スタジオの隅っこに胡座をかいて座り、スケッチブックを抱えて一心不乱に絵を描いている。その真っ直ぐな視線はほとんど夏蓮に固定されており、手元のスケッチブックには時折ちらりと視線を送る程度だ。見なくても、自分の描いた線がわかるのだろう。

五島武一は足音を忍ばせてスタジオの壁沿いに回り込み、大月陽の傍に立った。スケッチブックを見下ろしてみると、一面に様々な絵がいくつも描き込まれている。一瞬のポージング、表情、指先の動き、髪の流れ、ダンスシューズの皺。

ザクザクと描き続け、紙面がいっぱいになると素早く新たなページを開き、また描き始める。夏蓮が踊っている間は描き止めることは無いだろうと思わせる勢いだ。

しばらくすると、夏蓮は練習を中断し汗を拭きながら振り付け師と話し始めた。スタッフが持ってきたドリンクを受け取る間も、真剣な表情で振り付け師との会話に集中している。夏蓮が何度か頷くと、振り付け師は片手を挙げた。休憩の合図だ。

少し目を伏せたまま、夏蓮は大きな鏡の前を横切りゆっくりとスタジオの隅へ向かう。

これは頭の中でイメージを確認している時の癖だった。

それは内省的なキリンがなるべく物音を立てないように、サバンナの草むらに潜む小さな虫達を踏まぬよう、慎重に歩いている姿を思い起させる。

だが実際は、頭の中で描くイメージが、いつもの休憩ポイントに辿り着くタイミングでちょうど終わるように、無意識のうちにスピード調整して歩いているだけなのだと、五島は知っていた。

ちょうど陽たちの居る対角で夏蓮は立ち止まると、首周りの汗を拭い、手にしていたドリンクに口を付けた。

飲み終わっても、夏蓮は壁の方を向いたまま俯いてじっと立っている。

そんな彼女に、スタッフの誰も声をかけない。頭の中で様々なことを整理・反芻しているのを皆わかっているからだ。

いつもの光景を見届けると、五島武一は大月陽に声をかけた。

「どうも、大月くん。順調ですか」

.....反応がない。瞬きすら忘れ、一心不乱に絵を描いている。
まるで、頭の中に録画した映像を全て紙の上に留めようとしているかの様に。

五島武一は、胡座をかいている陽の隣にしゃがみ込み、肩に手を置いた。

「大月くん」

「ふごっ」だか「うおっ」だかと声にならない叫びをあげた大月陽は、反射的に身を竦ませ左肩を壁にぶつけた。右手に握っていた鉛筆が手から飛んで、床に転がる。

「.....熊が出たわけじゃないんだから、何もそこまで驚かなくても」

五島は小さなため息をついて鉛筆を拾うと、左半身を壁にピッタリ貼り付けて目を見開いたままの陽に差し出した。

「.....すみません、五島さん。急だったんで、ちょっとビックリしちゃって」

「いや、もう何分も前からここに立ってたんだが」

「あ、えっと.....すみません」

大月陽はひょいと首を竦め、鉛筆を受け取った。

一度大きく肩を上下させ深呼吸すると、緊張が解けたようにへへ.....と笑う。凛々しく整った顔立ちなのに、こういう時は妙に愛嬌があって憎めない。

厳つく強面で体格の良い自分とは、対照的だ。

「相変わらずの集中力ですね。作業中に申し訳ないが、そろそろ出なくてはならなくて」

「あ、はい」

立ち上がりながらネクタイを直す仕草につられ、大月陽が急いで立ち上がろうとするのを手でとどめると、五島はこの後の待ち合わせ時間を念押しした。

「……では、また後で。あ、そのままで結構」

再び立ち上がろうとする陽を制し、五島はのっしのっしとスタジオを横切りながら夏蓮に声をかける。二言三言言葉を交わしながら、いつものように互いに手を挙げて挨拶らしき仕草をして、スタジオのドアを開ける。

ドアが閉じる瞬間、スケッチブックをかき抱くようにして描いている陽に、夏蓮が弾むような足取りで近づいていくのを横目で一瞥し、五島はスタジオを後にした。

これで、登場人物が全て出揃いました。まだ名前の出ていない人も含めて……

夏蓮が店に足を踏み入れた瞬間、店内が一瞬静まり返った。

客もちろん従業員さえも、皆一様に息を呑む。中には手にしたフォークを取り落とす者まで居る。

いつものことだ。

五島が名前を告げると、接客係は目が覚めたように仕事を思い出し、恭しい仕草で彼らを窓際の席に案内する。

夏蓮の後ろを歩きながら店内を見渡し、さりげなく客の顔をチェックした。知り合いが居ないか、また怪しい者が居ないか確認する為だ。

皆一様に夏蓮に視線を奪われているため、こちらが客をチェックしていることに気付かない。

それほど広くはないが天井の高い、落ち着いた雰囲気のレストランだ。

真っ白なクロスがかけられたテーブルはたっぴりと余裕を持って設置され、カナリヤ色の壁にはシンプルで上品な間接照明。卓上の蠟燭の炎がゆらゆらと揺れてほのかに照らしている。窓からは美しい夜景が見下ろせる。

耳を澄ませばようやく聞こえるほどの音量で、ピアノ曲がかかっている。よく耳にする曲だったが、五島は曲名を知らなかった。

ようやく他の客達に声が戻った。テーブルまでの短い道のりを歩く夏蓮を見送りながら、囁き声や羨望の視線が交わされる。

そんな反応を、夏蓮はまったく意に介さずに歩を進め、五島が引いた椅子に優雅に着席する。

差し出されたメニューをゆるく首を振って断り微笑みかけると、案内係は感極まったような表情で深々と頭を下げた。

五島にとっては、見慣れた光景だった。

「大月くん、何にしますか？」

大月陽が任せると言うので、五島は案内係に質問しながらいくつかの料理と飲み物を手早く注文

した。もとより、夏蓮の好みは熟知している。

大月陽は店内を物珍し気に眺めまわし、夏蓮はそんな陽を眺めて微笑んでいた。

「素敵な店ですね。俺、こんな店初めて来ました」

「ここは私も初めてよ。むーちゃん、知ってたの？」

「それは止めろ」

「じゃ、ごーちゃん」

「それも止めてくれ」

「何よ、ケチ」

夏蓮は五島を睨む真似をし、パイと顔を背けると陽の方に少し肩を寄せた。

「普段は周りが『カズ』って呼ぶから私もそうしてるんだけどね。子供の頃のあだ名だったの。武一のタケを『む』って読んでむーちゃん。『ごとう』だからごーちゃん。」

「そんな呼び方してたのは、お前だけだ」

五島はざっと店内を見回し、再び客をチェックした。

まだチラチラとこちらを見ている客は居るが、危害を加えてきそうな者は居ない。

「おふたりは昔からのお知り合いなんですか？」

「幼馴染みよ」「腐れ縁だ」

屈託なく笑う大月陽に、夏蓮が昔ばなしをし始めた。

なんてことはない、ただ単に家が隣で親同士が親しかっただけの話なのだが・・・

† † †

煌月家が隣に越してきたのは、夏蓮が小学校にあがる年だった。

元々そこには夏蓮の祖父母が長く住んでいたのだが、祖父が亡くなったために、都心から郊外の街に一家で越して来たのだ。

とはいえ上の姉ふたりは進学で家を出ていたので、実際に越してきたのは両親と夏蓮の3人だった。

隣と言っても広い庭と石塀で隔てられており、普通なら頻繁に顔を合わせることも無かっただろう。

だが程なくして、夏蓮はよくうちに遊びに来るようになった。

すっかり懐かれてしまったのは、ある事件があったからだ。

事件といっても、近所の悪ガキどもが夏蓮の持ち物を奪いからかっていたところに、ちょうど犬の散歩で通りかかった自分がガキどもを追い散らした、というだけの話だったのだが。

とにかくその一件で、俺は「隣のお兄ちゃん」から「隣の強いお兄ちゃん」に格上げされた。さらに夏蓮が漢字を習うと「むーちゃん」になり、俺の成長に伴い「五島のゴツイお兄ちゃん、ごーちゃん」と呼び名が変わっていったのだった。

十 十 十

「で、海外留学中に変質者に絡まれたことがあってね.....心配したうちの両親に頼み込まれて私の留学先に来て、お目付役兼ボディガードをやってくれたの。プロのダンサーになってからは、私のマネージャー」

「なんか凄い。海外まで行っちゃうなんて」

「日本の武道って、海外でわりと人気があるのよ。だから、その頃教えてた道場で、海外での指導の職を都合して貰えたのよね。で、そっちで働きながら、私の送り迎えその他諸々を。えっと.....空手？柔道？どっちだったかしら」

「両方だ」

五島はむっとり答えると、大きく無骨な手には似合わぬグラスを取り、水を飲んだ。

† † †

夏蓮の両親は、もともと海外留学に反対していた。歳の離れた末っ子の彼女は、当時大学生だった五島目から見ても、甘やかされていた。

せっかくのダンスの才能を伸ばさないのはもったいない、と彼女の両親を説得した時は、当時のバレエスクールの講師に相当感謝されたものだ。

そういう経緯もあって、例の事件を受けて夏蓮の両親に頼まれた際、すぐさまドイツに飛んだわけだが、五島がその決断をしたのにはもっと大きな理由があった。

ただ、単純に、ダンスを止めて欲しくなかったのだ。

初めて夏蓮の踊りを観た時の衝撃を、五島は今も覚えている。

たいては興味も無いまま、ほぼ無理矢理両親に連れられて観に行った発表会が、生まれて初めて観る舞踊だった。

簡素な背景の後ろから登場した夏蓮が舞台の中央で立ち止まり、すっと腕を伸ばし最初のポーズをとった瞬間、舞台上の空気が一瞬で変わった。

背中と両腕に、鳥肌が立った。

僅か数分の出番だったが、その間五島は呼吸どころか瞬きすら忘れるほど舞台に引き込まれていた。

舞台上で踊っているのが「お隣の夏蓮ちゃん」であることなど、意識の端にもものぼらなかった。ただただ、舞台上で繰り広げられる芸術に心を奪われていただけだった。

それまでの五島は武道一辺倒で、正直なところバレエやダンスなどは、飛んだり跳ねたりといった遊びの延長にすぎないとさえ思っていた。

だがその数分間は、五島が今まで見ていた世界をガラリと変えるものだった。

ありふれた日常に光が満ち、花が咲き乱れ鳥が歌い、瞬きをする度に極彩色の様々な悦びを繰り出して来る。

そんな美しい、美しすぎて時に息苦しくなるほどの、世界の始まりだったのだ。

十 十 十

当時のことを追想していたのは、ほんの僅かな時間だった筈だ。

五島は口の中のほど良くスパイスの香るラム肉を飲み下しながら、現在へと意識を戻した。

メインの肉料理を食べ終わる頃になり漸く腹が満たされたのか、大月陽は店内の装飾を仔細に眺め始めた。

食器の意匠、キャンドルホルダーのデザイン、卓上花のアレンジ、壁の装飾。

少し身体を引いて身じろぎし、テーブル上の数々の皿やグラスを角度を変えて見渡そうとしている。

ひとりでワイン一本をほぼ空けてしまいご機嫌な夏蓮が、フォークを置いて大月陽の方へ身乗り出した。

「どうしたの？ もう、お腹いっぱいかしら？ それとも、飽きちゃった？」

「いや、そうじゃなくて。どうやって描こうかなって……」

ああ、と頷きながら、夏蓮が吹き出した。

「わかるわ。私も何かあるとまず、どう踊ろうかって考える」

「ですよね」

ふたりは当たり前のように笑いあっているが、五島にはその感覚がさっぱりわからなかった。

自分の仕事は、夏蓮を護りサポートすることだ。

トラブルが起きた時に、どう反応対処するか。反射神経が全てと言っても良い。

自ら何かを生み出すというのは五島にはあまり馴染みの無いことだったし、そもそも芸術的な素養は皆無だ。

「食事のシーンをどう踊るか」について語りながら上半身だけで小さく振りをつけてみせる夏蓮と、頷きながら全ての動きを頭に焼き付けるように見つめている大月陽。

抑えた仕草とはいえ、食事中に踊るなど行儀の悪いことこの上ない。だが、夏蓮がそれをすると、なんとも言えず優雅でチャーミングであることは否めなかった。周囲の客も食事を忘れて見惚れている。

そんな光景を眺めながら、五島はお決まりのちょっとした疎外感を感じていた。夏蓮の付き合う人々には、ジャンルは様々だが圧倒的に芸術家が多い。彼らは、感性が根本から違うように思う。

五島は彼らの領域に足を踏み入れることが出来ないし、そうするつもりも無かった。

五島「夏蓮、食事中に踊るのは」

夏蓮「もう、ごーちゃん怒ってばかり」

五島「お前が怒られるようなことばかり」

夏蓮「ね、陽。このひと口うるさいでしょ。きっとね、うちの親からお目付役を頼まれてるのよ。いつも小言ばかり言うんだから」

五島「少しはひとの話を……ハア。どうせ聞かないんだから、言っても無駄か」

夏蓮「そうよ（ニッコリ）」

陽（わあ……五島さん、お疲れさまです……）

開演前

恵流ちゃんは、なんだか浮かない顔をしている。

昨夜は久々に大月さんと過ごして、今日は朝から一緒に出掛けて来たという話だったのに。

こちらから訊ねるのも何だし……と思っていたら、優馬と大月くんがじゃれている隙を突いて、彼女がおずおずと私の肘を突ついて来た。

「あの、栞さん。ちょっと……」

恵流に促され、栞は靴屋のウィンドウ前まで移動した。さも靴に興味があるみたいにディスプレイを覗き込む恵流に倣い、栞も靴を眺めるふりをする。

珍しくデニム地のジャケットを羽織っている陽をからかう優馬をちらりと見遣りながら、恵流は声を落として話し始めた。

「……痣？」

「はい。深い赤色で、段々色が濃くなっている気がするんです。陽は痛くも痒くもないって言うんだけど、場所が心臓の辺りだし、なんだか不安で」

「病院には？」

恵流は首を振った。

「職場の健康診断で聞いたらしいんですけど、特に問題無さそうだから様子を見てみましょうって」

「そう……」

聞けば、強く打ったとかそういうことも無いと言う。そもそも打撲かなにかであれば、変色するならともかく、4ヶ月もかけて痣が濃くなることは考え難い。

栞はしばし考え込んだが、思いつく病名は無かった。

「恵流ちゃんのお母さまには？」

「言ってません。なんか、聞きづらいし……」

そうか。いくら相手が看護師とはいえ、実の母親には聞きづらিদらう。

「話だけじゃわからないわね。心配なら、やっぱりちゃんと受診した方がいいわ」
「ですよねえ……」

あからさまに表情を曇らす恵流を励ますように、栞は恵流の肩を叩いた。

「朝から元気が無いと思ったら、そういうことか。優馬からも受診するようにけしかけさせるわ。私も色々調べてみる。だから、そんな顔しないで。せっかくのドレスアップが台無しよ？」

恵流のほっぺたを人差し指でツンと突つくと、恵流は漸く笑った。

「そうですよね。今のところピンピンしてるし、本人も絶好調だって言ってるし……うん。聞いてもらったら、ちょっと気持ちが軽くなりました。ありがとうございます」

吹っ切るようにその場でくるりと一回転すると、恵流の表情は見違えて明るくなった。

「よし！楽しもう！私、劇場で観劇するの、初めてなんです」

「私もうんと久し振りだわ。ね、入場前に、何か軽く食べましょう。公演中にお腹が鳴ったら恥ずかしいもの」

優馬達の元へ戻り合流すると、4人は近くのカフェに入った。

煌月カレンの公演が始まるまで、あと2時間少し……

† † †

「鷺娘 an egret」と銘打たれたその演目は、古い長唄を元にした有名な歌舞伎「鷺娘」をアレンジし、バレエを主としたコンテンポラリーダンスで表現するものらしい。座席のパンフレットには、簡単なあらすじが記されていた。

「うちのシャッターの絵、あるじゃん？ 衣装はあれを参考にしたんだって」

恵流の隣でパンフレットをパラパラとめくりながら、陽は事も無げにニコニコしている。世界各地で公演をして回っている舞踏家の演出に影響を与えたということが、どれほどのことなのか。陽は全く理解していないらしい。

まるで、夏休みの工作にヒントをあげたくらいの感覚みたいだ。

「陽、それってすごいことなんじゃ……」

「うん？ 楽しみだねえ」

（駄目だ、この人……）

陽の呑気さに軽い目眩を覚えながら、恵流は手元のパンフレットに目を落とした。

煌月カレンは5つの演目のうち、最後に出演するらしい。

「白鷺の化身が人間に恋をした。娘は初めての恋に心を躍らせるが、叶わぬ想いに苦悩する。あまりの苦しみに狂乱し、やがて娘は白鷺の姿に戻り力尽き息絶えてしまう」

前の4つの演目については、それぞれ複数のダンサーの名前が記されているが、最後の演目には、一人の名前しか載っていない。

煌月カレンはたった独りで踊るのだ。

彼女の名前の下に、簡単なプロフィールがあった。

略歴と代表作。それに「猫の足音と鳥の羽ばたき」という異名が紹介されている。

さざめいている150人ほどのホールは、ほぼ満席だ。やがて開演のブザーが鳴り、人々は静まり返った。

「鶯娘」は実在する演目です。

「日本版 白鳥の湖（瀕死の白鳥）」とも評されるそうですが、鶯娘の方がずっと前に生まれているのだそうです……日本の歌舞伎とロシアのバレエ。国は違えど、共通する何かがあるんですね。とても興味深いです。

舞台の種類にかかわらず、開演前のソワソワする期待感が大好きです。ワクワクしすぎて、ちょっと具合悪くなったりします。

真っ暗な舞台の下手寄りに、青白いスポットライトが落ちた。

樹の下にひっそりと佇み切な気に遠くを眺めている、頭から白いベールを纏った儂気な少女が浮かび上がる。

静寂の中、ヒラヒラと雪が降り始めた。

凍った湖面にピシりとひびが入ったような微かなギターの音色に、少女はハッと耳をそばだてた。

心許な気に辺りを見回し、少女は見えない何かを探すように片手を差し出す。

囁くようなギターがホロホロと澄んだ音色を響かせ始めると、少女は躊躇いがちにそろりと腕を伸ばした。

応えるように、励ますように、音色は徐々に力強く響き出す。

少女はしばらく樹の幹に手をかけたまま躊躇っていた。だが、恐れを拭う様に一度だけゆっくりと瞬きし、優雅に両腕を差し伸べた。

ギターは誘い出すような楽し気な旋律へと変わり、舞台中央が徐々に明るく照らし出される。

少女は静かに進み出たかと思うと、被っていたベールを肘へと滑り落としふわりと宙に舞った。

観客が息を呑む中、重力から解き放たれ跳躍した少女は音も無く舞台中央へ降り立ち、軽やかにくるりと回転した。その瞬間、舞台全体が華やかに照らし出され、少女はギターの音色にのって舞いはじめた。

嬉し気に弾むステップを踏み、高い位置でゆるく結った髪が揺れて、希望とほんの少しの羞じらいが入り混じる表情を際立たせる。

純白の薄いベールを翼のように広げ、雪色のドレスの裾が翻る。

今や世界は柔らかな光りに照らし出されている。

色とりどりの花が咲く中を様々な花の色に染まりながら、少女は輝くような可憐な微笑みを浮かべ、身体を揺らし腕を振り上げ、跳躍し回転し、心のままに踊り続ける……

十 十 十

割れんばかりの、鳴り止まない拍手の中。

自らも惜しめない拍手を送りながら、恵流は隣に座っている陽を盗み見た。

身体を乗り出して前の座席の背もたれを握りしめたまま、真っ暗な舞台上を凝視している。

おそらく舞台上には、陽にだけ見える残像が映っているのだと、恵流は確信した。

カーテンコールに応え再び照らされた舞台の中央に、煌月カレンが立っていた。

一際大きくなった歓声に大きく両腕を広げ堂々と観客に応える姿は、先ほどまで十数分に渡って初々しい喜びから一転して苦悩し、さらには狂気に陥り力尽きるまでを踊り尽くした女性とは、別人の様に見えた。

カレンが恭しく一礼すると、観客の大半が立ち上がり頭上高く両手を打ち鳴らす。

光を振りまくような笑顔を見せ、カレンは舞台袖に合図して全ての出演者を舞台上に呼び込んだ。

ぞろぞろとダンサーや演奏者が登場し整列した頃、漸く陽もふらりと立ち上がりカ一杯拍手を贈り始めたが、その眼はまだどこか虚ろだった。

十 十 十

「陽！ おいってば。お前、大丈夫か？」

丸めたパンフレットでポコンと頭を叩かれ、夢から醒めたみたいに眼をパチクリさせている陽を、優馬が眉を寄せ覗き込んでいる。

「んあ？ ああ、うん。大丈夫……」

「メシどうすっかって聞いたんだけど」

パンフレットという武器を栞が無言で取り上げるに任せ、優馬はスマホを取り出した。

「メシ……ああ、そうだね……」

スマホの電源を入れつつ、優馬は怪訝な表情を浮かべた。

「お前、大丈夫か？ さっきからボーッとして……」

「優馬さん」

恵流が遮った。優馬と栞に、苦笑いで首を振ってみせる。

「彼、今日はもう駄目です。頭の中は絵でいっぱいみたい」

焦点の合っていない目で一点を見つめ立ち尽くしている姿からは、極度に集中して自分の頭を覗き込んでいるのが窺えた。

「お前ねえ……」

優馬がため息混じりに呟いた。

「確かに凄い舞台だったけど……まあ、しょうがないか。陽だしな」

恵流は肩をすくめて笑った。

「ええ、陽ですから。私が家まで送ります」

「普通、逆だろうが……全く。カレシがアホだと苦労するね、恵流ちゃん」

「もう慣れました。彼、私の友人には『絵画バカ』って呼ばれてるんですよ」

恵流が秘密めかして告げ口すると、優馬と栞は俯いて笑いを噛み殺した。

一見仲睦まじく腕を組んでいる二人だが、実は気もそぞろな陽の腕を恵流がさりげなく引いて誘導している。

遠ざかるそんな後ろ姿を、栞は少しの間心配そうに眺めていたが、先にぶらぶらと歩き出していた優馬に追いつくべく、足早に後を追った。

十 十 十

座席に深く腰掛け若干前屈みの姿勢で電車で揺られながら、陽は先ほどから床の一点を見つめ続けている。

眉を険しくし目を伏せて唇を引き結んだ表情を見た乗客は、ふたりを喧嘩中のカップルだと思っているかもしれない。

膝を掴んでいる両手の節が、白く浮き出ている。

こんなに力を入れ続けていたら、肩や背中がガチガチになってしまうのではないかと恵流は心配だったが、声はかけなかった。

先ほどの煌月カレンの演技を、頭の中で克明に再生しているのであろう陽の邪魔をするつもりは無い。

「陽、着いたよ」

しばらくして降車駅に着くと、恵流はそっと陽の肘を引いた。

陽は「ああ」だか「うう」だかと呻きながら立ち上がり、恵流に促されて電車を降りる。

(この調子じゃ、自転車を漕ぐのは危ないかな)

来る時には恵流が後ろに乗せてもらっていたが、帰りは自分が漕いだ方が良さそうだ。ヒールが低めのパンプスを履いて来て良かったと、つくづく思う。

先に改札を通ると、機械的な仕草で同じ改札を抜ける陽を待つ間、恵流はもう一泊した方が良さそうだと判断した。社会人になってから外泊が解禁されて、本当に良かった。

おそらく陽は、食事もせずに一晩中描き続けるだろう。絵を描きながら片手で簡単に食べられる夜食と、明日の朝食を準備しておかなくちゃ。

既に通い慣れた自転車置き場に向かいながら、恵流は冷蔵庫の中身を思い浮かべていた。

恵流ちゃん、すでに介護の領域です。要介護の陽。なんつって。

さらさらと、微かな音が聞こえる。

その小気味良いリズムからは、迷いというものが全く感じられない。行くべき道を確認し、まっすぐに進むものが発するリズムだ。

(この音、何だっけ。私、知ってる………)

ああ、陽だ。陽が描く音だ。

でも、何だろう。ちょっと違う……

恵流は目を擦り、寝起きのボーッとした頭で考える。

カーテンの隙間から差し込む朝日が眩しくて、なかなか目が開かない。

(ああ、浴衣だ……花火大会の夜の)

そこまで思い出し、一気に覚醒した。

が、恵流はベッドに横たわったまま動かなかった。しばらく目を閉じたまま、じっと陽の鉛筆の音を聞いている。

あのとき、陽の鉛筆の音のひとつひとつが、恵流の身体に、心に、刻み込まれるように感じた。とろとろと眠りに引き込まれながら、恵流はこれまでになく満ち足りていたのを思い出す。

きっと、陽のすべてが、自分に向けられていたからだ。

陽の視線も意識も心も行動も、全て自分で独り占め出来ていたからだ。

今聞こえているこの音は、あの時とは少し違う。何だか、他人行儀な音。

あれは、自分に向けられた音じゃない。あの情熱の対象は今、自分ではなく他の女性に向かっている。

恵流は両腕で目を覆った。

昨夜もひとりベッドに横たわりながら、目を瞑ってこの音を聞いていた。

煌月カレン。

あの、才能に満ちた美しい女性を思い出しながら、陽は一心不乱に筆を走らせている。

普段は揺るぎない力強さと生命力の権化のような女性なのに、舞台上立つ彼女は全くの別人のように儂気だった。

すらりと細い首が優雅に伸び、しなやかな腕は指先まで完璧に美しい。

ほっそりとしているのに女性的な身体は、しかし、強靱な筋力とバネに支えられているのがよくわかる。

そんな彼女の舞台は、まさに圧巻だった。

20分かそこらの間に、白鷺の精の美しくも壮絶な恋を描き出していた。

あの、心浮き立つように楽し気に、若々しく舞台狭しと舞い踊る姿。

一転、赤や紫の照明のもと、苦しみに身体をくねらせ悲しみに身を震わせつつも、どこか妖艶な姿。

そして、狂気に落ち激しく悶え苦しみながら、ほの昏い舞台の中、最期まで救いを求めるように幾度も腕を差し伸べるが、叶わずに力尽きる姿。

そして、最後のカーテンコール。

眩しい照明と渦巻く盛大な拍手の中、普段どおりの自信に満ちあふれた晴れやかな笑顔で貫禄すら感じさせる彼女の姿。

きっと一晩中。

絵を描きながら、陽はそれらを思い起していたはずだ。何度も、何度も。

恵流は目を覆っていた両腕を外すと、今度はゴシゴシと目を擦った。そしてそのまま、拳をぎゅっと目に押し当てる。

(シャッターの絵、彼女は陽とふたりで見たんだろうか。あの時の私達みたいに、ふたり並んでシャッターの前にしゃがみ込み、見上げたんだろうか)

胸の中が嫌な熱さで焦げ付く。髪を掻きむしりたい衝動を抑え、恵流は勢い良く上体を起こした。

いやだいやだいやだ。こんな浅ましい私は、嫌だ。

「大きな依頼があった」と陽から聞いた時には、我が事のように、それこそ舞い上がるほど嬉しかったのに。心の底から喜んで応援したのに。

ほんの2ヶ月弱の間に、私は何故、こんなに欲張りになってしまったんだろう。

絵のモデルにヤキモチを妬くなんて、なんてみっともない。今までだって、陽は描く対象に対して同じように集中してたじゃない。いつだって、絵を描いている間は。

そう。絵を描いている間は。

そして私は、そんな陽が好きなんだ。

今はちょっと、動揺してるだけ。だって、昨日あんなに凄い舞台を見ちゃったから。それだけ。

ついこの間だって、陽は言ってくれたじゃない。

珍しく深刻な顔をして考え込んでいたと思ったら、突然「あのさあ……」って真剣な顔で切り出して。

「俺、恵流のこと好きだから、付き合い始めたわけじゃん？でも……」

あの時はずいぶん焦ったっけ。別れ話でもされるのかと思って。

「付き合いっていくうちに、どんどん好きになっていってて……その、ちょっと困ってる。っていうか、戸惑ってる？ねえ俺、どうしよう」

そう言って、途方にくれたみたいに笑った。

それで、嬉しくて思わず号泣しちゃった私に「変なこと言って、ごめん」って何度も謝りながら、ティッシュで涙をかんでくれたじゃない。「ほら、フーンってして」って。

あの言葉は、嘘じゃなかった。

だって、ほんとに愛していなきゃ、相手の涙かんだり出来ない。と、思う。

あの時は随分びっくりしたけど、同時に「今この瞬間に天に召されてもいい」とまで思ったっけ。

そうだよ。ちゃんと思い出して。あの時の気持ち。あの時の.....

.....そういえばあれは、夏蓮さんと出会う前のことだった。何度も心の中で反芻してたからついこの間のことみたいに感じてたけど、もう2ヶ月以上も前のこと.....

ううん！そんなの関係ない！陽は、コロコロと簡単に心変わりするような人じゃないもん！

両手で、毛布をギュッと掴む。目を閉じて、腕と肩にうんと力を入れる。
両肩を聳やかす様に高く上げ.....ストンと落とす。

よし、朝ごはんにしよう。

陽はいつも、描いている間は食事を摂らないから、お腹空いてるはず。

昨夜作っておいた陽の大好物、野菜たっぷりのトマトスープを温めて。食後にはリンゴをうさぎさんに切ってあげよう。

ハイ恵流さん、笑って！

恵流は毛布をはね除けると、ベッドからぴよんと飛び降りた。

「陽、おはよ」

恵流「あの時の言葉、録音しておきたかった……思わず検索したボイスレコーダー、いまだに広告がポップアップされるし……うう、ポチりたい」

恵流さん、それやったらほぼ変態です……

車が止まった音が聞こえた。

腕時計を確認すると、約束の時間の5分前だった。

7月も終わりの午前11時。窓から見える庭は強烈な夏の太陽光に灼かれ、ジリジリと音が聞こえてきそう。外は既に暴力的なまでの暑さだろう。

五島は自室を出て小さなロビーを横切り、階段を上った。白木の廊下を進み、真っ白な扉をノックする。

「夏蓮、着いたみたいだ」

「わかった。今行くわ」

部屋の中から夏蓮が答えた。あきらかに睡眠不足のはずなのに、その声は澆漑としている。舞台の振り付けの仕事を終えて一昨日帰国し、その足で地方のダンススクールの特別講師を終えたばかりだ。昨夜帰ってきたのは深夜だったが、夏蓮は早起きして朝から荷物の整理をしていた。

夏生まれのせいかわりに夏蓮は暑さに滅法強く、夏の間驚くほど精力的になる。

階段を降りると、キッチンの方から淹れたばかりのコーヒーの香りが漂ってくる。五島はロビーを進むついでに花瓶の花の具合をチェックし、リビングの扉を開け放った。

「靴がどうしても納まりきらないのよ」

夏蓮がぼやきながらリビングへ入ってきた。

彼女は歩く時にほとんど足音を立てない。「猫の足音」は家の中でも健在なのだ。

「海外へ行く度にあんなに買ってたら、当たり前だろう」

「だって、消耗が激しいんだもの。良いものを見つけたら、その時に買っておかなきゃ」

一理あるが、ダンスシューズばかりか普段用の靴までもいくつも買う理由にはならないだろう。

そう思いはするが、言っても無駄なことだ。

「なら服を捨てろよ」

「イヤ」

インターホンが鳴った。

「あ、来た」

夏蓮が弾む足取りで玄関へ向かう。

五島はインターホンの受話器を取った。

「お久しぶりで……うあ」

玄関から飛び出した夏蓮にいきなり抱きつかれてたじろぐ陽の手から、大きな絵を救い出し、かわりに五島が挨拶を返す。

夏蓮はまだ海外モードが抜けていないらしい。

「大月くん、お久しぶり。今日はわざわざお越しいただき、ありがとうございます。藤枝さん、この度は大変お世話になりました」

夏蓮は藤枝にもハグをしたが、こちらは慣れたもので、にこやかに片手を背中に回している。

「こちらこそ。カレンさんのお宅に飾る絵に携わることが出来て、光栄ですよ」

五島は藤枝からもうひとつ、梱包した絵を受け取った。

まだ少し動揺している陽と上機嫌な藤枝を促すと、夏蓮が瞬間移動とも思える速さでアプローチをすり抜け玄関扉を開いた。

期待に顔を輝かせて手招きしている彼女をよく見れば、室内履きのままだ。かなり絵を楽しみにしていたのは知っていたが、こうまではしゃぐとは。

明日行われる夏蓮の誕生日パーティーは、相当な盛り上がりになるだろう。五島は酒を買い足しておこうと決めた。

早く見たいと夏蓮が急かすので、陽と藤枝、そして五島の3人は、せっかく淹れたコーヒーを飲む間もなくせっせと絵の梱包を解いていた。

その間、当の夏蓮は子供の様に両手で目を覆い、後ろを向いてうずうずと足踏みをしている。

16歳のとき、幼い頃から続けてきたバレエを辞め、フリーのダンサーへと転向して、10周年。

その年の誕生日の記念に絵を描いてもらうというのは、初めは些細な思いつきだった。

相応しい画家を捜すうち、夏蓮の父親が懇意にしている画廊のオーナー、藤枝の推薦で大月陽と知り合い、彼の絵への情熱を知り共感し、絵に対する期待がどんどん高まっていったのだろうと思う。

明日の誕生日パーティーは、この絵のお披露目会も兼ねているのだ。

「ねえ、まだ？」

「もう少しです……」

梱包材をまとめて端に除け、2枚の絵を並べて壁に立てかける。

100号の絵は、藤枝に発注した豪華な額を含めれば夏蓮の身長とほぼ同じ高さだ。もう一方の絵は、確か12号と聞いている。

「ハイ、オッケーです。どうぞ」

振り向いた途端息を飲む音が聞こえ、直後に夏蓮の絶叫が響いた。

いちいちリアクションの大きい夏蓮さんに、終始冷静な五島さんです。

五島さんのおしごと

夏蓮の熱烈な抱擁から苦勞して陽を救出し、五島はコーヒーを淹れにキッチンへ足を向けた。

徐ろに踵を返して絵の前に戻り床に座り込んだ夏蓮は、両手の指先を合わせ口元で交差させたまま、じっと絵に見入っている。

100号の大きな絵の方は、先日の舞台の1シーンだ。

冒頭、白鷺が人間の姿へと変わる瞬間。軽やかな跳躍から片足を後ろへ高く跳ね上げたまま着地するところ。

背景は暗い藍色で、今まさに着地しようとしている床面だけがほの白く光っている。暗い背景に夏蓮の白い肌と純白の衣装が浮かび上がり、真っ白な鳥の羽根が舞い、その羽根がふわりと淡く輝いている。

腕に絡めたショールが風を孕み、髪の後れ毛がなびいて、跳躍の高さと浮遊感がよく表現されていた。

「これ……凄いわ」

先ほど作ったコーヒーは、時間が経ってしまったので捨てた。

半ば呆然としたような夏蓮の眩きを背に聞きながら、五島は低いテーブルに改めてコーヒーメーカーをセットする。

「ショールの質感まで、こんなに……」

大月陽の説明によれば、衣装に関しては恋人である清水恵流の意見が大変参考になったらしい。ショールに光を反射する素材が織り込まれているという彼女の推測は、見事に当たっていた。

それは、大月陽のシャッター絵を観た夏蓮が急遽作らせたものだった。

歌舞伎でいうところの「早着替え」や「引き抜き」といった衣装替えを、照明の色を変えることで表現したのだが、喜びを表すパートのところと、その後の苦悩のパートでショールを使い分けることで、より変化を付け、効果的に視覚に訴えることが出来た。

「ここ、一番好きなパートなの。白鷺が人間になる瞬間。着地と同時に照明が変わって、人間の

世界に降り立ったことを示すの。くるっと一回転したらもう、人間になっているのよ」

「俺も、その瞬間がすごい印象的だったんです。最初でガツンとやられたっていうか。後半の、紫のライトのとことか赤のライトのとこと迷ったんですけど」

どうやら大月陽は、照明の色でストーリーを把握しているらしい。

「あと、死んじゃうとことかも描くには面白そうだったんです。でも、お祝いと記念の絵だから、やっぱこっちだなって」

夏蓮は無言で何度も頷くと、隣の小さな絵に視線を移した。

「これは……？」

こちらは、おそらく練習の時の姿だった。

真剣な表情で滴る汗を手の甲で拭う瞬間。だが、それすらもひとつのポーズであるかのように美しかった。

真っ暗な背景にはところどころに微妙に赤い色が混じり、うねっている。視線の先にあるものを焼き尽くすような強い瞳で前方を見据えている夏蓮。その身体から白く揺らめき立ちのぼる輝きは、熱気だろうか。情熱？オーラ？

「普通の練習風景を見てて、なんかすごい闘争心っていうか……熱とか圧力みたいな？ メラメラ、グオオオオって感じが出てて、どうしても描きたかったんです。だから、勝手に描いちゃった。これは俺からの誕生日プレゼントです」

夏蓮が再び大月陽に飛びつくのを、阻止することは出来なかった。

目を白黒させている大月陽を見かね、五島は首に絡み付いて離れない両腕を引き離そうとするが、力一杯しがみついているなかなか離れない。

彼女は感情と行動が直結しているので、こういうとき場の混乱を収めるのも、五島の役目だった。

「夏蓮、ここは日本で彼は日本人だ。嬉しいのはわかるが、困らせるんじゃない」

ようやく腕を離した夏蓮だったが、その瞳からはポロポロと涙が零れていた。

狼狽える陽を他所に、五島は落ち着いてポケットからハンカチを取り出し夏蓮に手渡す。夏蓮は涙を拭くと、頷いて五島にハンカチを返した。

「ごめんなさい。私、感激してしまって」

指先で目元を擦り、ほう、とため息をついた。

「今まで、数えきれないほどたくさんの写真家に写真を撮られたし、絵を描いてくれた人もいた。でもみんな、いかに私を美しく撮るか、技術的難易度の高いポーズを切り取るか、って作品だった。こんな風に、私の内面……魂の部分を見透かして表現してくれたのは、貴方が初めて」

夏蓮は立ち上がると、今度はゆっくりと大月陽に歩み寄った。

そっと腕を伸ばし、再び両腕を首に回す。陽の肩に顎を寄せ、感極まるという風情で言った。

「貴方が初めてよ、陽。本当にありがとう。あなたは素晴らしい画家だわ」

五島が節の目立つ大きな手で、華奢なカップにコーヒーを注ぐ。

優しく香り高い湯気が漂う部屋で、夏蓮はしばらくの間、固まっている大月陽の首に絡みついたままだった。

明日のお披露目にどうしても来てくれ、とごねる夏蓮を宥めるのは一仕事だった。

前述の彼女と花火大会に行く約束があるから出席は出来ない、と事前に聞いていたのにもかかわらず。

大月陽が帰った今も、夏蓮はまだ拗ねている。過去に自分の誘いを断られた経験がほとんど無いだけに、すんなり諦められないのだろう。

様々な職種の面白い友人達や著名な知り合いが大勢集まるから人脈づくりにもなるのだ、とかき口説く夏蓮を、「彼女との花火大会」を優先し何の迷いも無く一蹴してしまう（さらに言えば、馬鹿正直に理由をそのまま伝えてしまう）大月陽という男は、正直興味深い人物だと五島は思った。

優馬「理由をそのまま言っちゃったのは、『耳障りの良い理由をこじつける』って知恵が無かっただけだと思います(・∀・)l」

陽「だって、ほんとの事だし.....嘘の理由つけるなんて、発想すらなかった...」

優馬「嘘も方便、って言葉があっただな」

陽「それぐらい知ってるし」

優馬「知ってても、使えないなら無駄知識だと思います (・∀・)l」

陽「.....(_。)」

アヤは缶チューハイの蓋を片手で開けた。どうにもオヤジ臭い仕草だが、片手がスマホで塞がっているの仕方ない。

チューハイを少しだけ飲むと、スマホに充電ケーブルを挿し、充電を始めた。どうやら、長い話になりそうだ。

「怖いって、何が」

徐々に恵流からの電話だった。仕事の進捗や近況等、メールは頻繁に交わしていたし、ホームセンでも何度か顔を合わせていたが、電話で話すのは数カ月ぶりだろうか。

「んー、上手く言えないんだけど……陽が怖いっていうか、私が？ 怖いのかな」

「何それ。意味わからん」

「私も、よくわからないんだ……」

困惑を滲ませた恵流の声は、どうにも不安気で心許ない様子だ。

「ついこの間だって、『花火大会の特等席で見れたあ♡』とかなんとか、大喜びでメール寄越したじゃない？」

「うん……その特等席もね、カレンさんの絵のギャラが入ったからって、後から言われて。複雑っていうか」

「ただの仕事でしょ」

「それはわかってるんだけど」

グダグダと煮え切らない恵流の言葉を聞き流しつつ、チューハイを呷り枝豆を齧る。風呂上がりにクーラーの涼風を浴びながら飲むチューハイは格別だ。ありがちな恋愛の愚痴も、炭酸の効いた爽やかな酒とともに喉を滑り降りて行く。

「要するに、ヤキモチね。前にも、カレンって人の絵がある間は部屋に入りたくないとか言ってたし」

「うん……ヤキモチっていうか……」

「その人の絵を描いてるところを見たくなかったんでしょ？」

「……そこまで言ってないよ」

「でも、そういうことでしょ？」

「……うん」

恵流はいかにも認めたくなさそうに呟く。

アヤは枝豆を次々に口に放り込んだ。10粒くらい口の中に溜めて、おもむろに噛み砕く。この食べ方が一番美味しく感じる。少々お行儀が悪いので、もちろん家の中でしかやらないが。

「で。何がどう怖いの？」

恵流は電話の向こうで言い淀んでいる気配がする。こちらはチューハイを飲みながら黙って待つしかない。

暫くの沈黙の後、恵流はおずおずと切り出した。

「変なこと言ってるって、自分でも思うんだけど……」

何を今さら、と正直思う。アンタが突飛なことを言い出すのは、今に始まったことじゃないっつーの。

「最近、夢を見るの。何度も、同じ夢」

† † †

場所は、いつも決まって陽の部屋。壁の一部が緋い光に染まっているから、時間は多分夕方くらい。

ほぼ向かい合わせに、ふたりは床に座っている。

陽の周りには画用紙が散らばっている。

陽が恵流の手を取り、指を一本ねじり取る。ギョッ、クルクル、スポン。

ねじ切った指の切り口から滴る血をチュルッと吸い、「恵流の血は美味しいね」と陽が微笑む。

そして、その指を筆代わりに、床に散らばった画用紙に絵を描き始める。

指から血が出なくなると、そのままモグモグと食べてしまう。

だんだんと、部屋の中が暗くなっていく。日が傾いているのか、血液が失われて目の前が暗くなっているのか、わからない。

全ての指が無くなると、今度は手首を折り、手を食べる。菓子パンかなにかを齧るみたいに、美味しそうに食べる。

流れ出る血を受ける大皿に血液が溜まっていき、両腕を食べた終えた後に、その血を筆に取り絵の続きを描いていく。

「恵流の血は、綺麗な赤だね」
陽がそう言って、恵流に優しく笑いかける。

痛みは全く無い。恵流はその間、途方も無い幸福感に満たされながら、自分の血で描く陽を微笑んで眺めているのだ……

† † †

「……グロいんだけど。具合悪くなりそう」

ありありと想像してしまったアヤは、口の中の苦い唾液を追い払おうと残りのチューハイを一気に飲み下した。

「そうだよ、ゴメン。でも、夢の中の私は、ものすごく幸せなんだ。うっとり、ってというか…
…陶酔？ してるみたいな。でも、目が覚めるとやっぱり怖くて」

「それを、何度もみるわけね？ 同じ夢を」
「そうなの。全く同じ」

アヤは少し考え込む。何度も繰り返し見る、不吉な夢……

「そりゃあちょっと、不安になるのもわかるわ」

「うん。ただの夢だって、思おうとするんだけど」

おもむろに立ち上がると、アヤはベッドボード上のPCを起動し、テーブルに移動させた。

「夢判断、やってみよう」

「え？」

「アンタも部屋にPCあるでしょ？ たぶん、無料の夢判断とかどっさりあるから。調べてみよう」

ああ、その手があったか！ と感心する恵流の声を聞きながら、アヤは冷蔵庫から新しい缶チューハイを取り出した。アルコール度数強めの、レモンライム味。

受話器を片手に、検索画面を覗き込む。

「で、纏めると……アンタは今、大切なものを失いそうだと不安を感じていて、平穏な生活と安心感を求めている、と。どう？ そのまんま当て嵌まってるみたいだけど」

「ほんとだね……笑っちゃうくらい、そのまんま……」

電話の向こうで、恵流のため息が聞こえた。

「あのさ、恵流。そういうの、悪いことじゃないんだよ」

「そういうの、って？」

「不安に感じたり、ヤキモチ妬いたりとか。アンタ、そういう自分が嫌いなんじゃない？」

「……うん」

「人を好きになったらさ、綺麗事ばっかじゃいけないよ」

「うん、そうだけど……でも、陽はあんなに私のこと大事にしてくれてるのに、私は勝手にグルグルぐちゃぐちゃしてて。浅ましいっていうか醜いっていうか……自分にうんざりしちゃうんだ」

「まあ、わかるけど。そういう自分が嫌だって気持ちと、大月くんのこと好きな気持ちと、どっちが大きい？ 大きい方を選べばいいんじゃないの？ よくわかんないけど」

「……」

「キョラカナ心の自分を守りたいなら、別れればいいよ」

「.....アヤさん、もしかして私、ちょっとメンドクサイ？」

「うん。まあ、若干？」

「.....ゴメン」

「どういたしまして」

電話の向こうで、恵流が小さく息を吐いたのが聞こえた。

「.....あのね。別れたいなんて、微塵も思っていないんだけど.....見透かされそうで、怖い気がするの。陽って、普段何も考えてないみたいなのに、急に鋭かったりするから」

「ああ、あるね。そういうとこ。天然絵画馬鹿のくせにね」

ふふ、と恵流が小さく笑う。

「ま、それでアンタのこと嫌いになるようなショボイ男なら、用無しってことでいいんじゃない？」

「え」

「大月くん、そこまでショボくないと思うよ。想像してみ？『うわ、こいつヤキモチ妬いてるよ。キモ!』とか、言うと思う？」

恵流が吹き出した。

「フフッ.....それは無いと思う。さすがに」

「でしょ？」

声が少し明るくなったみたいだ。もう一押し。

「前にも言ったかもしれないけど。不安があるなら、直接話しなさい。ちゃんと整理して、言葉選んで。出来るでしょ？」

「うん。ずっとモヤモヤしてたんだけど、アヤさんに聞いてもらって、頭の中がちょっとスッキリした気がする。不安の原因がわかってきた」

「あと、アンタはもうちょっと、甘えたり我が侂言ってもいいんじゃない？」

「え、私けっこう我が侂言ってると思うけど」

「そう？ ならいいんだけど。怒ったり、嫌なことは嫌って言ってもいいんだからね。我慢しすぎると続かないよ？」

恵流「わたし常々、 気体か液体になって陽の身体に浸透してしまいたい とか 皮膚や
内臓が癒着融合して陽と一体化したいとか思ってるから、それが夢に出ちゃったの
かなあ」

アヤ「アンタまた、そんなチョウチンアンコウみたいな.....しかもツネツネ思ってる
とか」

恵流「チョウチンアンコウの話、知ってる！すごいロマンティックだよね～ (人'ω`*)♡」

アヤ「アンタとあたしのロマンティックは完全に別ものだわ 」

つい、自分の体験を踏まえた説教をしてしまった。

我ながら、ちょっと強引だったと思う。

恵流の不安を「ヤキモチ」と断定し、それを「陽に悟られる恐怖」と結論づけてしまったのは、果たして正しかったのだろうか。

最初、恵流は「怖い」と言っていた。そして、何がどう怖いのか自分でもわかっていなかった。

で、あの夢の話。

不気味な夢だった。恵流から話を聞いた時、正直ぞっとして、背中に冷たい嫌な汗が滲んだ。

滴る血で描いた絵が散乱している薄暗い部屋。黒と暗い赤に満たされた不吉なイメージ。それでいて、妙に美しく甘美で、退廃的な雰囲気さえ感じられるのが余計に恐ろしくて、早く決着を付けたかった。藁をも掴む気持ちで夢判断を調べ、その結果に縋ってしまった。

「恵流の血は、綺麗な赤だね」

陽がそう言って、恵流に優しく笑いかける。

痛みは全く無い。恵流はその間、途方も無い幸福感に満たされながら、自分の血で描く陽を微笑んで眺めているのだ。

電話中に浮かんだ強烈なイメージが、フラッシュバックする。

引き抜いた恵流の指から滴る血を、小さく音をたてて舐め取る大月陽。

両の口角だけを吊り上げてにっこりと微笑むその唇に恵流の血が滲み、緋色に染まる。その唇を、こちらも緋く染まった舌先が覗き、チロリと舐める。

恵流はその傍らで恍惚とした表情で微笑み、両腕から血を流しながらそれを見守っている。紅に彩られた昏い部屋には、血の滴る音と紙の上を緋く染めながらさらさらと走る筆の音だけが、微かに響く……

なんておぞましく不気味な映像だろう。しかし、その中に悪魔的な魅力を感じてしまう。まるで、毒薬が入った美しい瓶を見せられているみたいだ。恐ろしいことだと分っているのに、どうしようもなく美しい。

そんな風を感じてしまう自分に戦慄し、固く目を閉じる。口の中に嫌な味のする唾液が広がった。

目を閉じたまま、アヤは無理矢理恵流の話を冒頭から思い返し、辿ってみる。

私が下した結論は、もしかしたら性急に過ぎたかもしれない。でも、あの話の流れで、他のアドバイスが出来ただろうか。私にはわからない。

でも、とまた、アヤは思う。そう的外れではないはずだ。多分。きっと。

そう思いながらもやはり、何かが気になる。もやもやとした薄気味悪さが残るのだ。

アヤは、口の中の嫌な味と一緒に不気味な美しいイメージを流し去ってしまおうと、残りの缶チューハイを飲み干した。

アヤさん、気味悪がっている割に何度も反芻してるし、何気に想像を盛ってます。さては、嫌いじゃないとみた。(何が?)

ふたりは今日も楽しそうです

待ち合わせの改札口を出てすぐの売店で、商品を選ぶふりをしつつ涼んでいると、陽が出てくるのが見えたので、優馬は店を離れた。

「よう！ 久しぶりい！あれ？ 恵流ちゃんは？」

「仕事。新人は土日休み取れないんだって」

なんだよ、と優馬は下唇を突き出した。

「久々に会えると思ったのに」

「久々って、4月末に会ったじゃん。夏蓮さんの舞台の時」

「そうそう、夢遊病者みたいになったお前を恵流ちゃんが送って行ったあの日ね」

「夢遊病者で悪かったな」

近くのスタンドバーに入り空いているテーブルに荷物を置くと、優馬はそこに陽を待たせて、カウンターへ向かう。戻って来た優馬の両手にはビールのグラスがあった。

「付き合い。祝杯だ」

「祝杯？ 何の？」

優馬は妙にソワソワしている。

「えーと.....その、アレだ。まず、お前の大作の成功に。カレンさん、大喜びだったよ」

「あ、ありがとうございます」

グラスを合わせて乾杯すると、優馬は半分ほどを一気に飲んでしまった。テーブル上のバッグから真っ赤な紙袋をふたつ取り出し、陽に手渡す。

「これ、カレンさんのパーティーで預かって来た。招待客への記念品、お前と恵流ちゃんにだって」

「え、優馬さん行ったの？」

「おう、栞と二人で。なんだよ、知らなかった？」

頷きながら、陽は紙袋を覗き込んでいる。

「割れ物だから気を付けろよ」

「中身何？」

「んー……なんかお菓子と、フォトフレームと一輪挿しが一体になったやつ、って今見んのかよ。恵流ちゃんと一緒に見ればいいのに」

「あ、そっか。うん、そうする」

小さな紙袋をふたつ、キャンバスのトートバッグに仕舞う陽をを見守りつつ、優馬はコースター代わりの紙ナプキンの隅を捻っている。

「すごいパーティーだったよ。有名人も結構来ててさ。俺、ちゃっかりSNSで繋がっちゃったもんね」

「さすが人脈モンスター」

「お。新たな称号がまた一つ」

優馬がニヤリと笑ってみせる。

「お前の絵も大好評だったよ。なんか、大々的にお披露目してさ。カレンさんと藤枝さんが、かわるがわる熱弁して」

「熱弁？」

「そうそう。どのシーンを描いたかとか、描き方のテクニックやら解釈とかな」

「へえ、嬉しいな」

「……へえ、じゃねえ。相変わらず暢気だな。あの藤枝って人、絵の説明なんかはやっぱ上手いわ。表現が的確で、わかりやすい。今後も付き合っといた方が良さぞ」

「ああ、うん」

「また、絵の客を紹介してくれるってさ。あ、交渉の際にはちゃんと相談しろよ」

「わかった。で？」

「ん？」

「さっき乾杯のとき、『まずは』って言ったじゃん。他にもなんかあるんでしょ？」

「ああ、うん……まあ」

「バレバレなんだけど。さっきから落ち着き無いし」

言われて優馬は背筋を伸ばし、もったいぶった声で発表した。

「えー……オホン。私事で恐縮ですが。ワタクシ木暮優馬。この度、父親になることが判明しましたっ！」

グラスの縁を啜えたまま動きを止め、目をまんまるにして見つめてくる陽に、優馬はニカッと笑って片手を上げる。

陽は一気にビールを飲み干すと音をたててグラスを置き、思いっきり優馬の手を叩いた。そのままカウンターへと走っていくと、両手にビールを携えて満面の笑みで小走りに戻って来た。ぐい、とビールを優馬に突き出す。

「付き合い！ 祝杯だ！！」

優馬「今、栞は飲めないからさ～。外でこっそり飲むんだ」

陽「えー、栞さんかわいそう。言いつけよっかな」

優馬「ダメ！いや、『私から見えないところで飲むならいい』とは言われてるんだけどさ、でもやっぱ言わないで！」

陽（なんか弱みを握った気がする……）

ふたりは今日も仲良しです

断続的なシャッター音の中、大月陽は先ほどから、部屋の中央で手持ち無沙汰に突っ立っている。その背後で、木暮優馬が陽の作業台を占領しPCの画面に見入っている。

菅沼は絵の写真を撮る傍ら、そんな二人を横目でこっそり観察していた。

他人の部屋で我が物顔の優馬と、自分の部屋なのに所在無さげな陽の対比が面白い。

優馬のFacebookに大月陽のブログのURLが貼ってあったのを見つけ、「写真が悪い。俺に撮らせろ」と振じ込んだ甲斐があったというものだ。

「いやー、随分描き溜めたんだねえ」

「ええ。夏蓮さん絡みの依頼がいくつか重なったし、あと自分で自由に描いたのもあるし。描いた端からすぐに売ればいいんですけど、なかなか」

「これからだって。ブログのアクセス数もかなり増えてるし、こっちももうすぐ出来るから……」

優馬が作業しながら口を挟む。

「よし、出来た。大月陽、公式Facebookだ」

陽がPCを覗き込む。

「ふうん……わかんないけど、めんどくさそ」

「更新は俺がやるんだから、お前は関係ないだろ」

「俺の公式なのに、俺関係ないの？」

「そ。お前は指を咥えて眺めてなさい」

陽が殊更に傷ついたような声を出す。

「ひどい。優馬パパ」

「お前のパパじゃねえ」

優馬は回転椅子ごと振り返ると、陽の膝辺りを蹴る真似をする。

「相変わらず仲良しだねえ」

写真のチェックをしていた菅沼は、笑いながらメモリーカードを抜き取ると優馬に手渡した。優馬はPCに写真を取り込み、掲載する写真を手早く選んでいく。

菅沼は陽に手渡された冷えたペットボトルのお茶を開けた。

「そういえば、最初の取材から1年になるねえ。優馬くんはプレパパになっちゃうし、時の流れは早いやね。恵流ちゃんは？ 元気？」

「はい、おかげさまで。って言っても、最近あんまり会えないんですけどね。お互い仕事が忙しいのと休みが合わないので……月に1、2回ぐらいかなあ」

「あらら。まあ、真面目そうな子だもんねえ。素直で、真っ直ぐで、ひたむきで。仕事頑張ってるんだねえ。淋しいだろうに」

「ちょ、ガッさん。なに涙ぐんでるんですか」

作業を終えた優馬がメモリーカードを菅沼に返す。

「いや、最近年のせいか涙もろくてねえ……」

大きな手で目元を擦る菅沼に戸惑いつつティッシュの箱を差し出している陽に向かって首を振り、優馬は手招きした。

写真のフォルダの場所と、ブログとFacebookの連動のしくみについて一通り説明する。

その後ろで、ティッシュの箱を抱えた菅沼がコミュニケーションの重要性を涙混じりに力説していた。

菅沼「インスタやツイッターはやらないの？」

優馬「facebookはブログの更新通知のみ、画像を載せるのはブログだけにします。他はやらない。手間の割にウマ味が薄いし利用者層を考えると」

陽「??？」

優馬「気にしないでください。こいつは文明に取り残されてるんです。野生児なんです」

菅沼（困惑顔の陽くん可愛い♡激写しちゃお！パシャパシャパシャ）

陽のことで相談がある、と神妙な面持ちで静江が言ってきたのは、昨夜のことだ。

「取り越し苦労なら良いんですけどね、やっぱり心配で。いくら若いからっていても、頑張り過ぎじゃないかしら。前にもほら、『痣がどうの』って言ってたし」

ある朝、静江が早朝に工房を訪れた際、陽の部屋の窓が開いており、そこから絵を描いている陽が見えたと言うのだ。時間は朝5時過ぎだったという。

その前日、良治は12時近くまで陽の部屋の電気が点いていたのを見ていた。

「吉田さんから聞いたんだけど、陽くん、絵の収入がけっこう増えてるって。うちの仕事もしっかりやってくれてるし、それは構わないんだけど……あの子、ちゃんと寝てるのかしらね……」

吉田というのは、うちの税理士だ。

陽が似顔絵屋をやり始めて以来、わずかながら絵で副収入を得ているので、ついでと言っては何だが税金関係の相談に乗ってもらっている。

静江の心配もわかるが、陽はどこも調子が悪そうには見えない。それどころか、以前にも増して精力的で、力が漲っているように見える。食欲も旺盛だし、血色もいい。気力が充実し、精神的にも落ち着いているようだ。

社員全員で昼食をとることは、それぞれの健康状態にも目を配れるという利点があるのだ。

相手は健康で体力もある若者だ。仕事をしっかりこなしたうえで、業務時間外に何をしようが、干渉するつもりは無かった。

が、静江も心配していることだし、さり気なく聞いてみるか……

「陽、お前、朝っぴらから何やらゴソゴソしてるって？」

陽はキョトンとした顔で振り向いた。

「え？……ああ、絵を描いてます。朝は絵描きのゴールデンタイムなんで」
へへ、と屈託なく笑う。

「ちゃんと寝てるのか？」

「んー……4時間ぐらいは寝てますね。夏場は夜明けが早いから」

事も無げに言われて、正直面喰らってしまった。連日そんな短時間の睡眠で、大丈夫なのか？

「え、だいぶ前からずっとそうですよ？最近、やたらやる気出ちゃって、寝てる時間ももったいなんですよ。絶好調って感じで」

ガッツポーズなどしてみせ、あっけらかんとしている。

聞けば、週3～4回、夕方に走り込みまでしているらしい。そういえば、また少し体格が逞しくなった様にも見える。

「高校の頃、校庭3周走り終えないと部室に入れてもらえなかったもん。で、早く絵を描きたいからって毎日頑張って走ってたら、どんどんタイム上がって……校内のマラソン大会では、毎年上位に美術部員が数人入ってるっていう」

大友が自分の後輩ということもあり、陽はよく当時の話をしてくれる。そんな時の陽は実に楽しげだ。

そういえば大友は、学生時代から暇さえあればしょっちゅう走っていた。

「絵を描くには気力から。気力は体力の充実から」と言うのが彼の持論だった。

「で、部活終了時に腹筋背筋腕立てやらされて。腕立てとかは筆や彫刻刀を持つ手が震えるから、部活の後なんです。おかげで今も、夕方近くなると身体動かしたくなってくる」

言いながら陽は、その場で腿上げを繰り返し始めた。次第にスピードを上げ「ぐおおおおお！」と吠えたと思うとピタリと止まり、「って感じです」と笑っている。

まあ、本人が大丈夫だと言っているし、傍目にも無理している様には見えない。大丈夫なのだろう。きっと。

眩しいほどの若い力を改めて目の当たりにし、天本良治は急に自分の年齢を意識した。老け込んだような気がして、ほんの少し、疲れを感じた。

陽「ちなみに雨の日は、屋上まで階段5往復とスクワットです。闘う美術部と呼ばれてました」

天本「大友のやつ、何と闘うつもりなんだ……」

陽「芸術とは体力！らしいっす。未だに意味わかんないけど」

激しく動くもの

日の射さない薄暗い地下倉庫の中、藤枝は静かな興奮を湛え立ち尽くしていた。

壁に立てかけられているのは、大月陽の絵。

家に置く場所が無くなったからと、乾燥を兼ねて倉庫に引き取っているのだ。

「専属契約」こそ断られたが、結果的に数多くの絵を預かることになり、藤枝としては至極満足だった。

数歩うしろへ下がり、数点の絵を遠くから眺めてみる。爬虫類のような目が、ぬらりと瞬いた。

煌月カレンを描いて以降、あきらかに画力が上がっているのがわかる。

特に、動きの中のある瞬間の切り取り方、その表現の仕方が格段に上手くなっている。

「あれ以来、激しく動くものを描くのが楽しくて」

大月陽はそう言って笑いながら、この数ヶ月驚くべきスピードで様々な絵を描き上げている。内から湧き出る止め処ない何かを、手当たり次第にまき散らしているようだ。

そのまき散らされた何かは、観る者を包み込み突き放し、芳しく香るかと思えば鼻の奥に嫌な臭いを残す。思わず笑みがこぼれてしまうほんのり暖かな幸福感や、足元がぐらつき背中にベタつく汗を浮かべさせる不安感を漂わせる。

描かれているものは様々だ。

強い風に吹かれる樹々。舞い上がる落ち葉。風にうねる草と、波立つ水面。

燃えるような赤い空を自由に飛び交う、白い翼を持った大勢の人々。

朽ちかけた白い彫像に、泥水がぶちまけられた瞬間。

宇宙空間を泳ぎ駆け回る、異形の生き物たち。

柔らかく優しい色調の、しかし現実にはあり得ない色で描き出された田舎の風景でさえ、独特の臨場感を感じる。

美しい絵なのだがどこかミステリアスで、思わず振り返って周りを確認しそうになるのだ。

色の使い方や、わざとアンバランスに仕上げた構図など、一応の説明は出来る。だが、それだけでは無い、説明しきれない何かがある。

密度の異なる空気の塊がいくつもひしめき合い、少し歩く度にその密度の違いを感じられそうな世界。

そんな絵の世界に取り込まれそうな、そして心の底では自らそれを望んでいるような、甘い恐怖を感じる。

いくつかのモチーフをさまざまに反復させた絵は、見ているだけで目眩がした。

同系色で描かれたその絵は、不規則にうねり、こちらの意識を飲み込みながら収縮し、同時に際限なく広がっていくようだ。

いつだったか、大月陽は言っていた。

「ルソーの絵を観てると、窒息しそうになる。息苦しくて逃げ出したくなる」

うちのギャラリーが抱える若手画家が描いたアンリ・ルソーの複製を眺めながら、彼は悔しそうに眉を寄せた。

「絵は嫌いだけど、画家としては尊敬してる。身体に変調をきたすような絵をたくさん描いたから」

大月陽の絵を見れば、ルソーを嫌うのも理解出来る気がした。

彼の絵は、魂を今あるくびきから解き放ち、どこまでも遠い場所へと連れて行ってくれる。そんな高揚した気分と、自由への憧憬を感じさせてくれるのだ。

風景画からいわゆる現代アートと呼ばれるものまで、彼の絵に共通するのは、とてつもない躍動感。そして、満ち溢れ揺るがすエネルギーの開放だ。

藤枝は思わず身震いした。

身体の震えが止まっても、胸の中の細かい震えは止まらずに長く続いている。藤枝は目を閉じてその震えに身を任せ、全身で深く味わった。素晴らしい芸術だけがもたらす、極上の喜びを。

感動の余韻から目覚めた藤枝は、薄暗い倉庫の中、再び若き芸術家に思いを馳せた。

彼の言う、「激しく動くもの」。

それはおそらく、目に見えるものに限られないのだろう。それは、感情？空気？もしくは……
運命。

陽「アンリ・ルソーの絵は、なんか脂汗出てくる。頭がグラってなるし。苦い唾液わ
くし。食欲失せるし」

優馬「なら、そんな見なきゃいいだろ。そんなに嫌いならさ」

陽「だって、美術館代もったいないもん……ってというか、なんか見ちゃうんだよね。怖
いもの見たさ？」

優馬「ルソー、かわいそー（チラッ）」

陽「ダジャレは無視します」

アヤ、昔語り

今日、久々に恵流がホームセンへやって来た。

最近の仕事やウェブショップの関係で忙しいらしく、会うどころかメールを交わす回数もかなり減っていた矢先だった。

「話がある」とのメールを受け取ったのは、昨夜遅くのことだ。いつもの砕けた文体ではなく、本当に必要最小限の短いメールに、嫌な予感がしていた。

数カ月ぶりに顔を合わせた恵流は、妙に線が細く、向こうが透けて見えそうなほど儂気に見える。去年も着ていた細身のジャケットが、僅かにだぶついている。

「恵流、ちょっと痩せた？」

「うん……どうだろう。痩せたかな？」

従業員用の駐輪場。私達はいつも、事務所となりの休憩室より、駐輪場脇の自販機の横にあるベンチで一服するのが好んだ。

恵流の好きな果汁入りの温かい紅茶を買って、手渡す。

「ん、奢り」

「ありがとう」

私はいつものカフェオレ。うんと甘いやつ。

お互いに黙ってひとくち啜る。

「で？ 話って？」

「うん……急にごめんね。ちょっと、色々あって」

恵流は少し俯いて、曖昧に微笑もうとして見事に失敗した。唇の端が少し震えただけで、とても笑顔と呼べる表情ではない。

恵流がこんな顔をするのは、何かを隠しているときなのだ。

それも、秘密というのではなく、口に出したい何かがあるけれど言葉が見つからない時。もしくは、口に出すのを躊躇っている時。

この顔は、うんざりするほど知っている。数年前の私だ。

「あのさあ……」

表情が読め過ぎて、思わずため息混じりになってしまう。

「あんた、あたしがバツイチだって、知ってるでしょ？」

「え、うん……前に聞いた」

「元夫とのこと、あまり話してなかったよね」

アヤは恵流から目を逸らし、足元に視線を落とした。

羽虫の死骸に蟻がたかっているのを眺めながら、淡々と話しだす。

「……当時、あたし達は二人とも、20代の終わり頃だった。若さを言い訳に出来る年じゃないけど、まあ未熟だったのよね。お互いに。彼も、悪い人じゃなかったの」

恵流は幾分ほっそりとした顔をこちらに向け、黙って頷いた。

「ある時期から、彼の仕事が忙しくなって。あたしはあたしで、体調を崩して仕事を辞めて、専業主婦やってた。で、お決まりの喧嘩ですよ」

アヤがカフェオレをまたひとくち飲むと、恵流も同じ様にひとくち飲んだ。

そう。この子はいつも、人に合わせようとする。

今の場合で言えば、飲み物を飲むタイミングですら、私の話の邪魔にならない様に。無意識にそうしているのだ。

「彼はさ、毎日尋常じゃないほど仕事のストレスを抱えて、帰ってくるわけ。そしたら、のほほんとした妻がのほほんとした笑顔で迎えるわけよ。

普段はね、それでいいのよ。でも、逆にそれがキツイときもあるわけ。って、後から言われて知ったんだけどね」

恵流は神妙な顔で聞き入っている。この話がどこに着地するのか、まだ測りかねているのだろう。

「でもあたしはさ、彼がリラックス出来る様にと、自分に思うところがあっても押し隠して、努めてニコニコしてたわけ。まあご存知のとおり仕事以外ではさ、不機嫌が顔に出やすいから……出来るだけ、ってレベルだったんだけどね。でも……」

アヤはフッと短く笑った。

「便器にもね、その日のコンディションってあるわけよ」

え、と恵流は驚いた顔をした。そりゃそうだ、とアヤは思う。

「んーと、ここから下品な例えになっちゃうんだけどね……」

次回、下品な表現が続きます。お食事中の方や潔癖な皆様はご注意ください。ごめんなさい。

「んーと、ここから下品な例えになっちゃうんだけどね……

彼は仕事で問題やらプレッシャーを与えられる。その大半は、仕事で消化したり、頑張っ
て自分
の中で解消したりしてる。でも、どうしても消化しきれなかったり、やりきれない思いが残っ
たり。それがストレスになる。

要は、ストレスっていうのはウンコなわけ。

で、時に周りの人に当たっちゃう。その対象のひとつが、いつも家に居るあたしだった」

ショックを受けたかの様に少し眉を寄せている恵流を見て、アヤは反省した。少し言葉がきつ過
ぎたかもしれない。

「別に、殴られたとかそういうんじゃないのよ？ただ、言葉の端々に、態度の所々にね。棘やら
毒やら、潜んでるの。いや、当人は最後まで認めなかったけど、わざと、潜ませてるの。そうや
ってこちらが不愉快に思うのを見て、それでも我慢するのを見て、溜飲を下げてるの」

「……なんか、陰険。ただの嫌がらせじゃない。八つ当たりとどう違うの？」

恵流は紅茶の缶を両手で握りしめた。ペキッ、と小さな音が鳴った。

「まあ、八つ当たりよね。でも、わからなくも無いのよ。ヘラヘラ笑ってる相手にチクツと言
いたくなることもあるよね、って。あたしはストレスが少ないんだから、ウンコ投げられてもニコ
ニコして水に流せばいいや、って。ジャーって感じでさ。

チクチクねちねちタラタラ言われるけど、私は普段家に居るんだし、不愉快だけどこれくらい我
慢するべきかなって」

当時を振り返るように、アヤは小さくため息をついた。

「でもさ、さっきも言った様に、便器にもコンディションはある。

排水管が詰まりかけてシンドイ時にウンコガンガン流されてさ、あげくにあちこち小突かれたら
、そりゃ、溢れちゃうのよ。一生懸命自己メンテしてても追いつかないの。んで、そういうのを
何度も繰り返すうち、壊れちゃった……」

いきなり顔を振り上げたかと思うと、髪が揺れるほどの勢いで恵流を振り返る。

「っていうか！！自分を便器に例えて話すとか、思いっきり胸糞悪いんだけど。あ、また糞っ

て言っちゃった」

恵流に向かって肩をすくめ、苦笑いしてみせる。

「まったく、お下品でごめんなさいねー」

その顔を見た恵流はつい、吹き出してしまった。

「うん。すごくお下品。でもその例え、ものすごくわかりやすいかも」

笑うのを堪えようとして紅茶を含んだが、それは逆効果だった。

熱い紅茶に咽せながら、恵流は腹を抱えて笑い出した。

「わかりやすいけど、すごくわかりやすいけど……そんな重たい話、なんて例えにするんですか」

ハンカチで目尻を擦りながら、缶ジュースを持った腕でアヤの肩を叩く。

「ああ、こんな下ネタで大笑いするなんて……いや、下ネタじゃないか？ もう、よくわかんない」

「ふふ。だからね……」

アヤは体ごと恵流に向き直り、正面から恵流の目を覗き込んだ。

「言いたいことがあったら、ちゃんと口に出しなさい。あたしたちみたいにすれ違っちゃう前に、澱んでウンコになって人にぶつける前に、滅茶苦茶でも、まとまってなくても良いから、言葉にしちゃいなさい。

特にあんたはね、他人にぶつけるんじゃなくて自分を責めちゃうタイプみたいだから。自分のウンコに頭まで使って溺れちゃうとか、嫌でしょ？」

「それは、嫌だね……すごく、すごく嫌だ」

俯いて、恵流は小さく頷いた。

「……あんたの我慢強さは、私は凄いと思ってる。

でもね、我慢するだけじゃなくて、発散することも頑張りなさい。でないと、澱んで澱んで、どんどん荒んで、嫌な人間になってく。自分も周りも壊れちゃう」

言い終えたアヤはカフェオレを飲み干し、足元に空き缶を置いた。

ちらりと見遣ると、恵流はいつの間にか、ハンカチに顔を埋め肩を震わせていた。

「……何で、悪い話だってわかったの？」

「わかるよ。何があったかまではわからないけど。年の功ってヤツかもね」

ぐすん、と涙をすすり、恵流はまた紅茶を少しだけ飲んだ。

大きくため息をつき、くしゃくしゃのハンカチにまた顔を埋める。

「……あのね。さっき、陽と別れてきた」

ハンカチ越しのくぐもった声は、少し聞き取りづらかった。

だが、恵流の言葉はちゃんと聞こえていて、アヤはひどく驚き混乱した。鳩が豆鉄砲を喰らうとはこのことだ。

「え……嘘！ちょっと、なんで、また？……だって、ついこの間まで……」

上手くいったじゃない？ 仲良くやってたじゃない？

「……でね、わたし、もうすぐ死ぬんだって」

うわあああん！大晦日に、こんな話でごめんなさい！！

わざとじゃない！わざとじゃないんです！！偶然なの！！！！

読みに来てくださる皆様におかれましては、素敵な年末を過ごされますようお祈り

致します！！良いお年をお迎えくださーい、って説得力無ーいーいー！！！！本当に

ごめんなさい！（ノ◇≦。）

そして次回、新年早々.....暗く悲しいお話です.....

何よそれ。

何よそれ、何よ、それ……

「ちょっと待って。ごめん、理解出来ない」

アヤは思わず立ち上がって、茫然と恵流を見下ろした。

こういうのを、青天の霹靂というのだろう。さっきの豆鉄砲といい、今日はやたらと活きた諺を実感する日だわね……って、駄目だ。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

(落ち着いて、落ち着いて……頭の中を整理して……)

心を鎮める時の癖で、アヤはしきりに前髪を斜めに流し撫で付けている。

恵流はそんなアヤから目を逸らし、俯いて乱暴に目元を拭くとハンカチを握りしめた。先ほどのアヤのように、伸ばした足の先を眺めながら淡々と言葉を継ぐ。

「だからね、わたし、死ぬの。スキルス性胃がんだって。あちこち転移してて、手術も出来ない。余命は……もって一年。早くて半年」

「……」

……何か言わなきゃ。でも、言葉が出てこない。相槌さえも。

だが恵流は、アヤの返事を待つことなく話し続けた。

「アヤさんにはね、もっと早く言うつもりで居たの。でも、自覚症状も全然無いし、なんだかまだ実感が無くて……自分の中で整理がついてから、話そうと思ってた。

でも私、やっぱり吐き出したかったみたい。ううん……むしろ言葉にする事で、少しずつ整理出来るのかも、しれない」

恵流は静かにひとつ深呼吸をしたが、その息は震えていた。

オロオロと所在な気に髪を直しながら、アヤは焦っていた。何か、何か言わなきゃ……

「あ、あの、さ……変な例え話なんか持ち出しちゃって……ごめん」

思わず吹き出した恵流は、次の深呼吸に失敗した。

「フッ…ケホッ、ケホケホ……ソコ？ ソコ来る？」

「あー……ごめん。ビックリしちゃって」

ひとしきりクスクス笑うと、恵流はため息混じりに呟いた。

「なんか、笑ったら力抜けた」

アヤはいつの間にか、自販機に手をついて自分の身体を支えていた。

額の辺りが冷たくなって頭がグラグラするので、そうしていないと倒れそうだったのだ。

「ねえ、アヤさん」

自分を見上げる恵流の目を、そのまま見返す。

「急で悪いんだけど、今日おうちへ行ってもいいかな。話したいんだ……」

「もちろん。いらっしゃい」

力強く答えたつもりだったが、その声は僅かにうわずっており、動揺を隠せていなかった。

† † †

「これが、煌月カレンさん」

ちょっと、見て。テーブルに着くなりそう言って恵流が見せてきたのは、携帯に保存した写メだった。

よく見ると、雑誌かパンフレットに掲載された写真を、さらに撮ったもののようだ。

「例の舞踏家さんか。綺麗な人ね」

「うん。綺麗で、強くて、才能があって、自信に満ちあふれた人」

恵流は目の前の皿に取り分けたオードブルをフォークで突ついている。

「陽はね、その人を好きなの」

「え」

「前に相談したでしょう？ あの不安が、的中しちゃったみたい。でも、今はまだ、本人も気付いてないかもしれない。あの人、そういう方面もっつのすごく鈍いから」

恵流は苦笑したが、これまでの経緯を知っているアヤにしてみれば苦笑どころの話ではない。

「とにかく、現在進行形で惹かれていってる。で、彼の作風に強く影響を与えてる」

「そんな……気のせいとかじゃ、なく？」

恵流は静かに首を振った。

哀しみを押し殺したその表情を見て、アヤは軽率な発言を後悔した。

「今朝、実際に絵を見て確信した。気のせいなんかじゃないよ。私、ずっと陽を見てきたんだもん。わかるよ……」

彼女、煌月カレンと初めて対面した時のことを、恵流はポツポツと話し始めた。

あけましておめでとうございます。

新年早々暗い話で、本当に申し訳ありません。縁起が悪かったら、もう。
このタイミング、計算したわけじゃないんです。そんな高等技術(?)、私には無理
です。

ただただ、間が悪いという.....

こんな私ですが、本年もどうぞよろしく願いいたします。

「彼女はとっても気さくな人で、関係ない私にも気を遣ってくれた。素敵な大人の女性、って感じ。凄い美人で、その世界では有名人らしいのに全然お高く止まってなくて。でもね、なんか凄いの。踊る人だからか、指先の動き一つとっても、優雅でとんでもなく綺麗なのね。ちょっと首を傾げるとか、軽く髪を直すとか……そういう当たり前の仕草ですら、女の私でさえ見惚れてしまうの。で、陽はと言えば……」

恵流は弄んでいたフォークを皿に戻し、チラリとアヤに視線を投げたがすぐにまた、自分の皿を見つめた。笑ってみせるつもりだったが、顔がピクリとも動かなかったのだ。

「陽はね……夢中だった。彼女の動きや表情を一瞬たりとも見逃したくない、っていう感じ」
「でもそれは、彼女を描くから」

「うん。たしかに、そう。でもね、それだけじゃない。魂ごと引き寄せられてるみたいだった。瞳がキラキラしてた。まるで、女神を崇めてるみたいに……」

思い出した様に、恵流はグラスを取ると一気に飲み干した。アヤが黙ってペットボトルからお茶を注ぎ足し、恵流は目礼を返す。

「で、凄いのがね、彼女、その視線を当然の様に受け入れたの」
「受け入れた？」

「そう。普通はさ、初対面の相手から、そんな崇拜みたいな熱烈な視線を浴びたら、たじろぐじゃない？ たじろぐまではいなくても、ちょっとは驚いたり引いたりしそうなもんじゃない？」
「ああ……うん。そうかも。経験ないけど」

「私も無いよ」
恵流は今度こそ、短く笑った。

「でも、彼女にとっては、そんなのちっとも珍しいことじゃないんだな、って。よくある事なんだな～、って、思ったの。それって、凄くない？ 世界が、次元が違うよ。とてもじゃないけど、太刀打ち出来ない。太刀打ちどころか、私じゃ同じステージに上がることもすら出来ない」

「……でも、陽くんは？ 彼だって同じなんじゃない？」

「ううん。陽はね、彼女と同じ次元に立つと思う。今じゃなくても、遠くない将来。まあ、これは私のひいき目かもしれないけど」

引き絞られる様な胸の痛みを感じ、アヤは涙ぐみそうになった。

この子、どれだけ彼を好きなんだ。どうしたら、そんな慈しむ様な微笑みを浮かべていられるんだ。

「でも、それはどっちでもいいんだ。今後ふたりの関係がどうなるか、そんなのは、いいんだ」

恵流は再びグラスを手に取り、ほんの少しだけお茶を口にした。唇を湿らせる程度に。膝の上に置いたハンカチを、ぎゅっと掴む。

「私ね、彼女に惹かれて行く陽を見るのが、耐えられなかったの」

縋る様な気持ちで、思わず言葉が零れ出る。

「……でも、そんなのわかんないじゃない！ 惹かれていくって言っても、画家として素晴らしいモデルに出逢ったっていうだけかもしれない」

「私も、それは考えた。そう思おうとしたよ。依頼された仕事が終われば、夢から醒めたみたいになるんじゃないかって。でもね」

大きく息を吸込んだ恵流を見て、アヤは瞬間的に悟り、激しく後悔した。

言わせてしまう。恵流、ゴメン。言わなくていい。頼むから言わないで……

「私には、時間が無いから」

アヤは口を唇を噛み締めた。

恵流が死ぬという事実を、まだ受け止めきれしていない。私が下手な口をきく度に、恵流に辛い思いをさせてしまう……

「前にアヤさんに指摘された通り、私は彼女を描く陽の姿を見るのが嫌で、自分の仕事を理由にして少し距離を取ってしまった。この仕事が終わったら、また前みたいに、陽の部屋に行けるって、楽しく過ごせるって思おうとした。

でもね、陽が依頼された大きなサイズの絵を描くのにはね、3ヶ月以上もかかるの。それでもだいぶ早い方らしいんだけどね」

恵流は大きく息をついた。肺の中の空気を全て押し出すみたいに。

「で、今日しばらくぶりに陽の部屋に行ってみたら……絵が、ガラッと変わってた。前からいろんなジャンルを描く人だったけど、んん……なんだろう。詳しいことは分らないし、解説なんて出来ないけど、圧倒されるっていうか……絵の力が……本当に、本当に凄まじかった」

慎重に言葉を選びながら全ての息を吐き切った恵流は、大きく吸い込み新しい酸素を取り込んだ。

「その絵を見てね、負けを思い知らされた。3か月。たった3ヶ月ちょっとの間に、しかもカレンさんと陽が顔を合わせたのって、たった数回なのに、だよ？ 私には、こんな風に陽に影響を与えることなんて出来ない。陽は私より、彼女の傍に居るべきだって」

「そんな……だって、恵流だって、今まで……」

「それにね、彼女は有名人だからやっぱり顔が広くて、彼女の知り合いとか親戚なんかから、たくさん絵の発注を受けてて。仕事への貢献度から言ってもね、全然敵わない。もう、完敗」

「貢献度ってアンタ……大月くんはそんなことで」

「うん」

恵流は遮るように頷いた。

「陽はそんな理由で人を好きになったりしない。これは完全に、私の勝手な被害妄想」

「でもね。どのみち、私は死んじゃうの。どんどん弱って行って、醜くなって、死んでいくの。」

あの、貫く様な眼差しで真っ直ぐに彼女を見つめる陽を、凄い絵をたくさん描いて手の届かない場所に行っちゃう陽を、私は遠くから眺めながら、ゆっくり死んでいく」

恵流はいまや、両手で握りしめたハンカチで目元を覆っている。

「辛すぎるでしょう？ 悲しすぎるでしょう？ 逃げたっていいでしょう？でなきゃ私、陽を憎んでしまう」

気付くとアヤは、席を立て背中から恵流の両肩を握りしめていた。

相槌を打つことすら出来ず、額を恵流の背中に付ける。恵流の嗚咽が伝わってくる。きっと恵流にも伝わっているのだろう。

ボロボロと溢れ出る涙は止めようが無かったが、泣き声だけは漏らすまいと、アヤは歯を食いしばった。

「あのね、病気のことが分かって、最初は神様を恨んだ。なんで、どうして私が、って」

恵流は大きく、深く息を吐いた。幾度か繰り返すうち、呼吸が落ち着いてくる。

「でもね、さっき陽の部屋へ行って、思ったの。陽と過ごした時間は、死んじゃう私への、神様からのプレゼントだったんだって。アヤさんやホームセンのみんなや公園のアイス屋さん。背中を押してくれた、見守ってくれた、みんなからのプレゼントだって」

せっかく落ち着いた呼吸が、また乱れる。しゃくりあげながら、それでも恵流は笑おうとしている。

「ねえアヤさん、私ね、自分で言うのも何だけど、すごく大切にしてもらった。愛されてた。それはわかってるんだ。私、今まで本当に、すごく幸せだったの。だから.....」

恵流の背中に取り纏ったまま、アヤは無言で何度も頷く。

そうしてふたりは、しばらく泣いた。

恵流ちゃんの夢の話、覚えておいででしょうか？

何度も唾を飲み込んで無理矢理涙を止めた恵流は、努めて明るい声で言った。

「だから私、陽を振ったの。いい思い出だけ持っていたかったから。死ぬまで陽を好きでいたかったから。陽を好きなままで死にたかったから」

「……うん」

完全に鼻声の恵流の背中に額を押し付けたまま、アヤが頷く。

「私ね、思いっきりカッコつけたんだよ。『転勤の辞令が出た。新人としては異例の大抜擢だし、ウェブショップの仕事の依頼も増えた。夢の為に頑張りたいから、仕事に集中したい。お互いの為に、別れましょう』……とか言っちゃって。あはは」

「……大月くんは、なんて？」

「いきなりだったからかなり驚いて、混乱してた。でも、強引に別れちゃった。『いつかそれぞれの分野で成功して、また逢えるといいね』なんて、漫画のセリフみたいなこと言って、走って逃げた。電話もメールも着拒した。親にも話して、実家に電話が来ても断ってもらうように頼んである」

「うん……」

「ものすごく、傷つけたと思う。憎まれても仕方ないのはわかってる」

「……うん」

「でも、陽には見られなくなかったの。衰えていく自分の姿を、見せなくなかった。それが自分勝手な我が儘だってわかってる。エゴだってわかってるんだ。

だけど、私、お世辞にも美人じゃないけど……それでも、一番綺麗な私だけを憶えていて欲しかったの」

アヤは喉の奥からなんとか声を絞り出し、恵流の隣に座るとその頭を強く撫でた。

「……わかるよ。女の意地だね」

「ふふ。そう、意地だね」

目は真っ赤で、メイクもほとんど涙で流れてしまっていたが、強がって笑ってみせた恵流はとても美しかった。悲壮なまでに、美しかった。

「時間が無かったんだ。今はまだ、ピンとこないっていうか、さっきも言ったけど、自分がもうすぐ死ぬって実感がなくて。

でも、ぐずぐずしてたら、怖くなるかもしれない。怖くて悲しくて、陽に当たり散らすかもしれない。死にたくない！って、恥も外聞もかなぐり捨てて、最後まで側に居てって、縊ってしまうかもしれない。でもやっぱり、そんな姿、絶対に見せたくない。

……だから、今しか無かった。本当の恐怖がやってくる前に、強引であっても、陽を傷つけてでも、逃げたの。酷いでしょ」

両手で髪を直すふりをして顔を伏せた恵流に、何と言葉をかければ良いだろう。何か、言ってやりたかった。たとえ、気休めだったとしても。

「……大月くんも、きっとわかってくれる」

「……うん。いずれ、ね」

ハンカチでゴシゴシと顔を擦り、恵流は大きく息をついた。

「アヤさん、聞いてくれて……一緒に泣いてくれて、ありがとう。私、溺れずに済みそう。ちょっとは流せたと思うんだ。ジャーって」

恵流は自分の言葉にフッと吹き出し、声を上げて笑った。

その笑いは仮初めのものだと、ふたりともわかっていた。

白く煌めく薄氷の下には、悲しみや理不尽な運命への怒り、絶望や生への執着が渦巻いている。ちょっとした刺激で足元はひび割れ、絶望の奔流に飲み込まれてしまうだろう。

それでもふたりは、薄氷のヒリヒリするような緊張感の上で、笑ってみせた。

次回、恵流ちゃんの回想です。

医者に病状を告げられ、これからどうなるのかを聞かされた時、まっ先に考えたのが陽の事だった。

陽が奪われてゆくを見なくて済むという安堵感と、醜い自分を見られたくないという気持ち。

まったく私は、なんという負け犬根性の持ち主だろう。
闘って奪い返す気概も、全てを晒して甘える強さも無いのだ。

でも。

気概も強さも、持っていて何になる？
何をどう足掻いたって、私は死ぬのだ。
ならば、引き際を綺麗に飾ったっていいじゃないか。嘘ついて逃げたっていいじゃないか。それくらい、許されるべきじゃないか。

だって私は死ぬんだから。

陽に別れを告げると決めたものの、私は中々言い出せずに居た。

だって、大好きだったのだ。
ずっとずっと大好きで、付き合える事になって、本当に夢のようで、毎日毎日が楽しくて、キラキラしてた。少なくとも、煌月カレンの出現までは。

でも、陽は相変わらず鈍くて。
煌月さんの舞台本番を見た後でも「凄かったー！！人間の身体って、あそこまで出来るもんなんだね！ デッサン人形とか意味無いよね」などと無邪気に興奮していたし、自分の持つ煌月さんへの関心を、仕事や美しいものへの興味以上には思っていない。今は、まだ。

陽が彼女への気持ちに気付いたら……

そう思うと、血の気が引き身体が震えた。真っ暗な奈落の底へと引きずり込まれるような気がした。

自分の病状を知った時よりよっぽど現実感があり、恐ろしかった。

陽はきっと、すごく悩む。苦しむ。

私の病気の事を知りながら彼女の方に行くなんて、考えられない。彼は優しいから気持ちを封印して、きっと最後まで側に居てくれようとするだろう。

もしかしたら、一旦は彼女の事を忘れてくれるかもしれない。

でも。

彼らはいずれ惹かれ合うだろうと思う。

才能と才能が惹き合う瞬間が、私には見えた。いや、見えたというより、全身で感じた。

やっぱり、何も知らせずに私が消えるのが一番いいんだ。それが、最良の道。

同じところをぐるぐる廻ってるみたいに、何度も何度も考えた。自分の中で、既に結論が出ているのに。

だって。

だって、やっぱり大好きなのだ……

やりきれない気持ちのまま、それでも徐々に手作りのお弁当を持って、陽の部屋へ来た。

私が彼にあげられる、最後のお弁当。

土曜の午前中にここへ来るのは、久しぶりだった。最近はお互い忙しくて、朝から一緒にいられる機会も減っていた。特に、検査の結果がわかってからは、Skypeでの会話すら避け、電話やメールの遣り取りだけだった。

私を出迎えた陽は、顔を見るなり私の僅かな異変に気付いてくれたが、「仕事がたて込んでいて忙しい」と嘘をついたら納得したみたいだ。

「よく効く栄養ドリンク買って来てやる」と大急ぎで部屋を出て行った。

そんなもの、今の私には無駄なのに。

キッチンの小窓から、走ってコンビニへ向かう陽の背中を見送る。

胸がぎゅーっと苦しくなった。涙が溢れそうになったけれど、大きく息を吸込んでなんとか堪えた。

振り返り、部屋をぐるりと見渡す。ここも今日で見納めだ。

壁際にずらりと絵が立てかけられている。

初冬の外は肌寒く、小窓以外の窓は閉まっている。部屋の中は絵の具の匂いが籠っているけれど、不快な匂いではない。既に嗅ぎ慣れたその匂いは冬の空気と相まって、むしろ落ち着くほどだ。

ゆっくりと、部屋の中を歩き回る。部屋のそこそこに、ふたりの思い出が残っている。

お揃いのグラス、お揃いのクッション、いつの間にか増えてしまった食器や調理器具。寒がりの私の為に買って来てくれたブランケット。

そういえば、もうすぐクリスマスだ。去年のクリスマス、部屋の飾り付けを子供みたいに喜んでくれたっけ……

ふと、棚の上にあるクロッキー帳が目にとまった。

ただひとつ、中を見せてくれないクロッキー帳。

いつもは描きかけの絵やデッサンなんかは全て見せてくれる。頼まれて私がモデルを務めたデッサンも見せてくれていた。浴衣姿の絵なんて、それはもう得意げに見せてくれた。

でもこれだけは。いつも「今は駄目」と言って、絶対に見せてくれなかったものだ。

普段は絶対にそんなことしないけれど、私は初めてそれを開き覗いてみた。

そこにあったのは、全て私のデッサンだった。

花火大会の浴衣の柄。編み込んだ髪と髪飾り。

大笑いしている顔、本を読んでいる横顔、毛糸の指編みをしている手元、体育座りで膝に頬を乗せて眠っている顔、拗ねている顔、料理している時の真剣な顔。まだ公園で似顔絵を描いていた頃、別のテーブルで手芸をしていた私の姿絵もある。ああ、これは森の中で花火とシャボン玉で遊んだ時だ。

そして、嬉しそうな楽しそうな表情で振り向いた顔。

これは、私が陽を見ているときの顔だ。キラキラして、なんて幸せそうなんだろう。くすぐったくなるぐらい、喜びと幸せに満ち溢れてる。

陽には、私がこんな風に見えていたんだ。

そして、私の知らないうちに、描き留めていてくれたんだ。

もう充分だ、と思った。

私はちゃんと、愛されてた。この絵を見ればわかる。

2年に満たない期間だったけど、私達は幸せな恋人同士だった。

不安になった事もあったけど、陽はちゃんと私を想っていてくれた。

こんなにもあったかい絵で、ちゃんと示そうとしてくれてたんだ。

私はクロッキー帳を閉じた。

胸の奥から熱い塊が嘔き出して来そうだったが、必死で飲み込んだ。
泣くのは家に帰ってからだ。

陽、ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい。

私は今から、酷くあなたを傷つけます。

でも、これからもずっと、大好きです。
今までありがとう。私はとても幸せだった。ありがとう。

私は、陽の帰りを待った。

陽「恵流、顔色悪かったしずいぶん疲れてるみたいだな.....あ、これこれ！竹内さんが超効くって言ってた栄養ドリンク。これくださーい」

玄関の扉を開けた陽の顔を見るなり、優馬は持っていた傘の柄で陽の頭を小突いた。

「なっさけねえツラしてんじゃねえ」

不服気な顔で頭を撫でている陽の脇をすり抜け、ずかずかと我が物顔で部屋に入り込むと、コートを脱いでスツールの上に放り投げる。

「まったく、何でそんななるまで言わないんだよ」

「何？」

「恵流ちゃんのことだよ」

絶句している陽に、ポケットから細い缶コーヒーを取り出して手渡す。反対のポケットからもう一本取り出して開け、まだ十分に温かいコーヒーを飲んだ。

「.....なんで知ってんの？」

「2週間前、栞んところにメール来た。丁寧な挨拶とお礼のメール」

「2週間前.....」

「ああ、お前らが別れた日の夜」

優馬は既に床に胡座をかいて座っている。呆然と立ち尽くしている陽に、優馬はトントンと床を叩いて座れと促した。

「遠方への転勤に伴い、陽とお別れしました。今までありがとうございました、ってさ。ほんとはもっと長かったけど、まあそんなカンジで？ お前が何か言ってくるまでと思って待ってたのにさ、全然言わねえから」

ああ.....と呻き、一気に脱力して床に座り込むと、陽はため息を吐き出す様に短く笑った。

「別れたんじゃない。振られたんだ。いきなり」

缶コーヒーの蓋を開け、顔の前に軽く掲げた。優馬も同じ仕草を返す。

「栞さんにまでメールかぁ。やっぱ、もう駄目なんだな」

「いいのか？」

「良くないよ。良くないけど、しょうがないじゃん」

† † †

あの日いきなり別れを告げられて、茫然とするばかりで何も出来なかった。

恵流は別れる理由をほとんど一方的に話すと、すぐに部屋を出て行った。手作りの弁当を置いて。

部屋を出る時、思い出した様に振り返って「これ、ありがとう」と言って微笑んだ。手には陽が買って来たばかりの栄養ドリンクが握られていた。

それが恵流との最後だった。

確かに最近は会う回数は減ったけれど、大きな喧嘩をしたわけでもなく、仲良くやっていると思っていたのに。この間まで、楽しくクリスマスの計画を立てていたのに。

茫然自失状態から抜け出したものの、頭は混乱していて、部屋の中をぐるぐる歩き回った。

しばらくして漸く正気に戻り、追いかけたが見つからない。電話もメールも着信拒否されていた。

恵流の家に行ってみたが留守だった。

納得出来なくて、その後も何度か家に行った。が、「仕事で留守にしている」と言われ、会うことは出来なかった。

† † †

「恵流のお母さんがさ、『うちの娘の我が侘で、ごめんなさい。一度決めたら頑固な子で。本当にごめんなさい』って、深々と頭下げるんだ。何度も何度も。それ見てたらもう、何も言えなくなっちゃった」

淡々と語られる陽の独白を、優馬は黙って聞いている。

「すごく優しいお母さんなんだ。俺が恵流を送っていった時とか、何度か挨拶したんだけどさ。いつもお礼言ってくれて、たまに果物とか持たせてくれて……そんな人に頭下げられたらさ」

陽はおもむろに立ち上がると、作業台の上の小さな箱を取り上げ戻って来た。

「でも、やっぱり諦めきれなくてさ。これ送ったんだ。クリスマスプレゼントに恵流が欲しがってた、お揃いのマグカップ。でも、送り返された」

箱を床に置くと、陽はゴロリとうつ伏せに寝そべった。足をバタバタさせながら自嘲気味に笑う。

「仕事の目処が立つまで待ってる。遠くても会いに行くから、ってメモ入れたら、『待たないで下さい』だって。俺、女々しいわー。ダッセー」

言いながら、ゴロゴロと床を転がり部屋の向こうの壁にぶつかり、またゴロゴロと戻って来た。うつ伏せに寝そべったまま、箱の中から小さなメモを取り出し優馬に手渡した。

「で、さすがにもう無理だってわかった。挙げ句、さっきのメールの件だし。恵流の気持ちは、変わらない」

メモには、心からの謝罪とお礼の言葉が並んでいた。

そして、「私のことは待たないで、幸せになって下さい。これからの活躍を遠くからお祈りしています」という文章で結ばれていた。

「……これは、キツいな」

「うん。キツい。超キツい」

「……でも何か、変な感じだよな。あまりにも突然すぎる。なんか納得いかない」

メモを見つめたまま眉を寄せている優馬を一瞥し、陽はコーヒーをの缶を手持ち無沙汰にぐるぐる回しながら再び言った。

「俺も納得いかないけどさ、しょうがないじゃん。諦めるしかない」

いや、何かおかしい。この文面にしても、丁寧ではあるが固すぎるし淡々とし過ぎてる。別れる理由も恵流ちゃんらしくない気がする。

なんとなく、としか言いようがないが、違和感を感じるのだ。

が、陽の言葉で、優馬はそれを追求出来なくなってしまった。

「……まあ、少なくとも恵流は、面と向かってちゃんと言ってくれた。親父みたいに、黙っていなくなったりはしなかったんだ」

陽くん、年上の女性には滅法弱いです。特に、お母さん世代。

目の前のグリルでは、肉が美味しそうに焼けている。ジュウジュウと音をたて、香ばしい匂いが立ちのぼる。

「焼肉とか、久しぶりだ。ほんとにいいの？」

「おう、任しとけ。菜から軍資金ももらってる。どんどん喰え」

言いながら、優馬は陽の皿に焼けた肉を放り込む。

「天本さんも心配してたぞ。最近食が進まないみたいだって」

口一杯に肉を頬張り豪快に噛み砕く陽を見て、優馬は少し安心した。今日玄関のドアを開けたときの覇気のない憔悴気味の表情から、幾分復活している。

グリルに肉を敷き詰め、皿が空いた傍からどんどん載せていく。

「ちょ、優馬さん。わんこ状態。わんこ焼き肉」

「いいからさっさと喰え」

外はまだ明るい。夕食時までにはまだだいぶ時間があるので、店内に居る客はほんの数組だ。少し離れたテーブルの客が、こちらをチラチラ見ている。テーブル一杯に皿が並んでいるのが可笑的のだろう。

「野菜は？ 頼まないの？」

「要らん。男なら肉だ。野菜なんて、女と一緒にいるときだけで充分だ」

「ご飯は？」

「米は食ってヨシ。肉、コメ、ビール！ 肉、コメ、ビール！ のループ。これぞ焼肉の美学」

そう言いながら、優馬は肉を3枚いっぺんに口に放り込む。

「そういえば、ビールは？ 今日は頼まないの？」

優馬は何やらモガモガ言いながら首を横に振った。

「え、何て？ わかんない」

苦笑する陽に訴える様に、肉を咀嚼しながら腕を曲げて前後にブンブン振る。

「全然わかんないって」

陽は完全に面白がっている。優馬は急いで肉を飲み込んだ。

「っは——。だからね、この後走るから、今日はビール無し」

「……ヤベ。まさかの聞いてもわかんないパターン」

「いいからチャッチャと喰え。外が暗くなる前に出るぞ」

肉の皿を手に取り、グリルの上に肉を全部滑り落とす。適当に広げると、別の皿の肉も同様に焼き始めた。

「それ、豚肉……」

「いいんだよ。牛も豚も一緒に焼いちゃうぜえ？ ワイルドだろ～お？」

「古いよ」

† † †

「で、テニスコートまで走って、その後テニス？ 随分スパルタねえ」

「おう。こういう時は、腹一杯喰って目一杯汗かいてぐっすり寝るのが一番だ。散々走り回らせてやって、『風呂入ってとっとと寝ろ』つつって帰らせた。今頃きつとぶっ倒れて寝てるだろ」

「ふふ。明日筋肉痛がすごいんじゃない？」

栞はビールを手渡した。自分は禁酒中なので、ガス入りのミネラルウォーターを持ってダイニングの椅子に座る。

「いや、それがアイツ、結構体力あってさ。『闘う美術部出身だから』とか意味不明なこと言ってたけど。今でもたまに走り込みとかしてるんだって」

「優馬の心配をしてるのよ……って、冗談よ。そんな顔しないの」

栞は自分のお腹を擦りながら語りかけた。

「ユウジくん、嫌ですねえ。パパがいじけておブスになってますよ？ おブスなパパは嫌ですねえ」

優しい侍、と書いて、ユウジ。ふたりで散々考えた名前だ。

優馬が急いで栞の前に回り込み、床に正座した。首を伸ばし、顔をお腹に近づけると大きな声で話し掛けた。

「パパはおブスじゃないですよお？ 優侍くん、パパはカッコいいです。パパはカッコいいです」

「あははは。何で二回言うの。しかも、正座」

「いや、なんとなく。二回言ったのは、大事なことからです！ 子供に『パパカッコいい！』って言われたいんだから、ほら、栞もちゃんと訂正して」

「わかったわよ。パパはカッコいいです。世界一カッコいいんですよー」

「若干棒読みだけど、まあ許す。ママも世界一美人です。クールビューティーですよー」

優馬が正座のまま、栞の膝先に顎を乗せてきた。ふう、とか言っている。

(ふふ。犬みたい)

栞は思わず、優馬の頭をポンポンと叩いた。洗いたての髪がフワフワしている。

優馬はなんだか嬉しそうだ。

(もし尻尾があったら、きっと千切れそうなくらい振ってるわね……)

満足げに目を細めている優馬をしばらくポンポンした後、栞は向かいの椅子を指差して言った。

「ハウス！」

† † †

「でさ、栞はどう思う？」

「うーん……優馬の言う、その『違和感』ってのがよくわからないんだけど」

「ああ、俺にもわからない。ただ、あの文面読んだ時に、っても短いメモだけどさ、アレ？って思ったんだよな。キャラじゃないっていうか……」

「敏腕編集者の勘？」

「ん？ まあ……うん……」

半分冗談で言ったのに、優馬は妙に照れている。身長180センチ超の男がモジモジとはにかむ姿が可笑しくて、栞は笑いを堪えるのに苦労した。

「まあ、恵流ちゃんも、色んな思いがあるんじゃないかなあ。他に好きな人が出来たとかでは無いんでしょう？」

「うん。それは無いって。恵流ちゃんに全力で否定されたってさ」

「そう……これは私の邪推なんだけど……」

最近の陽は、環境がどんどん変わってきている。

ブログのアクセス数も飛躍的に増え、描いた絵は片っ端から売れていき、単価も当初の2倍以上に上がっている。

絵の注文などを通じて煌月カレンに引き合わされた知人・友人達との付き合いも増え、華やかな場所に連れ出されることも増えてきた。そういった機会には恵流も誘ってはいたが、仕事の都合などで毎回参加出来るわけではない。

階段を駆け上がるみたいに突き進む陽に、気後れする部分もあったのではないか。

「……それで、自分もうんと頑張って、成功したい！早く追いつきたい！って思ったんじゃないかなあ、って。最近恵流ちゃんのWEBショップ見た？すごい作品数上がってるのよ。クオリティ

も高いし」

「そっかあ。じゃあ、あの違和感は、本意じゃない文章だったからなのかなあ。何も別れなくてもなあ……でも、転勤じゃしょうがないか……」

優馬はまだブツブツ言っている。余程お気に入りのカップルだったのか、もしくはそれほど陽くんのダメージが大きかったのだろうか。

「ま、生きてれば色々あるわよ。まだ若いんだから。心配なのは分るけど、あんまりお節介焼くのもどうかと思うわよ？」

煌月カレン本人の影響については言い出せなかった。きっと恵流ちゃんも言われたくないだろうし、そもそも自分が勝手に思っているだけのことなのだ。

優馬「闘う美術部って、お前……取材の時には『何にも話す事無い』とか言ってたくせに！いいネタ持ってんじゃねーか！」

陽「ネタって言うな」

優馬「出せ！まだなんかネタ持ってんだろ！出せ～！オラ出せ～！」

陽「恫喝を球に込めるの止めてください」

クリスマスコンサート

夏蓮は随分とご機嫌な様子だ。

夏蓮の叔父が指揮するクリスマスコンサートを毎年楽しみにしているが、今年はさらにお楽しみが増えたからだろう。

大月陽をコンサートに誘った際（お誘いメールはもちろん五島の担当だ）、恋人である清水恵流と別れたことを知った。それを夏蓮に告げた時、彼女の口の端が僅かに吊り上がったのを五島が見逃すはずも無かった。

夏蓮は気に入った獲物を逃すことは無い。

と言っても、何もせずとも向こうから勝手に転がり込んでくるのだ。

基本、既婚者や彼女持ちには手を出さないが、向こうが勝手に全てを捨てて夏蓮の足元へひれ伏すことも多々あった。

夏蓮がする事といえば、お気に入りの相手との交流を絶やさない様にする事だけ。そうすればいづれ、自動的に手に入るのだから恐ろしい。

そして、交流を続ける為の連絡をとるのは、もちろん五島の役目だった。

面倒極まりないが、様々な交流から学ぶことも多く、それが演技に反映することもあった。

何より、人脈が直接仕事に結びつくことも少なくないので、そうした雑事も仕事の一環だと思っている。

（今日は、コンサート後すぐに解散コースか……）

そう思いながら、五島は戸締まりのチェックをし、夏蓮に声をかけた。

階段から降りてきた夏蓮は、真紅のドレスに身を包み、ゴージャスに巻いた艶やかな黒髪を髪を揺らして婉然と微笑んだ。

「お待たせ」

「3人で会うのは久々ですね」

大月陽は、一見以前と変わらずニコニコしているが、どこか表情に影がさしている様に見えるのは気のせいだろうか。

とりあえず、カズからは「彼が自分で持ち出すまでは、清水恵流のことには触れるな」と言い含められているので、気を付けなきゃ。

「俺は車を停めてくるから、先に中に入っててくれ」

夏蓮は五島の言葉に頷くと、当然の如く陽の腕をとった。陽は一瞬驚いて身を引きかけたが、すぐに夏蓮をエスコートしながらゆっくりと歩き出す。

「今日も綺麗ですね。クリスマスコンサートにピッタリの服装だ」

襟元にファーをあしらった純白のコートを羽織り、中にはデコルテのラインを引き立てる豊かなドレープが美しい赤いワンピース。足元には同じく濃赤のパンプス。耳たぶにはプラチナとダイヤのピアスが揺れている。

「とても楽しみにしてたの。叔父には年1回しか会えないから。コンサートが終わったら紹介するわね」

「俺も楽しみです。コンサートって生で見るの初めてで」

「あら、そうなの」

「ええ。高校の時、吹奏楽部の演奏を聴いたぐらいで」

夏蓮は諷める様に、絡めた陽の腕をギュッと握った。

「ちょっと、世界的なオーケストラと吹奏楽部を比べたらさすがに可哀想よ」

「ですよね。すいません」

苦笑いしながら、ゆっくりと階段を上る。

正面扉をくぐると、すぐに知り合いが声をかけてきた。

「やあ、カレンさん。久しぶり。あれ、今日はカズさんは？」

「車を停めに行ってるの。あ、こちらは大月陽くん。才能溢れる画家で」

陽が礼儀正しく頭を下げると、相手は笑顔で握手を求めて来た。

「.....あ、カズが来たわ」

† † †

程よいクッションの座面を倒し葡萄色の椅子に深く沈み込むと、陽が感心したようにため息をついた。

「.....やっぱ凄いですね。夏蓮さん、知り合いばっかじゃないですか」

「んん、まあね。指揮は私の叔父だし、毎年来てるし」

「席に着くまでに何人挨拶したんだろ。俺、覚えてられる自信が無いんですけど」

夏蓮は気軽に笑ってみせる。

「憶えなくたって大丈夫よ、そんなに頻繁に会うわけじゃないし。ねえ、むーちゃん？」

「だな。だが、むーちゃんは止めろ」

緞帳の向こうからは、微かに楽器の音や衣擦れのざわめきが聴こえる。

陽が心持ちそわそわした様子でパンフレットを弄っているの、夏蓮は先入観を与えない程度に、ごく簡単な解説することにした。

「今日演るのは、パッサカリアとフーガ。次がシャコンヌで、両方ともバッハの曲。オーケストラ版にアレンジしてあるの。両方とも面白い曲よ。後半はクリスマスらしく、シューベルトのアヴェ・マリアと、クリスマスソングメドレーね。このコンサートは子供連れも多いから、クリスマスソングはポップな曲が多いの」

陽はパンフレットを眺めつつ、頷きながら夏蓮の説明を聞いている。五島は腕を組み目を閉じて、瞑想でもしているかのようにじっと動かない。

会場はほぼ満席になっている。開演時間になり、声をひそめた観客達のざわめきが自然に静まっ

てきた。

そして、開演のアナウンスが始まった。

とあるカフェで、どこぞの楽団の方々を見かけたことがあります。すぐ近くにあるホールでのコンサートのポスターを見かけたので、おそらくその出演者の方々でしょう。楽器を担いでいる方って、単独ではよく見かけますが集団で見るのは初めてだったので、ついこっそり観察してしまいました.....

皆さん、ご自身で楽器を抱えて移動されているらしく、ケースに入った楽器やコート類がお店の片隅に豪快に山積みされていて、ちょっと面白かったデス。

プログラムが半ばまで進んだ頃、夏蓮は陽の異変に気付いた。

目を固く閉じて俯き、膝の上で拳を握っている。薄暗い客席でもわかるほど、額に脂汗が滲んでいる。

「ちょっと、陽？大丈夫？」

うんと声をひそめて訊ねると、陽は小さく頷いた。だが、ちっとも大丈夫そうには見えない。

「どうしたの？具合悪そうよ。外に出ましょうか」

陽は目を閉じたまま、握っていた手を開き膝を掴むと、力なく首を振った。

夏蓮は反対隣に座る五島の肘を突つき、囁く。五島は身を乗り出して夏蓮越しに陽の様子を確認する。

会場には素晴らしい音色が重なり絡み合い、繰り広げられるドラマティックな演奏が観客を魅了している。

「おい、大丈夫か」

「大丈夫……いや、ごめんなさい。あの、音が……色が……」

ついに陽は大きく広げた両手で頭を抱え込んでしまい、うわ言の様に何かを呟いている。

「もうすぐこの曲が終わるから、そしたら出ましょう。陽、もう少しだけ我慢出来る？」

覚束ない足取りで分厚い防音扉から脱出した陽は、ホールのソファにぐったりと腰掛けた。やはり額には汗が浮き出しており、眉間に深く皺を刻んで頭を抱えながら小さな声で謝っている。

「謝らなくていいから。それより、大丈夫？病院に行く？」

「いえ、大丈夫。前にも似たようなことあったから……ああ、夏蓮さんの舞台の時」

「え？」

「頭の中に、色や映像が……波みたいに襲ってきて……ぐるぐる……」

五島が足早にホールの出口付近へ向かい、携帯電話で誰かと話し始めた。

「あの時とはちょっと違うけど……イメージが、こう……」

そう言ったきり陽は口を噤んでしまう。時折小さく呻きながら、固く目を閉じている。

夏蓮はオロオロしながら陽の背中を擦った。何をどうしたら良いのかわからない。

ホールを見回して五島を探すと、携帯電話を仕舞いながらちょうどこちらへ戻ってくるところだった。

「今、木暮さんと話した。大丈夫みたいだから、家まで送ろう」

「何？ 病院は？」

「病気じゃないから心配要らない。後で話す。悪いが夏蓮、クロークで……」

五島がポケットから引き換えの札を取り出すと、夏蓮は即座に反応した。

「コートね」

そう言うのと跳ねる様に立ち上がり、軽やかに駆け出した。まるで雲の上を走っているかのようにふわふわと、しかも結構なスピードで駆けていく。

五島は陽の腕を取り、立ち上がるのを手伝った。

「君はもう喋るな。後のことはこっちがやるから、心配要らない。集中しろ」

正面の階段を降りたところで夏蓮は二人に追いついた。

二人の上着を手に持ったまま、夏蓮は五島の反対側に寄り添い陽を支えて歩く。

「陽、胸が痛いの？ 大丈夫？」

「夏蓮、話し掛けるな。大丈夫だから」

「でも、胸を押さえてるわ」

「問題無い。集中させてやってくれ」

五島は「後で話す」と言っていたが、車に乗り込んだ後も3人は無言だった。夏蓮は後部座席に座り、陽の背中にずっと手を置いていた。

しばらく走ると夏蓮はそっと手を離し、座席の上で身じろぎして陽から少し離れて様子を窺っていた。

陽はいまや、膝に肘をついて完全に顔を覆っている。指の隙間から、額に滲む脂汗が見えた。

漸く部屋の前に着くと、陽は転がり出る様にして車から降り、現在は雪景色になっている資材置き場のシャッターの前を通り過ぎ、一目散に階段を駆け上がる。玄関扉前の踊り場で鍵を持っていないことに気付いた時、ちょうど五島が陽の上着を持って追いついた。

上着のポケットを探って見つけた鍵と上着を手渡した五島に、陽は勢い良く頭を下げた。

「今日は色々とすみませんでした！」

「気にするな。また連絡する」

陽はもう一度、五島とその後ろにいる夏蓮に「失礼します」と一礼し、部屋に入った。

バタバタと部屋の中を動き回る音を確認し、五島は振り返った。

「.....行こうか」

「どういうこと？」

階段を降りながら、五島が説明する。

「おそらく、共感覚みたいなものだろうと思う」

「共感覚？」

「数字や音、文字に色が見えたり、味を感じたりって現象を聞いたことは無いか？」

「ああ、あるわ。それが共感覚っていうのね.....私の場合は実際に色は見えないけど、感じることもある。数字や文字、旋律なんかがかきかけで、頭に色や振り付けの映像が浮かぶ時があるの

。これも共感覚？」

「いや、俺も詳しいことはわからない。俺自身には全くそういう経験が無いし、今日の大月くんみたいな話を聞いたことも無いんだが」

ふたりは車に乗り込んだ。今度はいつも通り、夏蓮は助手席に座る。帰りの道中、五島は先ほど電話で木暮から聞いたことを話した。

大月陽は、「鷺娘」を見た時も似たような状態になった。

その時は、夏蓮の踊りを映像として記憶して、それを頭の中で繰り返し再生し続けていたのだそう。

どこまで正確に再生していたかはわからない。だが、それには凄まじい集中力が必要だろう。彼はその記憶を頼りに、そのまま朝まで何枚もの絵を描き続けたのだそう。

「でもそれって、単に記憶力がすごいってことじゃない？」

「そうかもしれない。だが……」

だが今回、彼は色や映像が波の様に襲ってくると言っていた。おそらく演奏よってに想起されたものだろう。

それを共感覚と呼んでいいのかわからないが、何らかの能力、才能であることは間違い無さそう。

「じゃあさっきのは、その湧き上がった映像なりイメージを、繰り返し脳内再生してたってこと？『鷺娘』の時みたいに？」

「かもしれん。もしくは、新たなイメージが次々に湧き続けているのか……」

夏蓮は両手の平をじっと見つめ、ため息をついた。

「どっちにしても凄い話ね……さっき隣に座ってたけど、集中力が凄まじかった。身体からビリビリしそうな何かを放射してたわ。私、途中で離れてしまった。なんだか圧倒されてしまって、手を触れていられなくなったの」

そのまま目を閉じて黙り込んだ夏蓮の美しい横顔をちらりと見遣る。眠りたいわけではなさそ

うだ。

いつもの様に頭の中で踊っているのだろうか。それとも大月陽の湧き上がってくるイメージについて思いを馳せているのか。

五島は時計を確認した。今から戻っても、公演には間に合わないだろう。夏蓮のこの様子だと、外食は喜ばなそうだ。帰ってから何か軽く食べられるものを作ってやろう。

冷蔵庫の中身を頭の中で確認しながら、夏蓮の物思いを妨げぬよう、五島は速度を落とした。

要介護の陽、再びですね……映像に酔う陽。なんつって。

駄洒落はさておき、素晴らしい演奏を聴くと映像が浮かぶことはありますよね。陽くんほどじゃないにしても。

木暮さんから話を聞いていたのでさほど心配していなかったのだが、夏蓮が「夕方になっても大月陽と連絡が取れない」と騒ぐので、五島は仕方なく車を出した。

本来なら今日は休日のはずだったが、夏蓮一人で行かせたら今日中に帰ってくるか分らない。明日は朝から仕事が入っているのだ。

木材倉庫に着くと、夏蓮は階段を駆け上がった。鉄製の階段に細いヒールで、ほとんど足音がしないのは流石だ。五島は今更ながら、妙なところに感心した。

「陽、私よ！大丈夫？中に居るの？」

拳でドアをノックするが、応答が無い。

試しにノブを回してみると鍵はかかっておらず、ドアが開いた。

おそろおそろ覗き込んだ夏蓮が、小さな悲鳴を上げた。

「陽！！」

靴を脱ぐのももどかしく部屋に駆け込んだ夏蓮を追って、五島も急いで部屋に踏み込んだ。夏蓮は床に倒れ込む大月陽に取り縋っている。

身体を揺さぶっている夏蓮を止めさせようと跪くと、大月陽が目を覚ました。

「ん……………何？ ……あれ？夏蓮さん……………」

ノロノロと上体を起こして胡座をかき、眉をしかめて眠た気に目を擦っている。右の頬にはフローリングの床の跡が付き、両手は絵の具塗れ、顔にも指で拭った様な絵の具の跡。

「……………寝てたの？」

「ん……………寝てた……………ああ、絵を描いてて寝落ちしちゃった」

尚も目を擦りながら、「えへへ」と笑う。

「……………えへへ、じゃないわよ。全く……………電話もメールも繋がらなくて、心配したんだから」

いつの間にか五島が、そこらに放り出してあった陽の上着のポケットから携帯電話を探し出し、ことりと床に置いた。着信を知らせるライトが点滅している。

「鍵をかけるのも忘れたのか。いくらなんでも不用心だろう」

「え、まじか。気付かなかった……スンマセン」

半ばぼうっとしたまま、陽は携帯の着信履歴を確認した。今朝からずっと、夏蓮の名前が並んでいる。

「ねえ、これ……昨日の晩からずっと描いてたの？」

床に横座りしたまま部屋の中を見回していた夏蓮が、驚きの声を上げた。

イーゼルには描きかけの絵が、床にはスケッチブックから切り離された絵が散乱していた。数十枚はあるだろうか、全て水彩絵の具で描かれた抽象画だった。

筆で描いたものもあったが、半分以上は指で直接絵の具を擦りつけたらしい。指紋が残っているものもある。

「うん……多分4時くらいまでずっと」

「朝の？」

「いや、夕方……ってか、腹減った……」

眠気の抜けきらぬ顔で腹をさすっている。

「夕方の4時って、ついさっきじゃないの。まさか、何も食べてないんじゃ」

「うん。描いてる間は腹減らないから」

絵を検分していた五島は盛大にため息をつく、キッチンスペースへ向かった。陽に断わりを入れ、冷蔵庫を探る。

「冷蔵庫はほぼ空だな。あとは、冷凍の白米が少し……これは？」

「あ……」

五島が手にしていたのは、恵流の弁当の箱だった。

「それ、捨てちゃって下さい……恵流が最後にうちに来た日、持ってきてくれた弁当なんです。色々あって食べられなくて、とりあえず冷凍したんだけど……そのまま忘れてました」

「へへ」と苦笑いしているが、本当に忘れていたのか？ 捨てられなかったんじゃないのか？ そう思いながら、五島は確認した。

「……本当に捨てていいのか？」

陽が頷いたのを見て、五島はおもむろに弁当箱の蓋を開け、箱を捻る様に力を加えた。バキバキッと音が鳴る。

「え、あの」

「ん？ ああ、分別をな。アルミケースとかラップとか」

凍ったままの弁当をカブクで分解し、ラップやバラン、アルミを分けていく。生ゴミは近くにあったビニール袋にまとめ、不燃物を軽く濯いで水を切る。

最後に弁当箱を洗って振り返ると、陽は床に転がって腹を抱え、声を出さずに肩を揺らし笑っていた。

「……五島さん、豪快なんだか細かいんだかわかんないっす。ああ、苦しい」

五島はハンカチで手を拭くと、棚に並んでいたスポーツ飲料を持って戻り、目尻の涙を袖口で拭いている陽に手渡した。

「何か食いにいくか？」

「いえ。後でインスタントラーメンでも作ります。あ、賞味期限大丈夫だったかな……」

夏蓮が立ち上がり、ペットボトルの蓋を開けながら起き上がった陽のほっぺたをつねり上げ、ニッと笑った。

「そんなの駄目。ご飯食べに行くわよ。それ飲んだら顔洗ってらっしゃい。あなた、絵の具まみれよ」

夏蓮「全く、なんだってそんなに汚れるのよ」

陽「筆使うのがまどろっこしくなっちゃって、指で描いたんです。筆だとせいぜい3～4本しか持てないけど指は10本あるから、こう、ビャビャビャーって。布にピャッてすればすぐに絵の具が取れて、洗う手間も省けるし。まあ、メモ書きなんでテキストに」

夏蓮「まるでピアノとか琴を演奏してるみたいね……」

五島（ビャビャビャ？ピャ？……意味がわからん）

車の中で、陽は平謝りだった。

「さっきは寝ぼけてたとはいえ、すみませんでした。心配かけちゃって、あ、あと昨日はせっかく招待してもらったのに途中で抜けちゃったし……」

「それはもういいってば」

軽くシャワーを浴びて、完全に目が覚めたようだ。結わえた髪の毛先がまだ少し濡れている。

「でも、いっぱい迷惑かけちゃったし。せっかく紹介してくれるってことだったのに」

「叔父さんなら上手く話したから大丈夫よ。むしろ、絵が完成したら見てみたいって楽しみにしてたわ」

恐縮しきりの陽に、バックミラー越しに五島が声をかける。

「夕方の4時までってことは、ざっと20時間近く描いてたことになるけど、いつもそんな風なのか？」

「いえ、流石に毎回では無いけど……夢中になると、たまにやっちゃいますね。普段、夜は描かないんです。下絵ぐらいしか」

「下絵は描くんじゃないの」

呆れた口調で夏蓮がツッコミを入れる。

「あっ……でも、でも、鉛筆描きだから」

慌てて意味のわからない言い訳をする陽に、夏蓮は思わず吹き出してしまう。

「いや、あの……光の加減とかね、時間経過で変わっちゃうから。あと絵の具って後片付けとか、けっこう時間かかるんで……なんで、下絵はセーフってことで」

「セーフって何よ。全然わかんない。もういいわよ、全く……」

呆れてつい笑ってしまい、ほのぼのとした雰囲気になった車内に、カチカチとウインカーの音が響いた。

十 十 十

ファミリー向けチェーンのイタリアンレストランの中で、夏蓮は完全に浮いていた。まるで、ペラペラの紙皿の上に豪華な宝飾品が煌めいているみたいに。

だが猛然と食欲を満たしている陽は、周りの目など全く気にしていない。
五島にどこへ食べに行くかと訊ねられ、「一番早く食べられるところ」と即答しただけのことはある。

「……それにしても、気持ちいいぐらいの食べっぷりだな」

「ほんとね。私、見てるだけでお腹一杯になっちゃったわ」

言葉の通り、夏蓮は取り皿に盛ったグリーンサラダをちびちびとつつくばかりだ。

2人前のパスタの大半と、ピザの半分、サラダと鶏肉のグリルを胃に納めると、ようやく人心地ついたらしく、陽は「んふふー」と満足げにふたりに笑いかけた。

ふたりは（五島ですら）、そのあまりにも屈託の無い笑顔に思わず吹き出してしまう。

（ヤダもう、何この子。可愛い）

何だか妙に腹立たしくて、夏蓮はテーブル越しに手を伸ばして陽の頬をつねった。

「え、何？ 痛い！ ってか、今日2回目！」

陽の言葉を見殺しにして、夏蓮はそっぽを向いて白ワインを飲んだ。安価なテーブルワインだが、値段のわりにそう悪くない。

「腹具合は落ち着いたか？」

「はい、だいぶ。でもまだ食べます」

陽はテーブルに残ったピザ数切れや、貝のワイン蒸しを指差した。五島は黙って白ワインを陽の

グラスに注ぎ、夏蓮のグラスにも注ぎ足した。

「この後は？ 帰ってまた描くのか？」

「んー……酒かっ喰らって寝ちゃおうかな。明日仕事だけど、このままじゃ眠れそうにないし」

「眠れないって、さっきだって2～3時間しか寝てないでしょう？」

ピザを一切れ皿にとりながら、陽は緩く頭を振った。

「なんか、まだ脳が興奮してるみたいで。イメージがチラついて煩いんです。この辺りに」
後頭部の辺りをぐるぐると指し示す。

「イメージが……煩い？」

「うん。脳内スクリーンに、バババって」

「夏蓮、意味わかるか？」 「……微妙」

小声で訊ねる五島に、グラスを咥えたまま夏蓮が答えた。

得心が行かぬ様子のふたりに、陽は言葉を継ぐ。

「えーっと、意識してイメージした絵は、この辺に」

人差し指で額の辺りをぐるぐると指し示す。

「勝手に湧いてくるイメージは、この辺に浮かぶわけです。って言っても、なんかそんな感じがするってだけですけど」

先ほどと同じく、後頭部の辺りを指差す。

「昨日は、勝手に浮かんだイメージを忘れない様に再生して脳内に刻み付けてるうちに、次々に新しいのがぶわーって浮かんできちゃったから……初めてのことでびっくりしたし、頭の中がぐるぐるして大変でした。絵に描いたからだいぶ発散出来たんですけど、後遺症が、まだちょっと……」

一瞬絶句した夏蓮だったが、神妙に眉をひそめた。

「それは……壮絶ね……想像するだけで目眩がしそう」

五島は想像すら出来ないのだろう、不思議なものを見るような目つきで陽を眺めている。

「だから、騒がしいところでグワーって酒飲んで酔っぱらって、バタッと寝ちゃおうかと思うんです。なんで、良ければちょっと付き合ってもらえませんか？」

五島「映像が次々と勝手に浮かんでくるなんて、気が狂いそうな話だな」

陽「んー、覚えようとする、ちょっと大変ですね。ただ観てるだけなら楽しいんですけど」

五島「ただ、観てる……？」

陽「そう。画集とかPVとか見てるみたいに。たまに味とか匂いも付いてくるし」

五島（わからん。お手上げだ……）

そのくせ、妙に律儀だったり

体重をかけて重たい扉を開けると、喧しい音楽が耳に飛び込んできた。その先にある嵌め殺し窓付きの扉を押し開くと、本格的な爆音の中に放り込まれる。

「Takさん、お久しぶりです！」

「おー！ 陽か！ 何じゃ、珍しいのう！」

人之間を縫って進む陽の後ろを、耳に指を突っ込み首を竦めた夏蓮と周囲に警戒の目を光らせた五島がついてくる。

その隊列が通り過ぎる間、一瞬酔っぱらいどもの大声や馬鹿笑いが止んだ。

皮革や鉾を多用したファッションの色とりどりに髪を染めた男達が夏蓮に注目しているが、いかつい五島が睥睨しているので迂闊に声をかけられずに徒らに肘を突つき合うばかりだ。

「夏蓮さん、五島さんも、何でも好きなものを」

「じゃあ、ボンベイ・サファイアのロックをダブルで」

「お、ベッピンさん。イケルくちだねえ。レモンかライムは？」

「ライムを」

「わかってるねえ」 Takは嬉しそうに頷いた。

「俺は車なんで……」

「じゃあ、そっちのデッカイ兄さんにはジンジャーエールでどうかな？」

「お願いします」

あからさまにオマケしてくれたであろう、なみなみと注がれたグラスを持ち、人の少ないスペースに移動する。陽の手にはスコッチをシュウェップスのトニックウォーターで割ったグラスが握られていた。おかわりする度に段々とスコッチの割合を増やしていくのが、陽のお気に入りの飲み方だ。

「優馬さんの知り合いの店なんです。少し前に、ここの壁画をやらせてもらって」

「あの絵ね。ブログで見たわ」

驚いた顔をした陽を、夏蓮が軽く睨むふりをした。

「藤枝さんが教えてくれたの。あなた、そういうの全然言ってくれないんだもの……ま、いいわ。とりあえず、知り合いには宣伝しておいたから」

「あざっす！……あ、じゃあ最近閲覧数や絵の注文が増えてるのって、夏蓮さんのおかげ？」
「さあ、知らないけど。私は、うちの絵を見た人達に、あなたのブログを教えたただけだから」

かかっていた曲が終わり、次の曲が始まった。ギターの音色から始まるパワーバラードだ。

陽がおかわりを取りに行っている間に、夏蓮は絵を見ようと壁の方へ向かった。壁際の席で騒ぎながら飲んでいたグループが、絵がよく見える様にと夏蓮に場所を譲る。夏蓮に微笑んで礼を言われると、彼らはヘラヘラ笑いながら我先にと絵の登場人物を指差しては説明を始めた。

陽が席に戻ると、五島がひとりでスナックを齧っていた。視線はきっちり、夏蓮に纏わりつく連中を見張っている。

「あれ、夏蓮さん大丈夫ですかね？」
「大丈夫。ちゃんと見てるし、もし絡まれても、おそらくあいつらより夏蓮の方が強い」

「え、マジですか」
「ああ。業界では『バレエダンサーとは喧嘩するな』っていうのが、定説だ。彼らの体幹の強さ、身体能力、特に柔軟性は凄いからな。体重移動や各部の動かし方も熟知している。とんでもない死角から降ってくる、ムチの様にしなる重たい蹴りを浴びることになる」

「うわあ……」
「しかも、夏蓮には基本的な護身術を教えてある。関節や絞め技なんかをな。君も気をつけた方がいい」

「……俺、ほっぺた抓られたぐらいで済んで良かったあ」

端から端まで絵を見終えた夏蓮が、取り巻きを軽くいなして戻ってきた。店の奥のステージではいつの間にか、客同士のセッションが始まろうとしている。

「そう言えば、ここの音楽は大丈夫なのか？ かなりの音量だが」

「ここまで煩いと逆に平気なんです。普段、音楽は絵を描くのに邪魔になるから聞かないんですけど、こういう音だと、邪魔どころかイメージの方が音に追いやられる」

大月陽はグラスの酒を呷ってグラスを置き、笑った。

「だから、こういう日には丁度いいです」

大月陽を家まで送り届けると、時刻は11時をまわっていた。

「くれぐれも、ちゃんと布団で寝る様に」と言い含めてきたところだ。12月も半ばを過ぎた今、2晩も床に転がって寝たりしたら風邪をひきかねない。

半ば強制的に持たされた、ボンベイ・サファイアと12年もののグレンフィディックが入った紙袋を抱えて、夏蓮がクスッと笑う。

「もう、変に気を使うんだから」

レストランも、Takの店の支払いも、ふたりを説き伏せる形で陽が済ませた。

「一回りも年下の者に払わせられない」という五島を拝む様にして、そもそも食事はほとんど自分が平らげてしまったしTakの店は自分が誘ったのだからと言い張り、支払ったのだ。

おまけに店で酒を譲ってもらい、「心配かけたお詫びとお礼です」と、ふたりに押し付けた。

「ボンベイ・サファイアは、瓶が綺麗で夏蓮さんに似合うから」

「五島さんは車なのに付き合わせてしまったので、お店にあった中で一番いいお酒を」……ということらしい。

「まあ、せっかくだし有り難く貰っておこう」

五島の口の端には微笑が滲んでいる。

「それにしても、なかなか面白いお店だったわね。喧しいけど」

「ああ、まだ耳の奥が鳴ってる気がする」

「……やっぱり、オーケストラみたいにたくさんの生音が重なってるのと、電氣的に増幅された大音量って、身体に及ぼす影響が違うのかしらね？」

「どうだろうな……曲にもよるのかもしれない」

「ふん……なるほどね。次はああいう曲で踊ってみようかな。鍔付きのレザー着て」

「勘弁してくれ」

そういえば、さっきの店では夏蓮はさほど浮いて見えなかった。周囲の客とあれほど毛色が違うにもかかわらず。

(まあ、そもそも周りが百鬼夜行みたいだったしな……)

ふと頭に浮かんだ「百鬼夜行」という言葉に、小さく吹き出してしまった。

踊りながら先頭を歩く夏蓮の後を、楽器を抱えた妖怪の集団がぞろぞろと練り歩く様子を想像してしまったのだ。

秘かな想像を隠す様に、五島は口元を拭うふりで笑いを誤摩化した。

そんな五島を、夏蓮は物珍し気に横目で眺めていた。

五島さん、想像力が無いわけじゃないんですね……

それはそうと、ボンベイ・サファイアは美味しいです。大好きです。香水がわりに浴びたいです。もったいないから浴びないけど。

仕事納め、作業服に付いた木屑をブロワーで吹き飛ばしている陽に、天本は声をかけた。

「陽、今年の正月休み、なんか予定あるのか？」

「特に無いけど、絵を仕上げようかと思ってます」

ひと月ほど前からどうも元気が無いと心配していたら、恋人と別れたことを聞いた。

仕事自体は問題なかったが、昼食をほとんど食べなかったり、昼休憩中にフラッとどこかへ消えてしまうことが続き、気になっていたのだ。

「そうか。忙しいのか？」

「そうですね。肖像画の発注も入ってるし、完成品の発送もあるし……休み目一杯使っちゃうかも。でも、結構評判良いみたいなんで、気合い入れて頑張りマス！」

ニカッと白い歯を見せて笑う。

最近は何の量も増えたし、ようやく元通りの陽に戻ってきた。が、それでも時たま、暗い翳りが一瞬目を過ることがある……気がする。

「そうか。無理しないでな、ちゃんと飯も食って、ちゃんと寝ろよ」

「ラジャ！……ってオヤジさん。俺、ガキじゃないんだから」

正月休みと言えど、天本には親戚付き合いや組合の慰安旅行やらの予定が詰まっており、多忙だ。陽のことは心配だったがどうしようもない。

いくら成人した社会人とはいえ、身寄りが無く、しかも傷心している陽が、これから一週間ほどの休暇の間ひとりで過ごすのだ。過保護と言われようと、つい気になって余計な口を出してしまう。

まあ、最近はまだ新しい友人も増えたようだし、大丈夫だろう。いやしかし、正月休みだ。その友人達と会えるかもわからないし……

いやいやいや、やっぱり過保護は良くないな。陽の言う通り、ヤツは立派な成人男子だ。

……まあ、ちょっと危なっかしいところはあるが。

「そうだな。じゃあ、後は頼んだぞ」

「ういっす」

天本は年末の大掃除を従業員達に託すと、自分は得意先への挨拶に出掛けた。
それが終われば、いつもの店で忘年会だ。

† † †

「よーう、生きてるかあ」

ドンドンと玄関の扉を叩くと、しかめ面の陽がドアを開けた。

「生きてるよ。さっき電話で話したばかりだろ……………すげえカレー臭い」

「カレー食いたくて買ってきた。って、新年の挨拶がそれかよ」

優馬はさっさと部屋にあがると、ダイニングテーブルの上でテイクアウトのカレーを広げ始めた。
。

「挨拶はさっき電話でしたじゃん」

「そうだったか。あ、カレーお前の分もあるから」

大盛りのカレーを瞬く間に食べ終えた優馬は、テーブル脇の棚にあるポテトチップスをめざとく見つけた。

「お、ポテチ発見。食っていい？」

「どうぞ。それ、こないだ優馬さんが持ってきてくれたやつだよ」

プラスチックの容器を片付けている陽に、聞かれてもいない言い訳を始める。

「いやあ、おめでた報告ついでに親戚回りしてたら、あちこちでモチ攻めおせち攻め喰らってさあ。年寄りっつーのは、なんでこっちが無限に食えると思ってんだらうな？ とにかく年末年始そんなだったから、舌がジャンクに飢えてんだよ」

ゴミを捨て終えた陽が、冷蔵庫からビールを出し黙って優馬に手渡す。優馬が抱えているポテ

トチップスの袋に手を突っ込むと、数枚まとめて口の中へ放り込んで噛み砕いた。

「サンキュ。お前、飲まないの？」

「まだ梱包作業があるんだ」

「間に合うのか？手伝う？」

「いや、これで最後だから」

手をパンパンと払い、陽は中断していた作業を再開した。

「どんくらい売れた？」

「えっと……この休み中の発送分だけで、8点。あと、藤枝さんの方で数枚予約入ってるって」

「順調だな」

「連休中の受け取り指定が集中したからね。それと、休み中に注文の入った写真起こしの肖像画」

陽の指差した先には、イーゼルに掛けられた下絵入りのキャンバスと見本の写真があった。近づいて写真を見してみる。

「……7人で。肖像画っていうより団体画だな。どんだけ描くんだよ」

「それだけじゃないよ」

陽は事も無げに言って指を差した。

「この辺全部同時進行で描いてるし、あっちは描き終わって乾燥中」

優馬は愕然として部屋を見回した。

「お前、これ……もしかして、休み中ずっと描いてたのか？」

「うん。ってか連休前から、時間取れるときはずっと」

「じゃあ、クリスマスも年越しも……」

「そうだよ。悪かったな」

工場の仕事が終われば完成品を運送屋へ持ち込み、ついでに夕食をとって帰り、そのまま下絵描き、深夜倒れる様に寝て明け方には起きて、出勤時間まで別の絵の色塗り。連休中は、明け方から日が暮れるまでずっと、同時進行で複数の絵を描く。そんな生活を続けていたというのだ。

聞いて優馬は崩れ落ちた。床に手をつき四つ這いになって大袈裟に項垂れる。

「陽、お前な……もうちょっと、こう……」

「だって、しょうがないじゃん。普段よりたくさん時間取れるし、描くものいっぱいあるんだもん」

「……わかった。流石になんかイベントなりあるだろうと思ってた俺が悪かった。任しとけ、俺が女の子紹介して」

「いない」

言い終わらぬうちに、キッパリと断られてしまう。

「いや、年も明けたことだしさ、ここはひとつ」

「いないって。そもそもそういうの嫌だし、忙しいし、第一まだそんな気になれないよ」

「……新年だよ？」

「それ関係ないから。あと、首傾げるのやめて下さい。気持ち悪いから」

そうか……と呟いて首をまっすぐに戻す。と、優馬はふと思い出した。

「そういや、恵流ちゃんのウェブショップ、調子いいみたいだな。作品数がすごい増えてるし、売上ランキングも上がってるって」

「……そうなんだ。良かった、頑張ってるんだ」

陽は作業の手を止めて視線を落とした。

「やっぱまだ引きずるか」

優馬の言葉に、陽は苦笑いして緩く首を振る。

「引きずるっていうか……そんなすぐには切り替えられないよ」

「まあ、良い娘だったもんな……」

陽は独り言の様に呟いた。

「俺、恵流の気持ちが変わったこと、言われるまで全然気付かなかったんだ。鈍感にも程があるよね」

「……言いづらいが、それは同意する」

「何が駄目だったんだろね」

「心当たり無いんだろ？」

「うん。喧嘩もなかったし……あ、でも。すごく脱力されたことがあった」

「ほう」

「少し前にさ、いつから自分を好きになったのかって聞かれたんだ。

だから正直に、『いつからかはわかんないけど、バイトの初給料を何に使うかって話になった時に、“東西家紋大全集買いたい”って言ったの聞いて、仲良くなりたいてって思った』って言ったんだ。そしたら、「ええ?! そんなことで?! って」

「……」

……それは酷い。恵流ちゃんの数年に渡る片思いに対し、陽の側のきっかけが「東西家紋大全集」とは……っていうか、そもそも東西家紋大全集って何だ？

「でも、その直後に大笑いしてたから、大丈夫だと思ったんだけどなあ。やっぱりガッカリさせちゃったのかな」

……恵流ちゃんのチョイスも謎だが、陽のツボもかなり変だ。
が、今それを云々しても仕方ない。

「まあ、そりゃ脱力はするかもな……でも多分、別れた理由それじゃないだろ」

「だよね」

「あとな、笑ってたらオッケーってわけじゃないことは、憶えとけな？」

「そうなの？ ……そっか。憶えとく」

(それにしても……)

梱包の仕上げを再開した陽を眺めながら、優馬はふと淋しく思った。

(あのふたり、やっぱり似合いのカップルだったな……)

優馬「で、お前は初給料で何買ったの？」

陽「人体骨格標本。60センチの」

優馬「……そう（やっばお前らお似合いだ）」

からりと晴れた寒空の下、冷たい風が体の輪郭を際立たせる。

薄暗い店内から見える街路樹は葉を落とし、枯葉が空っ風に吹かれて歩道を転がって行く。

1月も終わりの日曜、陽は藤枝の迎えでギャラリーへ絵を納品しに来ていた。

そこへ示し合わせたかのようにタイミング良く現れたシルバークレーの紳士が、その絵を仔細に眺めている。

ひとつは、シャーベットの様なイエローオレンジと萌え立つ若草色が折り重なり複雑な濃淡で渦を巻いている。ところどころに水色と明るい紫色の飛沫が浮かび上がり、その間をくぐる金茶の太い帯が掠れた曲線を描く。軽快で柔らかな銀色の線が風に吹かれているかのように踊り漂っている。

もうひとつは、まろやかな象牙色と心を打つ深い青がひしめき、銀と白の細い直線が様々な角度、長さでキャンバスを横切っている。白い細線からは雫が滴り落ちる。

僅かにアップルグリーンとコーラルピンクの曲線が見え隠れするが、不思議なことに最初はその存在に気付かない。一旦気付いても、目を離すと迫り来るような深刻な青色に飲み込まれて何故か見失ってしまい、目を凝らして僅かな色を見つけたくなくなってしまう。

銀髪の紳士、世界的な指揮者である夏蓮の叔父は、並べられた2点の絵をひと目見て言い当てた。

「こっちが『パッサカリアとフーガ』、この青い方が『シャコンヌ』だね」

「わかりますか」

驚く陽に向かいにっこりと笑いかける。

「ああ。ふたつとも曲の雰囲気がよく出てる。繰り返される変奏、跳躍するリズム、ベルトーン……色調、スケール感、螺旋を描いて昇っていくような感覚……」

陽の戸惑い顔に気づき、首を傾げて促す。陽は言いづらそうに両手を腰の辺りに擦り付けた。

「あー……俺、音楽は全然わからなくて。実は、この2曲ともあんまり記憶に無いんです」

「……？」

「君は黙っていなさい」とばかりに、陽の背後に控えていた藤枝が進み出て滔々と講釈を始めた。

「音楽は彼の中で映像に変換され、たくさんのメモをとるが如く絵に描き、それらの絵を複合、咀嚼、昇華してまとめ上げたのがこの2点の作品です。彼が感じた音楽が、彼の才能により吸収され目で見える形となって顕われたのが、まさにこの絵なのです」

芝居っ気たっぷりに振り回した腕を胸に当て、緩く頭を振って目を閉じる。

「たとえ彼の中から音の記憶が消えてしまっても、音楽が彼の細胞を震わせその精神を揺るがし、迸る情熱に依って描かれたこれらこそが」

「気に入ったよ、大月くん。傑作だ。実に興味深い」

自らの言葉により陶醉していく藤枝の声を遮り、陽の肩を叩く。

「この絵を是非譲っていただきたい。もちろん、まだ買い手が見つかっていなければということですが。それと、少し話をしたいんですが……この後、お時間はありますか？」

藤枝のギャラリーの最奥に、売約済みの赤いリボンが付いた2点の絵が並べて掛けられた。

納品直後に買い手が付くなんて、そうそうありません。もちろん、商売上手な藤枝さ

んの手回しです。

今日、優馬がプリプリしながら帰ってきた。

でも、怒っているのは単にポーズで、機嫌は悪くなさそう……どころか、ちょっとご機嫌みたい。

「恩知らずめ」「もう誘ってやんない」等と、いかにも聞いて欲しそうにブツブツ言うので、水を向けてみた。

「なーに？ どうしたの？」

仕事の合間に、今年3度目の安産祈願に行ったんだ。（もう祈願はいいわよ）

で、陽が初詣行かなかったって言ってたの思い出したから、ついでにお守り買って仕事帰りに工房に寄ったんだよ。そしたらさ、ジョギングから帰ってきた陽を女の子が待っててさ、バレンタインのチョコ渡してんの。（あら）

あいつニコリともしないで受け取っててさ、まあ一応礼は言ってたみたいだけど。

でさー、もうちょっと愛想良くしろって言ったら「そんなあちこち愛想振り撒いてられない」とかほざきやがって。

問い詰めたら（なにも問いつめなくても）、

今年は20個近くチョコ貰ったとか言ってさ、絵の客から送られてきたりとか。

俺より多いって、どういうこと？ あいつ出不精のくせに、全盛期の頃の俺より多いって。モテてんじゃねーか！ モテてんじゃねーか！

いや、羨ましいとかそういうんじゃないよ、うん。違うよ？ えっと、ほらその、恵流ちゃんのこととかあって、心配してたからさ。

でもアイツさ、「甘いもの苦手だから困る」とかカッコつけやがってさ。全く。チョコ美味しいじゃん。チョコ食べたいよ。

ん？ ああ、去年は「彼女がいるから」って全部断ってたんだって。

.....はいはい。なるほどね。

「で、どうしたの？」

「アタマきたから、玄関に積んであったチョコ開けて、ヘッドロックかけて無理矢理口いっぱい詰め込んでやった。へへん」

.....しょーもな。なんで得意気ですか。子供ですか。

「で、お守りは？ 渡したの？」

「うん。紙袋ごと、首のそこから服の中に突っ込んできた。ガサガサしてちょっと痛かったに違いない。ざまーみろ」

.....そう、楽しそうで良かったこと。光景が目に浮かぶわ。

「来月どうするのかしらね？」

「お返しはするけど、付き合ったりは考えてないって。興味無いんだとさ」

「そっか.....」

葉はキッチンカウンターに隠しておいたチョコレートの箱を取り出し、優馬に渡した。

「ちょっと早いけど、羨ましかったみたいだから。はい、私からのバレンタイン」

「やった！」と声を上げ、優馬はホクホク顔で包みを開ける。

「ちょっとずつ食べるから大丈夫！ 14日までちゃんともたせるから！」

そんなこともあろうかと、当日用には別のプレゼントを隠してある。これくらいは想定済みだ。

「どれ食べたい？」

「んーと、これ！」

優馬の指差したチョコをつまみ、食べさせてあげる。

「はい、通算20回めの安産祈願、ありがと」

「どういたしまして。もうすぐだもんね、頑張ろうな！」

優馬が暖かい両手で栞の顔を挟み、額と額をくっつける。口をモグモグさせている優馬から、チョコレートの甘い匂いがする。

栞の大きなお腹が、優馬の腹に触れた。

お腹を圧迫しないよう、そっと優馬の腰に手をまわす。優馬も同じように栞の腰に手をまわした。暖かくて気持ちいい。

ふたりで赤ちゃんを抱っこしてるみたい……栞はそう思いながら目を閉じた。

「なあ、こうしてるとさ」

「うん？」

「ふたりでお腹の赤ちゃんを抱っこしてるみたいだな」

「……わたしも今、そう思った」

「楽しみだな」

「うん」

優馬が額を擦り付けてくる。

胸の奥があったかくなって、涙が出そうなくらい幸せな気持ち。

……こうなると私の悪い癖、イタズラ心が出て来てしまう。

「ところで優馬？」

「ん？」

「さっきの、『全盛期』って、なあに？」

「……え？」

額のスリスリが止まった。

栞は顔を上げ、目の泳いでいる優馬に、にっこりと笑いかけた。

「全盛期の頃のお話、是非お聞かせ願いたいわ」

今回は少し趣向を変えてお送りしました。

甘党の優馬さんに、ピリッとスパイシーな菜さんです。

うろたえた声の天本さんが電話してきたのは、遅めの昼休みを終えた優馬が午後の仕事に取りかかろうとしているときだった。

「陽がおかしいんだ。こっちじゃどうにもならない。助けてくれ」

そう繰り返すばかりで、一向に要領を得ない。普段の天本を知っている身として、かなりの緊急事態だと察せられた。

何食わぬ顔を装い同僚に外出を告げ、ホワイトボードに名前を書き入れると、優馬は急いで工房へ向かった。

10分とかからずにタクシーで工房へ着くと、静江さんが泣きそうな顔で走り寄り、陽の部屋を指差した。天本さんがドア越しに何やら話しかけ、ドアを叩いている。

工房の奥では、竹内さんがオロオロと歩き回り、窓から外の様子を覗き見てはしきりに額を擦っていた。

「どういう……？」

問いかけた優馬に、「私にも、何がなんだか。木暮くん、お願い」と懇願し、静江は鍵を握らせて背中を押してくる。

優馬が急いで階段を上がると、天本がホッとした表情を浮かべた。

「ああ、木暮くん、急に呼び出してしまって済まない」

「いえ、何がどうしたんです？ 陽は？」

聞けば、陽にちょっとしたお遣いを頼んだのだが、真っ青な顔で帰ってくるなり預けていた社用の財布を押し付けると、階段を駆け上がり部屋へ帰ろうとしたという。驚いた天本が話を聞こうと何度か腕を掴んだが、それを振り払い勝手に部屋へ籠ってしまったのだと。

こんなことは初めてだし、手は氷のように冷たく顔は真っ青で、身体が震えていたように思う。それに、うわ言の様にずっと何かを呟いており、目が据わっていて尋常な様子じゃなかった。心配で声をかけ続けているが、応答が無い。部屋の中で物音がしている。

優馬は静江から預かった鍵を見せると、天本は小刻みに頷き、優馬と場所を入れ替わった。

扉をドンドンと叩き、中へ向かって叫ぶ。

「陽、俺だ。入るぞ」

脱ぎ捨てた上着の傍で、背中を丸めて床に座り込む陽が居た。床に片手をつき、一心不乱に右腕を揮っている。

「おい、陽……」

足早に回り込むと、陽は床に手をついているのではなく、床に置いた大きなキャンバスを掴んでいた。右手には木炭が握られ、猛然とキャンバスの上を走らせている。

跪いて起そうとした優馬の手を振り払ったその顔は未だ蒼白で、歯を食いしばっていた。優馬と目を合わそうともせず、またキャンバスに齧りつく。

陽の右手首を掴み、強く肩を揺さぶる。

「陽！ おい、陽！！ どうした！ 何があった？！」

唸り声をあげ、陽は優馬を突き飛ばした。飛びつくようにしてキャンバスを掴み、血走った目で尚も線を描こうとする。

優馬は再び陽の右手を掴み、その頬を強く張った。

「しっかりしろ！」

叩かれた姿勢で顔を背けたまま、陽は胸の奥から無理に絞り出したような掠れ声で、ボソリと囁いた。

「……恵流が、死んだ」

時間が静止し、陽の右手首を掴む力が抜ける。

優馬の束縛から逃れた陽は、唱えるような微かな声を食いしばった歯の隙間から押し出した。

「描かなきゃ……俺が、描いてやらなきゃ……」

優馬は茫然とその姿を凝視していたが、キャンバスに描き出されつつあるものに気付いた。

清水恵流だ。

優馬は膝立ちして部屋を見回した。

部屋向こうの棚の前には、下塗りを施した白キャンバスが床に散らばり、優馬のすぐ傍にあるイーゼルは傾き、作業台に倒れ掛かってかろうじて立っている。

さらに見回すと、床に脱ぎ捨てられた陽の上着のポケットから携帯電話が覗いていた。着信を示すライトが点滅している。

そっと抜き取って履歴を見ると、同じ相手からの着信が並んでいる。優馬はその場を離れながら、リダイヤルで電話をかけた。

玄関口から覗き込んでいる天本に合図し、一緒に部屋を出る。手を挙げて質問を制し、階段を降りながら相手が出るのを待った。

「大月陽の携帯からかけております。わたくし、木暮優馬と申します。アヤさんでいらっしゃいますか？」

† † †

アヤから聞いたおおよその事情を話すと、工房の面々は言葉を失い一様に項垂れた。

「恵流さんは既に、お父さま方の田舎のお墓に……」

静江が堪えきれずに小さく声を上げ、ハンカチに顔を埋めた。

「なんてことだ……まだ若いのに気の毒な……」

天本も、首に巻いたタオルを外し目元を拭う。

突然、竹内が立ち上がった。

「俺が……俺が買い物を頼んだりしなけりゃ、陽がホームセンに行くことも無かったんだ……
彼女と別れて気まずいから、ってしばらく足を向けてなかったのに、俺が横着したばかりに……」

古株の村本が歩み寄り、竹内の肩に手を置く。

「お前さんのせいじゃない。いずれわかることだった」

「陽ちゃん、恵流ちゃんも、可哀想に……病気のこと秘密にしたままなんて、さぞ辛かったろうに……」

しゃくりあげ、大きく涙をすすった静江は、化粧が剥げるのも構わずハンカチで目を擦っている。

優馬は静かに息を吐いた。突然のことに動揺して、声が震えてしまいそうだった。

「今、陽は恵流さんの絵を描いています。それが彼なりの、精一杯の見送り方なんだと思うんです。だから、出来れば……しばらくそっとしておいてやって欲しいんですが」

天本は何度も大きく頷いた。

「わかった。もともと有給は手つかずだし、気の済むまで好きにさせよう。私らも仕事の合間

にちよくちよく様子を見に行くよ」

感謝を示すように、優馬が頭を下げる。

「俺は、これからアヤさんって方に会って話を聞いてきます。陽のこと、お願いします」

全員に向かって深く一礼し、優馬は待ち合わせの場所へ向かった。

恵流「陽がこのことを知るのは、うんと後でいい。何年も経って、家族なんかも出来て、陽がうんと幸せな時に.....ううん、一生知らないままでもいいんだ」

アヤ（ごめん、恵流。案外早くバレちゃった.....）

お別れ

その時部屋にあった一番大きなキャンバスに、暖かな色調のアクリル絵の具で、それは描かれていた。

丹念な下描きと大まかな色づけが終わるまで、陽は憑かれたように描き続けた。歯を食い縛り、時にくぐもった低い唸りを漏らしながら。

体力の限界まで描き、力尽きるように数分眠り、またノロノロと身を起し、何時間もぶっ続けで描いた。

優馬は出勤前、昼休み、会社帰りに訪れては陽を見守り、陽が短い眠りから覚めたタイミングで、ごく柔らかい食べ物を口に含ませた。

描いている間はどれだけ言っても反応しないし、食べ物を無理に口に入れようとすれば顔を振って拒否し、振り払って、力を振り絞るように絵に向かう。

寝起きで意識が朦朧としている僅かな間だけ、陽は虚ろな目でそれを飲み下し、這い上るようにして椅子に腰掛け、またフラフラとキャンバスへ向かうのだ。

細部を描き込む段階になり、陽の目に少し生気が戻った。

慈しむようにゆっくりと、丁寧に丁寧に色を重ね、筆でそっと撫でるように色を塗り、優しく指を触れて馴染ませた。

昼間は相変わらずだったが、夜になると2時間ほど続けて眠るようになり、朝と晩の2回、置いておいた食事を少量ながら自力で摂るようになった。

完成に近づくにつれ、筆が止まりがちになってきた。

一筋の髪の流れ、肌の透明感の表現、微かな陰影。そういった細かい仕上げをする度、手を止めて長い間絵を見つめている。そんな時の陽の目はとても優しく、恵流との思い出の中に居るように見えた。

この頃には、錯乱した様子も消え、朝晩の食事の量もほぼまともになり、さらにはシャワーを浴びる習慣を思い出したらしかった。

誰も、声をかけなかった。

合鍵を使ってそっとドアを開け、陽が絵を描いていれば黙って食べ物を置いて去り、床で眠り込

んでいれば毛布をかけてやる。

とにかく、恵流と居る時間を邪魔しないよう、遠くから様子を見るにとどめていた。

5日目の朝、優馬が顔を出すと、陽は床に立てかけた絵の前に背中を丸めて座り込み、じっと絵を眺めていた。絵はほぼ完成しているように見える。

陽の背後にしゃがみ、控えめに声をかけた。

「……出来たのか？」

「うん。あと一筆で終わり」

振り向かずに、掠れた声で答える。

「目の中に光を描いたら、終わり。もうこれ以上、一筆も足せない」

「……そうか」

優馬はゆっくりと胡座をかいた。

「ちゃんと完成させたいけど、終わらせたくないよ」

「……ああ」

キャンバスの中で、清水恵流が笑っている。

明るい焦げ茶色に輝く好奇心旺盛な瞳が見開かれ、透明感のある頬をほんのりと桜色に染めた恵流が、笑いかけている。

今にも可愛らしい笑い声が聞こえてきそうな口元、柔らかな唇からはほんの少し白い歯が覗き、色素の薄い髪が一筋、ふわりと頬にかかる。

襟足から繊細なうなじが伸び、その首元には銀色のチェーンに吊るされたラリマーのペンダントが掛けられていた。

絵全体から、掛け値無しの幸福感や際限ない優しさ、真っ直ぐな愛情が溢れ出ている。

「いつか、ちゃんと描いてあげようと思ってたんだ。こっそり練習して、たくさんの表情を描き留めて」

傍らに置いてあったスケッチブックに、陽は手を這わせた。恵流の絵を眺めたまま、表紙をそっと撫でる。

「……でも、恵流ってコロコロ表情が変わってさ。どの恵流も可愛くて、大好きで、決めきれなくて。恵流の本質を顕した絵にしたかったから、ずっと見てて」

目に涙が滲み、優馬は目を伏せた。

視線の先にスケッチブックが映り、その表紙が僅かに擦れ縁が緩んで膨らんでいるのが目に入る。一見して、相当使い込んでいるのがわかった。

そっと指先で目元を拭う。

「本質を、なんてカッコつけてないで、たくさん描いてやれば良かった。いや……俺が、描きたかったんだ」

しばらくの間、陽は口を噤み、じっと絵を眺め続けた。

優馬はそんな陽の背中を見守っていた。

「……………なんで、言ってくれなかったんだろう」

「それは、綺麗な自分だけを憶えていて欲しかったって……」

「うん。それは、アヤさんに聞いたけどさ……でも、俺はきっと……絶対に、どんな恵流だって好きでいたのに」

スケッチブックを撫でていた手が止まり、指先が細かく震えた。誤摩化するように拳を握って、膝を軽く叩く。

「なあ、陽。お前の言うこともわかるけどさ、それが恵流ちゃんの望みだったんだ。恵流ちゃんの、最後の望み、叶えてやれて良かったじゃないか」

「良かった？……良かったのか……そっか」

何度か膝を叩いた後、その勢いを借りるように、陽は一気に立ち上がった。

「……そうだね。じゃあ、ちゃんと終わらせなきゃね。ちゃんと最後まで、描ききる。中途半端のままじゃ、恵流が可哀想だ」

「そうだな」

キャンバスをそっと持ち上げ、イーゼルに架けた。
パレットを取り上げ、絵の具に手を伸ばす。

「工房の皆にも、優馬さんと栞さんにもうんと迷惑かけちゃったし」

優馬も立ち上がった。

「俺、出てた方がいいか？」

筆で絵の具を溶きながら、陽は首を振った。

「ううん。そこに居てよ。すぐ終わるから、見てて欲しい」

回転椅子に腰掛け背筋を伸ばすと、陽は短く息を吐いた。

少し顔を寄せ腕を伸ばし、最後の色を乗せる。
繊細に筆を重ね、微妙な色合いを出していく。

筆を降ろしたとき、絵の中の恵流は先ほどとは比べ物にならないほど、生き生きとしていた。

「……終わっちゃった」

陽の声が微かに震えている。

「凄いもんだ。さっきまでだってよく出来てたのに、ほんの少し描き足しただけで、こんなに変わるんだな」

陽は筆を持ったまま、腕で目元を擦った。

「何度も見た顔だ。恵流ちゃん、ほんとに笑ってるな。すごく嬉しそうだ」

優馬の言葉に、陽は大きく頷き、小さく涙をすすった。

笑い出す0.5秒前の、一瞬の表情。楽しいこと、嬉しいことがあると、こんな風にハッとした笑顔になって、目がキラキラときらめいて、それから目を細め声を立てて鈴を振るような声で笑うのだ。

見ている方までつられて笑顔になってしまうくらい、彼女はキャンバスの中で、楽しそうに笑っていた。

「恵流、少しは喜んでくれるかな」

「喜ぶに決まってるだろ。恵流ちゃんが最期まで想っていたお前が、一番好きな恵流ちゃんの姿を、精魂込めて描いてくれてんだから」

「……だったらいいな。俺、まじで、描くことしか出来ないから……馬鹿で、間抜けで、鈍感で……」

「アホか」

優馬は後ろから陽の脳天にチョップを落とした。

「恵流ちゃんが惚れた男を悪く言うヤツは、俺が許さん」

へへ、と涙声で笑い、陽が頭をさすりながら言い返す。

「全部優馬さんに言われたことだよ。今だって、アホって言ったじゃん」

「……あー、俺はいいんだ。って、嘘。もう言いません」

「何だよ、それ。別にいいよ、気にしてないし」

顔は見えないが、声で苦笑しているのがわかる。

きつといつものように、眉尻を下げて少し呆れた表情で笑っているだろう。

「あとは、仕上げのニス塗って、終了」

パレットを作業台に置き、筆先を布で拭ってから水入れに落とす。

「ねえ、優馬さん」

「ん？」

「この絵、恵流んちに送ったら、迷惑かな。ご両親に」

「……どうだろうな。よく考えてから決めた方がいいんじゃないか」

陽は恵流の絵に視線を据えたまま後ずさりして、優馬の隣に立った。

「……そうだね。よく考えるよ」

しばらくの間、ふたりは並んで恵流の笑顔を見つめていた。

少し眠る、と陽は言った。

ここ数日、床にうずくまって僅かな仮眠をとるばかりだった陽に、きちんとベッドで寝ろと言いかめ、結局最後まで陽の顔を見ること無く、優馬は部屋を出た。

工房へ顔を出し天本に絵の完成を告げ、昼頃にでも顔を出してもらおうよう頼むと、仕事へ向かった。

遅刻した分昼休みを返上して仕事を終わらせ、帰りにまた工房へ寄ってみると、作業場は空っぽだった。

電気が点いたままで店仕舞いしたわけでもなさそうなのに、誰も居ない。作業場の入り口でキョロキョロしていると、陽の部屋からどやどやと工房の人達が降りてきた。優馬が声を掛けると、全員で手を振って迎えてくれた。

聞けば、陽は少しどころか夕方まで眠りこけ、慌てて飛び起きて工房に駆け込んだのだそうだ。

全員に頭を下げてまわり、すぐに仕事に入ろうとする陽を押し止め、仕事を切り上げて皆で陽の両脇を抱え、無理矢理部屋へ押し掛けた。

「なんだこの部屋、絵ばっかじゃねえか」と揶揄する竹内が静江さんに小突かれ、村本は静江さんの差し入れの握り飯に手を出してまた叱られ.....

そんなドタバタした混沌の中、陽は皆にせつつかれて静江さん特製のうどんを山盛り食べさせられた後、竹内の豪腕により強制的にベッドに押し込まれたところだという。

「陽ちゃん、元気になって良かったわ。木暮くん、ほんとにありがとうね」

優馬の両手を握りしめて何度も礼を言う静江さんからの、うどんを食べていけという魅力的な誘

いなんとか断り、優馬は葉の待つ自宅へ急いだ。

道中、これから帰るという知らせと陽の様子を完結にメールすると、すぐに葉からメールが帰ってきた。

「お疲れさま。気を付けて帰ってきてね。今日はとても寒かったので、晩ご飯は味噌煮込みうどんです♪」

うどんを断って、うどんを食べる、か。

思わずほんの少し、顔がほころぶ。

葉は、たまにこういうミラクルを起してくれる。自分には過ぎた女だと、つくづく思う。今回のことでも、出産間近にもかかわらず文句一つ言わずに協力してくれた。

今だって、聞きたいこともたくさんあるだろうに、こうして何も聞かずに労ってくれる。

若干直情径行の気があると自覚する優馬にとって、葉のこうした気遣いの仕方は、自分には到底真似の出来ないこと、もはや神業とすら思えるものだ。

彼女の洞察力、言葉の裏や隙間を読み取る力。

自分とは少し異なる、しかも何通りもの角度からの目線は、いつも優馬の視界を広げてくれる。

彼女の賢さと優しさに、自分はどれほど助けられていることか。

お礼に、今日はケーキと花束でも買って帰ろう。

うどんにケーキは合わないだろうが、それでも彼女は喜んでくれるに違いない。

朝に見た、恵流の笑顔の絵を思い出す。

大切な人の笑顔というのは、どれだけ見ても見飽きることが無いものだ。

毎日しっかりと、心に刻み付けよう。何度も、何度も。

陽くん、ベッドで寝ろとしょっちゅう怒られてます。
もう最初から、お布団敷いてその上で描けばいいのに。

強制夏季休暇

陽をドイツへ行こうと誘ったのは、6月の初め、夏蓮の叔父が指揮した演奏のクラシックCD発売記念パーティーの最中だった。

そのCDのブックレットに陽の描いた例の2点の絵が使われており、陽もパーティーに招待されていたのだ。

「最近仕事ばかりで、全然会ってくれないじゃない」

「いや、今日来ましたけど」

「これだって仕事絡みでしょ」

「ああ……あの、すみません。ほんとに忙しかったので……」

よく考えれば謝る必要なんて無いのに、陽はぺこりと頭を下げる。

なんて素直な……キュートな男の子。今まで私の周りには居なかったタイプ。思っていたよりずっと、面白そう。

夏蓮は胸の内の企みを覆い隠すように、艶やかに笑って見せた。

「だから、ドイツに行くのよ。街並が綺麗だし、お城や庭園、美術館もたくさんある。きっと気に入ると思うわ。パーッと遊んでリフレッシュしなきゃ」

「いやでも、急に言われても……仕事休めないし」

「今頃のミュンヘンはいいい季節よ。日本はこれから梅雨じゃない。私、梅雨って大嫌い。一緒に脱出して、バカンスを楽しみましょう」

「えっと、うん。すごく楽しそうではあるけど、でも休みが」

今にも後ずさりを始めそうな陽の言葉を全く聞いていない夏蓮が、ヒラヒラと手を振った。

「カズ、こっちこっち」

携帯電話をポケットに仕舞いながら人込みを縫ってやって来た五島に、夏蓮が浮き浮きした調子

で訊ねる。

「どうだった？」

五島は陽に向かって頷いた。

「木暮さん経由で天本社長と話して、7月1日から9日まで、夏季休暇が貰えた」

「え？」

陽はキョトンとした顔で五島を見返すばかりだ。

「木暮さんも工房の皆さんも、大賛成してくれた。ここ数ヶ月働き詰めで心配だったから、ゆっくり羽を休めて来いと」

「え、ちょっと待って……夏季休暇？ 誰が？」

「もちろん、君だ」

話が伝わってないのか？ と怪訝そうな表情を向ける五島を遮り、夏蓮がテキパキと話を進める。

「というわけで、決定ね。絵の仕事の方はなんとか都合を付けて頂戴。旅費はこっち持ちだから、パスポートとお小遣いだけ持って来て」

「航空券と宿はこちらで手配する。費用のことは心配しなくていい。マイレージが使い切れないほど溜まってるんだ」

「……」

畳み掛けられて啞然としている陽の肩を、五島がポンと叩いた。

「じゃ、そういうことで。詳しいことは追ってメールする。あと2、3電話をかけなきゃならないので、俺はこれで」

未だ事態が飲み込めていない陽を残し、五島は足早に会場の外へ消えていく。

「えええ……」

隣では、腕を絡ませていること気づきもせず茫然とする陽に構わず、夏蓮が嬉しそうにはしゃいでいた。

十 十 十

月曜日、竹内が大きなスーツケースを抱えて出勤して来た。

「おお、陽。これ貸してやる。多少傷つけても構わないから」

村本も寄って来て、「俺も昔、柔道の大会でドイツに行ったことがある。いいところだ。ビールが旨い」としきりに頷く。

「ね、陽ちゃん。お城の写真撮って来てよ。あたし、子供の頃からの夢だったのよねえ。王子様とお姫さまが住んでいるみたいな、素敵なお城。あと、なんとかっていう白ワインが美味しいわよ」

「陽、お前高校の修学旅行で10年のパスポート取ったって言ってたろ。行って来い行って来い、使わなきゃパスポートが無駄になる」

寄ってたかって、ドイツ行きをけしかけて来る。

「あの……これってもしかして、決定事項？」

「「「その通り」」」」

無駄だと悟りつつも、一応言ってみる。

「……俺の夏休みなのに？」

一斉に、重々しく頷かれてしまう。
陽はガクリと項垂れた。が、覚悟を決めて顔を上げる。

「一足早く、夏休みいただきます」

勢い良く頭を下げると、全員から拍手が送られた。竹内など、「ヨッ！！」と声を上げ囃し立てる始末だ。

「よーし、じゃあ体操の後、陽以外の夏休み申請と、仕事の割り振りやるぞ」

毎朝のラジオ体操のために全員で屋上へ向かう中、静江が陽の背中をバシッと叩いた。

「陽ちゃん、お土産よろしくねっ」

かなり強引ではありますが.....工房の皆さんの粋な計らい、というやつでしょうか.....

...

ミュンヘン国際空港の到着ロビーで待っていると、ガラスのしきりの向こうに陽の姿が現れた。夏蓮が背伸びして手を振ると、気付いた陽がホッとした様子で手を振り返してきた。

税関職員と少し話し、笑顔に見送られながらソワソワした様子でゲートを抜けて来る。

「陽！ お疲れさま！ 大丈夫？ トラブルは無かった？」
問答無用でハグをしながら、夏蓮が矢継ぎ早に訊ねた。

「ええ、飛行機では日本語話せるCAさんが居たし、なんか色んな手続きも簡単過ぎて逆に戸惑っちゃいました。今だって、ほとんどチェックとかされなかったし」

「わりとそんなもんよ。悪人には見えなかったんでしょ」

スーツケースに手をかけた五島を制し、陽は数着の衣類と洗面道具、絵の道具しか入っていないスーツケースを持ち上げた。

「わざわざお迎えありがとうございます」
「どういたしまして。さ、まずはビールよ！」

(運転して来たのは俺なんだが.....)

密かにそう思いつつ、五島は夏蓮にぐいぐい腕を引かれ、陽と共にガラスを多用した美しい空港内のビアホールへと引きずり込まれた。

塩気の効いたプレッツェルを齧り、華やかな香りのするビールで喉を潤しながら（五島はアルコールフリーのビールを頼んだ）、夏蓮がこの後の予定を発表した。

「ホテルに荷物を置いたら、ちょっとブラブラしてから夕食にしましょ。リクエストはある？ ...
...じゃあ、おススメの店があるからそこね。明日と明後日の昼間は、私達ちょっと仕事がある

から、あなたは自由に過ごして。観光したいところがあれば手配するわ。それから……」

夏蓮の視線を受け、五島はポケットから携帯電話を取り出し、テーブルの上を滑らせる。

「レンタルしておいた。ホテルと俺の電話番号は登録してあるから、何かあったら使うといい」

「わあ、何から何まですみません」

陽はテーブルに額が付くぐらい深々と、頭を下げた。

† † †

ホテルは客室数が少なくこぢんまりとしていたが、とても居心地の良いアットホームな雰囲気があった。

「全室スイートで、バスルームがふたつ。ミニキッチンも付いてるの。交通の便もわりといいし、ミュンヘンに来る時は毎回ここに泊まるのよ」

個屋に案内され荷解きを済ませてリビングへ行くと、ふたりは途中で買って来た食料や飲み物を仕舞っているところだった。

「手伝うことありますか？」

陽が声を掛けると、夏蓮が驚いて振り向いた。

「もう荷解き終わったの？」

「ええ。荷物少ないし」

「こっちはもう終わるから、出掛ける準備でもしておいてくれ。夜になると冷え込むから、上着を持った方がいい」

美味しそうな料理の匂いが漂う通りを数分歩くと、広場に出た。
ネオゴシック様式で建てられた新市庁舎が視界に飛び込んで来る。

「うわ……すげえ」

陽はその場に立ち尽くし、威風堂々としたその建物に見惚れている。

あまりにも動かないので、とうとう夏蓮が手を引っぱった。

「中庭にも入れるのよ」

建物を見上げたまま夏蓮に手を引かれ、石畳の広場をゆっくりと歩く。中庭を一回り見て、再び正面に戻ると、陽は写真を撮りまくりながら建物の前を2往復した。

「ちょっと、ここで躓いてたら他を見られないわよ」

「そうですけど、凄過ぎて。俺、デジカメのメモリー足りるかな……」

街路樹の新緑が美しい街並を眺めながら数分歩き、大きなビアホールの入り口をくぐる。
広大な店内には客がひしめき、冗談かと思うほどの大きなグラスでビールを楽しんでいる。

空席を探しながら店内を見て回る。

民族衣装を纏った男女が踊り、生演奏の奏者はビールを飲みながら楽しそうに音楽を奏で、客達は音楽に合わせてジョッキを振り回しながら歌っている。

幸運にも席はすぐに見つかり、五島がウェイターを捕まえてビールを注文した。

天井に描かれた絵を写真に撮るうちに、ビールが運ばれてくる。いざ実物を目の前に置かれると、陽は思わず笑い出さずにはいられなかった。

「デカイよ。何だこれ、花瓶？」

3人が乾杯すると、周囲の客がジョッキを差し出して来る。見知らぬ客達とも乾杯を繰り返し、少し濁ったビールをごくごくと流し込んだ。

「空港で飲んだのと味が違う。花みたいな香りがするんですね」

「そう。私、このビールが一番好きなの」

両手でジョッキを抱える夏蓮の顔は、ほとんどジョッキに隠れてしまう。

プレッツェルを抱えた売り子から特大のをひとつもらい、3人で分けながら食べる。ジョッキが半分も空かないうちに、頼んだ料理がやってきた。

「ちょ、デカ！デカくね？何で何もかもこんなにデカイんだ」

目の前には、大皿の上で湯気を立てるソーセージや肉の煮込み、ポテトや酢漬けキャベツの付け合わせが並ぶ。信じ難いほどのボリュームに笑いこけている陽を、周りの客が微笑ましく眺めている。

陽はいつになく、あっという間にビールを飲み干してしまった。

「あれ。なんか飲めちゃう。美味しいからかな。全然酔っぱらわないし」

「1リットルだ」

「え？」

「このジョッキ、1リットル入りなのよ」

「……まじすか」

五島が少し離れたところに居たウェイターに声をかけ、指を3本立てると、ウェイターは笑顔で頷いてまたビールを持ってやって来た。

「おお、強制執行……」

「余れば俺が飲む」

結局2杯半ほど飲んだ陽は、ホロ酔い気分店で出た。

ブラブラと散歩しながら、ゆっくりホテルまでの道に戻る。夜の通りは、昼間とは雰囲気が一変していた。

ライトアップされた市庁舎を眺めながら広場を横切り、人込みを縫って通りを進む。少しひんやりとした風が、酔った頬に心地いい。

「気持ちいいですねえ。なんか、日本とは空気の質が違う気がします」

「わかるわ。国によって、空気って違うわよね」

「そうだな」

「何カ国ぐらい行ってるんですか？」

夏蓮は「そんなの憶えてないわよ」と笑った。五島は律儀に指を折って数えている。

「小さい頃はドイツとウイーン、数年日本に戻って、ダンス留学でまたドイツ。各国の舞踊やストリート系のダンスを習いに、スペイン、アルゼンチン、アメリカ、ブラジル……」

「公演や他の仕事では、フランスやイギリス、アジア各地にも行ったわね。あとはただの旅行や、家族に会いにいったのを含めると……やっぱり思い出せない。そりゃ、マイルも溜まるわよね」

陽はすっかり面喰らった様子だ。

「すげえ……想像もつかない」

「本物のダンスを知りたいから。いくらインターネットが発達しても、テレビの画像が綺麗になっても、行って体験しなきゃわからないことって、たくさんあるもの。やっぱり、現地で学ぶのが一番よ」

夏蓮はスッと前へ進み出ると、歩きながら可愛らしい、しかし複雑なステップを踏んだ。くるりと振り返り、「ね？」と笑いかける。陽はパチパチと拍手を送った。

「ベリーダンスやラテンなんかも習ったけど、まだ本場では見たことが無いの。そのうち行くわ、絶対」

気付けばホテルの前に到着していた。

ドイツは料理がまずいと言われがちですが、美味しいものもたくさんありますよね。
料理名を知らないので具体例を挙げられないのが残念です.....

「おはよう。あら、陽は？」

「バルコニーで絵を描いてる。俺より早く起きてた」

読んでいた新聞を畳み、五島は椅子から腰を上げた。

「呼んでこよう」

朝食室に降りて来た一行は、ブッフェ形式のテーブルに並んだ。

「このホテル、レストランは無いんだけど、朝食だけ出るの。けっこう美味しいのよ」

白いテーブルクロスが敷かれた長テーブルには、スライスしたハムやソーセージ、何種類ものチーズ、生野菜や果物、温かいスープ、パンなどが、たくさん並べられている。

別のテーブルには、小さなトースターとコーヒーマーカー、ジャーに入った数種類のジュース、カップのヨーグルトと、生オレンジジュースの機械があった。

機械にグラスをセットしてスイッチを押すと、山盛りになったオレンジがアームの上をコロコロと転がり、自動的に半分にカットされてジュースが絞り出される。

その仕組みが楽しくて、陽はオレンジジュースを2回おかわりした。

「今日は何をして過ごすの？」

チーズを載せた茶色いパンにたっぷりイチジクのジャムを塗りながら、夏蓮が訊ねる。

「一旦部屋に戻って描きかけの絵を仕上げてから、近くを散歩してみます。街の様子を見たいから。で、明日は美術館に入り浸って、明後日はお城の観光。五島さんが手配してくれました」

「そう。昼食は？ここでサンドウィッチでも作っちゃおう？」

料理の並んだテーブルをなんとなく指差す。

「いえ。外で適当に済ませます」

夏蓮の真似をしてチーズとジャムを乗せたパンを、おそろおそろひとくち齧り、陽は一瞬顔をしかめた。が、すぐに目を見開いて頷く。気に入ったらしい。

「帰る時に電話する。出掛ける時には携帯を忘れないようにしてくれ」

陽はだぶだぶなパンツのポケットから携帯を取り出し、五島に示した。

「現金は持ってるか？ カードやTCをを使えない店も多いからな。ただし、あまり大金は……」

「ちょっと、ごーちゃん。大丈夫よ、心配性なんだから。お母さんみたい」

「いや、何かあったらと……」

ばつの悪そうな五島に、陽は別のポケットから現金を取り出してテーブルに並べて見せる。

「小さいお札で10ユーロと、コインがこれだけ。足りるかな？」

「ああ、充分だろう。ただし、外では現金を広げないように……よし、そろそろ出掛ける時間だ」

陽は大急ぎで皿に残った食べ物を頬張り、コーヒーで飲み込んだ。

十 十 十

夏蓮を仕事現場まで送り届けると、五島はミュンヘンの道場へ向かう。

夏蓮の留学中に臨時で教えていた伝手もあり、海外へ行く度に現地の道場で講師を務めることにしている。

空手や柔道は海外でも盛んで、本場日本からの講師ということで喜ばれるのだ。こちらも刺激を受けるし、良い副収入にもなる。

正直、夏蓮のダンスの収入だけでは、ふたり分の生活を賄うので精一杯だ。

夏蓮も、本職以外のダンスや日舞を教えたり、様々なエクササイズや身体的なりハビリテーションのメソッドの開発などに携わったりもしている。

だが、収入の面だけでこうした体制を取っている訳ではない。時たま離れ、各々ダンス以外の仕事をする事は、それぞれにとって良い息抜きにもなるのだ。

タイトルはダジャレです。わからない人、ごめんなさい。

ドイツ、特にミュンヘンは今、色々と大変みたいですね.....方々、上手くまとまると良いのですが。

大好きな街で、悲しいことが起こりませんように。

夏の夜に咲く

仕事を終え、夏蓮を迎えに行く頃には、16時を回っていた。

五島が車を運転する隣で、夏蓮が陽に電話を架けはじめた。ハンズフリーにしたので、五島にも会話が聞こえてくる。

「夏蓮さん、お疲れさまです」

「お疲れさま。これから帰るけど、大丈夫だった？」

電話の向こうが何やら賑やかだ。

「えっと、大丈夫なんですけど、なんか行列出来ちゃって……」

「行列？」

† † †

ふたりがホテルに着くと、ちょうど陽が戻って来た。両手一杯に荷物を抱えている。たくさんの果物やお菓子、瓶ビール、ペットボトルのジュースなど様々だ。

「絵のお礼に、って貰っちゃいました」

発端は、陽が街中で風景画を描いていたことだった。

その絵を小さな女の子が覗きに来たので、別のページにサラサラと似顔絵を描き、プレゼントしたのだという。

すると礼を言いに来て来たその子の親に、「漢字で娘の名前を書いてくれ」と頼まれ、それを見た周りの人々が「我も我も……」となっただらしい。

「途中からは似顔絵関係なく、とにかく漢字の名前を！！ってなって。お金を払おうとするから断ってたら、なんか現物支給みたいに」

陽は笑いながら、「黒の絵の具だけやたらと減っちゃいました」とボヤいている。

「なんか、黒が良かったらしいんですね。墨字っぽいからかな？」

「太い筆で書いたみたいに見えるように、こう……漢字のアウトライン先に書いて、後で中を塗りつぶしたんですね。単なるレタリングなんですけど、マジシャン扱いされました」

「何て書いたか？……忘れちゃったけど、必死で漢字を捻り出しましたよ。あ、パウロって人がいた。Pから始まる漢字なんて無いから、『波宇侶』って書いて『波と宇宙の僧侶』とか適当に説明したら、すごい喜んでた」

いかにも愉しげな陽が珍しく饒舌に語るのを、夏蓮は声を上げて笑い、嬉しそうに話を聞いている。

「凄いじゃない。なんかそれ、商売になりそうよね」

「ああ、面白そうですね。当て字の雰囲気から絵を描いてみたりとか……海外向けにやろうかな」

貰ったものを整理し終わると、陽はバッグの底からペットボトル入りのオレンジジュースを取り出した。

「これ、忘れてた。朝、駅前で買ったオレンジジュースがやたら美味かったから、ふたりにもと思って買っておいたんです」

えへへ、と笑ってボトルを差し出す陽から、夏蓮は今にも蕩けそうな表情で受け取る。五島もジュースを受け取りながら、一瞬彼の頭を撫でてやりたくなった自分に驚いていた。

食事の間、陽は名前のことについてずっと話していた。外国の名前に漢字を当てていて気になったのだからと言う。

「そういえば夏蓮さんって、芸名？ はカタカナでカレン、ですね？ 何ですか？」

「んー、カレンって、海外でも通じる名前じゃない？ で、実は夏の蓮って意味だって教えて、

受けがいいのよね。でも、理由はそれだけじゃなくて。煌月夏蓮って字面が仰々しいし、サインするとき面倒なのよ」

「ああ、なるほど。サインが面倒って、わかります。俺も、横書きで名前書くと『大腸』に見えちゃうことがあって」

夏蓮と五島は一瞬目を合わせ、同時に吹き出した。

「あははは、ほんと。大月陽で、大腸ね！見える見える！」

「大きな月と太陽って良い名前なのに、台無しだな」

「一瞬の錯覚なんですけどね。……って、そんなに笑わないで」

そう言う陽も、自分で笑ってしまっている。

レストラン店内の客が数組、「楽しそうだな」という表情でこちらを見ている。中には微笑みかけてグラスを掲げてみせる者も居た。

夏蓮の笑う声は、高いけれど、空気中に広がってキラキラと淡く輝きながら溶けていくようで、とても耳障りが良く煩さを感じさせない。美しいプールサイドで高価な薄いシャンパングラスが割れ、粉々になったガラスが水の中に降り注ぐ様を思い起こさせる。

「それにしても……」陽はうんと背の高いグラスで少し濁りのあるビールを飲んだ。

「夏蓮って名前は夏蓮さんにピッタリです。泥の中からスーッと伸びて、空中で華麗で大きな花を咲かせる」

「空中で？ 水面にポカッと咲くんじゃないの？」

「それは、睡蓮。蓮の仲間だけど別の花です」

「……花にも詳しいのか。なかなか博学だな」

「偶々です。モネの絵で、睡蓮ってのがあったでしょう？ あれで知りました」

夏蓮は白ワインのグラスを口に運ぶ。

「7月の誕生花なのよ。蓮の花」

「いいですね。夏の夜、煌めく月の光りを浴びて……あ、蓮って夜は閉じちゃうんだっけ」

そうか、と陽が頷く。

「だから代わりに、夏蓮さんが咲くんだ」

カタン、と音を立てて夏蓮がグラスを置いた。

「ちょっと、ヤダ。私、こんな素敵なこと言われたの初めてかもしれない。ねえ、陽。あなたって時々すごくロマンティックよね」

ほんのりと頬を上気させた夏蓮がはにかんだように微笑む。

「ね、ごーちゃん。ちょっと見倣った方が良いわよ」

「余計なお世話だ」

五島は大きな肉の塊を頬張った。

陽はニコニコ笑いながらソーセージを齧っている。耳の縁が赤くなり目が若干眠たそうなのは、3杯めのビールがまわって来ているからだろうか。

「タケカズさんって、わりと珍しいですよ。漢字とか、ありそうでなかなか無い名前って気がする」

「ああ、うちは武道一家だから。代々『武』の字を使うんだ」

「3人兄弟の長男だから『一』なのよね。海外の人はタケカズって発音しづらいらしくて、みんなカズって呼ぶの。で、カズは『一』って書くんだって教えると、みんな大喜びよ。棒一本の名前なんてクレイジーだって」

「つかみはオッケーってやつですね。でも、『タケ』じゃ駄目なんですか？」

「英語表記すると面倒なことになる」

「……ああ、なるほど」

「ついでに『五島』も面倒よね。紛らわしいっていうか」

「苦労されてるんですね」

「大腸ほどじゃない」

ひでえ、と陽はまた笑い出す。今日の陽はいつにもまして上機嫌だ。

「五島さんって、思ったより面白い。顔怖いのに」

「仏頂面で悪かったな」

「ほんと仏頂面！声出して笑ってるところ、さっき初めて見たし」

なにか言葉に詰まってしまう、五島は黙ってビールを飲んだ。

夏蓮はクスクス笑いながら、そんなふたりの様子を眺めていた。

トイレに立った陽の背中を、夏蓮が微笑みながら見送っている。

「……随分とお気に入りなんだな」

「まあね」

「年下は初めてじゃないか？」

「年齢なんて気にしたこと無かったわ。でも、年下もいいわね。可愛くて。昼間オレンジジュース貰った時なんて、キュンときたわよ」

グラスに残ったワインを飲み干し、夏蓮はからかう様な視線を向けた。

「そう言うごーちゃんも、わりと気に入ってるみたいじゃない？」

「別にそういうわけじゃないが……実を言うと、昼間ちょっと思ったんだが……ムサシに少し似てる」

「……！！」夏蓮は両手で口を塞ぎ息を呑んだ。

「それよ！」

「ああ。昔、よく石だの松ぼっくりだのをプレゼントされた。オレンジジュースを渡された時に、ふと思い出してしまって」

ムサシというのは、五島が実家で買っていた雑種の中型犬だ。
真っ白で美しく賢かったが、ひどく人懐っこくて、愛嬌のある犬だった。

「陽を見てると、両手で思いっきりワシャワシャってしたくなる衝動に駆られることがあるの。
その理由が、やっと分ったわ。ありがとう、ごーちゃん」

「どういたしまして」

勘定をする為に、五島は人差し指を立ててウェイターを呼んだ。

陽くん、また天然キザ発言炸裂です。ソーセージ齧りながらでなきゃ、もっとカッコ
よかったのにね.....

脳に突き刺さる電子音と心臓に響く重低音の中、目眩がしそうなケバケバしい照明がぐるぐると回る。

フロアにひしめく人々が、あちこちぶつかり合い、時折雄叫びをあげながら踊っている。

飲み物を片手に、陽は夏蓮に手を引かれフロアに引っ張り出されていた。

五島はカウンターにへばりつき動く様子も無いが、ちゃんと夏蓮を見張っている。

「夏蓮さん、俺、踊れませんって」

夏蓮が振り向いて怒鳴った。

「え？ なあに？」

「無理です。踊り方知らないし！」

陽も負けじと大声で言い返す。音楽と嬌声で声を通らない。

夏蓮が耳に齧りつく勢いで顔を寄せて叫ぶ。

「大丈夫、私が教えてあげる」

人混みを縫ってフロアのほぼ中央に陣取ると、夏蓮は陽の両手を取って向き合い、妖艶に笑った。ショッキングピンクの照明が夏蓮の顔を横切る。

陽の腕を腰に回し、自分は陽の肩に手をかけた。

ギクシャクと腰の引けている陽の背中をグイッと押して距離を縮め、肩に手を戻す。

「まず、音楽を聴いて」

「.....うるさいです」

夏蓮は陽の口をぎゅっと掴んだ。

「そういうこと言わないの。すぐに慣れるから」

「ハイ……」

「音楽に合わせて身体を揺らして……そうそう。上手いわよ」

初めこそギクシャクしていた陽だったが、すぐに慣れて夏蓮の動きについて来る。少し身体を離し、簡単なステップやリズムの取り方、身体各部の動きをいくつか教える。こちらもしっかり習得してしまった。

「なんだ、センスあるじゃない。じゃ、行くわよ」

夏蓮はバックステップで距離を取ると、いきなりダイナミックに身体をくねらせ踊り始めた。

周囲から歓声と口笛が飛ぶ。

黒いオフショルダーのカットソーに、こちらも艶やかな黒のクロップドパンツ。身体の色をこれでもかと際立たせるファッションに身を包んだ、黒髪のエキゾチックなアジアンビューティーの登場に、周囲の客が注目し始める。

ストロボのような断続的な光りの中に浮かぶ姿は、どの一瞬をとっても美しい。

やがて曲が変わると、照明も変わった。

客の身体をスクリーンにする様に、様々な色や映像がぐるぐると回る。夏蓮の黒の衣装はよく映像を写し、ますます目立っている。

徐々に夏蓮の周囲にスペースが出来た。周りの客が遠巻きに見蕩れているのだ。

ある程度のスペースを確保すると、夏蓮は本格的に踊り出した。流石、あらゆる種類のダンスを身につけているプロなだけあって、周りの客の動きとは雲泥の差だ。

夏蓮へ向けての歓声が大きくなる。照明が夏蓮に集中し始めた。

歓声や賞賛の視線を楽しみながら、夏蓮は周囲を挑発するように踊った。
が、いざ誘って来る者が現れるとそれを軽く去なし、また陽の元へ戻りふたりに踊る。

少し経つとまたスペースの中央へ舞い戻り、周囲の視線を独り占めして踊り始める。

2曲、3曲と踊るうち、夏蓮は完全にその夜の主演になっていた。

何度目かに陽の元へ戻って来たとき、夏蓮が陽に耳打ちした。

「この曲で終わるわよ。ちゃんと受け止めてね」

聞き返す間もなく再び中央へ戻ると、夏蓮は盛大に周囲を叫びながら踊り始めた。怒号のような歓声が、最高潮に達する。

複雑なステップで両手両足が不規則に動く不思議なダンスは、素人が見ても相当難易度の高い踊りである事がわかる。スローモーションやストップモーション、複雑なステップや動きを散りばめながら、夏蓮は息一つ乱すさず激しく舞う。

と、突然夏蓮が振り向き陽へ向かって踏み出したと思うと、雲の上を走るように駆け寄り、陽の肩に飛びついてヒラヒラと回ってストーンと陽の右肩に腰掛け、ポーズを決めた。

瞬間、曲が終わる。

一瞬の静寂の後、会場が爆発したような歓声が沸き上がった。

「え？ えええ？！」

呆気にとられた表情で、陽は自分の右肩に座る夏蓮を見上げている。

自分の肩の上で何が起こったかわからないが、何故か当然のように右腕で夏蓮の両足を支えていた。

夏蓮は左腕を陽の左肩に置き、上手く体重を分散させている。

差し上げた右腕で観客の歓声に応え、写真や動画を撮っているスマホにキスを投げてアピールしている。

そんな夏蓮を見上げるうち、陽はなんだか可笑しくなって笑えてきてしまう。

「夏蓮さん、すげえ。わけわかんない」

しばらくの間たっぴりと歓声を浴びて、夏蓮は最後にDJブースを指差しウインクを投げると、たくさんのサムズアップが帰ってきた。直後、次の曲が流れ出す。

夏蓮はスルリと滑り落ちると、陽の首元に抱きついた。

「陽、あなたって、最高」

途端に周囲の客に囁し立てられる。口々に何やら叫び、口笛や指笛で呷られる。

陽は慌てて隠れるように夏蓮の髪に顔を埋めた。

「ちょ、夏蓮さん。みんな見てる。すっげえ見られてるんですけど」

「ふふ。いいじゃない。陽、両手は腰に。ギュッて」

「あ、ハイ」

言われた通りに、夏蓮の腰に腕を回す。音楽に合わせて、夏蓮が再びゆるゆると身体を揺らし始める。

「夏蓮さん……俺、帰りたいです」

「もう？ もうちょっと遊ばない？」

「だって、みんな見てるしヤダ。帰りたい」

「しょうがないわね……」

一瞬名残惜し気な表情を浮かべたが、すぐに悪戯っぽく笑うと陽に何事か囁く。

陽は驚いた様子だったが、そのうち呆れたように笑い出した。

ふわりと飛び上がった夏蓮を空中でキャッチし、抱きかかえる。

再び歓声や口笛がわき起こる中、陽はそのまま出口へ向かう。

人混みが左右に割れ、夏蓮は陽に抱き上げられながら女王然と鷹揚に手を振り、陽は苦笑いしながらフロアを突っ切った。

通路へ通じる階段を上りきったところで、夏蓮は陽の腕から飛び降りた。分厚い扉を抜けると、大音量で鳴っていた音楽がくぐもって聞こえる。

「ああ、楽しかった！ね？」

「うん、まあ楽しかったですけど……どんだけ目立てば気が済むんですか。ってかさっきのアレ、打ち合わせとかしてたんですか？」

「全然？」

「でも、曲ピッタシで終わった……」

「ああ、なんとなくわかるのよ。慣れっていうか……なんとなく通じるのよね。お互いプロだし」

いかついドアマンにウインクで見送られながら、陽と夏蓮は路地を抜け大通りに出た。

「あ、五島さんは？置いて来ちゃった」

「もうすぐ来るわ。タクシー回してくれるはず」

「え、いつの間に」

「さっき帰る時、アイコンタクトしたもの」

夏蓮が背伸びをして車を探していると、白いベンツが現れた。

「あ、来た来た」

「……五島さん、すげえな」

「自慢の敏腕マネージャーよ」

タクシーの助手席には既に五島が座っていた。

陽はドアを開けて夏蓮を乗せると、続いて自らも隣に座る。

「随分と派手にやったな」

「ふふ。明日の朝が楽しみね」

「明日？」

「ダンス関係の記者や関係者を数人呼んでおいたし、客も撮影していた。少なくとも地元の新聞には載るし、おそらくネットにも出回るだろう」

「ちょっとした売名行為よ」

「せめてプロモーションと言ってくれ」

夏蓮はああ言っているが、ただ単に楽しんでいるのだと五島は知っている。
結果的に宣伝になるというだけの事なのだ。

「こっちでも公演やるんですか？」

「年末にね。今回はその件の諸々と、ついでに単発でダンスと日舞のレッスンの仕事」

「へえ……」

「スポンサー探しから自分達でやらなきゃいけないから、わりと必死よ。楽しいけどね」

「フリーのダンサーって、大変ですねえ」

「そうね。でもその分、自由にやれるけどね。まあ私には、ご……カズが居てくれるから助かってるけど」

「夏蓮さん、呼び方がいちいちブレブレです」

五島はこちらの会話には構わず、ドライバーに道順を示している。彼らのホテルがもうすぐ見えてくる。

夏蓮さん、飛ばしてます。

それはそうと、とうとう100話超えです……ダラダラと長くてごめんなさい。

翌朝の新聞には、果たせるかな、夏蓮の記事が載っていた。と言っても、扱いはそれほど大きくはなかったが。

むしろ、ネットにあげられた画像が早くも話題になっている。

夏蓮の部屋から、陽がフラフラと出て来た。

「.....おはようございます」

「おはよう。二日酔いか？」

陽は力なく頷き、壁に手をついて寄りかかった。

「あの.....夏蓮さんは」

「ご機嫌で入浴中だ。メインの方のバスルームで」

「すげえ.....あれだけ飲んでおいて.....」

陽はぐったりとソファに倒れ込む。顔にかかるボサボサの髪を払う事もせず、背もたれにしがみついている。

昨夜夏蓮は、部屋に着くなりワインボトルを2本引っ掴み、問答無用の勢いで自室に陽を拉致していたのだ。

「だいぶ飲まされたみたいだな。しじみのみそ汁でも飲むか？ インスタントだが」

頷いて立ち上がろうとする陽を制し、五島がキッチンへ向かう。

棚からみそ汁のパックとカフェオレボウルを取り出し、ポットの湯で味噌を溶き始めたあたりで、陽の素っ頓狂な声が聞こえた。

みそ汁を持って戻ってみると、陽が怪訝な顔で新聞を見つめている。

「五島さん、これ、俺も載ってる……」

五島はみそ汁をテーブルに置いた。

「そりゃそうだろう」

五島の翻訳によると、紙面には「日本の美しきダンサー、サムライスタイルの男と共に観客を魅了」と題された写真が載っていた。

言うまでもなく、陽の肩に乗った夏蓮の写真だ。

「記事の内容は、夏蓮の紹介と昨夜のダンスの賞賛だな。こっちも出てるぞ」
ノートパソコンをぐるりと回し、陽に見えるようにした。

「……サムライスタイルって、なんすか」

「さあ。君の髪型の事じゃないか？」

おそらく、低く結ったポニーテールを指して言っているのだろう。

おそるおそるパソコンを操作していた陽が、情けない声を上げた。

「うわあ、早速名前出されてるし……」

「ああ、木暮さんにメールしておいたから、彼じゃないか？君のブログとFBが貼られてるだろう」

「まじか……あの野郎」

そのとき、肩にバスタオルをかけた夏蓮が入ってきた。

「あら、やっと起きたのね。おはよう」

陽は咄嗟に頭を上げたが、すぐに顔をしかめて額を押さえた。二日酔いの頭痛はかなり辛そうだ。

「……おはようございます……あの、夏蓮さん」

夏蓮は陽を無視してキッチンへ向かう。グラスに水を注ぎ、鉢に盛った果物をつまんでいる。

「夏蓮さん？」

まるで陽の声が聴こえていないかの如くに振る舞っているが、非常にわざとらしい。

陽はしばらく耳たぶを引っ張っていたが、仕方なく、おずおずと言ってみる。

「えっと……夏蓮？」

途端に振り向き、一転して華やかな笑顔を浮かべた夏蓮が足早にやって来て、陽の座るソファの肘掛けに腰かけた。

「なあに？ 陽」

「や、その……あ、椅子どうぞ」

陽が立ち上がりかけたところを、片足を反対側の肘掛けに渡す。なんとも行儀の悪い通せんぼのせいで、陽は立ち上がれなくなってしまった。

「あ、これ借りちゃった。ありがと」

髪を留めていた黒い輪ゴムを外し、陽に手渡す。

「で、なあに？」

「あの……」

五島の目を気にしつつ、ちらりと上目遣いに夏蓮を見上げ、目が合って慌てて視線を逸らす。

「後で、ちょっとお話が……」

「そう？ もう仕事に出るから、夕方以降になるけどいいかしら？」

「はい、もちろん」

夏蓮は足を降ろして優雅に立ち上がり、テーブルの上のカフェオレボールを陽に押し付けた。

「じゃあ、また後で。さっさとそれ飲んで、お風呂入りなさい。髪、クシャクシャよ？」

手を伸ばして陽の髪をクシャクシャと乱し、肩にかけていた湿ったバスタオルを陽の頭にバサッと被せてから、夏蓮は弾む足取りで自室へと戻って行った。

† † †

膝まで丈のある真っ赤なカーディガンの裾を押さえながら、夏蓮が助手席に滑り込む。額にかけていたサングラスをかけ、シートベルトを締めた。

「ネットの方、どうだった？」

「上々だな。木暮さんも早速仕掛けてくれているし」

「あら、ありがたいわね」

「大月くんにとってもメリットが大きいからな。SNSやら匿名の掲示板で色々やってるみたいだ」

合流待ちで停まっている間に、ポケットからスマホを取り出し操作する。

「これ、見てみる。さっき見つけた」

手渡されたスマホの画面をちらりと見て、夏蓮は思わずサングラスを外した。

「ちょっと、何よコレ。面白いじゃないの！」

画面には、1年半ほどに掲載されたウェブ雑誌が表示されている。陽がほぼ無理矢理モデルをやらされた、例の雑誌だ。

「陽、顔が固まってる……」

画面をスクロールしながら、肩を震わせている。

「何でこんな面白い事言わないのよ、あの子ったら！……あ、インタビュー記事も発見」

「それもおそらく木暮さんの仕業だろうな」

「仕事が早いわね。ノリノリじゃない」

順調に車を走らせる中、夏蓮はしばらく黙って記事を読んでいた。

「ねえ、この記事読んだ？」

「いや、俺がさっき見た時は見つけれなかった。どんな内容だ？」

夏蓮が要約して話した内容は、なかなか波瀾万丈な話に思えた。

「……よく考えたら、私たち陽の事あまり知らないわね」

「いや、よく考えなくてもそうだろう……いいのか？」

五島は夏蓮のプライベートに口を挟むつもりは無かったが、一応マネージャーらしく聞いてみる。

「んー、まあ別に、経歴を見て人を好きになるわけじゃないから」

「確かに、お前は人の才能しか見てないからな」

「失礼ね。それだけじゃないわよ」

「あと、見てくれか」

「見てくれ、って。せめてルックスと言ってよ。それに、ルックスだってひとつの才能よ。でも、ちゃんと性格とかも……」

「性格、か……」

五島の記憶では、結構なクズも多かったように思うが、それ以上は言うまいと口を噤む。

「そういえばあのダンス、即興だよな？」

「もちろん」

「.....彼が踊れることは知ってたのか？」

「ぜーんぜん。まあ、予想はしてたけど。でも私が思ったよりもずっと対応出来て、ちょっと驚いたわ」

第一に姿勢が良いこと。背筋が伸びていて下半身が安定しており、身体の芯がブレない。

そして、審美眼があること。美しいバランスの取り方をよく理解している。

観察眼が鋭いこと。人の動きを立体的に見て、頭の中で瞬時に整理出来る。

「そういうのって、きっと絵を描いていて身につけたんでしょうけど.....あの子、基本的に地頭と運動神経が良いんだと思う」

「.....なるほど」

「踊れるかどうかって、ダンスやってる人間なら、相手の立ち居振る舞いを見ればある程度わかるものよ」

「最後の大技もか」

ふふっ、と夏蓮は笑った。

「あれはちょっと悪ノリし過ぎたわね.....でも、もし陽がキャッチに失敗したところで、私が無様に落ちこちたりすると思う？ 何がなんでもカッコ良く決めるわよ」

いかにも夏蓮らしい言い草に、五島の頬が緩む。

「それもそうか」

「そうよ」

夏蓮は外していたサングラスを再びかけた。

五島「大月くんもまだ辛い時期だろう。あまり無茶してやるなよ」

夏蓮「私の辞書に自重の文字は無くてよ」

五島「他にも色々と欠陥の多そうな辞書だな」

夏蓮「有り余る美貌と才能でカバーするから問題無いわ」

五島（……謙遜、謙虚、遠慮、慎み……）

恐縮しつつも興奮を抑えきれない声の陽から「美術館の閉館まで居たい」との電話が入り、夏蓮と五島は先に夕食を済ませていた。

「夜の一人歩き、大丈夫かしら」

「電話もあるし、ホテルの住所も知ってる。大丈夫だろう」

目をキラキラさせ大荷物を抱えた陽が帰ってきたのは、9時近かった。

「アルテとノイエ、両方見て来ました！ 凄かった！」

アルテ・ピナコテークと、ノイエ・ピナコテーク。

有名な美術館を一日かけて見て回り、陽は興奮した様子だ。午前中の不調は何処へやら、すっかり復活し頬をツヤツヤさせている。

日本とは段違いである絵との近さへの感動を語り、信じ難いスケールの大きさに首を振り、子供達がソファに寝そべって絵をスケッチしている自由さに感心し……と、喋り続ける。

スケッチブックを取り出し、絵の模写をいくつか披露したところで、ようやく少し落ち着いたらしい。

「とにかく、日本の美術館で見るのとは全然違うんです。すごく間近で見れて、ほんと凄かった！ 俺、あそこに住みたいぐらい」

夏蓮は微笑みながらその報告を聞き、ワインを傾けていた。

「……良かったわね。ところで陽、帰ってきて手は洗った？」

「あ、まだでした。ついでにこれ、仕舞ってきます」

数冊のスケッチブック、ミュージアムショップで買ったらしい本や土産物を抱え、いそいそと部屋に戻る陽を見送り、五島は冷蔵庫からビールを取り出しながら苦笑している。

「まるで子供の遠足だな」

「ほんとね。でも、ちょっと羨ましいわ。あんなに純粹に夢中になれるなんて」

「……確かにな」

陽の背中を見送っていた夏蓮は、優しい微笑みを浮かべていた。

「私も、なにか新しいダンス習いたくなっちゃった」

「まだ習ってないのあったか？」

「そうねえ……バリ舞踊とか？ ああ、エアリアルは上手く使えば舞台映えしそうよね」

「そうか、調べておく。だが、とりあえずは今年の公演に集中して欲しい」

「ええ、わかってる。私、もう部屋へ戻るわ。おやすみなさい」

空になったグラスを手に、夏蓮が立ち上がる。

陽の今夜の夕食らしきサンドウィッチのパックを袋から取り出してテーブルに並べ、ビニール袋をまとめながら、五島が頷いた。

「これを片付けたら、俺も部屋に戻る。おやすみ」

十 十 十

陽の部屋の窓が開く音がしたので、夏蓮はバルコニーへの窓を開け外へ出た。夏蓮の部屋の隣にある陽の部屋とは、バルコニーで繋がっている。

「あ、夏蓮さん。リビングに居なかったから、もう寝ちゃったかと思ってました」

「朝、話があるって言ってたから待ってたの。でも、まだ敬語で話すなら聞かないわ」

「ああ……」

陽は後頭部をワシャワシャと搔いた。

「夕食は済んだの？ 何か飲む？」

「はい、あ、うん。夕食は食べたけど、お酒はいらぬ。ちゃんと話したいから」

片手を手すりにかけて半ばこちらへ向き直った陽は、別の手で耳たぶを引っ張りながら言葉を探している。

空には濃い灰色の雲が流れてきて、レモン型の月を隠す。

夏蓮は白いシルクのガウンをかき合わせ、夜気を遮った。

「あの、昨日のこと。すみませんでした」

「……謝られるような覚えはないわ」

「でも」

「私、自分が嫌なことには指一本動かさないの。無理強いなんてしようものなら、即座にハイキックかまして両腕振り上げて肩関節外した挙げ句絞め落とすぐらい、朝飯前なんだけど？」

フッと笑って、陽は俯いた。また耳たぶを引っ張り始める。

「あ……うん。それは知ってる。五島さんに聞いたから。でも、そうじゃなくて」

俯いたまま、陽は真剣に言葉を選びながら話し出した。

「俺、夏蓮のこと好きだし、尊敬してるし、色んな経験させてもらって感謝してる。一緒にいられるのは凄く楽しい。でも、俺はまだ、恵流のこと忘れられない」

「だから？」

え、と陽は顔を上げた。

「わたし別に、恵流さんのことを忘れて欲しいなんて思ってないし、第一、本気で好きだったひとを、そんなすぐに忘れられるものじゃないでしょう？」

「でも、それじゃ……二股みたいになっちゃうし、夏蓮に失礼だと思う。えっと、今さらなのはわかってるけど」

.....ずいぶん真面目なのね。高校生みたい。

「私は気にしないって言ったら？」

陽は困った顔で黙ってしまった。

ああ全く、めんどくさいわね。

心の整理がつくまで待ってろって言うの？ この私に？ 私、待たせるのは平気だけど、待つのは嫌いなもの。

散々泳がせて、「ふさぎ込んでるみたいだから、気晴らしに」なんてちょっと強引な理由付けて海外までおびき出して、やっと手に入れたと思ったのに。

「私じゃ、不満？」

強い口調で言うと、陽は慌てて顔を上げた。

「まさか、そういうんじゃないです。でも、なんて言うか.....俺がこんなじゃ、駄目だと思う。俺は、夏蓮さんに相応しくないと思う」

.....わりと頑固なのね。

「私に相応しい相手かどうかは、私が決めるわ」

陽はちょっと驚いたみたいだ。一瞬ハッとして、視線を外した。

「怖いの？」

陽の動きが止まった。目の光りがスッと弱くなった。

.....手応えあり？ もうちょっと押してみましようか。

「何をそんなに怯えてるの？」

夏蓮さん、心の中のこととはいえ、結構酷い物言いです。

「何をそんなに怯えてるの？」

短い沈黙の後、陽はポツリと呟いた。

「そうか.....怖いのかもかもしれない。自分の中で恵流が薄れていっちゃうかもとか.....それと.....夏蓮さんに迷惑なんじゃないかとか、嫌われるんじゃないかとか.....」

.....そう。まあ確かに、今また傷ついたら、ダメージは相当大きくなるでしょうね。でも、それは陽の問題であって、私には関係ない。

って、正直に言うわけにもいかないわね、流石に。

灰色の雲が流れ、月が顔を覗かせ始めた。

.....空が私に味方してくれている。照明の効果なら知り尽くしてる。そして多分、陽の弱点も知ってる。

夏蓮はガウンをかき合わせていた手を離し、腕の力を抜いた。純白のシルクのガウンはサラリと開き、僅かに裾が揺れる。首筋からデコルテのラインが、月光を受けて真珠色に輝く。

陽は視覚への反応が極端に強い。

強烈なイメージと共にインパクトのある話を刷り込めば、それはきっと陽の心に刻み込まれるはず。

一生忘れられないくらい、深く刻んであげる。

「あのね、陽。何も怖がることなんて無いの。私達が今こうしてるのは、運命なんだから」

陽が顔を上げて、話を聞こうとしてる。

手すりに掴まるふりをして少し移動し、陽の視線を引きつける。よし、光の角度もバッチリ。そして私の背後には、隣のビルとの目隠しになっている樹々の、暗い緑色の葉が生い茂ってるはず。

この舞台の主役は、私。

「獅子座の私の守護神は、太陽と芸術の神アポロンなの。そしてあなたは、名前に太陽を持ってる。だから……あなたは私の守護神」

陽は僅かに小首を傾げた。目の光が少し強くなった。
……なんてわかりやすい人だろう。頭の中身が全部顔に出ちゃってる。

「牡牛座のあなたの守護神は、愛と美の女神ヴィーナス。ヴィーナスはアポロンは兄弟であり、恋人同士でもあるの。知ってる？」

陽は曖昧に頷いた。幻惑された様に、視線は夏蓮に絡めとられがちりと固定されたままだ。

「神話のエピソードは、絵の題材でよく出て来るから……」

……だと思った。知ってて言ってるのよ。

雲がさらに流れ、月が現れた。銀色の月光が射し、夏蓮のガウンに光を纏わせた。ナイスタイミング！

陽の目に、私がどんな風に見えるか、はっきりと把握出来る。
シルクのガウンとワンピースが受ける月光の効果で、私の姿は暗い背景から浮き上がり輝いて見えている。時おり吹くひんやりしたそよ風に、服の裾と髪が揺れてその輝きを強調すると同時に、さらに深く視線をたぐり寄せる。

「あなたは、私のアポロン。そして私は、あなたのヴィーナスになる」

風が吹いた。

鎖骨にかかっていた一筋の髪を後ろへ吹き払ってくれる。

ありがとう、西風の神ゼピュロス。ヴィーナスへの祝福としては、最高のタイミング。

陽が夢を見ているような表情で私を見つめている。瞳の煌めきが深くなり、唇が薄く開かれる。

「.....それって、単なる偶然じゃ.....」

掠れた声でかろうじて抵抗してるけど、無駄よ。強引にねじ伏せるから。

「偶然の連なりを、人は運命と呼ぶの。観念しなさい。こうなることは神話の時代から決まっていたんだから、あなたがどうこう言うことじゃないの」

陽がごちゃごちゃ言い出す前に終わらせてしまおう。ちょっと面倒になってきた。少し寒いし。

静かに一步、踏み出す。

月の光を掻き分けて歩いているみたいで、自分に酔いしれてしまいそう。

「もちろん、あなたがどうしても嫌っていうんなら、話は別だけど？」

口ではそう言ったけど、拒否なんてさせない。

優しく微笑む唇とは裏腹に、強い視線で陽の瞳を刺し貫く。

「嫌.....じゃ、ないです」

強い視線に捕われ、うわ言のように呟いた。

よし、勝った。

なんだか夢遊病者が喋ってるみたいな心許ない口調だけど、とにかく言わせた。

最終判断は相手に委ねるのが重要なもの。たとえ、ほぼ無理矢理であったとしても。

既に刺さっているクピドの矢に気付かない振りなんて、もうさせない。

絶対に抜けないぐらい、深く深く刺し直してあげる。トドメを刺すほどに、深く、ふかあく.....

さらに、もう一步。ゆっくりともう一步。
視線は一瞬たりとも外さない。

手を伸ばせば届く距離まで近づいた時、夏蓮は初めて気付いた。

視線が外せなくなっている。

こちらが射竦めていたつもりだったのに、いつの間にか、反対に陽の瞳から逃れられなくなっている。星空を映す冷たく清らかな湖のような瞳に、意識がすうっと吸込まれて行く。頭の芯が痺れる。

(ちょっと、何？ これ.....)

額が冷たくなり、夏蓮はほんの一瞬、本能的な恐怖を感じた。
無理矢理目を閉じ、陽の肩に額を押しつける。

(きっと気のせい。少し貧血気味なのかしら)

夏蓮は冷たくなった指先を、そっと陽の指に絡めた。

「少し冷えてきたわ。部屋に戻りましょう」

夏蓮さん、頼むから自重してください。書いてて変な汗が止まりません.....
そして陽くん。キミはもうちょっとしっかりしなさい.....

身支度をしてリビングへ行くと、部屋を出ようとしている陽にかち合った。

「あ、五島さん。おはようございます」

「おはよう。今日は早いな」

「ええ、明け方から絵を描いてたから。俺、ちょっと朝メシ取りに行ってきます」

陽は目を逸らすように会釈すると忙しく出て行ったが、五島がコーヒーを淹れ終わる頃、ビュッフェから調達してきたのであろう朝食をトレイに満載して戻って来た。

「今日は部屋で食べようと思って、貰ってきちゃいました。えっと、夏蓮さんには紅茶と、果物と……」

後半は独り言をブツブツと呟きながら、慣れない手つきでごちゃごちゃやっている。

遠くでドアを開く音が聞こえたが、陽は気付いていない。

足音こそ聴こえないが、夏蓮がこちらへ来る気配が……

と思う間もなく、夏蓮が廊下の端から信じられない距離を一足とびにすっ飛んで、陽に齧りついた。

いきなり夏蓮の全体重突撃を喰らった陽は、倒れかけてカウンターに肋骨を打ちつける。

ぐおっ！だか、ごふっ！だかわからない声を上げ、夏蓮の腕から逃れようとするが、夏蓮がカ一杯しがみついているので苦戦している。

「ちょ、夏蓮さん。おはようございます。苦しいから離して。一回離して」

「陽！朝からなんて素敵なプレゼント！ほんとに素敵！ありがとう！！」

朝からテンションマックスな夏蓮を、五島は横目で見遣った。

夏蓮は構わずにしがみつ続き、さらに足をバタバタさせて更なる負荷を与えている。あれ、わざとやってるな。

「死ぬ！死ぬ！やめて夏蓮さん、俺死んじゃうから！」

ようやく手を離し陽の背中から飛び降りた夏蓮は、コーヒーをカップに移している五島に向かい、まるで戦利品を掲げるかの如く得意気に、手にしていた紙を突き出した。

「これ！陽が描いてくれたの」

スケッチブックから破り取った紙には、暗い木の葉を背景に、月と星の光を浴びて立つ夏蓮が幻想的に描かれている。波打つ黒髪を銀色に輝かせ、今着ているのと同じ白いシルクのワンピースにガウンを羽織った姿だ。

五島は黙って頷き、コーヒーをひとくち啜った。

「どう？素敵でしょ？」

「ああ。よく描けている」

満足げに頷く夏蓮に、陽が首をさすりながら声をかける。

「夏蓮さん、いま部屋に紅茶持って行こうと思ってたところ」

その言葉に、夏蓮は風が起こるほどの速さで振り向いた。

「.....私、お部屋に戻るわ」

ガウンの裾を翻しふわふわと走って廊下の向こうに消えたかと思うと、「ちゃんと寝たふりするから」と大声で言い終えてドアを閉める音がした。

陽は突っ立って夏蓮の奇行を眺めていたが、すぐに気付いたらしい。

「.....五島さん、あれって『部屋に持って来い』って意味ですかね」

「だろうな」

「朝からMAXで元気ですね.....」

誰のせいだろうな……そう思いながらも、口には出さない。

「全く、朝っぱらから騒がしいヤツだ」

十 十 十

シーツを鼻先まで被って寝たふりをしながら、夏蓮は口元に笑みが浮かぶのを堪えることが出来ずにいた。

今朝目覚めると、ベッドの上にあったあの絵。

昨夜の刷り込みはかなり上手く効いた様だ。咄嗟のアドリブ力の高さに、我ながら惚れ惚れしてしまう。

反面、陽のことがちょっと心配だ。

初めはちょっと頑固かと思っていたけれど、口からデマカセのこじつけにあんなに容易く流されちゃうなんて。まあ、単に私の手管が素晴らしかっただけかもしれないけれど。

小さくノックの音がして、トレイを持った陽が顔を覗かせた。

「夏蓮さん、改めて、おはようございます」

夏蓮はシーツを顎先まで下げ、「敬語禁止」とだけ言うと、すぐにまた引き上げる。

「あ、そっか」

部屋に入ってドアを閉めると、陽は夏蓮の隣に斜めに腰掛け、膝の上にトレイを置いた。紅茶のカップと、不器用に盛られた果物が少々。

「おはよう、夏蓮」

差し伸べた夏蓮の両腕を引っ張って起こすと、マスカットを一粒つまみあげる。

「おはよう、陽」

陽はまるでご褒美の様に夏蓮にマスカットを食べさせると、その頭を撫でた。

.....何よ、陽のくせに。生意気だわ。
そう思いつつも、お腹の中がくすぐったい。

夏蓮もマスカットを一粒つまみ、陽の口に乱暴に挿し込んだ。
されるがままにマスカットを食べた陽は、美味しそうに「んふふー」と笑う。

.....何よ、可愛いじゃないの。

夏蓮は手を伸ばして陽のほっぺたをつねろうとしたが、陽はさっと両手を上げ、自分の両頬を押さえてガードした。

「暴力反対」

得意気にニカッと笑うのが、なんとも憎らしくて愛おしい。
なので、鼻を思いっきりつまんでやった。

「うあっ」

鼻を押さえて涙目になっている陽を横目で眺めながら、夏蓮は優雅に紅茶を口に運んだ。

夏蓮さん、寝起きで全カダッシュ出来るタイプの人ですね。
私は雪の積もった朝ぐらいしか、そんなこと出来ません.....

古城巡りは夏蓮と陽ふたりだけで行かせ、五島は再び道場に顔を出した。別に気を利かせたという訳ではなく、五島にとってもその方がありがたかったのだ。
城なんて、一度見れば充分だ。

存分に汗を流し、合間に仕事の電話をいくつか交わし、道着のままパソコンを操作する日本人が面白いと子供達に纏わりつかれながら部屋の隅でメールを処理するうち、あっという間に一日が終わってしまった。

旧友達と楽しく食事をして帰ると、陽が冷蔵庫を漁っていた。

「ああ、おかえりなさい」

「ただいま。城はどうだった？」

「キンキラで凄かったっす。なんかもう、お腹いっぱいって感じで」

陽は眉を下げて笑った。言いたいことはなんとなく理解出来る。

「でも、色々と参考になります。本物見るのって、やっぱり違いますね」

「そうだな」

「あ、これ。貰って行きます。夏蓮さんからの指令で」

陽は手にしたワインと、つまみのパックをいくつか示した。

「貸してみろ」

五島は手近の皿を取り出すとパックを開け、生ハムとオリーブ、チーズ、クラッカーを手早く盛りつけた。

「こうしとくと、さらに機嫌が良くなる」

「.....なるほど」

「あいつは人使いが荒いからな」

「ですね」

陽は声をひそめて笑った。

「でも、なんか夏蓮さんって思考回路とか言動が面白いです。日本人離れしているっていうか、とにかく周りにはあんまりいないタイプで。ちょっとキツイこと言われても、ああ、そっかーって」

「……あいつの両親祖父母は日本人だが、その前には外国の血が混じってる。そのずっと前にも、数世代ごとに一度、外の血が入ってきたそうだ」

「へえ、知りませんでした。でも、そっか。留学経験とか、そのせいなのかと思ってた」

「まあ、それもあるだろうが」

なるほどねえ、等と呟いているところを見ると、何か思うところがあったらしい。

「言葉がキツイのと我が侂は、単に性格だ。良くも悪くも、自分に正直でストレートだから」

「わかりやすく、いいですねえ」

ニコニコと頷いている。

日本の若者だと、夏蓮のような苛烈な女性に尻込みするものも多い。この男は、度量が大きいのか、それとも単に鈍いのか。

「扱いは面倒だが、上手く操縦出来れば猛獣使いの気分を味わえる」

「あはは、酷い。まあ、俺には無理っぽいです」

カウンターの引き出しからフォークを2本取り出し、トレイに乗せてやる。

「ほら、早く行った方が良い。機嫌を損ねると面倒だぞ」

「あ、五島さんも一緒に」

「遠慮しておく。今日は早く寝るよ」

陽は頷くと「じゃあ、お休みなさい」と言い残し、花瓶から花を一輪つまみ取って皿の横に飾った。

ふむ。なかなか筋がいいじゃないか。

夏蓮「誰が猛獣よ」

陽「夏蓮は女神様だもんねー」

夏蓮「.....そうよっ(//▽//)♪」

五島（なかなか筋がいいじゃないか.....）

急転直下

なんだかキラキラしたものが近づいて来るのを感じて振り向くと、視線の先に陽が居た。ポケットから携帯電話を取り出し、操作しながらこちらへ向かっている。

「陽！ こっちこっち！」

優馬は大きく手を振った。

顔を上げた陽は、優馬を見つけると大きく微笑んだ。ゆったりと歩いてくる。

「なんだお前。やたら目立ってるぞ。本物か？」

怪訝な顔で上唇をめくってくる優馬の手を払い除けもせず、陽は顔をしかめながらもされるがままになっている。

「うん、本物だ」

「なんだよ、それ」

苦笑しながら自分を見下ろし、背面をチェックしようとするくるくる回り始める。

「えっと、どっか変かな」

「お前、自分の尻尾追いかけてる犬か」

優馬は陽の臀部を軽く膝蹴りした。

「服は変じゃねえよ。なんか、全体的に垢抜けたっていうか……わかんないけど、妙に目立つわ」

「えー……やだな。服のせいかな？ これ、夏蓮さんが選んでくれて……買わされたんだ。『貧乏臭い服を着るな』って」

「うわぁ……苦労しただろうな。夏蓮さん」

「うん。なんかプリプリ怒ってた。あ、優馬さんによろしくって」

五島と夏蓮は、成田で乗り換えてまた別の仕事へ直行だ。

優馬に促され、ふたりはゆるりと出口へ向かう。

「そーいやお前、随分と派手にやらかしたな」

「ん？ あー、あれね。誰も俺なんて見てないだろうと思って油断してたら、バッチリ映されてて焦った。あれ、夏蓮さんの策略だから」

「だろうな。ネット上でちょっと話題になってるぞ。ま、呷ったのは俺なんだけど」

得意気に笑う優馬の臀部を、今度は陽が膝蹴りする。

「勝手に情報貼るし。コワイコワイ。ネット社会怖い」

「おかげでお前のブログもFBも、アクセス数爆上がりだ。感謝しろよ」

腹が減ったと騒ぐ陽に負け、車に戻る前にうどん屋へ立ち寄ることになった。

「うどんとカツ丼と牛丼と生姜焼き定食。あと、から揚げも食べたい」

「腹千切れて死ぬぞ」

結局うどんとカツ丼のセットに決めた陽は、出汁の香りに目を潤ませている。

「ヤバい。和食ヤバい。ドイツのメシも普通に美味かったけど、出汁の香り嗅いたら猛烈に食べたくなってさ、素通り出来なかった」

出汁をひとくち啜っては、ぎゅっと目を瞑る。

「ヤバい。美味しい。泣いちゃう」

「大袈裟だな」

優馬は笑いながら冷たい蕎麦を啜る。

昼食は済ませていたので空腹ではなかったが、まあ、おやつと思えばいいだろう。

優馬が半分も食べ終わらないうちに、陽はペロリと完食してしまった。

メニューを見ながら、「次はカレーうどん……やっぱから揚げも」と呟いている。

呆れる優馬を他所に、更にカレーうどんを追加した陽は、美味さに身悶えしながら時間をかけて食べ始める。

「腹、落ち着いてきたか」

「いや、食べ終わるのが勿体なくて」

.....もうわかったから、心ゆくまで味わえ。

ひとくち食べるごとに「はぁ.....」とため息をつく陽を放っておいて、優馬はタブレットを起動する。

「しかしこれ、何度見てもわからん。何がどうなったんだ」

眉を寄せて見入っているのは、クラブでの夏蓮のダンスシーンの最後。陽の肩の上でひらひらと回転して肩に座るところだ。

「うん。俺もわかんない。なんかトーン、クルクルクル、ポン、って感じでさ、気付いたらそうなってた」

「.....お前ね、ポキャブラリーを何とかしろ」

「いや、だってさ。ほんとにそうとしか言えないって。いきなりだし、あっという間だったし。『ほえ?』ってなってるうちに終わった。その動画だと普通に笑ってるみたいに見えるかもしれないけどさ、俺びっくりしすぎて内心ポッカーンだったもん」

ほうじ茶をひとくち飲んで、またため息。

「.....舞台に立つ人っていうのは、凄いな。退場まで芝居がかってる」

「だね。こっちはもう、笑うしか無いよね。外国の血のせいもあるのかな。解ってるだけでも、スカンジナビアの辺りとかスペインとか.....数世代ごとにちょびっとずつ混じってるらしいよ」

「ああ、そんな感じあるよな.....やっぱ、純日本人とは違うもん？」

「んー、性格はちょっと強烈だけど、面白いよ。すごい突飛なこと言い出したりするし。でも、人種云々がどうとかはわかんないな。お姉さんふたりは純和風らしくって、自分でも『一族の

跳ねっ返り』とか言ってたし」

ようやく食べ終え、名残惜しそうに残ったスープを飲み干すのを見届けて、優馬は切り出した。

「よし、腹ごしらえも終わったところで、ちょっと話がある。落ち着いて聞いてくれ。実は、天本社長が倒れた」

駐車場へ向かって走る陽を追いかけながら、優馬は大声で陽を引き止める。

「待て、待てって。大丈夫だから！」

すれ違う人々が振り返る中、スーツケースを転がすのも焦れったく重いスーツケースを抱えて走っていた陽が、急に立ち止まった。かと思うと、脇腹を押さえてしゃがみ込んだ。

「……腹いてえ……」

「あれだけ食ってすぐに全力疾走したら、そうなるに決まってるだろ」

思いっきり顔をしかめて脇腹を掴んでいる陽に、さっきの店の釣り銭を差し出すと、陽は歯を食いしばりながら首を振った。

「……駐車場代と高速代にして下さい。わざわざ迎えに来てもらっちゃったし」

「そうか。んじゃ、遠慮なくもらっとく」

優馬は数枚の札と小銭を仕舞った。

「どうだ？ 歩けそうか？」

「うん……なんとか」

優馬はスーツケースを取り上げ、引いて歩き出す。前屈みで脇腹を押さえたまま反対側の肩へ掴まり、ヨロヨロとついて来る陽を、すれ違う人々は心配そうに振り返っている。

「だからな、倒れたっつっても、命に別状は無いんだ。腰を打って病院行っただけで検査したら、ちょっとした脳梗塞が見つかったっただけ」

「……うん。でも、脳梗塞って怖いイメージがあったからさ」

天本良治が倒れたのは、陽がドイツへ旅立った翌日だった。

ズキン、と頭痛がして倒れ込んだのと腰が嫌な音を立てたのは、ほぼ同時だったという。

幸い仕事で周囲に人がいたので、竹内の運転ですぐに病院へ向かうことが出来た。今は脳梗塞の手術が必要か、入院しながら経過観察中の身だ。

せっかくの旅行なのだから、陽には帰るまで黙っておけ、というのは天本社長本人のお達しなのだという。

「もっと早く言ってよ。のんびりうどん食ってる場合じゃないじゃん」

「空腹の時に悪いニュースは聞くもんじゃない。それに、10分20分早く着いたところで、そんな変わらんだろ」

「それはそうだけどさあ」

ふたりはようやく車に乗り込んだ。

「仕事は？」

「竹内さんと村本さんで問題なく回してるけど、新規の受注は断ってるってさ」

「そっか」

天本の容態について立て続けに繰り返す陽の質問に、葉からの受け売りで答えながら、優馬は病院へと車を走らせた。

優馬「で、俺への土産、何？」

陽「今それ聞く？それどころじゃないだろ……」

優馬「いいじゃん。ねえ、なにになん？（ワクワク）」

陽「……葉さんにはマイセンのカップ。優侍に木製のおもちゃとテディベア」

優馬「おお、ありがとう。俺は？」

陽「優馬さんは赤ちゃんと一緒におもちゃで遊べばいいよ」

優馬「……ちょっと、車止めるわ。オマエ、降りろ」

陽「嘘だよ。チョコの詰め合わせとお菓子セット」

優馬「やった—————！ヾ(@^▽^@)ノ」

病室の質素なパイプ椅子の上で青い顔で黙り込む陽に、天本はぎこちなく右手を動かして見せ、励ますように声をかける。

「心配するな。ほら、ちゃんと動くだろう？日常生活には、さほど支障無いんだ」

天本は嘘をついた。腕はなんとか動くものの、指先はゴワゴワとして動かし難く、右足はほぼ動かないため松葉杖か車椅子が必要になるだろう。

陽の背後に立つ優馬は肩に手を乗せ、「ほら、しっかりしろ」とでも言うように強く握った。陽はこわばった表情で、なんとか頷く。

「だが、工房の仕事をするにはかなりのリハビリが必要で、しばらくは無理なんだ。でも、お前達の就職の世話はこっちでちゃんとやるから」

自分の両膝を握りしめ、陽はまた頷いた。

手術と入院にかかる費用を工面するため、工房を人手に渡すしか無いのだと言う。以前よりとある駐車場管理会社があの土地を欲しがっていて、かなり高額で買い取るという話が出ており、そうすれば、入院費用も賄え、工員達の退職金に色をつけて渡してやれると言うのだ。

「村本は早期退職して嫁さんとふたり地元に移住すると言ってるし、竹内は腕もいいし紹介先はいくつもある。で、お前だ」

天本は努めて明るい声で話すが、陽は深刻な顔で俯いたまま目を合わせようとしない。

「お前はまだ半人前ではあるが、仕事が丁寧だし覚えも早い。仕事に対する姿勢も真面目で意欲もあり、欲しがるところは多いだろうと思う。俺も、胸を張って折り紙付きで送り出せる。けどな、陽」

優馬に視線を送ると、しっかりと頷き返された。確信を持って、天本は声に力を入れる。

「お前、独立しないか？」

天本の言葉にポカンとした表情で顔を上げ、目を見開いたまま固まっていた陽が、ゆるゆると首を振った。

「いや、ムリムリムリムリ。村本さんや竹内さんならともかく、俺なんてまだ、全然……」

茫然としている陽を遮る。

「そうじゃなくて。絵の方で、独立するんだ」

狼狽しきった陽を落ち着かせるのには、しばしの時間を要した。

陽が副収入の相談をしていた会計士からのデータや、ここ数ヶ月の絵の売上などを丁寧に説明し、充分やっていける可能性が高いことを言い聞かせる。

だが、陽はなかなか納得しない。

独立そのものの不安もあるが、今の環境が無くなる恐怖心も少なからずある筈だ。

なんと言っても父親が居なくなって以来、工房の皆が家族のようなものだったのだから。

「確かに最近、絵は売れてます。でも、たまたま今、運がいいだけかもしれない。この先どうなるかなんて」

「そこで、俺の登場だ」

優馬が陽と天本の間にはだかり、陽にピースサインを突きつける。

「俺がお前をプロデュースする。お前の絵を売りまくり、仕事を取りまくってやる」

茫然と優馬を見上げていた陽が、ゆらりと立ち上がった。

「……何言ってんだよ。頭おかしくなったのか？」

「至って明晰です。俺、出来るオトコ」

ピースサインをハサミのようにチョキチョキさせながら、優馬はニカッと笑ってみせる。

「……仕事あんだろ」

「辞めます。ってか元々辞めるつもりだったし〜」

まだチヨキチヨキしている優馬の手を、陽が振り払う。

「ふざけんな！こんな時に何わけのわかんないこと言ってんだよ！家族が居んだろ！栞さんどうすんだよ！優侍は！」

「もちろん、俺が養う。当たり前だろ。だからお前は、死ぬ気で絵を描け」

陽は乱暴に音をたて、再び椅子に腰を降ろした。ため息をつき、何度も両手で額を擦る。

「……何言ってんだよ……まじで、わけわかんね。お前、馬鹿だろ！なあ、馬鹿だろ……」
「もう一度言いますが、至って明晰です。俺の営業力をナメてもらっちゃ困る。ちゃんと考えて、勝算があって言ってる」

両手で頭を抱えて動かなくなった陽に代わり、天本が興味を引かれたらしい。

「勝算？何か具体的な案があるのかい？」

「もちろん」

優馬は自信ありげに微笑んだ。

「購入者特典として、絵の制作過程の動画をプレゼントお！」

頭を抱えたまま、陽はため息とともに言葉を吐き出す。

「……はああ？何言ってんの？そんなもん、誰が欲しがるんだよ」

「うん。それ、いいかもしれん」

顔を上げ天本を振り返った陽は、凄まじいしかめ面をしていた。

「良い案だよ！木暮くん」

「ちょ、オヤジさんまで何言ってんすか！絵なんて完成してなんぼでしょ？俺ならそんなもん要らない。興味無い」

「そうか？ 陽。お前、ダ・ヴィンチの制作過程、見たくないか？ ボッティチェリは？ ルノワールは？ シャガールは？ ええと、デューラー？ あとは、ルーベンス、フェルメール、モネ、クリムト……それから……」

「それは……見たいけど……でも俺は、ダ・ヴィンチじゃないし」

「いやいや、陽」

天本も負けじと割って入る。

「建て込みに行った時のお客さん、憶えてるだろ？ 嬉しそうに作業を見守る人がほとんどだったじゃないか。目を輝かせて、何度も何度も様子を見に来てたろ？」

「それは……それは、自分ちや自分の店の家具だし。楽しみにもするだろうけど」

殊更に大きく頷き、天本はこわばった手で人差し指を立てた。

「そうだ。お前の絵を気に入って買うお客さんにとっては、お前の絵は世界にただひとつの宝物だ。たとえ無名の画家の絵でも、それが出来るまでを見られるなんて、嬉しいと思うよ」

「いやー！ 天本社長。俺は、陽が歴史に名を残す画家に成ると思ってます。今は無名でも、絶対に有名になる」

優馬は天本の隣に歩み寄り、一緒になって陽に向かって指を振り立てる。

「……お前が有名になれば、絵の価値が上がる。そう期待して、もしくはただただ嬉しくて、その映像をあちこちにアップする客も居るだろうな。ということは、だ。客が勝手に販促までしてくれるってことだ」

「何を……寝ぼけたこと……そんな都合良く……」

半ばぐったりとした陽が呟くのを他所に、ふたりはやけに盛り上がっている。

「おお！ そうか！ 木暮くん、頭良いねえ」

「でしょー？」

「ちょっと、ふたりとも。俺が独立する前提で話すの、やめてもらっていいですか？」

当の本人からの抗議を聞き流し、優馬と天本は独立後の経営方針について勝手に意見を交わし始めていた。

天本「ところで陽、ドイツ土産は？」

陽「.....ドイツのビールです」

天本「えー、退院するまで飲めないじゃないか」

陽「だって、入院したの知らなかったし！内緒にするからじゃん！(#`ε´#)」

助手席の陽はむっつりと押し黙っている。

病院を出るときにはまだ呆然とした様子だったが、時間が経つにつれ腹が立ってきたらしい。

優馬はさして気にせず車を走らせていたが、しばらく走ったところで口を開いた。

「なーんだよ。まだ怒ってんのか？」

「当たり前だろ。あんな風に、騙し討ちみたいにさあ」

「騙し討ちなんて、人聞きの悪い。当事者が揃ったところで話すのが一番だろ」

「俺の気持ちも考えてみてよ！旅行から帰ってきていきなりオヤジさん倒れたって聞いて、拳げ句いきなり独立しろって、何だよ。頭が追いつかねえよ」

苛立った声の陽を、優馬は横目でちらりと窺った。本気でへそを曲げているらしい。

「じゃあ、何日後なら良かったんだよ。オヤジさんが倒れたことは、どっちみち今日知ることになったろ。あれか、一旦家に帰ってシャワーの一つでも浴びてから聞いたかったってか。ふざけんな、俺だって仕事抜けて来てんだよ」

「それは……悪かったと思うよ。迷惑かけて」

まだ口を尖らせてはいるが、少しシュンとして視線を落とした。

「迷惑じゃねえ。俺が勝手にやったことだ。まあさすがにな、帰ってきていきなりこんな話になって、追いつけないってのもわかるよ。でもさ、俺が自分の時間を使ったのも事実だ。だから、こういう時は……？」

あまり言いたくなさそうではあるが、陽は小さな声で言った。

「ん……ありがと」

こういう素直さが、陽の美点だ。優馬は思わず微笑んでしまう。

「よし。じゃ、お前はキリキリ絵を描け。後のことは俺に任しとけ」

「それとこれとは」

「まーだグズグズ言ってんのか、うるせえな。お前は黙って好きな様に好きなだけ描いてりゃいいんだよ！今までだってそうだったろ？これからはもっと、大掛かりに宣伝してくれただけだ」

陽は絶句し、胸の前でシートベルトをしっかりと握りしめた。
時折陽の様子を見遣りながら、優馬も黙って運転を続ける。

やがて、陽がポツリと呟いた。

「……俺、自信無いよ」

「俺はある」

「だってさ」

助手席で身を振り優馬に向き直った陽の声には、不安が満ちていた。

「俺はいいよ。でも、優馬さんと栞さん、まだちっちゃい優侍と、これから増えるかもしれない家族の生活が、俺ひとりの肩にかかるんだよ!? そんなの無理だよ。責任持てないよ」

「自惚れんな、バーカ」

優馬はほとんど半泣きの陽を睨み降ろすと、車線変更し、ゆっくりと車を路肩に停めた。

「だれがお前におぶさるっつったよ。お前と！俺で！やるんだよ！何度言わせんだ。お前が描いて！俺が、売るのが！」

「……何でそんなに自信満々なんだよ。何で、そんなに……」

優馬の強い口調に、陽は少し涙声になって俯いた。

「おい、こっち見ろ。陽」

俯いたまま動かない陽の頭を優馬が上から掴み、強引にこちらを向かせた。
陽は唇を噛み締めて優馬を睨みつける。

「前に言ったこと、忘れたか？俺は、お前の絵が、好きなんだよ。だから、お前の絵を世界中の

人に見て欲しい。スゲエだろ！って見せびらかしたい」

「……憶えてる、けど……」

前に、電話で言われたことがあった。モデルの仕事をやりたくないとおねていた時のことだ。陽ははっきりと憶えていた。

「俺は、お前の絵が好きだから、皆に見て欲しい。『こんなすげえ絵を描くヤツがいるんだぜ！』って、言いふらしたい。で、お前の絵を見てすげえって言ってる奴らに、『コイツはこれからもっと凄い絵を描くんだぜ！お前ら見てろよ！！』って、世界中に大声で言って廻るんだよ」

「なあ、陽。俺が何故、編集の仕事してると思う？俺は、そういうのが好きなんだよ。性分なんだ。俺自身には特別な才能は無いからさ。そのかわり、知られていない才能を引っ張り上げて、広めて、それが世に認められるのを見たいんだ。だって、せっかくの才能がもったいないじゃんか。いいか、お前には才能がある。俺が言うんだから間違い無い」

「……いいか、陽。お前には才能がある。俺が言うんだから、間違い無い。俺が保証する。自信を持って。お前には、才能がある」

陽の頭を掴んだまま、言葉を刻み付けるように、強く繰り返す。
優馬を睨みつける陽の目が、僅かに潤んだ。

「それ……昔、親父も同じこと言ってた。俺が子供の頃」

涙を堪えて、唇をひき結ぶ。
優馬はそんな陽の頭を乱暴に振り回すと、ぐいと突き放した。

「男がメソメソすんじゃねえ」

「……してないし」
袖口で急いで目元を拭う。

小さく涙をすすると、陽はハッとして再び優馬に向き直る。

「そうだ、栞さん！栞さんには話したのかよ」

「当たり前だろ、生活かかってんだから。快諾だよ、快諾」

「……うっそだぁ」

思っきり疑わし気な声に、優馬はスマホを取り出した。

「電話してみろ」

「あ、俺、自分のでかける。番号知ってるもん」

陽は半信半疑の表情のまま、ゴソゴソと自分の携帯を取り出した。

スパルタン優馬、再び。この人わりとアツイところあるみたいですね。

数回のコールの後、栞が電話に出た。

「陽くん、おかえりー」

あっけらかんとした声に、陽は少し怯む。

「……ただいま」

「ドイツ、どうだった？ 今は良い季節でしょう？ ビールいっぱい飲んだ？」

いつもの通り、明るく朗らかな声だ。

「はい、おかげさまで……って、そうじゃなくて！ あの、仕事の話なんですけど」

「ああ、聞いた聞いたー」

「あの……俺が独立して、優馬さんが、その……」

「うんうん。いいと思うよ？」

慌てる陽を、優馬がニヤニヤしながら眺めている。

「そんな……そんな、ポップな感じでいいんっすか」

あはは、と楽しそうに笑う栞の声が、優馬の耳にも届いた。

電話越しで聞いても、良い響きだ。幸せな気分になる。

「あのさ、陽くん。優馬、『任しとけ』って言ってなかった？」

「……言っていました」

「なら、任せちゃって大丈夫よ。そういう人なの」

「え……」

陽は茫然と、優馬を見つめた。

優馬は片方の眉をヒョイと上げ、得意気にニヤリと笑ってみせる。

「……あのね、陽くん」

葉が少し声のトーンを落とした。聞き漏らさないよう、陽は耳を澄ませる。

「優馬の育ってきた環境、知ってる？……そう。あのね、年の離れた双子の兄と姉がいるの。おまけに、優馬は子供の頃喘息を患っていてね、中学高校と父方の田舎で育ったの」

「ああ……岡山の？」

「そうそう！だからね、こっちの家族の中で、ちょっとした疎外感？みたいなものを感じてるんだと思う。決して家族仲が悪い訳じゃないのよ？でも、思春期にずっと別々に過ごしてきたわけで……」

葉は小さなため息をついた。

「そんなこんなで、優馬は君のこと弟みたいに思ってるんじゃないかな。きっと、世話焼きたくて仕方ないのよ」

受話器越しに、うふふ、と忍び笑いが陽の耳に潜り込む。

「元々、お節介なくらい世話焼きな人だしね。だから悪いけど、付き合ってあげてくれない？あとね、私も結構稼いでるの。育休開けたら復職するし、いざとなったらなんとか子供2、3人養えるぐらいにはね。それに、お尻蹴飛ばしてでも優馬を、それこそ馬車馬の如く働かせるから、こっちの家計は心配しないで」

「それって……馬車、ゆうま……ってこと？」

「あはは、そうそう。それ、いいわね」

「なんかー、酷いこと言われてる気がするー」

優馬が棒読みで茶々を入れる。

「でも俺、サラブレッドだからな。その辺の馬と一緒にしてもらっちゃ困る」

「え。馬車馬は否定しないんだ」

「いいの。葉と子供専用の馬車だから」

「俺は？」

「お前は自力で並走な」

「……」

一旦優馬を無視することにして、クスクス笑っている菜との電話に戻る。

「……あの、でも」

「それにね、優馬、今の仕事辞めたがってたの。編集なんかじゃなくて詐欺の片棒担いでるみたいで、嫌だって。前から転職するつもりで動いてたのよ。だから、優馬にとってもいいタイミングでもあるのよね」

「……はあ……」

早口でもないのに流れるような菜の口上と、妙に説得力のある口調に気圧され、反論する隙が無い。

「そういうことだから、もし迷惑でさえなければ、よろしく頼むわね。」

「……はあ……あ、いや迷惑だなんて。こちらこそ、よろしく願います」

あっさりと通話を切り上げられてしまった陽は、暗くなった画面を茫然と見つめた。

「……よろしくお願いしちゃったな」

優馬が盛大にニヤニヤしている。

「あ……つい、つられて言っちゃった……」

優馬は思わずハンドルに突っ伏し、笑い出した。誤って短くクラクションを鳴らしてしまい慌てて身を起したが、まだ笑っている。

「つられてやんの。あんなにグズグズ言ってたくせに、ばっかかえ」

「うるさいな、笑うなよ」

「笑うなって方が無理だろ。あー、腹いてえ。腹筋割れるわ」

「……馬鹿なのは、あんた達だよ。夫婦揃って……」

しばらく腹を抱えてヒクヒクしていた優馬だったが、なんとか持ち直した。大きく息を吐き、エンジンをかける。

「さて。なし崩し的ではありますが、一応独立決定な。まあ、俺を信じられなくてもさ、栞を信じる。アイツが大丈夫って言うなら問題無い」

陽はそっぽを向いたまま、コクリと頷いた。

「よし。まあ、今日明日に工房が無くなるってわけじゃなし、気楽にやろうや」

「……うん」

陽は背もたれに体重をあずけ、目を閉じた。

カチカチとウインカーの音がして、車が流れに乗るのを感じながら、大きくため息をつく。

「……疲れたか？」

「うん。ちょっとね」

優馬は少しだけ窓を開けた。ぬるい風が通り抜ける。

「なーんかさあ……」

目を閉じたまま、陽は両手を重ねて額に乗せ、肩の力を抜いた。

「なんか俺、最近すごい周りに流されて……いや、翻弄されて生きてる気がする」

「人生が大きく動くときっつーのは、大抵そんなもんだ。一気にガガッとくるもんなんだよ」

「そうなのかな。でも……なんつーか、あちこちで良いように丸め込まれ続けてる気がするんだよね」

ハハッ、と短く息を吐き、優馬は笑った。

「いいじゃん、丸め込まれ上手な人生。それで上手く転がるなら、万々歳だ」

「夏蓮さんにも、勢いに吞まれて押し切られた感が否めないし」

「ん？ また絵の依頼か？」

「いや、付き合うことになった……って、さっき言わなかったっけ？」

優馬が大きく咽せた。一瞬、ハンドルがふらついた。

何度か激しく咳き込んで、優馬はなんとか声を取り戻す。

「まじか……急展開だな。何でまた」

「俺も不思議でさあ、俺のどこがいいのかって聞いたんだ」

「お前それ、よく聞いたな」

「だって、夏蓮さんだよ？ 俺、ほんとにわかんなかったんだもん。そしたら、『絵の才能とルックス』って即答されてさ」

「……お前、なんかムカつくな」

「俺が言ったんじゃないし。でもそれ聞いたら、ちょっと気が楽になって」

「……ちょっと、舌打ちしていいですか？」

陽がシートを少し倒した。口調が段々とぼんやりしてくる。

「夏蓮さんも優馬さんも、オヤジさんも……みんな言ってくれるから。俺、もう少し自分を信じてみる。才能、あるかもしれないって、出来るかもしれないって、思ってみるよ……」

「おう。自信持て」

優馬が助手席を見遣ると、陽があっという間に穏やかな寝息をたて始めている。

(寝んのかよ！自由か！)

優馬は窓を閉め、エアコンをかけた。

(まあ、キツイ一日だったろうし、仕方ないか……)

丸めてドアポケットに突っ込んであるブランケットを引っ張り出した。片手で器用に広げ、陽にかけてやる。

「俺、頑張るから……すごい絵、いっぱい描くから……」

眠りに落ちる寸前なのか、既に寝言なのか。陽はトロトロと呟いた。

優馬さん、やけにノリノリで動画拡散してると思ったら、こういう事でした。

譲れない条件

独立を決めるにあたり、陽はひとつだけ、条件を出した。

あの場所を離れない。それだけだ。

今住んでいる木材倉庫ごと、陽が天本から借り上げ、賃料を支払う。

そうすればすべての土地を手放す必要が無くなるし、僅かながら月々の収入が見込める。

幸い、工房の土地だけ売った金額で手術や諸々に必要な経費は捻出出来る計算だった。土地の買主にも了承してもらえた。

その後の生活は、保険金や静江の副業、そして陽からの家賃収入で賄うことが出来る。

「オヤジさんが復帰したらさ、前よりだいぶちっちゃくなっちゃうけど、あの倉庫で工房を復活させるんだ。で、頑張ってまた土地を買い戻して、元通りの工房にする」

陽がそう宣言した時、天本は男泣きに泣いた。もちろん静江も隣で大泣きだ。

あの工房は、ほぼ天涯孤独と言ってもいいであろう陽にとっても大切な「家」だが、もちろん天本夫妻にとっても二人一緒に築き上げてきた大切な場所なのだ。

工房を大きくすることや従業員たちへ十分に給与を支払うため、自分たちの生活や保険加入等は最小限に抑えてきた。その結果、結局工房を手放さざるを得なくなってしまった不甲斐なさに密かに打ちひしがれていた

天本にとって、陽の言葉は救いとなるものだった。

元通りの工房。

たとえそれが叶わなかったとしても、陽のその気持ちだけで充分だ。そんな風に思っただけの関係性を築けたことが、何より嬉しかった。

また、倉庫の賃料の件でも、陽は頑なだった。

今までどおり、社宅扱いの家賃でいいと言うのに、階下の倉庫を含めた市場の相場額を支払うと

言い張り譲らない。

「一番根っこのところでいつまでも甘えてたんじゃ、独立したなんて言えない。ちゃんと自分の足で立った上で、あの場所は俺が守ります。いつか全部取り戻せるように、頑張ります。俺に、親孝行させて下さい」

珍しく一步も退かぬ陽に頭を下げられ、天本は自由にならない右腕で陽の頭を抱き寄せた。

なんと逞しく、立派な青年になったことか。

高校の制服姿で工房の入り口に立っていた、あの繊細そうな青年が。

将来への不安や現状への不満を一切口にすること無く、しかしどこか危うく張り詰めた表情で立ち尽くしていた、あの陽が。

手術を無事に終え、何年かかってもリハビリをやり遂げ、あそこに戻ろう。そう心に誓う。

その頃にはもう、陽は有名な画家になっているかもしれない。

そうなっても、この子は俺の可愛い弟子だ。いや、立派な息子だ。

頭の上にポタポタと涙が落ちるのにも構わず、陽は不自然な体勢のまま天本の胸に頭を付け、じっと動かずにいる。

やがて、陽の右手がそっと天本の右手を包んだ。徐々に力が加わりぎゅっと強く握られたとき、動かない右手に、陽の手の温かさを感じた。

陽「俺が描いて、優馬さんが売る！栞さんも賛成した！だから大丈夫！

(^_^)v」

天本（陽が言うと、何故かちょっと心配だ……）

優馬「会計士の吉田さんとも十分に相談済みです。ご心配無く」

それぞれの理由

17時をまわり、優馬が差し入れを持ってやって来た。

「あれ、藤枝さんは？ もう帰ったのか？」

「うん。ついさっきね」

イーゼルに立てかけられたスケッチブックから目を離さずに、陽は答えた。

傍の作業台には付箋を貼られたスケッチブックが何冊も積まれている。

朝いちで訪れた藤枝が、数十冊ものスケッチブックを全て改め、めぼしい作品をチェックしたものだ。

陽には冷えた缶ビールを渡し、自分は買ってきたカップアイスの蓋を開ける。

この後、また会社に戻らなければならないので、ビールは飲めない。

「それは？ああ、恵流ちゃん？」

イーゼルに立てられたスケッチブックの絵は、あの夏の日の恵流だった。

淡い紫色の浴衣を纏い、月を見上げる恵流の後ろ姿。

「これとこれ、大きいサイズの油彩で描けて」

次のページを開きながら、妙にポキポキした口調で言う。

「ほおん。いい絵だもんな。で、いくらで？」

「80か100号で、1点3~40万ぐらいって。もちろん、出来によるけど」

「.....でかいな」

「これ描いて恵流に見せた時、すごく喜んでくれたんだ.....恥ずかしいとか言いながらも、何枚も写メ撮ったりしてさ。それもあって余計に、『渾身の一枚を描こう』なんて意気込んじゃったんだけどね」

陽はビールを一気に半分ほど飲み干すと、物置へ向かった。戻って来たときには、恵流の絵を手

にしていた。恵流の死を知った日に描いた、あの絵だ。

「この絵、恵流のご両親に渡して来る。じゃなきゃ、これを描けない」

スケッチブックにちらりと目を向ける。

「後ろ姿だけど、モデルは恵流だから。作品にするなら、ちゃんにご両親の許可を貰ってからじゃないと、描けない。描きたくない」

.....黙ってりゃわからないだろうに。こういう律儀なところ、実に陽らしい。

「おう。俺も一緒に行くか？」

「ううん。ひとりで大丈夫」
陽はきっぱりと首を振った。

しばらくの間、じっと絵を見つめていた陽が、やがてポツリと呟いた。

「.....親父も、どっかで死んでんのかな」

まるで、うっかり言葉がこぼれ落ちたみたいだった。

陽は自分が落とした言葉に狼狽したように口元を拭い、「あ、いや.....」と落ち着き無く両手で腰の辺りを擦っている。

(恵流ちゃんみたいに、か.....)

陽が考えていることは察したが、優馬は言葉に詰まってしまった。こういう時、何と返せばいいのだろう。

思わず、アイスのスプーンを噛みしめる。安っぽい木の香りが口中に広がった。

「.....あー、あれだ.....もしそうなら、連絡が来るだろ。警察やなんかから。搜索願も出してる訳だし」

……つい焦ってしまい、こんな即物的な返し方をしてしまう。もうちょっとこう、何かあるだろう！俺！

が、陽は救われたような表情で何度か頷いた。

「ああ……うん。そうだよ。なんか俺、変なこと言ったね」

「おう、変だ。変だぞ。ほら、アホなこと言ってないで、早く渡して来い」

自らの失言を取り消すかのように慌ただしく支度を済ませ、陽はバタバタと部屋を出て行った。

† † †

玄関で陽の背中を見送り、優馬はスケッチブックの前に戻った。

自分の病のことを一切知らせずに身を引いた、清水恵流という女性。

その選択が正しかったのかどうか、優馬には判断出来ない。

陽がそのことで酷く傷ついたのは事実だ。だが、最愛の恋人に直面するのもまた、辛いことだ。

葉によれば、自分の死期を近い人に隠したまま闘病する人は少なくないのだと言う。

きっと、不必要に心配をかけたり悲しませたりしたくないのだろう。

心配されたからといって病気が治るわけでもなし、どうせ自分が死んだら悲しませてしまうことになるのだから。ならば報せずに、今まで通りに接して欲しい。そう望む人は、案外多いのだと。

「恵流ちゃんね、自分の希望を通すのと同時に、陽くんのことを守ったんだと思う。誰だって、愛する者を悲しませたくないもの。一時的に憎まれ役になってでも、陽くんの心の負担を少しで

も軽くしたかったのよ」

葉の言ったことは、きっと真実だろう。

いや、恵流ちゃん本人の気持ちはそんな風に短く言い表せるものではないだろうから、真実の一部だろう。

もしこれを陽に言ったら、陽の心は軽くなるだろうか。

恵流ちゃんに対しても、もしかしたら、勝手に出て行った父親への思いも？

陽を捨てて出て行ったのではなく、何か理由があってのこと、陽のためを思っていることかもしれないと……いや、そう思ったところ何になる？結局、出て行った理由が判明しなきゃ、意味はないのだ……

俺は、何と言えれば良かったんだろう。葉なら、陽に何と言葉をかけただろう。

肝心な時に思いやりのある言葉を返せなかったことを悔やみながら、優馬は恵流の絵の前でいつまでもアイスのスプーンを齧っていた。

葉「どっちにしたって悲しいんだもの。何が最善だったかなんて、わからないわよ」

優馬「そうだよな……ホールケーキと数種類のショートケーキ、チョコの詰め合わせ。どれ選んでも美味しいもんな。美味しさの質が変わるだけなんだよな……」

葉（その例え、どうなのかしら……）

世間はお盆休みも終わり近く、夕暮れに近い倉庫の周囲はとても静かだ。

陽はひとり、ガランとした工房で作業をしていた。

資材倉庫をギャラリーに作り替える為、自分の部屋や物置に積まれていた棚を運び込み加工しているのだ。

倉庫の中の木材は既に全て運び出され、壁には石膏ボードが貼られている。仕上げに貼るクロスも今日届くはずだ。

作業の手を止め、陽は顎から滴り落ちる汗を拭いた。

壁際に置いたスチール椅子に腰掛けペットボトルの生ぬるい水を飲むと、大きく息をつく。改めて部屋の中をぐるりと見渡した。

見慣れた倉庫はほぼがらんと、やけに広く感じられる。

陽は少しだけ水を含み、水分を浸透させるべく口内に留めた。

そのまま目を伏せ、先日の最後の打ち上げを思い返す。

8月初旬のある日、天本製作所の最後の仕事が終わった。納品を済ませ工房に戻って来た3人を、静江が笑顔で迎える。

不要になった機材が次々に搬出され、だいぶ淋しくなってしまった工房で、最後の打ち上げが行われた。

陽がドイツから持ち帰った5リットル樽のビールのおかげか、打ち上げは湿っぽくならず、和気藹々とした雰囲気に進んだ。

静江が語る、ドイツビールが飲めなくて拗ねていたという天本の話で盛り上がり、この工房での思い出を語り合い、今後のそれぞれの身の振り方について報告しあい……気付けば日は暮れ、酒も静江の心づくしの料理の数々も尽きようとしていた。

そんな中、村本と竹内が2階から運び降ろしてきたのは、彼らから陽への内緒のプレゼントだった。

それは、漆黒に塗られた大きな木の看板。

中央に白く浮き出た、四分の一の太陽と三日月。陽の落款の意匠だ。

そのシンボルを挟むように、小さな文字で 大月 陽 アートスタジオ / YO-artstudio と描き込まれている。

うんと近寄らなければ見えないが、黒一色に見える面にはびっしりと波の紋様が施されており、独特の風合いを醸し出している。村本の手によるものだ。

対照的に、白く浮き出たシンボルと文字にはツヤツヤとした光沢があり、近寄れば顔を映すほどだ。こちらは、竹内が数日ばかりで手磨きした成果だった。

「独立の餞（はなむけ）に」と、ふたりがかりで作製してくれたのだという。

ボロボロと涙を流す陽をからかいながら看板を設置し、彼らはその下で記念写真を撮った。

写真には、目の縁を赤くして唇をひき結び中央に立つ陽と、その両脇で陽の肩に手をかけて笑うふたりが写っている。

目を伏せたまま、陽はゆっくりと少しずつ、口の中の水を飲み下した。

少し気を抜くと、つい感傷に浸ってしまう自分に苦笑いしながら、陽はペットボトルの蓋をきつく閉め直し立ち上がる。

と、その耳に、聞き慣れた声が近づいてきた。

「大丈夫、今日中に行くってば。もう着くところだから切るわ。じゃあね、ごーちゃん」

この声は、と思う間もなく飛び込んで来たのは、もちろん煌月夏蓮だ。

「陽！」

飛びついてくる夏蓮をなんとか抱きとめた。さっきまで座っていた椅子が大きな音をたてる。

「夏蓮、どうしたの？ 仕事は？」

「早く終わって少し時間が空いたの。だから来ちゃった♪ 驚いた？」

首に腕を回ししがみついている夏蓮を引き剥がそうとしながら、陽はとりあえずペットボトルを置こうと後ろ手に椅子を探る。

「うん。それはもう、びっくりだよ。あのさ、夏蓮？ ちょっと離れて。俺、汗まみれだから」

「私、最終の新幹線に乗らなきゃいけないの。汗なんか構ってる暇は無いのよ」

夏蓮は陽の瞳を見つめながら、急に身体を引いた。が、その両手は陽の肩をがっしりと掴んでいる。

「もしかして、迷惑だった？」

口ぶりこそ殊勝だが、その視線には有無を言わせぬ力があり、口元には自信たっぷりに微笑が浮かんでいた。

「……いえ。嬉しい、です」

押し切られた様な、ちょっと情けない笑顔が可愛らしくて、夏蓮は再び陽に抱きついた。虚勢を張らない、感情が素直に顔に出てしまう陽の反応は、夏蓮にとってはとても新鮮で楽しいものだ。

漸く腰に回された陽の腕に満足し、夏蓮は首筋に鼻先を埋めクスクス笑った。

「ん？ 何？ やっぱ汗臭いかな」

「ううん」

猫を思わせる仕草で顔を擦り付け、夏蓮はまた笑う。

「さすがに、ちょっと暑いなって思って」

「……ひでえ。自分からくっついてきたくせに」

陽はそのまま夏蓮を持ち上げると、ぐるぐる回り出した。

「おりゃ。人間扇風機だ」

きゃあ、と夏蓮が嬌声を上げる。

外では賑やかな蝉の鳴き声が、ガランとした工房の中にはふたりの笑い声が響いていた。

天本「わしのドイツビール..... (i ㊦ i)」

陽「瓶のやつはまだありますから(^▽^;)」

胸の炎

陽の胸には、美しい薔薇のつぼみがある。

.....いや、薔薇のつぼみかどうかはわからない。

が、とにかく、赤ちゃんが両手を合わせて少し膨らませたみたいな形の、もしくは灯された炎の様な形の、美しい紅の痣があるのだ。

胸の真ん中に咲く痣を初めて目にした時、夏蓮はほんの一瞬、畏怖を感じた。

禍々しいまでに美しい紅に、怯んだのかもしれなかった。

そっと指先で触れると、陽はピクリと身を震わせた。

「痛い？」

痛みも無いし、身体の異常でもないのだと陽は笑った。

痣に唇で触れると、頭の芯が甘く痺れた気がした。

ほんの少し舌先を這わせた時、陽と同じ場所、胸の真ん中が、ギュウッと引き絞られた。急に息が出来なくなり、夏蓮は目を閉じて陽にしがみついた。

「.....どうかした？」

「いま、胸がギュウってなったの.....まるで、魂と魂が固く結びつけられたみたいだった」

引き絞られた感じは一瞬で過ぎ去ったが、胸の奥にはまだ余韻が残っていた。大きく息をつくとき、息が少し震えた。

「.....もう、大丈夫」

「きっとさ.....ほんとに結びついたんだよ」

眠たそうな声の陽を見上げると、目が合った。

いまにも眠りに落ちそうなのに、その瞳は星空を映す綺麗な水を湛えた湖みたいに煌めいていて、引き込まれてしまう。

「だって俺達、運命の恋人同士なんでしょ？」

眠た気な目で、陽が優しく微笑んだ。

.....この人は、本当に信じているのだろうか。陽を手に入れる為に、いや、屈服させる為に私が放った、思いつきの戯れ言を。

「そうよ.....アポロンとヴィーナス」

.....まさか、そんな筈は無い。それじゃ、純粹を乗り越してただの馬鹿だわ。きっと、全て分ったうえで、口を合わせているだけ。

そう思っても、陽の瞳はどこまでも深く透き通っていて、とても心にも無いことを言う人間には見えない。

この人には、邪心とか澱みとか、妬み嫉み、猜疑心、ドロドロと渦巻く穢れた感情などは無いのだろうか。いや、そういうものが全く無い人間なんて、居るはずが無い。

でも、この人は.....この瞳は.....そういうものを隠し持つには、美しすぎる。

伸び上がって、陽の顔を両手で挟み瞳を覗き込む。

こちらを見つめ返す瞳はやはり、星空を映す、冷たい湖。

もし、この湖にもぐりこめたら。

押し入って、掻き分けて.....一番奥に辿り着いたら、何が待ち受けているのだろうか。

それが何であろうと、私は印を刻む。これは私のものだと。永遠に消えない印を、刻み付けたいと思う。深く、ふかあく.....

短いながらも充実した時間を思い出しながら、夏蓮は薄く微笑み、倒した座席に背を預けた。名古屋へ向かう新幹線は、最終便だということにあらかた指定席が埋まっている。

ほんの数時間の逢瀬。

それだけのために、カズの呆れ顔にも構わず新幹線に飛び乗ってしまった。

最終で向こうに着けば明日の仕事に支障が無いとはいえ、こんなことをするのは初めてだ。普段は余裕を持って移動し存分に休息を取り、万全のコンディションで仕事に臨むのに。

まさかこんなに、しかもこんな短期間で、陽にのめり込んでしまうなんて思ってもみなかった。私はいつも、追いかける側だった。ちょっとした微笑みや視線という餌をちらつかせさえすれば、思う通りに相手は私に夢中になり追いかけた。

ちょっと手こずったにせよ、初めは陽も同じだと思っていた。でも。

陽に会う度に、彼のことももっと知りたくなる。

表情は読みやすいのに、深いところに窺い知れない何かがあるように感じる。それが何なのか知りたくて、更に陽を求めてしまう。

それだけじゃない。

説明出来ない、不思議な何か。どうしようもなく惹き付けられる何か、私を陽の元に走らせる。

運命の恋人。

アポロンとヴィーナス。

自分が放った言葉の罠に、私は捕らわれてしまったのかもしれない。

だとしても、そこから逃げるつもりは無い。

夏蓮は流れていく窓の外の夜景から視線を逸らし、目を閉じた。

捕らわれの身になったとしても、私は高く足を組んで優雅に座り、羽根布団とふかふかのソファ、美しい食器で供される食事と酒を、当然のように要求する。それが私だ。

自らが仕掛けた罠の真ん中で婉然と微笑み、陽もろとも深く搦め捕ってしまうのだ。誰にも切り離せないほど、深く。

夏蓮さん、心の声がいちいちエグいです。胃もたれしそうです.....

電話の向こうから、水音が微かに聞こえている。栞が食器を洗う音だろうか。特大のスコールのような夏蓮の来訪の後には、それは余計に穏やかに感じる。

優馬に言われるまま、陽は通帳を開いた。

高校3年の時に父親が蒸発した際に残っていた、陽名義の預金通帳。

前のアパートの家賃1年以上に相当する金額が残されていたが、この部屋に越してからは一度も開いていなかった。

父親に捨てられた以上、自分の収入のみで生活していくのだという、意地にも似た覚悟もあったが、正直、こんなもの見たくもないという気持ちの方が強かったのだ。

優馬が指定してくるページを開いてみると、いくつかの入金が確認出来た。

「不定期だし金額もまちまちだけど、それ入金してるの、お前の親父さんじゃないか？」

「え……」

十 十 十

電話越しに、陽が預金通帳をめくる音が微かに聴こえる。

優馬も手元のコピーに再び目を落とした。

金額は数万円、ひと月に2度の時もあれば2～3ヶ月間の空くときもあったが、この5年間、断続的に入金されていた。最後の入金は、3週間ほど前だ。

優馬が通帳のコピーを確認しながら指摘すると、陽は低い声で呟いた。

「なんだよ、これ……何のつもりだよ。まったく、ふざけんな」

長い沈黙の後の陽の声には、最初の戸惑いは消え、僅かに怒りが籠って聞こえた。
優馬はなるべく軽い口調に聞こえるように気を配る。知り合いの近況報告でもするみたいに。

「何のつもりかは知らないけどさ、とりあえず元気に……かどうかはわかんないけど、生きてるっぽいじゃん？」

答えず、沈黙している。まあ、色々複雑なのだろう。当たり前だが。

「ま、無事みたいで良かったじゃん。つーわけで、その口座はまとめずにそのまま残しとくからな」

一方的ではあるが、陽の唯一の肉親の生存確認ツールなのだ。
スタジオ設立にあたって整理してしまう訳にはいかない。

「……わかった」

そう答えた陽の声にはほんの少し動揺が現れていたが、優馬はそれに気付かないふりをした。

「で？ さっき通帳返しに行った時、部屋に居なかったけど」

「……ああ、夏蓮が来てて。駅まで送りに行ってたんだ」

陽の声が少し明るくなり、涙をすする音が小さく聞こえた。
が、それはどうでもいい。

「あれ？ カレンさん、来週まで地方って言ってなかったか？」

「うん……なんか、ちょっと時間が空いたらしくて」

……親父さんの件で生じた、俺のこのヤキモキを返せ。

「お前ね……こっちが朝からヒーコラ走り回ってんのに、いい身分じゃねえか」

「ごめん、ごめんって。明日から死ぬ気で建て込みするから！ 頑張るから！」

.....全く、こっちの気も知らずに。だが、電話の向こうの声に笑いが滲んでいる。無理して笑ってるのかもしれないが、まあ、よしとするか。

優馬の手の中で、陽の部屋の合鍵がチャリチャリと音を立てた。

先日、恵流の両親に絵を渡しに行った際に返されたという、陽の部屋の合鍵。

絵を渡して帰ってきた陽の真っ赤になった目を思い返しなが、優馬が引き継ぐことになったその合鍵をそっと握りしめ、心の中で語りかける。

(恵流ちゃん、許してやってな。あいつも色々大変なんだ.....)

優馬「親父さん、絵葉書でも送ってくれりゃいいのにな」

陽「要らないよ、そんなの。どうせフラフラ写真でも撮ってんだろけど.....ま、どっかで生きててくれればそれでいいよ」

優馬「.....グスッ」

栞「なんで優馬が泣いてるのよ」

天本さんと顔を合わせるのは久々だった。
あの頑健な天本さんが、まさか入院するとは。

だが、脳梗塞。年齢を考えれば、あり得ない話じゃない。改めて、自分の年齢を思い知らされる。

大友は見舞いの花束を静江に手渡すと、勧められたパイプ椅子に腰掛けた。

「具合はどうですか？」

天本はニコニコ笑って頷いた。

「ああ、問題無いよ。手術も上手くいったし、工房の方もきちんと整理出来た。陽も順調にやっ
てるし、何も心配してない」

見たところ、血色もいいし口元の綻れも無い。右半身が不自由だとは聞いていたが、確かに、それ以外は元気そうだ。

自分の病状よりも、大月陽の活躍についてばかり語る天本に相づちを打ちながら、差し出された写真の数々を眺める。

独立に際し改築した、資材置き場の写真。

入り口には分厚い一枚ガラスの扉、その両脇は腰高の青紫色の壁。上半分は同色の格子壁で内側はガラス張りになっており中が見えるようになっている。

室内の壁は格子壁と同じ、一面光沢のある青紫色。腰高の棚がぐるりと設置されており、棚の上に絵を置いて展示するのだそうだ。

奥まったところには棚を組み合わせて作ったという間仕切りがあり、その奥の小さなスペースが事務所になるらしい。

最後の写真には、印象的な看板の下、ぎこちない笑顔の大月陽と並び、白い歯を見せて爽やかに微笑む男性が写っていた。

天本の解説は、今度はその男性がいかに信頼に足る人物か、大月陽をいかにサポートしているかに移行している。

その様子は、常々チェックしていた大月のブログやF Bからも見て取れた。

大月陽の絵は最近とみに凄みを増し、奔放な表現力に満ち溢れている。パソコンの画面からでも、絵の持つ力が伝わって来る。

スタジオがオープンした際には、是非とも実際の絵を拝みに行こうと思っていた。

そう返すと、天本は自由になる左手で嬉しそうに布団を叩いた。

「そうそう、今日は午後から陽が見舞いに来るんだ。もうすぐ着くと思うから、会って行ったらどうだ？ 陽もきっと喜ぶ」

ズキン、と何故か心臓に痛みが走った。

.....そうか。

大月陽。手元の写真に再び目を落とす。

自分が知っている姿より、随分と逞しく精悍になっている。前に送られて来たインタビュー記事の写真よりも、ずっと。

何だろう、覚悟を決めた男の顔、といったところだろうか。

(大月、大きくなったんだな.....)

父親の失踪、急遽決めた就職、恋人の死。様々なことを乗り越え、それでも絵を描き続けてきた彼は、どんな男に成長しているだろう。

幸い、時間はたっぷりある。

陽が現れるのを楽しみに待ちつつ、大友は工房を買い戻すと宣言したという陽のエピソードを涙ながらに語る天本の声に耳を傾けた。

天本「そーいや、闘う美術部って呼ばれてたって？」

大友「ああ……身体を鍛えるためと、生徒に身体や筋肉の動きを意識させるために
ですね、基礎的な運動をさせてたんですよ。描くには構造をよく知らないと」

天本「なるほど。ちゃんと理由があったんだな」

大友（さては大月、理由忘れてるな……）

大友はふらつく足で病室を後にし、脂汗を滲ませながら病院の前で待機しているタクシーに乗り込んだ。

何なんだ。大月陽に、一体何が起きた？！

何だ？！あの、怪物じみた……いや、あれはもう……怪物だ。

「お客さん、どちらまで？」

顔を上げると、タクシーの運転手が心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「ああ、駅まで。最寄りの……いや、***駅までお願いします」

最寄り駅ではすぐに着いてしまう。もっと時間が欲しかった。誰の目にも触れない閉ざされた空間に踞ったまま、なるべく早くここから立ち去りたかった。

車が動きだし、大友は大きく息をついて両手で顔を覆った。

「畏まりました……あの、お客さん、大丈夫ですか？」

毎日たくさんの病人や見舞客を相手にしているであろうタクシーの運転手がこれだけ心配するということは、いま自分は相当酷い顔をしているのだろう。

「ああ、大丈夫。いや……済まないけど、ラジオを消してもらえないかな。ちょっと音が辛くて」

車内が静かになり、先ほどの衝撃を思い返す余裕が出て来た。

天本と談笑していると、病室の外から何かが近づいてくるのが分った。壁に遮られて見えないのに、何故か意識が引き寄せられるのだ。

やがて、足音が聞こえてきて病室の前で止まった。

扉を開けて入ってきた大月陽と目が合った瞬間、首の後ろが総毛立った。
大友は反射的に立ち上がってしまった。本能的に逃げようとしたのだと思う。

だが大月陽は、一瞬驚いたものの嬉しそうな笑い声を上げ、昔と変わらぬ人懐っこい笑顔で挨拶をしてきた。

「大友先生！ いらっしゃるとは思いませんでした。ああ、びっくりしたあ」

「お前が喜ぶだろうと思ってな、引き止めてたんだよ」

「うん。すっげー驚いたけど、嬉しいです。先生、ご無沙汰してます」

動揺を隠しつつなんとか挨拶を返し、再び椅子に腰掛けた。天本に近況報告しているのに耳を傾けるふりをしつつ、陽を秘かに観察する。

大人っぽくなってはいるものの、精悍な中にもどこかおっとりした印象を与えるのは昔のままだ。

実際のところ、彼がおっとり大らかに見えるのは、絵を描くこと以外の物事への執着やこだわりが極端に薄いせいだと、大友は思っていた。

無邪気にも見える笑顔の下には恐ろしく老成した何かを抱えており、厭世的だったり刹那的な傾向が隠されているように感じてしまうのは、彼の生い立ちを知っているからかもしれないが。

そんな、どこか飄々としたところのある彼が、何故こんな、禍々しいとまで感じるオーラを放つようになったのか。

いや、放っているというのは逆かもしれない。

まるで、こちらの意識が、エネルギーが、吸込まれて行く様に感じるのだ。

高校生だった頃は、そんなことは無かった。

確かに、ある意味では目立つ生徒ではあった。喧しく騒いだり率先してリーダーシップを発揮したりという目立ち方ではなかったが、親の失踪以前から、妙に人目を惹くところは確かにあった。

だが今は。

目を惹くどころの騒ぎじゃない。まるで、ブラックホールだ。

近くに居るだけで、為す術も無く強制的に引きずり込まれて行く感覚。

目立つなんてモノじゃない。否応無く視線をもぎ取られる。目を逸らしても、つい視線を戻してしまう。

恐いもの見たさにも似て、恐れつつも心奪われてしまうのだ。

こんなに不穏な、なのに抗い難い、妖気と言ってもいいほどの何かに、天本は全く気づいていない。ずっと傍に居たせいで慣れてしまっているのだろうか。

昔を知っている自分が久々に会ったからこそ、気付けたのだろうか.....

大月陽との邂逅は、おそらく20分にも満たなかったと思う。耐えきれず、大友は架空の予定をでっち上げて逃げ出したのだ。

別れ際、大月陽は握手を求めてきた。

相変わらずの、目尻の笑い皺も微笑ましい、人懐っこい笑顔を浮かべて。

その表情と、彼が纏い醸し出す何かのギャップに引き裂かれそうになりながら、大友は手を差し出した。背筋がゾツとして、冷たい汗が滲んだ。

彼の温かい手を握り返した時、足元の地面が引き抜かれるような感覚を覚えた。

波打ち際に立った時、足の下が砂が波に攫われて行くのにも似た、あの感覚.....

思い出し、酷い貧血にも似た目眩に襲われて、大友は両手で額を覆い目を閉じた。

大月陽。

かつての生徒だった、いや、心の底で愛弟子とも思っていた青年は、もういない。

彼は別の何かになってしまった。自分の期待とは遠く離れた、全く違う、何かに。

いや、と大友は思う。

もしかしたら、全て自分の勘違いかもしれない。

再会への過度の期待と、病院という非日常的な舞台設定に過敏になっていて、ありもしない何かを見たと思っ込んでいるのかもしれない。

そうだったら、どんなにいいか。ただの思い過ぎだと、笑い飛ばせたら.....

だが大友は、再び陽に会いたいとはどうしても思えなかった。

これからは更に遠くから、うんと遠くから見守ろう。

本人そのものではなく、圧倒的な絵の才能とその作品だけを。

天本さんには、息子の自立を促すべきだとかなんとか言って、少し距離をとるように勧めてみよう。それぐらいしか、今の自分に出来ることは無さそうだ。

自分の臆病さを嗤いながら、大友はそれでも陽から完全には離れられない、忘れ去ることが出来ない自分に気づき、やるせないため息をついた。

なんだか 雲行きが怪しくなっけまいりました.....

夏蓮の色

珍しく淡いすみれ色の洋服を手にして立ち尽くしていた夏蓮に、五島が声をかけた。

「どうした？珍しいな。それを買うのか？」

ハッとして顔を上げた夏蓮は、困った様な笑顔を浮かべた。

「.....ううん。こういう色、似合わないのよね、私」

「そんなこともないと思うが」

「んん。着ててしっくり来ないの」

夏蓮は曖昧な色の服を好まない。

原色や鮮やかな色を好み、全くの無地、又は大きな柄や大胆な幾何学模様の服を選ぶことが多い。

手にしていた服をハンガーにかけ、名残惜し気に布地を撫でた。

小花が散る、柔らかな優しい色合いのすみれ色。

藤枝のギャラリーに飾ってあった、浴衣の少女の絵が脳裏に浮かぶ。

顔ははっきりと描かれてはいなかったが、あれは、清水恵流だ。

若くして亡くなった、悲劇的で心に刺さる幕引きをした、陽の元恋人。

あの絵を見た時、突然胃が燃え上がる様に熱くなった。

ナイフで切り裂くなり汚水をぶちまけるなり、何でもいいから滅茶苦茶にしてやりたいという衝動に駆られた。二度と、誰の目にも触れないよう、滅茶苦茶に。

優しい風合いで、丁寧に丁寧に描かれた、2枚の絵。

包み込む様な暖かな愛情に身を委ね、文机に凭れ安心しきって眠る若い女性は、とても幸せそうだった。

月を見上げている女性は、陽が声をかけると儚気に振り向いて、小さな花が可憐にほころぶみたいに、穏やかに微笑むだろう。

儂気で、それでいて全てを受け止めるような強さを持った、たおやかで柔らかな雰囲気纏う女性。

.....私とは、正反対。

本当は、陽はああいったタイプの女性が好きなのかもしれない。

そう思うと、胸の中がジリジリと焼け焦げてゆく気がする。

彼女のことを忘れなくとも構わない。あの時、陽にはそう言った筈なのに。

「ねえ、カズ。私、初めて同性に嫉妬したかもしれない」

「.....そうか」

ごーちゃんは、唐突な私の言葉を何の説明も求めずに受け入れる。

言いたいことがあれば勝手に言う、言いたくないことは聞かれても言わない。そういう私の我が侬を認めてくれているのだ。

私はいつもそれに甘えてしまう。

「私って、嫌な女だと思う？」

「.....何を今さら」

皮肉っぽく片方の口角だけで笑う彼を軽く睨むと、冗談だ、というように軽く払うような仕草をして笑った。

「あー.....バカ正直で不器用で誤解されやすいきらいはあるが、煌月夏蓮は嫌な人間ではない。と、思う」

こういう時、ごーちゃんは誤摩化したりせずきちんと答えてくれる。

「自分本位で甚だ傲慢に見えることもあるが、少なくとも嘘はつかない。人によっては高慢ちきだと言う者もあるかもしれないが、実際には他人を貶めることはしない。自分に自信を持っていて、正直に振る舞っているだけだ。

ただ、正直であるというのは間違い無く美点だが、謙遜を美德とするこの日本では、自信満々だとあまり受けは良くないだろうから、若干の改善の余地があるかもしれない」

.....誤摩化したりせずに、ちゃんと.....答えてくれる.....けど。
率直すぎる言葉は、時に胸に刺さる。ま、私が言えた義理じゃないわね。

「私だって、ちゃんとわかってるのよ.....」

ちょっと拗ねた様な口調になってしまったけれど、本当に、ちゃんとわかってはいるのだ。

ただ、目の前のことに集中すると、ついズバズバとはっきりものを言うってしまう。
後で反省したりもするのだが、いざそういう場面になると反省は活かされず、やはり本質を突くもの言いを選んでしまう。
相手によって態度を変えるということが出来ない。誰に対しても、いつでも、ストレートに振る舞ってしまうのだ。

そのせいで反感を買ってしまうこともある。
他人を振り回すという印象を与えてしまうこともある。思ったままに行動しているだけで、振り回すつもりなんて全く無いのに。

滑らかな布地にもう一度目を遣ると、夏蓮はハンガーラックに背を向けた。

「買い物する気が失せちゃった。陽のパーティーには家にある服で出席するわ」
「そうか」

陽のアートスタジオのお披露目パーティー、あれを着ていこう。
買った方がいいがまだ卸していない、白地にシルバーを編み込んだニットのミニドレス。眼の覚める様なブルーのフェイクファーを纏って、足元はシルバーグレーのゴツめなエナメルパンプス。プラチナにブルーサファイアをあしらったゴージャスなネックレスと、お揃いのピアス。目元はグレー系のグラデーション、目尻には深みのある赤をアクセントで。リップはグロスのみで唇本来の赤味を引き立たせ、下品にならないように。ネイルはシルバーラメと、スタジオの内装と同色の青紫の配色。

.....うん、完璧。あのスタジオの内装の色に、きっと映えるはず。

私には、曖昧な色は似合わない。

五島「あと、人遣いは荒いし食の好みはうるさいし服や靴へのこだわりも厳しいし頭と性格の悪い人間への態度は非常に辛辣だが、だからと言って決して嫌な人間というわけでは……」

夏蓮「それもう、普通に悪口よね？ (￣～￣#)」

「もうヤダ。超疲れた。パーティーとか、二度とやらない」

回転椅子の背を抱え込んで逆向きに座り、ぐるぐる回りながら、陽は何度目かになる言葉を呟いた。

小さな子供連れでは、と昨日のパーティーには出席を控え葉が、笑いながらスタジオの中をゆっくり歩き回り、見学している。

腕の中で眠っている優待をあやしなから、優馬は小さな声で言い返した。

「心配しなくても、当分はそんな暇ないから。ちゃっちゃと新作描かないと、ギャラリー空っぽだぞ」

「ほんとにねえ。ほぼ完売じゃない？」

葉がいかに感心したという顔で、また笑った。

棚に立てかけてある作品には、ほとんど売約済みの赤いリボンが付けられている。

大きな絵は藤枝のギャラリーに展示してもらい、こちらのスタジオでは比較的小振りな作品や他素材を用いた前衛的な作品を、と分けて展示することに決めた。

手の届きやすい価格の作品が多かったせいもあるのだろう、スタジオ展示分は、なんとお披露目パーティー当日にほとんど売れてしまったのだ。

藤枝のギャラリーに預けていた作品にも、数点買い手がついたという。

昨日のパーティーは大盛況だった。

いや、大盛況というより、混乱状態の一步手前と言った方が正しいかもしれない。

11時のオープンからひっきりなしに客が訪れ、あっという間に1階のギャラリーは人で一杯になってしまった。

『HEAVY DOOR』を一日貸し切りにしていた優馬の慧眼たるや、天晴というものだ。とはいえ、流石の優馬もこれほど早く人が集まるとは思っておらず、Takに頼んで昼からのオープ

ンを早めてもらった程だった。

一通り見て回った客にはパーティー会場か別の絵を見るかを選んでもらい、次々にタクシーに乗り込ませ、T a kの店か藤枝のギャラリーへと送り込んだ。もちろんそのまま帰る者も居たが、客の多くはどちらかの店に流れていった。

その全てを、優馬をはじめ客達が次々にSNSにアップしていくので、来訪者はどんどん増えた。スタジオは22時で閉めたが、HEAVY DOORに流れた客達は深夜まで盛り上がったのだった。

タクシー代や店の貸し切り料金等がかかったが、車を出して何往復もしてくれた芹沢や菅沼の尽力もあり、その日の売上で充分賄えてしまった。

案内はメールやSNSを駆使したし、芳名帳に記帳してくれた客への記念品を発送しても、採算は黒字になるだろう。

パーティーを企画した優馬自身も、まさかここまで上手くいくとは思わなかった。

今日になって昼を過ぎた頃には、また嬉しい知らせが入った。

昨夜のパーティーで再びダンシングクイーンと化した夏蓮に新たな仕事のオファーが入り、T a kは「貸し切り用のメニュー以外の別注文が多く入って大繁盛だった」とわざわざ電話してきたのだ。

「もう、四方八方、あっちこっちで大団円。文句無しの大成功だな。なー、優侍」

優馬はゆっくりと身体を揺すりながら、眠る幼子の涎をそっと拭う。

「ふふ。大団円って。ここからが船出でしょ？」

「それもそうか。じゃあ昨日は、船出パーティーの大団円だ。これから出航ってことで……陽、船長とキャプテンどっちがいい？ 選ばしてやる」

「はあ？ それ、どっちも意味一緒じゃん」

「じゃあ、社長とボス。どっちにする？」

陽はぐるりと椅子を回して栞に向き直ると、呆れ顔で笑った。

「ねえ栞さん。この人ほんと意味わかんない。通訳お願いします」

「あはは。うんとね、『これから一緒に頑張ろうね』って言ってます。たぶんね」

陽はまたぐるりと椅子を回して壁の方を向き、指先で鼻を擦った。耳の縁が、僅かに赤く染まっている。

「ねえ、栞さん。俺、優侍は栞さんに似た方がいいと思うな。優馬さんはたまに変だもん」

二人のやりとりが聞こえないふりをして、優馬は眠る幼子の頬をちゃんと突ついた。

「なー、優侍？ お前はいい子に育つんだぞ？ あそこでブーたれてるヘタレみたいにはなるなよ。あいつ今だにお前のごと抱っこするのが怖いんだとさ」

「ヘタレじゃないし。赤ちゃんってぐにゃぐにゃしてるしさ、やたら熱いから、滑って落っこしそうでおっかないんだもん」

優馬の軽口に陽が口を尖らせるので、栞は笑って宥めた。

「もう、優馬ったら。大丈夫よ、陽くん。子供なんてすぐ大きくなるし、時間はたっぷりあるんだから。もうちょっと大きくなったら遊んであげて」

「うん。それまで俺、優侍の絵、たくさん描く！」

「お、いいねえ。名画確定だ。なんたって、モデルが良いからな。なー、優侍」

優馬が構い過ぎたのか、優次は鼻を鳴らしてぐずり始めた。

優馬「お前暑がりだしなー……ってか、赤ん坊並みに体温高いもんな」

陽「赤ちゃんと一緒にすんな。ぐずるぞ」

五島の懸念

年末のミュンヘン公演は大成功、鳴り止まぬスタンディングオベーションのうちに幕を降ろした。

演目はやはり、「鷺娘」。

「日本版 白鳥の湖」と言われる演目なだけあって、欧米の観客にも受けるだろうという夏蓮の思惑は、見事に的中した。日本での公演とほぼ同様の振り付けだったが、特に日本舞踊の動きを織り交ぜた振り付けは、オリエンタル且つエレガントだと絶賛された。

一切の台詞も無い舞台にも拘らず、観客はときに頬に手を当てて微笑み、感嘆の声を上げ、目の前で両手を組んで身を乗り出し、ハンカチを握りしめて涙した。

日本での公演を観た者も、今回の公演を絶賛した。

五島の目から観ても、素晴らしい舞台だった。

それぞれの場面で感情が迸り、観客の心を取り込み一体となって物語を紡ぐ、そんな演技だった。

特筆すべきは、飛躍的に向上した表現力だ。否応無しに心を揺さぶられてしまう。

一体どうして、これほどの表現力を獲得したのか。

.....言うまでもなく、あいつのせいだ。大月陽。

記者からのインタビューに、「常にインスピレーションを与えてくれる恋人のおかげ」と夏蓮は答え、幸せそうに微笑んだ。

その言葉を立証するかのよう、夏蓮は年越しパーティーが終わるとその足で、日本へ帰ってしまった。

パーティーなど華やかな場所が大好きな彼女にとっては、異例なことだ。いつもなら大きな公演の後は打ち上げと称し、知人友人に囲まれて連日遊び歩くというのに。

夏蓮を空港まで送った帰り道、五島は思い返していた。

胸元に光るペンダントに触れ、月桂樹の葉に囲まれた五芒星の感触を確かめる様にそっとなぞる夏蓮の表情。

それは今までに見たことの無いような、穏やかで慈愛に溢れた、満ち足りた微笑だった。

まるで、聖母マリアのような。

言葉にすればなんと陳腐な、ありふれた表現だろう。

だがそれを目にした時に五島が感じたのは、彼女のその表情に全くそぐわぬ、危機感、焦燥、苛立ちだった。

これまでの夏蓮の恋愛は、いつでも相手の上に燦然と君臨し、支配し振り回し、やがて打ち捨てるというものだった。

それが良いとも悪いとも言うつもりは無い。

ただ自然に、夏蓮はそうしてきたし、五島はそれを傍で見てきた。おそらく、世界中で一番近くで。

独自のセンサーで人の才能を嗅ぎ分けるという才能を持つ夏蓮はまた、気に入った人物を惹き付ける才能も併せ持っていた。

夏蓮が狙う標的は、例外無く彼女に引き寄せられ、彼女の虜となる。無我夢中という言葉がぴったりなほどに溺れ、彼女の歡心を買おうと躍起になり、身を削るように奉仕しては、その反応に一喜一憂する。

そうするうちにやがて、まるで精気を吸い取られた様に才能は潰え、乾涸びていく。

そうなれば、彼女は対象に興味を失ってしまう。

才能の輝きを放たない男など、意味が無い。その辺の塵芥と同等なのだ。

どれだけ取り繕ろうと、彼女は一顧だにしない。それはもう、端から見ればいっそ清々しいほどに。

誘蛾灯に集まる虫を思わせる彼らに、さすがの五島も同情を覚えなくもない。

だが、そうも言っていられない。夏蓮の寵愛を受けられなくなった彼らはほぼ一様に、五島に思いの矛先を向け、攻撃に転じるからだ。

五島と夏蓮の仲を勘ぐる者もいたし、単にいつも夏蓮の傍に居る五島に嫉妬する者もいた。

そんな彼らを五島は慰め、説き伏せ、時には身体を張って排除してきた。

彼女が愛していたのは自身のその才能だったと気付いた者の中には、自分を見つめ直し、その分野で復活を遂げる者もあった。

だが、そのまま潰れて行ってしまった者の方が多かった。

.....大月陽は、どうなるのだろう。

夏蓮の中に新たな表情を描き上げた、才能溢れる芸術家。

今までに無い夏蓮の変化に、五島は言い知れぬ不安を感じた。

まさか夏蓮に限って、舞踏より彼を優先するなんてことにはならないとは思うが.....いや、どうだろう。もしそんなことになれば.....

そこまで考え、五島は思いを振り払うように首を振った。

.....夏蓮の変化が、このまま舞踏家としてのさらなる飛躍に結びつくなら良いのだが。

五島は大きく息を吐き出すと、意識を運転に集中させた。

夏蓮さん、なかなかのカマキリっぷりですね。

スタジオのお披露目パーティー以降、陽は大忙らしい。

新しい作品を次々と産み出す傍ら、アートイベントでの講演依頼や雑誌取材に応え、インターネット番組への出演、肖像画制作と、精力的に活動している。

夏蓮はといえば、年末のミュンヘン公演でこれまた忙しく、デートする時間も取れなかった。

思えば、2ヶ月以上会っていないのだ。

これは夏蓮にとって驚くべきことだ。いつもなら、相手が自分のスケジュールに合わせてどこへでも飛んでくるのが当たり前だったのだから。

別に「来い」と命じた訳でもなく、相手が勝手にそうしていたのだ。

.....いや。私が、そうするように仕向けていたのかもしれない。

「会いたい方が会いに来るのが当然」そう思っていたから。

そして今、私はミュンヘンでの滞在を最小限に切り上げて、飛行機に乗っている。

一刻も早く、陽に会いたくて。

滞在中、何をしても陽が思い出された。

この場所で、陽がこんな風に笑った。これを食べて、陽がこう言った。あれを見て、陽はこんな表情をしていた.....

自分でも笑ってしまう。

まるで10代の少女みたい。こんなに胸を高鳴らせて.....いや、10代の頃でさえ、こんな風にときめいたことは無かった。

陽に出逢うまで、私は本当に相手の才能だけしか見ていなかったのかもしれない。いつだったか、ごーちゃんにからかわれた通り。

相手への興味はもちろんあったけれど、それは単なる好奇心で、恋愛感情ではなかったのかもしれないとさえ思える。

『魔性の女』なんて嫌味を言われたこともあった。

なにを馬鹿な、と笑い飛ばしていたけれど.....端から見れば、そう見えても仕方なかったのかも

しれない。

言葉は悪いし、第一そんなつもりも無かったけれど……結果的に、かつての私は相手を使い捨てて来た。

だって、彼らはいつも勘違いする。

高価な贈り物、夜景の綺麗な高級レストラン、素敵なビーチリゾート……そういったもので私が喜ぶと思っている。そりゃ、もちろん嬉しいけれど。でも、私が一番欲しいのはもっと違うもの。

私が欲しいのは、才能の煌めきだ。

それが私を刺激し、新たなアイデアやちょっとしたヒントを与えてくれる。

その煌めきの源は何なのか。それを知りたくて、私は彼らを見つめる。心の奥まで潜り込もうとする。

すると彼らは……自滅してしまうのだ。

何故か一様に、才能を手放して私にしがみつこうとする。馬鹿みたいに依存し、束縛し、独占しようとする。

でも、陽は違う。

彼の最優先するものは、いつだって、絵だ。

見つめ合う瞳の陰からふいに、彼の中の芸術家の目が現れる。表情の裏側まで観察されているのを感じる。

そういう時、私の心はふたつに引き裂かれる。

もっとよく見て。細胞の隅々まで凝視して、理解して、表して。

そんな風に見ないで。観察しないで。我を忘れ狂うほど、私を求めて。

引き裂かれた心は混乱して、ほとんど暴力的な気分さえになってしまう。

胸ぐらを掴んで揺さぶるみたいにしがみつぎ、陽の視線を、心を独占しようとしてしまう。

気付けば私は、過去に自滅していった彼らと同じことをしようとしている。

私は、罰を受けているのだろうか。

今まで人を傷つけ振り回してしまったから、同じ目に遭わされている？

だとしたら。

なんと幸せな罰だろう。

確かに、気が狂い胸が張り裂けそうになることもあるが、反面、その胸の痛みは熱く甘く身体に染み渡る。その感覚はとても新鮮で、震えがくるほどに心地よい。

陽への、踊りへの、そして生きること全てへの情熱が掻き立てられる。

ズキン、と胸が痛んだ。

陽のことを考えていると、よくこんな風に痛みが走る。熱く、甘い痛み。

その痛みに誘われる様に指が動き、胸元のペンダントを探る。

ミュンヘンへ発つ直前、これを渡す為だけに僅かな時間を縫って来てくれた陽が、クリスマスプレゼントにと贈ってくれたものだ。

金色の五芒星がプラチナの月桂樹の葉で取り囲まれたペンダント。

五芒星と月桂冠は、それぞれヴィーナスとアポロンのシンボルとされている。

「気に入ってもらえるかわからないけど……」と、陽がおずおずと差し出したペンダントを見て、私がどんなに感激したか。

名前にアポロンを、守護星にヴィーナスを持つ陽と、

守護星にアポロンを持ち、陽のヴィーナスである私。

ふたりが内と外で反転し合いながら互いを抱き締め合っている。

五芒星を取り囲む月桂冠は、その様を形にしたものなのだと、私には思えた。

私はチェーンを長いものに取り替え、心臓のあたりにペンダントがくるよう調節した。陽の紅い痣と同じ場所。

アポロンとヴィーナス。太陽と音楽の神、愛と美の女神。

私達は、いつでも繋がっている。

夏蓮「反省？ どうして私が？ だって彼らが勝手にキリキリ舞いして自滅しただけじゃない。まあちょっとぐらいはね、可哀想なことしたかな、とは思うけど……」

五島「だからカマキリ女だの魔性だのと言われるんだ」

優馬の目論みは見事に当たり、絵の制作過程を撮影した動画が話題となって、陽の絵はさらに好評を得た。その動画欲しさに絵を買っている者もいるのではないかと噂されるほどだ。

今では優馬が売り込みに走り回らずとも、様々な絵の依頼が飛び込んで来る。

肖像画を初め、飲食店に飾る大きなサイズの絵画や商業施設の壁画、本の表紙絵と挿絵、CDジャケット、果てはTシャツのデザインまで。

その他にも、アートフェスにゲストで呼ばれたり、絵画教室の特別講師等の仕事も入ることがあり、さすがの陽も人前で話すことや写真を撮られることに慣れてきた様子だ。

おかげで優馬は拘束時間が短く済み、家事と育児に多く係わることが出来るようになったので、菜も大喜びしている。

「もしかして菜さん、そこまで読んでた？」

「あはは、どうだろうな。今はともかく、最初の頃はあちこち飛び回ってかなり不規則だったしなあ」

優馬は冷蔵庫から取り出した惣菜を温める一方で、生野菜を切って簡単なサラダを作った。

昼下がりに出勤して陽に早めの夕食を用意するのが日課となり、料理の腕がだいぶ上がった。これも菜がスタジオを起ち上げたことを喜んでいる理由の一つだ。

優馬は小さなダイニングテーブルの上に手早く料理を並べた。

蒸し鶏と生野菜のサラダ、小松菜と油揚げと卵の炒め煮、豆腐とわかめの味噌汁。それと、家から持ってきた（菜作の）豚の角煮。

陽は早朝と夕方の2回しか食事を摂らないので、一回毎の食事量は結構なボリュームになる。菜のアドバイスを受けながら、バランスの良いメニューになるよう心がけている。

少々おせっかいな気もするが、こうでもしないと陽はすぐに絵を描くのに夢中になり、食事を摂るのを面倒がってさぼるのだ。

ほかほかのご飯をよそっていると、玄関のライトがパシパシと点滅し小さく電子音が鳴った。階

下のギャラリーのドアが開くと、音と光で知らせる仕組みだ。

「お客さんだ。いいよ、俺が行く。お前はメシ食ってろ」

優馬は玄関の装置のスイッチを切り、外階段を下ってアトリエのドアを開けた。

「やあどうも、いらっしゃいませ」

† † †

30分ほどかけて全ての作品を見回った客が、漸く絵の購入を決めた。
陽の絵のファンで、以前からブログ等見ていたのだという。

「ブログから申し込もうとも思ったけど、やっぱり実物を見てみたくて。何度か店の前を通ったんですけど、閉まってて」

「ああ、すみません。たまに留守にしちゃうんです。事前にご連絡いただければ都合付けますから」

「いえ、僕も用事のついでに寄っただけでしたから。でも、こうして……実際に実物を見たら、全部欲しくなっちゃいました」

頬にかかる前髪の陰からでもわかるほどの興奮した面持ちで、青年は嬉しそうに笑った。
吟味に吟味を重ねて決めた一枚の絵をほれぼれと眺め、かと思うと他の絵に名残惜し気な視線を走らせる。

「いっぱい迷っちゃって……お時間とらせてしまって、すみません」

「いえいえ、いいですよ。ゆっくり見てもらって構いません。その方が大月も喜びます」

優馬が差し出した紙コップのお茶を恐縮して受け取った青年は、勧められるままスツールに腰掛けた。

奥の事務スペースで絵を丁寧に梱包しつつ、優馬はこっそりメールを送信する。

『いま、降りてこられるか？』

支払いを済ませ、世間話などしながら時間を稼ぎつつ領収書を作製していると、ガラスのドアが開き、冷たい風が入り込んだ。

「陽、こちらのお客さん、『水曜のリリーベル』をお買い上げだ」

優馬の声に、青年は弾かれた様に立ち上がり背後を振りかえった。息を吞んで固まる青年に、陽がにっこりと笑いかける。

「ありがとうございます。その絵、気に入ってくれて嬉しいです」

ひと気の無い古風な喫茶店のテーブルに落ちる、スタンドグラスの影。テーブルにはすずらんの意匠が斜めに歪んで落ち、夕暮れ間近を思わせるはちみつ色の光が辺りに満ちて、コーヒーの香りが漂うほの暖かな空気の密度が感じられる作品。優馬と栞の思い出の店。そう、恵流との交際が始まった日に、ふたりの結婚を祝った店……『喫茶リリーベル』の午後のひと時を描いた絵だった。

「ブログやなんかも、前から見ててくれてるんだって」

「そうなんですか。それは、ありがとう……あれ？」

優馬の言葉に妙にアワアワしている青年に改めて向き直った陽が、首を傾げた。

「前にどっかで会ってませんか？」

青年は空になった紙コップを握りしめたまま、勢い良く頭を下げた。

「はいっ、実は前に、2度ほどお目にかかってます！」

さて、最後の登場人物です。と言っても、既にチラッと出ています。

「まじか……」

陽は壁際の棚に両手をつき、がっくりと項垂れている。
その向こうで、優馬は笑いを堪えきれずに肩を震わせていた。

「はい。あの頃僕、単発のバイトでモデルやってて、あのハウススタジオの隅っこにいて……その撮影で、大月さんの絵を初めて見たんです」

「ちょっと俺、お茶飲む……動揺が……なんか動揺が凄い」

ふらふらした足取りで奥のスペースへ向かい、陽はティーバッグの緑茶を淹れはじめた。優馬は構わず、青年に続きを促す。

「俺、片手間でやってたから、他のモデルさんたちにわりとハブられてて。居心地悪いなと思ってたら、大月さんと……木暮さんが、なんかすごい楽しそうに覗き見してて、羨ましいなと思ってたんです。そしたらカメラマンさんが、『あの絵はあの子が描いたんだよ』って教えてくれて」

「あの時ねー……陽も相当ブーたれてたんだよな。写真嫌いだって」

「え、そうなんですか。大月さんの撮影、見たかったなあ。でもまあ、俺もあんま好きではないかも」

青年は少し首を傾げて笑った。斜めに分けた前髪が揺れ、ほお骨にかかった髪を煩そうに指先で払う。

「で、しばらくして美大の仲間とあの公園の近くを通ったんで、『似顔絵屋さんを見に行こう』って誘ったんです。ああ、カメラマンさんに聞いて、場所知ってたから。……そしたら友達が……あの、宮内っていうんですけど、そいつが大月さんに絡んで」

「うん。宮内くん、憶えてますよ。後で謝りに来てくれたし」

ティーバッグが入ったままの紙コップを3つ、両手で持ってきて棚に置き、それぞれに配りながら陽が頷く。

「そんな時の大月さん、すっげー怖くて。宮内の胸ぐら掴んでブンブン振り回して、投げ飛ばして……」

優馬が目を見開いて身を乗り出す。話の内容に反し、何故か新しいおもちゃを見つけたような楽しげな表情だ。

「まーじーでー？ こいつが？ そんな怒ったの？ ……想像つかねえ。ウケるわー……ってかお前ね、なんでそんな面白いこと教えないんだよ。言えよ」

「別に面白くないし。それに藤枝さんから電話があった時、ざっと説明はしただろ」

そっぽを向いて紙コップを啜る陽を優馬がニヤニヤと横目で眺め、青年の方へさらに身を乗り出した。

「で？ で？」

「いやあの、大月さんが怒るのは当たり前なんです。あれはほんとに、宮内が全面的に悪かったから……で、その後ブログとか知って、ってというかそれも宮内が教えてくれたんですけど、ずっとチェックしてて」

「ありがとうございます！」

「……ありがとうございます」

優馬につられる様に、陽もひょこっと頭を下げる。

「いえ、そんな……あの俺、大月さんでもっと怖い人かと思ってて……ここに来るのも躊躇してたんです。インタビューとか読むと怖くないんですけど、あの喧嘩のこともあるし、あと外人ばっかのクラブで踊ってたりするし……」

陽がいきなり咽せ返し、咳き込んだ。

しばらくゲホゲホやっていたが、恨みがましい眼で優馬を睨む。

「ほーらー……優馬さんが変なものネットに上げたりするからあ」

「上げたのは俺じゃないって。俺はちょっと翻訳して転載しただけだから～」

仕切り棚の間隙へ手を伸ばしてボックスティッシュから数枚引き抜き、陽に手渡す。陽はひった

くる様にティッシュを受け取り、鼻をゴシゴシ擦った。

「それに、怖いイメージがついちゃったのは、そもそも公園の喧嘩のせいだもんね？」

「ええ、まあ。俺、喧嘩とか無縁だったからかなり怖かったですし」

「ほーら、俺のせいじゃない〜」

一瞬、おどける優馬をじろりと睨んだが、陽は何も言わずにティッシュを丸めた。

「あ、でも。もう印象変わりました。こないだの横浜のアートイベントもこっそり見に行ったんですけど、優しいそうだし、今日こうしてお話ししてみて……まだちょっと緊張はするけど、今は全然怖くないです！」

瞳をキラキラと輝かせわずかに頬を紅潮させた青年は、気をつけの姿勢で言い切った。

† † †

渡辺博己と名乗る青年は陽に握手を求め、購入したばかりの絵を大事に抱えて、まさに胸いっぱい、という面持ちで帰って行った。

「それにしてもお前、よく憶えてたな」

「ね。自分でもびっくりした。なんとな〜く、見たことある気がしたんだよね。無意識のうちに刷り込まれてたのかも」

「……お前の無意識は、顕在意識より優秀だな」

「えっと、誉められてないのはわかる」

陽は3人分のカップをまとめ、片手で潰した。

優馬がパソコンを覗きながら、足元のゴミ箱を取り上げて差し出す。そこへ陽がゴミを投げ入れる。

「ナイッシュ！」

もはや阿吽の呼吸だ。

「……お、藤枝さんからメールだ。あっちも1点売れたってさ。恵流ちゃんの絵は交渉中で、1点50万以上の値がつきそうだって」

小さなガッツポーズのまま、陽が動きを止めた。

「50万?!」

「おう。2点で100万」

「……すげえ。いいのかな、そんなに」

「妥当だろ」

パソコンをチェックしながら、優馬は事も無げに言っただけのける。

「妥当って……100万だよ？俺の絵が。100万円……」

「いや、まだ安いね。もっと吊り上げてても良い位だ」

ガッツポーズを解いた陽は、そわそわと腹のあたりを撫で擦った。

「ちょっとそれは……強欲すぎない？大丈夫？」

「いいんだ。あの絵はそれだけの価値がある。それにな、絵の値段なんて言ったもん勝ちだ。ババーン！ってな」

「怖え……優馬さん、怖え。マジ守銭奴。俺いま、ちょっと戦慄した。」

「誰が守銭奴だよ。ちゃんと営業努力もしてんだろ？さっきみたいに、お客さんと話したりさ。絵の出来映えはもちろんだけど、そういう地道な活動も大事なわけよ」

「なら俺、ずっとここに居て絵を売ってる方がいいんじゃないの？」

パソコンから顔を上げた優馬は、今度はデスクの引き出しの中を探りファイルを取り出ししながら、片眉をひょいと上げてしたり顔をしてみせる。

「それだと絵を描く時間が削られるだろ。それにな、いつでも会えるんじゃ、あれだ。あー……レア感？ありがた味が薄れるじゃん？」

「ありがた味い？ ……俺、そんな柄じゃないって」

「だな！」

優馬が力強く同意する。

「だからチラッとしか出さないんだよ。あんま表に出し過ぎるとボロが出るから。たまーにチヨ口ってご本人登場！って感じで現れてさ、『アーティストでござい』って顔してるぐらいでギリだよな。お前の場合」

「……ござい……」

「ハッター効かないからなー、お前」

「……すんませーん」

全く反省していない様子で、陽が下唇を突き出してみせる。

「だからさ、営業時間不定期にしてまで俺が店番するわけ。お前を呼ぶ時の相手も俺が判断する。怪しいヤツとか単にミーハーなお姉ちゃんとかさ、メンドクサそうな客のときは、呼ばないだろ？」

「……ハイ。すんません、あざっす」

「わかればよろしい」

「んじゃ俺、大人しく続き描いてきまっす」

陽はわざとらしく踵を鳴らし、直立不動の姿勢を取った。

渡辺くん、一人称が「僕」と「俺」入り乱れちゃってます。緊張してたのね。

それと陽くん。しっかり口止めしとかないと、優馬さんに恥ずかしい台詞バラされちゃいますよ。

陽のスタジオ設立パーティーが縁で受けた仕事は、そこそこ有名なバンドのPVへの出演だった。

関係者を自宅へ招いての打ち合わせでこの絵に目を留めた者があり、そこから巡り巡って、この絵をイメージしてPVが作られることになったのだ。

暗闇の中、小枝を手にした私の周りに黄緑色の光の点が踊っている。

光を映して緑色に輝く瞳はうっとり細められ、まるで魔法の小枝で光の群れを操り、共に踊っているかの様だ。

闇に溶け込みながらふわりと回るスカートの裾から飛び立ち、揺れる髪の毛の先に戯れ、白い肌と艶やかな黒髪を幻想的に照らす、無数の光の点……

それは、誕生日に陽から贈られた、一枚の絵だった。

† † †

あれは去年の夏、陽と共に過ごしたミュンヘンから次の仕事へ向かい、東京に帰ってすぐのこと。

私は陽に連れ出され郊外へ向かった。

どこへ向かうかも知らされず、レンタカーに乗せられて濃い緑の樹々が生い茂る山道を走り続けた。

途中、川魚を食べさせる店に立ち寄ったり車を降りて景色に見入ったりしながら、人気の無い山の中へ分け入って行き、漸く車を止める頃には辺りは暗くなり始めていた。

舗装された道を逸れて脇道に入り、車を寄せる。

車から降ろされると、目を閉じるように言われた。陽はそのまま私を抱え上げ、濃厚な緑の芳香の中、川辺の砂利を踏んで進んで行った。

街中の暑さと喧騒を忘れてしまいそうにひんやりと心地よい空気を感じ、水音と砂利を踏む音を聞きながらしばらく進むと、陽は私を降ろして眼を開けさせた。

そこは、無数の光が飛び交う水辺だった。

暗い緑の影の中、黄緑色のホタルの群れが明滅を繰り返しながら飛び回っている。

あまりに幻想的な光景に息を呑み、私は思わず言葉も無く辺りを見回した。

しばらくの間、うっとりとその光景に浸っていた私は、陽を振り返った。

少し離れて立っていた陽は、微笑みながら小首を傾げ、私を見つめていた。

「気に入った？」

十 十 十

出来上がったPVは、その曲のほとんどの時間が様々に形を変える光の点を相手に踊る私の映像だったため、私は舞踊関係者以外にも広く存在が知られることになった。

また、映像関係との人脈も広がり、新たな舞台への様々な構想が次々に持ちかけられ始めている。

先のミュンヘンでのダンス動画と相まって、今まで以上に私の世界は広がり、それにつれ、あちこちから公私ひっくるめた誘いがかかるようになった……

「ねえ、陽。心配？」

「え、なにが？」

私の質問に、陽はキョトンとした表情で聞き返す。

「なにって……言ったでしょう？ ここ最近私、いっぱい誘われるの。こないだだって、またあのバンドの人からしつこく誘われたし」

「ああ、五島さん経由でね」

PVの仕事はとっくに終わったというのに、まだしつこく連絡してくるのだ。煩わしいったらない。

「しかも速攻で断ったって」

「そうだけど……」

「それ話したときの夏蓮、すごくメンドクサそうな顔してたもん。それにさ、五島さんがいつもビシッと断ってくれてるし。第一、夏蓮は自分が嫌なことには指一本動かさない。無理強いなんてされたら、えーっと……何だっけ。蹴り入れて関節外して絞め落とす？ でしょ？」

……そんなことも言ったわね。ちゃんと憶えてたんだ。

「だから俺、なにも心配してないよ」

「そう……」

……いいんだけど。確かにその通りだし、別にいいんだけど。

「大体、夏蓮がモテモテなのは、今に始まったことじゃないじゃん。あ……もしかして、心配して欲しかった？」

悪戯っぽく微笑んでこちらを覗き込む陽はなんだか楽し気で、ちょっと腹が立つ。

「別に？」

冷たく言い放ち、急いでそっぽを向く。

「ヤキモチ妬いたりとか？」

そっぽを向いた方にわざわざ回り込んで、また楽しそうに笑う。

……なに笑ってんのよ。本当に頭に来る。マジで蹴り入れてやろうかしら。

殺気を感じたのか、陽は素早く身体を引くと、「サッ」と言いながら顔の前で両腕をクロスさせた。

.....あんなのでガードしたつもりなのかしら。

そう思いつつ、つい吹き出してしまう。「サッ」って何よ。口で言ったって意味無いでしょう？

私が吹き出したのを見て、陽は嬉しそうに目尻を下げ、えへらと笑う。

この顔を見てしまうと、怒りを持続させるのは難しい。

「でもさ。もし夏蓮が他所に行っちゃったら、ヤキモチじゃなくて.....悲しくなっちゃうな。すごく悲しくなる」

.....腕をクロスしたまま何言ってるのよ。急に、何なのよ。クロスの陰から覗くの止めなさいよ。可愛いじゃないの！

熱い手で心臓を掴まれたみたい。甘酸っぱい痛みに、頭がクラっとした。

「馬鹿じゃないの？ 他所へなんか、行くわけじゃない。ほんと、バッカみたい」

素早く後ろへ回り込み、両手でほっぺたをつねり上げてやった。これなら紅潮した頬を見られなくて済む。

まだ腕をクロスしたままウガウガ呻いている陽を見てようやく気が済んだので、一旦手を離し、情けない悲鳴をあげるのを無視してほっぺたを思い切りぐりぐりマッサージした後で、解放してあげた。

なんというか、若干タイムリー(?)な内容になってしまいました.....

あの話題ですよ、ホラ。ほにやらの極みうんちゃらのw ...とは言っても、ちょっと掠ってるかな?程度ですが(-.-;

これ書いたの、半年以上前なんだけどな.....まあ、バンドマンなんて大抵手が早いも

んね。(偏見)

おまじない

次の舞台では、映像をふんだんに取り入れようと思っている。
今までのような照明による効果のみに比べ、より多彩な表現が可能になるのだ。

例のPV絡みで映像関係者との繋がりが出来たおかげで、予算等の都合で先送りにしてきた構想が、実現に向けて急激に進みつつある。

まだ始まったばかりのプロジェクトだが、しっかりした手応えを感じる。

「あの絵のおかげよ。陽のおかげで、ずっとやりたかったことが形になりそう」

「絵はただのきっかけだよ。あとは夏蓮の実力」

「ふふ。実力については否定しないけど。でもね、なんだか色んなことが上手く回り始めてて、今まで以上に好調なの。運気が上がってるっていうか……追い風に吹かれてるみたい。陽はほんとに、私の守護神」

胸の痣をそっと撫でると、陽はくすぐったそうに身を振った。

「夏蓮はその痣、ほんと好きだよな」

「だって、花の蕾みたいなんだもの」

歪な紡錘形の痣は、ほんの少し大きくなったように見える。花の蕾が膨らんだみたいに。夏蓮はその蕾に水を与えるかのように、いつもそっと、指先を這わせる。

陽の胸に咲くのは、夏蓮の好きな真紅の薔薇か、それともほの紅い蓮の花か。

蓮の花だったらいいな、と秘かに思っていることは、絶対に口にしないつもりだ。あまりにも少女趣味じみて、恥ずかしすぎる。

胸元のペンダントを手繰り、月桂冠に囲まれた五芒星を紅の痣に押し付ける。

「今度は何？ おまじない？」

「まあね」

ペンダントごと、陽は夏蓮の手を握り、さらに強く押し当てる。

「何のおまじない？」

「教えない」

.....ちょっと意地悪をしたくなってしまった。

「でもさ。もし夏蓮が他所に行っちゃったら、ヤキモチじゃなくて.....悲しくなっちゃうな。すごく悲しくなる」

悲しくなる、とは言うけれど、陽は「行くな」とは言わなかった。「他所へ行ったら嫌だ」とすら言わない。

陽は、私に何も求めない。押し付けない。

そりゃ、無闇に束縛されるのは御免だし、過去の男達のように異常に縋り付かれるのも鬱陶しい。

でも。

ちょっとぐらい、何か言ってくれてもいいじゃない？

泣きながら跪いて愛を叫べとまでは言わないけど（正直、ちょっと見てみたいけれど）、たまには.....そう。「お前は誰にも渡さない！」とか.....

カッと、頬が熱くなった。

.....馬鹿みたい。まるっきり、浮かれた馬鹿女だわ。こういうの、前は本気で馬鹿馬鹿しいと思ってたのに。

恥ずかしくなったので、陽の手に噛み付いて誤摩化した。

陽はクスクス笑うばかりで、されるがままになっている。

いつもそうだ。

陽は穏やかに微笑みながら、ただそこに居る。

太陽みたい。

自分は動かず、光を、温もりを、喜びを、ただ分け与えてくれる。

「……実は俺もね、おまじないしてるんだ」

「？」

噛み付いたままなので喋れない私は、目だけで陽を見上げた。目が合うと陽は、これ以上無いというほど優しく微笑みかけてくれ、そしてすっと目を逸らした。

「『ヴィーナスシリーズ』にはね、全てアポロンとヴィーナスに関するモチーフを忍ばせてる。気付いた？」

いまや十点以上はあるだろうか、私をモデルにして描いた一連の絵は、いつからか『ヴィーナスシリーズ』と呼ばれ、人気作品となっていた。

「ミュンヘンで描いた最初の水彩画から、ずっとだよ。星座とか月桂樹の葉っぱとか、五芒星。クリスマス以降の絵にはこのペンダントを描いてるし、あのホタルの絵で夏蓮が持っているのは、月桂樹の枝なんだ」

……ペンダントには気付いてたけど、他には気付かなかった。

私は陽の手を齧るのを一旦中止した。

「何のおまじないなの？」

陽は口籠って、解放された手で耳たぶを弄くり始める。

「えっと、あの……ずっと一緒に居られますように、的な？」

「的な？ って、何よ」

「いや、恥ずかしいじゃん。今の話の流れでさ、言わないと内緒にしてるみたいになっちゃうから白状したけどさあ……いざ口に出して見ると、我ながらたじろぐほどキモイわ」

どうやら陽は、本気で照れまくっているらしい。顔が赤い。

「あのね、最初はさ、なんていうか……記念？ 記録？ みたいな気持ちで描いたんだ。ほら、夏蓮が『運命の恋人同士』って言ってくれたのが、強烈に印象的だったから」

陽は目を逸らしたまま、まるで弁解するみたいに早口で話し続ける。

「でもなんか、だんだん……そうありたいって。ほんとに運命で、ずっと続いていけたらいいなって、思って……おまじないって言うか、願掛けに近いかなあ」

……なんで願掛けなんてしてるのよ。この人、馬鹿じゃないかしら。って、私も似た様なことしてたんだっけ。

「なんで私に直接言わないの？ こっそり願掛けなんてしてるより、私にそう言えばいいじゃない」

「だってさあ……」

何か言いかけて、陽は口を噤むと身体を捻ってうつ伏せになった。組んだ両手の上に顎を乗せる。

「そんなこと言ったら迷惑かな、とって」

言葉を変えたのが、分った。

言い難いことを言うとき、陽は目を逸らす。耳たぶを弄るのは、自然に俯くのに都合がいいからだ。

で、嘘を言う時には顔を背けるのね。声のトーンも下がってるし。全く、嘘が下手すぎる。

……本当は何を言おうとしたのか、気にはなるけれど。言いたくないのなら、聞かないでおきましょう。

「何よ、迷惑って。じゃあ陽は、私が『ずっと一緒に居たい』って言ったら迷惑なわけ？」
「そんなわけないじゃん」

陽はムキになったみたいに急いで振り向いた。

うっすらと微笑む私を見て、ちょっと慌てたように再び目を逸らす。

「迷惑になんて、思うわけないじゃん。………嬉しいよ」

「私だって嬉しい。だから、ちゃんと言ってよ。口に出して」

「……でも、キモくない？」

「ない。いいから言って。聞きたいのよ」

……グズグズしてないで、さっさと言いなさいよ！

ちょっといらついたので、陽のつま先を何度も蹴飛ばしてやった。

「わかった。えっと……夏蓮と、ずっと一緒にいたい、です……出来れば」

……ああ、もう！何なのよ！煮え切らないわね！

「なんか、最後に余計なのついてたけど」

「だってさあ……」

陽は少し眉をしかめた。下唇を引き込むように噛みしめていたが、絞り出すように、頼りな気な声を出す。

「……口に出して言ったら……言いさえすれば、ずっと一緒にいられるの？絶対に？……ずっとだよ？」

……そうね。

母親も父親も失踪、元恋人とは死別。臆病にもなるわよね。

じゃあさっき言いかけたのは……「そんなこと言っても意味が無い」みたいなことだったのか

しら。

この関係もいつかは終わるのだ、いつ終わるのかと怯えを抱きながら、ひっそりと願いを込めて描く。そんな陽を思うと、鼻の奥がツンとして涙が浮かんでしまいそうだ。なんて、いじらしい。健気すぎる。

でも、我慢して。

こんな時こそ、いつもみたいに強気に！ 自信満々の笑顔で！

「じゃあ、小指出して」

「……また齧るの？」

思わず吹き出してしまい、鼻の奥にあった涙の気配は消え去った。良かった。

「違うわよ。ほら、指切りげんまん。約束するの。ずっと一緒、って」

陽の瞳に一瞬、怯んだ様な揺らぎが見えた。

……そんな顔したって、逃がさないわよ。

「そんな子供みたいなこと……」

モジモジしている陽を無視して、強引に手首を掴み指切りの形を取らせる。

「子供だろうが大人だろうが、約束は約束。いいわね？ はい、ゆーびきーりげんまん、嘘ついたら……針千本飲ませてから丸坊主にして油性ペンでおでこに肉って書いてピンヒール履いてお腹の上でフラメンコおーどる！ 指切った！」

絡ませた指を離れた後も、陽は自分の小指を困惑した表情で見つめている。

「……なんか、俺の知ってる指切りと違う。しかも、お仕置きは俺がされる側限定だし」

「いいのよ、破らなきゃ良いんだから。何か問題でも？」

思いっきり高圧的な感じで微笑みかけると、陽は少し安心したみたいに、笑った。

「問題、無いです。へへ」

.....何なのよ。男のくせに、はにかむんじゃないわよ！

.....

.....

.....かわいい。

は一、長かった。しょーもないイチャイチャに付き合わせてしまってゴメンなさい.....

「ねえ、木暮さん。陽って、何か欲しいものとか無いのかしら？」

久々に会った煌月夏蓮は、前とは少し印象が変わっていた。
表情というか、醸し出す雰囲気は柔和になり、優し気に見える。

「さあ、無いんじゃないですかね。着るものにも無頓着だし、メシだって何でもいいみたいだし、時計も車も要らないって言うし……」

「イマドキの、さとり世代とか言うヤツかしら？」

深い青色の棚に肘をつき、両手で顔を挟んで小さくため息をつく。

「うーん……って言うより、絵以外のことに興味が無いみたいですね。ほんと、いつつも描いてるから。最近特に凄いんですよ、集中度合いが」

紙コップで悪いですけど……と断って優馬が入れてくれたコーヒーを、夏蓮は両手で受け取った。

「鬼気迫る勢いで、一心不乱にね。もう、お絵描き魔人。いや、仙人だな。お絵描き仙人」

ふっ、と優しく笑う夏蓮の表情に、優馬は少し驚いた。

(この人、こんな顔も出来るんだな……)

「身体が心配なくらいでね。時々、カレンさんがこうして連れ出してくれるので、本当にありがたいです」

「ホントよ。強引にでも引っ張り出さないと、イーゼルの前から動かないんだもの。もうじき誕生日なのに、それも祝わなくて良いとか言い出すし」

「ああ……」

.....あの馬鹿。何なんだくそ馬鹿やろう。どんだけマイペースだ。こんな人にまで気を遣わせるとか。

「えーと、ほら。『いつも洋服とか買ってきてくれるから、申し訳ない』って.....よく言ってますよ。今やあいつのワードローブ、カレンさんコーディネート率100パーですから」

精一杯のフォローに、カレンは少し嬉しそうに肩を竦めた。

「ふふ。正直、苦勞するわ。無頓着なわりに変なこだわりだけはあって。襟無し、ゴム無し、ファスナー無しで、身体を締め付けない服.....なんて、下手したらそれこそ仙人みたいになっちゃうもの」

「ですよねえ。いっそ、作務衣でも着てりゃいいんだ」

優馬の軽口に、カレンはハッとして動きを止めた。おもむろに背を伸ばすと、目がキラリと光る。

「.....それも似合いそうよね」

音も無くドアが開き、爽やかな風が吹き込んできた。
遠慮がちに入ってきた青年に、優馬が声をかける。

「やあ、渡辺くん。いらっしやい」

「どうも.....こんにちは」

振り返った夏蓮と目が合い、入り口で立ちすくむ渡辺に、優馬は椅子を指差して勧めた。

「カレンさん、こちら渡辺くん。うちのお得意さんです。渡辺くん、こちらは煌月カレンさん。陽の.....」

「お、僕知ってます。動画見ました。大月さんと踊ってた人ですよね」

俺、と言いかけて僕と言いだした渡辺の声は、興奮の為に少々うわずっている。

「あら、見てくれたのね。ありがとう。嬉しいわ」

夏蓮はとびきりの営業スマイルを投げかけ、優馬に倣い手振りで椅子を勧める。
渡辺は恐縮した様子で、椅子の端に引っかかるように腰掛けた。

「今日は悪いね。なるべく早く……そうだな、3時間もかからずに戻れると思うから、よろしく頼むね。車出して菜を健診に連れて行って、その後実家まで送る予定なんですよ」

後半は夏蓮に向けて、優馬が簡単に説明をする。
菜を実家へ送り届けてここへ戻り、店を閉めたら今度は車で打ち合わせへ向かうのだ。

「忙しいのね」

「おかげさまで。車が1台しか無いんで、今日みたいにふたり用事が重なるとちょっとバタつきますね。そのうち社用車でも買おうかと思ってるんですが」

紙コップのコーヒーを差し出すと、渡辺はペコリと頭を下げてそれを受け取った。

「今日は渡辺くんが店番してくれるって言うんで、助かりました」

「あ、いえ。バイトまでの暇つぶしなんで。ここ、なんかすごく落ち着くし。絵もじっくり見られるし」

妙に恐縮した様子で、渡辺は紙コップに口を付けた。熱かったらしく、飲むのを止めて顔を僅かにしかめながら上唇を舐めている。

「学生さんなのね。バイトは何をしているの？」

夏蓮の問いかけに、渡辺は背筋を伸ばした。

「はい、美大で建築デザインを勉強してます。バイトは探偵事務所で受付と助手を……」
「探偵事務所?!」

夏蓮が驚きの声を上げた。

「私、探偵さんとかって初めて会うわ。なんだか感激」
「ですよ。普通は縁が無いから」

渡辺は慌てて首を振った。

「いや、俺は単なる事務のバイトなんで。授業で『人の使う施設を作るなら、人間をよく知らない』って言われて……ちょっと前に世話になった探偵さんをお願いして、バイトさせてもらってるんです。いや、あんまり面白くはないですね。結構きついです。なんか下世話だったり、ドロドロしてたりするし。人間嫌いが加速しかけて」

「人間嫌い？」

「あ、えっと……」

興味津々のふたりに答えるうち、失言をしてしまったようだ。

しまった、という風に、渡辺はほっぺたを人差し指でコリコリ掻いた。

「人間嫌いっていうか、人間不信？ ちょっと上手く言えないけど。あ、でも……」

深く聞いていいものかどうか……優馬と夏蓮が目配せし合い、一瞬妙な空気になってしまったところに、扉を開けて、陽が現れた。

「夏蓮、お待たせー」

ニコニコしながら暢気に手を振りつつ、もうひとりの来客に気付いた。

「あ、渡辺くん。いらっしゃ〜い」

「どうも。お邪魔してます」

完全に空気が変わった。ほんのりとした気まずさは一掃され、4月末の午後にふさわしい新鮮な風が吹き込んできた様だ。

(……こいつ、能天気で良かった)

陽のこの空気の読めなさに、優馬は秘かに感謝した。

時たま、いっそ頭に鳥でも停まってれば似合いそうだと思うこともあるが、今回はその能天気さに救われたというものだ。

「あれ、鳥の羽根ついてる」

優馬の頭の中を読んだようなタイミングで、陽が呟いた。

そっと手を伸ばし、渡辺の背中についていた小さな黄色い羽根をつまみ上げる。

「あ、ピロちゃんのだ。俺、インコ飼ってるんです」

へえ、と唸りながら、陽はつまんだ羽根をくるくると回し、観察している。

「ねえこれ、貰ってもいいかな？ なんかに使えそう」

優馬「何にも欲しがらないくせに、ようやく欲しがったのがインコの羽か……」

陽「え、なに？ 急に」

夏蓮「さすがお絵かき仙人だわ」

陽「意味わかんね……」

ギャラリーにて思う

陽はインコの羽根を厳重に保管すると、夏蓮と連れ立って出掛けて行った。優馬はいくつか注意事項を挙げた後、渡辺に店を任せ慌ただしく外出した。

ひとりきりになった渡辺は、シンとなったギャラリーを見渡す。人が居ないと、急に広く感じられた。

深く濃い青色の壁に囲まれた店内は、夜の海を思わせる。

渡辺は立ち上がると、まるで海底を散歩しているかのように、ゆっくりと歩き出した。

珊瑚に群がる美しい魚を覗き込むみたいに、ひとつひとつ絵を観て行く。じっくりと、注意深く。

領収証の書き方も習ったし、印紙の保管場所も教わった。来客用のコーヒーやお茶の準備も万端だ。

でも、と渡辺は思う。

もうしばらく、この場所を独り占めしていたい。

数々の素晴らしい作品を心ゆくまで堪能し、大好きな絵に囲まれそのパワーを浴びていたい。

.....売上はあった方がいいのはわかっているけれど。でも、誰も来なければいいな。

† † †

小一時間も過ぎただろうか。

来店するたびに入れ替わっている絵を存分に楽しんだ渡辺は、カウンターに頬杖をつき物思いにふけていた。

憧れの画家さんとお近づきになって、店番まで任されるようになるなんて、思ってもみなかった。特に、宮内の件もあるのに.....あんなに失礼なことをした男の知人だというのに、当たり前のように受け入れてくれて。なんて大らかな、優しい人達なんだろう。

それどころか、親からの援助を打ち切られて海外での生活が苦しいと言っていた宮内に、アドバイスまでしてくれた。

『外国人の名前に漢字を宛てて、その文字からイメージする絵を描く』という陽のアイデアが大受けし、とりあえず当座の生活には困らなくなったらしい。

宮内は悔しがりつつも感謝していた。

「こないだドイツ行ったとき、漢字がやたら受けてて.....自分でやろうと思ってたけど、なんか忙しくなっちゃったからさ。良かったら宮内くんやってよ」

.....そう言ってヘラッと笑ってたけど、自分のプランをあっさり人にあげちゃうなんて、なかなか出来ることじゃないと思う。

俺だったら、誰にも話さずにあつためておいて、じっくり熟成させつつ、時間が出来たら自分でやるだろう。

挙げ句、お礼の話になった時には。

「そんなのいいよ、俺は思いつきを話ただけなんだから。上手くやって成功させたのは、宮内くんの実力でしょ？ 権利？ 何それメンドクサーイ」

.....ってニコニコしてたけど。木暮さんも「陽がそれでいいなら」とか言っちゃうし。大丈夫かな、あの人達。商売つけがなさ過ぎる。優しいを乗り越えて、お人好し過ぎるよ。

お人好し？ んー、なんか違うな。余裕？ 自信？ 器のデカさ？

木暮さんのPCと一緒に宮内の作品を観た時だって、「おー、いいじゃんいいじゃん」なんて軽く言ってたし。なんならちょっと嬉しそうだったし。

なんか、ゆる～くてウエルカムな感じ？ 何でもオッケーみたいな……いや流石に、何でもってわけじゃないだろうけど。

ああ、壁か。心の壁が薄い？ 低い？ ……っていうか、無い？ 常に窓全開？ いやいやいや、まさか。でもホントにそんな感じだしなあ……

そういえば……と思いあたり、渡辺は立ち上がって改めて陽の絵を眺めてみた。

初めて陽の絵を見た時の衝撃を思い出す。

衝撃と言っても、それは温かく柔らかで、穏やかな海の温んだ波が優しく寄せるような……心に纏った固い殻をふわりと撫でられたような……そんな感覚だった。

陽の絵は、優しい。限りなく優しい。

色んなものを飲み込んで、受け入れて、流して、解き放って、包んでくれて……

愛、という言葉が唐突に浮かんだ。

その瞬間、経験したことの無い痛みが、胸を熱く貫く。

まさか、そんな。

この自分から、そんな言葉が出てくるなんて。

あまりに唐突に、またあまりに意外な言葉が思い浮かんだことに動揺し、渡辺はひとり額を擦った。

まさか、そんな。

でも。

大月陽の絵の前に立った時に、確かに感じる何か。

ほんの少しだけれど、肩の力が抜けて呼吸が楽になる感じ。

絡み合い凝り固まった心の僅かな隙間に温かい空気が潜り込み、ふわりとほぐれるような。

ああ、あれだ……冷たい風に晒されて凍え縮こまっていたところに、急に陽射しが指す瞬間。

あの、安心してちょっと涙ぐみそうになる、ほっとする瞬間に似てるんだ。

大月陽の絵は、柔らかな陽射しみたいだ。

寒くて苦しくて震えていても、その絵の前では少しだけ楽になれる。ほんのひと時、赦されている気がする。こんな自分でも。

その赦しが欲しくて、大月陽の絵を求めてしまうんだ。

気付けばほろほろと涙を流しながら、渡辺は部屋の真ん中に立ち尽くしていた。

心の奥底で秘かに望んでいたことを自覚し、それがおそらく叶わないことを悲しみ、声も出さずに泣いていた。

悲しくて辛くて申し訳なくて。でも、赦されたくて。

大月陽の絵を全身に浴びるかのように、渡辺は密やかに涙を零しながら静かな呼吸を繰り返した。

† † †

結局その日、客は来なかった。

木暮優馬が戻る頃には、渡辺は既に平常心を取り戻していた。感情を抑えるのはわりと得意なのだ。

「出先でチャチャッと作ったんだけどさ、陽の作品画像集。壁絵とか、色々デザインしたヤツとか、特典動画を作ってない絵ばかり集めたんだ。メールで送っといたから。今日のバイト代替わりってことで」

そう言いながら木暮さんは、オープン記念の時に作った非売品のグッズやおまけのポストカードなんかもたくさんくれた。

たかが3時間ほどの店番で、ここまで大盤振る舞いしてくれるなんて、やっぱり商売っ気が……

「権利関係問題ないやつだから、人に見せてもネットに上げて大丈夫。ってことで、気が向いたら宣伝ヨロシク〜」

ニコニコしながら両手でピースサインを作り、指をチョキチョキしている。商売っ気があるんだか無いんだか……この人も、なんだか不思議な人だ。

でも、素敵な人だ。すごく、素敵な人だ。

人間不信は相変わらずだけれど。

ひとくちに大人と言っても、色んな人がいるんだよな。うちの親や教師みたいなのばかりじゃないんだ。そんな当たり前のこと、何で今まで気付かなかったんだろう。

大月陽の作品だけではなく、陽本人とそれを取りまく人達にも、いつの間にかほんのりとした好意を抱き始めている自分に気づき、渡辺は少し嬉しくなった。

渡辺くん、けっこう情緒不安定です。

夏蓮と大月陽が連れ立っているのを見るのは、久し振りだった。

以前は姉弟の様にも見えたものだったが、今の大月陽は物腰が落ち着き堂々として見える。とはいえ、威張っているとかそういうことではなく、ごく自然に夏蓮の傍に寄り添っていて、年齢差を感じなくなっていた。

小さなホームパーティーに集まった共通の知人達は、主に夏蓮の変化に驚いている様だ。

「表情が明るく柔らかくなった」「口調が優しくなった」「とにかく幸せそうだ」
口を揃えてそう言われ、夏蓮本人は照れながら謙遜していたが、それがまた周囲の驚きを誘う。
以前の夏蓮なら、『謙遜』なんて言葉とは無縁だったはずだ。

大月陽が楽しそうに「そうなの？」と覗き込むと、夏蓮ははにかみながら「別に、普通よ。みんなからかかってるだけ」と彼の背中に隠れてしまった。

微笑ましい筈のその光景から、五島は思わず目を逸らした。
見ているこっちが恥ずかしくなる。

はにかんで頬を赤らめる夏蓮.....そんなもの、見たくはなかった。

そんな姿、夏蓮らしくない。もし口に出してそう言ったとしたら。

以前の夏蓮なら「何が私らしいかは、私が決めるわ」と、ピシャリと撥ね付けたらろう。
だが、今は.....？

もし別の答えが帰ってきたらと思うと、嫌な気分になった。

別の知人と目が合ったふりをして、五島はその場を離れた。

「やあやあ、五島くん」

声をかけてきたのは、夏蓮の叔父だ。

オーケストラの指揮者であるこの叔父は、昔から夏蓮をいたく可愛がっている。この度も夏蓮の舞台上で使用する音楽について相談したところ、オーストリアからわざわざ飛んできたのだ。……というと単なる叔父馬鹿のようだが、実は舞台映像の現場というものを見たかったらしい。年齢の割にかなり好奇心旺盛でフットワークが軽く、言葉は悪いがミーハーなところもある男だ。

「さっき大月くんに挨拶したけど、彼、様子がだいぶ変わったねえ。随分しっかりして。まあ、『男子三日会わざればナントカって言うしねえ」

「『男子三日会わざれば刮目せよ』、ですか？」

「あ、そうそう。それ。孔子も良いこと言うねえ」

「呂蒙です。孔子じゃなくて」

「ん？ ああ、そうか。ははは。こりゃ参った」

ちっとも参っていない調子で笑うと、スタッフと談笑し合う夏蓮達を嬉しそうに目を細めて眺める。

「刮目と言えば、夏蓮もだ。幸せそうで、匂い立つようじゃないか。恋する乙女って感じだねえ」

「乙女……って年齢でもないでしょう。さすがに」

いやいや、と彼は大仰に目を見開き首を振る。

「女性はね、恋をすれば、いくつになっても乙女なのですよ」

「……それは誰の言葉ですか」

「さあ……歌の歌詞かなにかじゃないかなあ。ははは。まあ何にせよ、夏蓮が幸せならば私も嬉しいよ。お似合いのカップルだ。いやあ、若いって素晴らしいねえ」

自分の鼻唄に指揮を執りながら去って行く背中を見送りながら、一瞬、ネクタイを耑り取り携帯電話も何もかも投げ捨てて帰ってしまいたい衝動に駆られる。
だが、五島はなんとかそれを押さえ、口の中で呟くに留めた。

.....全く、どいつもこいつも.....揃いも揃って愛だ恋だと。うんざりだ。

まあまあごーちゃん、そうイライラしないで。帰ったらお部屋で瓦でも割りなさい。

最近の陽は、少し沈んでいる。

きっかけは一通の転居通知葉書だった。

差出人は陽の高校時代、美術部の顧問だった教師。

それまで自己流で描いていた陽に、絵の描き方を教えてくれたという恩師だ。

今年から転勤になり、すでに遠方へと転居しているとの報せだった。

「大友政直」という戦国武将の様な名前に見覚えがあり資料を見返したところ、その名前は藤枝のギャラリーの芳名帳にあった。陽の絵に興味を示した客のリストを、こちらのギャラリーの芳名帳と合わせて共有管理しているものだ。

その名前は、今年に入ってすぐ、藤枝のギャラリーでのみ記帳しており、こちらには記名がなかった。

「優馬さんが言うように、たまたまこっちが留守だったとしてもさ、連絡ぐらいしてくれればいいじゃん？ メールでもコメントでもさあ」

初めは口を尖らせてブツクサ言っていただけの陽だったが、先ほど天本社長に電話した際、実はだいぶ前から転勤が決まっていたことを聞かされ、本格的にしょげてしまったのだ。

いや、しょげたというより、自分だけが知らなかったことに拗ねた、という方が正しいかもしれない。

「お前ね、いい大人がそんなことでヘソ曲げてどうするよ。長年勤めた学校を転勤だろ？ そりゃ相当忙しかったんだって。天本社長には、見舞いのついでにでもに話したんだろ。大体さ、大勢いる卒業生、全員に転居通知出したと思うか？ 可愛い教え子だから、お前は特別に貰えたんだろ？」

慰めるつもりでそう言うと、陽はほんの少し表情を和らげた。

「そうかなあ……あ、でも、そっか。住所変更だけなら、暑中見舞いや年賀状でも済むんだも

んね。なのに、わざわざ報せてくれたのか」

「な？ってお前、年賀状も暑中見舞いも出してんのか」

陽は、当然のようにこくりと頷く。

.....今時珍しい、律儀な奴だ。俺のところには来ないが。俺のところには来ないが。

「え、なに？ もしかして優馬さんも、年賀状欲しいの？」

考えが顔に出てしまったのだろうか、しょぼくれた様子から一転、わざとらしい苦笑いでからかうように覗き込んでくる。前言撤回、なんと生意気な若造か。

「さっきまで『せんせえ、黙ってお引越しなんて酷いよお』とか拗ねてた奴から欲しいものなど、何も無いね。大体ヤローから年賀状なんてもらって嬉しいか」

「拗ねてないし！ どうせ来たならこっちの絵も見てって欲しかったってだけだし！ ってか今の口調キモイんだけど」

ムキになって言い返すところを見ると、やはり凶星だったらしい。

優馬は笑いを堪えながら、壁時計を指し示した。

「それはそうと、時間はいいのか？ 渡辺くんちでインコ見るんだろ？」

「あっ！ そうだった。行かなきゃ」

水彩画セットを抱えあたふたと走り出て行った陽を、優馬は急いで追いかけた。

「おい、陽！ 鍵！ チャリの鍵忘れてるぞ！」

「あ、わりい。あざっす」

行ってきまーす！ と元気に挨拶し、立ち漕ぎで自転車を飛ばす陽を見送りながら、優馬は小さく笑った。

.....全く。やっぱあいつ、どっか抜けてるわ。

ま、しばらくはカレンさんも忙しいみたいだし、いい気分転換になるだろ。

優馬は大きく背伸びをして、ぐるりと肩を回した。

特典動画の編集が終わったら、店じまいにしよう。今日は久々に早く帰って.....あ、領収書溜まってんだ.....

領収書整理は家でやるか。優馬は瞬時にそう決めた。

同じ仕事でも、菜と優侍の声や気配を感じながらの方が楽しくできるというものだ。

優馬は鼻歌を歌いながら、分厚いガラスのドアを開けた。

陽くん近頃、ちょっと甘えっ子です.....

まあ、甘えられる相手が居るって、良いことなんですけどね.....けどね.....

掃除は、した。

普段から無駄な物を置かない主義なので、掃除はすぐに済んだ。

大月さんの絵も、額の埃を払って真っ直ぐに直した。

小さな冷蔵庫には数種類の飲み物も入っている。

ピロちゃんの部屋も綺麗にした。餌も水も取り替えた。

「よし」

ぐるりと部屋を見渡して確認すると、渡辺は鳥かごの扉を開け、そっと指を差し入れた。すぐさま「ピロッ」と声がして、ピロちゃんの温かな重みが指先に伝わる。

「ピロちゃん、今からお客さんが来るんだよ。来客自体久しぶりだし、初めて会う人だけど、大丈夫だからね。いい子にしてるんだよ」

指先に留まった黄色いインコは首を傾げて渡辺の声を聞いていたが、やがて腕を這い登り肩に止まると、うんと体を伸ばし渡辺の長めの前髪を啄ばみ始めた。

頬にかかる前髪で遊ぶのが、ピロちゃんのお気に入りなのだ。おかげで渡辺は、前髪を切ることが出来ずにいた。

しばらくインコと戯れていると、玄関のチャイムが鳴った。

「来た！ピロちゃん、いっかいお部屋に入ろうね」

インコはおとなしく渡辺の差し出した指に飛び乗り、鳥かごへ戻された。前の飼い主のおかげか、ピロちゃんはとても聞き分けの良いインコなのだ。

渡辺は客を招き入れるため、部屋を抜けて玄関へ向かった。

「これ、お土産。優馬さんが持って行けて」

大月陽から手渡されたのは、隣駅前のアップルパイだった。見慣れた箱から甘酸っぱい香りが漂っている。

「うわ、俺の大好物です。木暮さん、なんで知ってるんだろ」

渡辺は甘いものが好きだったが、何故か生クリームは好まない。和菓子か焼き菓子、パイやタルトには目が無い。中でもこの店は、子供の頃から鼻根にしている店だった。

「さあ。でも、店と商品名指定で言ってたよ。どっかで話に出たんじゃ……ないのか」

首を振る渡辺に、陽はちょっと不思議そうな顔をした。が、すぐに当たり前のように笑った。

「ま、優馬さんてそういうところあるし。なんでもお見通しみたいなの？……あ、おれ要らない。甘いもの苦手なんだ。それ、あったかい方が美味しいらしいから、食べて食べて」

一緒に食べようとして断られ、しかたなく渡辺は陽に飲み物を勧める。

「ありがと。甘くないのなら何でもいいです。それより、あの、インコを……」

そわそわと首を伸ばし鳥かごの方を窺いながら床に置いたクッションの上で膝立ちになり、陽は大きなバッグの中からスケッチブックを手探りで取り出している。

渡辺は陽の後ろを回り込み、鳥かごからインコを連れ出した。

「ピロちゃん、おいで。ほら、おもちゃだよ」

低いテーブルの上で鈴のついたおもちゃを振ると、黄色いインコは渡辺の爪を啄むのを止め、テーブルに飛び移った。

「わあ、すごい慣れてるんだね。咬んだりしないの？」

「そうですね。いじめたりしなきゃ、大丈夫だと思います。そのおもちゃ、鳴らしてあげると喜ぶますよ」

陽は布製のおもちゃを摘むと小さく振った。ちりちりと可愛らしい音が鳴り、インコがそれをつつく。

音を鳴らしながら左右に動かすと、よちよちパタパタと付いて回る。

「やっばい、可愛い。俺、ペットとか飼ったことないんだよね。動物は好きだけど、飼うのはなんか怖くて……あはは、なんだこれ。ヤバい、ちょう可愛い」

ピロちゃんはひとしきりおもちゃで遊ぶと満足したのか、陽の手に飛び移った。

「うわ、これどうしよう。どうしたらいい？ 助けて」

陽はピロちゃんの止まった左腕を突っ張ったまま硬直し、視線だけで渡辺に助けを求めてくる。渡辺は食べかけのアップルパイの皿を置くと、手を伸ばしピロちゃんの首のあたりをこりこりと搔いてやった。ピロちゃんは気持ちよさそうに目を細めている。

それを見て、陽もおそろおそろ指を伸ばす。

「こう？ ……こんな感じ？ ………おお」

ピロちゃんが目を瞑ると、陽はとても嬉しそうに、でも、小さな声で笑った。

「ヤバい、可愛い。そんであったかい」

ピロちゃんを驚かせないためか、声をひそめながら「うりうり、いい子だ」とピロちゃんに構う陽は、子供みたいだ。

インコ、妙にいい匂いしますよね……

それはそうと、次回から渡辺くんが長いことグダグダします。まあ若いしね、仕方ないかな。

陽がいつまでもピロちゃんと遊んでいるので、渡辺はふたつめのアップルパイに取り掛かった。ふたつ目に入ると、甘酸っぱいリンゴの奥からシナモンの風味がより強く香ってくるから不思議だ。

「さっきの話ですけど」

そう前置きして、渡辺は話のきっかけを作る。

「木暮さんって、なんか凄い人ですよ。何でも出来ちゃうし、カッコイイし、優しいし。ミスター・パーフェクトって感じです」

「うーん……本人は器用貧乏だなんて言ってるけどねえ。俺も素直に凄いと思うわ」

陽はまだピロちゃんに夢中だが、意識の半分はこちらに向けてくれたらしい。

「営業やらプロモーション活動はもちろん、俺の絵の特典動画の撮影も編集も、全部優馬さんがやってるしね。あと料理も上手いし話題も広い。スポーツ万能、楽器も弾ける。欠点といえば……ギャグが致命的に古いぐらいか」

あははは、と渡辺は思わず声を上げて笑ってしまい、急いで謝る。

「いや、謝るところじゃないし。今だにゲッツとかワイルドだろおとか言うしね、あの人」

渡辺はまた吹き出してしまう。

でも、なんか……僅かな笑いを顔に残したまま、渡辺は少し目を伏せた。

「俺、大月さんと木暮さんみたいな関係、羨ましいです」

「そう？……とか一応言うけど、実は俺もかなり自慢に思ってます」

「え……」

「え？」

驚いて顔を上げると、陽も驚いた様子でインコから目を離し渡辺を見返した。

「いや……そういうの、普通にサラッとと言うんだ、と思って」

「え、うん。だってマジで、いくら感謝してもしきれないぐらいだし。優馬さん以外にもね……」

すごく周りに恵まれてると思ってる。みんな、いい人たちばかりなんだ」

「ね、ピロちゃん♪」とインコを撫でながら、陽は心の底から嬉しそうに微笑んだ。

その笑顔を見て、渡辺は胸の奥が締め付けられた。脳裏に大好きだった人の顔が、ありありと浮かんだからだ。

ピロちゃんの、前の飼い主。

当時唯一の理解者だった従姉妹の宏ねえが亡くなってから、もう1年以上になる。

「.....いいなあ。そんな人たちに囲まれてて。だから、大月さんの絵は優しいのかな」

「優しい？そう？」

「はい。ちょっと怖いような絵でも、その奥に.....奥とか周辺に、優しさが滲み出てるというか、薫ってるというか」

「おお、それは嬉しいな。ってか渡辺くん、詩人だね。そういえば、前にも絵の感想をメールしてくれたよね」

「はい。どうしても伝えたかったから.....でも、ううん」

もどかしそうに顔をしかめ、首を振る。

「全然言えてない。伝えられてないと思う。もっと、違うんです。えっと.....うまく言えないな。すごくモヤモヤする」

渡辺は両頬を乱暴に擦った。

「うらやましい。絵の中に入りたい。絵の中の世界で生きて.....」

ハッとして口をつぐみ、両手を降ろす。

「生きて、と言わないまでも.....少しだけ雰囲気を感じてみたいなあ、って思います」

.....急いで取り繕ったが、きっとそれもバレているだろう。なんて返されるだろう。笑われるだろうか。

渡辺は窺うように陽を盗み見た。

ひとり遊びを始めたピロちゃんに構ってはいなかったが、優しい目で、まだじっと小鳥を観察している。

少し間をおいて、陽がぼつりと言った。

「……それ、いいね」

「え？」

急にワクワクした表情で空中に絵を描き、説明を始める。

「扉を開けるんだ。分厚い、でっかい扉。そしたら、絨毯の敷かれた廊下がまっすぐに伸びててさ……」

……一体、何の話デスカ？

「薄暗い廊下の両側には、ドアがずらーっと並んでる。ドアの横にはそれぞれ、ぼんやりした灯りが灯ってて。ひとつひとつのドアに、絵のタイトルが書かれてる。で、ドアを開けるとそのタイトルの絵の世界に入れるの」

「はあ……」

「ドアの向こうの絵の世界は、別の絵と繋がってたり繋がってなかったり。入ったきり戻れなくなるかもしれない……っていう絵。面白くない？ 描こっかな」

(絵の話かい！)

渡辺は思わず心の中で突っ込んだ。

……いや、絵の話だ。絵の話には違いないんだけど……違くない？ そうじゃなくない？ さっきの俺の話は？

半ば呆れつつ、陽を見遣る。

いつの間にか、陽の意識がピロちゃんを離れ自分の内側に向いているのがわかった。おそらく、目の前にあるものではなく、脳内に描かれている絵を見ているのだろう。

画家としての、ピロちゃんを観察していた時とはまた別の側面を垣間見た気がして、少し背筋がざわついた。

ほんの一瞬で、こんな風にスイッチが切り替わるのだ。

「タイトルはねー……渡辺博己の願望」

……突然フルネームを呼ばれて、ドキリとしてしまった。

そんなわずかな狼狽に気づくこともなく、陽は「ちょっと直球すぎたかな。タイトル付けるのって難しいよね」などと呑気に笑っている。

またスイッチが切り替わったのか、陽の表情は元の雰囲気に戻っていた。

陽「渡辺博己の野望、熱望、希望、欲望……展望？眺望？ふふっ。クスクス……」

渡辺「大月さん、連想ゲームみたいになってます（うわぁ、この人どこまでもフリーダムだ……）」

陽はおもむろにスケッチブックを開くと、何やら描き始めた。

こちらからは見えないが、視線の向きからしてピロちゃんを描いているのだろう。

「絵を描いてる時ってさ、その中に入れるよ。っていうか、描いてるうちに勝手にそうなる。頭の中と目の前のキャンバスと世界がさ、ぼわあって混じり合って、分け目なんてないんだ。面白いから、自分で描いてみたらいいよ」

「俺、絵は下手なんです」

「設計やってるんだよね？」

「それは、まあ。勉強中だけど」

「なら描けそうなもんだけど。ま、いっか」

鉛筆を走らせる手を止めず、陽は楽しそうに話し続ける。

「じゃあ、想像して。頭の中に、好きな建物を建てる。一軒家でも、大きいビルでも何でもいい。渡辺君が設計した建物、その建物の外側の風景は？ 中に誰を入れたい？」

「風景？わかりません。真っ白。ただの真っ白」

会話が噛み合っているのか、いないのか。それすらもわからないぐらい、大月陽の独特なペースに飲まれかけている気がする。

話の軸がコロコロ変わって、でも全体的にはちゃんと流れていて。

それぞれ速度の違うエスカレーターをいくつも飛び移りながら進んでいるみたいだ。もしくは、大きな川の流れの中にポコポコと浮かんで消える小島の上を飛び渡っているみたいだ.....

大月陽の作り出す流れに追いつくのが精一杯だったが、渡辺は目を伏せて集中した。集中して、想像する。

「建物も浮かばない.....あ、凶面引く用の画面が出てきた。でも、白紙です」

「じゃあ、そこに住む人は？」

「中の方は、誰も……特に誰も浮かばない」

「子供の頃の友達とか、好きだった人とか」

「俺の大好きだった人は、死んじゃいました。酷い女に騙されて、酷い死に方で」

一瞬、鉛筆の音が止まった。

だが、陽は何も言わず、すぐにまた鉛筆の音がサラサラと聞こえ始める。

目を閉じたままその音に耳を傾けているうち、段々と心が安らいでいくのを感じた。まるで、鉛筆の音がひび割れささくれ立った心を撫でてくれているみたいだ。

昔、宏ねえがそうしてくれたように。

「……従姉妹のお姉さんだったんです」

気づくと渡辺は、ポツポツと話し始めていた。

「昔から俺の悩みを真剣に聞いてくれて、味方してくれてた。父も母も話すら聞いてくれなかったのに、宏ねえだけが理解しようとしてくれた。でも……自殺しました」

結婚間近だった恋人の心変わりで、突然振られたこと。

その恋人の心変わりした相手が、昔の友人だったこと。

恋人の心変わりは、実は全てその友人の策略で、従姉妹は陥れられたこと。

宏ねえの尋常じゃない最期を不信に思い、探偵に頼んで調べてもらって、全てが明るみに出たこと……

今まで何度も何度も、調査報告書を読み返してはいた。

だが、宏ねえの件を他人に話すのは初めてだった。

なるべく感情を高ぶらせないよう、冷静に話していたつもりだったが、やはり最後には声が震えてしまうのを止めることは出来なかった。

「……宏ねえはそいつに巧妙に唆されて、恋人を道連れに死のうとして……失敗しました。追い

詰められて追い詰められて、結局独りぼっちで死んでしまった。悪い奴らは警察にも捕まらず、野放しです」

鉛筆の音は、いつの間にか止まっていた。

聞かれもしない身の上話をしてしまったことにバツの悪さを感じ、無意識のうちに弄んでいたフォークから視線を上げて陽を盗み見る。

彼はスケッチブックに描いた絵をじっと見つめたまま、ぽつりと言った。

「……だから」

続く陽の言葉に、渡辺は激しい動揺を覚えた。

「だから渡辺君は、この世界が嫌いなの？」

渡辺さんと宏ねえの詳しいお話は、「・・・のこい♡」で読めます（宣伝みたいでゴメンなさい）。

『この世界が嫌い』

そんな風に考えたことはなかった。

両親が嫌いだった。

思い切って悩みを打ち明けた自分をあっけなく突き放した両親が、嫌いだった。

助けを求めた手を振り払ったくせに、その後まるで腫れ物に触れるように猫撫で声で接してくる両親が、嫌いだった。

教師や学友達には、好き嫌い以前に興味がなかった。宮内を含め、何人か親しくした者は居たが、それはあくまでも表面上の付き合いで、特別な友情を感じることもなかった。

何より、そんな自分が大嫌いだった。

人に興味を持たない、人を信じられない、愛する気持ちにも優しい気持ちにもなれない。

子供の頃からそうだった。自分はどこかおかしいのだと感じていた。

成長して知識が増えるにつれ、自分が恐ろしくなっていた。

冷血漢、モンスター、サイコパス……いつか自分も、そんな言葉で呼ばれる存在になってしまうのではないかと、怯えていた。

……この世界で自分が異質な存在であるなら、誰にも理解されない、愛されない存在であるなら。たしかにこの世界が嫌いで当然なのかもしれない……

「うん……嫌い。俺はこの世界が、嫌いです」

「そっか」

……『そっか？』それだけ？ 普通何かあるんじゃないの？ 説得とかセッキョーとか、慰めとか？

「……随分軽く流してくれますね」

「いや、流したつもりは無いんだけど」

ずっと悩んできたこと、ひどく辛い経験をないがしろにされた気がして、腹の底が少し熱くなる。

「ならもっと言い様が……普通もっと、何か言いませんか？」

「いや。俺は別に、何も」

余りにもあっけらかんと言ってのけた陽に虚を突かれ、言葉を失ってしまう。

渡辺のその反応に、陽は初めて焦った様子を見せた。

「いや、だって……あの、君の経験は君だけのものだし。不幸とか悩みって、他人と比べてどうこう言えるものじゃないもん。世界が嫌いだっていうなら、『へえ、そうなんだ～』って思うよ。そういうのって人それぞれじゃん？」

なんなんだ、この人……

宏ねえも探偵の佐伯さんも、じっくり話を聞いてくれた。上手く話せない時も、親身になって話を聞いて、理解しようとしてくれた。

でもこの人……何も聞かずに、丸ごと、肯定した？

「人それぞれ……それは、そうだけど……」

……まさか、そんなわけない。

親は「くだらない、聞きたくない」って言ったし、学校の先生も「気のせいだ」って済ませた。宏ねえと佐伯さんは、「いつか変わるかもしれない。悲観せずに長い目で様子を見よう」って感じだった。でも、この人は……

「この世界を好きじゃなきゃ生きていけないってわけじゃないし、別にいいんじゃないの？ まあ、好きな方が生きやすいとは思うけどね」

世間話みたいなノリでそう言い、ヘラッと笑った陽に、渡辺はなんとも言えない居心地の悪さ、反発感を覚えた。脳がモゾモゾする。

嘘だ。こんな話を聞いたら、もっと何か言う筈だ。もっと何か……否定したり、説得したり、気休めみたいなことや理解を示すようなことを。だって、今まではみんなそうだった。

「俺、昔から……人が好きになれないんです。親友と思える友達も居ない。恋愛感情とかもわかんない。宏ねえは好きだったけど、話を聞いてくれたから懐いてただけだったのかもしれない。ほんとに好きだったのか自信無い」

勝手に言葉が進る。

自分の言葉に縋り付きながら、自分の言葉に押し流されている様な、奇妙な感覚だった。止めなきゃと思うのに、言葉が勝手にこぼれていく。

何か、言って欲しい。何を言われたいのか、自分でもわからない。でも、何か。

「誰も好きになれずに、誰からも好かれずに、ずっと孤独なままです。周りの人たちは、普通に恋愛したり友達付き合いしてるのに、なんで自分はそれが出来ないんだろう……周りは楽しそうに笑い合って歩いて行くのに、自分だけひとりぼっちで取り残されていくみたいで」

「……怖いの？」

「うん。怖い……怖くて悲しくて、辛い、です。でも、冷めてるっていうか、ちょっと諦めてる感じもあって」

「どうでもいいや、って？」

「はい」

そして、この画家は信じられないことを言った。
二本指でつまんだ鉛筆をプルプル振って弄びながら。

「うん。わりとね、どうでもいいんだと思うよ？」

.....何だ、この人。そう思うのは、今日何度めだろう。

どうでもいい？ どうでもいいだって？

「そりゃ.....大月さんにとっては他人事でしょうけど」

「そうじゃなくてさ。まず、周りがそうだからって、自分も同じじゃなきゃいけないわけじゃないじゃん？ 俺としては、別に人と違っててもよくね？ って思うんだけどね」

鉛筆のプルプルを、今度は顎にペチペチと当てながら、陽は言葉を選んでいる様子だ。

「でも渡辺君はさ、皆と一緒にいいけど、そう出来ないんでしょ？ なら、しょうがないじゃん？」

「しょうがない.....ですか」

「自分で選べないことって、どうしてもあるからさ。自分で出来ることなら頑張るし、周りを変えられるならそうすればいい。でも、悩んでも苦しんでも、泣いても喚いても、どう足掻いても無理ならさ、とりあえず、今の状態を受け入れるしかないじゃん？」

「.....受け入れられないから悩んでるんですが」

「そうだけどさあ。嫌いな自分、嫌いな世界でもさ、それしか無いんだし。なら取り合えず、持ってるものでなんとかやってくしかないじゃん？」

「.....身も蓋もない.....」

「まあね。でも、どうしようもないことを悩むのは、時間の無駄じゃない？マジで。そんならいつそ開き直って、絵でも描いてた方がマシっていうか」

一瞬、期待してしまった。この人も、同じなんだろうか。だからこの人の絵に、こんなにも惹かれるのだろうか。

「大月さんもこの世界が嫌いなんですか？だから絵を描くんですか？」

「え。違うよ」

意外なことを言われたかのように、陽は目を見開いた。

「そういう現実逃避っぽいのも、絵を描く動機として否定はしないけどさ。俺はこの世界がわりと好きだもん。クソみたいなことや悲しいこと、醜いものもいっぱいあるけど、それでも好きだよ」

.....同じじゃなかった。落胆する気持ちもあったが、それ以上に驚いた。

「この世界が好き」という、あまりにもストレートな言葉に。そんな言葉、生まれて初めて聞いた気がする。

「見ようによっては、という注釈つきだけどもさあ.....この世界は、とても美しいよ」

.....嘘だ。

そんな、当たり前みたいな顔して言うけど.....そんなの、嘘だ。

渡辺くん、次回も盛大にグダグダします。そして、陽くんは.....まあ、うん。

「……俺にはそう思えない」

「うん。それもまた、人それぞれ」

そう言い放ち、陽はまた絵を描き始める。

……ちょっと待ってよ。話終わらせないでよ。あんまりじゃないか。

いつも不満だった。自分にも周りにも、いつも不満を抱いていた。周りの連中だって、しょっちゅう何かしらに文句つけてた。

なのに、この人は。

「この世界は、美しい？」

「どうすれば、そんな風に見えるんですか」

「んー……気の持ちよう？」

ことも無げにそう言って、陽は楽しそうに鉛筆を走らせている。

「気の持ちよう……って。わかりません。全然わかんない。それで結局、俺はずっと辛いまま？」

「うーん。開き直れないなら、そうなるかもねえ」

ちょっと困った様子で眉尻を下げたのは、同情を示しているのだろうか。

ただ、相変わらず手は止まらずに絵を描き続けている。

違う。俺が欲しかったのは、こんな言葉じゃない。あんな素敵な絵を描く人なら、何か言ってくれと思ったのに。救ってくれると思ったのに。

要は、「諦めろ」ってこと？ あんまりじゃないか。

「.....大月さん、キツイっす」

「あはは、ごめんごめん。まあ、あれだ。無人の建物ってのも、趣があって悪くないよ。それに、綺麗な建物だったら向こうから人がやって来るかもしれないし」

.....建物の話、続いてたんだ。すっかり忘れてた.....っていうか！！ そうじゃなくてさあ！

「それ、慰めになってません」

「別に慰めてないし。あ、じゃあさ、せめて宏ねえさん？ の写真ぐらいは置いてあげようよ。あと、ピロちゃんは入居決定ね。陽当たりのいい広い部屋を用意してあげて、と.....あ、宮内君は？ 仲良いんでしょ？」

「ええまあ、上辺だけですけど」

「上辺だけでも、やってたことは友達付き合いには違いないじゃん？ じゃあ、宮内君は飛行機の窓から顔を出して.....海外からの友情出演ってことで」

.....絵の話はもういいよ！

内心そう叫びたい渡辺に構わず、陽は楽しげに鉛筆を振るい、何事か描き足していく。

「俺も入っちゃお。俺は庭から部屋の中を見ていまーす」

迷いのない動きで素早く腕を振り、スケッチブックの上にザクザクと描きあげていく。こちらの心境など一切構わず、鼻歌でも歌い出すんじゃないかと思うくらい、楽しそうに見える。

「出来た」

ものの10分足らずで、陽は満足げな微笑みを浮かべた。
ニコニコしながら、渡辺の方へスケッチブックを滑らせる。

粗い線で描かれたその絵を目にした途端、喉の奥が詰まって声が出せなくなった。

広い部屋の床に胡座をかき、ちょっと困ったような、でもすごく優しい笑顔で、頭の上に乗って前髪をついばむピロちゃんに向かい、そろりと手を差し伸べている自分。

窓の外では、庭の木陰に半分隠れながら、極度にデフォルメされた陽がそれを見ており、上空に小さく描かれたオモチャみたいな飛行機の窓からは、真面目くさった表情の宮内の細い顔が飛び出している。

窓辺に置いてあるたったひとつのフォトフレーム。光が反射して中の写真は見えないが、宏ねえが笑っているはずだ。

喉のつかえを突き破って何かが飛び出してくさそう。それを堪えるため、渡辺は大きく唾を飲み込んだ。

「……俺、こんな顔してますか」

「してるよ。ピロちゃんと遊ぶ時、すごく優しい顔で笑ってた。自分で気づいてないだけだよ」

……そうなんだろうか。本当に、自分はこんな表情が出来ているのだろうか。

慈しみ深い柔らかなその表情は、少し宏ねえに似ている気がする。

それだけで、なんだか少し安心するのが不思議だった。

「……ピロちゃん、宏ねえから譲り受けたんです。ピロちゃんを頼むって、最期の手紙に書いてあって」

「うん。なんとなく、そうかなとは思ってた」

本当は、動物なんて大して好きじゃなかった。

唯一、関心が持てるのは、建造物だけだった。だから自然に、建築を学ぶ道を選んだ。人工的で冷たくて硬質なものに触れていると安心できた。

なのに。

絵の中の自分とピロちゃんは、あたたかく親密で、とても幸せそうだ。
表情だけでなく全体的な雰囲気まで、元気な頃の宏ねえとピロちゃんみたいだ。

大月さんには、わかってたんだ。

さっきは谷底へ突き落とされたような気がしたけど、ちゃんと見てくれてた。聞いてくれてた。
宏ねえとピロちゃんのこと、自分を通してわかってくれたみたいで嬉しかった。

嬉しいような、照れくさいような。そのくせちょっと泣きたくなるような。
渡辺は誤魔化すように人差し指で前髪を払い、小さく鼻を吸った。

「……大月さんは、なんか睨んでる。やけにマンガっぽいし」
「あはは、睨んではいないんだけどさ。俺、自分の顔描くの苦手で」

楕円形の輪郭に、ひつつめた髪。耳の下から尻尾のように突き出したチョンマゲ。
直線で表した眉と半円状の目、引き結んだへの字口が木の陰から覗き、部屋の中を窺っている。

その顔をまじまじと見るうち可笑しくなり、ついクスリと笑ってしまう。

「なんかすごい怖い顔してる」
「うん。俺もピロちゃんと遊びたいな。でも、楽しそうだし邪魔しちゃ悪いかな。もうちょっと待とう……くそう、早く遊びたい……って、ジリジリしながら覗いてるんだ」

絵の中の彼とは全く似ていない楽しそうな笑顔でこちらを見守りつつ、鉛筆を振ってピロちゃんにちょっかいを出したりしている。

渡辺は名残惜しげに絵を眺めたまま、スケッチブックをテーブルに置いた。
大月陽という人は、話しているとわけがわからないのに、その絵を見るとやはり何故か癒される。
不思議だ。

「やっぱり、大月さんは優しいんだと思う。絵を見てると、なんかつられてニコニコしてきちゃうから」
「違うよ渡辺くん。俺、べつに優しくないし、いい人でもないよ」

渡辺がスケッチブックから顔を上げると、陽はピロちゃんの首を優しく搔いてやりながら、微笑んだ。

「ただ、まわりにあんまり関心が無いっていうか.....基本的に、他人に何も期待してないだけ」

窓から差し込んでいた陽射しが翳り、室温がすうっと下がった気がした。

渡辺ハ混乱シテイル.....

「渡辺君は、期待してるんだね。人とか、この世界に。だから、理解されなくて傷つくし、好きになれないんじゃない？」

「俺は何も期待してないよ。期待しなきゃ、裏切られることもない。逆に、他人から親切にされれば純粋に嬉しい。だからさ、さっきも言ったけど、俺は今の状況にすごく感謝してるんだ」

† † †

「そうかあ。陽のやつ、そんなことを……」

「はい。俺、なんか……淋しいっていうか、虚しい？ 違うかな。えっと、それってほんとに幸せなのかなとか思ったり……」

『他人には何も期待していない』

こんなことを、ごく当たり前の事みたいに、なんならうっすらと微笑みながら言う陽を前に、渡辺青年は言葉を失ってしまったのだと言う。

(陽のポンコツ野郎、ちょっとは言葉を選べよ。ハタチそこそこの青年に、そんな言い様があるか)

優馬は内心、頭を抱えしゃがみ込みそうになった。

が、表面上は平静を取り繕ってフォローする。

「まあ、ね。幸せのカタチというのは人それぞれだから。陽もあいつなりに生きてきて、色々あって、そういう考えに至ったんだろうからね」

「でも俺……なんかちょっと、ショックでした。あんな絵を描く人なのに、急に冷水浴びせられ

たみたいで」

「線引かれた感じ？」

「ああ、うん。そうかもしれません。いや、それは俺が、勝手にベラベラと重い話をしちゃったせいだと思うんですけど。なんか気づいたら、口が勝手に動いちゃってて……大月さん、迷惑だったのかもしれない」

(バッチリ気にしちゃってんじゃねーか。可哀想に)

優馬は慌てて弁解する。

「(全く、なんで俺が……) いや、迷惑とかじゃないと思うよ。あいつなりに、精一杯正直に、丁寧に話したんだと思う。むしろ俺は、口下手なあいつがそんな長いセンテンスを喋ったことに、驚いてるよ」

「そうなんですか」

「うん。インタビューとかでも苦労してるんだ。すぐ中間を端折って結論を言うから、慣れない人が聞くと混乱するしさ。いつも俺が横からフォローしてるんだ。なのにそれだけ喋ったんだから、迷惑とかは気にしなくていい」

「はあ……」

渡辺君はまだ不安そうだ。

「大体あいつは前から、そういうところあるんだ。他人の領域に踏み入ることに慎重っていうかさ。自分から距離を詰めることはまずしない。

陽の例えに倣って、人の心を家だとすればね？ 俺なんかはコンコンってドアノックしながら『おーっす』みたいに入っちゃうけど、陽はまず、家の門の近くをウロウロして、チャイム押すかどうか散々迷って、もう一回家の周りをぐるっと観察して、タイミングはどうか迷惑じゃないかとかソワソワして、やっと『ピンポン』って押す、みたいな？」

いまいち腑に落ちないという表情を見て、言葉を継ぐ。

最終的に何が言いたいのか自分でもわからないが、とにかく話し続けよう。着地点は話しながら考えればいい。

「自分と他人との境界線付近をさ、何度も右往左往して、ようやく半歩、また半歩踏み込むって感じで。あいつ、普段はぼーっとしてるくせに、こと対人関係に関しては、やけに慎重なんだ。距離を置いてるんじゃないくて、間合いの取り方が独特っつーか、自分から距離を詰めるのに時間が掛かるタイプなんだよ」

渡辺君は、訝りながらもなんとか納得した様子だ。

「でもさー、そうやってモジモジしてる間に、なぜか周りがあいつを放っておけなくて色々構っちゃうんだよな。俺みたいにさ」

言いながら、優馬は思わず苦笑いを浮かべる。
つられたように、渡辺君も少し表情を緩め小さく微笑んだ。

よし。ちょっとでも笑わせればこっちのもんだ。

「陽と本当に親しくなりたかったら、結構グイグイ行かないとな。そしたら、そのうちグダグダと押し切られ……いや、受け入れられるようになる」

優馬は大げさに肩をすくめ、笑って見せた。

「他の人には内緒だよ。悪い人に付け入れられるとまずいから」

拳を口に当てて笑みを堪える渡辺の表情を見て、ひとまず安心する。嫌われたという不安は拭われたみたいだ。

後は、ヤツの言葉足らずを補っておかなきゃな……

言葉足らずの人と気にしいの人の間に立つのって、大変ですね。優馬さんの苦勞が

僣ばれます.....

ちなみに、あと2話ほどグダグダしますので、読み飛ばして下さい構いません。ハ

ハハ.....

「陽がどう言おうと、あいつはいい奴だと俺は思うよ。ちょっと抜けてるところはあるけど、基本的に頭は悪くない。律儀で親切で、真面目で礼儀正しくて」

優馬が「抜けてる」と評したせいか、渡辺君は笑っていいものかどうか判じかね、曖昧に首を傾げた。そういうふとした瞬間に、育ちの良さが滲んで見える。

「でも、究極的にはさ、あいつは絵以外の事はどうでもいいんだと思う。自分のことですら。他人に関心がないっていうのは、多分そういう意味なんじゃないかな。他人に積極的に関わる以前に、全てに於いて、画家の目が優先してしまうんだ。画家として独立してからは、特にその傾向が強まってる様に思う。どんな景色も経験も感情も、全部観察して吸収して、みんな材料にして、作品として放出しちゃうんだよな」

顔の前で指を振り、「画家としての視線」を強調しながら話す。

渡辺青年が受けたショックを、「陽の、画家ならではの特異な感性への違和感」に摺り替えることで、彼のショックを軽減させつつ陽のカリスマを高めて……って、そんなに上手く行くわけないか。

「まあ、そういう云々を上手く言葉にできないのは、あいつの欠点だな。ほら、奴のアウトプット能力は絵画に特化してるから。要するに、絵は天才。あとはポンコツ」

「そうか……流石、天才ならではのですね」

渡辺君は至極真剣に頷いた。

(まじか……上手く行きすぎだろ！ そんなキラキラした目をするのはやめてくれ)

今言ったのは自分の思うところを話したのであって、嘘を言ったわけではない。たしかに、嘘じゃないんだが……

純真な悩める青年を舌先三寸で丸め込んでいるような気がして、優馬はそこはかたなく罪の意識を感じてしまう。

「だからさ、陽が言ったこと、そんなに深刻に受け止めなくていいと思うよ。それぞれ負っている背景が違うんだからさ。陽には陽の考え方。君には君の考え方。もし、共感したなら取り入れればいいし、違うと思えば『そう思う人もいるんだな』って思っておけばいい。ね？」

「はい」

「実際俺なんかはさ、ちょっとは周囲に期待しちゃうね。するでしょ、普通。その方が健全なんじゃないかなーって、俺は思うよ」

「……健全、なんでしょか」

「うん。あくまでも、俺の考え方としてはね」

渡辺君は頷くと、少し俯いてなにやら思いを巡らせている。

そうそう。

君が何に悩んでいるかは知らないけど、みんなそうやって迷いながら自分で選び取っていくんだ。うんと悩んでよく考えればいい。

彼が陽の絵を必要としていることには、前から気付いていた。

ただの好き/嫌いじゃなく、陽の描く絵を必要としている。それも、切実に。

その絵を通じて、陽の中の何かに触れたい、掴みたいと願っているのを感じていた。

それが何かというのは……わからない。

心？ 魂？ あるいは、生きていく為のヒントのようなものだろうか。

そして陽にとっても、彼のようなファンの存在は必要なものだど、優馬は思っている。

最近でこそ、カレンさんの影響で知人も増えてはいる。だが、陽の周りには密な人間関係が薄すぎる。

さっき渡辺君に話した通り、陽は人と関わることに臆病なのだ。裏切られるくらいなら、どうせ去られるのなら、最初から関わらない方がマシだと思っているのだろうと感じる。

『他人に期待していない』というのは、それを裏返して言っているに過ぎない。

.....でもさ。

と、優馬は思う。

そんなの、つまないじゃんか。

まあ、いいよ？ それでもいいけどさ。いくつかは例外的な存在もあっていいだろ？ 俺とか、天本さんとかさ。

大体、口ではそんな冷めて達観したようなことを言ってるけど、こないだ大友先生から転勤の葉書が来たときは思いっきり拗ねてたじゃねーか.....

陽には、絵に集中するあまり、世捨て人みたいになる生き方をさせたくなかった。

天本さんの紹介で職人の仕事を続けていれば、仕事の繋がりとはいえ、人付き合いももっとあっただろう。

だが、自分はそれを奪ってしまったかもしれないのだ。

この世界に半ば強引に誘ってしまった自分には、陽の人生をより豊かにする責任があると、優馬は考えていた。

「木暮さん、俺、ちょっとだけわかった気がします」

目の前の青年につられ、いつの間にか黙考に沈んでしまっていた。

声の主に目を向けると、彼は目を伏せたまま言葉を探している。

「えっと.....大月さんの言葉の何がショックだったのか。俺.....多分、正解が欲しかったんだ。大月さんなら、あんな絵を描く大月さんなら、全て解決できる道を示してくれるかもしれない。俺のための部屋を、その扉を、示してくれるかもしれないって、無意識に期待してたのかも」

言葉を切ったが、青年は僅かに眉根を寄せ、まだ頭の中を探って思いの丈を紡ごうとしている。

優馬は相槌を打つことなく、カウンターの上に僅かに身を乗り出し静かに手を組み合わせて、待った。

沈黙は金、雄弁は銀と言いますが。優馬さんは銀のヒトですね.....

自分の思いを確かめるように、青年は再び、ゆっくりと話し始めた。

「……でも、そうはならなかった。期待してたもの、想定してたのと全く違うことを言われて、すごくびっくりしたんです。話してて噛み合ってるのかもわかんないのに、なんか心の底がざわざわして、脳が揺さぶられて、ひっくり返されたみたいだった。だってまさか……丸ごと全部、受け入れるなんて発想、俺には全然無かったから」

渡辺青年は、小さく、だが勢い良く息を吸った。

「そうだ。俺、赦して欲しかった。君は悪くないって言って欲しかった。なのに……自分に、その用意がなかったんだ。心の準備が出来てなかった」

声が小さく震えている。

少しずつ、少しずつ吐き出す細い息も、震えている。

「誰かに自分を受け入れて欲しいと思ってたけど、自分自身で、自分を受け入れてなかった？」

優馬は、彼の言葉を整理するふりをして時間を稼いだ。

そう。ゆっくりでいいから、ちゃんと古い息を吐ききって、新しい酸素をいっぱい吸い込めばいい。ゆっくり、ゆっくり。

「……その通りです。なんの覚悟もないくせに、理解して欲しいだの正解が欲しいだのって。そんなの、ただ甘えてるガキだ」

呼吸が整い、声の調子が戻った。視線も定まったし、表情も少し吹っ切れた様に見える。

「そうか、ガキか。でもまあ、無条件に受け入れられたい、思いっきり甘やかされたいって思うこと、誰にでもあるもんだよ」

「木暮さんにも？」

「もちろん。大人だっつたって、心がガラッと全部入れ替わる訳じゃない。子供じみた感情だっつてしつこく残ってて、たまに顔を出してきたりする。ま、世間は厳しいから、そうそう甘やかしてはくれないけどね。そのうち慣れる。だんだん、折り合いのつけ方ってのを覚えて行くんだ。若いうちにいっぱい傷ついたり考えたりしたら、その分大人になってから生きてくのが楽になるから、大丈夫」

「……大丈夫、ですか」

「うん。だいじょうぶ」

目の前の青年は肩を竦めて息を吸い込み、ふうっと思い切り吐き出した。

首と両肩がガクンと落ち、腕の力を抜いてだらりと下げる。俯いた口元から、力無い笑い声と眩きが漏れてきた。

「ふ、へへへ……大丈夫か。そっか……大丈夫か………そういえば、宏ねえもそう言ってたな……」

……お？ どうした？ 急に笑い出したぞ？ 何が琴線に触れたのか不明だが、この路線で正しかったみたいだ。

「それでも辛くなったら……好きな絵でも見てさ。美味しいもん腹一杯食って、うひゃひゃって笑って。こうやって誰かと話して。たまーに真面目に考えごとしたりしてさ。どう転んだって、人生なんてどうせあと80年かそこらしか無いんだ。気楽にいこうや」

長めの前髪に隠れ表情は窺えないが、肩が僅かに震えだした。

くつつつという忍笑いののち、とうとう渡辺君は笑い声をあげた。

「あははは、ダメだ。可笑しい」

「お？ なんだなんだ」

少し驚きつつもつられて笑顔になりかけている木暮を見て、渡辺青年は更に笑う。

「だって、だってさ。木暮さんも大月さんも、励まし方がなんか独特すぎて……」

「え。別に、励ましてないし」

息も絶え絶え、という風情で腹を抱えていた青年は、堪えきれずにカウンターに突っ伏しバンバンと棚板を叩き始めた。

「ほら、その言い方もそっくり！」

「あー……そうか？」

思わず耳たぶを引っ張りかけ、すんでのところまで手を止めた。これじゃ、ますます陽に似ていると思われてしまう。

しかし、なんだな。長らく一緒にいると、話し方や仕草まで伝染ってしまうものなのだろうか。

「それに、80年って普通に長いですから」

「そうそう。80年もあるんだから試行錯誤しながらのんびり過ごすもよし、どうせあと80年で終わるんだからって気楽に構えて過ごすもよし、ってね」

「なんか、木暮さんって生きてて楽しそう」

「おう。楽しいぞー！」

「どうしたらそんな風に思えるんだろ」

「簡単だよ。楽しく生きてこう、って決めて、そうしてるだけ」

「それって、簡単には思えないけど……あ、でも。大月さんも似たようなこと言ってました。全ては気の持ちようだって。あと、『見ようによっては、この世界は美しい』って」

「ああ、『見ようによっては』ってのがあいつらしいわ。大変な思い、いっぱいしてきてるのにさ、それでも、ヘラヘラ笑いながらそう言っちゃうんだよな」

「……すごいですよね」

「ああ。でもあいつ、『えー、別に普通だよー』とか言うよな、絶対。で、飄々とすごい絵を描き続ける。変な奴。すごい変な奴」

「はい。凄い人で、すごく変な人です」

「やっぱそう思う？」

「なんかこう、突き抜けてて。悩んでる自分が馬鹿に思えてきます」

「いや、馬鹿じゃないよ。悩むのは先に進もう、解決しようとしてるからだ。馬鹿なのはさ、悔やんでるだけのヤツ。自分や周りを呪って、恨んで、僻んでばっかで。そうやって時間を無駄にして、人生を棒に振るようなのを馬鹿と呼ぶんだ」

「辛辣ですね……でも、確かにそうかも。大体そういう人って、何がしたいのかわかりませんし」

「な？ まあ、凝縮熟成された恨みつらみから生まれるものも、あるのかもしれないけどさ」

「でも、あと80年しか無いし？」

「そういうこと。楽しんだ方がお得だろ？」

お得か……と呟き笑った青年は、いつも纏っていた淡い憂いを払い落としたように見えた。

色んなことを真剣に受け止めすぎちゃう時期って、まあ、ありますよね。

それにしても、お悩み相談長かった……

夏蓮の告げ口

突然、勢いよくガラスの分厚い扉が開けられ、弾んだ声が響く。

「なあにー？ なんか楽しそうじゃない？」

「おお、カレンさん、おかえりなさい。あれ、今日はやけにご機嫌ですね？」

「そーう、やっぱりわかる？ 楽しくって、いっぱい飲んじゃった♪」

夏蓮が店に足を踏み入れた瞬間、部屋の中の光量が増したように感じた。

新緑の季節によく合う、ピーコックグリーンのたっぷりしたドルマンスリーブプルオーバーに、白のクロップドパンツというカジュアルなスタイルの夏蓮は、くるりと軽やかに回転しながら中央の机を避けた。大きく開いた背中が一瞬見え、襟元のビジュースがキラッと光る。

ほとんど踊るようにカウンターにたどり着いた夏蓮が、にっこり笑ってポーズを決めた。

確実にご機嫌のようだ。

優雅な決めポーズのまま、夏蓮は立つか座るか判断がつかずモジモジしている青年に視線を向ける。

「こちらはえっと……そうそう、渡辺くん。よね？」

「あ、はい。どうも」

「インコのピヨちゃんはお元気？」

「ピロちゃんです。ピヨちゃんじゃなくて」

渡辺は律儀に訂正した。

「ああ、ごめんなさい」

夏蓮は芝居がかった身振りで額に手を押し当てた。

「ピロちゃん、ピロちゃんね。陽がね、よく話してるの。インコが可愛いかったって。だからね

、私は不死鳥になるのよ」

意味がわからない。

戸惑いの滲む視線で助けを求められ、優馬は渡辺に曖昧な笑みを返した。

酔っ払いの戯言だから気にしなくていい……と言いかけた時、陽が分厚いガラスの扉を背中で押し開け、「ただいまー」と入ってきた。

後ろをタクシーが過ぎ去っていくのが見えた。

「おう、おかえr…」

「ちょっと聞いてよ、優馬さん！ 陽ったらね」

陽が現れた途端、さっきまでご機嫌だった夏蓮が頬を膨らませ、怒った様子を演じ始める。まずい、という風にアワアワしている陽に構わず、夏蓮は口を尖らせた。

「人のこと、『人喰い花』呼ばわりするのよ？ 酷いと思わない？」

「ヒトクイバナァ？ なんだそれ」

「あー……」

陽は両手で頭を抱え、項垂れながらぐるりと回転した。

「違います、違いますって！ 夏蓮が着てた服の柄がね、なんていうか、こう……大胆な花の模様で。そんな柄を着こなせるのは夏蓮ぐらいだよねって……褒めたの！ 褒めたつもりだったの！」

十 十 十

陽がタクシーで迎えに来てくれた時、私はすでに準備万端整えて待っていた。

買ったばかりの、白地に手のひら大の花柄が散るワンピース。裾に近づくにつれたくさんの花がひしめき、まるで本当に空から鮮やかな花束をばら撒いたみたい。

白いシルクニットのロングカーディガンに合わせて、思いっきり豪華に、優雅に。メイクもネイルもバッチリ。

だって今日は、陽のお誕生日を祝うお出かけだから。

玄関まで出迎えに行った私は、陽の姿を見て思わずため息を漏らした。

模様織りが控えめな光沢を放つ白のカットソーに、袖口を捲った明るい紺色のジャケットが映えている。赤いステッチのワンポイントが効いたごく淡いグレーのボトムスに、涼しげな白の靴。

これでもかというくらい爽やかな、王道ともいえるコーディネート。

わりと誰にでも似合うけれど、素の容姿が優れている人が着ると格段に差が出るスタイルだ。

陽はしきりに照れながら、「どう？」とおどけたポーズを取る。

贅沢を言えば、「サムライスタイル」と称されているちょんまげをやめて、顔周りをもうちょっと飾ればいいのに……とは思うけれど。でも。

「すごく似合ってる。私が選んだんだから、当たり前じゃない？」

おどけて広げたままの両腕に飛び込もうとした時、陽がニコニコと言った。

「夏蓮もその服、ちょう似合ってる。そんな人喰い花みたいな模様の服を着こなせる人なんて、なかなか居ないよ」

私はその場でフリーズした。

お誕生日の花束をイメージして、一昨日から揃えていたコーディネート。

バッグ等の小物はもちろん、メイクもネイルだって完璧に整えた。朝からお風呂に入って、ウキウキと。

それを、それを……

「人喰い花ですってえええ？」

その時、玄関の脇の部屋のドアが開き、カズが出てきた。
おどけたポーズで固まったまま怯んだ陽の姿が、一瞬遮られる。

「あー、ちょっと急用で出かけてくる。しばらく戻らないから」

カズは目を合わせないように顔を伏せ、普段とは似つかずそそくさと靴を履く。
陽の横をすり抜ける時、「やらかしたな」と呟いた。

.....聞こえてるわよ、ごーちゃん。逃げたわね？

「え、あの、ちょっと待って.....五島さん、タスケテ.....」

縋るような眼差して五島の背中を見送った陽が、ギギ、ギ、ギ.....と軋む音が鳴りそうな動きで
向き直る。その顔にはハッキリと、「しまった.....」と書かれていた。

「えと、そうじゃなくて.....意味が、その.....ごめん、ね？」

「着替えてくる」

私は冷徹な声でそう言い、踵を返し階段を上った。

「ごめん！言葉を間違えた。ほんと、褒め言葉のつもりで.....」

情けないオロオロした声が聞こえたけど、無視して自室のドアを閉めた。

五島さん、逃げ足が速いです。

アウトプット

「ぶははははは！！ バカだ、バカがここにいる！ ぶあああか！」

腹を抱えて陽を指差し、涙を滲ませるほど大笑いしている優馬を、渡辺は慌てて嗜める。

「ちょっ、木暮さん！ そんなに笑っちゃ」

「いいのよ、笑って！ ね？ 失礼しちゃうでしょお？」

「.....すみませんでした、ってばあ」

言葉とは裏腹に楽し気に笑っている夏蓮の肩に、陽が額を擦り付ける。

「な、言ったろ？ こいつのアウトプット能力は.....」

「「絵画に特化してる」」

優馬と渡辺が、声を合わせて笑い出した。

夏蓮は片手で陽の頭を撫でながら、もう一方の腕を伸ばし陽のバッグから丸めた画用紙を取り出した。

「そのとおり。その絵を見たら、もう、なし崩しで許しちゃったわよ」

夏蓮が自室で着替えている十数分の間に、いつも持ち歩いている携帯用の水彩セットで描いたというその絵。

力強く咲き乱れる、毒々しいまでに美しい花々が背を伸ばし、次第に溶けて混じり合い炎と化する。その炎の中から、火の粉と花びらを撒き散らしながら飛び立つ、一羽の不死鳥。

「見た瞬間、そのイメージが浮かんだんだ。夏蓮ってさ、可憐っていうより『紅蓮』とか『火焰』って感じでしょ？ 紅蓮の炎。倒れない挫けない、紅蓮の炎の中から何度でも蘇る、美しい不死鳥。そんな感じを言いたかったんだ。

でも、最初に人喰い花って言った時の夏蓮の顔見て、続きが言えなくなっちゃって.....」

「アホだ……ま、生命力ありそうだしな、人喰い花。それが燃えた炎から生まれたなら、とびきりの不死鳥だ」

「それ！ ということ！ さすが優馬さん、口が上手い！」

頭を撫でられながら不自然な体勢で顔だけを優馬に向け、ピシッと指を差した陽の手を叩き落とす。

「人を指差すんじゃないわねえ。それに、口が上手いじゃなく、せめてフォローが上手いと言え」
「……はい、すみません」

（さっき優馬さんも、大月さんを指差して笑ってなかったっけ……）
渡辺は密かにそう思ったが、口に出すことはしなかった。

相変わらず陽の頭を優しく撫でながら、夏蓮が優しく宥める。

「陽は、思ったことを素直に言っちゃうだけなのよね～」

相変わらずされるがままの陽だが、彼女の肩に頭を乗せたままの不自然な体勢でキツくないのだろうか。

少し心配になりながらも、優馬は若干苛ついた。くそう、早く家に帰りてえ。

「たまにすごい名言出すの、あれはまぐれ当りなんだな」
「名言なんて知らないし。ってか言葉なんて、ただの言葉じゃん」

「お前ね、元編集者にそれ言うか」

「あ、そっか。ごめん……いって！ いででででで」
さっきまで頭を撫でていたその細い指が、陽の頭にぐりぐりと爪を立てている。

「そうね。言葉なんて、ただの言葉。でも私、その言葉にすっごくムカついたって話を、たった今してたんだけど……お忘れかしら？」

「ごめんなさいごめんなさい」

「ただの言葉で嫌な思いさせたり傷つけたりすることもあるんだから、言葉選びには気をつけましょうね。私もだけど」

漸く解放された陽は、跳ね上がるように直立し敬礼する。

「はい、気をつけます。以後重々気をつけます！」

「よろしい」

微笑んだ夏蓮の手招きに応じ、陽は促されるまま夏蓮に背中を預けてしゃがみ込んだ。夏蓮が陽の髪を解き、手で髪を梳き始める。

(流石、カレンさん。きっちり締めてくれるな。なんかタイムリーだし)

見事な手綱さばきに感心しつつ、優馬がこっそり目配せすると、渡辺はくすぐったそうに微笑んだ。

「それにしても」

照れ隠しなのか、渡辺はおもむろに画用紙に手を伸ばす。

「この絵の花、毒々しいけど綺麗ですよ。妖しくて、力強い」

「でしょ？ 俺もそう思ったんだよね」

乱れた髪を結び直してもらいながら、陽は満足気だ。

「調子に乗るんじゃねえ」

優馬の言葉に、夏蓮はクスクス笑いながら陽の髪を結び終えた。

「はい、出来上がり！」肩をポンと叩くと、そのまま陽の肩に跨る。

「肩車でお部屋まで連れてって」

「かしこまりました」

陽は夏蓮を担いだままそろりと立ち上がる。元々木材倉庫だった部屋なので天井は高く、夏蓮を肩車していても頭上には余裕があった。

片手でバッグを掴み、もう一方の手で渡辺から絵を受け取ると、そのまま器用に夏蓮の両足を固

定して、扉へ向かう。

「お先で一す」

「おう」

扉の手前まで来ると、夏蓮はおもむろに上体を倒して逆さまにぶら下がり「またね～」と手を振った。そして扉を抜けると、腹筋の力だけで起き上がる。

渡辺が「わあ」と小さな感嘆の声をあげた。

担がれたまま上半身だけで踊る夏蓮とグラグラしながら歩く陽を見送り、渡辺は感心した様のため息をついた。

「カレンさん、相変わらず、パワフルな人ですねえ」

「だねえ」

「僕、なんか色々考えてたの全部忘れちゃいました」

「あははは。あの人の前じゃね、色んなこと吹っ飛ばされちゃうよな。特に今日はノリノリだったし」

渡辺は少し放心しているようにも見えた。

「……不死鳥ってあの絵のことですかね？」

「……さあねえ」

優馬がフッと吹き出したのを合図に、ふたりはまた、同時に笑い出した。

思いつめていた反動だろうか、渡辺は本当に楽しそうな笑顔だ。

ひとしきり笑うと、渡辺は「僕、そろそろ帰ります」と立ち上がった。

「おう、またおいで」

青年の吹っ切れたような清々しい表情に、優馬は少し安心した。

陽の迷言も自身の与太話も、そして煌月カレンの鮮烈な存在感も。悩める青年にとって何かしらのピースになっただろう。

繊細で、買い子だ。

そういう子にとって、手にしたピースは多いほうが良い。

陽くん、25歳になりました。あれ？計算、あってるよね.....？

陽から電話がかかってきたのは、打ち合わせの帰りだった。

「どうした？ そんな深刻な声で」

「オヤジさんが、また入院したって。ねえ優馬さん、俺、いま貯金どれくらいある？」

「なんだ突然。ちょっと待て、移動するわ」

足早に駅のホームを離れ、煩いアナウンスから遠ざかる。

切羽詰まった様な怒った様な声で、とにかく早急に纏まった現金が必要なのだと繰り返す陽を落ち着かせ、話を聞き出す。

数日前、天本さんが家でのリハビリ訓練の際に誤って階段から落ち、現在も意識不明であること。

頭と背中を強く打っており、大きな手術が必要だということ。

そして、手術と介護費用を工面するのに苦労しているらしいこと……

話を聞きながら、素早く頭の中で計算する。

「いくら必要なんだ？」

「それが、聞いても教えてくれなくて」

「わかった。話は帰ってからだ。お前、今どこだ？ ……そうか、じゃあ取り敢えずうちに帰れ。俺もすぐ帰るから。焦ってジタバタするなよ？ 大丈夫だから、俺に任しとけ。いいな？ ……よし、電車乗るから切るぞ」

再びホームへと向かいながら、優馬は栞に宛て、器用にメールを打つ。

電車が来るのを待つまでもなく、すぐに返信が来た。

「それだけの情報では、どういう容体かわからない。手術内容も金額も同様。入院先の病院に知り合いは居るが、家族以外の人間に情報を教えるのは、いくら同業者であっても無理」

要約するとそんな内容だった。

(ま、そりゃそうだよな.....)

やって来た電車に乗り込み、優馬は考えを巡らせる。

陽の個人的な預金だけで数百万、会社としてもある程度は用意出来る。なんとか力になりたいという陽の気持ちもよくわかる。

だが、陽の話の様子では、先方がすんなり受け取るとも思えなかった。

(おかしい言い方だが、上手く話を運ぶ必要があるな.....)

ここは、”口が上手い”マネージャーの出番か.....

先日の陽の言葉を思い出し、小さなため息と共に苦笑した。

状況としては、とても笑えるものでは無かったが。

† † †

玄関に鍵を刺すや否や、向こうから扉が開いた。

優馬が帰るまでの間、ジリジリと待っていたのだろう。取り乱した陽が、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てる。

「遅いよ！ねえ、面会すら出来ないって、かなりヤバイって状態だよな？意識不明の重体って...
...介護が必要って、どういう意味？寝たきりになるとかそういうこと？」

「落ち着け。お前にわからんことを、俺がわかるわけ無いだろ？とりあえず、俺たちに出来ることが何か考える。だから、お湯沸かして？」

陽の動きが止まる。

ポカンとした表情の一瞬ののち、珍しく苛立った様に声を荒らげた。

「お湯って何だよ！」

「まあまあ、焼酎でも飲んで一旦落ち着こう」

「そんな場合かよ！」

優馬は落ち着いた仕草で椅子を引き、浅く腰かけた。

薄いファイルをテーブルに置き、胸ポケットからは事務所の金庫にしまってあった預金通帳を取り出す。

「当面、俺らに出来るのは金の融通ぐらいだ。それはわかるな？ お前の預金も含めて、すぐに用意できるのが1千万弱。少し時間がかかるが、もうちょっと工面出来る」

「いっせんまん？そんなにあるんだ.....」

「おう。今後の運営を考えても、それぐらいはな。なかなかの優良経営だろ？」

テーブルの向こうをトントンと叩いて座るよう促すと、陽はおとなしく腰かけた。思いがけず大きな金額に面食らったのか、少し呆然としている様子だ。

「さっきも言ったが、今の状態で出来ることは資金援助。で、俺らは多少なりとも力添えが出来る。あとは病院に任せるしか無い。な？」

「うん.....」

「お前が天本さんを大切に思ってるのはよく知ってる。不安になるのもわかる。でも、だからこそ、俺たちは冷静にならなきゃいけない。焦って暴走したら、静江さんのフォローどころか、余計な負担になるだろ？」

「.....うん。わかった」

「よし。なら、そんな顔すんな」

「そんな顔って？」

「半ベそ。迷子になった時の優待にそっくりだ」

「.....半ベそじゃねーし！」

優馬は立ち上がると、手の甲で鼻の下をゴシゴシと擦っている陽に両手をぶらぶら振って見せた。

「ほら、こうやって。いいから真似してみろ」

怪訝そうな表情で見上げるのに構わず、両手をさらに強く振る。

表情はそのままに、それでも陽は大人しく従った。

「そうそう。お湯沸かしてくるから、続けてろよ」

ゆっくりと席を離れ、薬缶に少量の水を汲み、コンロの火を付ける。

戸棚からマグカップを2つ取り出して、流し台の下に仕舞ってある焼酎の瓶を開け、とぶとぶとカップに注いだ。

冷蔵庫を開ける……が、つまみになりそうな物は入っていない。今日は互いに外で昼食を摂った為、何も作っていないのだ。

冷凍室を開けると、スライスされた食パンがあった。とりあえずそれをトースターへ突っ込み、加熱する。

(たしか、サバ缶があったはず……)

非常食用にとストックしてある缶詰を開けるので、一応陽に了承を得ようと振り返った優馬は、思わずフツと笑みを零した。

僅かに眉根を寄せ、真剣に肘から先を振り回している陽の姿があったからだ。

いや、と優馬はすぐに思い直す。

普段なら軽口のひとつふつつ叩くであろう陽が、行為の意味さえ聞かずに、一心不乱にただ腕を振るという、一見下らなく思える動作に没頭している。

やはり相当不安なのだろう。何かしておらずにはいられないのだ。

優馬は結局声をかけずに、缶詰を開けて水煮の汁を捨てた。

マヨネーズと醤油をかけ、ほんの少しだけ塩を振り、フォークでほぐしながら軽く混ぜ合わせる。

トースターから食パンを取り出して皿に取り、調味した鯖を乗せた。

冷蔵庫から海苔とスライスチーズを取り出すと、千切ってパンの上に散らす。

熱の残るトースターにアルミホイルを敷き、ずっしりと重くなった食パンを入れて再加熱。

手早いことこの上ない。

コンロの火を消し焼酎のカップに湯を注ぐと、片方にだけ氷をいくつか入れ、テーブルに運んだ。

「よーし、オッケー。終わりね。はい、深呼吸ー」

陽は言われるまま動きを止め、深呼吸を数回繰り返す。

「よし、飲め」

たっぷり入ったマグカップをぶつけると、ゴツンと重い音がした。

「……っ！ あっち！」

またもや素直に従った陽が、顔をしかめた。

「猫舌用に氷入れたんだけど」

「んー、大丈夫。こうして混ぜれば……」

人差し指でくるくるとかき混ぜると、あっという間に氷は溶けてしまった。

ふたくち、みくちと飲むうちに食欲を唆る香りがたち始め、トースターがチン、と音を立てた。優馬はアルミホイルごと引っ張り出すと、ザクザクと音を立ててパンを切り分け、再び皿に盛る。

「ほい」

「いただきます」

ふたりは熱々の鯖トーストを頬張り、焼酎を啜った。

猫舌の陽は何度も息を吹きかけ冷ましながら、優馬は「七味があればもっと……いや、カレー粉かな？」など独り言ちながら。

† † †

「ちょっとは腹、あつたまつたか？」

優馬の問いに、陽はトーストを頬張ったまま頷いた。

空になった皿の上で手を叩いて指についたパンの粉を落としつつゴクンと飲み込むと、口元を拭いてニヤッと笑ってみせる。

「空腹の時に悪いこと考えちゃ、ダメなんだよね」

「おう、そのとおり。憶えてたのか」

陽がドイツから帰国した日、天本社長が怪我をしたことを告げた際に、優馬が言った言葉だ。

「うん。もう、大丈夫。だいぶ落ち着いた。たぶん」

焼酎の最後の一口を呷り立ち上がると、優馬のカップを指差し目顔で訊ねる。差し出されたカップを受け取り、陽は流しへ向かった。

「ねえ、さっきの腕ブラブラ、何だったの？」

「あー、あんま意味はないな。強いて言えば、血行が良くなるように、かな」

「ふうん」

2杯目を作ってテーブルへ戻って来る。お湯が少し冷めたので、今度は氷は入れていない。

「あの鯖のパン、美味かった」

「だろ？ 思いつきで作ったわりにな。今度はもっと美味しいの作ってやるから……よし、では！」

「緊急対策会議だね」

鯖のパン、思いつきで書きました。ごめんなさい、一切試してません……

作ってみようと思われた方は、自己責任でお願いします。もし美味しかったら教えてください。私も作ってみます。

いえ、そういうんじゃないんです。違うんです。まさかそんな、ひと様に毒味させる

とか、とんでもない。

「そんな大変な時に傍に居てあげられなくて、ごめんね……」

耳を疑うような夏蓮の言葉に、五島の眉がピクリと動いた。

スカイプの画面からも窺えるほど気落ちした陽を気遣ってのことだろうが、五島にはそれ自体が信じられない事だった。

「他人の不安」を共有したり、ましてや傍に居られないからといって謝ったりなど、以前の夏蓮なら有り得なかったからだ。

もちろん、同情や心配する気持ちはある。ただ、「それはそれ」として、「不安というものは、基本的に個人で解消すべきもの」というのが、彼女の考え方だった筈だ。

実際、夏蓮自身はそうしてきたし、友人たちや今までの交際相手にもそう接して来た。そしてその姿勢は、五島にとっても同意出来る、いや、むしろ賞賛すべきものだった。

それなのに。

甘やかすのもいい加減にしろと言いたくなるのを堪え、五島は引き続きふたりの会話に耳を傾ける。

スカイプでなく電話で直接喋ってくれれば、こんな会話を聞かずに済んだのだ。時々、文明の発達を呪いたくなる。

大月陽の恩人である天本良治が負傷し現在入院中だと聞いたのは、つい先刻のことだ。

まだ意識は戻らないが、手術費用を工面出来たので、これから大掛かりな手術の準備が始まるらしい。

大月陽がその費用を提供したらしいが、なかなか受け取って貰えず、結局家賃をまとめて前払いする、という格好になったのだとか。

独立してからこれだけの短期間で、それなりの金額を捻出出来る木暮優馬の経営手腕には感心

する。また、大金を惜しげもなく提供しようとする大月陽の決断力と心意気も、まあ、評価しないでもない。

だが正直なところ、「知った事か」というのが本音だった。

優馬の情報収集の能力だとか、資金援助を固辞する天本静江を如何に説得したかなどという話には興味がないし、そもそもこちらには関係無いのだ。

恩人の不幸に不安なのだろうが、大月陽はさっきからペラペラと喋りっ放しだ。おかげでこちらの打ち合わせが進まない。大事な舞台を控えているというのに迷惑極まりない。

夏蓮も夏蓮だ。

画面に映る大月陽の頭を今にも撫でんばかりの態度。

なにが「あんないい人だもの。きっと大丈夫よ」だ。いつからそんな無根拠なくだらん慰めを言う様になった？

苛ついて腕時計に目をやると、驚いた事にまだ10分程しか経っていない。

もう1時間も聞いているかの様な気がしていたのに。

(.....自分で思っていた以上に疲れているのかもしれないな)

たしかに、今手掛けている舞台と次の演目の準備を並行して進めているので、最近とみに忙しくなっていた.....

と、そこまで考えて、五島はさらに苛つくことになる。

何故なら、今回の舞台と次に構想している演目の両方とも、大月陽の絡んだものだったからだ。

既に高い評価を得ている、光の点の群れを相手に踊るという演出。

そして次作の、天井から吊った布を用いたエアリアルと呼ばれる空中パフォーマンスで、大月陽の描いた不死鳥を演じる構想。

いや、いいんだ。

舞台自体は素晴らしいものになるだろうし、途切れること無く素晴らしい作品を発表し続けられるのだから、本来なら感謝するべきところだ。

だが。

「道を開けよ」と一言、周囲がこぞって道を譲り、そのど真ん中を闊歩する様に生きてきた夏蓮が、そしてその従者である自分も、大月陽に振り回されているようで、それが気に入らない。単に慣れていないだけかもしれない。ただ、なんとなく調子が狂うのだ。

放っておけばほとぼりも冷めるだろうと思いつつ、もう2年になる。そろそろ目を覚ましてもいい頃だろう。

夏蓮を道の真ん中に戻さなければいけない。

幼い頃から積み重ねた努力と、不屈の闘志を以ってやっと切り開いてきた、世界最高の舞踏家という道の、ど真ん中に。

(.....とはいえ、どうしたものか.....)

顔をしかめながら、五島は何度も読み返した舞台装置関連の資料を手にとった。

スカイプで話している人の近くでは、なんとなく、気配を殺してしまいます。ただ、
なんとなく。

ちょっとした違和感

足音が聞こえたわけでもなかった。

近づいてきた強烈な気配に惹きつけられる様に振り返った時、控えめなノックの音が聞こえた。

「芹沢さん、お久しぶりです」

目かくしのパーテーションの影からひょこっと人懐っこい笑顔を見せたのは、大月陽だ。会うのはアトリエの設立パーティーの時以来だった。

「あああ！大月くん、お久しぶり！」

「あ、今日もピアス可愛い」

彼にピアスを褒められたのは、確かあのパーティーの時だった。

すれ違いざまにふと言われたただけだったが、それ以来、なんとなくピアスを集める様になってしまった。

「ありがとう。お気に入りなの。大月くんの方は、木暮くんのコーディネートかしら？随分と垢抜けて、男前に磨きがかかったじゃない」

「ちょ、やめて下さいよ」

笑顔から一転、困った様な苦笑に変わる。

大月陽という青年は、人を褒めるのが上手い。ちょっとした変化やその人の美点を見つけ、嫌味を感じさせず、さり気なく褒めるのだ。

そのくせ、真正面から褒められるとほとんど狼狽とも見える態度を示す。

それを知っていながら止めないのは、彼の反応が面白いからだ。

「今やすっかり有名人ね。そろそろ取材も慣れたんじゃない？テレビなんかでもチラホラ見かけるし」

「いやいやいや、勘弁して下さい。テレビって言っても地方局やCSの番組とか、朝のニュースでチラッと映っただけだし。雑誌の取材も、全然慣れなくて。優馬さんに怒られてばかりです」

そわそわと髪が生え際を親指で掻きながら、大月陽は芹沢の向かいの席に座る。

備え付けのポットから汲んだ冷たい麦茶を勧めると、陽は軽く会釈して紙コップを受け取った。

簡素な会議室の蛍光灯のせいだろうか、改めて間近で見るとちょっとした違和感を覚えた。

「あれ。もしかして、ちょっと痩せた？」

麦茶をひとくち飲んだ陽が、紙コップの端を咥えたまま眉を寄せた。

「んー、どうだろう？ 体重測ってないから……あ、でも」
コップを口から離し、ため息まじりに笑う。

「絵描いてると、たまにメシ食うの忘れちゃうんですね。そのせいかな」
「それでまた、木暮くんに怒られるんだ？」
「そう。あははは」

「笑い事じゃないんすよ、芹沢さん」
いつの間にか、木暮優馬が背後に立っていた。

「うお！ ちょっと優馬さん、気配消すの止めてってば」

少し視線を向ければパーテーションが視界に入る筈の陽が、完全に背中を向けていた芹沢よりも大げさに驚く。

「集中力が凄いのはいいんですけどね、絵以外のことはボロボロ。それはもう、ボロボロ。
ちょっと目を離すと、どんどん痩せやがる。全くコイツは……」

元の職場だけあって、勝手知ったる会議室。
デスクを回り込み、優馬の愚痴を聞いていない振りをしている陽の隣の椅子に腰掛けると、当たり前のように冷たい麦茶を汲んで飲み干し、笑った。

「相変わらず、薄い麦茶」
「すみませんね。嫌なら飲まなくて良いのよ？」

文句を言いつつ2杯目を注いでいると、カメラを携えた菅沼もやって来た。

「おう。お待たせ」

「全員揃いましたね。では早速、始めましょうか」

いつの間にか、さっき感じた違和感は消えている。痩せた、ということ以外にも何かが引っかかったのだが……まあ、気のせいだろう。

芹沢は背を伸ばし、改まった様子で一礼した。

「ええ、おふた方、本日はご足労いただきー」

最初の取材時もそうでしたが、芹沢さん、ピアス派です。ま、どうでもいいことですが。

大月 陽（おおつき よう）25歳。

趣味で描いていた絵で独立し、昨年9月アトリエを設立。

「肖像画の制作過程を記録した動画を特典として作品に添付する」という販売方法が話題を呼び、人気を博す。

肖像画・人物画以外にも、抽象画、異素材を用いたアート、本の表紙や挿絵、衣服のデザインに至るまで、幅広く多彩な作品を生み出し続ける。

海外での人気も高まっており、いつも髪を後頭部で一つに括っていることから、ファンの間では「サムライスタイル」と呼ばれ、愛されている。

――現在はプロの画家として活躍されている大月さん、普段は絵のことについて聞かれることが多いと思いますが、今回はライフスタイルについて伺ってまいります。

さて、前回のインタビューから、もうすぐ4年です。独立させていただいぶ経ちましたが、環境の変化はありましたか？

「はい。当然ですが、絵を描く時間が増えたのと、集中できるのが嬉しいですね。起きてから寝るまで、ずっと描いていられるので」

――描くことが尽きたり、行き詰まったりはしませんか？

「いえ、それは全くありません。むしろ、描きたいものが後から後から湧いて来るので、追いつかないぐらいです。夜まで描いて倒れるように寝て、日の出前に絵に起こされるっていう……」

――絵に、起こされる？

「ええ。夢の中になのか、脳内なのかわからないですけど、イメージがこう……ダダダダダ〜って押し寄せてくるというか、溢れ出すというか。で、『あああ！もうっ！』ってなって起きる（笑）」

――壮絶ですね。

「そうですかね。前からわりとそんな感じなんで、慣れてるんです。兼業だった頃は、絵に起こされて眠れずに徹夜で描いて、そのまま仕事したりとか。ポーッとすると指を切り落としかねない仕事だったから、よく怒られましたけどね。独立してからちょっと重症化した気もするけど……体力的には、あの頃に比べれば楽になったかな」

――起きてからは、どのように過ごされるんですか？

「果物とかパンとか、片手で掴めるものを食べながら、湧き出てきたイメージをとりあえずスケッチします」

――食べながら描けるものなんですね。

「まあ、メモ代わりなんで、適当でいいんです。リンゴとかバナナとか齧りながら、こう、ザクザクと。ハタから見たらもう、ほぼゴリラです（笑）」

――ゴリラですか。ワイルドな朝ですね（笑）

「おかげさまで」

――その後は？

「スケッチが終わったら、一応身支度して……あとはずっと描いてますね。で、昼食を摂ってまた描いて。いくつも並行して描いてるので、キャンバスを取っ替え引っ替えしたり、部屋の中をぐるぐる移動しながら、少しずつ仕上げていきます。」

――混乱したりしませんか？

「それはありませんね。完成形が頭の中にあるので、混乱したり迷ったり？ そういうのは無いんです。むしろ、気分転換になります。

他の方がどういう風に描いてるのか、僕は知らないんですけど……油彩だと少しずつしか描けないから、皆さん同じ様な描き方されてるんじゃないですかね？ 違うのかな？」

――集中力の持続や体力の維持に気をつけていること、ストレスの対処法等はありますか？

「集中力……あまり気にしたことはありません。

体力維持に関しては、ご飯をいっぱい食べることと、たまに走ったり、腹筋と腕立て伏せぐらいかな。

長時間絵を描くのって、わりと体力筋力が必要なんで、例えば外の仕事なんかで絵を描く時間が取れない時に、集中的に筋トレするんです。夜中に人気のない河川敷を走ったりもしますね。

ストレスは.....よくわからない（笑）ストレス、無いかもしれない。なんかすみません」

——いえいえ。ストレスが無いって、羨ましい限りです。

「ええと.....強いて言えば、もっと時間が欲しいとか、あと飯食うのめんどくさいなー、ってぐらいで。いっそ胃袋をこう、カートリッジ式にね、カシャーンって入れ替えて、『ああ満腹』ってなればいいな、と」

——無理やり捻り出していただいて、ありがとうございます（笑）食事には興味が無いのでしょうか？

「美味しいものを、親しい人達と楽しく食べるのは好きですよ。仕事で地方へ行って土地の物をいただいたり。でもそれ以外は、単なる栄養補給だと思ってます」

——「では他に.....例えば、温泉に入ったり音楽を聴いたりドライブしたり、そういうリフレッシュ法などは？

「そういうの、全部絵に繋がるんですよ。温泉であれば、水とお湯の表現の違いとか、湯気や岩の質感をどう描くとか考えちゃうし、音楽も映像がバンバン浮かんできちゃうし、本を読めば挿絵描いちゃうし.....刺激にはなるんですが、リフレッシュとはちょっと違う気がしますね」

——以前、弊社のファッション誌でモデルを勤めていただきましたが、ファッションなどは？

「そ、その話は.....恥ずかしいので、ちょっと。服は興味無いです」

——海外ではその髪型から「サムライスタイル」と呼ばれているそうですが。

「これも自分で切ってるんで。髪を摘んで目の前に持ってきて、チョキって切るだけだから簡単だし、楽なんです。べつにサムライとかは関係無いんですけどね」

——絵と切り離される、全くのプライベートな時間は無いのですか？

「そうですねえ。何を見ても、人と話している時なんかでも、つい無意識に色々観察してしまいますし.....ああ、頭の中が空っぽになるという意味では、さっき言った、筋トレしてる時とか、夜中に狂った様に全力疾走してる時。あとは逆立ちしてる時ぐらいかな」

――逆立ち？

「はい。壁逆立ちってやつです。たまに無性にやりたくなるんですよ。でも最近は、部屋の壁じゅうに絵が立てかけてあるんでなかなか出来なくて……あ、これストレスだ。壁逆立ちの場所が無い！ っていうストレス」

――なんか色々突っ込みたいんですが、時間と紙面の都合で割愛します。他に趣味とか、欲しいものとか、やってみたいことは？

「趣味………物が増えるのは嫌だし………やってみたいこと……うーん」

――海外旅行とか？

「………美術館巡りとスケッチ三昧とかでも、いいですか？ あ、なんか怒ってます？」

――いえ。徹底してるなあ、と感心しました。

「やっぱちょっと怒ってますよね？ 話が広がらなくてすみません。ライフスタイルって難しいですね」

――（笑）

本当に四六時中、絵のことばかり考えてることが、よくわかりました。4年前のインタビューから何も変わっていない。むしろ、描くことへの情熱が強くなっているように感じます。

「はい。止まるところを知りません（笑）」

――では最後に、前回と同様「今後の目標」をお聞きしたいのですが。

「目標かあ……死ぬまで絵を描き続けたいので、「健康維持」ですかね。めんどくさがらずに、ちゃんにご飯食べます」

相変わらず絵を描くことを愛して止まない、そして天然っぽさがちょっぴり見え隠れする、大月 陽 さんでした。

過去のモデル体験の話になると途端に口籠ってしまうのですが、描くことに関しては心から楽しそうに語って下さいます。

生活の全てが結局絵に繋がっていく、というのは、大月さんならではのライフスタイルと言えそうですね。

因みに、髪を切るのには普通の文具用ハサミを使うそうです。

来月より、大月さんの作品が元になった舞台「光蟲 夜と戯れ」の日本公演が始まります。

さきに行われた世界芸術祭での招聘作品で、次々に形を変える光の群れと踊るという幻想的な雰囲気的舞台だそうです。主演は舞踏家の煌月カレンさん。

各会場入り口には大月さんの絵が飾られるということなので、舞台とともに、是非ご覧下さい

。

芹沢「髪を下ろしたりは？」

陽「顔が痒くなるからヤダ。坊主も剃り直すのがメンドイ。これが一番楽なんです」

菅沼「あー、髪下ろしたカット撮りたいなあ」

陽「嫌です（キッパリ）」

「わあ、俺が自分でゴリラって言ったみたいになってる。優馬さんの発言なのに……」

「そこは編集の妙ってやつだ。突然第三者が口挟んできたら、読者が混乱するだろ」

「あ、腕時計の話カットされてる」

「当たり前だ。『煩わしいから、腕時計なんて皮膚の下に埋め込めばいい』なんて話、使えるわけねーだろ」

「えー、便利だと思うんだけどなあ」

「皮膚を透かして時間が見えるとか動力は脈動とか、普通にこえーから。外で言うなよ？」

4年前の取材時よりもリラックスした表情で写っている写真をざっと眺め終わると、陽は薄い冊子を閉じた。下唇を軽く噛みながら、表紙のイラストを指でなぞっている。

(恵流ちゃんが生きてたら、今回も町中走り回って集めるんだろうな……)

おそらく、陽も同じことを思っているのだろう。

陽の表情からそう確信した優馬は、しんみりとしかけた空気を変えるように意識して明るい声を出した。

「この本さ、芹沢さんが見舞いがてらに天本さんに持って行ってくれるって」

「そっか、よかった。オヤジさん、俺が行くと怒るんだもん」

いつぞやの不安気な様子は何処へやら、陽は拗ねるふりをしつつも嬉しそうだ。

手術を無事終えた天本は、まだベッドから自力で起き上がれずにいるものの、意識は取り戻していた。陽が2日と置かずに見舞いに行くので、「絵を描く時間が無くなる」と追い返す程には回復を見せている。

「そういや天本さんが倒れたのって、6月半ばだったろ？ 最初の時もその頃だったよな」

「そうそう。ドイツから帰ってきたとこでさあ……空港で聞いて、心臓止まるかと思った。んで、いきなり独立の話じゃん？ あれは怒涛の1日だった」

あはは、と他人事のように呑気に笑う陽を見て、優馬は安心した。この分なら、数日間離れても

問題無いだろう。

「よし。じゃあ、そろそろ行くわ。お前ももうすぐ出るだろ？」

「そうだね。夏蓮の広島公演見て、そのまま観光して……たぶん、週末には戻るよ。栞さんに『夏休み楽しんで』って伝えて」

「おう。夏蓮さんにも『千秋楽お疲れ様』って。あ、お前の名前で花出しといたから」

「まじで？ ありがと」

「なんかあったらソッコー電話しろよ？ 時間気にしなくていいから」

「わかってる。ガキじゃないんだから大丈夫だって」

「いやいや、お前最近特に抜けてるし。絵以外のことになると、もう……」

「わかったって！ 気をつけるから！ とっとと行け！」

ほとんど蹴り出される形で陽の部屋を後にし、優馬は愛用の自転車に跨った。

広島に着いてしまえばカレンさんや五島さんと合流するのだし、まあ、大丈夫だろう。

陽とふたりでスタジオを設立して以来、初めての長期休暇。栞と連休を合わせて取るのも新婚旅行以来だ。

気持ちを切り替えて、家族3人、うんと楽しい連休にしよう。

浮き立つような気持ちで、優馬は愛車のペダルを踏み出した。

陽「腕時計の話、夏蓮は笑ってたよ？ 『あなたはそんなことしなくても大体の時刻はわかるでしょ』って」

優馬「……なんで？」

陽「陽射しの加減とか太陽の位置とか。あと腹時計的な」

優馬「さすが野生児」

陽「恵流は『うんと薄い自動巻きを開発出来ればイケる。日本の技術力ならきっと』
って。でもそれまでは動力が必要だから、脈動を使おうって結論に至りました」

優馬「お前と付き合おうと、発想が伝染るんだな……」

陽「人を汚染源みたく言うのやめて」

天翔ける不死鳥を

どうしても空を飛びたいのだと、夏蓮は譲らない。

次の「不死鳥」をテーマにしたプログラムで、舞台上の空を自力で飛び回りたいのだと。

すでに夏蓮が練習を始めている「エアリアル」という技法は本来、天井から垂らした布を用い、主に上下方向に移動しながら空中でパフォーマンスを行うものだ。

だが夏蓮は、遠心力を使って布から布へ飛び移りながら踊り、回転し旋回し、優雅に空を飛んでいる様を演出したいのだと言い張っている。

そんなことが可能かどうかわからないし、そもそも危険過ぎる、と五島は反対した。

それに対する夏蓮の返答は、「なら、危険じゃなくすればいいじゃない」の一言だった。

十分な安全策を講じ、無理のない、しかも美しい振り付けを考え、それを実現できる舞台装置を構築しろということだ。

スタッフ一同頭を抱えたが、夏蓮のイメージした振り付けを実際に見せられ、実現に向けて動かざるを得なくなってしまったのだ。

何も、そんなサーカスばりのアクロバットをやらなくても……とは思う。

だが、舞台上を縦横無尽に羽ばたき、より立体的に空間を使う演技が出来れば、爆発的に表現の幅を増やすことになる。それは、ダンス・演劇界の革命となるかもしれない。

そうなれば夏蓮は元より、チームスタッフ一同をもの名声までも、さらに高めることは間違いない。

よくあるワイヤーでの宙吊りじゃ駄目なのか？ と聞けば、「ワイヤーやバンジーは動きが不自然だし、装備が美しくないから、嫌」と一蹴されてしまった。

あくまでも、自力で飛ぶのだそうだ。

「不死鳥が、吊られて飛ぶと思う？」

当たり前じゃないの、とでもいう様に普通に言い切られ、五島はついに覚悟を決めた。

有能なスタッフやアーティストを呼び集め、大金をかけて舞台装置を開発させ、舞台美術を作り上げ……そして何より、スポンサー集めだ。

広島での最終公演を終えての盛大な打ち上げの最中も、五島は休みなく動き回っていた。挨拶と賞賛、少しの社交辞令、そして限りない名刺交換の繰り返し。

当の夏蓮はというと、片半身が癒着しているのではないかと思える程 大月陽にへばりつき、腕を絡めしなだれかかりながら、あちこち引きずり回しては客らと笑いあっている。

大月陽も、昔のぎこちなさはとうに無くなり、上手く調子を合わせて楽しげに対応している様だ。

彼自身の売名にもなることだし、とつい意地悪く考えてしまいそうになるが、そこは夏蓮もお互い様だ。大月陽と木暮優馬関係の人脈、異なる分野での知名度に乗っかっている部分もあるのだから。

大月陽の夏蓮へ与える影響が日に日に大きくなる懸念はあるが、今は仕方ない。使えるものは全て利用しなくては。

夏蓮の夢の舞台を叶えるために。

夏蓮さん、平気で無茶を言いますね.....

旅行のお土産を渡すからと呼び出された渡辺は、分厚いガラスの扉に手をかけた。

7月も半ばを過ぎればすっかり夏の陽気で、ようやくクーラーの心地よい冷気を浴びられる。そう思ったのも束の間、扉の向こうから吹き出してきた冷気には、甘ったるい香りが含まれていた。

「やあ、いらっしゃい。わざわざ呼びつけちゃって、悪いね」

「いえ、とんでもない」

カウンターの上には色とりどりの包み紙が雑に丸められ、店内は甘い香りで満たされている。

「やっぱさ、色んな味も美味しいけど、結局プレーンなこしあんが最強だな」

「優馬さんったら、いくつ食べるのよ。見てるこっちが胸焼けしそう」

「だよ。甘党にも程があるって」

幸せそうにもみじ饅頭を頬張る優馬を、陽と夏蓮が呆れ顔で眺めている。

充満する甘い匂いに、渡辺はわずかに鼻に皺を寄せつつ慣れた仕草でカウンターの向こうへ回り込んだ。

「麦茶いただきますね。あ、優馬さんおかわりは？」

「おう。さんきゅ」

トポトポと麦茶を注ぐ渡辺に、陽が小さな紙袋を差し出した。

「渡辺君は甘い物の好みが特殊だから、これ。広島のお好み焼きせんべいと、優馬さんからは牛タンジャーキー」

自分の嗜好を陽が覚えていてくれたことに驚き感激しながら、渡辺は包みを受け取り礼を言った。

渡辺は、わずかな例外と某ケーキ店のアップルパイ以外、甘い食べ物を好まなかった。

以前インコのピロちゃんを観察しに、陽が自室を訪れた際に手土産として持ってきてくれたも

のだ。

一度も話題に出していないにも関わらず、優馬が自分の好物を指定してきたと聞かされ、渡辺は少なからず驚いたものだった。

が、後にその理由を聞いて、さらに驚くことになった。

渡辺が絵を購入した時に財布を開けた際、たまたまそのケーキ店のメンバーズカードが見えたこと、その後も時おりその店のアップルパイの香りを漂わせていたことから、優馬が看破したのだという。

当時、優馬の観察眼と嗅覚の鋭さに若干引いたのを思い出し、渡辺はクスリと笑った。

「今この部屋、空気が甘味に染まってるから、家に帰ってからいただきますね」

「あー、どうもすみませんね。スイーツ王子なもんで」

「ウエ、王子だって。オヤジの間違いだろ。いや寧ろ、妖怪甘党ジジイだ」

陽の言葉に吹き出した夏蓮が、わざとらしい裏声で叫びながら陽の肩に取り縋る。

「きゃあ、怖い！妖怪甘党ジジイだわ！陽、助けて」

陽はカウンターの上に散乱した包み紙をぎゅっと丸め、優馬に投げつけ始めた。

「えい！あっち行け！甘党ジジイめ！」

優馬は投げられた紙つぶてを物ともせず、陽と夏蓮に向かっておどろおどろしく両手を差し伸べた。

「おまえも甘党にしてやろうかああああ」

「いやあああああ！」

大人達の馬鹿馬鹿しい遊びに苦笑いしながら、渡辺は床に落ちた紙つぶてを拾い集め、ゴミ箱へ捨てる。

「いいですね、妖怪甘党ジジイ。キャラクターになりそう」

「あはは。触れた食べ物全てが甘いお菓子になって、抱きつかれると甘党になるのね？」

陽が急にニカッと笑い、カウンターの端へ手を伸ばした。すかさず優馬がペン立てを取り上げ、陽に手渡す。

サインペンを選んだ陽は辺りを見回すと、渡辺の背後を指差した。

「渡辺くん、その紙袋、いい？」

3人が覗き込む中、陽はサラサラと淀みなく線を描いてゆく。

ふわふわしたくせ毛とちょっぴり猫背気味な特徴をうんとデフォルメした妖怪が、板チョコとソフトクリームを両手に掲げている。

顔の横の吹き出しには、「辛い子はいねえがあああ」と書き込まれていた。

「ねえ、これって、からい？ つらい？」

「両方。カライとツライをかけてみました。からい物好きな子もツライ子も、みんな甘党にしちゃう」

「あら。なんかちょっと良い妖怪っぽいわね」

「ツライ時に甘いもの食べると、癒されるらしいしな。俺、癒し系妖怪？」

「でもさあ、糖尿やメタボの人が増えそうだから、長い目で見たら悪い妖怪じゃね？」

くだらない会話の間にも、イラストは細部を書き込まれ陰影が足され、完成度を増してゆく。

渡辺は感動で胸を詰まらせながら、その光景をじっと見ていた。

「出来た」

満足げに呟いた陽は、だぶだぶのパンツのポケットから小さな皮革のケースを取り出し、指先で中を探る。

ケースから印鑑を取り出すと、イラストを描いた紙袋の片隅に、慎重に判を押した。

「はい、これ」

絵を描くために一度取り出した土産を再び戻し、紙袋を差し出された時、渡辺はほとんど泣きそうだった。

「いいんですか？ほんとに？……すげえ……」

両手で押し頂くように紙袋を受け取ると、涙で潤んだ目でイラストを見つめている。

「いや、ただの思いつきの落書きだから。そんな……」

渡辺の反応が予想外だったのか、陽は急にそわそわし始めた。

「だってこれ、優馬さんが描いてあるし……大月さんが優馬さんを描くところ生で見れて、しかもそれ貰えるとか、すごいレアだし……」

「それは俺じゃなくて、妖怪甘党ジジイです。あくまでも」

そう言いながら優馬は渡辺に忍び寄り、ちゃっかりイラストを写真に収めた。
夏蓮はなぜか、とても嬉しそうに微笑んでいる。

「ちょっと渡辺くん、どんだけ陽のこと好きなのよ。私の陽は誰にも渡さないわよ！」
楽しそうに笑いながら陽の肩に縋り付き、とびきりのウインクを飛ばす。

「え、ちがっ！そういうんじゃない……」
夏蓮の発言か、もしくはウインクに動揺したのか慌てふためく渡辺の弁明を遮り、優馬も負けじとカウンター越しに陽の腕にしがみついた。

「渡さないわよ！」と下手くそなウインクを飛ばしてくる。

肝心の陽はといえば、両側から引っ張られグラグラと揺れながらもがいている。

「ぐあああ、優馬さんうざー」

「ウザイって言うな」

「うざ～&キモ～」

「うふふふ」

仲良くじゃれ合っている3人を前に紙袋をしっかりと抱えながら、胸の中がほっこりと暖かくなっていくのを渡辺は感じていた。

それは、さっき言った理由だけではない。

「ツライ自分」に「甘い物で癒してくれる妖怪」の絵をくれた。その意味を、じんわりと理解したからだった。

優馬さん、おうちへ持って帰るもみじ饅頭はしっかり確保してあります。

夢を見た。

気づくと私は、ひんやりと心地よい水の中を漂っていた。
魚のいない湖。他の生物が住めないほど、澄んだ水。

淋しくなって何か泳いでいないかと水面を見上げると、ふわりと水が動いた。

身体が反転し、抗うことも出来ぬまま、すーっと沈み込んで行く。水流にうねり入り乱れる髪の毛の向こうに、キラキラ光る水面が見える。程なくして水底に背中が押し付けられた。
キラキラと光る水面はどんどん遠ざかり、やがて辺りは光の届かない真っ暗な闇に包まれた。纏わり付いては水面へと立ち昇っていた小さな水泡さえ、闇の中へ消えてしまった。

身体は、水底に刻み付けられてしまったように動かない……

† † †

「どうした夏蓮、顔色が悪いぞ」

「おはよう、カズ。大丈夫よ、ちょっと変な夢を見たの。それだけ」

「夢なんて珍しいじゃないか」

普段、夏蓮はあまり夢をみない。ぐっすりと熟睡する質なのだ。

夏蓮は朝食用の籐椅子に座ると、気怠げに髪をまとめ、大きなピンで留めた。

額の後れ毛を後ろへ流すついでに額に手を当てる。額はいつもより少しひんやりとしていて、先

ほどみた夢の感触を思い起こさせた。

サイドテーブルに、湯気を立てたコーヒーカップとフルーツサラダが置かれる。

「無理するなよ。休むか？」

「ありがとう。大丈夫、シャワー浴びればシャキッとするわ」

休むなんて、とんでもない。

今日は公演会場の候補をいくつか回って、その後はいよいよ本格的な振り付けが始まるのだから。

日々の訓練により、エアリアルの技術はかなり向上していた。

これから、夏蓮の持つ技術でどれほどのパフォーマンスが可能なのか見極めながら、長い期間をかけてステージを構築していくのだ。

全体的なイメージは出来ている。自信もある。

だが、初めての試みが多いことと舞台装置が大掛かりになること。そしてこの舞台を成功させれば、ダンサーとして大きく飛躍することができる。

私は少し、緊張しているのかもしれない。もしかしたら、少しだけ。

でも。

それ以上に、新しいことへの挑戦と未知の領域への期待感で興奮している。

コーヒーを、ひとくち。

深い香りと爽やかな苦味が広がり、私を落ち着かせてくれる。

窓の外には、夏の日差しを受けさわさわと揺れる濃い緑。

ふと、陽と一緒にいったドイツの夜を思い出す。あのホテルのベランダから見る景色は、この家の窓から見える風景と少し似ている。

.....陽は、今どうしているだろう。

夏蓮は胸元のペンダントに指先で触れた。金色の五芒星を取り囲む、銀色の月桂樹。

陽はシンガポールで行われる「アジア アートフェスタ」に招かれ、先日から滞在している。忙しいらしく、スカイプはおろか、メールすらほとんど送ってこない。

(シンガポールとの時差はどれくらいだったかしら。たしか.....)

「夏蓮、コーヒーはどうする？」

五島の声に物思いを破られた。

「もういいわ。それよりお水を飲みたい。あ、いいの。自分でやるわ」

夏蓮はわずかに残っていたコーヒーを飲み干すと、席を立った。流し台にカップを置くと、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出しグラスに注ぐ。

グラスの中の水に踊る細かな気泡を見て、夏蓮は再びあの夢を思い出した。水の冷たさと、湖底に引き込まれてゆく、あの感覚。

妙に心細くなり、思わず夏蓮はペンダントをギュッと握った。

(夢に、引き摺られている.....)

夏蓮はペンダントを離し、急いで水を飲み干すと、ベッドルームへ向かった。

馬鹿馬鹿しい。

熱いシャワーを浴びて、さっさと忘れてしまおう。

私はよく夢を見ます。フルカラーで、匂いや味もついています。
たまに戦ったりしてます。けっこう強いんだな、これが。

悪い夢

石造りの階段を先に立って歩く夏蓮の後ろを、五島はさり気なく周囲に目を配りながら付いて行く。

夏蓮には昔から、階段を歩く際、手摺りのある壁際を登るように言ってあった。

手摺りや壁とで夏蓮を挟むように、五島は夏蓮の数段後を歩く。もし足を滑らせたたりしたら自分が支えられるし、暴漢や悪質なファンが来ても守れる位置取りだ。

いつも通り、夏蓮が階段を登りきると、劇場の扉を開けるべく、五島は足を速めて夏蓮を追い越した。

横をすり抜ける際、劇場関係者の挨拶に艶やかな笑顔で応え、手垢のついたお追蹤（しかし本心からであろう言葉）を巧みに受け流す夏蓮を目の端で確認していた。

大きな歩幅で数歩、ドアの手摺りに手を伸ばしかけた時。

視界の隅に強烈な違和感を感じ、五島は咄嗟に振り向いた。

そこからは、まるでスローモーションだった。

階段の方を振り向いた夏蓮が、ゆっくりと倒れてゆく。

こちらに半ば顔を背けたまま、背中から、ゆっくりと。

数歩分をひとつ飛びに、五島は駆け出した。が、体は重く、悪夢の中でもがいているみたいに進まない。

ゆっくりと振り向いた夏蓮の目が驚きに見開かれ、何かを叫ぶ様に小さく口が開いたのが見えた。が、その表情はすぐに、うねる黒髪によって隠れてしまう。

五島の動きに気づいた関係者が振り向き、驚いて声をあげる。

倒れながら差し伸べられた手を掴もうと、五島は精一杯腕を伸ばす。

が、その距離は遠く、指先さえ触れずに空を掴んだ。

絶望の1秒間だった。

吸い込まれる様に落ちて行った夏蓮の体は石造りの踊り場に叩きつけられ、そのままの勢いで階段数段分を転がり落ち、途中で止まった。

自分がどうやって夏蓮の元へたどり着いたのか、五島は覚えていなかった。

ただ徒らに、夏蓮の名を大声で呼び続けていた。

† † †

眠り姫の様に、夏蓮は眠っている。

ただ穏やかに、ひたすらに美しく。

治りかけの擦り傷といくつかの斑色の痣が見えるが、それすらも前衛的なメイクを施したかの様に美しかった。

これはきっと、悪い夢だ。

五島は無骨な手を伸ばし、夏蓮の頬に触れようとした。

が、その手は空中でびたりと止まって行き先を変え、薄い掛け布団の端を整えるに止まった。

触れたら、痛い思いをさせてしまうかもしれない。

麻酔が効いて眠っているとはいえ、夏蓮の身体に少しでも苦痛をもたらす可能性のあることは、恐ろしくて出来なかった。

五島は簡素な丸椅子に座りなおすと、両手で頭を抱え背中を丸めた。頭を割ってしまわんばかりの力を両手に込め、奥歯を噛み砕く勢いで歯をくいしばる。気が狂いそうで、そうでもしていないと正気を保つことが出来そうにない。

伸ばした指の先、まるで見えない手に放り投げられたか風に攫われでもしたかの様に、ふわりと浮いて見えたあの瞬間。倒れていく身体と、差し伸べられた両腕。艶やかな黒髪が踊り、赤いピアスがきらりと光って揺れる。鮮やかなオレンジ色のブラウスのゆったりとられた袖がはためき、白い二の腕が垣間見えた瞬間、夏蓮の身体が硬い床に叩きつけられ、跳ねた。

そのまま転がり落ち、階段の中腹で斜めになって横たわった姿は……

劇的なまでに、美しかった。

艶やかな髪が床に広がり、目を閉じた美しい横顔には耳から流れ出た真っ赤な血が、一筋。放り出された腕は完璧な角度で留まり、指先は優美に開いていた。燃え立つ様なオレンジ色のブラウスは羽ばたく直前の翼を、真っ白なパンツを纏った長い足や銀色に輝く華奢なサンダルは神話の中の女神を思わせた。

救急車を呼ぶことも思い至らず、半狂乱でその身体を抱き起こし、ただただ名前を叫び続けていた間。

周囲のざわめきや関係者の怒号、救急車のサイレンが妙に遠くに聞こえる中、ぐったりとした身体を抱きしめ髪を撫で、「大丈夫だ」「俺がいるから」「何も心配するな」と震える声で囁き続けていた間。

救急隊員や周りの人間に両腕をもぎ取られるようにして夏蓮を奪われ、担架で運ばれる夏蓮に取り縋ろうと喚いている間も。

ずっと、脳裏にあの場面がちらついていた。

きっと、一時的な錯乱状態だったのだろう。

本来ならば、身体を動かさず速やかに救急車を呼び、各方面に連絡し、周囲の人間に状況を確認すべきだった。

だが突然、絶望と恐怖、究極的な美に襲われたこと、そしてその様な状況で「美しい」と感じてしまった自分を恐れ、恐慌状態に陥ってしまったのだ。

情けないどころの話じゃない。マネージャーとして、最も冷静であらねばならぬ場面で、俺は……

最悪の対処だった。

もしかしたら、自分のしたことのせいで夏蓮の状態が悪化したかもしれない。そう考えるのは、とてつもない恐怖だ。だが、その可能性は低くはない筈だ。

(夏蓮にもしものことがあったら……)

食いしばった歯の奥から、うめき声が漏れた。

五島は音をたてぬよう席を立ち、そっと病室の外に出た。時計の針は、もうじき深夜を指そうとしている。

夏蓮の両親が朝一番の便で到着する。

応急処置と一応の検査の結果は伝えてあるが、彼らが到着する頃には追加の検査が行われているだろう。

スタッフや、現場にいた関係者には連絡済みだ。当面の指示も済ませた。

あとは.....大月陽だ。すっかり忘れていたが、彼にも知らせなければ。

五島は大きく息を吐くと、木暮にメールを送るべく、夏蓮の眠る病室へ戻った。

まさかの展開です.....どうなる、夏蓮さん.....

「……陽の声が」

「なんだって？」

「陽の声が、聞こえた気がしたの。それで振り返ったら……バランスを崩したんだと思う。なんだか吸い込まれるみたいに……」

掠れた声で呟く様にそう言うと、夏蓮は目を閉じてこめかみを押さえた。

「痛むのか？」

「少しね。あと、ちょっと目眩がする」

今までに聞いたことのない、弱々しい声だった。

早朝から検査続きだったし、まだ食事も摂っていないので仕方ないとはいえ、五島は心配でどうにかなりそうだった。

「お母さんたちは？」

「先生と話している。それと入院の手続きがあるから、もう少しかかるな」

「……そう」

「陽くんにも知らせるから、夕方には着くと思う。それから、見舞いの連絡がたくさん来たが、とりあえず後日ということで対応しておいた。」

「わかった。ありがとう」

「そうだ、これ……検査で外したんだが」

五島はポケットからペンダントを取り出し、着けてやろうと夏蓮の背後に回った。夏蓮はゆっくりとした動作で髪を片側にまとめ、白い首筋を露わにした。

不器用な手つきで留め具を嵌め終えた時、五島の恐れていた言葉が放たれた。

「それで、いつ復帰できるの？」

五島は夏蓮の細い首筋を見つめながら、両の拳を握った。

「ああ、その話はまた後で……」

「いま教えて。予定を組み直さなきゃいけないし、他にも色々あるでしょう？ 早く取りかかった方がいいわ」

言い逃れは出来そうになかった。

親に告げられるより、自分が言った方がいいだろう。いや、夏蓮を守れなかった自分こそが、言わなければ。

「夏蓮」

五島は椅子に戻ると、膝の間で手を組んだ。夏蓮の目を真っ直ぐに見据える。

「今回の事故は、俺の責任だ。俺が傍にいたのに、お前を守れなかった」

「やめてよ。私が勝手にバランス崩したのよ。むしろ迷惑をかけて申し訳なく思ってる。なるべく早く復帰するから」

「夏蓮、聞いてくれ」

五島はより強く夏蓮の目を見据え、その視線を捉える。

「覚えていないんだろうが、早朝にお前は一度目を覚ました。その時に足が動かないことが判明して、お前は気を失った」

夏蓮の怪訝そうな表情から、本当に覚えていないことがわかる。

あまりのショックで記憶が抜け落ちたのだろう。そういう例はよくあると知っていたので、五島はある程度予期していた。

五島自身の絶望感を押し隠し、平静を装うのに努める。

「……お前の脚は、もう動かない。両脚とも」

全く表情を動かさず、夏蓮は数秒間、五島の目を見つめ返していた。

やがて薄く唇が開き、フッと小さく笑う。

「嘘。変なこと言わないでよ」

「本当だ」

「だって……全然痛くないし。ちょっと頭を打っただけでしょう？」

「神経が麻痺しているらしい」

強張った顔でそろそろと手を伸ばし、布団の上から脚に触れ、そっと摩る。

「でも……今だけよね？ 感覚が無いのは麻酔のせいでしょう？ 治るんでしょ？ 治療すれば、ちゃんと……」

声に不安が混じる。見開かれた目に、怯えたような色が浮かぶ。

五島は脚を摩る夏蓮の手を強く握った。

「現時点で出来るだけの治療をした。さっき君が言ったように、少し頭を打ったのと軽度の打ち身だけで、他に外傷はない。だが、脚は動かなくなってしまったんだ」

「……嘘。そんな……そんなわけないわ」

夏蓮の手が、小刻みに震え始める。呼吸が浅くなる。

「夏蓮、いま、他の方法を探してる。別の病院、別の検査、治療方法。だが……治る見込みは薄いそうだ」

「……嫌よ！ そんなの認めない！ 信じない！ 私は、絶対に……」

ヒュッ、と短く息を吸った途端夏蓮は力を失い、咄嗟に抱きとめた五島の腕の中に倒れこんだ。

これ、また目覚めた時も記憶抜けててエンドレス.....嘘です。そんな展開にはなりません

気を失った夏蓮が目覚め、真っ先に発した言葉は「医師を呼んで」だった。

医師から詳しい説明を受ける間、夏蓮は虚空を睨み据え、かと思うと眉を寄せて目を閉じ、時には指先で額をぬぐいながらも、一言も発することなく聞いていた。

震える息を長く吐き出した後、夏蓮の声は思いの外しっかりしていた。と言うより、押さえた怒りが籠っていた。

「要するに、原因がわからないから治療の仕様が無いってこと？」

「.....簡単に言えば、そうです。必要な処置はしましたし、その他の検査でも異常は見られない。ただ、日数が経って見つかる可能性は無いとは言いませんが」

「もっと大きな、特別な設備のある病院なら？」

「もちろん紹介させていただきますが.....それでも、先に行った可能性以上には期待出来ないと思います」

夏蓮の足元にぴったりと寄り添って座っていた母親が、口元を覆っていたハンカチで顔を隠し、堪えきれず嗚咽を漏らす。

それが夏蓮の忍耐の限界を綻ばせてしまったようだ。

「お母さん。心配かけて申し訳ないと思ってるし、来てくれて感謝してる。でも、それ以上めそめそするなら出て行って」

声を荒らげるわけでは無かったが、かなりきつい口調だった。

母親は息を飲み込んで嗚咽をぐっところえ、父親はその背中をさすりながらも何も言えずにいた。

「夏蓮.....」

「わかってる」

夏蓮は血の気の引いた白い顔を伏せ、震える唇で静かに息を吐いた。

「酷い言い方をして、ごめんなさい。でも今は、独りになりたいの。カズ、あなたも……お願い」

夏蓮の口調から、本気で言っていることはわかった。本当なら大声で泣き叫びたいであろうところを、とてつもない自制心を発揮して耐えているのだ。

両親を部屋から連れ出した時、夏蓮は下半身にかけてられた毛布を両手で掴み、思い切り握りしめていた。

病院の玄関まで両親を見送った五島は、病室の前まで戻ってきたものの、部屋には入れずにいた。夏蓮自身が求めた通り、ひとりきりになる時間が必要だと思ったからだ。

五島自身にも、時間が必要だった。

昨日から目まぐるしく変わる状況を見守るうち、いくばくかの覚悟が出来ていたとはいえ、診査結果を受け入れられた訳では無い。ただ、夏蓮とその家族の手前、冷静さを装っていたに過ぎないのだ。

病室のドアの窓を覗き、夏蓮が先ほどと同じ姿勢でじっと目を瞑っているのを確認すると、五島はその場を離れエレベーターホールを通り過ぎ、廊下に設置された水飲み器へ向かった。

ひとくち目の水を飲み下した瞬間、自分が相当乾いているのに気づいた。

そのままごくごく、たて続けに水を飲む。

昨日の朝食以来、何も食べていないことにも気づいたが、全く腹が減っていない。

息が続かなくなるまで水を飲み続け、大きく息を吐いた。全速力で走ってきたかのようにしばらく肩で息をして、呼吸を整える。

ハンカチを水で濡らし顔を拭くと、少しだけすっきりした気がした。

部屋へ戻ろうと顔を上げた時、エレベーターホールから人影が飛び出すのが見えた。素早く辺りを見回して駆け出したその男は、大月陽だ。

今はまずい、と声をあげる間もなく彼はドアに取り付き、開け放った.....

夏蓮の言い方がひどいのは確かだけれど、自分がきつい時に親に泣かれるのって、かなり堪えます.....

気持ちはわかるし、ありがたいんですけどね。

「夏蓮！！！」

汗まみれで部屋に飛び込んできた陽の顔を見た瞬間、血液が燃え上がった様に感じた。様々な感情が一気に膨れ上がり、ベッドから跳ね起きて彼に飛び込もうとした。

が。

脚が、動かなかった。まるで、縛り付けられてでもいるように。

上半身の勢いで倒れ込みそうになった私を、陽はしっかりと受け止め思い切り抱き締めてくれた。

私はただ呆然と、目を見開いていた。

何も、見えなかった。視界が真っ赤に染まり、頭が痺れた。ただ、陽の荒い息づかいと、汗の匂いを感じていた。

頭では受け入れていたつもりだったが、その時初めて、実感したのだと思う。自分の脚は動かないのだ、と。

「夏蓮……」

泣きそうな声の小さな呟きを聞いた時、何かが切れた。

視界が戻り頭の痺れが消え去ると、様々な感情が爆発し激しく入り乱れ始めた。

陽が腕を離し、涙をたたえた美しい瞳で私の顔を覗き込み頬に触れようとしたその時……私は我知らず、陽を思い切り付き飛ばしていた。

来客用の丸椅子をいくつも巻き込み、もんどり打って倒れた陽を、入ってきたカズが助け起こした。

体が、口が、勝手に動き出す。私は逆上し大声で喚きながら、枕やクッション、時計、花の入った花瓶まで投げつけた。

止めたかった。本当はそんなこと、したくなかった。

陽の姿を見た瞬間、血液の一滴までもが、細胞の全てが、陽を求めた。

陽の腕に抱き締められ、胸に顔を埋めて泣きたかった。息が出来ないくらい固く抱き締められたまま何時間も何日も慰められ、涙が枯れるまで泣き続けたかったのに。

でも。

私の体は裏腹に、陽を拒絶し、残酷な言葉を投げ付け、涙を流しながら狂った様に叫ぶのを、止められなかった。

陽は尻餅をついたまま、次々に飛んでくる物をかろうじて片手で防ぐことしか出来ず、呆然としていた。次第に困惑した表情を浮かべ、最後には涙を堪えていた。とても悲しそうに。

その表情は狂おしいほどに愛らしく、何故か殴りつけたい衝動を覚えるほどに愛しかった。だがそれに反比例するように、憎らしく、腹立たしい物だった。

悲しいのは、苦しいのは、私だ。最も辛いのは、この私なのだ。

気づいたら、カズに羽交い締めになっていた。

陽はのろのろと立ち上がり、千切れた花びらまみれでびしょ濡れのまま、ふらつく足取りで部屋を出て行った。

暴れながら、私が何を言ったのか覚えていない。

でも、最後に絶叫した言葉だけは、絶対に忘れないし、今も死ぬほど後悔している。

「あなたは絵が描けるじゃない！ そんな顔するのは、その両腕をもぎ取ってからにしてよ！ こんな……こんな脚で、どう踊れって言うのよ！」

「それ、カレンさんも本気で言ったんじゃないだろ。今はまだ、受け止めきれないんだよ」

「うん。それはわかってる。でも……」

急な帰国でチケットが取れず、数時間遅れで帰国した優馬が合流した時、陽は病院の前庭のベンチに呆然と腰掛けていた。花瓶の水を浴びたらしく、水は既に乾いていたが小さな花びらがいくつか服に着いたままだった。

見舞い客のあらかた帰ってしまった病院の庭はひと気が無く、夕蟬の声が響いている。

「でも俺、両腕をもぎ取れって言われて、それは出来ないって思っちゃった」

「そりゃ誰だって、そう思うよ」

「……きっと夏蓮にも伝わってしまった。それで余計に、傷ついたと思う」

陽は悔やむように両手で頭を掴み、きつく目を閉じた。眉間に深い皺が刻まれている。

優馬は背を丸めた陽の隣に座り、ため息をついた。

「なあ、陽。カレンさんももちろんだけど、俺らも混乱してる。こんな事になって、咄嗟に上手く対応出来なくても仕方ないさ。カレンさんにも俺たちにも、少し時間が必要だ」

陽は同じ姿勢のまま動かない。膝に肘をつき、俯いたまま。

「五島さんからメールで、申し訳ないが今日のところは帰ってくれ、ってさ。俺もその方がいいと思う」

優馬がそう告げても、陽は動かない。

黙って肩や腕に着いた花びらを取ってやっていると、陽がポツリと口を開いた。

「夏蓮、どうなるのかな？」

指先の花びらをねじり潰し、優馬はそれを指で弾いて飛ばした。

「五島さん達が世界中の病院探しまくるだろうし、俺も菜に頼んである。もちろん自分でも出来る限り当たってみる。今、原因がわからなくても、この先わかるかもしれない」

「……うん」

陽は頭を掴んでいた手で目をゴシゴシと擦り、また元の姿勢に戻った。

「俺さあ……正直言って、『無事で良かった』って思ったんだよね。脚が動かないって聞いても、それでもとにかく、生きててくれて良かった、って」

「……ああ」

「でもそんな事、夏蓮には言えない。彼女にとってはすごい残酷だよね」

「あー、うん。少なくとも今は、そうだな」

弱々しく息を吐き、陽はボソリと呟いた。

「……不死鳥なんて、描かなきゃよかった。夕子の悪い冗談みたいだ」

「それはお前……関係ないだろ？」

「そうだけど……」

奥歯を噛み締めているのだろう。こめかみがピクピク動いているのが指の隙間から見える。

陽がまだ何か言おうとしているのがわかって、優馬は次の言葉を待った。

「もしさあ……夏蓮の脚が、治らなくても、俺は傍にいたい。……でもそれは俺の我儘で、夏蓮にとっては辛い事なのかもしれない。だって俺は」

一言一言、言葉を区切って話すのは、考えながら話しているからだろうか。もしくは、口に出すのを躊躇っているのか。

陽は体を起こし、Tシャツの胸元を強く握った。

「……俺はきっと、絵を辞めない」

絶望感を滲ませる深いため息と覚悟を窺わせる声のトーンに、何故か一瞬、背筋に冷たいものが走り、優馬は密かに息を呑んだ。

「それって、夏蓮より絵を選ぶってことに、なるのかな」

「俺はそうは思わない。けどまあ、相手の受け取り方次第かもな」

受け取り方次第、か……と呟き、陽は小さく頷いた。

「夏蓮にちゃんと言おうと思う。思ってること、全部。でもそれは、今じゃない……よね？」

「……そうだな」

「わかった。今日はもう、これ以上考えない。嫌な事ばっか浮かぶし」

「おう。んじゃ、暗くなってきたし、飯食って帰るか」

「優馬さんはうちに帰って、家族で食べなよ。みんな待ってるだろ」

「じゃあ、お前も来いよ」

「俺は大丈夫だから。いっぱい飯食って、ガーッと走って寝るし」

「……そうか」

……こいつ、少し遅しくなったんじゃないか？

内心目を見張りつつ、優馬は立ち上がった。が、陽は動かない。

「……優馬さん、ちょっと待って。立てない。脚が……」

陽くん、ちょっと大人になったみたいです。ってか、脚どうした？！

ちょっと気になることがある、と芹沢から電話があったのは、帰国から2日後のことだった。

「すみません。急な帰国だったんで、土産とか買う暇なくて」

「そんなのどうでもいいってば。それより煌月カレンさん、大変だったわね」

「ええ」

「でさ。実はね、スガヌマが煩いんだけど……」

久々に陽と対面した取材の日以来、カメラマンの菅沼が騒いでいるのだと言う。

現在の陽は、少し前に会った時と纏っている雰囲気が違う。陽は陽だけれど、何かがおかしい。このAF-S 400を賭けてもいい。

あの日500枚以上撮った写真を見てみると（撮りすぎじゃないか？と優馬は思った）、胸のあたりを掴む様な仕草をしていることが多いのがわかる。体の具合が悪いんじゃないのか。じゃなきゃ、天本さん、煌月カレンと不幸が続いている今、お祓いに行った方がいい。いや、絶対に行くべきである！

「……ってさ。知っての通り、あいつ普段はお祓い云々とか言うタイプじゃないじゃない？ 初詣すら面倒くさがるぐらいで」

「ですね……」

「実を言うと、私も気になってたのよ。あの日最初に顔見た時、雰囲気がだいぶ変わったなって思ったの。でも、木暮くんが入って来てすぐ、その違和感も気にならなくなっちゃったんだけどね。単に痩せたせいかな、って」

「うーん……毎年の健康診断では、異常無いんですけどねえ」

「私も気にしすぎだとは思っただけど、あの変態カメラ野郎があんまり煩いから、さ。変なこと言っただめん」

丁寧に礼を言って電話を切った後、優馬はふと思い出した。

夏蓮の見舞いに行ったあの日、ベンチから立ち上がれなかった陽に、異常なほど焦りを覚えたことを。

「動けないってオイ！大丈夫か？！」

「うん……ずっと同じ姿勢でいたから痺れちゃって……あ、触らないで」

一瞬で全身の毛穴が開くほど驚いた反動から、優馬は怒りの鉄拳を陽の背中に見舞った。

「ばかやろう！ビビらせんじゃねえ！」

「うああっ！響く！足に響くからあ……マジ、マジでヤメテって」

「黙れ」

優馬は無理やり足を抱え上げ、悶絶する陽を無視して力づくで足首を反らし、曲げ伸ばしさせ、強制的に痺れを治したのだった。

コントの様な流れで終わったためにその後すっかり忘れていたが、確かに一瞬、不幸の連鎖という概念が頭をよぎったのだ。

優馬はパソコンをスリープ状態にして店を出ると、外階段を駆け上がった。ノックもせずにドアを開け放つ。

「陽！あの痣、どうなった？」

「え、なに急に。ってかビビンだけど」

汚れた布で筆先を拭っていた陽が、驚いて固まっている。

「痣だよ、痣」

性急に靴を脱ぎツカツカと詰め寄ると、陽のTシャツの裾をぐいとめくり上げる。

「うお、何だよ」

「何だこれ、デカくなってんじゃねえか！」

「ん？ うん」

「うん、じゃねえ！ 大丈夫なのか？ これ」

初めに相談されてから2年ほど経った真紅の痣は、いまや大人の手のひら大の面積にまで広がっていた。

「なんともないよ。何度か大きい病院で診てもらったし、痛くも痒くも無いし」

「だってお前、これ……」

心配そうに眉を寄せ痣を観察する優馬に、陽は無抵抗ながらも、絵筆の軸先で二の腕の内側のホクロを指し示した。

「これ見て。このホクロ、滲んでるでしょ。これ、元は普通のちっちゃいホクロだったけど、大人になるにつれて滲んできたんだ。今、だいぶ広がってるでしょ。直径5ミリぐらい？」

「いや、元を知らないからわからんけど」

「子どもの頃はさ、優馬さんのアゴの下のホクロぐらいだった」

優馬はキョロキョロとあたりを見回し、洗面所へと走った。電気をつけ、顔を仰向けて、ホクロを鏡で確認する。

そういえば、あった。普段気にすることなど無かったので忘れていたが、サインペンで突いた点ぐらいの、くっきりとした小さなホクロが。

釈然としないまま戻ってきた優馬に対し、陽は平然としている。

「単に、痣・ホクロ広がり体質なんじゃね？」

「そんな体質あんのか」

「知らないけど」

新しい色を筆に取り、絵の続きを描き始める。

「で？ なんで急に？」

「いや、マヌ……菅沼さんがさ。お前の、胸の真ん中を抑えるみたいな仕草を気にしてたらしくて。そういや、よくやるよなって思ってさ」

「ああ……これ？」

陽は優馬に向き直り、みぞおちの上あたりに手を当てた。

「この辺触ると、なんか落ち着くし集中できるんだよね。無意識だったけど、癖になってんのかな」

「触りすぎてデカくなってるとか？」

「マジか、それは痛烈な盲点。可能性はあるかもね」

さほど気にする風もなく、新しい色を調合し塗り始める。

「まあ、問題無いならいいんだけど。菅沼さんがさ、悪いことが続いているからお祓いに行けとまで言い出したって」

「お祓い？ いや俺、オカルトとか信じてないし。でもやっぱりお守りは持ってるから、大丈夫」

陽が指し示した先、作業台の上には鍵の束があった。

いくつかの鍵と共に、ダイヤモンドとエメラルドで出来たキーホルダーが付けられている。先日の夏蓮の誕生日プレゼントにとピアスを購入した際、お揃いにしようとねだられたものだった。ダイヤモンドとエメラルド。それぞれ、アポロンとヴィーナスの守護石だ。

「お守りねえ。カレンさん怪我したし、効いてねえじゃんか、それ」

「効いたから生きてるとも考えられる」

陽は絵から片時も目を離さず、描き続ける。

「ポジティブだな。そういや、カレンさんから手紙の返事きたのか？」

「ううん。でも、五島さんからメール来て、ちゃんと読んでくれたって。毎日何度も読み返してるらしいから、少なくとも迷惑ではなかったと思う」

「そうか……」

「夏蓮が呼んでくれるまで、大人しく待つよ」

「おう」

「藤枝さんからもせっつかれてるし、色々描きながらね」

.....こいつも随分タフになったもんだ。

恵流ちゃんの死を知った時のことが思い出される。

あの時の陽は、絵を描くこと自体に縋り付くようにして描き上げることで、理不尽な不幸と無理矢理に折り合いをつけた。極限状態にまで自分を追い込んだのは、感情の持って行き場が無かったことに加え、彼女の異変に気づけなかった自分への罰なのだろうと、優馬は推測していた。

そして今は。

絵を描くことに慰めを見出しつつも、きちんと自分の足で立ち、自分の中で感情を整理出来ている。

「それでもとにかく、生きててくれてよかった」

病院の庭で聞いた、陽の言葉を思い返す。

本当に、そうだ。

生きていてくれて、良かった。

(あの時、もしカレンさんが.....)

ふとそんな思いが浮かび、優馬は急いでそれを振り払った。

全く、縁起でもない。

その時、陽はどうなってしまうのか.....そんなこと、考えたくもなかった。

陽「優馬さん、大丈夫？ 息上がってるみたいですが。ほら、ここ座んなよ。ホクホク

だよ？」

優馬「それを言うならホカホカだろ。つーか、お前のぬくもりつきの椅子なんてヤダね」

陽「えー、階段ダッシュが厳しくなってきたお年頃の優馬さんのために、わざわざあっためておいたのにい」

優馬「……お前、なんかムカつくな！（人が心配してんのに……）」

Kさん、陽の「ホクホク」発言、いただきました！ありがとう♪

「この〇〇を賭けてもいい」は、アレです。

動物がいっぱい出てくる漫画の、アフリカ好きな教授のネタです。菅沼さん、読んでたらしいです。

もう、何度目になるだろう。陽からの手紙を、私はまた読み返している。

メールではない。手書きの、手紙。

年賀状やビジネスレター、礼状などではない、心のこもった温かい手紙。

改めて陽の直筆文字を見てみると、訓練された達筆ではないけれど、素直で読みやすく、力みや余計な飾り気のない文字だ。彼の人柄をよく表している、と思う。

描いてある内容も同様だ。率直でありながら、思いやりに溢れている。「美辞麗句」という言葉は、陽からかけ離れているどころか、真逆に位置するものだと思う。

「ねえ、ごーちゃん」

ああ、まただ。ここ数日、私は「カズ」ではなく、「ごーちゃん」と彼を呼んでしまう。無意識に、子供の頃のように。

彼は気にすることもなく、普段通り「うむ」みたいに唸った。

「私あの時、『こんな脚で、どう踊れって言うのよ』って言った？」

彼は初めて、PCの画面から顔を上げた。ほんの数秒、動きを止めたがすぐに、「ああ。そうだったな」と微かに頷いた。

「陽がね、”その言葉が、とても私らしい”って」

「.....そうか」

「うん」

折りたたんだ手紙を封筒へ戻し、ギュッと胸に押し当てる。

手紙を読み返すたび、喜びで胸が熱くなり、後悔で苦しくなる。

夏蓮は、「こんな脚で、どう踊れって言うのよ」って言ったよね。「踊れない」とは言わなかった。

その時はわからなかったけど、時間が経ってみて、とても夏蓮らしい言葉だと思った。夏蓮の心の中には、踊りへの強い思いがある。諦めてない。

もし、足が元どおりにならなかったとしても、君はいつか他の表現方法を見つけると思う。

俺も同じです。

もし両腕を失ったとしても、俺は絵を描くと思う。足の指や口で筆を咥えてでも、描くのを止めないと思う。

辛いだろうけど、きっと乗り越えられる。

俺はずっと、傍に居ます。夏蓮が嫌じゃなければ、いつまでも一緒にいさせて欲しい。

.....まるで、プロポーズね。

少し前までの、あの自信なさげな陽とは別人みたい。絵の中にこっそりと願掛けを描き込んでいた、あの頃の陽とは。

でも、「一緒に乗り越えよう」などと安易に言わないところは、やっぱり陽らしい。強引に手を引くのではなく、私自身を尊重し応援しながら寄り添ってくれると感じる。

陽に、会いたい。

陽に、会いたい。

陽に、会いたい。

でも、会うのが怖い。

また酷いことを言って傷つけてしまいそうで。

装わず閉じ込めずただ其処にある、まるで生まれたてみたいなの、あの無防備な魂を。

陽の側にいると、自分の魂まで浄化されていく気がしていた。

胸の中を綺麗な水が通り抜けて、いつの間にか溜まっていた澱が流れ去ったみたいに、心がスッキリする。肩の力が抜けて背中が軽くなるのだ。

自然体、というより、もはや自然の一部といった様子でありのままに生きている彼を見ていると、自分がいかに飾り立て虚勢を張って生きてきたかを思い知らされる。

もちろん、それは悪いことじゃない。私にはそれが必要だったし、自分が好きでやってきたこと。改める気なんてさらさら無い。きっとこれからも、私はそうやって生きてゆく。

私はどこまでも私なのだから。

だけど。

美しくも重たい鎧を身につけた私が動けずに踞っている間、陽は変わらずに素晴らしい作品を描き続ける。

一切の虚飾も纏わず無防備なまま、指先で美を紡ぎ出す。

私が留まっている間に、陽はどんどん先へ行ってしまう。

私は暗闇の底へ、陽は光の向こうへ.....

私のために絵を止めて欲しいなんて、思っていない。それは本当だ。

素晴らしい才能は遺憾なく発揮されるべきだし、何より私は陽の絵が大好きだ。

でも、それでも。どうしても。

羨ましさ妬ましさ、焦りを禁じ得ないのだ。悔しくて悔しくて、仕方がないのだ。

陽の才能が素晴らしければ素晴らしいほど、陽が優しければ優しいほど、そして陽を愛すれば愛するほど。

私の心は見苦しく悲鳴をあげ、穢らわしい血を流し、醜い色に染まっていく……………

夏蓮「頑丈であるほど、鎧は重たいの。そして美しく研ぎ澄まされているほど、扱いを誤れば自分自身をも傷つける……」

五島「今は丈夫で軽い材質もあるが」

夏蓮「ちょっと黙ってて」

陽は先ほどから一言も発さず、虚ろな目で呆然と空を見ていた。

昼間の暑さが残っているにも拘わらず、さすがの優馬も冷たくなった額を摩りながら、沈痛な面持ちをしている。

依頼されていた3連作を納品した帰り、陽と優馬は久々に連れ立って天本の見舞いへ立ち寄ったのだった。

そこで知らされたのが、天本社長の妻、静江が夫の見舞い中に過労で倒れ、さらに大腸癌が見つかったということ。現在彼女は、夫と同じこの病院で検査入院中だというのだ。

静江が「心配をかけるから知らせるな」と言うし、天本もそう思い連絡しなかった。だが、それが裏目に出てしまった。

せめて優馬にだけでも知らせておけば、ふたり揃って「せっかく近くまで来たから、天本さんの顔見に行こう」などと呑気に見舞いに来ることも無かった筈だ。

社長の車椅子を押して病室を訪ねると、静江は「この歳になれば、誰だってどこか悪くなる」と笑ってみせた。だが、陽の動揺は抑えられるものでは無かった。

「何なんだよ……」

静江の病室を出て以来初めて、ようやく呟いた。

「……やっぱ行っとくか？ お祓い」

「……」

優馬の声も、いつもより弱々しい。

朝の歩調とは対照的に、ふたりはトボトボと駐車場へ向かった。

車に乗り込みエンジンをかける頃には、空が暗くなり始めていた。

空気がやけに湿っぽく感じられる。夕立が来るのだろう。

「そういえば」

暗い表情の陽が、シートベルトを締める。

「前に優馬さんに貰った初詣のお守り、返してなかった」

「じゃあ、ついでにお焚き上げしてもらおうか」

まず家に帰ってお守りを回収、レンタカーを返却がてら神社へ寄ることに決め、ふたりは病院を後にした。

† † †

「……っ」

陽の足が止まった。

「どうした？」

俯いた陽を覗き込むと、ひどく顔色が悪い。額には脂汗が光っている。

「なんか、気持ち悪い……」

鳥居の柱に手をついたかと思うと、そのまましゃがみ込んでしまった。

優馬も一緒になってしゃがみ込み、そっと背中をさする。

「大丈夫か？」

答えず、陽は顔をしかめ小さく唸った。

「よし。あそこのベンチに座ろう。立てるか？」

優馬の手を借りてなんとか立ち上がり、支えられながら今来た道に戻る。

「あのベンチ、木陰だからちょっとは涼しいだろ。それに、鳥居の手前には悪霊がうろついてるって言うからな。あんま立ち止まると良くないらしい」

「.....そうなんだ。詳しいね」

「おう。田舎育ちのジジババっ子だったからな。よく脅かされたもんだ」

陽をベンチに座らせると、優馬は隣の自動販売機で水を2本買い、ひとつを手渡した。

「ほら、水分補給」

頷いてボトルを受け取った陽は、喉を鳴らして水を飲むと大きく息をついた。

優馬も陽の傍に座って足を投げ出し、水を飲む。

人心地つくくと、優馬は飲みかけのボトルを陽に預けた。

「お守り納めてくるから、お前はここで休んでな」

「大丈夫、俺も行くよ」

「いや、帰りは歩きだろ？ また具合悪くなったら困る。今日はただでさえ、色々あったしな」

世話になっていた天本夫妻が揃って入院してしまったことは、陽にとって相当ショックだったろう。

実子こそ持たない夫妻だったが、人情派で腕のいい親方と、如何にも肝っ玉母ちゃん然とした静江の存在は職人たちの親同然だったし、両親を失った陽にとっても心の拠り所だった筈だ。

その夫妻がいくら強がったところで、天本社長は心細げな様子を隠しきれてはいなかったし、静江さんにしても「何もこんな時に」と悔いているのが透けて見えた。

彼らを慕っているからこそ、度重なる心配事と不幸がストレスになって具合が悪くなるのも無理はない。

「ついでにお祓いしてもらえるかどうか聞いてくるから、ここでじっとしとけ」

「.....わかった。お願いします」

陽の手から紫色の小さな巾着を受け取り鳥居へ戻ると、優馬は軽く一礼して鳥居をくぐり、奥へと消えて行った。

陽「優馬さんって、意外と信心深いよね」

優馬「まあな。子供出来てから特にな……」

異変

「おい！ 陽！！」

鳥居を抜けて一目散に駆けてきた優馬の顔は、青ざめていた。

「……具合、どうだ？ 大丈夫か？」

陽の隣に腰掛け、顔を覗き込む。陽はなんとか弱々しい笑顔を返し、ほぼ空になったペットボトルを振って見せた。

「うん。水飲んだら、だいぶ楽になったみたい」

「……そうか」

「優馬さんこそ具合悪そうだけど……何かあった？」

預けておいたペットボトルを手渡され、優馬は半分ほどを一気に飲み下す。

「あのさ……お前、何かやった？」

「何かって、なんだよ？」

言いづらそうに口元を拭い、キャップを固く締め直した優馬が、何故かペットボトルのロゴを凝視しながら声を落とした。

「……あの、さっきのお守りさ。中身の札が、真っ黒に煤けてたんだ」

「え……？」

「社務所の人にお守り預けたら、なんか変な顔されて。その場で一緒に中を確認したんだよ。そしたら……なあ、なんか心当たり無いか？」

向き直り顔を覗き込むと、陽は慌てた表情で首を振る。

「無いよ！ 中身なんて見たことすら無いし」

「だよなあ……」

「優馬さんに貰って以来、ずっとバッグの内ポケットに入れっぱで」

「ああ、あん時紙袋ごと首から服の中に突っ込んだんだよな、確か」

「うん。しばらくチクチクして大変だった。しかもその後、チョコ無理やり食わされたし」

優馬がフッと吹き出す。

「……そういや、あったな」

「笑い事じゃ無いから」

突然、優馬が陽の手を掴んだ。

「お前、それ……」

陽の手は、無意識に胸の辺りをさすっていた。

「ん？ ああ、この辺がさ、チクチクしたなあって思い出して」

「あの時か？ 俺がふざけて服の中に突っ込んだ時？」

「うん」

「痣のどこ？」

「え……まあ、うん」

「……それじゃねえか？ お守り……」

時が止まり、ふたりは数秒間見つめあった。

「「いやいやいやいや！！」」

ふたり揃って急に身を起こし、あやふやな笑顔を浮かべる。

「だよな！ まさかな」

「うん。まさかだよ」

「なあ！ こえーよ」

「……」

「……何だよ、黙んなよ！か、帰ろーぜ。暗くなってきたし」

「だね。っていうか優馬さん、気にしすぎだから」

妙にせかせかと、ふたりは歩き出す。

「いや、マヌガッさんがさ、変なこと言うから」

「だからって真に受けるとか」

「お前だってさっき、ちょっと気にしたろ」

大通りに出て安心したのか、「あ」と、優馬が立ち止まった。

「これ。新しいお守り貰ってきたから」

「まじすか」

「なんならまた服の中に……」

「ふざけんな。やーめーろって、ちょっ……」

服の裾からお守りを掴み出し、払い除ける様に投げ捨てる。

「……………」

「……………」

陽は荒い息をついてTシャツの胸の真ん中を握りしめ、投げ捨てたお守りを凝視している。

「おま……」

混乱に歪んだ陽の表情が、険しくなっていく。

「いま、一瞬……なんか、バリバリバリって……掻き毟られたみたいに」

「嘘だろ……………まじかよ」

そろりそろりと、優馬はお守りへにじり寄り、震える指でそれを拾い上げた。

十 十 十

「いいか？ 開けるぞ？」

タクシーの後部座席で、陽が神妙な面持ちで頷くのを確認し、優馬は布袋の中から小さな札を取り出した。

頼りない車内灯に照らされたその小さな札は、書いてあった文字が判読出来無いほど黒く染まっていただけではない。真ん中を斜めに切り上げるように、亀裂が入っている。

見てはいけないものを見てしまったという様に、優馬は急いでお守りを元に戻し、自分のポケットに仕舞った。

「.....それ、俺が持つよ」

「いや、いい。明日また神社に納めてくる。それよりお前、痣はどうなってる？」

「もう何とも.....どう？ デカくなったりする？」
シャツの裾をぐいと持ち上げ、痣を優馬に見せる。

「.....変わらん、と思う。色も形も」

後部座席の様子に、タクシーの運転手はチラチラと怪訝な視線を向けるが、ふたりにとってはそれどころではない。

「……どうしよう」

「お祓い、お祓い頼んできたから！ 再来週の週末に予約してあるから、な」

「再来週……」

今日行った神社の神主はいくつかの神社を兼務しているため常駐しておらず、祈祷は再来週まで待たなければならないのだ。

「他にすぐにお祓い出来るところがあるか探さし、それまではほら……お前、あれだ。カレンさんとお揃いの」

陽はポケットを探り鍵の束を取り出すと、ダイヤモンドとエメラルドのキーホルダーを取り外した。優馬に目配せして頷くと、おそるおそる、首元から垂らしてみる。

息を止めて目を閉じ、服の上からグッと胸を押さえた。

「……なんともない」

ほう……と、優馬が盛大に息をつき、シートにもたれかかる。

「……まあ、お守りつっても、ただの宝石だしな。一応これも持っとけ」
ゴソゴソと鞆を探り、自分のお守りを陽に手渡す。

「いいよ」

「いいから持ってる。気休めだけだな。あ、服ん中には入れるなよ」

言いながら、優馬は陽の手から鍵束を取り当げ、自分のお守りを結び付けた。宝石のキーホルダーを寄越せと示し、それも元どおりに取り付ける。

スタジオの前でタクシーを降りると、優馬はすぐさま自転車に跨った。

「神社のことは俺に任しとけ。お前は、その痣のことについて思い出せるだけのことを思い出せ。些細なことでもいいから。宿題な」

陽が顔くのを見届けると、優馬はなんとか拵えた固い笑顔を返し、ペダルを踏み出した。

お守りを服の中へ突っ込んだあたりの経緯は、「栞（心の声を混じえてお送りします）」に出ています。

たぶん、93ページ目ぐらいかな？懐かしいです。

古びた黒い革張りのソファはクッションが薄く、お世辞にも座り心地が良いとは言えなかった。が、目の前のガラステーブルと共によく手入れが施され清潔で、不快な印象は無い。

汗をかいたグラスの中の氷が、カランと小さな音を立てた。

渡辺が妙に緊張した面持ちで来客用のグラスに手を伸ばし、冷えた緑茶を一口飲んだ。

隣に座った男がメモを読み返すのを横目で窺い、かと思うと、向かいに座る優馬に好奇心と心配が入り混じった視線を投げかける。

「おかしなお願いだとは承知しているんですが、是非。噂の内容や成り立ち、その出処などを、出来るだけ詳細に知りたいんです」

「都市伝説、ですか……」

柔らかな物腰のその男は、佐伯と言った。

渡辺青年がアルバイトをしている「中原探偵社」のエース、らしい。

「黒の山高帽に、サイズ大きめな黒のロングコート。黒革の眼帯、銀色L字型持ち手のステッキ。持ち手は年季の入った銀色で、細工が施されており、杖本体はおそらく黒檀……身長は170センチ前後、痩せ型の老人、と。ふん、これは興味深い」

「今どき山高帽なんて、なかなか見ませんよね」

優馬に紹介を頼まれての依頼とあって、若干興奮気味の渡辺が意気込んで頷く。

「ええ、それもそうなんですが。都市伝説にしては、妙なところでディテールが細かい。黒檀、なんて普通そうそうわかりませんよ」

優馬は少しひやりとした。

依頼の手前、あくまでも「都市伝説の調査」としてあるので、陽が実際に見た情報だとは知られ

たくなかった。

どんな細かい情報でも思い出せと言ったのは優馬だったが、元・木工職人の陽の鑑定眼を意外なところで発揮してしまい、少々焦ったのだ。

本当は、陽はその老人の特徴を絵に描いていた。

が、それを見せれば、陽が実際にその男を見ていることがばれてしまう。

「大月さんの次の作品は、この都市伝説がテーマなんですか？」

「あー……うん、まあ。未定だけどね」

言葉を濁した優馬に、佐伯が微かに反応した。とはいえ、ほんの一瞬瞬きが遅れた程度のことだったが。

「渡辺君。依頼内容以外の詮索は、禁物です。申し訳ありません、木暮さん」

頭を下げる佐伯に倣い、渡辺も「すみません」と小さな声で言って頭を下げた。

「いえ。えーと、そちらの資料……」

優馬が指し示した書類を手に取り、佐伯は表紙をめくった。

「先ほどお話しした、以前ティーン誌で取り上げられたいくつかの記事とその周辺資料、それとネットで拾った情報をまとめてあります」

感心した様に小さく唸り、佐伯は資料をめくりながら頷いた。

「ほう、実に分かりやすい。以前は編集のお仕事をなさっていたとか。こちらの記事はその伝で？……そうですか」

佐伯は一連の資料をひとまとめにし、ガラステーブルの上でトントンと整えた。

「都市伝説の解明。このような依頼は、非常に珍しい」

その言葉に渡辺の表情が不安げに曇り、食い入る様に佐伯の横顔を見つめる。

「.....ですが、とても興味深い。出来るだけのことをお調べ致しますよう」

「ありがとうございます。宜しくお願いします」

佐伯は小さく笑い、隣の渡辺を指差した。

「真横で、こんな風に噛みつかんばかりに睨みつけられちゃね。断れませんか」

佐伯さんは、だいぶに書いた「・・・のコイ♡」というお話にも出ています。

また宣伝しちゃった。えへ。

「都市伝説、って。優馬さん、そんなオカルト、まじで信じてんの？」

「.....お前ね。あのお守り見て、オカルト以外の何があるんだよ」

陽の描いた絵を前に、ふたりは険しい表情で腕組みしていた。

「鳥居の前で具合悪くなったってことは、やっぱ何かに憑かれてんじゃないか？」

「あれは熱中症になりかけただけでしょ、休んだら治ったし。それに今まで、修学旅行や遠足で神社仏閣色々行ったけど、何とも無かったよ？」

ふーん.....と、優馬が唸る。

「最近行ったのは？」

「えっと.....恵流と、初詣に。T a kさんとこの壁塗るちょっと前だね」

「っていうと.....その爺さんと遭遇して痣が出来たのが12月半ば、そのちょっと後で初詣。2年半前ぐらいか」

陽は頷きつつも納得出来ないという顔をしているが、優馬はやはり、怪しいと思っている。

2年半前。

痣が出来たばかりの頃、神社のお守りは痣の辺りにチクチクとした刺激をもたらした。（中の札が黒く変色したのはこの時か？）

そしてつい先日。

痣は大きく広がっており、搔き毟られたと感じるほどの痛みを感じた。真新しいお守りはまたも変色したばかりか、亀裂さえ入っていた。

時間の経過、痣の様子、痛みの変化など、どうも無関係だとは思えないのだ。

また、先日佐伯に渡した資料作りのため色々調べて回るうち、優馬はなんともいえない気味の悪さを感じ始めていた。見えないところで得体の知れないものが蠢いているような感覚。

陽が見たというその男の特徴を検索したところ、ネット上に奇妙な噂がチラホラと見受けられた

。

黒の山高帽にロングコート、黒の眼帯、ステッキを持った老人。
帽子を深くかぶっているせいかもしれないが、顔がよく見えなかったということも陽の情報と共通している。

この老人に出会い願えば、望みが叶うのだという。
いかにも胡散臭い、子供達が喜びそうなオカルト話だ。

「でもさ、昔の記事やネットには、痣のことは載って無かったわけでしょ？ なら、この痣とお爺さんは無関係かもしれない」

陽はどうしてもオカルトに結び付けられるのが嫌らしい。優馬とてそんな話をご免被りたかったが、現にあんな現象を見てしまっただけでは考えざるを得ない。
承服しかねると言いたげな表情の陽に、優馬は諭すような口調で促した。

「お守りと痣。痣とお爺さん……お爺さんに会った直後に痣が出来たわけだろ？ もしかしたら無関係かもしれないけど、その辺のこと、一応聞いてみたい。詳しく思い出せるか？」

「えーっと……」

十 十 十

2年半ほど前の、冬のある日。
恵流と一緒に公園で似顔絵を描いていた陽は、とある学生（後に「宮内」と名乗る）に絡まれ、絵を貶され汚される。
気持ちの収まらなかった陽は恵流と別れ、ひとり深酒してしまった。泥酔して街をふらついていると、いつの間にか見知らぬ薄暗い路地にいた。

絵を踏みつけられた怒りに代わり、徐々に悔しさがこみ上げてきた。

……悔しいけれど、あいつのいう通りだ。確かに似顔絵も楽しいけど、本当に描きたいのは違うものだ。

作品によって賞賛を浴びたいとは思わなかった。ただ、描きたい、と強く思いながら歩き続けた。

ふと気配を感じ顔を上げたのと、ふわりと体が浮いた気がしたのは同時だった。次の瞬間には、陽の体は道端のゴミ溜めの上に放り出されていた。

一瞬息が止まり、噎せた。うっすらと涙の滲む目をこじ開け見上げると、弱々しい街灯の下にその男が立っていた。

時折途切れ点滅する光は弱々しいといえどそれなりに眩しく、さらに帽子の庇の影に遮られた男の顔は、よく見えなかった。

「いい目をしている。強い欲求を持った、強い瞳だ」

嘎れた低い声が降ってくる。

噎せてケホケホ言っている陽を見下ろしながら、ゆらりと一歩、近づく。

ステッキをつく小さな音が、コツ、と響く。青白い光を着ぶくれたロングコートが遮り、男の影が陽を飲み込もうとする。

「だいぶ酔っているね」

男は手を差し出した。乾いた枯れ枝の様な萎びた手が、陽を引き起こす。

「……すみません、飲み過ぎたみたいです。怪我は、ありませんか？」
コートの袖口で口元を拭いながら陽が詫びると、男は首を振った。

「いや」

「……よかった」

「すみません、ありがとうございます」と再び頭を下げて離れようとした時、男が言った。

「君の願いは、何だね」

「え？」

立ち止まり振り向いた陽に、男はさらに言った。

「そんなになるまで飲むからには、何かあったのだろう。君の、願いは？」

「……」

「言ってみなさい。口に出せば、思いは強くなる。強い思い、意志こそが願いを叶える」

「俺……俺の、願い……」

視界がぐらりと揺れる。ふらつく足を踏ん張るが、なかなか真っ直ぐに立つ事が出来ない。頭がぐわんぐわんと回っている様だ。

思わず目を閉じ、すんでのところで吐き気を堪えた。

再び目を開くと、目の前に、男が立っていた。ほとんど鼻先が触れそうなほど、近くに。

「言いなさい。声に出して」

生臭い悪臭が漂い、黒革の眼帯で覆われていない方の眼が、ぬらりと光った。

「……絵を、描きたい。自分の中の全てを、描ききりたい」

頭の中に浮かんでくる様々な絵を、あの風景を、光景を、思う存分描きたい。一心不乱に余すところ無く全精力を傾け、描き上げたい。

見るの者の心に刻まれ一生消えることのない作品を、血を絞り出し細胞を潰し魂を叩きつけるほどの情熱で。

ほんの一瞬、酔いを忘れさせるほどの強い思いが、陽の声に力を取り戻させた。

「俺は、絵を、描きたい」

「……心得た。君はそれを叶えるだろう」

繰り返した陽の言葉にニンマリと笑った老人は、左手で握ったステッキを上げ、鈍く光る銀色の取っ手を陽の胸に軽く押し当てた。

途端に吐き気がこみ上げ、陽は弾かれた様に飛びすさった。

ぶち当たった壁に手をつけて、涙を流しながら何度も吐き、やがて胃の中のものを全て吐き尽くした。

胃液さえ出なくなってもなお続く吐き気がようやく治まり顔を上げると、老人は既に姿を消していた。

陽がおじいさんに出会った時のお話は、「深夜の電話」にチラッと出てきます。50ページ目あたりです。

確かそのあとも、何度か話に出ています。

「お前、それ……」

(怪しすぎるだろ)と優馬は心の中で思わず呟いたが、口に出さなかった。

「……いま思えば、なんか変かも。でも当時はあんまり気にしてなかったんだ。酔っ払って歩いて、ヘンテコなお爺さんとぶつかりそうになって転んで吐いただけと思って、すぐに忘れちゃった」

腕組みしたまま、優馬は依然、難しい顔をしている。

「あのさ……」

怯んだように、陽の声が少し弱くなった。数秒の逡巡の末、優馬の表情を窺いながら呟く。

「俺があのお爺さんに言ったことが関係あるなら、いま俺の絵が売れてるのは……その爺さんのオカルトパワーのおかげなのかな？」

「そんなわけねえだろ」

優馬は即答した。

「お前の絵が認められたのは、お前の才能と実力だよ。決まってるだろうが」

陽の表情が緩み、わずかに微笑む。

「……惜しいね。俺の才能と実力、優馬さんの商才のおかげだよ。あと、栞さんの協力も」

それを受け、優馬はへの字だった口の端っこを持ち上げてみせる。

「おう、まあな」

「ならお祓いしても、急に路頭に迷ったりしないよね？」

「当たり前だ」

「……うん」

心細気なその表情に、優馬は力強い口調で念押しする。

「お前は実力で今の評価を得てる。そもそもオカルトのせいだなんて言ったら、お客さんに失礼だろ？」

「うん」

真剣な顔で、陽は頷いた。その表情に、優馬は確信する。

「それにさ……お前ほんとは、自信あんだろ？」

「……まあね。ちょっと不安になっただけ」

バレたか、という風に笑うその顔は、以前よりずっと頼もしく見えた。

一転、陽は首をひねり胸元を摩りながら、不思議そうに呟く。

「嫌な感じとか、別に無いんだけどなあ……」

「試しにもっかい、お守り入れてみるか？」

「え、やだよ」

からかい気味に言った優馬だったが、ふと気づいて動きを止めた。

「……お守り？ ……なあ、こないだ渡したお守り」

「ん？ 鍵に付けてあるよ？」

立ち上がって作業台に歩み寄ると、鍵の束をじゃらじゃらと振ってみせる。手を伸ばした優馬に、陽は鍵の束を放り投げた。

「……やっぱそうだ。これ、葉の安産祈願のやつだったわ」

陽はプフュー……と頬を膨らませてみせ、短く笑った。

「意味無いじゃん」

構わず、優馬はお守りの中を確認し始める。

「なんともないな」

「いや俺、安産関係無いし。それになるべく直接触らないようにしてたし」

お守りを元に戻したが、優馬はそれを見つめたままだ。

「……恵流ちゃんとの初詣って、どこ行った？」

「え。えっと……名前忘れちゃった。恵流ん家の近所の、なんとか不動尊とか、そんな感じ」

優馬はいきなり立ち上がった。スツールがガタンと音を立てる。

「ちょっと調べ物してくる。お前は仕事に戻れ」

「え、俺も一緒に調べる。何したらいい？」

「駄目だ」

強い口調で即座に否定する。

「でも、俺自身のことなのに」

「締め切り近いのがいくつもあるだろ。お前が描かなきゃ、俺の給料はどうなる」

そう言われると陽が何も言えなくなるだろうと、優馬はわかっていた。卑怯な言葉だが、今は仕方ない。

後ろめたさを誤魔化すように、優馬は片眉をヒョイと上げ、安っぽい映画の悪役みたいなニヒルな笑みをこしらえた。

「お前が描いて、俺が売る。お前は絵に集中しろ。他のことは俺に任しとけ」

諦めた陽が、ため息をつく。

「……わかったよ。じゃあ、お願いします」

「おう」

鍵束を陽に投げ返し、テーブルの上の絵をくるくると巻いて持つと、優馬はそそくさと靴を履

いた。ドアを開けて出て行きかけたところ振り返り、ビシッと陽を指差す。

「集中！！」

陽は「ああ、ハイハイ」とでも言いたげに、それでも同様に指をさし返す。

「……しゅーちゅーう」

十 十 十

陽を絵に集中させておきたかったのには、理由があった。
依頼されている作品の納期が近いことももちろんだったが、もう一つ。

痣と謎の老人のことを考えさせない為だ。
優馬はある可能性に気づいた。そして陽の意識をそこから逸らす必要があった。

パソコンを起動する間に、部屋から持ってきた謎の老人の絵を抽斗にしまう。
咄嗟にこれを持ち出したのは正解だった。陽のことだ。おそらく一度絵に集中してしまえば気を取られる心配は無いだろう。だがやはり、この絵は陽の視界に入れられない方がいい。

優馬は恵流の近所に該当する神社を探した。ほどなくしてそれを見つけ、さらに詳しく検索する。
次に、栞の安産祈願のお守りを買った神社。

調べてみるとそれぞれ、主に「交通安全」と「安産&家内安全」のご利益があるとされる神社だった。

この神社とそこのお守りは、陽の痣に何も変化をもたらさなかった。

「やっぱりそうか……」

陽に異変を起こしたのは……2回とも同じ神社のお守り。

この神社は、「天児屋尊（あまのこやねのみこと）」という古い神様を祀っている。国土安泰か

ら合格祈願まで幅広くカバーする神様らしい。

それに加え、日本書紀の「天の岩戸に隠れた天照大神（あまてらすおおみかみ）を、美しい祝詞で誘い出した」という伝説から、「言葉」「言霊」を司るとされている。

編集者だった優馬は、勤めている出版社の近所にこんな神社があったことに縁を感じていたし、「言葉の力」ひいては「有言実行」の神様と勝手に解釈して、ずっとこの神社を贔屓にしていた。
陽に渡したお守りも、その思いを込めて購入したものだった。

先ほど陽から聞いた話だと、謎の老人はしきりに「言葉」「声にして言うこと」に拘っていた。

それは、契約だったのではないか。

声に出して願うことで、謎の老人との間に何かが結ばれたのではないかと、優馬は考えたのだ。そして、既に結ばれた謎の老人との「声の契約」と、「言霊」の力が反発しあった。

ということは、あの痣と謎の老人は、確実に関係があるということになる。

神の力に反発するのなら、それはきっと……悪いものだ。

（……悪魔の力？ あの痣は、契約の証？）

痣が大きくなった分、お守りから受けたダメージが大きくなったのだろうか。

この仮説が正しければ。

これまでに陽の周囲で起こった不幸の数々は、偶然ではない。謎の老人と不用意な契約を結んでしまったために引き起こされた不幸である可能性が考えられる。

（もしかすると、恵流ちゃんの死も……？）

そこまで思い至った時、優馬はゾツとした。

陽には絶対に、この可能性に気づかれてはならない。
だから無理やり意識を逸らせ、絵に集中させたのだ。

再来週まで待てば、当の神社でお祓いをしてもらえる。

それで上手くいけば、陽は何も気づかないままでいられるかもしれない。

謎の老人はただのボケ老人で、都市伝説なんて子供の作り話だ。連続した不幸はただの偶然。お守りの反応は、そこらへんの低級霊でも引っかかったのだろうという話にして、終わりに出来る。

むしろ、そもそも優馬の仮説なんて間違いで、本当に何の関係もないかもしれない。

うん、きっとそうだ。そうに違いない。

この不気味な仮説が杞憂であることを、優馬は強く願った。

優馬「集中！！ (σ*°ー°)σ」

陽「.....しゅうちゅーう (σ'□`)σ ㄝㄝㄝ」

.....みたいな感じでしょうか。

驚くべきことに、似たような噂は古くから世界中に存在していた。ある時は噂話として、ある時は物語、地域に残る伝承として。

その存在は、非常に狡猾に「対象者」を出し抜き甘言を弄する。

「対価と引き換えに、欲するものを与える」

そう聞くと、死後の魂を捧げる悪魔との契約を思い浮かべるかもしれないが、その存在はそういったものを求めるとは限らない。

対象者の望みを叶えるための「対価」が何を指すのかは不明。

対象者は社会的に成功を収めたが晩年に発狂したり、幸福の絶頂でいきなり頓死したりと不吉な結末を迎えたとの言い伝えが多く残っているが、あくまでも噂や物語としてであり、真偽は不明。

「対象者」と思われる人々は多種多様で、対象者間に人種性別年齢貧富等の明らかな共通項は見られなかった。

また現時点では、上記の件と思われる新聞記事や文書等は見つかっていない。

「その存在」についての外見は、時代によって様々である。

近年では、先日拝領した資料とほぼ同様、「黒づくめ、山高帽に着膨れたロングコート、隻眼に黒の眼帯、銀の取っ手の黒ステッキを持つ老人」であるとされている。

尚、ステッキの材質についての記載は見受けられなかった。

† † †

佐伯からの報告書にはたくさんの資料が添えられていたが、まとめると上記のような内容だった。

覚悟はしていたつもりだったが、前の仮説との共通点に、優馬は少なからずショックを受けて

いた。

ましてや、世界中に古くから同様の話があるとは。

しかも。

あまりにも抽象的であり、優馬の知りたかった具体的な情報はひとつも無いときている。

優馬としては、除霊とまではいかなくとも、撃退法や、せめて封印の方法のヒントぐらいは欲しかった。

昔からよくある、口裂け女に「ポマード」みたいなレベルでもいい。それを取っ掛かりにして何かわかるかもしれない。

(とりあえず、引き続き調査しつつ、お祓いに期待するしかないか.....)

優馬は資料の束をファイルに綴じ、デスクの引き出しの一番奥へ隠す様に仕舞った。

† † †

陽は弁当に特別な思い入れがあるらしいというのは、前に聞いたことがあった。理由は知らない。

今まで以上に仕事に没頭している陽のために、栞監督のもと作った豪華特製弁当。陽は殊の外喜び、盛大に平らげた。

お守りの一件以来、満足げに腹をさする様子を久しぶりに目にした気がする。

「お前、また痩せたろ」

「んー.....どうだろ。毎日食べてるけど」

「ちゃんと眠れてるか？」

「寝てるけど.....すぐ起きちゃうんだよね。あんま眠くならない」

優馬の表情が曇ったのを見て、陽はにへらと笑ってみせた。

「そんな顔しないでよ。体調は絶好調。むしろ漲っております」

小さなダイニングテーブルの上、陽の携帯が小さな音を立てた。
手を伸ばしてメールを確認した陽が、振り返って携帯をかざす。

「夏蓮、転院先の病院に着いたって。検査は明後日。車椅子の扱いも上手くなったってさ」

「そうか」

もう一度メールを読み直すと、陽はパチンと音を立てて携帯を両手で挟んだ。そのまま胸の前で押し潰す勢いで手を組み合わせ、目を閉じる。
きっと、「頑張れ」と胸の中で応援しているのだろう、と優馬は思った。

その読みを裏付ける様に、陽は勢いよく立ち上がる。

「よし。俺も頑張る。いっぱい稼がなきゃね」

「お前ね、もうちょっと休めよ。こう、食後の余韻をだね」

「だって、ここ買い上げるんだもん。休んでらんない。ガシガシ描く」

天本静江の病状は楽観視出来るものではなかったらしく、手術は大掛かりになりそうだった。
当然、入院手術費用も高額になる。
そのために陽は、家賃の前払いなどではなく、いっそ天本夫妻からこの建物ごと買い取ってしまおうと考えているのだ。

「優馬さんの報酬さえ払えれば、俺は金要らないし。オヤジさんたちだって、お金の心配が無い方が治療に専念出来るでしょ」

陽は当たり前のようにそう言ったものだ。

頼もしい言葉ではあるが、優馬は「おい、ちょっと待て」とも思ってしまう。お前はそれでいい

のか、それで満足なのかと。

もし「何のために描くのだ」と聞けば、きっと陽は「描きたいから描く」と答えるだろう。何を今更、とでも言いた気に。

だがおそらくその裏には、不安が隠されている。カレンさんのこと、天本夫妻のこと、そして自分の痣のこと。

優馬に心配をかけぬように黙ってはいるが、顔を見ればわかる。元々顔に出やすい質なのだ。だから却って仕事に没頭し、不安を忘れよう、払拭しようとしている。

そんな心理状態でも、陽のことだ。作品に影響が出ることはほぼ無いだろうが.....

早くもキャンバスに向かっている陽の背中を眺めながら、優馬は自分用に取り分けた弁当のおかずを箸の先でつついた。

「お前は仕事に集中しろ」

陽が余計なことを考え無いように、そう言ったのは自分だが。こう何日も続けて根を詰めるとは思っていなかったのだ。

(.....なんでそう、極端なんだ。眠れないってんなら、殴ってでも寝かすぞこの野郎)

優馬はため息まじりに、鳥の唐揚げを箸で突き刺した。

人を殴って眠らせるのは、普通、睡眠とは呼びません。それは、昏睡というのですよ、優馬さん。

”一度バレリーナだった者は、一生バレリーナである ”

そんな文章を目にしたのは、いつだったろうか。

五島はそれを読んだ時、なるほど上手いことを言うと感心したものだった。

そして今、改めてその言葉を痛感している。

両脚が動かなくなってから、一週間。

様々な検査や治療を繰り返しながら、夏蓮はようやくこの生活を受け入れ始めた様に見える。

車椅子への移動や取り回しにも慣れ、すっかり自分のものになっている。

先の言葉通り、夏蓮は車椅子上にあってもこの上なく優雅で気高く、美しかった。凛として顔を上げ、まるで新たな振り付けを踊っているかの如く、その動きはしなやかで確信に満ちている。見舞客への対応も、謁見に応じる女王の様に華やかで落ち着いた態度で、車椅子が玉座に見える程だ。

そう。

彼女は今、脚の不自由な女王の役を演じている。

あれ以来一切の弱音を吐かず、ただ強く、目の前の問題に対処し、努力し、戦っている夏蓮の姿は、五島にはそう見えた。

女王を演じるのは、現状を受け止め乗り越える、彼女なりの方法であるかもしれない。

だが一方、大月陽に対する葛藤については、未だ乗り越えられていないらしかった。

新たな検査を終える度、転院が決まる度に五島から連絡させるのみで、夏蓮自身は動けずにいる。受け取った手紙やメールは何度も読み返し、返事をしようと試みるのだが、いつも途中で止めてしまうのだ。

一度だけ、夏蓮は笑いながら涙を浮かべたことがあった。

「ごーちゃん、見てよ。これ」

手渡されたのは、花籠に添えられた手紙だ。

”心を込めて祈りました。君は気休めだと笑うかもしれないけど、受け取って下さい”
短いメッセージと共に同封されていたのは、「とげぬき地蔵のお守り」だった。

「こんなの、笑うに決まってるじゃない。ほんとバカなんだから、全く……」

夏蓮は泣き笑いでそう言うと、布団を被って蹲ってしまった。

五島は気を利かせて部屋を出たのだが、彼女は長いことそのまま居た。

十 十 十

自分がこれほど狡い人間だとは、知らなかった。
狡いうえに、弱虫で見栄っ張りの小心者だ。

本当なら、私から離れるべきなのかもしれない。
この脚がいつ治るのか、もしくは一生治らないのか。それすら不明な今、私は自分で選ばなければならぬ。
潔く陽に別れを告げるか、さもなくば、支えてもらうかを。

正直なところ、陽を手放すことは考えられないし、ましてや陽が他の女性と親しくなるなんて我慢出来ない。
ならばさっさと謝って、思い切り甘えて、頼ればいいのだ。陽なら絶対、受け入れてくれる。

でも私には、それが出来ない。

勝手気ままに振る舞うことは出来るのに、弱みを見せたうえで甘えるのがこんなに勇気の要ることだなんて、思ってもみなかった。

陽を酷く傷つけたくせに謝ることも出来ず、彼の気持ちを素直に受け取ることも甘えることも、挙句には完全に突き放すことすら出来ないのだ。

そして私は、知っている。

陽が自ら離れていくことは無いと。あれだけ理不尽な仕打ちを受けても、傷ついた恋人の前から去ることは無いと。

だから、ごーちゃんに頼んで近況をいちいち報告してもらっているのだ。宙ぶらりんのまま、陽の優しさを利用し、自分の醜さを隠しているのだ。

もう少し。

もう少しだけ、待っていて欲しい。

ある程度、今の自分を受け入れられるまで。焦らず、八つ当たりせずに、陽の傍に居られるようになるまで。あなたに、素直に感謝出来るまで。

待っていて欲しい、けれど。

会いたい。

陽に、会いたい。

いますぐ、会いたい・・・・・・・・

「とげぬき地蔵」とはまた、渋いですね。陽くん。
これ、天本夫妻にも送ってそうな気がします.....

台風が近づいている

今年初の大型台風が近づいているとの予報通り、遠くに黒い雲が見える。生ぬるい風も、どこことなく湿っているようだ。

朝一で関係者との打ち合わせを終えた五島が病院に着いたのは、もうすぐ面会時間が始まるという時刻だった。雨が降り出す前に到着出来たのは幸運だ。

前日の検査結果も不調に終わったとのメールが入っていたので、夏蓮はきつとがっかりしているだろう。嫌な天気になりそうだし、何か明るい話でもしてやれるといいのだが。

そう思いながら病院の前庭を渡っている時、電話が鳴った。何だろう、病院からだ。

「もしもし」

不審に思う間もなく電話の向こうから聞こえてきたのは、担当ナースの慌てた声だった。

夏蓮が、突然暴れ出したというのだ。

物を投げテレビを引き倒し、大声で泣き叫んでいると。

今から来られるかとの問いに「すぐ行きます」と答えるより早く、五島は駆け出していた。

病室に近づく前から、夏蓮のわめき声と看護師たちがとりなす声が聞こえていた。

五島が病室に飛び込んだ時、看護師たちは3人がかりで夏蓮を抑え込もうとしていたが、かなり苦戦していた。

五島に気づいたひとりの看護師が、ホッとした表情を見せた。

「離して！ 私に触らないで！」

五島は夏蓮が枕を振り回し暴れているベッドを大回りし、頭の方へと回り込む。

「皇月さん、落ち着いて。いま先生が来ますから」

「鎮静剤を入れますからね～」

「いや！陽がいいの！触らないで！出て行って！」
振り回す腕を捕まえようとした看護師が振り払われ、勢い余って弾き飛ばされる。

「夏蓮！止めろ！どうした」

五島の声に振り返った夏蓮は、一瞬動きを止めた。振り乱した長い髪が顔に張り付き、額は汗で光っている。見開いた目に、みるみる涙が溜まっていく。

か細く震える声が、こぼれ落ちた。

「……陽に、会いたい……」

振り回していた枕を抱きしめたかと思うと、膝の上に叩きつけた。

「陽に、会いたい！会いたいの！」

ゴロゴロと涙を零し泣きじゃくりながら、何度も枕を叩きつける夏蓮を背中から抱え込み、五島は落ち着いた声で話しかける。

「わかった。すぐに呼ぶから。もう暴れるんじゃない」

夏蓮は暴れるのを止めたが、今度は枕に顔を埋めて頭を振った。

「……嫌。駄目よ、呼ばないで！」

枕越しのくぐもった声は、嗚咽している。
看護師たちが手を出しかねオロオロと見守る中、担当医師が入ってきた。

「……会いたいの。会いたいけど、会いたくないの」

小さな子供のようにしゃくりあげ、何度も首を振る。

「大好きなのに、憎くてたまらないの。悔しいの。心が、苦しいの……大好きなのに、どうして」

ぐったりと力の抜けた腕からそっと枕を抜き去り、ゆっくりとベッドの上に横たえる。夏蓮はされるがまま、しゃくりあげ続けている。

看護師が素早く準備を終え医師が鎮静剤を投与する間、五島は夏蓮の顔に張り付いた髪を綺麗に撫でつけ、汗と涙に濡れた頬を優しく拭いてやった。

子供の様に悲しみに顔を歪ませ虚ろな目をした夏蓮が、薄れてゆく意識の中、消え入りそうな声で五島に訴えかけた。

「……むーちゃん、たすけて」

スイッチが切れたように瞼が閉じられる。と同時に、両の目尻から涙の粒が零れ落ちた。

医師たちがほっと息を吐く中、床に転がったテレビは消えずに騒がしい音を立て続けている。画面の向こうでは、何か海外のイベントだろうか、盾の様な物を手にした大月陽がステージに立ち、フラッシュを浴びながら取材に答えていた。

長い1日が始まります……

台風襲来

西から台風が近づいている。

強い風と激しさを増す雨の中、優馬はただ闇雲に歩き回っていた。

待ちに待ったお祓いを明日に控えたこの日、台風が予想以上に速度を増し、飛行機や新幹線の運休が止まってしまい、戻ってくる筈だった神主が足止めされているのだ。

それに加え今朝、栞が洗い物をしていると突然食器が割れ、顔と指に怪我を負った。

祓うことを、何かに妨害されている。優馬はそう感じた。

台風だけなら、季節的に有り得ることだ。こうまで焦らなかったかもしれない。

だが、栞が怪我をした。

幸いそれほど深い傷ではなかったが、仕事柄注意深く食器を割ることなどほぼ無かった栞が、炊事用のビニール手袋を嵌めていたにも拘わらず、怪我をした。しかも割れたガラスの破片が飛んで、目のすぐ下を掠めたのだ。

.....まさか、栞にまで？！

ただの偶然だと思おうとした。

が、一度頭に取り付いてしまった思いは消えず、居ても立ってもいられなくなってしまった。

陽はあれから、今までに増して絵に没頭している。

清水恵流を描いたあの時以上に、取り憑かれたように鬼気迫る勢いで描き続けている。まるで、何かに追い立てられているみたいに。

そんな様子を心配する気持ちも、もちろんあった。無理にでも休憩させるべきなのだ。

だが正直、今はそれどころじゃない。

一刻も早く、あいつを.....謎の老人を見つけなければ。

お祓いが出来ないのだとしたら、直接会って対決するしか道は無い。

佐伯の追跡調査によれば、謎の老人に出会うのはひと気の無い細い路地である確率が高かった。

(どこだ。どこにいる。出てこい、ステッキじじい)

薄暗い空の下風雨に晒されながら、路地裏から路地裏へ、優馬は猛然と歩き続けた。

† † †

強風が、ガタガタと窓を揺らす。

マンションの中層階とはいえ、風で何か飛んできたらガラスが割れるかもしれない。

栞はカーテンを閉め、我が子を抱き上げて窓の側から移動させた。

優侍は外の様子に全く動じることなく、だーだーと何やら話しながらおもちゃで一人遊びを続けている。

(優馬より、この子の方がよっぽど肝が据わってるわね)

栞は手鏡を手に取り、今朝の傷をチェックした。

目の下を横切るようにうっすらと滲んでいた血は、完全に止まっている。指先で触れてみたが、痛みも無い。

指の方の傷は、まだ少しズキズキと熱を伴う痛みがあった。

今朝の優馬は、少し様子がおかしかった。

確かに私は慎重なタイプで、普段から物を落としたり壊したりすることはほとんど無い。それに、あの食器の割れ方はなんだか不思議だった。シンクに置いてあったグラスを手を取った瞬間、ピシッと音を立てて亀裂が入り、弾けるように割れたのだ。

私がそう言うと、優馬は一瞬、愕然とした表情を浮かべた。すぐに取り繕ったけれど、慌てふためいているのは歴然だった。

「ガラスの欠片を踏むから」と、わざわざ私を抱き上げて優待と共にリビングへ隔離、ソファに座らせて素早く傷の手当てをしてくれた。

そして、丁寧すぎるほどに床を掃除し、手のひらで何度も何度も床を擦り破片の有無を確認して、洗い物の続きをやってくれた。

「嬉しいけど、有り難いけど。そこまでしてくれなくても、大丈夫よ」

苦笑まじりにそう言った私に、優馬は明らかに無理に作った硬い笑みを返した。

「.....そうだな。心配し過ぎだよな」

動揺を抑える様に下唇を噛んでいた優馬だったが、すぐに足早に部屋を出ると、家中を引っ掻き回してお守りだのパワーストーンの付いたストラップだのを集めて戻って来た。出産に際し、出先で片っ端からお参りして集めたお守りの類は、両手で掴んでもこぼれ落ちるほどだ。

「これ、持ってて。今日は家から出るなよ？」

「うん.....こんな天気だし、出る予定もないけど」

戸惑う私に構わず、優馬はお守りの束をしっかりと握らせた。

「よし。俺は仕事行くけど、何かあったら電話して。あ、揚げ物とか、危ないことはすんなよ？」

「危ないこと？ 揚げ物が？」

「あ、いや.....」

「優馬、どうしたの？ 今日なんか変よ？」

何かトラブルが起きた時、優馬は殊更鷹揚に構える。別に大したことじゃない、とばかりにのりくりらりしてみせ、飄々と解決するタイプなのだ。

そりゃ、私の出産の時は盛大にあたふたしていたけれど、こんな風な.....なんだろう、焦燥感？悲壮感？のようなものは見られなかった。

「いいんだ。何でもない。ホラ、怪我したしさ。気をつけてねって」

優馬は曖昧に笑って、私の頭をポンポンと撫でた。そして、「いい子にしてるんだぞ」と、優侍にも同様に。

「じゃあ、行ってくるから」

そう言って背を向けた時に一瞬見えた優馬の横顔は、不安を覚えざるを得ないほど、固く険しかった。

「.....変なパパだねえ、優侍？」

栞は不安をかき消す様に、子供のお腹をくすぐった。キャキャ、と無邪気に笑う我が子の声に、少しホッとす。

「よし。晩御飯は、パパの好きなものにしよう。ね？」

「んねー」

通じているのかいないのか、男児はご機嫌で某キャラクターのおもちゃを振り回した。

優馬さん、陽くんの痣とお守りの云々、栞さんにはまだ話していないみたいですね.....

寂れた見慣れぬ裏路地に入った時、強い風が吹き、優馬の傘が煽られて飛んだ。

(くっそ.....)

数歩後戻りして傘を拾い、顔を上げた時。

目の前に、男が立っていた。

黒い山高帽、真夏に似つかわしくない黒のロングコート。

あまりに突然のことに、優馬は傘をさすのも忘れ呆然と立ち尽くした。

「.....私を呼んだのは、君だね」

言葉だけ聞けば問いかけるようだったが、嘎れたその声は断定的だった。

「何かを強く思い願う声が、私を呼ぶ。しかし、私自身を呼び出したのは、君が初めてだ」

にんまりと笑った口元から、黄ばんだ前歯が見えた。優馬の背中が、ぞっと総毛立つ。

雨に濡れることを全く厭わぬ様子で、醜い老人は優馬を見上げていた。が、その隻眼は未だ帽子のつばの影に隠れている。

「君の望みは、何だね」

「.....陽。大月陽に、何をした」

ようやく絞り出した声は、唸るように低く、恐れよりも怒りが勝っていた。

「ほう、あの青年。彼の知り合いかね。良い目をした青年だ」

「陽に何をした。答えろ」

老人はゆっくりとした動作でステッキを持ち替えた。そしてその取っ手で、帽子のつばをほんの少し持ち上げる。

黄色く濁った隻眼がぬめぬめと光り、優馬を無表情に見返している。

「呼び出しておいて、随分と喧嘩腰じゃないか」

「うるさい！ さっさと答えろ」

老人は、ふん、と鼻を鳴らし、ステッキを濡れた道路にぶつけた。コツン。

「まあ、いい。若さというのは性急なものだ」

優馬は今や、牙をむいて唸り出さんばかりの様子だ。それほどこの老人は不気味で、警戒心を呼び起こした。

「私が彼に、何をしたか。そう……私は彼に、望むものを与えた。彼の望みを叶える、力を」

空に閃光が走る。割れるように、雷が鳴った。

雨の音が大きくなり、老人のしゃがれ声を遮る。

両手を固く握りしめた優馬が、醜い老人に一步近づいた。

「力？ かって何だ」

「力とは、何か。君は根源的な質問をする。そういう人間は嫌いじゃない。知識というのは奥深く、簡単には会得しがたいものだ。だが人は、あまりにも思い上がり」

「黙れ。戯言は聞きたくない。お前が、陽にしたことを答えろ」

優馬は湧き上がる嫌悪感を押しやり、また一步、詰め寄った。

「やれやれ。まあ、いい。力というのは、言葉そのままの意味だ。私は単に、力を授けた。あと

は彼が……彼らがそれを仕上げた」

「わかるように説明しろ！」

苛立った優馬が声を荒らげる。

「全く、せっかちな男だ。あー、与えられた力の働き方は、人それぞれだ。各々の特性により、それぞれが全く異なる作用をもたらす。彼の場合は、自分自身の特性と周囲からの影響によって、彼のためのシステムを独自に作り上げた」

「システム？」

「さよう。彼は与えられた力を変換装置として使った。いや、少し違うな。周囲の人間のエネルギーを取り込み己の力に変えて放出する……」

優馬が眉を陰しくする。

「……アンプ、みたいなものか？」

「ふむ。まあ、遠くはないが……システムという表現が悪かったか」

老人はコツンと杖を鳴らした。

「彼を思い愛する人の心を吸収し、彼はそれを作品に変える。全くの無意識のうちに」

「……違う。それは嘘だ」

「嘘？ 何故そう思う」

「陽には元々才能があった。お前と出会う前から、彼は素晴らしい絵をいくつも描いていた」

「さよう。彼には才能がある。だが考えてみたまえ。これだけの短期間で、しかも芸術の分野で、だ。世界的に評価され、金銭的にも成功する人間が世の中にどれだけいると思う？」

「それは……」

「無論、ゼロにいくら掛けてもゼロであるように、無から有は生み出せない。空っぽの畑にいくら水を撒いたところで、何も育ちはしないということだ。だが彼は、元々の才能に加え、特別な力を得た。才能の芽を早く大きく育てるには、それなりの養分が必要なのだよ」

「じゃあ、周りの者が不幸に見舞われる理由は？ 陽を思っている人が不幸になるのは何故だ」

「わからんかね。彼らは皆、自分のエネルギーを彼に注ぎ続けているんだよ。人の持つエネルギーというのは、運や気力、精神力、または生命力、そういったものの総称だ。本来自分が保持すべきエネルギーを、気づかぬうち彼に“養分”として分け与え続けてしまう。ついつい目をかけ、自然と手を差し伸べてしまう。それが、大月陽の持つ『特性』だ」

老人は、眉を吊り上げニヤリと嗤った。

それはまるで、思い当たる節があるだろう？とでも言っているように見えた。

「そして、与えられたエネルギーを絵を描くことに変換する。それが彼の得た『力』だ」

「なんで、そんなことに……」

「さあね。さっきも言っただろう。彼とその周囲の人間が、そのシステムを生み出したのだ。私の知ったことではない。だがひとつ、推測できることはある」

顔に張り付いた嗤いが広がる。地面が裂け、地獄への入り口が広がる様を連想させる。優馬は思わず身震いし、両手を固く握りしめた。

「彼の望みは、『絵を描くこと』だった。それを叶えるためには、それなりの対価が必要になる。支払うものが大きければ大きいほど、彼は素晴らしい絵を描ける」

「大きな対価、とは何か。彼にとってそれは、『周囲の人間の幸福』だった」

急にそんなこと言われても、ねえ……… (困惑)

「そんな……何故、そんな」

「当然のことだ。其の者が最も大切にしているものが代償として支払われる。考えてみたまえ。例えば、借金のカタにするなら、大きく手堅いものから持って行く方が取りっぱぐれが無いだろう？」

「でも、陽はそんなこと知らなかった。何も知らせずにそんな仕打ちをするなんて、詐欺じゃないか。当たり屋同然だ」

「……ふむ。人をヤクザ呼ばわりしたことは不問にしよう。まだ混乱しているのだからね。何度も言うが、そのシステムを作り上げたのは君達自身だよ。私には責任が無い」

頭が、胸が、焼け焦げるように熱くなる。燃えるような怒りに体を震わせ、優馬は咆えた。

「理不尽だ！」

老人はそれを軽く去なし、空惚けた風を装う。それが尚更、優馬の怒りを誘う。

「どこがだね？ 君たちは自らのエネルギーを餌として彼に与え、彼は餌を喰らって芸術を生み出し続ける。後世に残る芸術をね。実に美しい。みんなハッピーだ」

……なにがハッピーだ。こいつが何者か知らないが、絶対に気が狂ってる。ただの狂人だ。

ギリギリと歯軋りをしながら、優馬は荒ぶる呼吸を必死に整えた。

まだ、聞かなきゃならないことがある。

「……お前の言うことが本当だとして。ひとつおかしい事がある。何故、俺はなんともないんだ？」

「ふむ。実は、先ほどから気付いていたんだが……」

もったいぶった前置きと共に、老人は目を眇めた。

「貴殿は、何か見えない力によって幾重にも守られているため、彼の吸収の影響を受けづらいようだ」

優馬は無意識のうちにポケットを探り、例の神社のお守りを握りしめる。

「ああ、そうそう。ポケットの中の、それだ。だが、私と接触したことで、その護りも徐々に薄くなっている。これ以上私に近づかないほうが良いのでは？」

「言われなくてもそのつもりだ。二度と俺たちに近づくな」

「ずいぶんなご挨拶だ。礼のひとつもあって然るべきかと思うがね」

ポケットから取り出したお守りを突きつける優馬を、老人は小馬鹿にした様に鼻で嗤った。

「陽から手を退け。そんな力、陽には要らない」

「それは無理だ。彼の紋章は既に堅く結びついている。貴兄や周囲の者たちの惜しみない好意によって、深く、強く、分かち難く」

「紋章って何だ?! あの痣のことか! あれを消せばいいのか」

「無駄だよ。あの痣は、ただの印。私がつけた目印だ。消しても力は失われない」

「ふざけるな!」

老人に飛びかかり胸ぐらを掴む、筈だった。

が、老人が面倒臭そうに杖を一振りしただけで、優馬はふわりと転がされ電柱の下のゴミ溜めに突っ込んだ。

「乱暴は良くないな。美しくない。私はそろそろお暇しよう」

老人は一步も動かず、顔だけを優馬に向けた。

優馬は老人を睨みつけながら立ち上がろうとするが、ゴミが邪魔をしてなかなか抜け出せない。

「では、最後にもう一度聞こう。……貴兄は何を欲する？」

ステッキで帽子のツバを僅かに持ち上げるその口元には、狡猾な笑みが滲んでいる。

自由に動けぬ苛立ちをぶつけるように、優馬は怒鳴った。

「黙れ！ お前から欲しいものなど何も無い！」

老人の口元の笑みが濃くなる。

「.....かつて、同じことを言った者が在った。美しい少女だったが」

「黙れ！ このキチガイが！」

老人の一人語りを遮り、優馬はもがきながら怒鳴りつける。なんとか立ち上がると、お守りを握ったまま指を突きつけた。

「いいか、これ以上俺たちに何かしたら、絶対に許さない！」

肩で荒い息を吐く優馬を憐憫の目で眺めながら、老人は微かに頭を傾けた。その仕草は「ご自由に」とでも言っている様で、さらに優馬の怒りを煽る。

優馬の怒りなど一顧だにせず、老人はゆっくりと背を向けた。不恰好に体を揺らし、濡れたアスファルトに一步毎ステッキを突き立てながら、雨の中をゆらりゆらりと遠ざかって行った。

老人の消えて行った曲がり角を睨みつけていた優馬は、強烈な突風にハッと我に返った。お守りを握りしめた右手は力を込めすぎて震え、白く浮き上がった関節の周りは赤紫色になっている。お守りをポケットにしまい、腰の周りを軽く払うと、纏わり付いていたゴミが道路に落ちた。

辺りを見渡すと、いつの間にか手放していた傘が離れたところに転がっている。優馬はゆっくりと傘を取り、震える手で畳みながら、安普請なビルの軒先に避難した。

壁に傘を立てかけ、濡れた前髪を両手で後ろへ撫で付ける。その眉がうんと険しくなっているのは、頭の中が高速回転しているからだ。

上体を折って前屈みの姿勢で壁に寄りかかる。両手は頭を離れ、膝を掴んで上体を支えた。

.....『力』は、その者の特性により独自の形で顕れる.....大きな望みを叶えるには、大きな対価を.....

「大きな対価、とは何か。彼にとってそれは、『周囲の人間の幸福』だ」

先ほどの老人の言葉が、頭の中を駆け巡る。

あの話が本当だとしたら。俺は、なんてことを……

ギュッと目を瞑り、食いしばった歯の隙間から小さく呻き声を漏らすと、優馬は徐に体を起こした。

ひとつ深呼吸をして、内ポケットの携帯電話に手を伸ばす。

次のお話は、五島さん側に戻ります。

あいつだけは、許せない。

夏蓮が、あんな顔をするなんて。

誰よりも勁く、気高く、美しい、夏蓮が。

常に昂然と顔を上げ、次々に新たな挑戦を成し遂げては賞賛を浴び、その美しさと実力とで周囲を支配してきた、あの、夏蓮が。

「むーちゃん、たすけて」

消え入りそうな声でそう言った夏蓮は、まるで出会ったばかりの頃の少女の様だった。勝気で負けず嫌いで、そのくせ泣き虫だった、あの頃のまま。

夏蓮は、弱くなった。

あの男と付き合ってから、夏蓮は少しずつ、弱くなっていった。

優しく、柔らかく、幸せに……そして、弱くなっていった。

まるで、普通の女みたいに。

俺の、夏蓮を、返せ。

紛れもない才能と強烈なその個性で有無を言わさず君臨する、女帝の様な夏蓮を。

あの頃からずっと、文字通り血の滲む努力を重ね、だが周囲にはそれを見せず華麗に優雅に振る舞い続けて築き上げた、煌月カレンを。

どんな困難も撥ね退け、何年ものあいだ共に闘ってきた、あの、煌月カレンを。

今までどんな男が隣に居ようと、夏蓮は夏蓮だった。

何者にも屈さず、染まらず、傷ひとつ付けられない。

それが分かっていたから、現れては消える男どもの存在にも耐えられた。

どうせすぐに飽きられ捨てられる。それを知っていたから、男どもに同情してみせる素振りさえ出来た。

全く意に介さぬだろうと知った上で、夏蓮に苦言を呈したこともあった。

年長者として、またはビジネスパートナー兼用心棒として、尤もらしく説教じみた小言を垂れながら、心の中では彼らに向けて何度叫んだかわからない。

「ざまあみろ」と。

結局、夏蓮が頼るのはこの俺だ。

夏蓮の一番近くにいるのは、夏蓮を最も理解しているのは、夏蓮に必要とされているのは、この自分なのだ。

夏蓮に打ち捨てられた哀れな男たちの背中を見送る度、歪んだ自己満足に心を震わせてきた。

それなのに。

あの男は、夏蓮を変えてしまった。

ふたりで苦心して築き上げた女神の座から、いとも容易く夏蓮を引き摺り下ろし、人間の女に変えてしまった。

幸せな、ただの女に。

そして、当の夏蓮はといえば。

以前にも増して美しく眩いばかりに光り輝いた。

だから、許せなかった。

夏蓮の心に潜り込み攫って行ったあの男が、憎かった。

その気持ちはずっと、自分の心の中でさえ、厚く重たい蓋で封印していた。
だが、その封印の下では、気も狂わんばかりの嫉妬と憎しみが渦巻いていたのだ。

「……むーちゃん、たすけて」

夏蓮の見上げる瞳と溢れた涙、掠れた弱々しい声が蘇り、五島の胸をまた、苦しくさせる。

夏蓮が、俺に、助けを求めた。

胸の奥から、震えるほどの昏い喜びが湧き上がる。

結局、夏蓮が頼るのはこの俺だ。

夏蓮の一番近くにいるのは、夏蓮を最も理解しているのは、夏蓮に必要とされているのは、この自分なのだ。

子供の頃から、そしてこの先も、ずっと。

あの男が、邪魔だ。

あいつが居るから、夏蓮が苦しむ。
二度と夏蓮の前に現れてはいけない存在だ。

俺が、夏蓮を救うのだ。

五島は内心の逆上を平静の下に隠し、大型アウトドアショップで闇色のウインドブレーカーと大きなナイフ、軍手を購入すると、携帯電話を手を取った。

大事な話があると嘘をつき、大月陽の居場所を確認する。

強い風と雨の中、顔を伏せずとも五島の姿を気にする者は皆無だった。
公園の中の公衆便所で着替えを済ませて出てきた、殺気に満ちた五島の目に気づく者も。

.....大月陽を、消さなければ。

五島さん、実はけっこうヤバいひとでした.....

優馬の後悔

例の神社へ続く道を足早に歩いていると、後ろから声が近づいてきた。

「……はい。そう、その神社。俺ももう、すぐ近くに居ます……うん、わかりました」

振り返ると、陽が電話しながら小走りにこちらへ向かっているのが見えた。優馬は握っていた携帯を内ポケットにしまい、足を止めた。

「どうりで繋がらないはずだわ。誰だ？」

「五島さん。なんか、話があるからこっち向かってるって」

「……そうか」

追いついた陽は携帯をしまいながら、息を切らしつつも噛みつきそうな勢いで立て続けに質問をぶつける。

「で、あいつに会ったって?! どういうこと? 何だって? ……っていうか優馬さん、ずぶ濡れじゃん」

優馬は言葉を探した。

陽を呼び出した後、すぐ佐伯に電話し、大まかなことを説明してあった。新たな情報を元に、更なる調査をしてもらうためだ。

だが、陽に説明するには……どう話したらいいのか、まだ決めかねていた。とりあえず、歩き出す。

「とにかく、神社に行く。電話で言った通りお祓いはまだ出来ないけど、家に居るよりはマシかもしれない。もしまた具合悪くなくても、お前を担いででも鳥居くぐるぞ」

「わかった」

何の疑問も呈さず、陽は真剣な表情で頷いた。優馬に全幅の信頼を置いているのがわかる。

「あの神社は、あいつに勝てるんだね。この痣に、勝てるんだ」
足早に歩く優馬の後を追いながら、期待のこもる声で確認する。

「……わからんが、何らかの力はあるみたいだ。ほら俺、栞の安産祈願で、あちこちの神社回って参拝してただろ？ どうもそれが良かったらしくて」

「そっか。道端のお地蔵さんとかも合わせたら100回近く行ってたもんね」

「おう」

「子供出来て信心深くなったって言ってたけど、そういうのって本当に効くんだ」

「……おう」

素直に納得している様子に胸を突かれ、優馬は俯いて足を早めた。
陽はそんな優馬の想いに気づかず、急いで追いつき肩を並べる。

「それで？ あいつと何話したの？」

「あー……あのな、お前は何も悪くない。お前のせいじゃないんだ」

……俺が、余計なことをしなければ。取材だなんだと引っ張りまわしたり、無理やり独立なんてさせなければ、きっと……

罪悪感に苛まれ口籠る優馬の声は、陽には届かなかった。

「え？ ちょっと、雨が強くてよく聞こえない。悪くないって、何が？ ……ちょっと、ねえ、優馬さんてば！」

焦ったげな声の陽が、雨の中を突っ切る様に歩いていた優馬の肘を掴む。
ぐい、と肘を引かれた勢いのまま、優馬は振り返った。

「だから、とりあえず神社……」

顔を上げた瞬間、優馬は陽の胸ぐらを掴んで引き寄せたかと思うと後ろへ突き飛ばした。そのまま躍り出るように立ち塞がった優馬に、黒い大きな影が体当たりした。

「台風が近づいている」以降、視点が切り替わりつつ、短めのお話がいくつか続いていきます.....

この感じ、もうちょっと続きます。ほんとうに、長い1日です.....

陽、眼前の悪夢

優馬に突き飛ばされた陽はビルの壁に激突し、崩れ落ちるように膝をついた。

同時に、重い物がぶつかるくぐもった音と腹の底から搾り出す様な優馬の呻き声が聞こえ、濡れた壁に手をつけて顔を上げる。

視線の先に、膝を折り腹を抑えて呻く優馬と、その向こうには黒く大柄な人影があった。

「なっ……」

優馬がふらつきながらも体を起こし、相手に向かって手を伸ばした。

黒いウインドブレーカー姿でフードを深く被った男が、一瞬たじろいだ仕草を見せた。その時、男の右手に白く光る物が握られているのに、陽が気づいた。

「やめろ！」

上ずった声で陽が叫ぶのに構わず、優馬は男に掴みかかろうとする。男はその腕をあっさりとなぎ払い、バランスを崩した優馬を蹴り飛ばした。

為す術もなく飛ばされ、もんどり打って背中から突っ込んできた優馬を、陽が受け止める。優馬と壁に挟まれ肺から空気が抜けた陽は、再び力なく崩れ落ちた。

頭上で何かが壊れる嫌な音がして、耳元を何かが掠め転がった。

壁にもたれかかり座り込む格好から、陽は身を振り、胸を押さえゲホゲホと咳き込みながらなんとか目を開けた。優馬は片手で腹を押さえ、もう一方で壁に手をつき陽に覆いかぶさる形で膝をついていた。苦しげに顔を歪め、荒い息をついている。

優馬の腕の下から、ウインドブレーカー男が盛大に水しぶきを立て転がる様に走り去っていくのが見えた。

「ゆ、優馬さん……大丈夫？」

「……いってえ……」

掠れ声の陽に、優馬はなんとか笑ってみせようとしたが、それは顔をしかめただけに見えた。

下から優馬の両肩を支えながら、陽は壁伝いにジリジリと身を起こし、優馬を壁に凭れかけさせようと体勢を入れ替える。

優馬の体がぐらりと揺れたかと思うと、突然真っ赤な水を被ったみたいに血が溢れ出し、顔を染めた。

「……！」

声にならない悲鳴をあげ、陽は震える手で優馬をそっと壁に凭せ掛けた。ポケットから携帯電話を取り出したが、手が震えて取り落としてしまう。水浸しのアスファルトを転がり滑る電話を両手で捕まえたが、思う様に操作が出来ない。

「きゅ、救急車……誰か！誰か、救急車！！」

パニック状態で電話を握りしめながら、陽は声の限りに叫んだ。

「助けて！優馬さんが……頼む、誰か！！」

どこかで窓の開く音がして、声が降ってくる。

「にいちゃん、今、救急車呼んだからな！すぐ来るから、頑張れ」

その声を切っ掛けに、涙が一気に溢れた。陽は顔をぐしゃぐしゃにしてしゃくりあげながら、ぐったりと目を閉じている優馬に手を伸ばす。

「ゆうま、さ……」

「……おう」

「救急車、くるから……」

「……お前は？怪我無いか？」

膝立ちの体勢から腰が抜けた様にへたり込んだ陽が、拳で目を擦りながら何度も頷く。

「メソメソすんな。情けねえ」

「メソメソなんてしてねーし。ってか、あんま喋らないほうが……」

「こんくらいヘーキだよ」

優馬は強がって笑ってみせたが、その声は弱々しかった。

「バスケやってた頃は流血沙汰なんてザラだった。つーかさ、さっきの俺のディフェンス見た？まだまだイケてたる？」

背後からバタバタと足音が聞こえ、傘が差し出される。

振り返ると、近所のサラリーマンだろうか、中年の男性が片手で通話しながら傘をさしかけてく
れていた。

「大丈夫か、にいちゃん。どうした」

「ナイフを持った男に襲われたんです」

「刺されたんか」

「いえ。刺されてはない、よね？」

優馬は微かに頷き、顔をしかめ目を閉じた。

首筋から雨の混じった血が滴り、胸の辺りまでが真っ赤に染まっているが、刺されたような傷口
は見当たらない。

「うん。刺されてないみたいです。体当たりされて壁にぶつかった時に、何か落ちてきて頭を打
ったみたいで」

「.....あれか」

辺りを見回した中年男性が近くに転がっていた錆びた看板を見つけ、頷いた。電話の相手に状況
を一通り説明すると、陽に傘を手渡した。

「俺は救急車誘導してくっから。頑張れよ」

「ありがとうございます！」

陽の叫ぶ声を背中に受けつつ、男性は雨の下を駆け出して行った。

陽くん、ずいぶん情けないみたいですが.....

本当にパニック状態の時って、住所録から電話をかけることすら出来ません。

何がどう間違っているのかもわからないのですが、何度操作し直しても何故か出来
ないんです.....はい、実体験です。

五島の失敗

五島は転びそうになりながら、雨の中を走っていた。
すぐその角を曲がれば、大通りだ。人混みに紛れて逃げられる。

通りの喧騒が近づいてきて車の走る音が聞こえた時、我に振り返り立ち止まった。
ナイフを、握りしめたままだ。

ナイフをしまおうとするが、滑り止めつきの軍手を嵌めた右手は頑として開かない。左手で無理やり押し開けてみても、右手は固く握られたままだ。

(くそっ……)

軍手ごと引き剥がしながらビルの壁に何度も手を打ちつけて、なんとかナイフを手放した。ナイフは音を立てて道路に落ち、くるくると回転して止まった。五島はつま先で落ちたナイフを蹴り、側溝に落とす。
失敗することを想定しておらず、ケースを捨ててしまっていた。剥き身のナイフを持ち歩くのは危険だ。

ぐっしょりと濡れた軍手を拾おうと、腰を屈める。その瞬間、とてつもない疲労感が襲ってきて、五島は思わず膝をついた。

……しくじってしまった。

見紛いようもない。髪を後頭部で一つに括った、あの後ろ姿を見た瞬間。
急激に視界が狭まり、奴の姿しか目に入らなくなってしまった。その向こうに立っていた木暮優馬の存在が、消し飛んだ。
ポケットからナイフを取り出しケースをかなぐり捨てると、一直線に大月陽に突っ込んで行った。

ほんの一瞬だった。
まるで瞬間移動のように人影が躍り出て、大月陽との間に立ちふさがったのだ。

突き出そうとしていたナイフを咄嗟に引っ込められたのは、幸運だったと思う。大月陽以外の人間を傷つけるつもりは、毛頭無かったのだから。

ナイフを持つ腕を不自然に引いたせいで体のバランスを崩したため、ショルダータックルを仕掛ける格好になってしまったが、あの時の感触では骨折等の重症は負っていないはずだ。木暮優馬が果敢にも掴みかかってきた時も、蹴り飛ばしはしたが、それは逃げる隙を作るため、なるべくダメージを与えない様に蹴った。

あの時は、ああするしか無かったのだ。

捕まるわけにはいかなかった。大月陽を、消し去るまでは。

あれが俺だということは、もうバレているだろうか。フードで顔を隠してはいたが、あるいは……

どちらにしても大月一人を襲うことは出来るが、助けを呼ばれてしまうと面倒だ。

今は、逃げなければ。

一旦体勢を立て直して、再び機会を狙うのだ。

夏蓮の苦しみを、消し去るために。

五島はズボンの腿の辺りで両手を拭い濡れた顔を擦ると、フードを深くかぶりなおした。壁に手をつけてゆらりと立ち上がり角を曲がって、街の喧騒の中に踏み入る。

本能的に歩道橋に足が向いたのは、交通量の多い広い道路の向こう側へ渡ってしまえば心理的に距離を取れる気がしたからだろうか。

半ば俯いて階段を足早に登っていた時、視界に強烈な違和感、いや、既視感を覚えた。

(夏蓮！)

振り返る間も無く、五島は床を蹴っていた。

傘を風に煽られ階段から足を踏み外し、小さく悲鳴を上げた女性に手を伸ばす。

手首を掴んで胸に引き入れ、半回転しながら女性の頭を抱え込むと、五島はそのまま背中から階段を落ちていった。

周囲から悲鳴が上がる。

胸の上から女性が身を起こすのを見届けると同時に視界一面が白黒に変わり、すぐに消えた。

五島は意識を失った。

ナイフは他の人が拾ったら危ないので、側溝に落としました。

さらに軍手を拾おうとするあたり、五島さんやっぱり律儀です。ヤバい奴だけど。

遠くに、救急車のサイレンが聞こえる。

「優馬さん、聞こえる？ 救急車だ！ もう大丈夫だからね！」

優馬は答えず、ぐったりと目を閉じ天を仰いでいる。

「優馬さん！ 起きて！ 優馬さん！」

頭部から流血している優馬を揺さぶることも出来ず、陽は半ば優馬に覆いかぶさった格好のまま、オロオロと上着の胸の辺りを掴む。

「起きろ！ 起きろってば！ おい、バカ優馬！！」

「.....誰が、バカだって？」

漸く応えた声は、頼りなく掠れている。

うっすらと見開いた目は焦点が合っていない様に見えた。

「しっかりしろ！ もうすぐ助けが来るから」

「なあ、陽.....」

譫言を呟く様な声が、陽の叫び声を遮る。

「俺が、悪かったんだ.....俺がお前をけしかけて、引っ張り込んだ」

「何？ 何の話？」

陽は優馬の上着から手を離すと、両手で傘を握りしめた。優馬が雨に濡れない様に体の角度を変えつつ、優馬の口元に耳を近づける。

「俺がしゃしゃり出ずに、お前が自分のペースで描いてりゃ、こんなことには.....あんなジジイに捕まることも無かった」

「……あいつは！ あいつもこの痣も、優馬さんには関係ない！ 全部俺のせいだ。優馬さんにまで迷惑かけて……」

優馬の手が、陽の胸倉を掴んだ。

「いいか、お前のせいじゃない。お前は悪くない。わかったか」

「でも……」

顔を歪ませながら陽の目を覗き込み、濡れたTシャツを掴む力が強くなる。

「わかったな」

「……わかった」

気迫に押され、陽は震える声で頷いた。

「よし」

安心した様に、優馬の手がぽとりと落ちた。血の気の失せた唇が震え、深いため息が漏れる。

「ちゃんとお祓いしてもらえよ。何が何でも、だ。それと、あのジジイには近づくな。何か言ってきたら……」

全力で、逃げろ」

「わかったから。後は病院で聞くから、もう喋らないで」

「大丈夫、もうそんなに痛くないんだ……でも、ちょっと寒いな……」

狼狽えた陽が辺りを見渡すが、当然、優馬の体を温められそうなものは無かった。自分の服を着せかけようにもずぶ濡れだ。

陽は咄嗟に、冷え切った優馬の体を抱きかかえ、背中や腕を懸命に擦り始める。

「救急車……すぐそこまで来てるのに……なんでだよ！ そうだ、栞さん！ 栞さんに電話して」

携帯電話を取ろうとした陽の手に、優馬の冷たい指先が触れた。

「駄目だ。栞には……」

「なんで！ 応急処置とか聞けば」

「頼む。栞には、近づくな」

「え……？」

弱々しい呼吸の下、もはや青くなった唇から発する声は、囁き声程度になっていた。陽は一瞬、自分が聞き間違えたのかと優馬の口元を凝視する。

「お前は、悪くない。お前が悪いんじゃない。だけど……怖いんだ。もし、葉たちに何か起きたら……」

眉根を寄せ、言いづらそうに躊躇う様子に、陽は引き下がった。優馬が何に怯えているのか、察したのだ。

「……わかった。近づかない。約束する」

「陽、すまない……」

「優馬さんが謝ることじゃないよ」

その時、曲がり角の向こうに、数人の慌ただしい足音が聞こえた。「こっちです！」と叫んでいるのは、先ほどの男性の声だ。

陽はハッと顔を上げ、救急隊員の姿を認めると優馬の耳元で叫んだ。

「優馬さん、来たよ！ もう大丈夫」

だが優馬の目は既に閉じられ、体からは完全に力が抜けきっていた。

「ごめんな……」

誰に向けられたものかわからないか細い声を最後に、優馬は全く反応を示さなくなった。

雨の音が、やけに大きく響いた。

それはそうと、頭部の止血ってどうすればいいんでしょうね？

腕や足なんかだと、患部付近の心臓寄りの箇所を縛ったりしますが……まさか、首を

絞めるわけにもいかないだろうし.....かといって、患部を直接圧迫するのも怖い気がするし。

大月陽からの着信に出てみると、別人の声が聞こえてきた。

「大月陽さんに頼まれて、携帯をお借りしてかけています。木暮栞さんですか？」

その男性の話聞いて一瞬目の前が暗くなり、栞は壁に手をつけて体を支えた。

「ちょっとまって……」

「大丈夫ですか？」

電話の向こうで栞を気遣う声。そのさらに奥から、聞き慣れた声が漏れ聞こえてくる。

「おい、起きろ！ バカ優馬！ アホ優馬！ 目え開けろってばクソ優馬！ 天パ野郎！」

大月陽は何故か、思いつく限りの罵声を優馬に浴びせているらしい。

随分と罵声の語彙が乏しいわね、と他人事の様な考えが過ぎたのは、おそらく一時的な現実逃避だった。

「……すみません。もう大丈夫です」

救急隊員が搬送中の優馬の容態を説明し始めると、即座に仕事モードのスイッチが入った。電話を片手に必要なものをまとめ、てきぱきと出かける準備を整える。

話を聞き終えた栞は、冷静に隊員に礼を言って電話を切った。

すぐに実家に電話して、落ち着いた口調で優馬が事故に遭った事を伝え、病院へ来るよう要請する。

電話を切ると、不思議そうにこちらを見上げている我が子に微笑みかけ、身支度を整えてやる。

「優侍、今からちょっとお出かけするのよ。じいじとばあばも来るからね」

祖父母が大好きな優侍は無邪気に歓声を上げ、お出かけ用の小さなリュックを掴んだ。部屋の戸締りを確認する栞を他所に、リュックを引きずりながらぼてぼてと廊下を歩き、玄関でスタンバイしている。

「おりこうさん。さあ、行こうね」
準備を終えた栞は優侍に長靴を履かせ、靴箱の上のトレイから鍵を手にする。が、車の鍵が見当たらない。

「あれ？あれ？おかしいな、いつもここに……」

眩いたところで、既に自分の右手が車の鍵をしっかり握っている事に気づいた。

どうやら自分で思っているほど冷静ではなかったらしい。大きく深呼吸すると、やはり息が震えている。

それを自覚した途端、心臓が徐々にせり上がってくる気がした。
この悪天候の中、病院まで安全に運転出来る自信は保てそうにない。

車の鍵を置いてもう一度深呼吸し、再び電話を手にとると、栞は小刻みに震える指で、懇意にしているタクシー会社に電話をかけた。

† † †

救急に運び込まれる患者とその付き添いの方の姿には、いつも胸を締め付けられる思いがする。それが知り合いだったりその関係者であれば、なおのこと。

木暮先輩の旦那さんが搬送されるという話は、身内に一瞬で広まった。木暮先輩がここに勤める（正確には育児休暇中なのだが）ナースであると、患者の連れが搬送する病院を指定したとの事だった。

患者が運ばれて来た時、付き添っていた青年は既に声を枯らしていた。おそらく救急車の中でもずっと呼びかけ続けていたのだろう。

「優待とキャッチボールするんだろ?! バスケも! 楽器も教えるんだろ?!」

運ばれるストレッチャーにしがみつきたいにして、必死に話しかけていた。全身ずぶ濡れで、今にも泣きそうな、それでいて怒っている様な表情で。

つられて、私も胸が詰まってしまう。優待くんとは一度会ったことがあったから、木暮先輩に抱っこされた小さな可愛らしい赤ちゃんを思い出してしまったのだ。

「頑張れよクソ優馬! 絶対死ぬなよ! おい、聞こえてんのか! 『任しとけ』って言えよ!」

患者さんが処置室に運び込まれる直前まで、彼は患者さんから一步も離れなかった。私ともう一人のナースが彼の腕を取り、引き離すまで。

患者さんが見えなくなった時、妙に虚ろな目をして、彼は言った。
聞こえるか聞こえないかぐらいの涙声。小さな子どもみたいな口調で。

「俺を、ひとりにしないでよ……」

急にへたり込みかけた彼の肘を抱えてベンチに誘導し座らせると、彼は深く項垂れて何事か呟きながら体を揺すり、何故か胸の真ん中を強く擦ったり殴ったりし始めた。
話しかけようとしたが、異様な様子に何と声をかけていいものか分からなくなってしまい、私はその場で見守ることしか出来なかった。

「ご家族の方、見えられました」

木暮先輩と直接面識の無い後輩ナースが、足早にやって来た。
この子の敬語の使い方にはいつも若干イラッとさせられるが、今はそんな事を言ってる場合じゃない。
後輩の後ろから、赤ちゃんを抱えた木暮先輩が小走りでついて来ていた。

「先輩!」

木暮先輩は深刻な表情で頷くと、「容態は」と短く尋ねた。聞きながら無意識に赤ちゃんを揺すってあやしているのに気付き、妙なところに感心してしまう。

必要なことを伝え終え、付き添いの青年に引き合わせようと振り返った時、ベンチには誰も居なかった。

長かった1日が、ひとまず終わります。優馬さんの容態は、そして陽の行方は……？

目を覚ましてからの三日間程、私は嵐の中に居る様だった。

いや、実際に台風真っ只中だったのだが、そういう意味ではなく、情報が次々に降ってきて錯綜し、非常に混乱していたのだ。

まず、カズが通りすがりの女性を助けて意識不明だと告げられ、翌日には木暮優馬の訃報と陽が行方知れずになっている事を知らされた。

さらには警察がやって来て、話を聞かせて欲しいと言うのだ。

なんでも、優馬さんが刃物を持った男に襲われたと通報があり、その犯人の服装とカズの服装が似ていた事、そして事件現場とカズが事故にあった現場が非常に近かったのだと。

ただ、カズは刃物を所持していなかったし、通報された服装というのもごくありふれた物だったので、警察が本気で彼を疑っている様子には見えなかった。おそらく「人を襲った直後に、身を呈して人を守る」という行動がちぐはぐだから、ということもあるかもしれない。

私は訪ねて来た警察官に、「何もわからない。思い当たることは無い」とだけ答えた。

嘘ではない。

優馬さんの事件と陽が行方不明であること、カズの事故との関連。

あの日、病院に来た時には普段通りのスーツ姿だったのに、搬送時には何故濃灰色のウインドブレーカーを着用していたのか。

私が眠った後すぐに病院を飛び出して、どこへ向かったのか。

カズの携帯電話に陽との通話記録があったらしいが、何を話していたのか。

薬によって眠っていた私には、何もわからないのだ。

ただ、ひとつだけわかっていることがある。

カズが何をしたにせよ（或いは何もしなかったにせよ）、それは私の為だった筈だ。彼が起こす行動はすべて、私の為になることなのだ。

ベッドの中でメソメソしている場合じゃ無かった。
何が起きているのか、私は知らなければならない。

† † †

「カレンさん、お久しぶりです。体の具合は」
「ありがとう、渡辺くん。私は大丈夫。それより……」

陽の電話には何度かけても繋がらず、次に私は渡辺青年に電話をかけた。
憔悴のにじみ出る声で語るには、彼の方でも陽と連絡がつかず、困惑しているとの事だった。

ただ、彼は気になる情報をくれた。
木暮優馬は予めから、彼のバイト先の探偵事務所に「都市伝説の捜査」を依頼していて、事故の直前に探偵に電話してきたというのだ。
その電話の内容も知りたかったが、「守秘義務」とかで、アシスタントとして一緒に調べていた彼さえも全貌を教えてもらえないらしく、不平を言っていた。

ならば、と私は、カズの住所録から木暮優馬の携帯に電話をかけた。

† † †

台風一過の空は、これでもかというほど青く美しく、澄み渡っている。

なのに、木暮優馬はもうこの世にはおらず、カズは昏睡状態が続き、陽は依然として行方不明。
何もかも理不尽に思え、夏蓮は苛立っていた。

車椅子を下ろすのを手伝ってくれたタクシーの運転手に礼を言い、陽のスタジオの扉に向かうと、中から木暮葉がドアを開け迎え入れてくれた。

電話で既に済ませてはいたが、改めてお悔やみを述べ挨拶を交わす。

だいぶ前に一度会ったきりだったが、木暮葉は相変わらず聡明で凛とした女性だった。少しやつれて涼やかな目元に疲れが見えたが、取り乱した様子ではなかった。

「……まだ、実感が湧かなくて。やらなきゃいけないことがたくさんありますし。いえ、どのみちここも整理しなきゃいけなかったんで、丁度良かったんです」

大変な時に妙なお願いをしてしまったことを詫びると、彼女は理知的な目を少し伏せ微かに點頭した。

「こちらが、探偵に依頼していたという捜査のレポートです。コピーなので、どうぞお持ちください。それと、陽くんの自室を写真に撮ったんですが、ご覧になりますか？」

階段を登れない夏蓮のために、写真を撮っておいてくれたのだろう。

プリントアウトした写真を見る限り、陽の部屋は以前と変わっていない様子だった。描きかけの絵もそのまま、生活感に欠けているのも同じだった。

「陽くん、短い時間で色々整理をつけてから失踪したみたいです。自分の全ての現金預金は天本夫妻に、未完のものを含めた今ある全ての作品、会社としての資産、全ての権利を私に譲る手続きを済ませてありました」

「陽が……？」

意外に思ったのが、そのまま声に出してしまった。

「会計関係でお世話になっていた事務所に一任したそうです。それと、もうひとつ……陽くんの部屋にありました」

手元のバッグから取り出された小さな封筒には、特徴的な陽の字で「夏蓮へ」とだけ書かれていた。

中に入っていたのは、キーホルダーだった。夏蓮のピアスとお揃いの、ダイヤモンドとエメラルドで作ったキーホルダー。

心臓がギュッと縮んだ気がした。

やめてよ、こんなの。これじゃまるで……形見みたいじゃない。

動悸がして、夏蓮は思わず大きく息を飲み込んだ。

「……片付けがあるので、私はもうしばらく残りますが」

柔らかい声に顔を上げると、労わるような目で葉がこちらを見守っていた。

「その資料、今ここでご覧になりますか？」

有難く甘えることにすると、彼女は静かに頷いた。

「私も読みましたけど……なんだか不愉快な内容でした。子供じみたオカルト話。馬鹿馬鹿しい。私はこんなもの、信じない」

この資料のことになると、彼女は少し怒っているように見えた。

受け取った資料を読んでみて、彼女の気持ちがわかった。
一見、ただのくだらない都市伝説だ。

だが。

夏蓮には、思い当たることがあった。

夏蓮さん、覚醒しました。二重の意味で。

最後の更新

渡辺博巳から電話が来たのは、陽のスタジオで木暮菜に面会した3日後のことだった。

「大月さんが生配信やるって記事がブログに出たんです。もうネットで話題になり始めてます。放送は明後日」

電話を片手に、急いでカズのPCを開いた。

私自身は既に退院していたが、日中はリハビリとカズの付き添いで病院に入り浸っている。カズは依然、意識を取り戻していない。

病室の外には必ず、私服の警察官が付いている。カズが目覚めたら話を聞くために。

陽のブログを確認してみると、「最後の更新になります」というタイトルに、簡潔な文面の記事がアップされていた。

理由は述べぬまま関係各位へのお詫びと、生放送の報せとその日時だけの記事。

コメントやメッセージを送る機能は、全て閉じてあった。

嫌な予感ばかりが募る。焦燥感で胸の中が焼け爛れそうだ。

検索願は出してあったが、本気で探す気があるのかどうか。

外に待機している警官はあてにならない。もう一度掛け合ってみよう。それしか出来ることが無い。

.....陽、お願い。電話に出て！

無駄だと知りつつ、祈りを込めて陽の携帯に電話する。虚しく響くコールを聞きながら、夏蓮は警察署へ向かった。

生放送の内容が気になります.....

胸の真ん中が、熱かった。

全て悪い夢かもしれない。目が覚めたらいつも通りの朝で、俺はベッドから跳ね起きて絵の続きを……ほんの一瞬でもそう思ったかったが、無理だった。

痣が。この痣の熱さが、これは現実なのだと絶え間なく突きつける。

じわじわとした熱さが鬱陶しくて恐ろしくて、陽は生乾きのTシャツの上から乱暴に痣を擦った。

(優馬さんの言葉、どういう意味だ?! 「俺」は悪くない、自分が悪かったってい言いつつ、菜さん達には近づくなって……怖い、って)

考えが、纏まらない。

頭の中を整理しようとしても、優馬にもしものことがあったらという恐怖が先に立って何も考えられないのだ。

頼む、死なないで。助けてください。優馬さんを、死なせないで。お願いします。お願いします。優馬さん、いっぱい血が出た。ちょっと動くたびに、ブワッて。輸血は……そういや俺、優馬さんの血液型すら知らない……俺、何も出来ない……何か俺に出来ることは? 何でもするから。俺に、出来ること……

いつの間にか、病院の簡素なソファがギシギシと不快な音を立てているのにも気づかずに、痛みを感じるほど胸を擦りながら体を前後に揺すっていた。食い縛った奥歯の隙間から、呻き声が漏れる。

助けて。たすけて! たすけてくれ! この痣のせいだ……優馬さんはああ言ったけど、絶対に俺のせいだ。だってお祓いに行けて念を押されたし菜さんに何かあったらって、怖いて、そういうことだよ。お祓い、行くけど、行くけど、もし間に合わなかったら……いや、駄目だ。こういう時は、そうだ。飯を食わなきゃ。空腹で考え事するなって言われたもん……いや、食えないよ。こんな時に飯なんて食えるわけない。無理だよ、優馬さん。俺、どうすりゃいいんだよ……

脂汗で濡れた額がムズムズと痒くて気持ち悪い。

陽は両手で額を擦り、爪を立ててガリガリと頭を搔いた。そしてまた、胸の痣を擦り始める。

嫌だよ。一緒に頑張るって言ったろ？ 優馬さんが言ってくれたから、一緒に居てくれたから頑張れたんだ。居なくならないで。大切な人が居なくなるのは、もう嫌なんだ。俺を、ひとりにしないでよ……

周囲の状況は、全く視界に入っていなかった。

看護師の「ご家族の方見えられました」という声が聞こえたが、自分とは無関係の物音としか感じなかった。

だが、近づいて来る足音を聞いた時に唐突に頭の中で意味が繋がり、陽は弾かれた様に立ち上がった。

栞さんだ。

どうしよう……と迷ったのは、一瞬だった。

ひとりきりじゃないという安心感や、状況を説明しなきゃという義務感、とにかく何かしなきゃという焦燥感、そして何より、罪悪感……一挙に押し寄せた様々な感情を吹き飛ばしたのが、優馬の掠れ声だった。

「頼む。栞には、近づくな」

……栞さんに、近づいちゃ、いけない。

優馬さんが、そう言った。だから、近づかない。約束したんだ。

とにかく、近づいて来る足音と反対の方向へ……

† † †

どこをどう走ったものか、気づけば見知らぬ細い路地に入り込んでいた。

ざらざらした塀に寄りかかり息を整える。酷い雨の中、人通りがないのを幸いに、そのままずるとしやがみ込んだ。

この姿勢で路上で雨に打たれていると、嫌が応にも優馬の姿が思い出された。完全に血の気の引いた顔色、雨で濡れているにも拘わらずカサついて見えた紫色の唇。首筋から流れる雨混じりの血。濡れて肌に張り付き、ところどころ斑に染まった白いシャツ。

一瞬、その場面を描いている情景が頭を過ぎり、戦慄した。途端に猛烈な吐き気が込み上げ、四つ這いになって盛大に嘔吐してしまう。

(こんな時に、なんてことを。俺は.....)

頭の中に、次々にイメージが浮かんでくる。白いキャンバスに筆が走り色を重ね、あの時の優馬が描き出される。

何度かき消そうとしても、コマ送りのダイジェストのように映像が重なり絵が出来上がっていく。

まるで、絵の購入者にあげていた特典の制作過程動画を見ているみたいに。

(止めろ！止めろ！やめろやめろやめろ！)

映像を振り払おうと頭を掻き毟っても、それは止まらなかった。胸の痣がチリチリと熱を持って存在を主張してくる。

.....離れなきゃ。優馬さんから、もっと、離れなきゃ。あいつを探すんだ。お祓いなんて待てられない。会って、直接話をつける！

追い詰められた気持ちで立ち上がると、目の前にあの男が立っていた。

またもや、長い長い1日が始まります。まずは、優馬が運ばれた日の回想から.....

「今日は随分と忙しい日だ……やあ、久しぶり」

驚愕のあまり、体が動かなかった。体だけじゃない。思考も感情も全て、一旦停止した。呼吸すら止まった。ただ、雨が変わらずに降り続けているのを、頭の片隅で不思議に感じた。

「私自身を呼び出したのは、これで2人目だ。最初に呼ばれたのははつい先刻、君の友人だよ」

その言葉で、全てが一気に動き出した。

痛みを感じるほどに心臓が脈打ち、血液が高速で逆流したみたいに血管がドクドクと音を立てる。身体中の毛穴が開き、怒りが噴出する。憤りが身体中を駆け巡り、そのあまりの激しさに、ヒュッ……と息が漏れた。

「……優馬さんに、何をした」

ほう……と、老人は片方しかない目を細めた。

「あの青年と、同じことを聞くのか。彼は君に話さなかったのかね？」

「優馬さんに、何をした！ あの人を……他の誰も、巻き込むな！」

老人は黒いステッキを掲げ、帽子のツバをほんの少しずり上げる。口元には厭らしい笑みが、笑みと呼ぶには穢らわしいニヤニヤ嗤いが張り付いている。

「私が、何を？ 何もしていない。彼らには指一本、触れていないよ。彼らに起きたことは皆、君と、彼ら自身が起こした事だ」

「なら、どうして？！ なんでこんな事になる？！ みんな不幸になる！ 俺の前から消えてく！ なんで？！ この痣は何？！ 神社のお守りが壊れたのは、何で？！」

「やれやれ、礼の一つも無しに質問ばかりだ。その痣は、そうだな……刻印。アンテナ。変換装置。なんと呼んでもいいが、痣自体に深い意味はない。言うなれば、ただの目印だよ。”力”の目印」

「力の、目印……」

「ほら、今こうしている間にも、だんだん濃くなってきている。見なくともわかる。感じるよ。君に力が集まっている。君が吸収してるんだ。優馬さんとやらの持つエネルギーを」

「や、やめろー！」

驚愕と恐怖で身が竦んだ。発狂しそうだった。

Tシャツを半取り取ると、痣は確かに濃くなっているように見えた。既にいくつものミミズ腫れが走っている胸元を爪で滅茶苦茶に搔き毟る。

「そんなことをしても無駄だよ。もう薄々わかっているんだろう？ 君が求めた。私が術を与えた。君と彼らで作り上げた」

「止めて……嫌だ。こんなこと……俺は絵が描きたかっただけだ。こんなこと、望んでない」

皮膚が破れ血が流れ出しても、手を止めることは出来なかった。無駄だと知っていても、痣を、無くしてしまいたかった。

「望んだのは、彼らだ。君に惹かれ、自ら保持すべき力を君に献上した。運、生命力、生体エネルギー？ 人がそれぞれ持っている目に見えない何かを、悦んで君に捧げたんだ。そのせいで彼らが不運に見舞われても、それは君のせいじゃない。彼らが望んだことなのだから」

「嘘だ……そんなの……嘘だ！」

老人に掴みかかったものの、ほんの僅かな杖の動きで体がふわりと浮いて道端に転がされる。

「無駄だよ。君は私に触れることすら出来ないし、触れたとしても意味は無い」

そう。薄々感じていた。

痣に触れていると、集中力が増す気がしていた。体の中から力が湧いて、情熱が熱く漲った。尽きること無く絵のアイデアが溢れ出た。

だが、気のせいだと思い込もうとしていた。痣に触れるのはただ単に、縁起担ぎ、ジンクスのようなものに過ぎないのだと。

それが何か良くない力だと知ったのは、あの日。お守りを納めに行った時だった。
だが、それを知っても尚、優馬の言葉に甘え、絵に没頭することで深く考えないよう心に蓋をした。目を背け続けた。その予感は恐ろしすぎて、直視出来なかったのだ。

.....全ての元凶は、自分である。自分のせいで、大切な人たちが不幸になっていく。

俺は 悪魔に 魂を 売ったのか？

陽の回想編、次で終わります。

もう、立ち上がる気力さえ消えていた。

「頼む……頼むよ。お願いします。優馬さんを、助けて。夏蓮を、親父さんと静江さんを、助けて下さい」

倒れた姿勢から四つ這いになり、頭を道路に擦り付ける。

「俺はどうなってもいいから。お金なら全部あげる。魂でも寿命でも、何でも持っていいから。絵なんてもう描けなくていい。今ここで死んだっていい。だから、お願い……この力を消してよ。もう誰も、巻き込まないで」

道路に落ちる雨粒が顔に跳ね返る中、陽は縋る思いで頭を下げ続けた。

だが、返ってきたのは、頭上から降り注ぐ無情な声だった。
なんの感情も見られない、無機質な声。

「君の金にも魂にも寿命にも、興味は無い。一度与えられ生み出された力は、取り消せない。お祓いも無駄だ。生命と同じだよ。生まれた赤ん坊を腹に戻せるか？ 祈れば無かった事に出来るかね？ 否」

陽の懇願にも構わず、老人は滔々と言葉を連ねる。

「一度生まれれば、力は育っていく。強くなる。存分に描きたまえ、より素晴らしい作品を」

「嫌だ！ 大事な人を不幸にしてまで、俺は……」

頭を振って叫ぶと、道路の水気を吸い込んでしまい嘔せ返った。激しく咳き込む陽を余所に、老人は続けた。

「力を求めれば、代償が要るものだ。大きな望みを叶えるには、大きな力を。大きな力を発揮するには、大きな代償を。大きな代償とは、その者にとって一番価値のあるもの。君の場合、それは周囲の人の幸福であり、周囲の人々もまた、それを望んだ。実に単純な話だ」

「だって……」

無理やり咳を止め、陽は漸く顔を上げて老人を見上げる。老人は無感動に陽を見下ろしていた。

「だって、知らなかったんだ……代償が要るなんて言わなかったじゃないか」

老人は陽を見下ろしたまま、緩く首を振った。

「言うまでもないだろう。何かを得るには何かを支払う。世の中の理だ」

絶望のあまり、体の力が抜けていく。頭の中がグラグラと揺れているのを感じながら、陽は茫然と呟いていた。

「そんな……なんで、そんなこと……」

先ほど道路にこすりつけた額がズキズキと痛むのに気付き、小さな怒りが湧いた。小さな怒りは徐々に大きくなり、体に力が戻り始める。

すると、一つの疑問が浮かんだ。

雨に打たれ道路に跪いたまま、陽は低く唸った。

「……あんたは、何を得た？」

「ん？」

「物事には対価が要るんだろ？俺に力を与えることで、お前はどんな得をした？」

「……ほう。なかなか鋭いね。どうやら私は、君を少し見くびっていたらしい。この状況下でそれに気づいた君の知性に敬意を表し、質問に答えよう」

睨みつける陽を見下ろしながら、男は気取った仕草で両手を広げた。

「私が得たのは、新たな知識だよ。人の心が、どんな風に動くのかに興味があってね。怒り、悲しみ、喜び、欲望、恐怖、焦燥、妬み、狂気……多様な感情と、行動。様々な人間に力を与え、それぞれの力がどう働くのか、其の者が何をするのか、どういう結末を迎えるのか。それらを見

届けて解析し、理解したいのだ」

「それだけの理由で、人を破滅させるのか？」

「別に破滅させたいわけじゃない。愚か者が自滅しているだけだ」

陽の眼差しが、鋭さを増す。

かつて感じたことのない怒りが湧き上がり、体に満ちていく。

「この、悪魔……お前は、悪魔だ」

陽の言葉に、老人は薄ら笑いを浮かべた。

「失敬な。私も君と同じ、人間だよ。『人の心が知りたい』と強く望み、別の誰かに力を貰ったのだ。代償は、自分の体だった。私は知識を得る度、体の機能をひとつ失う。足も、内臓機能もあちこち壊れているが、最初に失ったのは、この目だ」

老人は自分の黒い眼帯を指差し、ほとんど自慢げに言った。

「さながら知識を求めて片目を泉に投げ入れた、オーディンの様じゃないか？」

気力を振り絞り、体に力を込める。

ゆっくりと、陽は片膝を立てた。

「何がオーディンだ。お前は、悪魔だ。俺はお前を許さない。絶対に、許さないからな」

立てた膝を支えに、ゆらりと立ち上がる。

老人は退屈そうにステッキを持ちかえ、わざとらしく手を振って嘆く様な仕草を見せた。声には嘲るような響きが滲んでいる。

「おお、せっかく力を与えたのに、なんたる言い草。近頃の者は礼の言い方も知らん……今だって、その力が働いているだろう？ 絵を描きたくて体が疼いているだろう？ 描くことへの情熱が滾っているんだろう？」

老人は腰を屈め、ぐいと顔を突き出した。

「……君が私を悪魔と呼ぶのなら、君も同類だ」

「違う！ 違う！ 俺は……！」

陽は思わず、ニヤニヤと黄ばんだ歯をのぞかせる老人から後ずさった。

老人は背を伸ばすとステッキを高く掲げ、まるで悦に入った舞台俳優の様な声を張り上げる。

「さあ、描きたまえ！ 我が同胞よ！ 最強の生贄を得た今の君なら、素晴らしい作品を描ける！ 歴史に名を刻む作品を創りたまえ！」

同胞なんてとんでもない。この男は、狂った悪魔だ。

陽は踵を返し、一目散に駆け出した。

嫌だ！ 嫌だ！ 嫌だ！！ ……逃げろ！ 離れるんだ！

遠くへ！ うんと遠くへ！

雨に打たれ、土下座で泣きじゃくりながら赦しを請う陽くん……ふふ。ふふふふ。
いえ、なんでもないんです。にやけてなんていませんってば。

そろそろ時間だ。

小さな教会の中ほど、ノートPCを置いた台に向かう。並んでいたベンチは隅の方に寄せてある。

PCの前の簡素な丸椅子に座り、最後の調整をする。

画面には板張りの小部屋に座る自分が映っている。我ながら、酷い顔だ。

薄暗い部屋の中、ひびの入った素朴なスタンドグラスと古ぼけた祭壇が辛うじて見える。

あの部屋に居られなくなって最初に思い出したのが、ここだった。

もう何年も前、配達帰りに景色を求めて道を外れ偶然見つけた、打ち捨てられた古い小さな教会。

最後に来たのは、恵流と花火をした時だ。

花火とシャボン玉を同時にやって遊んだんだ。色とりどりの光と白い煙の中に浮かぶ虹色に光るシャボン玉は、夢の中にいるみたいに幻想的だったっけ。

全て夢であって欲しいという思いが、ここを最期の場所に選ばせたのかも知れなかった。

でも、これから自分が行うことは、現実だ。夢に逃げ込んだ結果じゃない。

散々考えて迷って足掻いて、でも、こうするしかなかった。他に選択肢は無かったんだ。

覚悟を決めたとはいえ、やはり手が震える。

でも、やらなくちゃいけない。多くの人に、このことを伝えなくては。

自分と同じ罪を、他の人に起こさせないために。

それが唯一、自分に出来るせめてもの罪滅ぼしなのだ。

PCに伸ばした指が、震えている……

「みなさん、こんにちは。大月陽です」

一礼して顔を上げると、画面の隅に表示された閲覧数がみるみるうちに跳ね上がっていく。夏蓮も見てくれているだろうか。

「理由があって、しばらく記事の更新や絵の販売を含めた全ての活動を停止していました。にも拘わらず、たくさんの方がブログなどを閲覧して下さっていて、心から感謝するとともに申し訳なく思っています。また、勝手に連絡を絶ってしまったことで、心配してくださる方もいらっしゃると思います。本当にごめんなさい」

再び、深く頭を下げる。何度詫びても足りないぐらいだ。

「……俺……えっと、私は、喋るのがあまり得意ではないのですが……どうしても伝えなければならぬことがあって、本日、このようにネットでの生放送という形を取りました。これを見て下さった方の中には、いや、たぶん殆どの方が、私の頭がおかしくなったんだと感じるだろうと思います。でも、それで構いません」

そう思ったとしても、きっとあながち間違いじゃない。俺はもう、壊れかけてる。心が砕けるどころか砂みたいに崩れて、風が吹けば飛ばされそうになってる。完全に狂ってしまえば楽だろうが、それは出来ない。

ほんの少しでも、自分のしたことの責任を取らなければ。

……そういや、前に同じようなこと言ってた奴がいたな。『完全に狂ってしまえば楽だろうが』って。

「私は、たくさんの人に迷惑をかけ、彼らを不幸にしまいました。みな、私を気にかけてくれて、親身になってくれて、愛してくれた人たちです。私の大好きな、大切な人たちです。でも私は、彼らを不幸にしました。決して意図的にはないにせよ、結果として、恩を仇で返すみたい」

胸が詰まる。言葉が出なくなって大きく唾を飲み込もうとしたが、喉がそれを拒否する。強く目を瞑り、無理やり飲み込んだ。

「もしやり直せるなら何だってする。でも、無理なんです。起きてしまったことは、もう取り返せない。だから、終わらせるしか無いんです」

そう。あの男と対峙した後、散々調べて回った。優馬さんが探偵社に依頼した結果も無理やり聞き出したし、自分でも色々やった。無駄だと分かっていたがお祓いもした。結局、「手に負えない」と匙を投げられたが。

「どう話したらいいのか……事前に頭の中でまとめたつもりだったんですが……」

両手で額を撫で上げると、冷たい指先が乾いた額に触れた。真夏だというのに、汗ひとつかいていない。

割れたガラス窓から、外で鳴いているセミの声が聞こえている。窓の外には、目も眩むような真っ白な日差しが揺れる。

(今日も暑い筈なのにな……)

かさついて色の抜けた唇を噛んで湿らせる間に、もう一度頭の中を整理した。上手く話せばいいけど。

「何年か前の話です。私はある時、ひとりの老人に話しかけられました。『望みは何か』って聞かれて、『絵を描くこと』って答えた。ただ、それだけだったんです。俺の中にある絵を、イメージを、そっくりそのまま……形にしたかった。絵を、描きたかった。それだけだった。聞かれたから、そう答えた。でも、それが間違いだった……」

何度も何度も、あの晩のことを思い返した。あの日に戻れさえしたら。無理やりにでも気を鎮めて、あのまま恵流と食事に出掛けていたら……彼女はきっと、今でも……お馴染みの悔恨と怒りが押し寄せる。何度襲われたかわからない絶望の荒波を、歯を食いしばってやり過ごす。波が去っても、自責の念がじわじわと身体に染み込み、心を蝕む。

「俺は、まんまと騙された。途方もない馬鹿だったから、付け入られて騙されたんだ。でも今は

、あいつの正体を、知ってる」

感情が、昂ぶっている。動悸が、息が、荒くなっているのがわかる。落ち着け。冷静に話さなきゃ、ちゃんと伝わらない……

気づけば爪を立てて膝を掴み、もう片方の手では拳を握って太腿を何度も殴りつけていた。骨に沁みるような痛みが走り、おかげで少しだけ落ち着いた気がする。

「あいつは自分のことをオーディンとか擬えてたけど、そんなんじゃない。あいつは、悪魔だ。あるいは、悪魔の手先だ。気が狂ったと思うだろうけど、本当なんだ。あいつは、俺に印を付けた。呪いの烙印。これが、その証拠です」

ぐい、とシャツを捲り上げる。何日も着たままだったせいか傷んでいたらしく、裾が破けた。面倒になってそのまま破いて筆取り、床に落とした。

「羽を広げた孔雀……この痣、蓮の花だったらいいなと思ってたんだけど……違ったよ……羽を広げた孔雀の、烙印。悪魔の印です」

心の声が思わず漏れてしまった。

夏蓮がいつか言ってた。胸に真紅の花が咲いてるって……彼女はいつも指で触れて……愛おしげに……

駄目だ。今は考えるな。思い出すな。話すことに集中するんだ。

「……おい、お前」

ウェブカメラを睨みつけ、痣を抉るように胸に爪を立てる。

「お前の正体は、アドラメレクだ。それか、その手下だ。そうだろ」

あいつは、絶対に見てる。この放送を、見てるはずだ。

どうだ、凶星だろう。出てこい。俺は絶対に、お前を許さない。せめてもの道連れにしてやる。

「アドラメレク！ 言葉巧みに言い寄って子供を生贄にさせる悪魔！ 親切ぶって近づいてきて、人を陥れてほくそ笑む悪魔だ！ いいかステッキじじい、お前は知識を求めてるんじゃない！ 人の不幸をニヤニヤしながら観察しているだけの、下衆野郎だ！ 下衆野郎！ 屑中の屑だ！ 糞じじい！ 見てるんだろ？！ 強く願えば姿を現すんだろ！ 出てこいよ！ 出てきてみろ！」

激高のあまり、頭がズキズキする。一瞬目の前が眩んで、大きく息を吸った。

「悪魔なら悪魔らしく、地獄に落ちろ！ いや……俺がお前を連れて行く！ 連れて行けないまでも……これ以上、お前の思い通りにはさせないからな」

PCを置いている台に立てかけておいた一枚の絵を取り上げ、画面に映す。この時の為を描いたものだ。

「黒い山高帽に、古びた黒いロングコート。季節に関係なく、ヤツはこの姿で現れる。身長は多分、160センチ前後。黒い眼帯をして銀細工の入った黒いステッキをついて……しゃがれ声で下らないことをペラペラ喋る。もしこいつを見かけても、相手にしちゃ駄目だ。絶対に答えちゃ駄目だ。すぐに走って逃げてください。話をすれば、付け込まれる。言いくるめられる。絶対に、話をしちゃいけない。会話をしたら最後……不幸になる。大切なものが犠牲になる」

モニターに映る醜い老人を睨みつける両の目から、いつの間にか涙が流れていた。

「お願いします。騙されしないで。俺のようにならないで下さい。もう誰も、不幸になってほしくないんだ。だから……頼みます。逃げて、ください」

あの時あいつと話したりしなきゃ、恵流も優馬さんも死ななかつた。栞さんだって夫を失わずに済んだんだ。夏蓮は怪我しなかつたし、天本さんも静江さんも元気で、今も工房のみんなと仕事してた筈なんだ。全部俺のせいなんだ……

腕で乱暴に涙を拭うが、手首から肘までビショビショに濡れてもまだ、涙は完全には止まらず滲んでくる。

「俺の言うこと、信じられないと思う。気の狂った絵描きの戯言だと思ってくれて構いません。でも、憶えていて欲しい。この老人……アドラメレクの手先に、絶対に関わっちゃいけない。これだけは、忘れないで」

椅子から立ち上がると、絵を元どおりに立てかけPCを取り上げる。

もう手は震えていない。その代わりに、心臓が普段の鼓動とは異なり小刻みに震えている。

静かにひとつ、息を吐く。

「これから、儀式を始めます。そしてこれが、俺の最後の作品になります」

生放送、始まりました。陽くん、何を語るのか.....

儀式

「これから、儀式を始めます……そしてこれが、俺の最後の作品になります」

PCを持ったまま、祭壇の方へ向かう。そこに立てかけられている数枚の絵を、一枚ずつ映していく。

青と水色の濃淡で描き出された女性の絵。湖のほとりに斜めに座り湖面を覗き込みながら、片手を差し入れて水と戯れている。手から零れ落ちた水は細い肘を伝い、小さな白い膝を濡らして、また湖面に滴り落ちる。

清水恵流。その名の通り、彼女には愛が満ち溢れ、それを周囲に惜しみなく与えてくれた。周りの人間全てを幸せにしてくれる、そんな存在だった。優しくて真っ直ぐで、健気で、強くって……とても愛おしい、女の子。俺が初めて、本気で好きになった人。

多分ずっと前から好きだったのに、俺は自分の気持ちに気づかなくて。気づいてからもどうしていいかわからなくて、しばらくウジウジしてた。それでも君は、鈍くて馬鹿な俺なんかをずっと想っててくれた。

吃驚して嬉しくて……ほんと、夢みたいだったんだ。毎日が楽しくて、幸せで。ずっと、一緒に居たかった。居られると思ってた……

ごめんね、恵流。いっぱい辛い思いさせて、何も気づけなくて、本当にごめん。俺もう、誕生日と命日の墓参りすら行けなくなっちゃった。

俺はきっと、そっちに行けないからさ、もし優馬さんが彷徨ってたら、天国に連れて行ってあげてよ。頼むよ……

大きな樹の下に佇む、栗毛の馬。その背中には小さな男の子が跨り、鬘を掴んだままその背にうつ伏せて眠っている。

傍らに立つ女性がそよ風に髪をなびかせ、馬の鼻面を優しく撫でている。馬は優しい目で彼女を見つめ返す。繁る木の葉が、草の上に影を落としている。注意深く見なければわからないが、その陰影は優馬の笑顔を描き出していた。俺の大好きな、心から寛げるおおらかな笑顔。

木暮優馬。大きくて優しい人だった。いつも笑って軽口叩きながら、他人のために力を貸してくれる。大きな手で支えてくれた。背中を押してくれた。優馬さんと一緒なら、何だって出来る。そう思えた。言ったこと無かったけど、兄貴分……っていうかも、兄貴だと思ってた。頼れる

兄貴で、楽しい親友で、何でも話せる相棒で、俺の憧れで……大切な、人だった。

優馬さんは自分のせいだなんて言ってたけど、それは違うんだよ。優馬さんに無理矢理独立させられたわけじゃない。そりゃ最初は尻込みしたけどさ、俺はちゃんと自分の意思で、優馬さんと組んだんだ。毎日すごく楽しくてさ。幸せだったんだ。

ごめんなさい。優馬さん、ごめんなさい。栞さんと優侍、ごめんなさい。

約束通り、栞さんたちには近づかない。でも、出来る限りのことはしてきたから。これ以上迷惑がかからないように、ちゃんとするから。

……優馬さんはきっと、怒るだろうね。でも、仕方がないんだ。これしか無かったんだ。許してほしいなんて思っていないけど、謝らせて下さい。本当に、ごめんなさい。

満点の星空の下、満月には少し足りない月を見上げる老夫妻。夫は妻の丸みを帯びた肩に手を回し、妻は夫の腰の辺りを掴んでいる。煌々と照らす月の光に長く伸びたふたりの影が、頬を寄せ合う様に仲睦まじく寄り添っている。そこに流れるのは、温かく静かな時間。

オヤジさん、静江さん。工房の屋上で、ビールを片手に空を見上げる貴方達が、大好きでした。仕事を終えて夏の夜風に吹かれながら、ゆったりと過ごすふたりの後ろ姿を、俺はよく部屋の廊下の窓から眺めてました。穏やかな、落ち着いた気分になれた。でもちょっと、泣きたくなる様な……感傷的になったりもして。

ごめんなさい。就職して以来ずっと、あんなに良くして貰ったのに。ふたりが居なかったら、俺はどうなっていたかわからない。捨て鉢になって荒んだ人生を送っていたかもしれない。でも、結果的にはその方が良かったのかな。少なくとも、こんなに多くの人を不幸にせずに済んだのかも……

いや、そうじゃないね。そんなこと言ったら、逆に失礼だよ。俺、やっぱりふたりに出会えて良かったです。

恩返し、したかったな。静江さんの手術代は足りると思うけど……ふたりとも、完治しますように。大丈夫。俺が消えれば……この力が消えれば、きっと……

どうか、ふたりとも末長く、仲良く幸せに過ごしてください。今までありがとうございました。感謝してもしきれません。本当に、ありがとうございました。

真っ暗な空へ向かい、今にも羽ばたかんと力強い翼を広げる美しい鳥。その緋色の羽根に紅蓮の炎を纏い、火の粉が振りまかれている。その火の粉を受けた赤い蓮の花が夥しく燃え盛るがごとく咲き乱れ、またその美しさを呼吸するかの様に、しなやかな漆黒のとさかをなびかせた火の鳥は、艶やかに艶やかに闇に浮かび立つ。美しさと強さが幾重にも循環し、昇華する。

煌月夏蓮。俺の、運命の恋人。俺の、ヴィーナス。夏蓮がそう言ってくれたから、俺は信じたよ。今でも信じてる。

そういえば、最初は吃驚したっけ。あの時は……強引っていうか、有無を言わせない迫力でさ。正直、引き摺られた感じだったよね。でも、その強引さが、俺を救ってくれたんだ。首根っこ掴んで起き上がらせて、ピンタかまされたみたいにさ。あんたの居場所はココ！ って。ここで私だけを見てなさい！ って。もう、マジで衝撃だったよ……

夏蓮の強靱な意志の力とか、情熱、勢い、迷いの無さ……こんな人間が居るんだ、って。気づいたら、呆然としながら見つめてた。目を逸らすなんて無理だった。何から何まで衝撃的で刺激的で、凄まじく魅力的で。全身でそれを感じ取ろうとしたし、表そうと思った。俺が夏蓮から貰ったものは、計り知れない。

ごめんね、夏蓮。一番辛い時に側に居てやれなくて。もう少し時間が経ったら、君の隣に、俺の場所に、戻るつもりだった。不死鳥の様に羽ばたく君を見守り、支え、寄り添って……描いていくつもりだったんだ。

最期に一目会いたかったけど、それも諦めたよ。俺はもう、君に近づくべきじゃない。

いま君に働いてる悪い力は、俺が全部持ってくるから。

君はきっと復活するって、信じてる。

強気だけど本当は優しく、隠してたつもりだろうけどちょっとだけ少女趣味なところも、好きだった。

どうか、幸せに。幸せに、なって下さい。

今まで、ありがとう。夏蓮。

全ての絵をゆっくりと、順番に映し終え、PCを台の上に戻した。

最後の作品……

全ての絵をゆっくりと、順番に映し終え、PCを台の上に戻した。
祭壇が映るようにカメラの位置を調節して、再びPCの前に座る。

「今お見せした絵は、生贄です。アドラメレクへ、生贄を捧げます。この力を、消し去る為に」

言った。言葉にして、言ったよ。これでいいんだろ？

「自分の手で生み出したこれらの絵と、俺自身の命を」

胸がざわめき、唇が震える。

言うんだ。最後まで、言うんだ。契約を結ぶために……

「生贄に捧げます。だから、この力を消して下さい。俺の大切な人たちを、これ以上不幸にしないで下さい」

痣がざわざわチクチクする。皮膚の内側から無数の針で突かれ引っ掻き回されてるみたいだ。
この方法は、本当に有効なのだろうか。わからない。いや、きっと効くはずだ。言葉による、アドラメレクとの契約なのだから。信じるんだ。強く、強く。

台の隅に置いておいた薬品に手を伸ばしかけたが、思い直して引っ込めた。

「予定していた時間より、だいぶ早いんですね。時間が余ってしまった。言わなきゃいけないことはもう言ったと思うんだけど……最後に、もう少しだけ」

背筋を伸ばして、ひとつ深呼吸。

「俺が今からすることは、悪いこと。批判されるべきことです。それは自覚しています。でも...
...言い訳するわけじゃないけど、こうするしか無かったんです」

ちゃんと伝わりますように。

誰のせいでもないんだ。責任を感じたりして欲しくないんだ。そんな必要は無いんだから。

「俺が絵を描くと、大切な人が不幸になる。だったら絵を描かなきゃいいんだって、思いました。それなら誰も不幸にならない……でも駄目だった。気が狂いそうになって……眠ることさえ出来ないぐらい、イメージが頭の中を駆け巡るんだ。次々に襲ってきて、外に出せて暴れる。逃げられない。描くんじゃなくて、描かされるんだ……赤い靴、って、知ってますか？ 赤い靴を履いた女の子は、呪いをかけられて踊り続けるんです。どんなに疲れても、足が痛くても、踊るのをやめられない。俺も、ちょうどそんな感じなんです。今、この時も」

倒れている優馬さんの絵が頭から離れなくなった時点で、もう駄目だと悟った。人として終わりだと、そう思った。その後も足搔いてはみたんだ。でもやっぱ、駄目だった。

……視線が、偏る。カメラを真っ直ぐに見つめながら話してのに、左目が強くなっている。右目に力を入れなきゃ。ああ、なんだか目がチカチカする。ちゃんとしないと、見てる人に伝わらないかもしれない。視線の加減を意識したら、余計にわからなくなってしまった。今までどうやって物を見てたんだっけ……？ いや、混乱してる場合じゃない。話を続けなきゃ。

「死ぬのは、怖いよ。ほんとは生きていたい。俺はこの世界が大好きだし、大切な人だっていっぱい居る。でも……生きている限り、俺は絵を描く。心臓が止まるその瞬間まで、描く。辞めたくても辞められない。皮肉だよね。死ぬまで描き続けたいって、それが俺の望みだったのに」

思わず自嘲めいた苦笑いが漏れてしまう。

「でも、どれだけ凄いものを描いたって、世界中に賞賛される作品を遺せたとしても……それじゃ駄目なんだ。人を不幸にしてまで、絵を描きたくないんだ。俺は、悪魔になりたくなかった。人で、ありたかった」

だからどうか、悲しまないで欲しい。そんなこと言っても無理だろうから、口には出さないけど。

母さんがもう帰ってこないと聞かされた時も、父さんが出て行ったとわかった時も、なんとかその状況を受け止めてきた。無理矢理受け止めて、自分に出来ることを必死でやってきた。

でも、これは無理なんだ。自分のせいで周りが不幸になるなんて、絶対に受け入れられない。俺は悲観して死ぬわけじゃない。知識が欲しいとかほざいてた、ヤツの”観察対象”を無くしたいんだ。悪魔と戦うことを選んだのだと、知って欲しいんだ。

「今この時も、頭の中に絵が渦巻いてる。イメージが外に出せって暴れてて、頭が爆発して気が狂いそうなんです。もし本当に狂ってしまったら……正気を失って自分を押し止められなくなったら、俺は、絵を描いてしまう。だから、こうすることに決めたんです。今から俺は、俺を……この力を、殺します。自分の浅薄な行為の責任を、取ります。そして、後の犠牲者が出ないように、ヤツの悪行を広く知らしめたくて、このような放送をしました」

……ねえ、あれ、五島さんだね。ナイフ持ってたの。あの時は混乱してて気づかなかったけど、後から色々考えて分かったんだ。直前の電話とか、現れたタイミング、あと体型とか……俺を狙ってたんだね。理由はわからないけど、いいよ。五島さんのすることだもん、きっと夏蓮の為だね。あなたは間違ってたよ。俺は消えた方がいい。結局無駄になっちゃったけど、でもあの時、優馬さんを刺さないでくれて、ありがとう。

自分を責めたりしないで下さい。夏蓮を、宜しくお願いします。

「……ここまで見てくださった方、ありがとうございました。それと、今まで俺に関わってくれた方、お世話になった皆さん、ありがとうございました。たくさんの素晴らしい人達に出会えました。みんな大好きだった。俺はとても、幸せでした。25年間、いろいろあったけど、それでも幸せでした。本当に、ありがとうございました」

深々と頭を下げる。

どれだけ頭を下げて、何度礼を言っても足りない。

言い尽くせない程の感謝が、少しでも伝わって欲しい。

「皆さんも、幸せに生きてください。辛いことや悲しいこと、醜いこと、思い通りにならないこと、いっぱいあるけど……ちゃんと見れば、この世界は、とても美しいです」

そう。この世界は、美しい。知ってたけど、こうすると決めてから更に、思い知ったよ。目に入るもの全てが、美しくて愛おしい。

生きていこうとする力、在り続けようとする力。目に見えないけど、見えるんだ。それは震えるほど、美しいんだよ。

「まだちょっと時間余ってるけど……もういいや。そろそろ終わりにします」

PCを操作して画面を確認する。よし。これでいい。

席を立ち深く一礼し、悪魔の絵を持って祭壇へ向かう。

全ての絵を祭壇に積み上げ、引火性のある仕上げ用薬材を振りかけた。持ってきたライターで火を点けると、あっという間に大きな炎が立ち昇った。

火のまわり具合を確認し、もう一度PCカメラに向かって一礼。そして、カメラに映らないよう祭壇の裏側へ回りこみ床に座る。

あらかじめ用意しておいた小瓶と、ウイスキーボトルの蓋を開ける。不思議と、心は落ち着いていた。

スタンドグラス越しの光を浴びながら、空気を胸いっぱい吸い込む。

濃密な緑の気配と、木と布、絵の具などの燃える匂い。これが、自分の罪の匂いか。

(この力を、断ち切る。彼らの不幸は、もう終わる。絶対に、終わらせる)

ある植物から抽出した液体を、一気に飲み下した。続けざまにウイスキーを生のまま呷り、ビリビリとする痺れを押し流す。

ぐにゃあ、と視界が歪んだ。頭の中がぐらぐらんと揺れる。

思っていたより随分と早い。中毒症状が出るまでに、少なくとも10分ほどかかる筈なのに。ここ数日間の不眠や食事を摂らなかったりした事が関係しているのかもしれない……

耳元でゴトン、と音がして、視界が揺れた。目の前に薄汚れた木の床が見え、側には琥珀色の液体が半分ほど入った瓶が倒れている。

体を支えきれなくなって床に倒れたらしい。さっきの音からして強く頭を打った筈だが、痛みは感じなかった。ただ、胸が、熱い。心臓が灼かれてるみたいだ。

そうだ。焼き尽くせ。こんな痣、胸の中から焼き滅ぼせばいい。

全身がドクドクと脈打つ。熱い。苦しい。痛い。熱い、熱い、熱い……

酸素を求めもがいていると、白い煙の向こうから光の粒が瞬くのが見えた。

スローモーションの様にゆっくりと渦を巻く煙の中からキラキラと、七色の光の粒が降り注ぐ。まるで粉々にした虹を撒いてるみたいだ。

なんだろう。なんて、綺麗なんだろう。

昔、恵流と一緒に花火とシャボン玉で遊んだのが思い出された。宵の闇に浮かぶ、色とりどりの花火と白い煙。その中を揺蕩う虹色の玉。

思わず、手を伸ばした。

その手に絵筆が無いことに驚き、声をあげて笑ってしまう。

何だよ、こんな時にさえ、俺は絵を描こうとしてる。

やっぱり、間違ってたかった。この選択は、正しかったんだ。

上手く断ち切れたかもしれない。

もしかしたら、赦されたのかもしれない。ほんの少しだけでも。

だってほら、もうそんなに、苦しくないもん……

視界が狭まり急激に暗くなっていく中、煌めく光に向かってさらに手を伸ばそうとする。だが、腕はすでにその力を失っていた。

この美しい虹の飛沫を、もう少し見ていたい。もう少しだけ……

願いも虚しく、瞼が降りてくる。

終わりだ。もう、終わるんだ。

奇妙な達成感に包まれて、薄く微笑みさえ浮かべながら、目を閉じた。

ああ、父さん。昔あんたが教えてくれた通りだ。

この世界はやっぱり、すごく、綺麗だった……

童話の「赤い靴」。主人公の少女の名は、「カーレン」というのだそうです。
このパートを書いている時に知りました。正直、ちょっとゾッとしました。

(嫌よ、何する気なの？ やめて、陽！ 駄目！ 駄目！ お願い戻ってきて！ お願い！)

見えない糸で縛りつけられたみたいに、声は喉元に張り付いて出てこない。弱々しい息が小さな塊になって、不規則に往復する。

膝に乗せたノートPCにしがみつき、夏蓮はその画面を食い入る様に凝視していた。目を逸らしたいのに逸らせない。必死で祈りながら、陽の姿を、白い煙の中に探す。

ゴトッと重たい音がして、祭壇の影から酒瓶らしきものが転がり出てきた。床に滲みが出来、徐々に広がっていく。

(ああ、陽……駄目よ……神様お願い、陽を助けて……)

カズに張り付いている警官が、画面を覗き込みながら喧しく携帯で話している。その声が煩くて、既にめいっぱいボリュームを上げてあるPCを胸の前に持ち上げ、顔を寄せた。

……何か聞こえる。これは、呻き声？

心臓が引き攣ったみたいになって、息が出来ない。

苦しいの？ 陽、苦しんでるの？ 陽が苦しんでる。助けて。誰か、お願い……

パリン、と澄んだ音がして、ステンドグラスが割れて落ちた。新鮮な空気が入ってきたのか、炎の勢いが強くなる。

そして、小さな笑い声が聞こえた。

間違いない。陽の声だ。小さく短い笑い声だったけど、間違いなく陽の声。

生きてる！ まだ生きてる！ はやく居場所を突き止めて！ 彼を助けて！

真っ白い煙の中、祭壇の炎がパチパチと爆ぜる。

そして唐突に映像が消え、荒いグレーの画面に切り替わった。ザーザーというノイズの音量に、夏蓮は思わず飛び上がった。

呆然と、PCを見下ろす。

その画面は、生放送が終了したことを示していた。

.....これは、何？ 私は今、何を見たの.....？

先ほどの警官が、夏蓮の膝の上からPCをそっと取り上げ操作する。ノイズを消し、閉じたPCを五島のベッド脇の机に置いた。

「放送を見た視聴者から、数件通報があったようです。今、調べてますから」

放送、視聴者、通報.....バラバラに聞こえていたひとつひとつの単語が結び合わさり、警官の言葉がゆっくりと意味を成した瞬間、指が、腕が、体が、激しく震えだした。

たった今見た非現実的な映像は、現実だ。現実のものなのだ。

「.....お願い。どうか.....お願い、します.....」

やっとの思いで声を絞り出すと、夏蓮は震える両手で自分の肩を抱き、固く目を閉じた。

.....陽を、助けて。

† † †

腰が抜けてしまい床に崩れ落ちた渡辺は、PCデスクの前から這いつくばってベッドにたどり着いた。毛布に顔を埋めて目を閉じ、今見たものを必死に否定する。

(嘘だ。嫌だよ。あんなの嘘だよな？ 大月さん.....)

震える腕でベッドの上の絵を取り、見つめる。

大月陽から今朝届いた、渡辺を描いた肖像画。

僅かに斜に立ち、こちらに向かって手を差し伸べる、自分の姿。

その表情は優しく柔らかく、リラックスしている。瞳には励ます様な光が灯り、唇は今まさに微笑もうとしていて、まるで「大丈夫だよ」と語りかけてくる様に見える。肩の上には心地良さ気に目を細めたピロちゃんに乗っかっている。

柔らかな背景色に浮かび上がり輪郭を光に縁取られた僕らの姿は、差し出された手を取れば明るい場所に連れて行ってくれる.....そんな風に見えた。

まるで合わせ鏡みたいなその絵を、そっと胸の中に抱き締め、蹲った。

刃物を突き立てられているみたいに、胸の真ん中が痛み脈打ち、張り裂けてしまいそうだ。

横隔膜が揺れて腹筋が波打ち、喉が締め付けられる。堪えきれぬ呻き声は嗚咽に変わり、やがて慟哭となった。

涙と唾液、涙水で床や膝を濡らし、渡辺は絵を掻き抱いたまま夜が更けるまで体を震わせ、泣

いた。

陽くん、失踪中に5点も仕上げました.....

あの放送から数日、夏蓮はせわしなく動き回っている。

陽とそのスタジオに関する全ての手続きは、天本社長と木暮葉に託されていたため、夏蓮には何も出来なかった。ただ、カズに付いている警官を通じて、陽の最後の様子を少しだけ聞くことが出来ただけだ。

夏蓮は、知りたかった。

最後に陽を拒絶した事実は変わらないことは、自分でもわかっている。今更何をしたところで、罪滅ぼしなんかにはならないことも。

ただ、不思議なことに、悲しむ気持ちや後悔よりも、知りたいという欲求をはるかに強く感じるのだ。

怒りにも似た焦燥感に駆られるほど、ただもう闇雲に、全てを知りたかった。

その欲求に突き動かされるように、夏蓮はリハビリの合間を縫って出かけ、調べて回っているのだ。

今日、とあるマンションのロビーに通された夏蓮は、大理石の床に設えられた客用のソファセットの近くに陣取り、彼女が降りてくるのを待っていた。

逸る気持ちを抑えようと、薄暗くひんやりと涼しいロビーから強い日差しの降り注ぐ小さな中庭を眺めていると、エレベーターの扉が開き、木暮葉が姿を現した。

† † †

この前会った時より、木暮葉は憔悴している様に見えた。

「お願いします。私、どうしても知りたいんです。陽が何故、あんなことをしたのか。あんなに痩せてやつれて……追い詰められて……」

「あの都市伝説が関係してると、思っただらっしゃるんですね？」

木暮葉は、あの動画はまだ見ていないと言った。

世間では結構な騒ぎになっていたが、敢えて情報を遮断していたらしい。

小さな子供をかかえて夫を亡くした身とあっては、無理もないことだった。

傷口を押し広げ塩を擦り込む様なお願いをするのは、夏蓮にしても心苦しかった。でも、知りたいのだ。陽に何があったのか。

「わかりました。探偵社に連絡して聞いてみます。また改めてご連絡します」

「ありがとうございます。大変な時期にこんなお願いをして本当に申し訳ありませんが、よろしくをお願いします」

彼女には珍しいことだが、鼻の先が膝にくっつきそうなほど、夏蓮は深く頭を下げた。

「……おう。任しとけ」

思わず、といった風情でポロリと零れ出た言葉とは裏腹な、どこか虚ろに響く声だった。夏蓮が顔を上げると、葉は片手で口元を覆った。

「あら、ごめんなさい。優馬の口癖なの。いつの間にか移ってしまって」

「憶えています。私も何度か聞いたわ」

「夫婦って、おかしいものね。思いもよらないところが似てきたり、移ったり。夫がいなくなってから、急に……」

葉は口を噤み、眉根を寄せきつく目を閉じた。呼吸を止め、感情の波が去るのを待つ。

「失礼しました。何でもないわ。では、また」

軽く会釈してエレベーターへ向かった栞が、前髪を払うような仕草をした。

それは女性なら、見紛うべくもない。

背後の者にバレないように涙を拭う、仕草だった。

ドアの向こうへ消えていく栞の背中に、夏蓮は車椅子の上で再び、深々と頭を下げた。

記憶の中の優馬さんとお話ししてるうちに、口癖が移っちゃったんでしょうか。切ない.....

夏蓮はイライラして、前髪の端を噛んだ。

例の放送から連日、巷では孤高の天才画家の変死というショッキングな話題で賑わっていた。ネット上では様々な憶測が飛び交い、有る事無い事書き立てられ……絵画に全く興味の無い人々にまで様々に噂され、昨日はついに夏蓮のところまで雑誌の記者とかいう者が訪ねてくる始末だった。もちろん会わずに追い返したが。

世間では、大月陽の気が狂れたという意見が多勢を占めているように見受けられた。理由として、彼が語った内容はもちろんだが、カメラに向かって話す表情や口調がコロコロ変わったとか、たまに目線が虚ろになるところがあったとか、知った風な分析結果をひけらかす者も多い。

が、最も大きな理由となっているのが、容姿の変化だろう。

失踪前の画像が多数アップされており、ご丁寧に例の放送時の映像と比較されているそれらは、まるで別人の様に見えた。

迷いの無い真っ直ぐな視線をキャンバスに向け絵筆を揮う陽、誰かと会話して快活に笑っている陽、子供達に絵の書き方を指導している楽しげな陽、少し緊張した面持ちでインタビューに答える陽……夏蓮との動画の静止画もあった。

その画像のほとんどは優馬がSNS上に掲載したものだだったが、数々のイベントや、夏蓮も覚えのあるパーティーで撮られたもの、明らかに共通の友人が撮った写真も見られた。

一方例の放送時は、端正な顔立ちはそのままだったが、眼窩は落窪み、どこまでも白く澄んでいた白目は充血し、頬はこけ、放送の直前まで絵を描いていたのであろう手と顔は、絵の具で汚れていた。

また、大月陽生存説も唱えられ始めていた。ほんとうはまだ生きていて、絵を売る為の話題作りの為の放送だったのだという説だ。

事実、彼の絵の価格は放送後跳ね上がり、日本の外からも問い合わせが多数来ているらしい。

実に馬鹿馬鹿しい話だったが、あの放送の中で、陽は最後に祭壇の裏に隠れたし、映像は文字通

り煙に巻かれたまま終了した。

また、陽の死因について、公式な発表はされていない。

アルカロイド系の薬物による服毒死。薬物の入手経路は不明だが、比較的安易に入手出来、あるいは自身で抽出した可能性もある。

そのことを知っているのは、警察等関係者を除き、ごく限られた少数の者だけだ。

.....変な噂が立つのかもしれない。陽はそれだけの事をしたのだ。

夏蓮は齧っていた前髪を、耳にかけた。

今朝衝動的に美容院へ駆け込み、思い切り短くカットしてもらったのだ。アシンメトリーなミニマムショートは気に入ったが、子供の頃からロングヘアだったので、まだ慣れない。

木暮葉から送られてきた調査結果のコピーに手を伸ばした。

散々読みつくしたページを繰り、陽の書いた黒服の老人の絵を指で弾く。

「追加の調査結果ですが.....やっぱり私、こんなの信じません。陽くんは服毒、優馬は、台風で脆くなっていた看板が直撃しての頭部外傷。死因ははっきりしてます。私が信じるのは、それだけ」

電話の向こうで、木暮葉はそう言い切った。

ふたりの死が、こんなオカルトに振り回されてのことだったなんて冗談じゃない。そう言いた気だった。

その気持ちは、夏蓮にもよくわかる。

この内容が事実だとするなら、陽の絵の才能はもちろん、私の陽への気持ちも優馬さんの友情や努力も天本夫妻の気遣いも、清水恵流の一途な思いさえも、全て仕組まれ操られていた.....そう言われている様に感じてしまうからだ。

でも。

これがただのオカルトではない事、そして陽が狂ったのではない事を、夏蓮は確信していた。あの曇れ方から、相当に迷い追い詰められ、参っていたのはわかる。だが、決しておかしくなったわけではない。

陽は最後まで正気を保ち、本気で、あれを決行したのだ。

カズと、話したい。この件について、カズの意見が聞きたい。だって、誰にでも話せるって内容じゃないのよ。

なのに……ああ、忌々しい。

車椅子を操り、眠っているカズの枕元へ近づく。

耳元に口を寄せ、思い切り怒鳴った。

「ちょっとカズ！ いつまで寝てる気なの！ さっさと起きなさい！」

† † †

開け放ってあるドアの向こうから、夏蓮の声に驚いた警官が飛び込んで来た。それに目もくれず、夏蓮は怒鳴り続ける。

「話す事がたくさんあるのよ！ カズ！ あなたが居ないと……色々と、不便なの！」

「不便って……その言い草はさすがに」

夏蓮を取り押さえ宥めようとした警官が思わず呟いた時、眠っていた五島が僅かに身じろぎした。

「カズ？！ カズ、起きたの？！ ……ちょっと、早く先生を呼んできて」

「えっ、あ、ハイ！」

夏蓮の命令に瞬時に反応し、警官は病室を飛び出していった。

「……髪、切ったのか」

焦点が合わないのか、眩しそうに目を細めた五島の掠れ声が聞こえた。

「ちょっと。二週間も眠ってての第一声が、ソレ？」

夏蓮の怒りを含んだ呆れ声に、五島はのろのろと目を擦った。

「ああ、すまない……ちょっと驚いたから……え、二週間？ あれ、ここは……」

バタバタと慌ただしい足音が聞こえ、医師と看護師、その後ろから警官が駆け込んできた。

「陽と優馬さんが死んだわ」

端的にそう告げたところで警官が車椅子を押し、夏蓮を強制的に引き離した。

夏蓮は抵抗もせず、大人しくそれに従いつつ振り返ったが、五島の姿は医者たちに囲まれ見えなかった。

五島さん、どこまでも夏蓮に忠実です……

「ちょっと煌月さん、困りますよ」

「……ごめんなさい。気が急いてしまって、つい」

「わかりますけど」

「体調のチェックが終わったら、話させてくれるんでしょう？ 約束よね？」

「違います。我々の質問が終わってからという約束だったでしょう」

夏蓮と車椅子を押す男の声が、遠ざかっていく。

あの男は、誰だ？

ここは……病院だ。

二週間眠っていた？

そして、大月陽と木暮優馬が、死んだ……？

……ああ……ああ、そうか。俺は……俺が、やったのか？

† † †

医師達からチェックを受けている間に、意識を失う直前までのことをすっかり思い出していた。医師達と入れ替わりに入ってきた2人の男が身分証を提示した時には、心は決まっていた。全て、正直に話す。元々、事を為し終えたら自首するつもりだったのだ。

夏蓮は部屋の隅で付き添いの男と小声で言い争っている。おそらく下っ端の刑事なのだろう。車椅子をがっちり掴まえながら、夏蓮を宥めている様子だ。

二人連れの片方に当日の行動を聞かれたので、五島は迷いなく一気に言った。

「大月陽を殺そうとしました。明確な殺意を持ってナイフを購入し、電話で彼を誘い出し刺殺しようとしたが、失敗したので逃走しました。その途中、階段で転げ落ちそうになった女性を助めました」

途中、男達の向こうで夏蓮が息を飲んだのがわかった。彼女を見てはいなかったが、気配を感じ取った。

何故殺そうとしたのかと問われ、一瞬言葉に詰まる。

理由は、わかっていた。

だが、この言葉を発した時が自分の人生の終わる時だと知っていた。

今まで頭の中でさえ考える事を封印してきた言葉だった。

自分の手で、終わらせる。

大月陽を殺すと決めた時から、その覚悟は出来ていた。

「理由は、私が.....煌月カレンを、愛していたからです」

部屋の中の時間が止まった。

それはおそらく2、3秒の間だったが、暗く深い真空の空間に感じられた。

「大月陽の存在が彼女を苦しめる。だから消さなければならない.....そう思っていました。でも、本当はそれだけじゃなかった」

本当は、最初からわかっていた。ただ気づかないふりをしていただけだ。

夏蓮との関係を、終わらせたくなかったから。

彼女の苦しみを消すことより、自分の気持ちを優先していたのだ。

「自分が夏蓮を守れなかった。自分のせいで夏蓮が怪我をして、踊れなくなった。その怒りを、恐怖を、彼にぶつけたんです」

嫉妬や苛立ち、羨望、そういったものを全て、ぶつけたのだ。自分には永遠に手の届かないものをやすやすと手にした、憎い男へ。

「どうして……どうして！」

夏蓮の声に、混乱が滲んでいる。

五島は顔を上げられず俯いたままだった。

言えるわけがない。

夏蓮の叫びに、漫然と首を振る事しか出来なかった。

付き添いの男に諫められ夏蓮が引き下がると、五島は質問を続ける刑事たちに淡々と答えた後、状況の説明を受けた。

時間にして15分程だろうか。自分でも驚くほど、冷静だった。あの一言の後は、何を話しても何を聞いても、心が動かなかった。

あれを言った瞬間に、心も死んでしまったのだろう。でも、それでいい。心なんてもう、必要無いのだ。

話が終わればそのまま連行されるものと思っていたが、彼らは意外にも壁際の椅子に陣取った。そして、夏蓮が進み出てきた。

五島の心はやはり止まったままで、冷たく強張ったまま何も感じなかった。ただ、やはり顔は上げられず、腿の上で組んだ両手をじっと見つめていた。

「カズ、こっち見て」

夏蓮の声だ。いつもの、決然として抗いようの無い、強い声。

だが、五島は動かなかった。

習慣というのは恐ろしく、夏蓮の声に逆らうのには強い意志を必要としたが、頑なに自分の無骨な手を眺め下ろす。

「こっちを見て。私を、見なさい」

声が、怒気を孕む。静かだが有無を言わせぬ迫力がある。少しだけ、意志が揺らいだ。さらに深く俯き、目を閉じる。

組んだ手に熱い感触が乗っかり、強い力で握られた。組み合わせた指に痛みを感じるほど、強くギリギリと締め上げられる。

どれだけ体を鍛えていても、指というのは弱い箇所だ。夏蓮はそれを重々承知で、絡めた指を締め上げているのだ。

折り重なった指の骨と関節が痛んだが、手を振り払うという発想は全く浮かばず、頑なに目を閉じ続けた。

ふと、指への圧迫が消えた。

と思うと突然、大きな破裂音とともに頬に熱い痛みが走った。思い切りビンタされたのだ。これには流石に反応してしまい、反射的に目を開いてしまう。

続けざま、顔に向かって布切れを投げつけられた。夏蓮のひざ掛けだ。

「見なさいって言ってるでしょ！」

思わず見返すと、夏蓮は付き添いの男に後ろから肩を掴まれていた。

「起きたばかりの患者に何を」と泡を食っている男を無視して、夏蓮は足元を指差している。

「ほら。よく見て」

夏蓮の白い爪先が、桜色の形の良い爪が張り付いた美しい爪先が、ピクピクと動いていた。よくよく見れば、足首から先が微妙に蠢いている。

信じられない思いで顔を上げると、夏蓮と目が合った。夏蓮が強い眼差しで見つめ返し、小さく頷く。

「動くの。まだ少しだけだけど……治ってきてる」

解放された両手が、震える。薄く開いた唇が、震える。心臓はもっと、震えている。

……ああ、ああ……

「私、踊るわよ」

夏蓮の瞳に、強い決意が瞬いたのが見えた。

……夏蓮だ。夏蓮が、戻ってきた。俺の愛した、煌月夏蓮が。

熱い思いが大量に溢れ出た。吠えるような声と火のような吐息、それに熱されたように熱く沸る涙が止めどなく流れ、顔を覆う両手を濡らした。

「……良かった……よかった……」

号泣の合間に零れ出た言葉は、夏蓮に聞こえただろうか。どちらでも構わなかった。

頭の中に強く温かい光が満ち溢れ、真っ白になった。大月陽も木暮優馬もその存在ごと、強い光の向こうに消し飛んだ。

夏蓮の足が、動いた。夏蓮が、本当の夏蓮が、生き返った。

それだけが大切な事実だ。他のことは何も要らない。ただただ、神に感謝した。

滂沱として止まらぬ涙が夏蓮のひざ掛けを濡らす中、五島は信じてもらえなかった神に、心の中で感謝の言葉を捧げ続けた。

五島さん、夏蓮さんに殴られてウキウキです..... (ちょっと違う)

限られた時間

昨夜外村と名乗った付き添い君は、朝から落ち着かぬ様子だ。病み上がりのこちらの方が心配になってしまう。

「あの、大丈夫ですか？」

彼が7回目に病室のドアの外を確認したところで、五島はとうとう声をかけた。

外村は足早に戻ってきて、ベッドとドアの間に置いた折り畳み椅子に浅く腰掛けた。夏蓮が来たらすぐに動けるようにだろう。

「大丈夫です、大丈夫です。もう殴らせたりしません。今度はちゃんとガードしますから」

昨日のビンタが余程ショックだったのか、すっかり警戒モードになっている。

夏蓮の付き添いだとばかり思っていた彼は、実は五島の付き添いだった。目が覚めるのを待ち、担当刑事へ連絡するよう云われていたのだ。

それが、夏蓮にこき使われるうちいつの間にかお世話係みたいになってしまい、あげく昨日の失態だ。挽回しようと、相当気合を入れているらしかった。

「彼女なら大丈夫です。一通りの護身術こそ身に着けてますが、本来暴力を振るったりする人間じゃありません。実際私も、手を挙げられたのは昨日が初めてで」

「そうなんですか……いや、昨日は驚きました。元々、気が強く人使いの荒い……いや失礼、その、突然だったので」

恐縮してしきりに頭を搔く若い刑事は、決まり悪そうに頭を下げた。これで何回目だろうか。

「いえ。昨日は私がいかに不甲斐なかったのか、喝を入れてくれたんでしょう。実際、あれで目が覚めました。それに、トレーニングをきっちりこなしていることも、よくわかりました。あれは腰の回転といいスイングといい、良い張り手だった。しかもスナッフは極力緩めて、ちゃんと力を加減していた」

納得顔で頷く五島に、外村は少し呆れた様な、怪訝な表情を返した。

「五島さんがそうおっしゃるなら……まあ」

「ええ。彼女はあれでいいんです。むしろ、そうあるべきなので」

微笑む一歩手前、というふうに強面の五島の表情が緩むのを見て、外村は不思議な感慨を覚えた。長年にわたり培ってきた絆、精神的な繋がりを見た気がしたのだ。

「そういえばカレンさん、五島さんの件で事情を聞かれた時、開口一番言い切ったらしいですよ。『五島が何をしたか知りませんが、それは私のためにしたことです。五島は悪くありません』って。すごい信頼関係ですね」

夏蓮のことだ。言い切ったというより、正確には啖呵を切ったという表現が近かったに違いない。

だが、彼女自身、先の見えない不安と身体を引き裂くような悲しみに身を置く中で、咄嗟に自分を守ろうとしてくれたのだと思うと、罪の意識に胸が引き絞られるほど苦しくなった。しかし同時に、胸の中に光が灯り、熱くなった光が全身を駆け巡り、喜びが満ち溢れる。

罪悪感もこれから訪れるであろう喪失感も全てどうでもよくなる程、その喜びは強烈だった。もう、死んでもいい。いや、この気持ちを持ったまま死んでしまえたならと願うほど。

だが、自分のしたことを思えば、喜ぶなど言語道断。恥ずべきことだ。

妙に感激した面持ちの外村に向かい、感情が表に出ないように、五島は奥歯を噛み締めて首を振った。

「いえ……昨日も申しました通り、あれは私怨でやった事です。彼女には責任も関係も一切ありません。私は裁かれ、しかるべき罰を受ける事を望んでいます」

外村は神妙に頷いたが、言葉は返さなかった。

「それで、この後私は、どうなりますか」

「……わかりません。お話しした通り、彼らの死に五島さんが直接関わったとは言い難いし、状況が状況でしたし……今後の捜査次第じゃないですかね。正直自分、下っ端なんで詳しいことはわからなくて。ただ、もう数日検査が続くそうなので、しばらくは入院生活です」

おそらく、入院と拘束を兼ねての措置なのだろう。そう推測して、五島は静かに頷いた。

不意に、外村がピンと耳を立て、飛び上がるように立ち上がった……ように見えた。
素早くドアの外へ飛び出すと、夏蓮の車椅子を押して戻ってきた。千切れんばかりに振られている尻尾が見えるようだ。警戒しているつもりが、すっかり夏蓮に飼い慣らされている。

「おはよう、カズ」

「……おはよう」

いつもの様に、堂々とした女王の如き登場だ。

夏蓮は昨日の告白には触れずにいてくれるつもりらしい。

正直なところ不安だったのだが、安心した。こちらも同様に振舞うことが出来る。

「体調は？」

「問題ない」

「今日の予定は？」

「昼までは暇だ。で、昨日言った話というのは？」

普段通りの簡潔な遣り取りが、かつての様な会話のテンポが、この上なく幸せに感じられる。今後どうなろうと、今はこの空気を壊したくない。この、限られた時間を。

「陽と優馬さんのことは聞いたわね？」

何故か感情を見せない真顔で、夏蓮が尋ねた。悲しみや痛み、怒りが感じられない。それが却って恐ろしくて、五島は自ら切り出した。

「俺は彼を殺そうとした。本気だった」

「待って」

すかさず夏蓮が制止する。

「貴方が何をしようとしたのかは、関係な……くはないけど。今は置いておいて欲しいの」

「だが俺は……未遂だったとはいえ、許されないことを」

「許すか許さないかは私が決めるわ」

夏蓮その言葉に、体の奥が痺れ細胞が開く感じがした。これだ。この感じだ。

無意識ではあったが、「許されないことを」と発した時には既に、五島はこの言葉を待っていたのかもしれない。

「まずこれを読んで、どう思うか聞かせてちょうだい」

手渡された紙の束には、簡潔に「報告書」とだけ書かれていた。

これだ。この感じだ。

.....じゃねーよ！ヘンタイ五島。

典型的な都市伝説。

自らの周辺に巻き起こる不幸を受け止めきれなくなった大月陽が、その都市伝説にある悪魔という存在に依存し、それに沿う様に事実を当てはめシナリオを創り上げ、自分なりの契約の儀式を執り行った。

五島は読み終えた報告書を眺めながら、そう評した。

口には出さなかったが、彼の気持ちはよくわかった。

夏蓮の事故を、苦しみを受け止めきれず、大月陽に全て転嫁しようとした自分自身と、同じだったからだ。

「じゃあカズは、これを信じてない？」

「ああ。くだらんオカルトだ」

「陽の亡くなった翌日、私の足が動いたと言っても？」

驚いた五島に、夏蓮は真剣な表情で頷いた。

「動いたと言っても、最初は痛みを感じただけだったの。その日無理矢理ベッドに入らされて、ベッドの両脇には母と姉が付き添ってて……っていうか、監視よね。で、身動き取れなかったんだけど眠れる筈もなくて。ようやく朝になって、ヨロヨロで車椅子に移った時、足をぶつけて…『あれ、ちょっと痛い？』って」

「いや……偶然だろう。もしくはショックが大きすぎて、何かが……」

「まだあるわ。天本夫妻のふたりとも、同じことが起きた」

「社長さんの麻痺が突然良くなって、今では薬指と小指に痺れが残るぐらい。奥さんの方は検査で出ていた異常が、消えたの」

「まさか……」

「本当よ。特に奥さんの方は、医師が何人も集まって首を捻ったぐらい、信じ難い事例だって」

外村が淹れた飲みかけのコーヒーをテーブルに置くと、夏蓮はバッグから五島のタブレットを取り出した。いつの間にか私物化していたらしく、慣れた手つきで操作し、五島に手渡す。

「それを踏まえた上で、この動画を見て」

「言っとくけど、ちょっと覚悟がいるわよ」そう言い置いて、夏蓮は飲みかけのカップを手にとった。すかさず外村がポットを取り上げ、コーヒーを注ぎ足した。

† † †

「……確かに、ショッキングな動画だ。儀式の成果は疑問だが、報告書にあるとおりの結果だとすれば、少なくともアドラメルクとやらの存在を知らしめるという彼の目論見は、大成功したと思う」

夏蓮が無言で頷き先を促すので、五島は動画の内容を思い出しながら考える。

「彼の精神状態を思えば仕方ないだろうが、話し方はかなり不安定だ。口調の変化や声の強弱、視線の動きも含めて」

「そうよね。陽って基本受け身だけど、自分の考えはしっかり持ってた。言葉の選択を間違えることはあったけど、頭の中の考えは自分でしっかり把握してたもの。でもこの動画の中では……かなりちぐはぐで、混乱しているようにも見える」

そう。自分の真ん中に、頑固とも言えるほどの絶対的信念を持っているという意味で、彼は夏蓮と似たタイプの人間だった。

夏蓮の意向に沿うことに全力を尽くす自分とは正反対だと、五島は頷く。

「でもね、これに関しては私、わかる気がするの。何度も動画を見返したんだけど、陽は特定の人物を思い浮かべながら話してるんだと思う。その時その時で、画面を通して個人的に話しかけてるの。声を荒げたのは、例の老人に向けて話してる時。優しい口調や哀しそうな時は……それ

ぞれの人に」

胸の痣を指し、「蓮の花じゃなかった」と彼は言った。

あれは私に向けた言葉だ。

私と同じことを思ってくれていたのだと、また喉が締め付けられるのを、夏蓮は胸のペンダントに触れ、なんとか耐えた。

「なるほど。そうかもしれん……」

動画を早送りして見直しながら、五島は唸った。

「確かに、この絵もそうだ。顔は巧妙に隠れるように描いてあるが、本人、もしくはわかる人だけにわかるようになっている。個人情報慮ってのことかもしれない」

「そう。陽は最初から最後まで、正気だった。かなり参ってはいたけど、狂ったり現実逃避したわけじゃない。それどころか、事務的な処理や各方面への配慮が出来るくらい、冷静だったの」

短期間のうちに事務所の整理をつけ、夏蓮にはお揃いで作ったお守りを、渡辺青年には個人的に絵を遺していたことを告げる。五島は眉を険しくして黙ったままだ。

「アドラメレクへの儀式は、子供を生贄に捧げ炎で焼く。生贄が必要だったから彼は絵を描いたけど、放送するにあたり個人を特定され迷惑がかかることを避けた。そうして陽自身が生み出した渾身の作品たちを、生贄として捧げた。報酬は、彼に与えられた力と、周囲の人間に及んだその影響を消すこと」

ふむ、と五島は唸り、がっしりとした顎を撫でた。

「……その話を本気で信じるのか？」

「おかしいかしら？ この足を見ても？」

「偶然かもしれない。第一、アドラメレクというのは何なんだ。孔雀の形がどうのと言っていたが、あの痣は孔雀になんか……見ようによってはまあ、見えなくもないが、その程度だ」

「昔の絵画には、神話や宗教を題材にしてるものが多いんですって。陽はいろんな絵を見てきてるし、実際、神話関連や宗教画のモチーフに関してもかなり詳しかったわ。そういう中で、知識があったのかもしれない」

「だが、こじつけとも取れる」

「私がドイツ留学してた時……」

急に話が飛んだので、五島は動画の内容から離れ夏蓮の話に意識を向けた。

「変質者に遭遇した話、覚えてる？」

覚えていない筈が無かった。

五島が夏蓮と行動を共にすることになった、切っ掛けとなった事件。

当時は表面上冷静なふりをしていたが、内心では焦り激昂していた。夏蓮の母親に懇願されるまでもなく、ドイツへ発つことを即決したのだ。

「あの変質者ね……陽の描いた絵にそっくりだった」

驚きで目を剥き声も出ない五島に、夏蓮は言い聞かせるように言葉を継いだ。

「黒づくめ、山高帽、ステッキ、眼帯……十数年も前のことなのに、あの絵にそっくり」

「そんな……」

「本当よ」

「なんてことだ……！ どんな、どんな契約をした？！ 何をされた？！」

「落ち着いてよ。契約なんてしてない。当時話したでしょ」

なんと夏蓮さん、大昔に都市伝説に遭遇していました。

66ページ目「武道家の追想」、164ページ目「特性、力、対価」に、そのあたりのエピソードがチラッと出ています。本当に、チラッと。

当時、他のレッスン生に溶け込めずバレエの練習でも行き詰まっていた。自分のやりたい道は、バレエの外にあるのではないかと、悩んでイライラしながらの帰り道。夏蓮は石畳の狭い路地を歩いていた。

「やあ、お嬢ちゃん」

突然声をかけられ顔を上げると、薄気味悪い老人がインチキ臭い笑みを貼り付けて立っていた。

「強い目をしたお嬢ちゃん、君の望みは何かな？」

(.....なにこの変質者)

いつの間にか、辺りには人気途絶え、午後から夕暮れにかけての穏やかな日差しは陰っている。

老人が小さく一歩、踏み出した。

「望みを言いなさい。言葉に出して。望みが叶う力を、私があげよう」

老人の偉そうな物言いにイラつき、昂然と言い放った。

「アンタに叶えて欲しい望みなんて無いわ。欲しいものは自分で手に入れるから結構よ」

「それは頼もしい。だが、"力"が」

「うるさいわね！ 私に話しかけないで！ 近づいたらこれをお見舞いするわよ！」

老人が近づく素振りも見せていないのに、夏蓮はバレエシューズの入ったケースを思い切り投げつけ、反対方向へ走って逃げた。

曲がり角まで全力で走って、こっそり覗き見た時には、男はもう居なかった。

十 十 十

「後から思うと、ただの八つ当たりだったのかもと思う。でもあの後、なんとなくバレエシューズを取りに行く気になれなくて、放置したの。それで吹っ切れて、バレエをやめて転向したのよ」

「……話しかけられたから走って逃げた、としか聞いていなかったと思うが」

「そうだった？ まあ、日本に連れ戻されたくなくて、黙ってたのかもね」

夏蓮はあっけらかんとした様子で、ヒョイと肩を竦めた。

「とにかく。私は会ってるのよ、その男に」

「あの！ ちょっと、待ってください。信じるんですか？ その、都市伝説を？ 過去に会ってると言っても、十数年前のことだったら、夏蓮さんの記憶違いってことも」

「それは無い」

思わず、といった勢いで会話に参加した外村を、五島が一蹴した。

「夏蓮の記憶力は確かだ。特に、人の顔や特徴は忘れない」

「でも……色んな事が立て続けに起きて、混乱してるのかも」

「ショックのあまり記憶を都合良く改竄したって言いたいのか？ 私はそんなにヤワじゃないから」

「……すみません。差し出た事を」

しゅんとした外村を、夏蓮が真っ直ぐに見上げた。

「いいのよ。心配してくれてるのはわかってる。ありがとう」

微笑むでもなく、自明のこととして言い切った夏蓮の眼差しを受け、外村は感極まったように目を潤ませる。

(煌月カレンに心酔する者が、またひとり……)

こんなに簡単に懐柔されてしまって、新米とはいえ刑事として大丈夫なのだろうかと五島は内心訝った。が、今はむしろ都合がいい。

「わからないのが、アドラメレクだかその手先だかが、陽に何をしたのかってこと。陽は『騙された、呪われた』って言ってた。私には『力を与える』って言った。『チカラ』って、何？」

「力の正体、か………実は、この資料と動画を見て最初に浮かんだのが、『エナジーヴァンパイア』って言葉だった」

明らかに初耳です、という夏蓮の表情を見て簡単に説明する。

「かいつまんで言えば、無意識に或いは意図して他者のエネルギーを吸収し、代わりにマイナスエネルギーを注入する者。相手は嫌な気持ちになったり疲れを感じたりして、病気や怪我をしやすくなると言われている」

「迷惑ね。妖怪か何かなの？」

「いや、普通の人間だ。ただ、そういう性質の人間は割といる。ああ、心配ない。夏蓮みたいな強い人間は、無意識のうちに跳ね返しているものだから」

夏蓮の背後で、外村はブツブツ呟きながら手帳にメモを取っている。

「彼が『自分のせいで周囲を不幸にした』と言っていたのでそう思ったんだが……アドラメレクが実在するのであれば、それとは別の物だな」

外村が手帳に大きくバツ印を書き込んだ。

「別の、似た何か………これはもちろん、推測だが」

「聞かせて。どんな可能性でもいい。陽に何が起きたのか、突き止めたいの」

「彼は……大月陽は、人好きのする性格だったろう。自分から働きかけることは少ないが、いつも周囲の人間に好かれていた」

そんな彼を、心底憎んだ俺以外は……いや。そんな自分でさえも、どこか憎めないと感じてしまう何かは彼にはあった。

頷く夏蓮と目を合わせられず、五島は一瞬瞼を伏せた。

「力とは、彼のそんな性質を助長するものかもしれない……元々持つ性質を利用しパワーアップさせる。人々の好意を吸収し、彼の望みを叶えるためだけにそれを注ぐ……」

夏蓮はきつく目を瞑った。

あの痣に頻繁に触れ、同じ場所に、ふたりの象徴であるモチーフのネックレスを掲げ……
今もその場所にあるペンダントを、服越しに握りしめる。

私が陽に惹かれたのは、あの痣のせいじゃない。悪魔の力に引き寄せられたんじゃない。
私は自分から、陽自身を好きになったの。

「だが、全ては推測に過ぎない。たとえアドラメレクとやらが実在したとしても、呪いやら力やらを立証することは不可能だ」

断定的なその口調に、夏蓮は物思いから引き戻された。顔を上げ大きく頷くと、五島の目を見据える。

「実はね、今の時点で陽を批判する声も少なくないの。逃げただけじゃないかって。辛い事から逃げる言い訳にあんな人騒がせな動画まで作って自分を正当化したんだ、って。冗談じゃないわよ。陽は絶対に、私を置いて逃げたりしない」

夏蓮は車椅子の上で身じろぎし、五島のベッドに向けて身を乗り出した。

「私、陽のしたかった事を引き継ごうと思う。ごーちゃんの言う通り、確かに立証なんて出来ない。でもね、私は、アドラメレクを追い詰める。ねえごーちゃん、手伝って」

五島「変質者どころか悪魔に先制攻撃するとは……危ないところだった……」

夏蓮「先手必勝、攻撃は最大の防御よ」

五島「いや、危険すぎる。今聞いても動悸が……どうか頼むから」

夏蓮「.....わかってるわよ。もうしません！」

「ねえごーちゃん、手伝って」

「だが……」

「私、陽の残してくれたインスピレーション、不死鳥を踊る。絶対に素晴らしい舞台にしてみせる。でも、もちろんリハビリもトレーニングも死ぬ気でやるけど、どうしても時間がかかる。だからその合間にね、アドラメレクの事を世間に発表していくの」

「発表？」

「そう。いま、渡辺君が……あの、探偵事務所でバイトしてるって子ね。あの子が色々調べまわって、その情報をネット上に流してる。私の体験やごーちゃんの分析もそれに役立つと思うの。たくさん情報が集まればそれを見る人も増えて、より広く知らせる事ができる。被害者を減らせる」

五島の返事を待たず、夏蓮は意気込んで畳み掛ける。

「アドラメレクが実在する事をわからせれば、逃避なんかじゃないって反論できるわ。陽はどう思われてもいいって言ってたけど、私は嫌。陽を卑怯者呼ばわりするなんて、許さない。絶対に陽の名誉を回復させる。でなきゃ私、不死鳥を踊れない」

「しかし……」

「何？」

反論は許さないとばかりに、夏蓮は燃えるような強い眼差しで五島を見つめてくる。まるで、既に火の鳥を心の中に宿しているみたいだ。

「……俺は罪を犯した。お前の側に居る資格のない人間だ」

「資格？」

「結果として罪に問われなかったとしても、俺が殺意を持って刃を向け、それを阻止しようとした木暮さんに危害を加えたという事実は消えない。もし俺があんなことをしなければ、彼は死なずに済んだかもしれないんだ。俺は、自分の犯した罪を償う」

「そうね。木暮さんは……そして木暮さんが死ななければ、もしかしたら陽も、生きてたかもし

れない」

夏蓮は一切目を逸らさなかった。

彼女はきっと、その可能性を何度も何度も思い描いては打ち消してきのだろう。その思いに、心が動じなくなるまで……

いたたまれない思いで目を逸らした五島に言い聞かせるように、夏蓮は言った。

「でもね。あなたがあんなことをしたのは、私のせいよ」

「違う！……夏蓮。それは、違う」

「違わない。私があなただけを追いつめた。自分の不幸にどっぷり浸かって泣き喚いて、拳句に……」

五島の否定を跳ね返し、夏蓮は唇を噛み締めた。

「全部、私が弱かったから。陽を拒絶して傷つけて、ごーちゃんに甘えて迷惑かけて、家族にも八つ当たりして」

「あの時お前は混乱していた。あの状況なら誰だって」

「誰だって？ それは違うわ。私は、煌月カレンだもの」

その言葉に手繰り寄せられるように、五島は茫然と夏蓮を見つめた。視線が結び合い、真っ暗な胸の中に夥しい光が流れ込む。

神々しいほどの光はあまりに眩しく、五島は思わず目を細めた。

「周囲の期待に応えたんじゃない。かくあるべきと押し付けられたんじゃない。私は自分で選んだの。私たちが一緒に作り上げた、煌月カレンという存在であることを」

堂々と言い切った夏蓮は今や、本物の女神の様だった。彼女の背後に射す窓からの光が、後光にさえ見える。

いや、この光は……彼女自身が放つ、光のフレアだ。

「そこから踏み外してしまったのは、私の弱さのせいよ。だからね、カズ。私は、強くなる。前よりももっと、うんと強くなるから。ふたりで一緒に、償うの」

光に、飲み込まれていく。身体中に染み渡るこの光に全てを委ねてしまえたら、どんなにか……
…でも。

「無理だ。それは出来ない。君は何も」

「陽を知ってる貴方なら、あの動画を見たなら、わかるでしょう？」

五島の言葉を、またも夏蓮は遮り、続けた。

「私達が自分を責めることを、陽は望まない。だから私、陽の遺志を引き継ごうと思った。陽と優馬さんが必死で探し当てたあの悪魔に一泡吹かせて……ううん。とっちめてやる。償いになるかどうか分からないけど、私は私に出来ることをしたいの」

何故か外村が泣いていた。

ポロポロと涙を流し下唇を噛み締め、嗚咽を堪えている。

「俺っ、俺もお手伝いします！何か出来ることがあれば」

「それはまずいでしょ、立場上。でも気持ちは嬉しい。ありがとう」

夏蓮の慈悲深い微笑みに、外村は「そっか……」と呟き涙を啜った。

「で？ カズ、あなたは？ やるの？ やらないの？」

「……俺は、彼を殺そうとした男なんだぞ」

「ああもう！ 煩いわね！ 何回言うのよ！」

チョイ役ですが、外村がわりと好きです。おバカわいい……

数秒前までの慈悲深い微笑みは何処へやら、夏蓮はじれったそうに手を振り声を張り上げる。

「そうよ赦さないわよ！怒ってるわよ！でも私にも責任があると思ってる！同じことを何度言わせるのよ！悪かったと思ってるならね、四の五の言わずに手伝いなさい！」

夏蓮の激変に驚愕し凍りついたように固まっている外村に構わず、夏蓮は尚も言い募った。

「私だってわかってるの！アドラメレクが存在を広めることが贖罪になるなんて、他人から見たら馬鹿げてる。でも、陽が文字どおり命がけでやったことを、無駄にしたいくないのよ。それに...
...葉さんだって、悲しみのぶつけどころが出来るでしょう？」

「ああ.....」

五島は打ちのめされた思いで、額に手を当てた。

自分と大月陽のことだけでなく、木暮葉のことまで考えている。

それで彼女が喜ぶかどうかはともかく、残されたものがその悲しみをどう扱うのか、精一杯考えている。

俺が自分の罪ばかりに拘っている間に。

全く.....このひとには、敵わない。

「葉さんが言ったの。まだ実感が湧かないって。私もその気持ちがわかる。自業自得とはいえ、私はしばらく陽に会っていなかったから尚更.....怖いよ。それを実感するのが、怖い。それを受け入れることがどれほど辛いのか、想像するだけで怖い。だから、何かしたい。精一杯やったって思える、乗り越えられる何かが欲しいのよ」

愛する人を失ったことへの、実感。

直に言葉に出来ずに「それ」と言い表していることで、彼女がどれほど「それ」を恐れているかが、五島には痛いほどわかった。

なにせ五島自身、一時的とはいえ似たような経験をした身だ。

「とにかく。私はこれから、栞さんに会ってくる。優馬さんから何か聞いてないか、当時の様子はどうだったか聞いてくる。その間に貴方は、その資料とか私の経験談とかを書き込んで、情報を……要は、渡辺くんの援護射撃をしてちょうだい。ただし」

ヘマをしたら承知しないという殺気に近い気迫を込めて、夏蓮は命じた。

「陽があの老人と出会ったタイミングについては、絶対に悟られないで。いい？」

「タイミング……理由は？」

「報告書をよく読むと、渡辺くんの友人とのイザコザが切っ掛けになった可能性があるの。イザコザの内容までは書かれていないんだけど……とにかく、渡辺くんがそれを知ったら、そのお友達と仲違いするかもしれない。陽はきっと、それを望まない」

「……」

……そこまで配慮しているのか。

おそらく夏蓮は、動画と同様、何度も報告書を読み込んだのだろう。単なる思いつきや勢いだけで言っているのではないのだ。

「私がPCの操作とかタイピングが苦手なの、知ってるでしょ？ カズがやった方が断然早いし解りやすいんだから、頼んだわよ」

答えない五島に、当然のように仕事を割り振り、夏蓮は車椅子をドアへ向ける。

「ああ……一応あなたにも拒否権はあるから。まあ、考えてみて」

「一応、ですか……」

思わず零れた声は、五島ではなく外村のものだった。

「じゃあ、行ってくるわ」

「先方にアPOINTは取ったのか？」

ようやく発した五島の言葉に、夏蓮はぎくりと立ち止まる。

「……まだだったわ。だって、いま思い付いたんだもの。まあ、向かいながら電話するわよ。いいわよ、それぐらい自分で出来ますから！」

ほんの一瞬、しまったという表情をしたものの、夏蓮はすぐに復活し、車椅子を器用に操りベッドと椅子の間を縫って進んだ。

ドアを抜けようとした所で、不意に立ち止まる。

「ねえ、ごーちゃん？」

夏蓮にしては実に珍しく、口籠っている様子だ。

「……一度しか聞かないから、教えて。もし嫌だったら、何も言わなくていい」

「ああ」

……やはり、そうなるか。

五島は覚悟を決めた。

「……いつから？ その……私のこと……」

「……わからない。ただ、初舞台を見た時に、隣のお嬢ちゃんじゃなく、ひとりの人間として、尊敬した。初めて自覚したのは、ドイツで変質者に遭遇したと聞いた時だ」

出来るだけ正直に、言った。肝心の言葉を省いた言い回しではあったが、正直に打ち明けた。

夏蓮には、通じた筈だ。

「そう……」

五島の思った通り、夏蓮は頷いてくれた。

そして部屋を出て行く時、振り向かぬまま小さな声で言った。

「ずっと何も言わずにいてくれて、ありがとう」

たとえ心臓を刺し貫かれたとしても、これほどの痛みはないだろう。

夏蓮がそっと置いていった言葉に、内側から爆ぜたかと思うほど熱く大きく、五島の心臓がドクンと音を立てた。

言葉の意味をつかみ損ね、耳鳴りとともに思考回路が遮断され頭の中が真っ白になる。が、徐々に夏蓮の言葉が脳に染み込み遮断された回路が復活するにつれ、五島の全身の細胞が温かな何かに満たされていった。

報われた、と思った。

十数年にわたる時間が、想いが、報われた。

もとより夏蓮の心を得ようなどと思ったことは、一度も無かった。

だからこそ、自分の気持ちを知られた上でのこの一言が、どれほどの救いになることか。もし、今後二度と夏蓮に会えなくても、その声すら聞けなくなったとしても、もう何も、思い残すことは無い。

「俺、エレベーターまで見送ってきますね」

外村はそう言い置き、足音を忍ばせ部屋を出て、静かに扉を閉めた。

そんな彼の気遣いに気づく余裕もなく、五島は歯を食いしばり懸命に声を押し殺していた。引き結んだ震える唇と角張った顎の上を、熱い涙が伝って落ちた。

五島さん、一途だけど.....えっと、良かったね。なのかな？

「だからなんでうちに泊まる前提なんだよ、実家帰れよ。ってか宮内、君キャラ変わってない？」

戸惑った表情の部屋主の横をすり抜け、宮内はダウンジャケットを脱ぎながらズカズカと部屋に入り込んできた。

渡仏以前にも何度か訪れた、勝手知ったる部屋の隅に手早く荷物を置くと、勝手にクッションの上に陣取って足を伸ばし、早くも寛いでいる。

「実家には元旦だけ顔出すからさ。いいじゃん、泊めてよー」

足を伸ばすだけでは飽き足らず、宮内はそのままごろりと寝転んだ。

「あー、落ち着く～。やっぱ床生活はいい。家の中で靴履きっぱとかクソだわ。あ、あれか！大月陽の絵！」

寝転んだかと思うと飛び起きて机に取り付き、壁に凭せ掛けた絵に顔を近づける。

「……やっぱ凄いな」

渡辺に断りもなく額に手を伸ばすと、恭しく絵を手を取った。

「勝手に触るなよ。お前、前科あるだろ」

「だーいじょうぶ。絶対汚さないって」

絵の中の渡辺と目の前にいる仏頂面を、何度も見比べる。

「こんな顔のお前見たことないけどさ、なんか違和感無いもんな」

「大きなお世話」

宮内は両手で絵を掲げたまま腹這いに寝転がった。

「絵の説得力が凄まじい。全っ然、追いつけない。クッソ、俺に断りもなく死にやがって。勝ち

逃げかよ」

怒りを含んだ荒い足音が近づき、宮内の両手から絵をひったくった。

「お前、いい加減にしろよ。大体、大月さんは勝ち負けとか」

「わかってるよ」

空になった両手をじっと眺めたまま、宮内が小さな声で呟く。

「あいつは勝ち負けなんか拘らない。人の目とか評価なんか全然気にしない。自分の好きなように好きな絵を描いて、ヘラヘラ笑ってた。そういう奴だった。だから大嫌いだった……今だって嫌いだね。ムッカつく」

「そんなに嫌いなら」

「絶対追いついて、いつか追い抜かしてやろうと思ってたのに。参りました、って言わせてやろうと思ってたのによお。何なんだよ、クソが」

「……宮内、お前口悪くなったな」

久々に会った宮内秀人は、印象が随分変わっていた。どうやら髪を短くして多少痩せたというだけでは無いらしい。

取り上げた絵を元どおり立てかけると、渡辺も床に座ってローテーブルに肘をつき、寝そべっている宮内の背中を見下ろした。

「向こうで半年も暮らしたら、口も悪くなるって。あいつら二言目には罵ってばかりなんだ。いや、人種差別とかじゃなくてさ、なんか全方位に罵倒する感じ。口癖みたいなもんなんだろうな」

「へえ。罵詈雑言が伝染ったんだ」

「かもな。おまけにみんなかなり凶々しいっていうか、自分勝手だしさ。おかげで俺も凶太くなった」

「そうらしいね。かなり馴染んだみたいだ」

渡辺の皮肉に、宮内が顔だけこちらへ振り返る。

「そういうお前も、雰囲気ちょっと変わったな」

「……かもね」

ふいに体を転がして頬杖をつき、宮内は渡辺をじっと見つめた。

「……なんだよ。ジロジロ見んなよ、気色悪い」

「いや、俺だったらどう描くかなって思ってさ」

「大月さんみたいなこと言うなよ」

「……冗談だよ」

元の腹這いに戻ると、宮内は大きく伸びをした。

「普通に日本語が通じるっていいなー、とか思って」

「如何にも ”おフランス帰り” って感じだね」

笑いを含んだ渡辺の言葉に、宮内がフランス語と思しき聞き慣れない言葉を返す。

「え、なんて？」

「腹減った。メシ食わせろ。米のメシと鍋が食いたい。魚介の出汁は偉大なり」

渡辺は思わず吹き出してしまい、口元を拭った。

「わかったよ。買い出し行こう」

「鳥鍋でもいいけど」

ピロちゃんの籠を指差した宮内に、渡辺は冷たく言い放った。

「ピロちゃんに手エ出したら、お前を鍋で煮てベランダから投げ捨てるから」

「いや、せっかく煮たなら捨てる前にせめて食えよ」

「やだよ。腹壊したくない」

時は過ぎて、年末です。

鶏肉と魚介の寄せ鍋、締め味噌煮込みうどんからの卵入り雑炊まで平らげ、宮内は苦しそうに横たわっている。

「腹が……千切れる……」

「だから言っただろ、食べ過ぎだって」

「美味かったから……」

ゲフ、と下品な音をたてた宮内は、苦しげなのに幸せそうに見えるという不思議な表情を浮かべている。

膨大な量の夕飯をあらかた食べられてしまったので、渡辺は仕方なく、冷凍してあったアップルパイをレンジにかけた。

「俺、それいらない。もう食えない……」

「やらないよ」

甘い香りが漂ってくる。いつもの店の、いつものアップルパイ。
優馬さんの言いつけで大月さんが買ってきてくれた、アップルパイ。

この香りを嗅ぐ度、思い出して鼻の奥がツンとする。

「あのさ、宮内。少し休んだら、腹ごなしに散歩行かない？」

「おお、それいいな。俺、行きたいところあんだけど」

「どこ？」

「大月陽のスタジオ」

レンジに伸ばしかけていた手が、止まった。

「俺も、そこ行こうと思ってた」

「前に見たのも、ちょうど今ぐらいの季節だった。まだ覚えてるよ。店のシャッターに描いた、湖に雪が降ってる絵。今もあんのかな」

「あるよ。この前、俺が照明付け替えたんだ」

例の放送から、3ヶ月あまり。

スタジオの中の絵は全て高値で売却され、書きかけだった絵は藤枝の画廊に移され保管されていた。ほぼ空っぽになってしまった建物は、元々の持ち主である天本夫妻が戻ってくるのを待っている。

渡辺は時々シャッターの絵を見に行き、汚れていれば水をかけて洗い、季節が変われば照明の色セロファンを自作し取り替えていた。

「まじで？ お前ら相当仲良かったんだな。まあ、俺も部屋にお邪魔して絵見たけどな」

口が悪くなったとはいえ、「お邪魔する」などと言うあたりには本来の育ちの良さが垣間見える。

「俺だって見せてもらったことあるよ。部屋だって上がった。マネージャーの木暮さんとか恋人のカレンさんとだって」

「わーかったよ。悪かったよ、変な自慢して。それより、他の絵も見たい。いくつか買ったんだよな？」

レンジのアラームが鳴り、少し焦げてしまったアップルパイを取り出す。

熱くなった皿を一旦棚に乗せると、渡辺は部屋に戻り、ごそごとクローゼットを探った。日当たりの良い部屋なので、絵が日焼けするのを恐れて普段はしまい込んであるのだ。

寝転がっている宮内の横に、作品を並べる。

お土産の紙袋に描かれた妖怪甘党ジジイの落書きまで、丁寧に保管されていた。

初めこそ寝転んだまま片肘をついて絵を眺めていた宮内だったが、渡辺がアップルパイの皿を持って戻って来た時には、胡座で絵を見つめていた。

「なあ、これ……」

宮内が見つめているのは、裏面に「渡辺博己宅」と書かれた紙だった。
スケッチブックから破り取られた紙が、クリアファイルに納められている。

「この飛行機から出てる顔、俺？」

「うん。海外からの友情出演だって」

「やべえ。ってかアイツ、何無断で描いてくれちゃってんのよ。あ？違うよ、迷惑とかじゃなくて。肖像権っつーの？ あんじゃん？」

渡辺は焦りながら、大月陽がこの部屋を訪れてその絵を描くに至った経緯を話した。
肖像権云々は冗談で言ったことだったが、黙って話を聞くうち、宮内の顔には少し不服そうな表情が現れていた。

「あのさあ、俺、お前のこと、ふつーに友達だと思ってたんだけど。何気に今、傷ついてんだけど」

「え、なに？」

節の目立つ手で膝頭をつかみ、宮内はわずかに身を乗り出した。

「なに、じゃねえよ。お前こそ何なの？ 友達でもない奴に、わざわざ国際便で漢和辞典と命名辞典送ってくんのかよ。餅だの煎餅だの蕎麦だのと食料品まで詰め合わせてさ。高え送料払ってまでさ」

「いや、だって……向こうでの漢字アートが受けてるって言ってたから。食べ物、その……ついでだよ。懐かしいかと思って」

「だからさあ、そういうのが……あ、そうだ。俺も土産あったんだ」

顔をしかめていた宮内だったが、ふと思い出した様に部屋の隅まで這って行き、スーツケースに手を突っ込んでくしゃくしゃのビニール袋を引っ張り出す。

「ん。金ないから、そんないモンじゃないけど」

ビニール袋を渡辺に突きつけると、宮内は元の位置に座り直した。

「あ、ありがとう……」

エッフェル塔と凱旋門のミニチュア、悪ふざけしたモナリザもどきTシャツ、地図柄のメモ帳、謎のキャラクターがプリントされた大判のエコバッグ……

「俺はあ、友達でもない奴に土産とか買わないから。っつーか、向こうの奴らにはお前のことツレとか言ってるから。ざけんな、マジで」

宮内の口調から本気で機嫌を損ねた様子が窺え、渡辺は妙に萎縮してしまう。

「うん……あの、ごめん」

「ま、いいや。メシ作ってもらったし、暫く泊まるし。許す」

「しばらくって……」

「あゝ？」

「あ、いや、別にいいけど。でもさ」

「なに」

許すと言った割には不服げな目つきで睨む宮内に、渡辺は恐る恐る切り出した。

「面倒くさくない？俺みたいの……その、さっき言ったことだけど、前に同じようなこと話したら、距離置かれたり、変な噂流した奴も居たから」

「あー、人を好きになれないだのなんだのって？まあ、めんどくさいな。確かに。でも俺には関係無いし」

「え？」

「お前の悩みと、俺らがダチなのは関係なくねえ？お前の悩みはお前が解決しろよ。俺も、俺の悩みは自分で解決するし。まあでも、漢和辞典送ってもらった恩があるからな。愚痴くらいなら聞いてやるよ」

「……ありがとう」

「気が向いた時だけな」

「……うん」

それで、充分だ。

この距離感。突き放すけれど見離しはしないという感じが、ホッとする。

「んじゃ、そろそろ散歩行こうぜ」

「うん」

苦しげに息を吐きながら立ち上がった宮内が、そろそろとコートに腕を通す。

「うー、ゆっくり動かないと口から色々出そう」

「やめて。マジで」

「つーかお前、月イチかそれ以上にメールしてきてたくせに、友達と思ってなかったとかさあ」

「だから、ごめんって」

「大月陽の絵買ったとか喋ったとか、散々自慢してきてたくせに」

「ごめんってば！」

「どんだけだよ。大体、『今日から僕たちおトモダチね！』とか言うかよ。ガキじゃあるまいし」

「もー、謝ったじゃん。しつこいなあ……」

「あ、そういう態度ね。わかった。俺はこの先何年もからかうわ。決定だわ」

「へー、じゃあ泊めない。このまま叩き出そっかな～」

「……嘘。嘘です。ツレないこと言うなって。トモダチだろ？」

「……しょうがないなあ」

玄関の鍵を閉めて振り向くと、宮内は既に歩き出していた。

年末の夜の空気が頬を刺す。ひやりとした空気に思わずため息をつくとき、口から白い煙の塊が立ち上る。

月明かりを受けてのんびりと歩いている宮内の背中を眺めながら、渡辺はまた、大月陽の言葉を思い出していた。

『上辺だけでも、やってたことは友達付き合いには違いないじゃん？』

大月さんが言ったのって、こういうことなのかな……

宮内くん、ちゃんとお友達でした。よかった。

年の瀬も近づく慌ただしい雰囲気の中、その男性がおずおずと尋ねたのは、懐かしい名前だった。

「あの、すみません。こちらに、清水恵流さんて方、いらっしゃいますか？」

ホームセンというホームセンターの出入り口に近い、ペットショップコーナー。爬虫類のガラスケースを拭いていたアヤに声をかけたのは、必然だったろう。

生前、こちらへ帰ってきたばかりの恵流が公園に通い始めた頃。アイスクリーム屋でアルバイトをしていた彼は、遠くから大月陽を見つめる彼女と出会ったのだという。

想い人とめでたく交際が始まったと報告を受けたのも束の間、いつからか彼らの姿を見なくなった。彼自身もアイスクリーム屋のバイトから正社員に昇格し、現在の仕事に変わった為、その後会うこともなかったらしい。

現在は大型店舗の店先に出す露店のフランチャイズ営業をしており、恵流に以前聞いていたこの店を偶然見つけ立ち寄ったのだと、その男は説明した。

「もしかして……公園の、池の向こうのアイスクリーム屋さん？」

「そう！ そうです」

「恵流は……清水恵流は、亡くなりました」

ホームセンターの遅番シフトを終えたアヤは、店の外の駐車場でその男と落ち合った。恵流とよく休憩していた、自動販売機の近くだ。

改めて自己紹介をしあった二人は、感慨深く互いを見つめ合った。

「まさか、話に聞いていた師匠さんと、こんな形でお会い出来るなんて……」

「僕の方こそ、『お弁当作戦』のアヤ教官とお話し出来るとは」

二人は目を合わせたまま吹き出した。

ほんの少しの間クスクス笑いあったが、すぐにしんみりした気持ちになって俯いてしまう。

「恵流さんもあの青年も……」

「ええ」

「残念です」

なんとなく気詰まりになってしまい、アヤはともかく駐車場の出口へと歩き出した。元師匠も黙って付いてくる。

「……恵流はともかく、大月くんの件はかなり話題になったんですよ」

「そうみたいですね。僕、普段テレビも見ないし、ネットもしばらく見てなかったんで、全然知らなくて。さっき待っている間に検索して、すごく驚きました。色んな意味で」

「ええ。ショッキングな話でしたから。私も受け入れるのに時間がかかりました」

「……お察しします」

元師匠の目礼に、アヤも応える。

「確かにショッキングな事件です。でも……それも驚いたんですが」

「？」

「大月さんとよく一緒に居た、木暮さん？ あの、背の高い男性なんですが」

「あ、ええ。私も一度だけお会いしました。とても感じのいい方で」

「あの方、知ってると思うんです。奥様は看護師さんでは？」

「ええ、恵流からはそう聞いてます」

「お恥ずかしい話ですが、何年も前……実は僕、病院の屋上から飛び降りを図ったことがあります」

十 十 十

暖房の効いた温かな個室は、こじんまりとして落ち着く空間だった。

今日出会ったばかりの二人は小さなテーブルに向かい合って座り、お通しを突つきながらちびちびとビールを舐めている。

「で、プロポーズに巻き込まれてしまって」

「あははは」

テーブルに突っ伏すようにしてアヤは笑い、人差し指で目尻の涙を拭いた。

「笑っちゃっていいのかわからないけど、面白い。こんなに笑ったの、久々だわ」

「いえ、笑ってもらえて嬉しいです」

ウケて気を良くしたのか、男は少し身を乗り出し気を持たせるように声を低くした。

「その後しばらくしてバイト始めたのが、あのアイスクリーム屋だったんです。しかも……あの二人、お客として僕の店に来て、何度かアイス買って行ったんですよ」

「ええ！すごい偶然」

「そうなんです。びっくりでしょ」

思い通りの反応に満足そうに頷くと、男は嬉しげに笑った。

「まあ、距離的にはその病院とも遠くないし不思議じゃないかもしれないけど。でもやっぱり驚きました」

「ですよ。で、お二人はなんて？」

男は上唇についた泡を手の甲で拭きながら、緩く首を振った。

「二人は僕に気づきませんでした。だいぶ外見が変わってましたからね。昔は引きこもり生活でぶくぶく太ってたんですが、働き始めてからすぐに痩せたし、髪を切って日焼けもしたし。僕の方も、驚いてしまって声をかけられずに」

「あら。声をかけたら喜んだでしょうね」

「ええ。一応お礼の手紙は出したんですけど、その事には触れずじまいでした」

「じゃああの頃、あの公園には運命的な出会いがひしめいてたのね」

「そうですね……もしかしたら、この出会いの種も」

「ええ……え？」

「いえ、いやあの、えっと……すみません。僕、このことを人に話したの初めてで、なんだか浮かれてしまって。不謹慎でした」

「いえ、そんな……」

律儀に頭を下げる男にアヤは慌てて首を振ったが、なんと言っているかわからず口籠ってしまう。出会いの種云々という発言も気になるころではあったが、そもそも自分も話を聞いて大笑いしていたわけで、謝られて却って慌ててしまったのだ。

男は顔を上げ、空気を変えるように明るい声を出した。

「そうだ、食事したら、例のシャッターを見に連れて行ってもらえませんか？ 僕、彼の絵を見た事が無いんです。さっきネットでちらっと見たぐらいで」

「え、ああ、はい」

「案内してもらえたら嬉しいんですけど。その、もしお時間あれば」

「あ、はい。大丈夫です。時間なら売るほどありますし」

店員が注文の品を運んできて、会話は中断された。

湯気の立つ美味しそうなメニューが数品並べられる間、ふたりはその仕事を静かに見守りながら、くすぐったいような数十秒をやり過ごした。

店員が出て行くや否や、男は恐縮した様子でまた頭を下げる。

「図々しいお願いをしましてすみません」

「いえ、とんでもない」

アヤは、気にしないでという風に笑って見せた。

「今の季節ならきっと、雪が降ってる筈です。素敵な絵ですよ」

「楽しみです」

「それに私も、もう少し師匠とお話しがしたいです。今まで恵流の事、話せる相手がいなかったから……」

「僕も聞きたいです。でもその、師匠っていうのはちょっと……恥ずかしいかな」

「あ……」

はにかむように笑ったアヤにつられ、男も声を上げて笑った。

"プロポーズに巻き込まれる" って、なかなか聞きませんよね……もちろん、言う機会も。

渡辺はいつもの特等席で、道路にしゃがみ込んで絵を見上げていた。

隣では宮内が、腹が苦しくてしゃがめないとって道路に足を投げ出し地べたに座り込んでいる。

「うー、ケツが冷える」

「もう帰る？」

「まだ。まだ見てたい」

絵から視線を外さぬまま後ろに手を付き、宮内は懐かしむように目を細めた。

「アイツさ、俺にそこの自販機のウーロン茶奢らせてさあ」

「うん？」

少し先に設置してある自販機の方へ顎を降り、話を続ける。

「謝りに行った時の話。それで絵を踏んだ事チャラにするとか言いやがって。どこのイケメンだよ、って」

「あはは。さすが大月さん。カッコイイ」

「だろ？でも俺、後からすっげームカついて。どんどんどんムカついて仕方なくてさ」

「なんで？イケメンすぎて？」

「ちげーよ。いや、それも無くは無いけど、そうじゃなくて。親の金で美大通って親の顔色伺って、周りからの期待とかやっかみとか色々浴びて萎縮してさ。毎日イライラビクビクして、絵がどんどん嫌いになってた時に、大月陽の絵を見てさ。で、すげーじゃん？しかもあいつ、描いてるときも絵の話するときもメチャクチャ楽しそうさあ」

「ああ、わかる。あの人、ほんと楽しそうに描くんだよね」

ピロちゃんを描いていた顔を思い出す。

特に笑顔を浮かべているわけではないのに、不思議と楽しんでいるのが伝わって来たものだ。絵を描いている彼の姿を、ずっと見ていたいと願ってしまうほどに。

大月陽が描いているところを目の当たりにしたのは、ピロちゃんの時を含めて数えるほどだった。今思うと、それはとても特別で、濃密な時間だった。

「……で、拳句にイケメン対応されて、ムカついたんだ」

「そ。俺、何やってんだろうって思ったらもう、悔しくて。それでフランス行くって決めたんだ。別にフランスじゃなくたって、どこだって良かったんだけど」

「そうなんだ」

「結局さ、大月陽のせいで人生変わったんだよな」

「そっか……」

「お前もだろ？」

「うん。そうだね。俺ら、まだ二十歳そこそこだけどさ、転機になったんだらうなって思う」

「な。すげえよ。腹たつけど。それで結局、向こうでも助けられてさ。あームカつく」

しばし、渡辺は思案した。

うん。駄目元で言ってみようか。

「……あのさ、宮内。それ、喋ってまない？」

「は？」

「俺、取材受けることになってるんだ。大月陽さんを取材してた記者さんが、彼の生涯を記事にしたいって。写真も大量にあるから、ゆくゆくはそれを本にまとめたいんだって」

「いいけど。お前が勝手に決めちゃっていいのか？」

「たぶん大丈夫だと思う。木暮さんの家族とか大月さんの恩師、他の人にも色々取材するらしいから」

「ふうん。ま、親友の頼みだから？ 引き受けてもいいけど？」

「え、なんかランクアップしてる」

「こっちにいる間は、どうせ暇だしな。なんか面白そうだし」

絵を眺めていた宮内が、突然首をぐるりと回し顔を向けた。

「そういやお前、あれ。アドラメレク関連でめっちゃ書き込みしてんの、お前だろ」

「あ、わかる？」

「文章がまんまお前じゃん。信者呼ばわりされてるみたいだけどさ、取材に答えたりしたら身バレすんじゃない？」

「いいよ、別に。大月さんと出会ったことは俺の財産だから、隠す必要なんて無い。身バレ上等、なんてね」

「いや、それはさすがに……」

「一応個人情報伏せるけど。でも、バレても別にいいんだ」

「なんでそこまで？」

宮内は上半身を起こして足を組み、胡座をかいた膝を手で擦った。

「恩返しかな。大月さんの絵で、俺はすごく救われたから。だから、大月さんが命賭けてまでやったこと、引き継ぎたいんだ。今も少しずつだけど、アドラメレクに関する情報が世界中から集まってきてる。もしかしたら、その正体を突き止められるかもしれない。それが無理でも、こういう奴に気をつけろ、容易に手に入る力なんて信じるなって、伝えられる」

「なるほどな……あ、俺が取材で話すのは、別に恩返しとかじゃないから」

「……わかってるって。親友の頼みだから、だろ？」

含み笑いをこらえながら、渡辺は賛同してみせる。

まあな、と呟き、宮内は引き寄せられる様に再び絵に向き直った。

「……なあ、もしお前がそいつに会ったら、どうする？」

ぼんやりと絵を眺めながら尋ねた宮内の声は少し心もとな気で、渡辺の気を引いた。

「ダッシュで逃げるよ。でもその前に、そうだな……おととい来やがれ、って言ってやる」

宮内は、フッと短く笑う。

「……甘いな。くたばれ糞ジジイぐらい言ってやれよ」

「あはは。罵詈雑言は宮内には敵わないね」

「こんな順序の口だ」

さり気なく様子を窺いながら、渡辺は念を押すように言った。

「お前も、逃げろよ？ 宮内」

「.....当たり前だ」

口を曲げ不機嫌に嗤う宮内を見て、何故か安心する。
大丈夫。俺もこいつも、奴の罠には嵌らない。絶対に。

駅の方からカップルが近づいてきて、渡辺たちから少し離れた場所で立ち止まった。夜気に鼻先を赤く染め、小さな声で話しながら熱心にシャッター絵を見つめている。

渡辺は宮内を目で促し、立ち上がった。

「あの、絵を見にいらしたんですか？」

「あ、はい」

「それなら、ここがベストポジションですよ。こう、しゃがんで低い位置から見上げるんです。ええ、どうぞ。僕等はもう、充分見ましたから」

宮内も立ち上がり、場所を譲った。

宮内くん、ご飯食べ過ぎた後にお尻冷やしたら、お腹壊しますよ.....

「もう充分見ましたから、か……」

礼を言うカップルに軽く会釈し、宮内はふらりと歩き出した。

「ねえ、駅と反対方向だよ」

追ってくる渡辺に構わず無言で進み、例の自動販売機の前で止まると、ウーロン茶を2本購入した。

黙ったまま、片方を渡辺に差し出す。
察した渡辺もまた、それを黙って受け取った。

プルタブが音を立て、ほのかな湯気が白く昇る。

熱い液体をゆっくりと一口啜り、宮内が天へ昇る湯気を目で追った。

「あいつ、猫舌だったな」
「……そうだったね。甘いものも苦手で」

宮内に倣い、渡辺も空を見上げた。

真冬の夜空は暗く澄み渡り、たくさんの星を煌めかせている。
小さな銀色の月にかかった薄い雲が、ゆっくりと過ぎ去っていく。
自販機の明かりに照らされた街路樹が、かすかに枝を揺らす音が聞こえた。

宮内は、いつの間にかかつて陽がやっていた様に缶を両手で転がして手を温めている自分に気づき、俯いて小さく笑った。

「俺、あいつの背中を追っかけるの、やめる。お前の言う通り、もう充分見た」
「え？」

「なんでもない。ただ、俺は大月陽みたいには描けないし、親父の望む絵も描けないってわかった。改めてあの絵を見て、痛感した。おかげで吹っ切れたわ」

「そうだけどさ……大月さんだって、お前にはなれなかったと思うよ？」

その言葉に、宮内はさも意外そうに渡辺の顔を覗き込んだ。

「………なにお前、もしかして案外いいやつ？」

「案外って、何か酷くない？」

熱い缶を持った手の甲で口元を擦り、渡辺は受け流すように笑った。

「……まあ、俺がいいやつだとしたらさ、それは大月さんと木暮さんのおかげだよ。他人に好意や興味を持つことが出来たっていうか……興味どころか、あのふたりの関係性は俺の憧れだった。そんな風に思うの、初めてだった。それに、彼らの絵は俺の気持ちを少し、楽にしてくれた」

「ふうん。よくわかんないけど、良かったな」

「うん。他人に期待してもしなくてもいいし、色んなことは、わりとどうでもいいんだよ」

「……お前、何言ってんの？ ウーロン茶で酔っ払ったか？」

先ほどより深刻な表情で心配そうに覗き込む宮内に構わず、渡辺は尚も言い募る。

「だからさ、宮内は宮内でいいし宮内じゃなくてもいいってこと！俺も宮内も、変わっても変わらなくてもいいんだ。どっちでも」

「おお………そうか」

気圧されて、宮内は意味も分からぬまま曖昧に頷いた。

「そう。自分の好きにすればいい。どっちにしてもね、そんなの関係なく、世界は美しいらしいから」

「おあ？ ……お前、マジで大丈夫か？ まさか、ショックで」

月の光を受けて渡辺の頬が濡れているのに気づき、宮内は口を噤んだ。

「大月さんがそう言った。だから多分、そうなんだと思うんだ。今はまだわかんないけど、俺はそう、思おうと………思ってみようと、思うんだ」

両手で缶を握りしめ、渡辺は音もなくぽろぽろと涙をこぼしている。
宮内は慌ててポケットを探したが、生憎財布と携帯しか入っていなかった。

「悪い、俺ハンカチ持ってない」

「……だいじょうぶ」

袖口でゴシゴシと顔を擦り苦笑いを漏らした渡辺の肩に腕を回し、宮内は力を込めた。ゆっくりとガードレールまで誘導して座らせ、自らも隣に腰掛ける。

「……意味は全くわかんないけどさ。美しいか汚いかだったら、そりゃ綺麗な方がいいよな、うん」

本当に全く伝わっていないらしいが、宮内が精一杯気遣ってくれているのはよくわかったので、渡辺は涙を啜りつつ黙って頷いた。

「せっかくだから、俺もそうしてみるかな。大月陽が………そう言うなら？」

ウン、と頷き、へへと笑った渡辺を見て、宮内は安心したようにウーロン茶を飲み干す。

「……寒いし、そろそろ帰ろうぜ。お前も早くそれ飲んじゃえよ」

駅へ向かおうとスタジオの前を通り過ぎた時、先程のカップルはまだ、シャッターの絵を見上げていた。

† † †

駅までの道を辿りながら、宮内は空を眺めて言った。

「あのさ、俺、正月明けまでこっちに……ってか、お前のうちに居るけどさ」

「え、俺んちに？ そんなに？」

「うん」

「わあ、即答。決定事項なんだ……」

「でさ、その後の冬休みの間、俺んどこ遊びに来れば？」

「……って、フランス？」

「そ。俺んち泊まればいいし。遊ぶトコは無いけど、なかなか面白いよ。おかしな連中ばっかで」

「……でも、ピロちゃんが居るしなあ」

「実家に預けるとか」

「うーん……」

「向こうの奴らもさ、大月陽の絵が好きなのが結構いるんだ。例の件で話題にもなったし。お前のこと、伝説の画家と知り合いだって紹介してやるよ」

「伝説の画家？」

「そうだろ。人間関係超絶冷めきってたお前が、それだけ慕うようになったんだし。もちろん絵も凄いけど……って当たり前か。絵に出てるんだよな、色々と」

「うん。俺と同じような人は、たくさんいると思う。彼や彼の絵に出会って、何かが変わったって人。身体的な影響どころじゃないよね、人生に影響与えちゃうんだもん。確かに、伝説の画家だ」

宮内は渡辺の肩を掴み力を込めながら、歩みも話もグイグイと押し進める。

「取材同行の話も聞かしてやろうぜ。フランス語？俺が通訳する。チケット代もこの時期ならそんなに」

「ってか、なんでそんなに……あ」

渡辺は足を止めた。

「宮内……もしかして、俺を慰めようと……？うちに来たのも、それで？」

「ちげーよ馬鹿、ただの帰省だって！ホラとっとと歩けよ！さみーんだよ」

即座に否定するその速さが、渡辺の言葉を裏付けてしまう。

宮内はそそくさと先に立ち、足早に歩きながら勝手に次々と言い訳を並べ立てた。

「正月くらいはやっぱな、顔出しとかなきゃじゃん？でも家に居ると親父がうるせーし。あとあれだよ、叔父さんとこの画廊の絵もさ、見せてもらおうかなとか思って。日本の土産も頼まれたし。文房具とか絵の道具とかさ、向こうでも評判いいから」

……ありがとう、なんて言ったら、宮内はきっと怒るだろうな。いや、怒ったふりか。

感謝の言葉は胸の内に留め、渡辺はぴょんぴょんと跳ねる様に宮内に追いつくと、言い訳を信じたふりで頷いてみせた。

「……そっか。じゃあ、ピロちゃんのこと、親に頼んでみるよ」

「おう」

住宅街を抜けると、遠くに高架線が見えた。電車の黄色い明かりの連なりが、音を立てて通り過ぎる。

「あのさ、さっき話した記者の人ね、本の表紙はあの絵にしたいんだって。書き始めは、もう決まってるんだよ」

「え、お前、そこまで知ってんの？」

「うん。取材の申し込みの時に、冒頭の文章だけ見せてくれたんだ。それ読んで、取材受けようって決めた。何度も読んだから憶えちゃった。大月さんと木暮さんが出会う元になった場所、あ

のシャッターの描写から始まるんだ」

渡辺は歩を弛めて目を伏せ、唄でも詠むかの様に語り出した。

先ず、月が在った。

星のない空にぽっかりと浮かぶその満月は……………

十 終 十

長いお話に最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。

ところどころ、変な汗をかいたりもしましたが、とても楽しく書けました。

また、私にとって初の閲覧数3千超えも果たし、嬉しく思います。

この物語はこれでおしまいなのですが、読んでくださった方からリクエストをいただきましたので、急遽、番外編として短いお話を書きました。

蛇足となるかもしれませんが、お題を聞いて、私も書きたくてウズウズしてしまったもので……えへ。

というわけで、次の更新から別章にて番外編です。

深い暗闇の中を、独り歩き続ける。

右も左も後も先も分からない、何も見えない、自分の掌さえ見えないような、漆黒の闇。

今はもう遠くなった光に背を向け、光から逃げるように進んでいくにつれ、闇は密度を増し重くのしかかりり、体の芯を冷やしていく。

身体の痛みは既に消えていたが、鼻を刺すような煙の匂いは鼻腔の奥にまだ残っていた。

罪の、臭い。

その臭いが、冷えきった身体を駆り立てる。

もっと。

もっと遠くへ。

進むたびに徐々に重くなる足を、無理に引き摺る。

己の罪を抱えて、さらに暗く深い場所へ。

凍えるほど寒く、この身を苛み罰してくれる場所へ……

もうどのくらい歩いたろうか。

大月陽がぼんやりと白い霧の中で目覚めてから、どのくらいの時間が経ったのか。

時間も距離も、分からない。

わかったとしても、ここでは大した意味もないのかもしれない。

わかっているのは、遠ざからなければならない、ということ。

光から、温もりから、赦しから、幸福から。

うんと遠いところへ。

何故なら、自分は酷い事をしたから。

大切な人たちを、不幸に陥れてしまった。彼らの幸福を、あまつさえ命をも、奪ってしまった。

故意ではなかった、知らなかった。

そんなこと、言い訳にはならない。

この罪と共に、悪魔の烙印を抱えたまま隠れるのだ。

誰にも見つからないところに。

これ以上誰にも、悪魔の力が及ばないように。

ずっと、歩き続けなければならない。

引き摺った足から血が流れても、足が千切れてしまったとしても、這ってでも、遠ざかり続けなければならない.....

.....っていうか。

これは、なんだ？

さっきから目の前をブンブン飛び回っている、か弱い光の……気配？

相変わらず真っ暗で何も見えないにも拘らず、光の気配としか言えない何かが付き纏っている。

その気配に気を取られ、大月陽の歩みがほんの少し、遅くなった。

すると、その気配は僅かに存在感を強めた。
つられるように、また少し、歩みが遅くなる。

何かが、記憶の隅で引っかかっている。

頭の中のどこかが、チカチカと柔らかな光を瞬かせる。

……これを、俺は知ってる。この光を。

頭の中に瞬いていた小さな光が、ぽうっと灯った。
清らかに白く、ほの暖かい、小さな灯。

これは、この気配は……

いや、そんな筈がない。
駄目だ。馬鹿な期待をするな。そんなこと、あってはならない。

彼女の、気配。

そう思った瞬間、目の前にふわりと現れた。

頭の中に灯った光が暗闇に浮かび、柔らかくこちらを照らしている。

この気配。やっぱり、よく知ってる……

(……恵流?)

目の前の光が大きく膨らみ、像を結んだ。

暗闇に慣れきっていた目が眩み、陽は思わずきつく目を瞑る。

背けた顔を恐々あげると、そこには。

ほのかに発光する半透明の姿で、清水恵流が微笑んでいた。

「やっと、気づいてくれた」

自分の目が、信じられなかった。

恵流が、こんな場所に居るわけない。

こんな、暗く寒い場所に。

罪人の身にこそふさわしい、こんな穢れた場所に。

「陽ったら、ものすごい勢いで反対方向に行っちゃうんだもん。いくら呼んでも気づかないし、目の前で手を振ってるのに全然見てくれない」

恵流は、ぷうっと頬を膨らませた。怒ったふりをするときの、お馴染みの表情だ。

「耳も目も、罪悪感で塞いじゃってたんだね。これじゃ、見えないのも当たり前。でも……」

可愛らしく優しい恵流の声が耳から流れ込み、陽の冷え切った体をじんわりと温める。

ほの白い光を纏わせたまま、恵流はふざけるように手を振り、笑った。

「気付いてくれて、良かった」

「……………めぐ、る……………」

呆然と立ち尽くしたまま、掠れた声でその名を呼んだ瞬間。恵流が両手を広げ飛びついてきた。

「陽！」

温かく柔らかな重みを受け、足元が軽くよろける。

陽は混乱しながらも、華奢な体に見合わないほど力強く抱きついていてる恵流を見下ろした。

「恵流、どうして……ここは」

胸に顔を埋めていた恵流が、抱きついたまま顔を上げる。

オロオロと見下ろしている陽と目が合い嬉しそうに笑ったその姿は、すでに半透明ではなく、しっかりとした実体と以前と変わらぬ甘い匂いを伴っていた。

「やっと名前を呼んでくれた。呼んでくれないと、スカスカのままなんだ。これで、陽に触れる」

「……恵流……ほんとに、恵流なのか？」

信じられない思いで、陽は瞬きすら出来ずに恵流を見つめた。

恵流は背中に回していた腕を離し、胸の真ん中で爪を喰い込ませたままの陽の右手をそっと包んだ。

目一杯背伸びをして顔を近づけ、冷たくなった陽の鼻先に自分の鼻をくっつけて、また笑った。

「本物の私だよ。正真正銘の、清水恵流さんです。ねえ、陽？ さっきからこの手、邪魔だよ」

恵流が手を下ろさせようとするのを、陽は咄嗟に後ずさりした。

「駄目だ。これに触っちゃ」

恵流は微笑んだまま、首を振った。

「もう、無いよ。痣なんて、消えちゃったんだよ。ほら、見てごらんよ」

「……え？」

陽は恐る恐る右手を開き、手を離れた。

恵流の言う通り、痣は跡形もなく消え、傷跡ひとつ残っていない。

「……………無い。俺の……罪の、烙印……………」

またも呆然と見下ろす開いた胸に、再び恵流が飛び込んだ。恵流の体温が、直に伝わる。

「罪なんて無いんだよ、陽」

痣のあった場所に唇を付け、恵流は心臓に直接語りかけるみたいに言った。
恵流の言葉が、身体中に響いて細胞を震わせ、温める。

「こんなに冷えちゃって。寒かったね、陽。無理して進んじゃって……………戻ろうね。私たちが居るべきところに、戻ろう」

ガチガチに強張っていた身体が、解けていく。
がんじがらめになっていた罪悪感の鎖が、ポロポロと落ちていく。

「恵流……………」

「うん。一緒に戻ろうね。でも、その前に」

恵流は再び陽を振り仰ぎ、悪戯っぽく笑った。

「ちょっと、抱っこ」

陽は自由になった両手で、恵流を強く抱きしめた。

おまけの物語、はじまりはじまり～

「陽、こっちだよ」

恵流に手を引かれ振り返ると、遠くに光の点が見えた。

導かれるまま重い足を引き摺り、歩き出す。ただし、さっきまでとは逆の方向へ。

「随分と進み辛かったですよね？ こっちは、来ちゃいけない方向だからだよ。陽は、こっちじゃないの。こっちへ来るべき人は、勝手にずるずる引っ張られちゃうんだから」

言いながら、恵流も闇を掻き分けるように、辛そうに歩を進める。

「こんなとこまで来て。陽ってば、無茶するよねえ」

「……ごめん」

本当に申し訳なさそうに小さな声で謝る陽の手を、恵流はしっかりと握りなおし、さらに腕を絡めた。

「まあまあ、もういいですよ。元の場所に近づけば、普通に歩けるようになるからね。もうちょっと頑張ろう」

「……うん」

息を切らしながら、光の点を目指し、ゆっくりと闇の中を進む。

「あのさ、恵流？」

「うん？」

「ここって……その」

「うん。俗に言う、死後の世界でございます」

「……だよな」

「うふふ。ちょっと意外でしょ」

笑い事じゃない気もするが、恵流の笑い声を聞くと心がじんわりと温まる。とても心地がいい。

「ほんとはね、三途の川とか狭間とか、あるんだよ？ 私、お出迎えに行く予定だったのに、陽はぜーんぶすっ飛ばして、一目散にここまで来ちゃったから」

「え？ どういうこと？」

歩きながら、恵流はこの世界のシステムをかいつまんで説明した。

人は死後、三途の川へやってくる。

（三途の川という場所は日本人特有のもので、国によって様々であるらしい）

川を渡った先が「狭間」と呼ばれる場所で、そこで最大49日を過ごす。狭間と生の世界は比較的簡単に行き来出来るが、49日を過ぎても生の世界に留まると、狭間には戻れなくなってしまふ。

狭間での滞在を終えると、人はそれぞれの場所に割り振られるのだ。

「最初に居た白い霧の向こうに、明るい道が見えたでしょ？ そっちへ進めば、すぐに川があったのに」

「……俺、明るいところへ行っちゃいけないと思ってたから……」

「それでもね、普通は行くべき方向に自然と足が進むんだよ。陽、精神力強すぎ。あと、走るの早すぎ」

恵流はそう言って軽く肩をぶつけ、また笑う。

「ごめん……俺、いつもいつも、恵流に助けられてばかりだ。そもそも、俺のせいでこんなことに」

「陽のせいじゃないよ」

「いや」

「うーん、じゃあ、陽のせいかもしれない。みんなに起きた不幸なことは、陽の痣のせいだったかもしれない。でもね、それは陽の責任ではないの。陽が償う必要なんて、無いんだよ」

「でも！俺があんな奴につけ込まれなければ……それに、その……」

「大事なのはね、陽は今、ここにいるってこと。暗い方へ引き摺られたんじゃないかなければ、赦されてるってことなの。誰が何を赦したのかは、私にもわからない。でも、ここに居ていいんだから。私たちと同じ側に居て、いいの」

「……恵流……」

「そんな声出さないの。陽、もし罪悪感が拭えないとかでまた暗いところに行くなら……私、また連れ戻しに行くからね。寒くて暗くて辛いけど、何度だって行くから。私に辛い思いをさせたくなかったら、もうあっちへ行かないで。いい？」

一瞬迷った様子を見せたものの、陽は黙って頷いた。でも、まだ耳を弄っている。

「あ、もしかして。カレンさんとの事、気にしてる？」

「……それも、あります」

ふふ、と声を潜め、恵流は小さく笑う。

「急に敬語」

「あ、うん。なんていうか……」

空いている方の手でしきりに耳たぶを引っ張っている陽がおかしくて、懐かしくて、恵流は繋いだ手をペチペチ叩いた。

「いいの。陽には必要な事だったから。大体、私の方から逃げ出したんだもん」

「でもそれは、元々あの痣の……」

「まだそれ言う気？陽、いい加減にして」

恵流は足を止め、陽の正面に立った。空いている方の手を取り、両手を結ぶ。

「痣の事に関しては、私には判断がつかない。だから、いくらそれを言われても困るよ。それからね」

陽の両手をしっかりと握りしめ、真っ直ぐに目を見つめた。

「カレンさんのことだって、真剣だったでしょう？ 大切な出会い、大切な人だったでしょ？ それなのに、私が陽を怒ったりすると思う？ 私はね、大好きな人に……陽に、幸せでいて欲しいって、そう思ってたよ」

みるみるうちに、陽の両目に涙が溜まっていく。今にも溢れそうで、恵流はまた、夜の湖の絵を思い出す。

「それとも、怒って欲しい？ 『この、浮気者！』 って」

急に手を離して殴る振りをしたので、陽は咄嗟に目を瞑り身体を竦めた。

「あはは、嘘だよ。そんなこと、するわけないでしょ」

恵流は再び陽の手を取り、歩き始める。

「だったら、陽は私のこと『この、薄情者！』 って怒ってくれなきゃ。何も話さずに、あんな風に逃げたんだから」

「怒ったりしないよ……あの時は、恵流はそうするしかなかったんだって、わかってるもん」

「でも、傷つけたよね。すごく」

「それは……正直に言っちゃおうと、そうだった。でもちゃんと、わかってたよ、何度も考えて、わかった」

「うん。陽の声、聞こえてた。何度も話しかけてくれてたでしょ？ 月命日やお誕生日、その他にも、たくさんたくさん」

「え？ マジで？！ 聞こえてたの？」

「うん。カレンさんとのことだって、一度きっぱり断ったのも聞こえてた」

「ちょ……マジか」

今度は陽が立ち止まり、その場にしゃがみ込んで頭を抱える。

「あ、そんなに詳しくは聞いてないから、大丈夫！ 私に関することで、気持ちが強く出てる時の声しか聞こえてこないから！ 第一そんな全部聞こえてたら、こっちだって大変だよ」

恵流「まあ、カレンさんが陽に花瓶ぶつけたときは、さすがに呪いそうになったけど」

陽「……！！(((° ㊦ ° ;)))」

恵流「ふふ、冗談だよ？」

陽（目が笑ってない……）

恵流は蹲った陽の手を頭から引き剥がし、引っ張り上げた。

「ほら、立って。もうそんなに重くないよ？ 歩き易くなってきたでしょ？」

「いや、そうだけど……動揺がすごくて……なんか、色んな驚きが、今まとめていっぺんに……」

そう言いつつ、陽はよろよろと立ち上がり、また歩き出す。

「んー、まあ戸惑うよねえ。じゃあ、驚きついでに良いこと教えちゃう。あのね、天本さん達はすっかり回復して、今は本格復帰に向けて、額縁製作を始めようとしてるよ」

「え、ほんとに?! 二人とも?」

「そう。陽の絵の、額縁を作ってるの。あとね、カレンさんの足も治って、五島さんと一緒に舞台に向けて動いてる。このまま順調に行けばだけど、舞台は大成功しそう。ぼんやりとだけど、未来も見えるんだ」

「ああ……良かった……」

「それから、栞さん。お子さんと一緒に、元気に頑張ってる。職場に復帰しつつ、陽の絵の管理とか……イベント的に個展を開いて、その収益で慈善団体に寄付したり、忙しそう」

「そっか……」

「で、アドラメレクだかステッキ老人だかの存在は、かなり認知されてきたみたい。陽の作戦は、上手くいってるみたいだね」

「……渡辺君は、どうしてる？」

「渡辺君? ……えっと、誰のことでもわかるわけじゃないんだ。私が会った事ある人しか……」

「恵流も会ってる……っていうか、その場に居合わせたって感じかな。あの時だよ、公園で絵を

踏まれた時」

「……ああ！！あの時！」

「うん。宮内くんを投げ飛ばした時に、下敷きになって一緒に転んでた子」

「うー……覚えていないような……ちょっと待って。集中してみる」

歩きながら、恵流は目を伏せ集中する。あの公園の……潰されてた人……

「えーと……うん、元気にやってるっぽい。お友達と外国に行ったり……あ、将来は建築家になるみたい。クライアントにね、『この建物には、中に誰が居ますか？』って初めに聞くのが決まりだって。これ、陽に強く関係してることだと思う。そう視えるよ」

「……ああ。そっか……うん、心当たりが無くもないや。良かった、のかな。たぶん」

「家族を作って、幸せそうだよ。家族写真がたくさん見えた。あと、なんかインコがたくさん見えた」

「あははは、そっか。良かった」

こちらで会ってから、陽が初めて笑った。

げっそりとやつれた顔も普段通りのイケメンに戻ってきたし、もうだいぶ足取りも軽くなっている。周辺はほんのりと明るく暖かい。元の場所まで、もうすぐだ。

「陽もね、慣れてきたら視える筈だよ。気になってるだろうと思ったから、私が代理で先に見ちゃったけど」

「うん。教えてもらって、少し安心した。ありがとう」

陽がこちらの様子を窺っているのがわかった。

恵流が目線で促すと、陽はおずおずと切り出した。

「あの……聞いていいのかわかんないんだけど……恵流のご両親は？ 大丈夫、かな？」

「ああ……うん。そりゃ、今も哀しんでいるけど。でも、大丈夫。ちゃんと乗り越えてくれる。陽の描いてくれた絵、居間に飾って毎日観てるみたいだよ」

「……そっか」

「心配してくれて、ありがとう」

「いや、マジで申し訳なくて……」

「ほら。もう直ぐだよ」

恵流は陽の言葉を遮り、話を切り替えた。

「どんどん引っ張られてるみたいでしょ？ あれみたい……なんだっけ。えーっと、あるく歩道！」

「……うごく歩道？」

「あ……うん、それぞれ。えへへ」

恵流につられるように、陽も笑い出す。

「ほんとだ。歩いてる以上に進む感じだね。すごい」

「うん。ここまで来たら、もう大丈夫。あのね、陽。さっきは言えなかったんだけど、これからほんとの事を話します」

あるく歩道……うん。よくある言い間違いです……よね？

「アドラメレクのこと」

笑顔から一瞬にして、陽の表情が硬くなった。

「正確に言うと、『陽が名付けた、アドラメレク』のこと、ね」

聞きたいことがたくさんあるが何から質問していいのかわからないのだろう、徒らに口をパクパクしている陽を押しとどめ、恵流は説明を続ける。

「結論から言うとね、あいつは確かに存在した。被害にあったっていう人がこっちの世界にも居て、陽のあの放送、こっちでも一部で騒ぎになったの。ほら、昔はあんなふうに関個人で情報拡散なんて、絶対に出来なかったわけじゃない？」

不安気に、食い入るように聞いている陽に、恵流は頷いてみせる。

「でも、多くの人にいっぺんに周知された挙句に、名前まで付けられた。それが、本当に良かったの。それまではぼんやりした噂レベルだったものが、名前が付くことで、あいつの存在が確定した。恐れることの出来る、語ることの出来る、“対象”になった」

励ますように、恵流は陽の手を強く握る。

「ぼんやりとした恐怖には、怯えるばかりで何も出来ない。でも、確かな“対象”には、“対策”をとる事が出来る。今、その対策がどんどん進んでる。情報がたくさん出てきてまとめ上げられ、あいつの罠が暴かれて、それぞれが警戒し始めてる。もちろん、その情報を知って自らあいつに接触しようとするお馬鹿さんもいるんだろうけど……それはもう、自業自得だからしょうがないね」

「じゃあ……」

「うん。陽のしたことは、無駄じゃなかった。それどころか、あいつの存在に大きな楔を打ち込んだの。それって、大きな功績だよ」

陽がまたその場にへたり込みそうになったので、恵流が抱き留める。安心したのだろう、体の力が抜け切った陽がため息をつきながら、恵流に完全にもたれかかった。

「それが無かったらね、あんな形で命を終わらせたってことで、陽は完全にあっち行きだったみたい。くら一い、さむうい所。危なかったね………という訳で、陽はこっちでも、結構な有名人です」

「良かった………少しでもあいつにダメージ与えたんなら……」

「少しどころか大ダメージだよ、きっと。こっそりやってた悪事がバラされたんだもん。もう今までみたいに好き勝手は出来ない。絵まで描かれちゃってさ、指名手配状態ですよ。まあ、逮捕は無理だろうけど………誰も引っかからなくなったとしたら、居ないも同じだよ。そうなるといいよね」

何度も頷きながら、陽がしがみついてくる。体温も完全に戻った。ちょっと熱いぐらい。

「……陽、相変わらず体温高いね。あと、ちょっと苦しいよ」

「あ、ごめん！」

陽が慌てて手を離す。

二人は既に立ち止まっていたが、ゆっくりと光に向かって引き寄せられている。

「でもさ……あいつが本当にいたってことは、やっぱり恵流の病気は俺の」

「ほおーらあ！絶対にそうなると思ったから、さっきは言えなかったんだよ？ どうせまた、逆方向へ走っちゃうでしょ」

「……はい。スンマセン」

「よろしい。一応また言うけど、もしあっちへ行っても、私が絶対に連れ戻しに行くからね！寒くて重くて怖いとこ、また行くのヤダからね」

「もう行きません！約束します」

「うん。約束ね」

光の方へ引き寄せられる速度が、どんどん早まっている。

辺りに白い靄が立ちこめてきた。

「さて、お話が終わったところで。私はそろそろ、行かなくちゃ」

「え?! 行くなって、何処に? やだよ」

驚いた陽が、泣きそうな顔で腕を掴んでくる。今にも地団駄を踏みそう。子供みたいだ。

「お仕事です。ギリギリまで陽と一緒に居たかったから、時間目一杯使っちゃった。今日の分のお仕事、終わらせなきゃ.....大丈夫、そのうちまた会えるから! 頻繁には無理だけど、たまになら.....あのね」

離れるのは嫌だと駄々をこねる陽をあやす様に、恵流はゆっくりと言い聞かせる。

「こっちでも、やることはたくさんあるんだ。迷子になって困ってる人を助けたり、幼くしてこっちに来た子供に色々教えたり。あと、社会に強い恨みを持って亡くなった人と話したり。うん、落武者っぽい人とかまだ居るんだよ。その恨みを持ったまま転生したら、社会に害を与えかねないからね、そういう人と話して気持ちをほぐしたり、希望を渡すのも仕事のうちなの」

仕方ないと諦める風情を醸し出すものの、陽はまだ恵流の腕をしっかりと握り、離さない。そんな泣きそうな顔されたら、うっかり仕事をサボってしまいそう。

「こっちでいっぱい働くと、生まれ変わるときに希望を聞いてもらえるんだって。だから私、たくさん働いて、また陽と同じ時代に生まれ変われるようお願いするつもりなの。そのために、頑張ってる」

「こっちですっと一緒にいるんじゃ、駄目なの?」

.....またその顔だ。首を僅かに傾げて、目を覗き込んでくる。全く、もう! ズルってば!

「駄目です。しばらく居たらわかるけど、こっちは割と退屈だよ。生きてる方が断然楽しい。私はまた、陽と一緒に.....陽と、楽しく、生きたいなあ」

自分でもあざといと思うほど、上目遣いで陽を見つめる。

上目遣いとかすごく恥ずかしい！けど……陽はまんまと説得されてくれたみたい。なんだか妙に照れてどぎまぎと視線を外し、耳の縁を赤くしながら鼻の下をゴシゴシ擦り始めた。と思うと、ちらりはこちらを見る。

上目遣いのまま小首を傾げて微笑むと、陽は呻きながら両手で顔を覆った。

「わかった。降参です。我慢します………また、会えるんだよね？」

……えへへ。私だってもう、負けてないんだから。

「うん。あちこち走りまわるし狭間に顔を出す用事もあるから、どこかでひょっこり会えるよ。お互いの都合が合えば、お仕事の合間の休憩時間にも」

いつの間にか、二人は光の中にいた。辺りはすっかり白い霧に包まれている。

恵流が指差す方向に、光の道が見えた。

「この道を進めば、三途の川に出るから。優馬さんが待ってるよ」

「え……」

「陽はあの時、私たちを思い浮かべてくれたでしょ。私もそうだった。お互いの思いが通じると、どれだけ時を経ていても迎えに来られるの。

優馬さんも、最期まで陽のことを心配してたんだね。でも、優馬さんはまだ49日以内だから、狭間と生の世界の間しか動けないの。だから、川のところで待ってる。本当は私と一緒に迎える筈だったんだからね、きっと待たされ過ぎて怒ってるよ」

「わあ、ヤバあ………」

恵流はくすくすと笑いながら背中に手を回す。数秒後、戻ってきたその手には、小さな箱を掴ん

でいた。

「はいこれ、プレゼント。お仏壇に備えてあったロイズの生チョコ、貰って来た。優馬さんにあげたら、ちょっとはご機嫌とれるかも」

「おお……」

「はい、早く行って。あと、川のほとりにいる人に申請したら、お洋服もらえるからね」

「え、俺は別にこのままでも」

「上半身裸とか、駄目だってば……変な目立ち方すると思うな」

「……はい。申請します」

「優馬さんによろしくね」

「うん。またね」

「またね」

何度も振り返り大きく手を振りながら、陽は光の道を進んでいく。鼻腔の奥の煙臭さは、いつの間にか消えていた。

ずっと向こうから、優馬の叫ぶ声が小さく聞こえる。

「オイ、よ————う！ どんだけ待たすんだこのタコ助があ！ さっさところち来やがれ！ オラ走れえええええええ！」

おまけの物語 終わり

「陽と恵流のハッピーエンドが読みたい」というリクエストをいただいて書きました、おまけの物語。これで本当に、終了です。

(ただ、ほとんど推敲もせずに更新してしまったので、ちょっとした手直しは入るか

もしれません.....)

一応、ハッピーエンド.....の、つもりなんです。どうでしょう。
きっとまた、ふたりはどこかで生まれ変わって会えると思います。うん。

長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。
少しでも楽しんでお読みいただけましたならば、嬉しく思います。出来ましたら
また、別のお話でお目にかかりとうございます.....